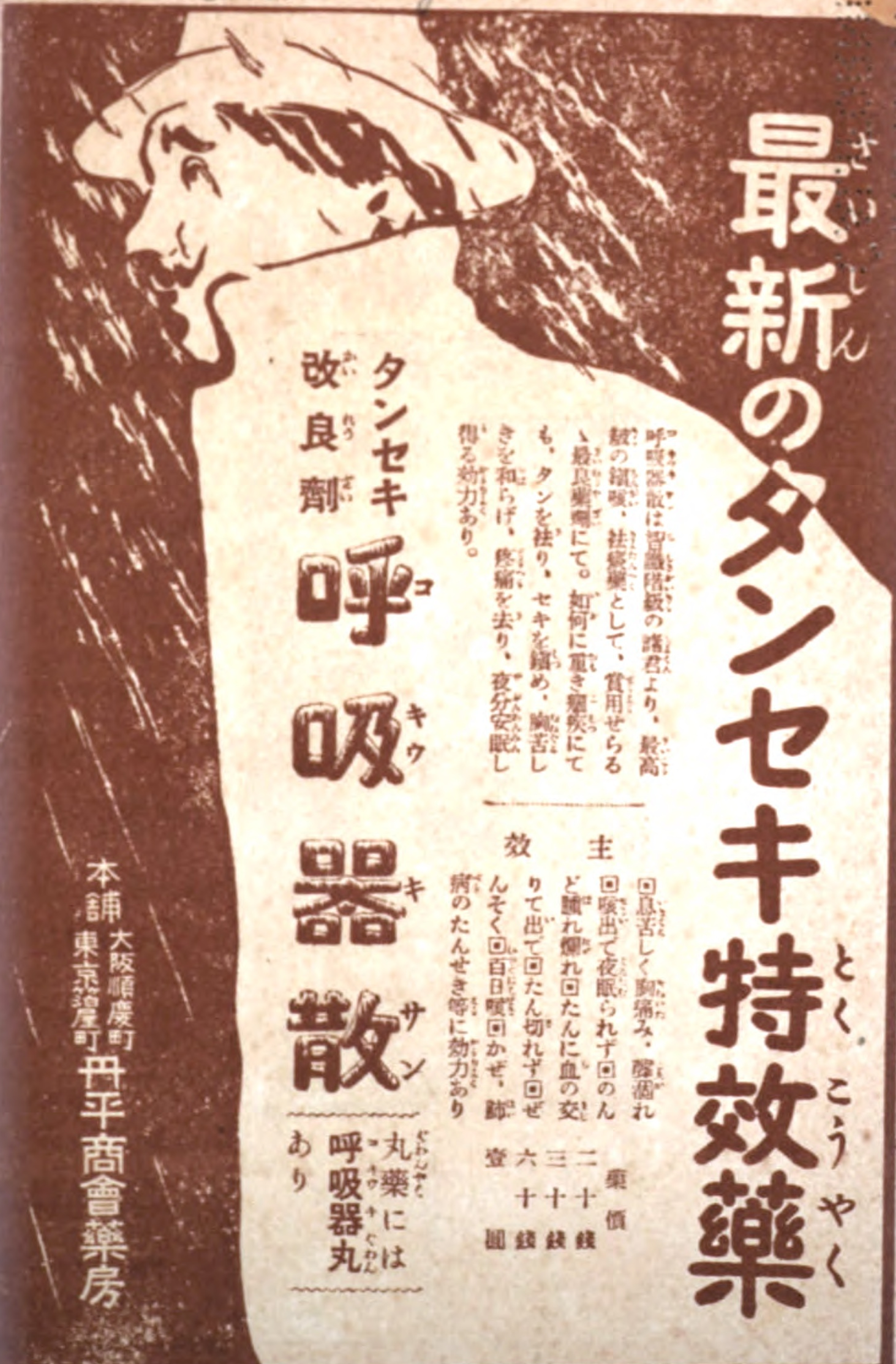
THE CENTRAL REVIEW

中央公論

新年號

第三十六年　第一號　第三百九十一號



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は謝絶す

◇大刷新の◇

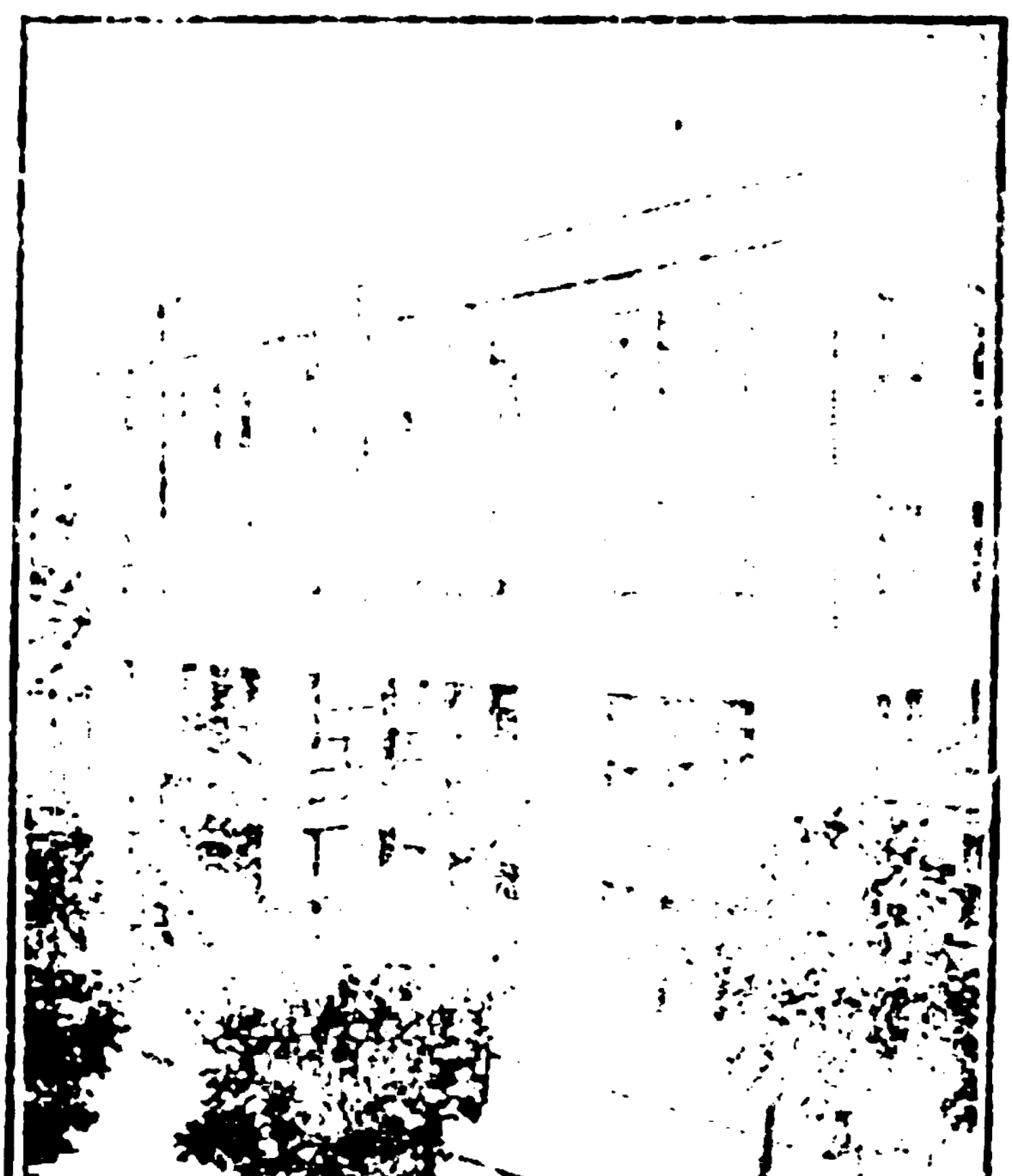
東京朝日新聞

「東京朝日」の巍峨たる新築四層館を見たりや

新聞使命に躍進すべき我等の戦闘準備は成れり

「東京朝日」の最新式……法を知れるや

朝野名士の朝日新聞観を聞けりや



發行所

東京朝日新聞社

謹賀新年

時事新報

The Jiji Shimpo

創刊以來獨立不羈の光輝ある歴史を一貫し牢乎拔くべからざる信用と嚴然冒すべからざる權威を有する大新聞

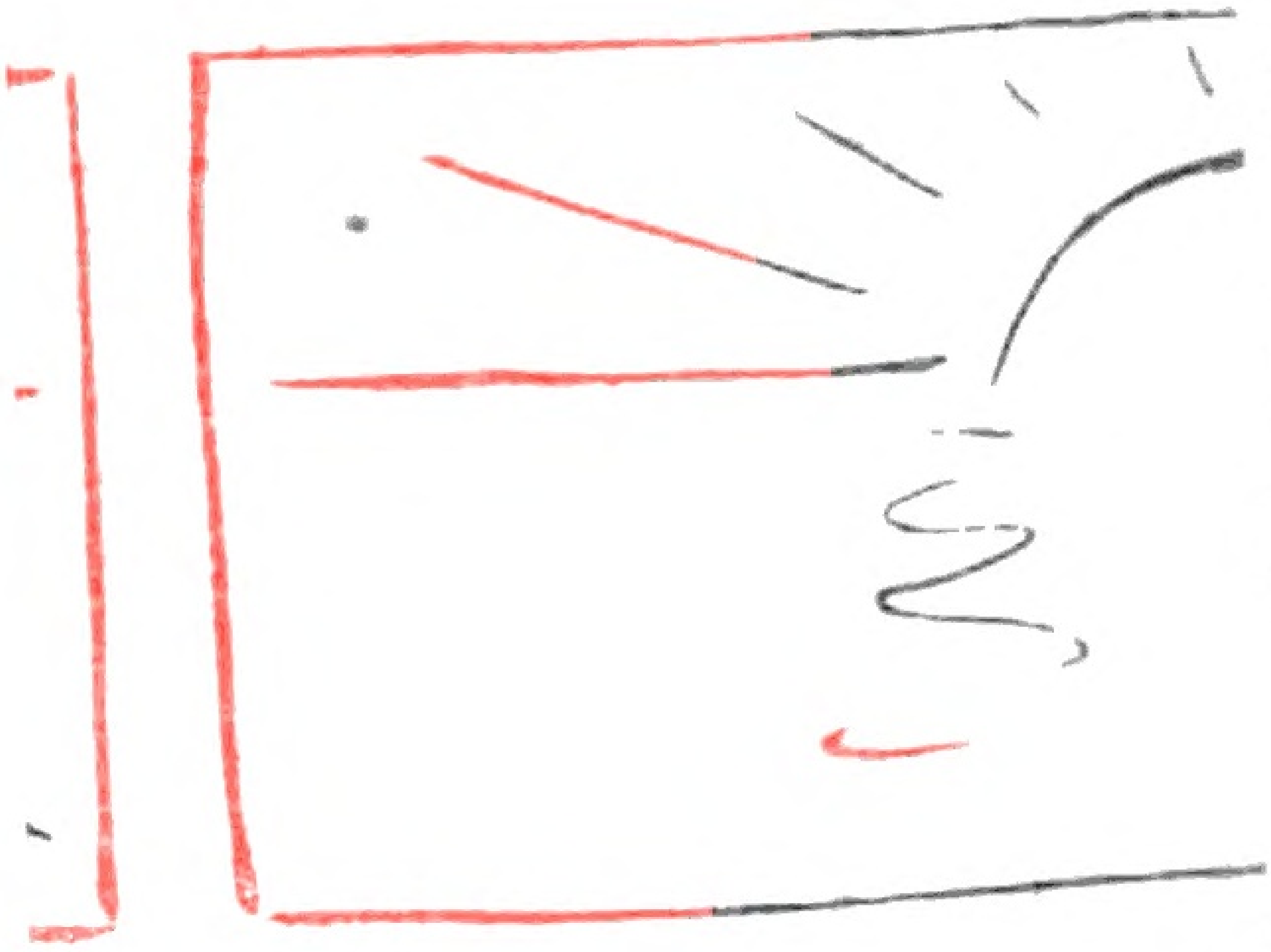
一新聞社の經營にして東京及び大阪に於て毎日朝刊八頁夕刊四頁都合十二頁の大新聞を發行するは只我社のみ

大阪時事新報

THE OSAKA JIJI SHIMPO

東京發行所
東京市京橋區南鍋町二の十二
時事新報社

大阪發行所
大阪市北區曾根崎上四丁目
大阪時事新報社




新人の武器
プラトン萬年筆
スラ〳〵書ける…プラトン萬年筆
インキの漏らぬプラトン萬年筆
中山太陽堂



"EILEEN AND DIANA." SIR JOHN LAVERY, A.R.A.

死線を越えて

拾壹版發賣

賀川豊彦著

◇バイブル式装幀天金函入美本◇

◇定價金參圓◇送料金拾八錢◇

明治大正に亘つて本書ほど多大の感激を與へた小説はあるまい。東京の某小學校長は本書によりて賀川氏の爲人を敬慕崇拜し、爲めに全財産を拋つて數百部を購ひ、普く知己に頒ちて愛の教育、熱精の感化を本書より世に求め、又水戸の一青年は本書によりて著者の博大なる愛に感銘し、慈母を離れて遠く神戸に赴き、賀川氏の義弟となりて、一身を社會改造の爲めに投げ出し、文壇の雄、片上伸氏は同じく本書によりて賀川氏の感激的生活を知悉し、その敬虔の態度、その熱烈なる人道的貢献に思はず熱涙を垂れた。本書の感激は此等二三に止まらず都鄙の青年男女が相率ゐて著者の崇高なる人格を愛慕し、その赤熱の活動振りを仰望するは、本書が出版二ヶ月ならずして拾版を盡したる實績によりて批判さるべきである。

◇中澤臨川著◇山本鼎装幀

【再版】

新社會の基礎

定價金二圓卅錢 送料金拾六錢◇◇

◇東京芝區櫻田久保町 改造社 振替東京八四〇二◇


S.S.S.
躍進的向上!!
間斷なく進歩する
君の手に執るべき
サンエス
萬年筆
此ペンのある處に
總ての澁滯なし!!
眞に之れ文字に活くる人が
唯一の利器
東京
大阪
細沼株式會社
名古屋
金澤

評論界に於ける本誌の態度

新聞は傳ふ。去る日ある社會主義講演會が例により官憲の命によりて解散されんとするや、主催者の一人に起つて聽衆に對ひ「此際唯一言諸君に聞きたき事あり、諸君の良心は果して資本家に味方するや勞働者に味方するや」と叫んださうだ。聽衆は此の短き而かも場所柄適切を極むる提言に忽ち熱狂した事であらう。

併し能く考へて見ると斯う云ふ問題の出し方は正しいかどうか。夫の所謂絶對的階級鬪爭論者から云へば惟ふに之れで可いに相違ない。併し唯物的根據を排する吾人の立場は常に道理の歸する所に味方し勞資階級の區別を第一の着眼點とせざることは讀者の既に知らるゝ所であらう。今日の社會組織の批判として、勞働者は不當に虐げられて居る事と資本家の立場に道理の尠い事とは疑を容れぬ。從つて爲に勞働者が起つて資本家と爭ふを尤もと思ふが、併し勞働者の立場を是とする事は必しも勞働者の爲す總ての具體的運動を贊助すべき義務を伴はない。理想主義者は目的の爲に手段を擇ぶ。正しい立場を主張するに方つても手段の取捨其の宜しきを得されば吾人は其目的を愛するが爲に其手段を斥けなければならぬ事がある。

今日の勞働運動は皆間違つて居るといふのではない。けれども吾々の良心は時々勞働者の運動に無條件に加擔することを躊躇せしめる。否、躊躇するのではない、彼等のやり方が正しいか否かを先づ吟味するの必要を痛感せしむる。斯くして爲に一時勞働運動の鋒先を鈍らしめるかも知れないが、又爲に斯かる態度を目して資本家を利するに止ると觀るのは大なる誤りである。自分を助けない者は總て自分の敵なのではない。吾々の立場に啻に資本家の立場を援くるものではないが、勞働者の立場も其手段が正しくない限り之を責めるに遲疑しない。是れ皆道理の天下に布かれんことを熱望するからである。

吾人の斯の態度は對外問題に就ても同一だ。例へば朝鮮の問題にしても、吾人は之れまで可なり辛辣に我が官憲を糺彈した。之に依つて誤つた當局の政策遂行に支障を來したかも知れないが、決して鮮民叛徒の立場を些にても援助した事にはならぬ。我が官憲を責むる吾人の立場はまた同時に感情に走りて手段を擇ばざる鮮人の盲動にも嚴しく反對するものである。只吾人の言議多く我を責めて彼に及ぶことの少きは、取つて以て我が大和民族の道徳的向上の機會たらしめんとするに急だからである。一時の權宜の爲に大道の趨向を故らに枉ぐるは國家百年の計を爲す者の愼んで避くべき所である。

徒らに人心を煽動せんとする者は動もすれば曰ふ。諸君は左側を歩むや將た右側を歩まんとするやと。而して吾人は冷然として大道の正中を濶歩すべきのみ。之れ我が中正公論の來るべき一年間の評論界に於て取らんとする一貫の態度である。

中央公論
第卅六年第一號
一月號
第三百九拾一號



文

人生批評の原理としての人格主義的見地

阿部次郎

一

見ての人が知るであらうが如く、私は今一つの立場を持つてゐる。その立場に立つて人生と世界と自己とを觀察したものを記述したものにしてゐる。これは一言にして云へば、人格主義的見地と名けることが出來るであらう。私は此處でこの人格主義的見地に一つの綜括的說明を與へてはゐない。この見地に深い哲學的基礎を與へることと、これを現實生活の日常的事實に適用することとは、固よりこの小論のよくするところではない。さうしてそれは、現在の私にとつ

ては、企て一も及び難い大望に過ぎないであらう。人格主義の思想をこの二つの方向に深め且つ高めて行くことは、今後に於ける私の重なる仕事の一つである。併し現代に於いても、私がこの信念の上に立つて出發してゐる以上、公然として私の根本的態度を宣明し、この信條に出來るだけ明瞭な內容を與へるように試みることは、時代にとつても個人にとつても、必ずしも無用な努力ではないであらう。私がこの見地に立つて現代の生活に對するとき、私の思想に、現代世界の大勢と認められてゐるものと、或場合には並行し或場合には逆行する。併し私が自ら守らむとする一つの立場を持つてゐる限り、並行が必ずしも誇ぶに足らず、逆行が必ずしも悲むに足らぬことは云ふを須ゐない。世界の大勢と思惟されてゐるものに對して、自分の態度を明かにして置くだけでも、私はこの論文を書くことが徒爾でないことを信ずる。私の思想が誤つてゐるか、私の思想と逆行する思想が誤つてゐるか、それは永劫の論理の法廷において究極の審判を待つより仕方がないであらう。

二

人格主義とは何であるか。それは、少くとも人間の生活に關する限り、人格の成長と發展とを以て至上の價値となし、この第一義の價値との聯關に於いて、他のあらゆる價値の意義と等級とを定めて行かうとするものである。人格に代る價値として他の何物をも認容しないと同時に、人格の價値に奉仕する限りに於いて他のあらゆる物に價値を賦與せむとするものである。併し人格とは、一體何であるか。私達の考察は先づ此處から出發しなければならない。

私は人格の概念を明かにするために、此處に四つの特徴を擧げることが出來ると思ふ。第一に人格は物と區別せられるところにその意味を持つてゐるものである。第二に人格は個々の意識的經驗の總和ではなくて、その底流をなしてこ

な[illegible]

（[illegible]）である。[illegible]人[illegible]

ことである。カント[illegible]それは[illegible]

あ[illegible]である。

[illegible]を持つてゐる[illegible]それは[illegible]

な[illegible]にまかせないものである[illegible]

に[illegible]

[illegible]

[illegible]に[illegible]る、[illegible]

これ[illegible]に[illegible]によつて[illegible]

なくなる[illegible]りにおいて[illegible]である、[illegible]

学問における[illegible]なければ[illegible]ならない[illegible]

するとは、[illegible]として[illegible]することを[illegible]

[illegible]て[illegible]へられる。[illegible]ある[illegible]

れ[illegible]といふといふ[illegible]でまることの[illegible]

目的であるが故に、[illegible]人格である限り、[illegible]

であり[illegible]であることに[illegible]ない。[illegible]

あるに止るのである。人格と物との對照は to be の價値と to have の價値との對照である。私自らは或者であるが何物かを持つ。私達の持物を私達の精神的内容と區別するところに、人格は私達の第一の任務に專念するのである。(併しながら、ラッセルの所謂 to do と to have との區別も結局 to be と to have との對立の中に攝してしまふことが出來るであらう。to do は to be の發動であつて、從つてその一種である。彼のこの區別は少くとも基督教と共に、寧ろソクラテスやプラトーと共に舊い。彼のこの區別が重要なのは、それが新らしいからではなくて、永遠の眞理を現代に生かさうとしてゐるからである。)

併し私は茲で、上述の所說と表面上正反對であるやうに見える一つの思想に、自分の立場から解釋を下して置く必要を感ずる。それはニイチエのツァラツストラに於ける「肉體の侮蔑者について」の一節である。彼の說に從へば、精神はたゞ微小なる理性であり、自我の如きは或者の意志に操らるゝ玩具の類に過ぎない。背後にあつてこれを驅使する者は、更に偉大なる理性、威力ある命令者、知られざる賢者である。それはツァラツストラの命名に從へばゼルブスト(自己)である。而も自己は畢竟肉體であるが故に、人間を根本より支配するものは、精神や自我ではなくて肉體でなければならない。「汝の肉體の中には汝の最良の智慧よりも更に多くの理性がある。」「それは自我を云はずして自我を行ふ。」「創造する肉體はその意志の手として自己のために精神を創造したのである」——私達は此の如き肉體の讃美と精神の侮蔑に對して如何なる立場をとるべきであるか。正面から私達の立場を覆さむとするが如き此說に對して、私達は如何に答ふべきであるか。思ふに此答は案外に簡單に片付けることが出來るであらう。若しツァラツストラの意味が、精神的生活の自然的條件として肉體の意義を高調するところにあるならば、それは Mens sana in corpore sano (健全なる精神は健全なる肉體の中に) といふ古諺と同義に歸着する。然るにこの古諺は、精神の健全を目的とする者にその自然的

[illegible]一[illegible]に[illegible]なければならぬと主張するに当つて[illegible]なくに[illegible]地[illegible]すればこれに[illegible]として[illegible]るのである。[illegible]に[illegible]りないのである。[illegible]にして[illegible]であるやうに[illegible]これにあるとすれば[illegible]こ[illegible]の[illegible]ることにならなければならない。[illegible]を用ゐなければ[illegible]ることにならなければならない。[illegible]に[illegible]なくに自分といふのを[illegible]用ゐて、その[illegible]に[illegible]の[illegible]で[illegible]一の[illegible]かば、[illegible]に[illegible]人[illegible]することは[illegible]自然である。[illegible]人間には[illegible]たい[illegible]しめ[illegible]人[illegible]の[illegible]になく[illegible]とする

いや、[illegible]ことは、[illegible]

[illegible]人[illegible]は一つの[illegible]おらぬ[illegible]ればならない。一[illegible]によ[illegible]でないものは一つの人[illegible]はない。[illegible]ないのである[illegible]る[illegible]くは[illegible]

制限とに私達といふ特殊の人格に於いて發見せらるる經驗的事實に過ぎない。私達が宿してゐる一つの生命を有する時、若くは宇宙といふものを想定することを許されるならば、その宗教的精神的なものである限り、私達にこれを円滿に名け、人格と呼ぶに、何の矛盾をも感ずる必要がないのである。人格となるとは他との對立を超越することではない。自己の本質に復歸することである。此處に人格の第三の標識が――人格主義を普通の個人主義と區別すべき主要な着眼點が、成立する。

最後に人格の生活には、自己の如何とも難き性格をも猶之を批判したり、詰責したりするやうな普遍的先驗的原理が含まれてゐる。如何なる境遇と性格と宿命とによるにせよ、之に背反することを許容せず、苟もこれに背反する者に自ら安んずることを得ざらしめるやうな斷言的命令が與へられてゐる。人格は單に一つの生命として自然的統一を有するのみならず、又一つの當爲によつて先驗的に統一されてゐなければならない。此處に人格と經驗的性格との差別がある。人格の先驗的要素は、經驗的性格を、鼓舞し、激勵し、苦め、惱まし、洗錬し、淨化して、人格を人格として成熟せむとする。人格主義を主觀主義と區別する、人格の第四の標識は此處に成立するのである。

三

人格主義とは此の如き人格の成長と發展とに至上の價値を置くものである。從つてそれは當然に物質主義と正反對の立場に立たなければならない。人格主義の立場より見ても、物質には或程度の價値がある。人格の生活にとつて物質の所有と使用とがどれだけの意義を持つてゐるか、此問題に對する解答の如何によつて物質を重視する程度に種々の差異あることは云ふまでもないが、兎に角人格の生活にとつて物質の所有若くは使用は缺くべからざるものであるとすれば、そ

の限りに於いて物質に価値を認めてゐなければならない。併し人格主義が此の如く物質に或程度の価値を認めるのは、それが人格の[illegible]する条件だから――換言すれば人格にとつての価値を持つてゐるからであつて、それ以外に何等の価値を持つてゐるのではない。然るに物質の所有若くは使用は、或る条件の下に始めて人格の価値を増進するものであつて、その条件に反くとき、それは却つて人格の[illegible]となる。所有の[illegible]同時に人格の[illegible]を[illegible]せしめるか、又は[illegible]と結合せらるる[illegible]間に於いて、私達は[illegible]ある。故に物質それ自身の[illegible]てゐない。物質の価値は凡てこれを所有する人格の反映である。然も物質を[illegible]せしめるものは、常にこれを使用する人格の[illegible]でなければならない。此処に[illegible]物質に対する人格主義の根本の態度がある。現代の社会において物質の[illegible]に重大なる地位を占めてゐるにせよ、それは[illegible]としては価値のないものであつて目的として[illegible]ではない。物質の問題を目的の問題に置きかへるとき、其処に[illegible]れる。人格主義は[illegible]に対して、[illegible]しなければならない。固より私共から云ふのは、物質の問題に於いて物質を軽[illegible]ない。それは人格の[illegible]である限り、[illegible]であるとき、物質の問題も亦[illegible]問題と共に[illegible]物質を目的に置きかへることに[illegible]目的の理想とするために、これを[illegible]に使用する[illegible]目的に[illegible]することを[illegible]ところにある。[illegible]限り、其処には[illegible]あつても、[illegible]を尺度とせ[illegible]にないであらう。[illegible]について[illegible]人格の[illegible]に有害な[illegible]くに[illegible]ること――この[illegible]へるところに、人[illegible]に[illegible]してゆかなければならぬ一つの重大な使命がある。

併し物質主義は、それが概念上人格主義に對立する意味においては、畢竟一つの妄想である。如何なる物質主義者と雖も、實際物質に獨立の價値を置いてゐるものは居ないであらう。それにも拘らず彼等がこれを主張するのは、彼等の自己解剖が足りないために、自ら自己の眞意を知らないのである。守錢奴が目的とするところは、金錢所有の喜びであつて金錢といふ物質ではない。金錢といふ物質はこの喜びの條件として必要缺く可からざるが故に價値があるのである。さうして金錢所有の喜びもその最後の根本においては、これを使用することによつて生ずる享樂や便宜や、此等の享樂や便宜に對する保證を確保する安心の喜びに歸着するであらう。物質の所有によつて保證せられるのは官能的享樂の喜びである。さうしてこの享樂は物質所有の程度に正比例して、多ければ多いほど益々保證せられるであらう。故に物質主義者は畢竟官能的享樂主義者である。彼等は官能的享樂の條件として物質に價値を置いてゐるのである。彼等の目的とするところは、官能的享樂といふ一種の精神狀態である。唯この精神狀態に居るためには、物質の豐富な所有が不可缺の條件であり、この目的を達成するためには、物質の所有は多々益々辨するが故に、彼等は實際上物質の所有を唯一の關心事とする。人が享樂主義者である限り、この意味において物質主義者となるのは當然の歸結と云はなければならない。

凡て物質の價値はそれが人間にとつての價値を持つてゐるところにある。人間にとつて價値あるものとはそれが人間の價値を高めるに役立つものである。あらゆる物質的享樂主義者も、事實上この原理の上に立つて物質の價値を評價してゐる點においては、私達と何の變りもない。併し人間の價値とは何であるか。彼等はその標準を官能的享樂の程度の多少に置く。最も多くの享樂を持つ生活が最も生甲斐のある生活である。故に彼等はあらゆるものを擲つて、享樂の機會と便宜とを攫取するために狂奔するのである。人格の價値に對する彼等の甚しき昏迷は此處から始つて來る。併

し此の如き考へ方の根柢に、此の如き生活の目的が最も明瞭にこれを説明するであらう。此場合に於いて、快樂とは私達の人格を消極的傾向に導いて、それに働きかけて來る外界の刺戟に左右されるところから來る心身の快適である。從つて此の如き生活の結果は、受動的方面に於ける消極的傾向である。外物に對する人格の奴隷的屈從である。人が美衣を着るとき、美衣は其の主人公であつて彼は美衣の奴隷に過ぎない。彼が美衣を着るのではなくて、美衣が彼を着るのである。又人が美食に耽るとき、美食は其の主人であつて彼は美食の臣僕に過ぎない。彼が美食を食ふのではなくて、美食が彼の人格を喰ふのである。人格の消極的傾向に――これこそ人格の人格たる所以である――此の如き生活の結果として刹那に刹那に歸する一種の頽廢的氣分や所謂世紀末的憂鬱と謂ふ病氣や、凡て此の如き人格特有の生活を苦悶するもの、物質的文明の産み出したものであらう。現代の社會が此の如き生活者のために、如何に頽廢の傾向に沈んでゐるか、それは、物質的進歩の最も著しい我國現代の狀況には、容易に理解し難い程度に達してゐるに違ひない。一例を云へば私に、私は何なく現代社會の人間に於ける生活の不安も、その最も面倒な方面に於いては、其々の間に知識階級の[illegible]する所の根本的缺陷の上に立つてゐることを認められる所である。固より私は現在に於ける經濟生活の問題が、現代社會の深き根柢に根ざしてゐて、それが人格生活の根本問題と結ばれてゐるのであることを知つてゐる。併し私は、此方面に於ける人格の修養の問題を、經濟學的解決の問題と並行的に區別して考へなければならない。この二つのものに、當然の事としては、常に混同されるべき傾向を持つてゐるが故に、私達は此の區別を明瞭に把握して置く必要があるのである。私は經濟學的のことは知らずとも現今の日本に於いては、この方面の事には、他人の生存權を蹂躪して、經濟的の利益に在らうとするものと、他人の權利を尊重しつゝ自己もその權利に與る權利あることを主張する者と――その二つの階級の爭ひが階級の戰ひであるやうなことにないか、若くはこの戰ひに關はせむとする傾向を到々に

却してゐるやうなことはないか。私達は不斷にこの點に關する反省を緩めないやうにしてゐなければならない。經濟生活の問題に、當然そのあるべきが如き位を與へてその範圍を逸することを防止することは、現代に對する人格主義の使命の中でも特に重大なものの一つに屬する。私達の社會問題は、衣食住の奴隷の間に行はれる乾燥な競爭の問題――この餓鬼道の問題であるべきではないのである。

四

人格主義の見地より見るとき、現在の經濟生活は改造を要する多くの缺陷を持つてゐる。これは經濟生活そのものゝ內部に關する問題ではなくて、經濟生活の倫理的方面に關する問題なるが故に、私のやうな經濟學の門外漢も、猶之に容喙する權利があるであらう。私の見るところでは、この方面に於いて焦眉の急を要する根本問題を――孰れも實際的解決を得ることは極めて困難であつて、而もこれが解決されなければ社會の安定を望み得ないやうな根本問題を――少くとも四つ揚げることが出來る。一つは生存權保證の問題である。二つは財貨の公共性の問題である。三つは所謂勞働の藝術化乃至は技術化の問題である。さうして最後には生活の單純化の問題である。この四つは相互に聯關して、現代に於ける經濟生活の根本的缺陷を指摘してゐるものと見ることが出來るであらう。此等の問題は階級戰爭の問題ではない。人格生活の基礎としての經濟生活の問題である。さうしてこの問題を發生すべき缺陷は、日本の社會にも實際に具備してゐる以上、日本の社會の一部からこの問題が發生して來ることも亦當然である。この事情をその儘に放置しながら、この問題を外來思想の感染にのみ歸せむとするは政宗のお目出たさである。人格主義は、此等の問題を明瞭に解決しない限り、現代の經濟生活を是認することが出來ない。人格主義が人格を損ふが如き經濟生活を是認するは、畢竟

乗性と関聯にして離せないからである。

物資の所有は必ずしも人間の生活を満す所以ではない。この事は既に前にも述べた。但し或程度以上の物質の供給には例外なく人間を不幸にする。この他に仕事よりの個人差があるが、人間は肉体を有する生物である限り、凡ての人にはなくてならぬ物質的の必要がある。然し或程度以上の物質の供給が如何に人を野卑にし傲慢にするかに、既に[illegible]社会の場合のみならず、[illegible]国家の場合にも個人の間にも見る事を得べき多くの事例である。故にこの[illegible]に対して人格の向上を要求する時代に、[illegible]人格として生[illegible]に必要な物質を供給すべき当然の[illegible]である。この事は物質的方面に於する[illegible]要求するところであって、今日我の知識を有たざる[illegible]である。然るに現代の社会はこの問題を[illegible]にして居ないのみではなく、[illegible]問題を解決すべき義務を問ふにも[illegible]してゐるかの如くさへも見える[illegible]できる。人格的[illegible]は一に物質において、現代の経済生活を[illegible]せざるを得ない。人間の生[illegible]に対する[illegible]の附属でもなく[illegible]でもないのに、全く人格を[illegible]である。

[illegible]に、これには[illegible]なこと[illegible][illegible]であるが、[illegible]くてならぬものを要求することの問題において、これにはもっと[illegible]であればあるほど[illegible]於[illegible]関[illegible]であらう。既にこの[illegible]ない。況して人格の向上とつ[illegible]

實してゐることは初めて必要である。故にこれを管理する者が誰であるにせよ、又は個人であるにせよ、其の管理者がその管理に屬する財貨の公共性を信じ、その用方を知ることによつて始めてこれを公共的に使用するといふ務を負はするとき、財貨に始めて社會の人格を向上せしめるために役立つであらう。人格主義の倫理的要求は、必ずしも制度としての共産主義を必要とせず制度としての私有財産主義を非としない。制度にとつて絶對的に必要なのは、財産を公共的のものと自覺する意欲であることである。この觀念が各人の實行を支配することである。人格主義はこの觀念が現在の經濟生活を内部から支配することを求める。この觀念の支配が確實になることによつて、私有財産は個人的安樂の──從つて享樂から來る人格的頽廢の──無制限な保證となることをやめ、必然的にこれに隨伴する浪費的奢侈の欲望は阻止せられ、無産者も亦社會的福祉にあづかることが出來るやうになるであらう。財貨に對する今日の爭奪は著しく人心を腐敗にする。單にこの腐敗を防止せむがためにも、人格主義は財貨の公共性を主張せずにはゐられない。

さうして財貨成立の順序を回想するも、それが主として公共に屬するは當然である。生産物に對する労働者の貢獻は假く云はず、生産條件の變更も生産物の價格の上下も──此等利得の源泉を作るものは殆んど全く社會であつて個人ではない。資本家は唯その社會に屬する利得を摂取するに過ぎないのである。故に資本家の權利は唯公共の財貨を管理するところにあるに過ぎない。而もこの管理の權利は、彼が彼に屬する財貨を正しく使用する能力を缺くとき、少くとも消費と消滅とに歸してしまふのである。從つて人格主義は、所有權の本質に關しても亦その觀念の變更を要求する必要を感ずる。所(一〇)有權の人格主義的根據は、所有者の獲得若くは相續といふ事實にあるのではなくて、これを正當に使用し得る能力がこの權利の根據とならなければならないのである。茲において人格と財貨との聯結は始めて完備する。社會はその活動する財貨の場から始めて完全に保護せられる。財貨を個人──これを使用する者の側は、現在の社會が既

に作りにらく害が與へてゐるところである。[illegible]用する道を知らざる[illegible]の[illegible]行に、他の個人に對しては知らず、少くとも自分に對しては[illegible]はれなければならないであらう。

以上の二つ[illegible]である。[illegible]の[illegible]に就いて、一層着きは[illegible]である。[illegible]の二點に就いては[illegible]自由[illegible]を[illegible]することを[illegible]も、今は心に秩しされ[illegible]有しなければならないことである。[illegible]の今日の生活には、[illegible]なしには殆んど存立すること出來ない。[illegible]には、少くとも今日の[illegible]が[illegible]ては、[illegible]なければならない。[illegible]用するためには、我々の[illegible]二十四時間の半ばを、日の[illegible]の一[illegible]の[illegible]しつゝ作[illegible]しなければならないのである。[illegible]ためには、[illegible]はなければならない。[illegible]に[illegible]の[illegible]の[illegible]を作るためには、我々の[illegible]が[illegible]に[illegible]されつゝ、[illegible]をいといふ[illegible]の[illegible]を送らなければならないのである。我[illegible]のためには、今日の[illegible]は[illegible]を必要としつゝある。但し個人の[illegible]をまぼくことを[illegible]とするが、この[illegible]なければならないといふことに、[illegible]としては殆んど何[illegible]もない。我れは[illegible]の人の、[illegible]に[illegible]として、始めて今日の[illegible]生活が[illegible]してゐるのである。これに對して正しいことであるか。[illegible]と、[illegible]とは果して何物か來るか。[illegible]には此のことを[illegible]としたければ[illegible]を付けること出來ないにしても、此の如き[illegible]をしなければ[illegible]へないやうにして[illegible]には、果して正しいといふことが出來るか。[illegible]ではない。[illegible]において、此の[illegible]に[illegible]する人の人格として[illegible]となつて來るのであ[illegible]と[illegible]の[illegible]とに[illegible]の[illegible]へ、[illegible]べきものと[illegible]へなければな

らないことは勿論であるが、問題は未だそれでは解決されない。何となれば、勞働そのものに人格を損ふべき性質が非働してゐる限り、その勞働以外に於けるあらゆる便益は、たゞ犠牲的勞働に對する代償であつて、勞働そのものゝ醇化ではないからである。從つて良心を以て自他の職業に對するとき、換言すれば、私達の生活に於ける勞働を、單に衣食のための職業から脱却させる義務を感ずるとき、所謂勞働の享樂化若くは藝術化の問題は、當然に現はれて來なければならない。勞働そのものを享樂化するためには、種々の方面に於いて種々の手段があるであらう。勞働時間を甚しく苛きものにする勞働組織の官僚主義は一日も早く縮められなければならない。勞働者の能力が充實するにつれて、勞働者を次第に事業の管理に與らしめることも亦當然の歸結である。共働協力に訓練して勞働時間を限定すること、その勞働の意義と興味とを勞働者の心に徹底させること等、此問題に對する具體的方策は經濟學者の詳細な研究に俟たなければならない。兎に角、私達の社會生活を恥かしからぬものとするためには、人格を損ふ職業を私達の社會から一掃する必要がある。人格主義は、現代の社會生活に對して、この事を要求するのである。

併し私達が今日のやうな生活を繼續せむとする限り、この生活を支持するに必要なあらゆる職業を享樂化若くは人格化することは果して可能であるか。(併ながら享樂化と云ふ言葉は弊害を伴ひ易いから、この言葉はその意味を明瞭にして置く必要がある。嚴密に云へば必要なのは享樂化でなくて人格化である。職業を遊戯半分のものにするとではなくて、職業の苦痛を人格に價ひするものとすることである。職業の中から人格を亡ぼさんとする苦痛を除き去ることである。)恐らく此處には到底人格化するを得ぬ若干の職業が殘存するであらう。私達はこの職業を如何にすべきであるか。私達は心の底ですまながりながら、特志者の自發的犠牲を受くべきであるか。或ひは萬人斉くこの犠牲的勞働を分擔すべきであるか。若くは私達の今日の生活は根本からあさましき生活であつて、不當に他人を犠牲にすることなしには、到底

支[illegible]ないやうな[illegible]ものであるか。人格主義は私達に對して、この問題に對する反省を命ずる。若しそれがあるまじき生活であるならば、我々は幾分でもこれを新らしくたてなほさなければならない。

我々の生活を[illegible]に[illegible]。[illegible]自分に[illegible]ないことを[illegible]しなければならない。但し問題[illegible]は[illegible]であることを[illegible]であらう。それは今日の如き[illegible]によつ[illegible]一に[illegible]することの出来ない問題である。この[illegible]問の解決は[illegible]の[illegible]に[illegible]ところがないが、それは[illegible]日常の[illegible]する[illegible]良、生[illegible]の判[illegible]の[illegible]—凡て[illegible]非人[illegible]する[illegible]の[illegible]ではならない。併し[illegible]良心の[illegible]現在の私達のやうな生活[illegible]今日の[illegible]人格[illegible]に[illegible]ふものにするためには、[illegible]なければならない。これには[illegible]ながら[illegible]。各人は[illegible]にしても、生活を[illegible]化する必要に[illegible]ないのである。人格[illegible]すれば、[illegible]するところに、今日の[illegible]生活の[illegible]の[illegible]があ[illegible]と生活[illegible]—これこそ今日の生[illegible]から[illegible]あげて、私達の良心に安[illegible]を與へる[illegible]なければならないであらう。さうしてこの方針は私[illegible]に、物質の[illegible]以外に、人間の向上心[illegible]ものを[illegible]ることを[illegible]へる、[illegible]外にも私[illegible]生活がある。[illegible]の[illegible]にこそ私達の人格の生活[illegible]それは、凡[illegible]の生活である。[illegible]生活、自[illegible]用するよりも[illegible]に[illegible]へることを目的とする[illegible]の生活である。[illegible]の生活の中心を[illegible]に[illegible]くことによつて、私達は[illegible]

ることが出來るであらう。私の考によれば、經濟生活の問題を解くには、經濟生活を離れたる立場に立つことが必要である。この立場を持つてゐない限り、經濟生活の問題は、恐らく利欲と利欲との正面衝突に終らざるを得ないのである。社會主義者の中には、共產制度の確立によつて、現代經濟生活の缺陷が完全に解決し得ると信ずる人があるかも知れない。併し私はさうは思はない。共產制度が確立すれば、恐らく生存權保證の問題や財貨公有の問題は解決されるであらう。併し共產國の各員が協力して生產せる財貨を悉く其處に積んで、これを各員の使用のために公平に分配するとしても、その一人の所得――並びに共產國の共同的給與――は決して人間の享樂欲を充すに足りないに極つてゐる。享樂の欲は無限にして物質の量には限りがあるからである。故に共產國の各員が今日の如き物質的享樂欲を持續する限り、其處には必ず共產物使用の競爭が始まるに違ひない。かくて今日の資本家と勞働者との間に行はれるやうな物質相奪の爭ひは、異れる形に於いて其處にも亦繰返されるであらう。私達の經濟生活に不安を生ずる根本原因は物質的享樂主義である。この主義に對して根本的方向轉換を要求するものは、畢竟人格主義でなければならない。思ふに今日の經濟問題は、人格主義の見地から、もう一度考へなほす必要があるのである。

五

以上私の議論は、僅かに物質主義に對して人格主義の立脚地を明かにしたに過ぎない。併し人格主義が現代生活に對して要求するところは、決してこの方面に限られてゐるのではない。それは主觀主義や民主主義や貴族主義等に對しても亦特殊の立場を持つて、或ひは並行し或ひは逆行してゐるのである。併し論歩を其處に進めるには、本稿はあまりに長きに失するであらう。故に私は更に稿を改めてそれ等の問題に觸れて見たいと思ふ。

（二）同、四の卷、大日本[illegible]二十七頁、同九頁、二三三頁以下參照。

（三）[illegible]のアイヲツスウ[illegible]、[illegible]同頁以下參照[illegible]の[illegible]た。

（四）[illegible]同頁以下參照。

（五）同、[illegible]二十八頁參照。

（六）[illegible]同[illegible]九[illegible]。

スタイナハ氏「若返り法」の生理的根據

醫學博士　永井潜

老ひらくの來んと知りせば門さして
　なしと答へて逢はざらましを

人の心を種として、心に思ふことを、有の儘に叙ぶるのが誠の歌であるならば、最も眞摯にあらゆる人間の心の奥に伏させる如き欲求を云ひ現はせる此の古歌は、蓋し歌の上乗なるものであらねばならぬ。何人か青春の血の永しへに凋れざらん事を願ひ、凋落の秋の何時迄も遣り來ぬ事を冀はぬ者があらうか。或は長生の術を仙師に問ひ、或は不老の藥を海東に覓め、力の及ぶ限り手術の有らん限りを盡くしても、所詮老の波の刻一刻身邊に迫る事を防ぐ事に出來ない。人は幾度か不老の藥・長生の術を覓めて、而して幾度か失望した。人は幾度か嘆息した。而して何時迄此の嘆息を繰り返さなければならぬのであらうか。今スタイナハ博士によつて發表せられた新らしき「若返り法」に對しても、亦人は欺かれつゝあるのではあるまいか。嘆息しなければならないのであらうか。

然し老長生法即ちゲロコミイ「Gerokomy」なるものは、古くからいろ／＼の形式に於て唱道せられた。所謂舊約全書の中にも、老ひたる王ダビデを若返らすべく幾多の若き美はしき婦人を傍に侍らす事を記してある。斯の方法は古羅馬に於ても踏襲された。十七世紀に於ける最も秀れたる醫家ボエーヤハーブ氏は之によつて老いたる一市長を若返へらしたことを記して居る。又十八世紀にかける名醫フーフェランド氏は、彼の權威ある名によつて長生法即ち「マクロビオチック」Macrobiotique なる書物を著はして不老法を説いて居るが、其の中に、矢張同じやうな事を述べて居る。若い汚れない小鳥のやうな人達と接觸する事によつて若返り得る事は、心理學的に之を考へれば其處に十分なる理由を見出す事が出來るであらうが、生理學的に考へて果して如何なる説明が與へられるであらうか。

抑も若返とは何を云ふのであるか。如何なる原因に由つて喚び起されるものであるか。それが解決せられる事なしには學問

あるとも云へる。近時世上に傳へられたる「何百歳にも達する[illegible]」の如きも此の一種と看る事が出來る。又近頃有名なる教育學者の間に少食論の提唱せられて、殊に腐敗し易く、各種の有毒性分解物を多量に作り易き肉類の過食を誡め、孔子の所謂「肉をして食の氣に勝たしめ」ざるやうの注意が、最近西洋の多くの營養學者によつて唱道せらるゝに至つたのも、現に世界の諸國に[illegible]せられて、食物の經濟・節食の制限等といふ趣旨から起つた譯とのみ看做す事は出來ないのであつて、一面人體の各臟器の勢力の消費・損耗、過剩の負擔を豫防し、其の[illegible]を調和せしめて永く健康を保持すべき方法を認めたるものと云ふ事も出來るのである。

老後の體内に起する[illegible]の事、而かも今述べんとするスタイナハ氏の新しき若返り法と密接の關係を保てる原理は、フランスの有名たる神經生理學の泰斗なりしブラウン・セカール氏によりて首唱せられた。元來人體内には種々なる機能を營むべき成分が、液汁の内に混つて體内に循環しつゝあるのであつて、其の配合宜を得る時に健康を保つ事が出來るが、其の宜を失する時は疾病を釀すのであるといふ學説は、今を去る約二千五百年の昔、醫術の祖たりしヒポクラテース以來唱道せられた者で所謂液體病理説なるものであつたのであるが、ブラウン・セカール氏は、此の學説を[illegible]して、[illegible]て、[illegible]てあつたのである。

彼の説に據れば、人體に於ける各種の臟器より各々[illegible]た、而かも未知の物質が形成せられて、之が血液中に輸入せられ、血液に入りて體内を循環し、之に由つて體内各々の器官の機能を[illegible]管しつゝあるものであつて、之が即ち内分泌（ホルモン）[illegible]せらるゝものであるが、就中生殖腺より出づる[illegible]の内分泌物は、其の[illegible]なる効果を有するものであつて、[illegible]なる機能を有するものである。從つて若し生殖腺に[illegible]して其の重要なる内分泌物の作用が減退すると、老年に於ける現象は漸次に對つて來るもので、之れ[illegible]要なる原因である。即ち氏は從來の學者が[illegible]として生殖器の機能が減退するものと信じたるに反して、生殖腺の[illegible]の減退を以て老衰の原因と看做したのである。

此の理論的見地より氏は新しき療法を[illegible]した。一千八百八十九年の六月一日、新療法[illegible]んとする[illegible]「パリーのアカデミー」に於て、當時七十二歳の老齢の身をブラウン・セカール氏は實に次の[illegible]を發表した。

自分は[illegible]に[illegible]んで居

體の萬般の機能の上に大なる影響を及ぼして居る事は、本篇の後に表はるゝ幾多の奇異なる現象によりて吾等の眼前に開展せられて居る。元來雌雄男女の性別の根原たるものは、雌性及び雄性の生殖細胞即ち卵及び精蟲を形成すべき生殖腺其物である。さりながら雌雄男女の別は、單に其の一方に睾丸があり、他の一方に卵巢を具へて居るといふばかりではなく、其の他の身體の部分に幾多の注目すべき相違が認められる。此處に於てか性別の本來の原因を成せる生殖腺の差別に對して主要性別なる名稱を與へ、之に反して他の身體各部に見らるる差別に對して附帶的性徴なる名稱を下した。此の附帶的性徴の中には、第一に生殖作用に直接關係を有するもの、例へば男性に於ては精囊とか、攝護腺とか、副睾丸とか、輸精管とか、其の他男性に固有なる外陰部とかいふやうなもの、女性に於ては、輸卵管とか、子宮とか、膣とか、其他女性に固有なる外陰部とかいふものがあり、第二には又、直接には生殖作用と關聯する事なくして、而かも雌雄の個體に於て尚ほ著るしき差別を示すものがある。例へば男女に就て見るに、先づ毛髮の差別、即ち婦人に於ては頭部の毛髮は男子よりもよく發達するが、其の他の部分に於ては婦人よりも男子に於てよく發達し、鬚髯の如き男子に於て遥かに婦人よりもよく發達する。又皮下の脂肪組織の如きも、婦人は小兒と同じく著るしく發達して曲線美を示すが、男子に於ては其の發達が少く、而して筋肉骨骼の發達は婦人に比すれば遙かに著るしい爲めに男子の身體は堅く角々しく見えるが如き、或は又骨部の内でも頭蓋骨や腰の骨たる骨盤等は男女によつて著るしく特徴を異にして居るが如き、又喉頭の發達も男子は遙かに女子を凌駕し、女子の聲帶は子供のそれと同じく短く小さく、從つて數多く振動して高い調子の聲を出すに反して、男子の聲帶は長く大きく、從つて振動數少なく音聲は低調であるが如き、其の他男子に於ては胸部の發育佳良にして肺臟・心臟の機能が旺盛で、活動的狀態を保てるに反して、女子にありては腰部即ち骨盤の發達胸部よりも著るしく佳良で、從つて胎兒を宿して之が榮養を十分ならしむるに必要なる體制を具ふるが如き、何れも一見男女を區別すべき標準たるべきもので、而かも生殖作用と直接關係なきものである。凡べて斯かる生殖作用に直接の關係なき男女間に見らるゝ差別を第二次性徴と呼ぶのである。動物に於ても角や飾り毛や雞冠や蹴爪や、第二次性徴の著るしく現はれて居るものが頗る多い。而して斯かる第二次性徴は動物及び人間に於て、幼稚なる年齢期には頗る不明瞭であるが、漸次に發育が進み、それと共に生殖腺が發達するに連れて初めて顯著となつて來る。即ち思春期に入りて初めて明

はなはだ女らしく、女は何処までも女らしさを発揮するもので ある。此の点から考へても、男子の職業が、既に第一次の役を営んで [illegible]すべての一切の男子の事に於ける[illegible]。同じ方法から生殖機能 [illegible]の発達の時期には、男は女の第二次性徴の不明瞭に 現れる事が著しく[illegible]である。殊に幼時なる年齢に於て其の點を 特に[illegible]たる事、此の関係が一層明瞭に認められる。

[illegible]原始的なるものは、人間の生命及び自身の外に加へたる最 [illegible]であつて、其の種類は極めて古い。若し一面には[illegible] [illegible]あり、一面には[illegible]、人間は生活を人間及び動 物に加ふるに至つたものと考へらるる。由来[illegible]といふ言葉は 最も不可思議なる生活現象であり、従つて此の不可思議な[illegible] 用を[illegible]以つて、最も重要なるべきもの、[illegible]すべ べきものとした。斯く一[illegible] く[illegible]て、太古時代に於て生殖と[illegible]し 一[illegible]を祭り、[illegible]の如く何度を[illegible]風習も[illegible] り、[illegible]によつて[illegible] 其する[illegible]を[illegible]したものと考へる事が出来 る。現に[illegible]地方に於て、今猶ほ「コブチェン」と称す る[illegible]では、[illegible]に[illegible]して一居 る。[illegible]後

宮に出入する男子の危険を豫防する為めに之れが必要な事で、即ち夫婦が権利問題より喚び起された一原因と見る事が出来る。古くはエジプト・支那・小亜細亜を初めとして、[illegible]の如きは支那、印度の如き今尚ほ此の風俗が許されて居る。就中貴族的階級を明瞭に帯びて居るものは[illegible]に於ける[illegible]である。若し人間が野性の動物を家畜に使へたる後、其の肉を喰ふにも其の力を利用するにも、牡よりも寧ろ牝の性質を帯ばしむる事が有利である事に心附いた。何となれば其の肉は牝の方が美味であり、又牝の方が[illegible]に[illegible]なる性質を有するからである。斯かる関係から人は牡の家畜に[illegible]勢を施す[illegible]の利[illegible]を[illegible]つたのである。所様な関係から其の原因の何れにあるにせよ兎も角其の男子[illegible]は[illegible]に於て[illegible]れる事になつた が、[illegible]く[illegible]にし[illegible]に[illegible]人間[illegible]に、[illegible]次[illegible]も[illegible]して[illegible]の[illegible]に於て見られたるやうに[illegible]ない。[illegible]せられた男子は一見女子の如く、[illegible]に[illegible]く[illegible]し、身體には[illegible]少く、[illegible]を生ずる事が[illegible]一般で、其の骨骼の有様を見ても、身體の一般の[illegible]を見ても、精神[illegible]を[illegible]ても、[illegible]の[illegible]を見ても、[illegible]として[illegible]関係を見ても、全く男子らしいといふ事[illegible]は[illegible]居る。斯か

る關係に實驗的に動物に去勢を施す時にも立派に見らるる事で、例へば牡の鷄の雄を去勢すると鷄冠も發育せず、飾り毛も出ず、蹴爪も生えず、時を告げたり、勇敢に闘つたりする牡の精神的狀態も亦現はれて來ない。之れをCapaun（去勢鷄）といふのである。

去勢者に於て見らるゝ此の第二次性徵の欠損は、疑もなく生殖腺の機能があつて初めて第二次性徵が喚起さるるものたる事を立證するものであるが、更に此の事を一層確實に吾人に告ぐるものは、其の欠損せる第二次性徵が、人工的に何等かの方法によつて、一旦失はれたる生殖腺の機能を補償する時、再び喚び起さるる事實である。此の補償法を第一に試みたのは獨逸のゲッチンゲン大學の教授たりしベルトルト氏であつた。氏は「カパウン」を取つて、之れに鷄の睾丸を移植して見た所が、其の結果、欠損せる牡の第二次性徵が、遲れ馳せながら再び立派に開展し來る事を確めたのである。斯かる研究の端緒が開かれて以來、此の方面に關する研究の興味は、日一日と盛んになつて、いろ〳〵大切なる報告が世に出た。既に述べたブラウン・セカール氏の如きも、其の熱心なる研究者の一人であつたが、今新たなる「若返り法」を發表して、其の名聲世界に喧傳せられんとしつゝあるスタイナハ氏も亦、其の錚々たる一人であつた。

牡の蛙は年々三四月の交尾期に入ると、之れまで小さく萎まつてゐた睾丸が著るしく發育して大きくなる。それに伴つて身體に之れまで見られなかつた一種の變化を示す。其の第一として前肢の拇指に疣のやうな隆起が出來る。之れは交尾の際牝を抱擁して離るる事の無いやうにする爲めに役に立つ。之れを思春瘤と名付ける。其れと同時に前肢の屈筋が著るしく發達する。之れ亦牝をしつかり抱擁する爲めに必要たるは云ふ迄もない。第三には精囊が著しく發達する。而して是等の變化が身體に表はるると共に性慾が昂進する。交尾期が過ぎ睾丸が萎縮するに伴れて、是等の心身の變化も亦消失して終ふもので、年々此の有樣を繰返して居るのである。スタイナハ氏は蛙の牡を取つて、交尾期に入るに先つて去勢を試みた所が、果して是等心身の變化は、交尾期に入つても起らなかつた。今其去勢された蛙に、交尾期にある他の蛙の睾丸を移植した所が、立派に普通の蛙と同じやうな心身の變化を喚び起した。加之、其の爲には敢て睾丸其物を移植せずとも、交尾期にある蛙の睾丸を磨り潰して之に食鹽水を加へて睾丸の「エキス」を作つたものを去勢せる蛙に注射して見ても、等しく普通の蛙と同じやうに交尾期に入つて前述の變化を顯はす事を見た。之れに因つて之れを觀れば、生殖腺が第二次性徵を喚び起すには、敢て生殖腺其物を必要とせ

ず、[illegible]

スタイナハ[illegible]に[illegible]

[illegible]

[illegible]

た、[illegible]内[illegible]を行ふものは

則[illegible]なるも[illegible]るへと云ふに、云ふまでもなく[illegible]

の[illegible]に、[illegible]で

あつて、[illegible]に、[illegible]にこつ[illegible]と

[illegible]

の精力は[illegible]一度に盛なくなつて消失するが、其の代りにレーディッヒの細胞が増殖する。然り而して斯かる手術を受けたる雄性動物に於ては、第二次性徴は依然として普通の動物の如く見られ、心身に於て雄の狀を示し、性交もするが、併し、精蟲を造る細精管の細胞が變性するから、最早生殖能力は絶滅する。即ち性交可能 Potentia coeundi であるが生殖不可能 Impotentia generandi になる。是れに由つて細精管はなくとも、レーディッヒ氏細胞さへあれば、第二次性徴は立派に表はれる事が分かつた。

第三にはX線を睾丸に照射する時見らるゝ事實である。X線は細精管の細胞を專ら破壞する働きがあるもので、レーディッヒ氏の細胞は侵されない。今X線を睾丸に照射せられたる牡を見るに、輸精管結紮の場合と同じく、其の動物は發育した後に生殖不能ではあるが性交可能である。即ち心身の第二次性徴は立派に表はれて來る。

第四には睾丸停滯症 Kryptorchides と稱せられる一種の發育異常に於て見られる事實である。元來睾丸は腹腔内に於て發生して、それが陰嚢内に下降して初めて其の發育を經るものである。然るに往々其の下降しつゝある際、睾丸が腹腔より陰嚢に通ずる鼠蹊部の小孔に引掛つて下りない場合がある。或は其の發育の途中に停止し、[illegible]に止まつて下りないこともある。前者を腹腔睾丸停滯症 Kryptorchides abdominales と云ひ、後者を鼠蹊部睾丸停滯症 Kryptorchides inguinales と云ふのである。然り而して腹腔睾丸停滯症に[illegible]ては、睾丸の[illegible]不十分で、細精管の細胞もレーディッヒ氏細胞も共に發育不十分である。斯かる發育異常者は啻に生殖不能のみならず、心身と共に男子としての第二次性徴を表はさずして、性交も亦不可能である。之れに反して鼠蹊部睾丸停滯症に於ては、細精管の細胞は發育不十分であるが、レーディッヒ氏の細胞は發育十分にして、而かも往々普通の睾丸よりも一層以上に發達せる場合がある。而して斯かる發育異常者に在りては生殖は不可能であるが、併しながら立派に第二次性徴が具はつてゐて、性交は充分可能である。之れ亦第二次性徴と、レイディッヒ氏細胞との間に密接なる關係を有する事を語るものである。

スタイナハ氏は、以上の事實を根據として新たなる「若返り法」を學門的に組織した。氏はブラウン・セカール氏と同じく、生殖腺の衰退は即ち身體全般に亘つて著るしき變化を喚起し、爲めに老衰の現象を喚起するものであるといふ意見に於ては、一致せる考を有つた。而して此の意見に基いて老衰を若返らさんが爲に、ブラウン・セカール氏が睾丸の「エキス」を注射したる

[illegible] スタイナハ氏の方 [illegible]

[illegible] ブラウン・セカール氏の方 [illegible] く、

[illegible] キス [illegible] 利用するとしても、スタイナハ氏の取れる [illegible]

[illegible] キーノーテー氏 [illegible]

[illegible] 方法であるとおれば

[illegible] 何 [illegible] には人間に行く [illegible] エキスの内

[illegible]

[illegible] 二十ケ月 [illegible]

[illegible] 十八ケ月 [illegible]

[illegible] 動物としては、[illegible] 一月の中に多

[illegible]

の感覺は衰頽し、一見若き動物のこれと區別する所は無くなる。

斯かる外觀上の變化と伴つて、其の精神上の變化も著るしく現はれて來る。若き牡は其の運動性にして外界の凡てに對して極めて好奇心強く、或は凡ての物に探ねて行き、絶えず動き走り廻る。又二匹の若き牡を一緒に置くと勇敢に戰ふ。就中最も顯著なる點は性慾の旺盛なる事で、一匹の若き牝の中に若き牡を入れると、彼は直ちに牝を追ひ廻り直ちに交尾する。其の間に彼は屡々おめかし（毛を舐めて綺麗にする）をする。之に反して老年の牡は運動極めて不活潑で、外界に對して頗る無頓着であり、爭鬪する勇氣も無く、他の若き牡を見ると直ちに其の中に引き籠る。若き牝を見てもそれに對して頗る無頓着で、殆ど目を閉ぢて恰も之れを追跡せんとする形跡なく、即ち全く性慾の減退を裏切る。彼は又食慾少く、日に日に痩せ衰へ、睡眠も多く、若きものの脈數が多きに反して老ひたるものの脈の打つ數に減る傾かである。又牝を見るも少しもおめかしをする氣分がない。又眼や姿勢の變る事は前に述べた通りである。

スタイナハ氏は是等の標準に基いて、老衰せる牡に精管の結紮を試み、果して老衰を一掃して之れを若返らす事が出來るや否やを實驗的に解決しようとしたのである。氏は幾代も白鼠を使用して、性的に其の行爲を研究し、[illegible]ことについては、[illegible]階についても、[illegible]るや、老衰より若返り得たるや否やを[illegible]得る事に努力した。其の為めには、常に性的に活潑なる若き牝を用意して置いて、之れと同居しようとする牡が[illegible]一緒にして、如何なる動作を爲すかを注意して觀察した。

白鼠に於ける精管の結紮は極めて容易く出來る手術である。手術の仕方並にそれに對する説明は茲に省略する事にする。今斯かる方法によつて、スタイナハ氏が實驗し[illegible]報告して居る中から次の一例を簡明に抄出して引用する。

（實驗例）

同一の腹より出でたる三匹の牡。年齡二十七ケ月。此の三匹の見本は、一千九百十七年の九月より十月に亘つて、六回若き交尾慾強き牝に接觸せしめたる結果、全く[illegible]を見た。一千九百十八年の一月より二月に亘つて、同様の實驗を繰返して同様の結果を得た。即ち左六ケ月以來全く性慾が消失したのを認めた。三匹共に頭部及び背部に於て毛が脱け、毛もおめかしをやらぬ。運動は不活潑であり、[illegible]不良で、見て著しき老衰の現象を呈した。

ここ[illegible]の中[illegible]を取つて[illegible]し、[illegible]し[illegible]生な[illegible]。[illegible]に[illegible]に[illegible]つた。[illegible]ら[illegible]つて、[illegible]に[illegible]る。[illegible]一[illegible]、[illegible]た[illegible]。[illegible]は、[illegible]つた。[illegible]れた。[illegible]なつた[illegible]なり、[illegible]く[illegible]しく[illegible]せた。[illegible]には[illegible]た。[illegible]したならまだ[illegible]るに[illegible]、[illegible]の廿日には[illegible]と

一緒に[illegible]きたるに[illegible]し[illegible]出し、[illegible]なる[illegible]し
た。且つ[illegible]に[illegible]せるを[illegible]めた。[illegible]月二十三
日[illegible]作[illegible]にして、[illegible]であると[illegible]は
す、[illegible]れば[illegible]てに[illegible]り、[illegible]あるものに對して
は十[illegible]に[illegible]た。[illegible]十日に[illegible]
其の[illegible]きたる[illegible]を[illegible]出し
た。[illegible]し、[illegible]盛んに[illegible]
四し[illegible]。[illegible]つた。[illegible]十日に[illegible]
[illegible]
に一々[illegible]ない。スタイナハ[illegible]、[illegible]によつて若

選りたるもの、睾丸を皮下に移植せるに復しく、移植の結果一旦萎縮したるレーディッヒ氏細胞に、結紮後四ヶ月に再び増殖し初め、而して其の後には細精管の細胞は萎縮し、之れに伴つて、以上述べ來つた肉心身の老衰状態は段々と消滅し來つて、再び若返るものである。例へば食慾も旺盛となり、體重も増加し、筋力も再び強くなり、脂肪も殖え、毛髮も再び密しく生え揃ひ、眼球の潤濁も消失し、懶しき運動も再び正常の活動に戻り、就中既に述べたる如く精神上の作用迄も頗る活潑となり、殊に性慾が著るしく昂進する。而して内部生殖腺が一旦萎縮せる状態より再び恢復する。而して肉眼的にも亦檢微鏡的にも若いものに見られるやうな性状に戻る。

殊に興味ある事は、一方の睾丸だけを結紮して其の輸精管を結紮し、他の一方を其の儘にして置くことである。即ち其の際手術した睾丸の側に於てレーディッヒ氏細胞が増殖し、それに由つて全身の組織が若返ると、其の結果他側の其の儘にした方の睾丸に於て矢張りレーディッヒ氏細胞が若返へるのみならず、又細精管の細胞も若返つて、再び精蟲を作る能力が現はれる。斯くして獨り性交可能状態が恢復せらるゝのみならず、生殖可能状態迄も此の「若返り法」によつて恢復せられる。

以上は牡についての實驗であるが、スタイナハ氏は更に牝に於ても同一なる原理の下に「若返り法」を試みた。牝に於ける「若返り法」としては、スタイナハ氏は老耄せる牝を取り、之れに若き性慾旺盛なる牝の卵巣を取つて移植した。然る時は移植せられたる卵巣の内にある内分泌を行ふべき組織が生きついて、其の働きによつて老衰せる牝が有つて居つた萎縮せる卵巣の働きが再び活潑となつて、内分泌を初め卵を作るべき細胞の働きも活潑となつて生殖可能性をも復活する。次ぎには之れに關する多數の實驗例から只一つを抽き抜いて掲げる。

(實驗例)

二十六ケ月の老ひたる牝。此の牝は數ケ月來既に全く交尾慾を失ひ、從つて若き牡が之れに近付くるも何等の反應を呈せざりしもの。背部には毛少く、頸及び其の他の場所に毛髮の斷々脱落せる所あり、乳房は萎縮し食慾少く、寤寢し、運動不活潑にして外界に對して全く無頓着である。一千九百十四年の四月十二日に性慾旺盛にして且つ姙娠せる生後四ケ月の牝より二個の卵巣を取り、此の老ひたる牝の腹の筋肉の上に皮下に移植した。四月の二十五日若き性慾旺盛なる牡を之れに近付けたるに、牡は以前とは頗る趣を異にして此の牝によつて大いに刺戟せられた。即ち牝を抱き且つ交尾を試みた。然し牝は之を拒んだ。四月の二十八日此の牝に對し「若

き種々有たも非常に強く掃出するのを[illegible]る。此の[illegible]の入口は、[illegible]きくなきある化と等しくたれるを見た。而し一[illegible]に今[illegible]狂態となつて、外界に對し[illegible]る[illegible]好心を[illegible]るを見る。五月の六日[illegible]は今[illegible]的な[illegible]る正[illegible]となり、[illegible]の入口は閉き、[illegible]に[illegible]きたるに[illegible]せ之れと[illegible]た

五月の二十二日までに[illegible]の[illegible]を見ず。然れども[illegible]に稍や[illegible]るしく、まくなつた。六月九日[illegible]所には[illegible]せる[illegible]時に、[illegible]しき[illegible]を[illegible]た。[illegible]は[illegible]活きし、且つ[illegible][illegible]た[illegible]、[illegible]も[illegible]加した。六月の二十三日には[illegible]となつて[illegible]し、[illegible]に[illegible]、全く[illegible]しくなつた。七月の十三日[illegible]一見[illegible]となつた。[illegible]に大きく[illegible]た。七月の十五日に至つて二十三日[illegible]きに[illegible]へ、即ち二十九ケ月の[illegible]に於一[illegible]なる[illegible]に[illegible]し且つ[illegible]だいである。[illegible]に[illegible]に[illegible]つて見られなかつたことで、此の[illegible]に[illegible]るもなくして、而して[illegible][illegible]によつて[illegible]く[illegible]日の[illegible]人だのである。八月の[illegible]十五日[illegible]に十分に[illegible]日の[illegible]は十分に發長した、一千九百[illegible]の二[illegible]十一日、三十六ケ月[illegible]に於て

此の化の内[illegible]は[illegible]の現象によつて死亡した。即ち此の[illegible]妹にして手術を受けざるものに比して實に八ケ月間を生き延びたのである。斯く[illegible]によ[illegible]一[illegible]に於て[illegible]けたるのみならず、[illegible]は八ケ月[illegible]延び得るのみにして、[illegible]を[illegible]一ケ月に満たざる[illegible]に[illegible]ては、[illegible]の八ケ月の[illegible]命は非常なるものと云はざるを得ない。

以上[illegible]に於ける實[illegible]によつて[illegible]人は此の[illegible]なる手術が如何に[illegible]法として有効であり得るかを認めたのである。[illegible]人の[illegible]も[illegible]く知らんと[illegible]する所は、[illegible]によつて[illegible]果[illegible]して人間に[illegible]。

スタイナハ氏は[illegible]リヒ[illegible]ステルン氏の手を[illegible]て、人間に於て[illegible]法[illegible]し、而して[illegible]たると[illegible]を得た。而[illegible]の[illegible]、[illegible]に[illegible]たる[illegible]ン・ナオール氏の場合の如く、[illegible]の[illegible][illegible]す[illegible]の[illegible]たらしめる爲めに、手術を[illegible]して[illegible]何なる目的の爲めに[illegible]何なる[illegible]を[illegible]しめず、之によつて[illegible]く[illegible]もる。次にスタイナハ氏が[illegible]げて居る人間に[illegible]した[illegible]合の[illegible]を引用する。即ち一千九[illegible]十八年より一千九[illegible]十年に[illegible]りて人[illegible]たるものの内から、次の[illegible]つの[illegible]録を引用する。

（第一例）

早老者。此の者は一勞働者にして一般の心身衰弱元氣阻喪、且つ陰嚢の痛みを訴へて病院を訪ねて來た。年齢四十四才。體格偉大、然れども羸痩して消脱のまゝ計るも僅かに五十七キログラム（一キログラムは我が二百六十六匁）に過ぎず、筋肉萎弱、皺多き老人染みたる顔貌を具へ、勞働に堪えない。性慾は數年來全く缺乏し、勢力も亦消滅した。

陰嚢の痛みは兩側の陰嚢水腫に基けるを以つて、局所麻醉の下に之れを手術した。（一千九百十八年の十一月一日。）其の序でを以つて兩側の輸精管を結紮した。八日の後第一期癒合によつて傷は癒え、其の後間もなく退院した。

二三ケ月の後其の體重は著るしく増加し、顔面の皺は消失し、四五ケ月の後筋力に著るしく増加し、百キログラムの物を負ふて容易く仕事する事が出來るやうになり、筋肉殊に手腕の筋肉は著るしく充實した。性慾が漸に目覺め、一旦消滅したる勢力は再び壯時の如く旺盛となり、一週間約三四回の性交を必要とする程度に達した。毛髪殊に腋毛が夥しく新生し、頭髪脱落なども稀となり、髭の伸びる事も亦早くなつた、結紮後一年にして體重の増加は實に十二キログラムに達した。而かも大戰時に於て、殊に不肝な勞働者の食事の如何に貧しきものなるかを考ふる時、此の體重の増加は一層驚異に値する。斯かる良好なる結果は手術後一年以上經たる今日に於ても尚ほ繼續して居る。

（第二例）

七十一の老翁。大企業の指揮者。患者に左側の睾丸潰瘍の爲めに療養所に運ばれた。睾丸潰瘍ありたるを以て直ちに化膿部の切開を行ひ、即ち局所麻醉の下に全然左側の睾丸を剔出した。（一千九百十九年二月十日）其の際右側の健康なる睾丸に於て局所麻醉の下に其の輸精管を結紮した。術後二十四時間にして解熱し、三週間の後退院した。

患者は此の慢性疾患の外、數年來顯著なる老衰症狀を呈した。就中血管壁が硬化し、爲めに腦に於ける血液の循環惡しく、屡々眩暈を起し、呼吸困難・心臟悸動・過度の疲勞・振顫を與へた。八年以來性慾は全く消滅して居た。

術後三四ケ月にして驚くべき心身の變化を呈した。久しく失はれて居た男性的元氣は恢復した。而かも其の恢復は一時的のものに非ず。術後九ケ月の後リヒテンステルン氏が此の患者を呼寄せ、術後の經過を有りの儘に報告せしめたる所のものは次の通である。

「私は手術の傷が癒えた後に山地旅行を試みた。其處で私は

大いなる效を收つて、性欲に對する效を見た。さうして[illegible]を絶した。私の食欲は非常なる程度に高まつた。[illegible]此の時の[illegible]せられたる分量では[illegible]ない。以前は[illegible][illegible]めて[illegible]であつたが、今や全く[illegible]なつた。私の[illegible]は[illegible]しくなり、人に[illegible]て[illegible]六十[illegible]後に[illegible]ないと云ふ。以前私は少しでも早く[illegible]か、[illegible][illegible]ると、[illegible]しくなり、殊に[illegible]たのである[illegible]今や全く其の[illegible]はなくなつた。[illegible][illegible]しいとは[illegible]はない。[illegible]は今に[illegible]になつた。[illegible]する[illegible]は今や[illegible][illegible]に於ける[illegible]ることも自由になつた。私の[illegible]つに、私の[illegible]がよくなつた事で、[illegible]に行つたもの[illegible]今に[illegible]ねばならぬやうになつた。終りに臨んで私は[illegible]して置く。[illegible]私[illegible]して自然の[illegible]を[illegible]べく[illegible]せしめた。さうして[illegible]なる[illegible]、私においての[illegible]に[illegible]のなかつた[illegible]は[illegible]た[illegible]

今や全く[illegible]に[illegible]に働くやうになつた。要するに私の[illegible]は、今や全く[illegible]に[illegible]は[illegible]で私の[illegible]へつて來た。(一千九百十九年十一月一日)

其の後今に至る[illegible]は[illegible]ケ月間、此の老人は同じ状を佳良な狀[illegible]を續けて居る。

(第[illegible]例)

六十六才の男。一[illegible]。五年以來[illegible]の[illegible]しく、[illegible]甚しくして、[illegible]殊[illegible]めて[illegible]大、[illegible]しくなり、[illegible]さず[illegible]じ、[illegible]五十[illegible]キログラムに[illegible]た。[illegible]に[illegible]す。一千九百十九年十一月十[illegible]日に[illegible]の下に[illegible]た。[illegible]に[illegible]はざりしも、[illegible]めて[illegible]かつた。一[illegible]は[illegible]めて[illegible]く、[illegible]中に[illegible]し[illegible]四十八キログラムに[illegible]した。

一千九百二十年[illegible]二十一日に、[illegible]下[illegible][illegible]の[illegible]に[illegible]となり、[illegible]は日々日立つて、[illegible]に[illegible]キログラムの[illegible]に[illegible]し、[illegible]にして

運動及び精神的機能が活潑となり、呼吸困難・眩暈・手足の痛みなどは殆ど全く消滅した。結紮後六週間にして、患者は不思議にも甚だしき性慾の生起を感じた。□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□又、新たなる若々しき男の力を感じた。結紮後十週間にして性慾はますく盛んになつた。患者は二十年來曾つて斯くの如き經驗を持たざりし事を告白した。性慾は今や壯時に劣らざる程度に亢進した。患者の見掛けは全く若々しく、顔の皺も伸び、如何にも愉快と力とに滿ちて居るやうに見える。一千九百二十年の四月に至つても、其の狀態は依然引續き、體重は今や六十キログラムに恢復した。

以上の記録が大正九年の四月に公表されたるスタイナハ博士の實驗報告である。スタイナハ博士はウヰーン大學教授で、且つ其の學士院の生物學研究所の長である。而して前に述べたやうに、此の問題に關しては既に十年一日の如く研究を繼續して、非常に價値ある數多の業績を發表した人である。而して此の報告は愼重なる上にも愼重なる態度を取つて公にしたものである。して見れば其の學説の根據ある事、其の發表者の權威ある事から考へて、吾等は此の新しき『若返り法』に對して如何なる希望と注意とを拂ふべきであらうか。此の新『若返り法』が學問上最後の確認を得る迄には、まだ多くの仕事が殘されて居るが、併しこれは專門に亙ることであるから、茲には省略する。若し夫れ、人間が、幾千萬年來の一念の望みであつて、而かも常に失望に終はつた所のものが、今にして始めて與へられたとしたらば、是は實に人間生活に於ける一大革命である。吾等生命の自然科學的研究に關係して居るものは、之を追驗し、之を批判して、一日も早く其の眞價を明かにするの必要を感じつゝ、茲に此の新『若返り法』の生理的根據を世に紹介する(完)

皇太子殿下をことほぐ

一日を。

明治大帝は早く即位せられ、次でヴィクトリヤ、独帝ヴィルヘルム一世、次でアレキサンドル三世、伊でヴィクトル・エマヌエル、仏にナポレオン三世さへあり、今の帝王は多く孫の代であつて、明治大帝の御上にでなかつたに拘らず、我皇室の安泰を比せずに居られぬ。独逸前皇帝の如く、帝国勃興以前に生れ、帝国の破滅を見、死の苦悶と云はうか、悲しき運命である。普仏戦役の少し前、仏国前皇后ユーゼニイはユーゼニイと称し、巴里に離宮を建てるやう仄めかしたが、ユーゼニイは仏国の光栄を恢復するのを目撃したのに反し、自ら他国に逃れるの余儀なきに至つた。実に夢のやうな話である。

変遷と云へば我日本も随分大きな変遷を遂げて居る。明治天皇が京都から東京に移つられ、封建を郡県に改じ、列国と締盟されたのは、国史上の大変革たるを失はぬ。天皇が不世出の英主であると同時に、日夜其を思はせらるゝ所き、多く類を見ぬ所である。内に憲法を発布し、議会を開設し、外に二大戦役を決行し、帝国の地位を定められたる事、形容するに適當の辞なきを惜しむる。

昔徳川家光が将軍職に就いた時、諸侯を集めて云ふやう、祖父家康は小身より起つたもの、父秀忠も曾つて諸君と共に働い

たものであり、其他の[illegible]は、[illegible]んとするの[illegible]である。[illegible]に服従ふた。それに不服たるは[illegible]よ、[illegible]ふ。すると そこの諸侯[illegible]定めた、自分に対し一方日を[illegible]例に引くのには似てないが、明治大帝と今上陛下と皇太子殿下と時代を[illegible]にする[illegible]ではない。明治大帝は[illegible]一系[illegible]の動かすべからざるものがあつても、明治大帝は[illegible]代にお[illegible]れあり、[illegible]の盛んなるであつた。今上陛下は明治十二年にお生れであり、西南戦役が済んだ、翌年国の基礎が固まりながら、未だ立憲政治といふに至らぬ。且つ外国と戦つた一度も経験に居らず、下の関の[illegible]のみでは、好成績でなく、前者に関係あるもの、[illegible]て生まれた。皇太子殿下のお生れになつたのは、既に立憲政治となり、支那との戦役を終つた後である。未だ露国と戦はぬにしても、露、独、仏三国の干渉を受けて居る。干渉を受けたのは不面目のやうでも、三国が結合して干渉し来つたのは、日本の国運発展を察した所がある。各自別に利益を得やうとするへたにせよ、日本を措いて利益を得難いと見て取つた所がある。日本は幾(いくら)[illegible]国[illegible]るまでに発展して居り、露国との戦役も[illegible]に比較に[illegible]する。早晩[illegible]り、[illegible]に日本の勝利に

関するか、少くとも敗亡に終らぬと云ふ事になつてゐる。之が為に[illegible]に進んだものに外ならぬ。

其[illegible]を唱へたものは、自ら口に[illegible]んだ事を口にしたのであるが、[illegible]なく、今日の[illegible]いて[illegible]に之を[illegible]自ら[illegible]なるか[illegible]せず、自ら[illegible]い[illegible]に[illegible]ず[illegible]の[illegible]だにしなかつた[illegible]について一[illegible]く方へ[illegible]なく、[illegible]ふたよりも[illegible]でも[illegible]よりも少く[illegible]一[illegible]は何であるか[illegible]すると、[illegible]に付てあるが、此[illegible]へなかつたといふ[illegible]て居る。[illegible]語ね、[illegible]てあるにせよ、[illegible]力を具へ[illegible]するのと[illegible]ない事よりは[illegible]しい[illegible]あたふ[illegible]のに力を[illegible]あらう[illegible]人[illegible]して[illegible]ると云ふ[illegible]なくなり、如何に[illegible]入[illegible]たが[illegible]しても、[illegible]たがりといふ[illegible]たかつた。

其王を唱へるものは、立憲政治など全く思ひ及ばぬにしても、[illegible]つたものにしようと考へたに違ひない。支那の[illegible]の[illegible]でもさうなつて居り、王政に[illegible]に則り、民意に[illegible]んずる事になつてゐる。尊王を唱へた者が後に自由民権を唱へる事になつたのは、何も[illegible]むべき事[illegible]たく、[illegible]王家であつて[illegible]したのは、[illegible]らに於て[illegible]として[illegible]た。[illegible]時代よりも[illegible]せぬけれど、大[illegible]する。王政復古と云ふて、[illegible]にして見るべくもなく、[illegible]る時なくてはならぬ。か[illegible]る[illegible]を[illegible]しようとするのであり、憲法発布議会開設に至るは当然[illegible]ものである。

[illegible]に之[illegible]ひ、[illegible]て居るが、現時に[illegible]所あるとすれば[illegible]にある[illegible]を防ぐ[illegible]とする。[illegible]といふ[illegible]き、外国と[illegible]するに足らぬやうでも[illegible]ねばならぬ。[illegible]も日本[illegible]文[illegible]に[illegible]て居り、何と云ふても文[illegible]、之を国家に[illegible]ぬのに[illegible]たい[illegible]した。それが[illegible]になり、文化[illegible]、[illegible]を生ずるに至つた。

欧米が通商を求め来る時、征夷の名の下に之を撃ち攘ふのは、事を過つて居るも、夷狄を征すると云ふのは分らぬでない。文化の進み道理を具へて居る者と戦ふは宜しくなく、文化の劣り暴力を振ひ来る者と戦はずに居れぬ。攘夷は道理の分らぬ夷狄を撃ち払ふのであり、道理の解かる文明人を撃ち払ふのでない。欧米人を夷狄と目し数へるのは甚だ謬ひであつても、夷狄の振舞するものと戦はねばならなくなる。攘夷に已むを得ずして戦ふ場合に猛然と立つて戦ふべしといふ事になり、征夷と云ひ攘夷と云ひ、特別に考へた事でないにしても、円つと理を具へて居る。素より事を構へて戦ふべきでなく、理否を弁へず暴力を振り揮すものを膺懲せねばならぬと考へ及んで居る。明治天皇の代に二大戦役が起り、今上陛下の代に世界戦役が起り、我日本の態度は素より戦はうとするのでなく、暴力を揮ふものと戦ふの餘儀なきに至つたのを察する。

ところが明治天皇御即位以来世界幾變遷、初め王朝時代を[illegible]難にし、維新の任とした国防に関し、佛国の陸軍に則り、英国の海軍に則らうとした。明治何年佛が陸軍を以て征服する事、英の海軍に於けると同じ。所が其佛国が独逸と戦つて敗れ、独が日の出の勢になり、陸軍は之れに則らねばならぬやうに考へられる。佛式を独式に改めばならぬは何うか。勝敗は兵家の常、佛が負けたとて、直ちにこれを捨てるのは何うであらうか。[illegible]論あつたが、何分に[illegible]の[illegible]事を[illegible]、之に[illegible]に越した事はないとして、[illegible]に定め[illegible]る事にした。[illegible]戦役[illegible]に[illegible]、後に全く独逸に拠る事になつた。而して[illegible]に決さしく、陸軍のみでなく、政治其物[illegible]て居ると[illegible]れ、政治に於て之れに則るべきであり、[illegible]に[illegible]ると考へられる。

・今上陛下の御誕生の頃から[illegible]の傾きあり、益々盛んになるを認めるが、其[illegible]つたのは[illegible]に於てする。[illegible]に則るべきものあるに因り、[illegible]は政府当局者が自分の位置を擁護するに有利なるに因る。[illegible]の[illegible]は[illegible]の[illegible]に出で、[illegible]といふやうなものが[illegible]。[illegible]標を掲るの勢になり、国力を[illegible]とする者[illegible]に居れぬ。当時壊に勝ち佛に勝つたとて、必ずしも称するに足らず、[illegible]して考へねばならぬが、昔に[illegible]佛国を[illegible]たけたので、其勢の当るべからざるが[illegible]ねばならぬ[illegible]は斯くして勅具した、宜しく斯くすべきであると云へば、[illegible]で人が承知する。政治に於てビスマルク、軍事に於てモルトケ、之れを標本とし崇拝せば、異議の云へやうがない。[illegible]の力は頗る強い。

両[illegible]に取る[illegible]おらい上、[illegible]の[illegible]、[illegible]し、
大[illegible]の[illegible]し、[illegible]を[illegible]
る[illegible]へる[illegible]。[illegible]の中心[illegible]に[illegible]つて、[illegible]や
姿[illegible]する[illegible]、[illegible]になり、[illegible]き、外[illegible]の
[illegible]よりも[illegible]ビスマルクを見よ、
[illegible]、今から[illegible]ッドストン
だ。[illegible]い[illegible]、[illegible]ぐとは[illegible]す
るに[illegible]。[illegible]でも[illegible]、[illegible]を[illegible]
[illegible]
ごくに[illegible]け。[illegible]モルトケ[illegible]ローン[illegible]して
[illegible]。[illegible]一[illegible]ビスマルク[illegible]されたのは、
[illegible]いとか[illegible]マルク[illegible]。
[illegible]の如くなれば[illegible]。
[illegible]を[illegible]し、[illegible]十一年一八八八年[illegible]ウィル
ヘルム[illegible]し、[illegible]ビスマルク[illegible]、自ら政治を
行[illegible]、[illegible]用捨した[illegible]る。大
[illegible]
發するので、カイゼル[illegible]、[illegible]り、
一[illegible]するのである。さうなつて[illegible]ると[illegible]
できた[illegible]ば[illegible]ない

とにやるに[illegible]く。カイゼル自ら[illegible]へたか、[illegible]を[illegible]は
すのもよらしくない。[illegible]の[illegible]の[illegible]を[illegible]
大すの必[illegible]る[illegible]、それを[illegible]するについてさまぐの[illegible]
を下すもの[illegible]。日本の[illegible]之を[illegible]い[illegible]と思ひ、其
[illegible]に[illegible]ば、[illegible]にもと[illegible]る。今は何でも
[illegible]であり、[illegible]に[illegible]つたとて、[illegible]れ
此[illegible]せば、[illegible]と[illegible]ふを以つて[illegible]に取[illegible]て押
へる。一[illegible]大[illegible]へすれば何でも[illegible]つて行きさう
であつた。何時し[illegible]帝と同様に[illegible]すやうにな
り、[illegible]が[illegible]く、甚だしいのは[illegible]で
も[illegible]、[illegible]のポー[illegible]ノ[illegible]の[illegible]まで引出して來る。[illegible]
の[illegible]な[illegible]一[illegible]き、[illegible]一昨年の夏頃までそれで[illegible]い[illegible]來
た。[illegible]カイゼル[illegible]。
[illegible]に[illegible]へ、[illegible]、[illegible]は
ないと[illegible]。[illegible]にすれば[illegible]いと[illegible]、[illegible]之れ
に[illegible]、[illegible]し、[illegible]から
も[illegible]になる。[illegible]といふ[illegible]である。
そこでもへては、[illegible]似[illegible]付
ない[illegible]、[illegible]を下すの甚だしく[illegible]つて[illegible]居るのを
[illegible]つて、[illegible]に何[illegible]しい[illegible]るが、[illegible]らしい所

があるか。帝國らしい所があるか、獨逸と同様と觀るのは、天皇を將軍と同様に觀るに異ならぬ。一時獨裁政治の當然であるかに説き立てたのは、我天皇の事を云ふのでなく、カイゼルの事を云ふたのである、カイゼルの事實よりも、之れを理想化して説いたのである。我國體に危險を感じたりするのは、獨・墺・露の君主の危險から思ひ付いたのである。我國のみを見れば危險の感じやうがない。我國の天皇は教育物語にあるが如く、皇祖皇宗の徳を建つる事深厚であり、之について何の解釋を下すとも、昔から政治上の罪惡で天皇の責めに歸すべき事がなく、之れあれば物事の弊はぬ時に限つて居り、千年も前の事を言へば、何處にでも何事かとある。幕府時代七百年間、天皇は徳を以つて立たれて居る。高山彦九郎が感泣したのも、其神々しい徳に對してゞある。獨逸皇帝のやうであつて果して高山が感泣したであらうか。獨逸熱の高まり、獨逸の眼鏡で我天皇を見る事約四十年、所謂眼鏡を脱して見れば獨逸と大きい違ひである。若し獨逸帝國が破滅せず、更に幾十年續いたならは、我國體を誤解し、世間を誤る事頗る多かつたらう。獨逸の戰敗は強ちカイゼルが惡いのでないけれど、之れも論より證據、今日如何に辯解しても、カイゼルを模範にする事が出來ぬ。

我今上陛下は獨逸皇帝と異ならせ給ふが、皇太子殿下に一時

政事を治させ給ふ。天皇の御宇は千代に八千代に長いとし、皇太子が代つて暫く政事を治しめす例は、本年千三百年祭を行はれる聖徳太子を初めいろ／＼ある。日本の天皇を墺獨の皇帝に擬へたのは大いなる過りであり、斯く曲解せず、何事も眞つ直に解するを要する。カイゼルに擬へ奉るのは以ての外である。

白耳義は小國とはいへ、君民一致見上げた者であつて、國土が敵軍に蹂躙され、極端に苦境に陷りながら、能く之れに堪へ、遂に國運を恢復し、更に發展しようとする所、兩陛下の徳の與かる事少くない。自ら政治に當られても、彼の如き調子ならば結構である。英國は先帝が自ら外交に膺り、外相除け者と云はれたが、ヨットで病を養ひつゝ列國の元首と交りを温め、獨逸を孤立に陷れるなど、政治の眞諦を心得て居られたと云へる。カイゼルの如く内・外に騒がしくせず、何人にも累ひを懸けず、民衆は只陛下が保養されて居ると考へ、また實際さうであり、表立つて之れぞと云ふ事は無く、政治の障りになる事が少しも無い。それで大體を括くられた所、誠に天晴れの次第と云はねばならぬ。皇太子の頃隨分不評判であり、之を諷刺した出版物がいろ／＼あるが、之れと云ふも六十才まで東宮に居られたからであり、久しい部屋住みは一面に幸、一面・不幸である。ヴィクトリア女皇の聰明を以てして何とか仕樣がありさうなものであ

つたと[illegible]しまたる。今の[illegible]にそれと云ふけれど、[illegible]の没せさる領土に臨むに[illegible]以つてせられるもの[illegible]せられる。[illegible]を樹つる[illegible]なれば、[illegible]も[illegible]、永久に安かなものである。

我日本で[illegible]の長所を取るのは宜い。何處でも長所の[illegible]はをして居る。明治の長所を取つたのは宜く、今後も[illegible]上に於ても[illegible]取るべき事である。然しカイゼルを以つて現[illegible]に擬し、カイゼルの名に[illegible]しようとしたなど、今から考へて見ても[illegible]しい次第と云はねばならぬ。[illegible]くれ[illegible]たものは、[illegible]し一緒に[illegible]べき事である。[illegible]下の[illegible]の人々は[illegible]であり、間違つた事をするやうな事[illegible]い。一時大臣をカイゼルに擬したのも[illegible]い心でなく、[illegible]の[illegible]りに出でたらうが「[illegible]に[illegible]」と云ひ、[illegible]たるは及ばないが如くなる。[illegible]年も[illegible]つた[illegible]つた。今後更に日本に[illegible]を[illegible]すやうになるであらう。今上陛下は御[illegible]に[illegible]らせられ、[illegible]太子殿下をして[illegible]に[illegible]しめられたる[illegible]もあり、御[illegible]といふ[illegible]もあらうと拜察する。陛下の御[illegible]には申すまでもなく、[illegible]代の[illegible]しへに[illegible]であると[illegible]る。

民族的團結と思想的團結

杉森孝次郎

國、中央[illegible]は、[illegible]であるが、[illegible]であつた。[illegible]時代の日本に[illegible]あつた。今日[illegible]、古代の[illegible]日本[illegible]しく[illegible]、大いに異なつてゐる。[illegible]日本も、[illegible]的であつたならば、[illegible]

[illegible]であつたのみならず、唯一の[illegible]であつた。[illegible]日本人に取つても、[illegible]に於いて[illegible]であつた。[illegible]今では、[illegible]にして、[illegible]の一[illegible]、[illegible]に[illegible]したらんとしてゐる。[illegible]に當つて、一[illegible]に、[illegible]上の共通を[illegible]

件、もしくは一條件として、結婚する事はありうる。けれども、親子と、その親の子たる兄弟姉妹に、たとひ一家の成員ではあつても、思想上の共鳴者であるか、ないかは、かれらが一家の成員であるといふだけの與件からは、決定されない問題だ。親子兄弟姉妹間の關係は、血緣であり、居所であり、歴史であり、風習であつて、必ずしも思想ではないからだ。時に德冨蘆花氏と蘇峰氏とは、その一例だ。父母と兄姉とは、子女と弟妹の思想に對しては、絶對的に他人であると豫想する方が、正當な見解だ。夫婦間にも、思想の自由獨立は、個性の自由獨立の根本要件として保護されねばいかぬ。けれども、夫婦は、選擇の自由が、その成立に與へられる。餘りに甚だしく思想上の理解が隔絶してゐる異性の一人と結婚する事は、避けうべき災禍だ。親子兄弟隨つて、結婚した上には、その罪責を甘受すべきだ。姉妹の間には、然るに、その選擇の自由がない。それだけに、親子兄弟姉妹の間には、思想の自由を保護し、尊敬する道德的必要が高い。

市は家の如く。市民の家庭に生まれ育つ子供らが、同一思想の信者たるべき事をば期しがたい。社會主義者も、資本主義者も、國際主義者も、國民主義者も、無神論者も、有神論者も、すくなくも自活の準備が出來るまでは、政治的及び經濟的に多少協力せざるを得ない。宗教、職業、人との交際、商業、小學教育、それから實買生活において、一市内の居住者には、避けがたい連帶が多少ある。それだけに、市民間には、思想の自由は尊重される要が強い。

國民は、家族の如く、市民の如し。個性は生後に發展する事實だ。然るに、出生は個人の選擇を超越する事實だ。運命だ。生物人、言語人、地理人、風習人、歴史人としてこそ、國民は先天的組合を形成してゐるが、思想人としての組織をば、必ずしも無理なしに同國人と共に形成しえない。思想は、數學が一證する如く、聰明を唯一の必要條件とする。人種と、民族と、言語と、土地と、風習と、歴史とを問はない。家族に取つて、市民に取つて、思想の自由を確實にする道德的必要が強いならば、國民に取つては、その必要は尚一層に強い。なぜかといふに、一家の成員間には、自然の情愛が強烈だから、思想に對する強制は、緩和されうる餘地がある。村や、町や、市の場合においても、人情の流通が、思想強制の手を寛にする作用を呈しうる。國となると、大分大きな組織體だから、比較的に、制度が多く物を言ふ。國民の思想の自由を保護する制度と、それを束縛する制度とは、その有無と、完備不完備とによつて、甚大の影響を國民の思想の上に及ぼす。專門職業としての立法者、

行政者、及び帝國の一部としての殖民人、行政人は、くれぐれも、その所在する所を研究し、理解しなくてはいかん。四圍の事情を察さば、[illegible]様に[illegible]殖民の目的を亡ぼすのだ。たくさんの[illegible]と、時あつてか、移住するだけの良心と智[illegible]りを、殖民に[illegible]させる[illegible]べきだ。

殖民は[illegible]の如く、而も[illegible]に家族よりも[illegible]に、また市街生活の如く、而も[illegible]に市街生活よりもはるかに[illegible]に、[illegible]の[illegible]下に生活する。[illegible]には[illegible]に存する[illegible]殖民には[illegible]だ。市街生活は、いやになれば其の一個の市街[illegible]けへ[illegible]にすれば、[illegible]ない。殖民になると、殖民は[illegible]すくなくとも[illegible]、[illegible]へ[illegible]でない。[illegible]つる[illegible]す、人の[illegible]に[illegible]つる[illegible]、この[illegible]の[illegible]に[illegible]。[illegible]上、[illegible]、やはりに一致する場合は[illegible]ない[illegible]。[illegible]に[illegible]するには、[illegible]のためならば[illegible]國家の[illegible]いためならぬのだ。

[illegible]の一の[illegible]、[illegible]以的[illegible]、[illegible]的[illegible]。[illegible]中心といふ[illegible]は、[illegible]の[illegible]たつた[illegible]に[illegible]

よりは、比較にならぬ程の範囲であつて、[illegible]つて[illegible]すくなく解決される。その意味は、封建時代の國家に比して、殖民の個々の自由を餘計に保護したといふのではない。その反對だ。けれども、國家[illegible]の[illegible]にあつては、國家の[illegible]を改善するか、或は國家の[illegible]に[illegible]するかのほかには、[illegible]その[illegible]を[illegible]する人の道徳[illegible]はない。[illegible]つて[illegible]の時代においては、[illegible]ない。[illegible]に、[illegible]、その[illegible]問となつて見ると、[illegible]は[illegible]して、自由に[illegible]するこゝにおいてか、[illegible]自由に[illegible]する[illegible]と、[illegible]的に[illegible]

[illegible]には[illegible]に、中大なる[illegible]なる[illegible]。[illegible]心は[illegible]に[illegible]する。これ[illegible]一八[illegible]の[illegible]一八[illegible]ト[illegible]の[illegible]心[illegible]つて[illegible]。[illegible]に[illegible]。[illegible]しく[illegible]した。[illegible]にすくなくとも、[illegible]に

[illegible]

さり決した。露の民族的團結心も、ナポレオンの遠征に因りて發生した。佛の民族的團結心は、十八世紀末に、主としては一七九二、三年の交に、新生共和國が、周圍の舊制度國の包圍を拒逐する必要に際會して發生した。英の國民的團結は、西、葡二國が、北西兩米大陸を壟斷せんとするの專横に對抗する必要を機縁として遙かに早く展開した。日本も、黑船の包圍脅威に際會するまでは、愛國心こそ熾烈であつたかも知れないが、民族的團結心は、封建割據以來の如くに覺醒してはゐなかつた。一民族の生存、利益、名譽を、他民族が、その一民族の面目を否定する形で否定しにかゝる時、聰明と氣力に富んだ民族であればあるほど、その一民族には、民族的團結心が旺盛する。明治二十七、八年及びその直ぐ前に、日本の民族的團結心が、いかに長足の進歩を遂げたかは、想像に餘ろう。遼東還附の屈辱を忍び、國を擧げて謂はゆる臥薪嘗膽の十年を過ごす間に、日本の民族的團結心は、ひとへにその深さ、強さを增した。明治三十七、八年に及んで、日本の愛國心は、恐らくは空前の充實緊張を示した。レーニン治下の露も、資本主義及び帝國主義の諸強の攻撃を拒逐する必要に際會して、新國民主義を萌發した。デニキン、ユーデニッチ、コルチヤック諸叛將は、外援主義者たる弱味も與つて、その新國民主義の血祭りに供せられた。支那も、民族内外の重壓下に、[illegible]外力の一段を經うて、民族的團結の存在者たるかも知れない。中にはすでにこの[illegible]を展開しつゝあるものゝある中に、[illegible]一友人の好意下に[illegible]かれたるだ。他國民の異民族的侵略に對して、自國民が民族的に團結して、この不正の力を撃破するは、常に倫理の原則にもかなひ、人道價値の要求にもかなふ。されば、各人の努力に、自治獨立を目的とする民族的團結心を事實上肯定し、他國侵略を目的とする民族的團結心を事實上否定するにある。すでに自治を確實にしたる國民は、進んで、國際的責任を果たし、國際的社會に奉仕する形に於いて、文化的、經濟的、その他の生活内容に寄與貢獻すべきだ。自治にまで到達したる愛國心は、向上の一路を、國際的軍制侵略に求めずして、國際的責任と國際的創造とに求むべきだ。

愛國心は、その起原發達に於いて、思想よりは第二次的だ。歐洲の十八世紀には、愛國心は稀薄であつた。しかし、思想は強烈であつた。民族的外壓が可能であり、現實である限りに於いて、民族的團結心の錬育たる必要がある。然るに、思想に至つては、民族的外壓の可能以前にも、可能終熄以後にも、随つて民族的抵抗の必要以前にも、必要消滅以後にも、存在の可能と必要とを有する。思想は、それの純粹用に於いては、愛國心

よりも[illegible]であり、永久的である。愛国心の要素が、協力の
[illegible]ばかりでなしに、[illegible]として情
[illegible]れない、[illegible]し、[illegible]を思ふ本
[illegible]、愛国心[illegible]、自然的
人[illegible]って、[illegible]た[illegible]
[illegible]ければ、[illegible]しくになる
らうね。[illegible]人々が、[illegible]で[illegible]ば、[illegible]
に、[illegible]の人には、[illegible]見えた[illegible]しえないかも
知れない。[illegible]して[illegible]より[illegible]な
らば、[illegible]しての[illegible]において[illegible]ない。
人は、[illegible]すとも、[illegible]人と[illegible]
[illegible]。[illegible]人と[illegible]に
[illegible]人と、[illegible]には、人[illegible]
[illegible]に[illegible]
[illegible]心に[illegible]して、[illegible]
[illegible]。[illegible]ない。[illegible]と
は、[illegible]の如き、[illegible]
[illegible]ではない。[illegible]
[illegible]一の自由[illegible]
[illegible]

心裡に保有する事に些の不可思議もない。
けれども、さう見たところで、愛国心は、[illegible]且つ、[illegible]
における[illegible]生活の一部だ。愛国心の[illegible]、[illegible]
を[illegible]して一と[illegible]して、[illegible]に愛国心に[illegible]の一部だ。
[illegible]としての[illegible]心は、愛国心以上の権威を要請する。この[illegible]は[illegible]だ。[illegible]、部分[illegible]よりも高い[illegible]だからといふ[illegible]だ。[illegible]的[illegible]の、[illegible]における一[illegible]に、[illegible]
だ。[illegible]の[illegible]に、愛国心の[illegible]の形勢と併行した。
[illegible]する[illegible]の[illegible]に[illegible]されては[illegible]み、
されてはきた[illegible]なき[illegible]んだ[illegible]は、近[illegible]の
愛国心は、[illegible]の一として、[illegible]な[illegible]の[illegible]と、
[illegible]なしたと。[illegible]立てられた[illegible]とを生
ずる[illegible]力に[illegible]すべきもの[illegible]る。しかし、近代生活
[illegible]ばかりの[illegible]、国民[illegible]の
向うあって、[illegible]した。今は、国[illegible]
[illegible]と[illegible]だ。[illegible]に、国[illegible]よりは、一[illegible]に
[illegible]。[illegible]には、[illegible]についての一
[illegible]の[illegible]から[illegible]。[illegible]は、[illegible]は
[illegible]に[illegible]されて、どれだけの[illegible]的[illegible]あるかに
ある。これ[illegible]ない[illegible]に、[illegible]に、形式的[illegible]は

有し、も、本質的價値をば目的として所有する。私自身の見解を述べるならば、必要と供給、能力と理由、功績と報酬といふ三對立概念を、經濟生活、政治生活の上に實現する程度に於いて、その時代主義は異相價値を有する。けれども、經濟生活と政治生活が、生活の全野ではない。他に狹義の文化生活がある。生活の全野を通觀し、關聯する總原則は、現時の社會主義にも望まれない。その總原則は、それがありうるとすれば、吾人はそれに理想の名を與へてもよい。それの名を與へなくともよい。その總原則が、ありうるか、ありえないかは、吾人が、それを識りうる識りうるか、識りえないかによる。吾人が、それを識りうると、識りえないとは、吾人の人間の存在に依存する。其の本質的精、それは又ほかのよりも有力な内容を、吾人の生活に與へないだらうか。

「バックハウス」教授の「戰後に於ける獨逸農業政策新論」を讀む

法學博士 農學博士　高岡熊雄

一

四年有半の長き期間繼續せる世界戰爭も今や干戈漸く收まりて平和克復し、諸國何れも皆戰後の經營に頭を惱ましつゝあり。戰敗國なる獨逸が如何なる農業政策を實施して以て困憊せる農業界を恢復し、以て國民經濟の發展を計らんとしつゝあるやは、我も人も均しく興味を有するものの知らんと欲する所なり。戰時中よりして獨逸農業の事情は殆ど不明なりし關係なりしをすも之を知るの便ありしと雖も、詳細なりし其の內容に至りては遺憾ながら直接之を知るに由なく、只僅に英佛の手を經て間

片的に吾人に紹介せらるゝに過ぎざりき。而かも其の中には[illegible]を以て戦後我國に於ける農業政策を樹つる上に於て大に參考となすに足るものありと考へ、茲に批評を加へながら其の大要を紹介せんとす。[illegible]

二 農業立法の必要

本書は[illegible]に六十七頁の一小冊子に過ぎざるも[illegible]に之を十八[illegible]

[illegible]

状態と相似たり。勿論農業革新に依て現に殘れる第二の偽を繼續するが如きは不可能なりと雖も、最も重要なる部分をして健全ならしめ得可し。此の改革を實行せんと試せば種々なる困難其の途に横はる可しと雖も、然も暁には必ずや有效なる結果を見すべし。多少の不利益は須らく耐え忍ぶべし、今家屋を破壊し去るに從ふことと同じなり。今や國家存亡の繋る秋なれば獨逸民族は特化たる徒らに些々たる小事に拘泥し、或は種々なる點を顧慮し、或は時々に從りて諍論をなすが如きは禁物なり、熟考せる計畫を迅速に實行すべきなりとて先づ戰後の經濟發展として農業界の革新を計るを以て最大要義となす所以を論ぜり。

三　現時獨逸農業界の缺點

教授は自己の革新案を論ずる前に先づ現時獨逸農業界に於ける缺點を指摘せり。此れ蓋し至當なる論法にして、缺點あればこそ茲に始めて之れが革新策の必要生ずればなり。教授は此の種の缺點として土地の分配、土地の利用及び土地の收益の三項に就て陳述す。

一、土地の分配　教授の説に隨へば獨逸に於ける土地分配の狀況は概して不良ならず、英國其の他多數の國に比すれば遙に良好なり。然りと雖も地方的に之を觀察すれば、土地が兼併せられて大地主の獨占せる所あれば、土地は餘りに細分に失せざるのみなりて、土地交附し土地細分すると同じく必要なる所にては中等勞働者は農村を去りて他に移るを以て一層其甚しく、中部獨逸諸州殊に東部よりして周圍の勞働者を雇ひ入るゝの必要を生ぜり。人口は利を以て富める獨逸の農村に於ては却つて人口減少し為めに土地は荒れ、耕作と云ふ點に於ては他の地方に比べて劣れる地方を生ずるに至れり。小農の密なる地方にては少數の貧困者の存在する割合に獨逸經濟上及國民經濟上に多く、遂に現時の如く他民族の侵入を防ぐ能はずして獨逸の國籍に通籍を加ふ。中農と雖も勞力の不足を感じつゝあり。一九〇七年の職業調査（筆者云ふ是れ統計の作の誤りたらん）に據れば、農業地所有に對する勞働者の數は小農にては四十四人、中農にては二十二人、大農にては僅に十七人に過ぎざるなり。

土地獲得の際ある如く土地が餘りに細分せらるも亦有害なり。過小農は現代的農業を經營する能はず。又副業なくんば經濟上自立する能はず、土地は分割せられて交叉の狀態となりて徒らに勞力を消費し、分業少しも行はれず、農用機械の如きも利用する能はざるなり。

教授は又都人士、工業勞働者及官吏の大部分が其耕地を所有せず又之を使用し得ず、ミイツカゼルネに群集する點の大

[illegible]

きのみならず、農業農場は更に一層其の生産力を增進せしめんと努めつゝあり。此に依りて考ふるときは小農の農業は尚其の收穫を增加し得る餘地あるなり。大農中には經營の優秀なるものありと雖も又投機者流の手に歸し徒らに土地の價格の騰貴を待ちつゝあるものあり。小農經營者の所有するものあり、所有者は自己の農場内に住せず且つ無經驗なるものに之が經營を委ぬるもの少なしとせず。小農中には充分に經驗を重ねたるものあるも、一般に近代的農業を經營するに必要なる教育を缺き、收益狀態は不充分なり。要するに獨逸の農業は擧げ得べき收穫を未だ充分に擧げざるものなりと論ぜり。

以上述べたる三種の缺點を矯正するを以て戰後の獨逸が採るべき農業政策の主眼となさゞる可らずとして遂次之が政策を論究せり。

四　農業革新の一般的原則

今日まで農政改革策として主張せられたる土地及び其の他の生産手段の國有、大農場の分割及び生産強制の三者に就て極めて簡單に不合理にして且實行の不可能なる所以を說き、直ちに著者が主張する農業革新策に關する一般的原則を述べて曰く、農民は土地と密接なる關係を有し、新奇なる事柄を好まず、自由の精神は極めて強くして官廳の行動に對する官僚の干涉に反對す。加之農業經營は處々に散在するを以て官廳の發せる規則の如きも之が實施を監督することは困難にして、之を遵奉せざる場合屢起り易し。或は之に對して反對の行動をも採り得て却つて土地の收穫の減退を招くが如きことも無きにしもあらざる可し。故を以て農政改革を實行せんと欲せば、農民をして能く其の必要なる所以を了解せしめ、自から進んで其の任に當らしむるは效果を奏する所以なりとて、農業界の革新を計るには農民の自覺に待つ所大なる所以を論ぜるは吾人が雙手を擧げて贊成を表する所なり。

然りと雖も農政改革を行ふに當りては何多少の強制的手段を採るの必要ありと云へり。例へば

一、場合に依りては相當の賠償をなして土地を收用すること。土地の分配を良好ならしむる爲め殊に内國植民を實行するが爲め、或は又土地の利用及び收穫を增進せしめんとするに當り、土地が私人の手に依りて繼續せらるゝか、土地の耕作其の宜きを得ざるか、定住的勞働者を獲得し難きものあるか、或は土地建築物其の他の資本が荒廢に歸せるものあるが如き場合に當り、他に良法なきときは私有地を收用し得るの法を定むるは可なり。何となれば土地所有者は一般公衆の爲めに土地の生産力を利用

活動することと必要なれば、決して一方に偏せる施設をなすべからずと論じ、次節よりして節を逐ふて教授の革新案を示せり。

五　土地の分配一般

界に土地の面積の廣狹如何に依りてのみ土地の所有狀況を判斷するは不當にして、土質氣候其の他の事情の異なるに從ひ其の趣きを異にするは周知の事實なりとて一二の例を掲げて後ち教授の農業經營に關する分類を述べ、

一、矮農、都人士、商工業者杯に對する建築用地及菜園等を含み、主として二町歩以下の土地とす。

二、非獨立經營、主として副業として農業を經營し狀況の特に良好なるものに限り獨立の生計を營み得るものにして、經營面積は二町歩乃至五町歩とす。

一、小農、獨立の生計を營み得るものにして農場內の勞働は經營者及び其の家族に依りて一般に行はれ、經營面積は多く五町歩乃至二十町歩なり。

一、中農、他より勞力を雇ひ入るゝ必要あり。經營者及び其の家族は主として手業をなし且つ自から管理を行ふ。二十町歩乃至百町歩の經營なり。

一、大農、百町歩以上の土地を經營し所有者は主として或は全然管理にのみ從事し、又時としては之が爲めに補助者を置き、農場內の勞働は總て雇傭勞働者に任すものなりと。教授の分類は大體に於てロッシエルの分類を土臺とし、現時獨逸の官廳統計に一般に用ひらるるものと異なる所少な。此の分類に依るときは教授も農業經營と農業地の所有とを全然同一視し、獨逸經濟學者の陷れる弊に等しく陷れり。教授は一九〇七年の職業調査（筆者云ふ經營調査ならん）に依りて獨逸に於ける經營の數及び其の面積を掲げて其の適否を批評せり。

	面積	經營數
五段歩以下	一、六一九、〇六六町	二、〇八四、〇六〇
五段—二町歩	一、八七二、九三六	一、二九四、四四九
二町—五町歩	四、三〇六、四二一	一、〇〇六、二七七
五町—二十町歩	一三、七六八、五二一	一、〇六五、五三九
二十町—百町歩	一二、六二三、〇一一	二六二、一九一
百町歩以上	九、九一六、五三一	二三、五六六

此等の農業經營中五段歩以下のものは其の數二百萬に上り、平均面積三段歩にして建築用地及び菜園としては適當なり。五段歩乃至二町歩の過小農は單に手のみの勞働には大きに過ぎ、役畜を使用するには狹きに失し一般に非獨立的經營たり。二町歩乃至五町歩の經營も殆んど前者と同様にして、只園藝農業其

の[illegible]利用[illegible]する場合に於てのみ[illegible]的[illegible]たり得。要するに五段[illegible]乃至九[illegible]歩の[illegible]は一方には更に之を細分して以て[illegible]、[illegible]となすか或は之を併合して以て[illegible]すべし。何れにしても[illegible]の[illegible]は[illegible]よるもあらず。[illegible]五段[illegible]以下のものに在りては更に之を附加するの必要あるなりと。五町歩乃至十町歩の階級は面積に於ては[illegible]するも其数[illegible]一層[illegible]せず、之を増加すべし。中農は[illegible]なる[illegible]級にして一般に[illegible]すれば更に其数を[illegible]せざるべからず。[illegible]の宜しきを得ざるもの又[illegible]の不適なるものゝみには之を[illegible]するも可なり。[illegible]町歩以上の[illegible]の[illegible]に約[illegible]町歩にして[illegible]の[illegible]一を占む。[illegible]有[illegible]なるも、小[illegible]に[illegible]ては[illegible]めにも[illegible]くるのあり。之を[illegible]よりも[illegible]町歩を減少せしめ得んと。此[illegible]に於ては[illegible]なることは[illegible]する[illegible]し。[illegible]に[illegible]は[illegible]に於て[illegible]に[illegible]するには、又一[illegible]を変ふるに[illegible]さるを以て、五[illegible]町歩以下の[illegible]に[illegible]くを[illegible]して[illegible]用地成

け[illegible]園となすか或は之を併合すべしと[illegible]じ、今後一百萬町歩の[illegible]地を、割して[illegible]くべき小農の標準面積を十町歩となせるが如き、之を我[illegible]の状況に照して[illegible]の[illegible]なるものあるを知る可し。若し[illegible]に於て五町歩以下の[illegible]を以て非[illegible]なりとせば[illegible]の殆んど全[illegible]に[illegible]れ合まれん。何れにしても[illegible]を以て一の企業とし[illegible]代[illegible]を経営して以て之が生[illegible]を増加し[illegible]者の資力を[illegible]せしめんとするには、各[illegible]の面積を[illegible]せざる可からざることを常に[illegible]する[illegible]の[illegible]に反対の意見を[illegible]くものに反対すべきなり。

而して一[illegible]に[illegible]各[illegible]が一般に[illegible]する如く[illegible]界に於ては大中小農[illegible]の[illegible]々なる[illegible]が共に[illegible]んで存在するの有利なることを[illegible]て、ザクセン、ハノーヴアー州等に於て農[illegible]の[illegible]んだる[illegible]と[illegible]、[illegible]一方に[illegible]等に今[illegible]の大[illegible]中[illegible]ハンガリア及ルーメニアの[illegible]に之を[illegible]し、[illegible]には[illegible]もて[illegible]らるゝ大[illegible]の[illegible]力[illegible]たり。而して[illegible]中[illegible]に[illegible]は[illegible]ハンガリーにはルーマニアに[illegible]ち[illegible]り[illegible]べし。

[illegible]に[illegible]ても[illegible]宜しき[illegible]する地方ありとして之が實例を示し、之が[illegible]を[illegible]る[illegible]要ありとし、南部及び西部

の小農地方よりして植民者を北部及び東部に送ると共に、南部及び西部に於ては耕地整理を行つて以て中農及び大農を設くるの必要切なるものあり。國有農耕地は地方に依り一樣ならざるも概評すれば農業用地の餘り大なる部分を占めざるも、若し國有農耕地及び大農多き處にては國有地を分割して中小農を設けるは可なり。而して從來の經驗に依れば國有地は自から之を經營するより之を小作人に貸與するを可とすと。

六　土地の分割と内國植民

一百萬町歩の大地主を分割して以て中小農地と爲すに就ては、國有地及び五百町歩以上の大地主地にして自然の狀況に良好なるも經營其の宜しきを得ざるものか、農業勞働の缺乏を感じ定住的獨逸勞働者を維持し難きもの杯を第一に撰ぶ可し。内國植民は尙大地主多く中小地主の少なき地方に於て行ひ、分割すべき土地の面積及び新たに設くべき經營面積の大小の如きは勿論地方の事情に依りて異ならざるを得ざるも、教授は百萬町歩の大地主地を分割して、十町歩の小農四萬、五十町歩の中農七千及び二百五十町歩の殘餘農場一千を設くべしとせり。殘餘農場は分割せる大農場の建築物其の他の資本を利用する爲め且つ中小農に模範を示す爲めに設くる必要あり。又七千の中農を設くるは左程困難ならざるも、中農の五倍以上に相當する小農經營に適任者を獲ることは容易ならざる可し。必要なる場合には此等の農場に更に之を分割するも可ならん。而して中農一戶に對し勞働者四戶を必要とするを以て之に要する家屋を先づ建築せざる可らず。今移住すべきもの丶家族の數を平均一戶五口とし、且つ新設すべき村落に必要なる手工業者、教師、牧師、商人其の他工業者を計算するときは分割する百萬町歩の土地に總計五十萬人の人口を收容すること丶なり、一平方キロメートルに對する人口の平均密度は五十人となる可し。今後農業が一層集約となり、副業其の他製造業起り、商業、交通業、官吏其の他自由業に從事するもの增加し、人口が更に倍加するは必ずしも遠き將來にあらざる可し。而して現在内國植民を行ふ見込のある地方は概して一平方キロメートルに對し僅に十人乃至二十人の人口を有するに過ぎざるなり。

移住者が農業經營の爲めに要する資金は小農にては二萬麻克、中農にては十萬麻克、而して大農にては五十萬麻克に上るべし。此等は不動產信用を利用するを得べく、又、地代農地法に依るときは所要額を半減するを得るも、現時の國家の財政狀況にては此の種の要求は餘り多くを期待し得ずと。

以上述べたる百萬町歩の大農場分割は教授の主張する改革の

へ[illegible]しく[illegible]はを[illegible]くも[illegible]ヶ[illegible]に[illegible]く、[illegible]の[illegible]を[illegible]は[illegible]自然[illegible]ならんも[illegible]小農に[illegible]を

[illegible]に[illegible]らるゝに[illegible][illegible]に[illegible]て[illegible]なる[illegible]と[illegible]り。[illegible]して[illegible]は[illegible]より[illegible]し

よりもとの[illegible]し[illegible]べし[illegible]より[illegible]するときに、一ヶ[illegible]て[illegible]を[illegible]する[illegible]らず[illegible]其の一部を[illegible]し、後

年[illegible]のなくも[illegible]の[illegible]を[illegible]、すべきことゝなり、[illegible]を[illegible]する[illegible]には[illegible]たに[illegible]をくる[illegible]合に

[illegible]行はれたる[illegible]に[illegible]れば[illegible]の[illegible]と[illegible]と[illegible]地を[illegible]して可なり、[illegible]の土地[illegible]して[illegible]在

[illegible]し。[illegible]人[illegible]人[illegible]し、[illegible]にて

[illegible]は[illegible]べし[illegible][illegible]の[illegible]の人口[illegible]にあらざらん。[illegible]

つ[illegible]に[illegible]地[illegible]り。[illegible]地の[illegible]は[illegible]く利用し、且土地を[illegible]

[illegible]

事業の程度に應じて堅牢なるものに改築せしむるを可とすと論せり。

從來移住者委員會の行ふ國家的内國植民に於ても、亦土地取扱委員會の助力を仰ぐ個人的内國植民に在ても、地代農地購買者は土地の賣買契約後二ケ年以内に其の農場内に相當の住宅及び農舍を建築する義務あり。家屋は勿論地方の慣習及農場の大小耕作者の嗜好等に依て一定せずと雖も何れも、皆な煉瓦若くは石造の堅牢なる建築物にして木造家屋なく、小數年前余が自から實地に調査せしときは國家的内國植民にては建築費は大凡三千麻克乃至七千麻克にして最も普通なるは五千麻克なりき。又私人的内國植民にては例へばブランデンブルヒ州にては一頭の耕馬を使役する地代農地にては最も節約をなして四千五百麻克乃至五千五百麻克、二頭の耕馬を使役するものにては六千麻克乃至八千麻克の建築費を要したり（拙著普魯西内國植民制度參照。）若し今日尚斯くの如き堅牢なる家屋を建築せんと欲せば必ずや多大の經費を要し、到底疲弊せる現時の國家財政を以てしてに之を補助し能はざるのみならず、教授の主張するが如き多數の移住者を招徠するとも之が爲めに不可能に歸する恐あり。是れ教授が特に家屋の建築に注意を拂ひ、米國移住者の例に倣はんことを勧告せる所以ならん。從來獨逸にかける内國植民事業が兎角經營上の必要以上に經費を投じ、ともすれば方法を節らんとする傾向ありたるは實に余の注意をひきし點にして、教授の所謂の如きは簡なりと雖も内國植民事業の如き大事業を計畫するもの丶則とすべき所なり。

以上紹介せし所に依りて明かなるが如く、教授は戰後に於ける獨逸の農業政策としては食料の増殖を最も重なるものと爲し、之が爲めには既耕地を整理すると共に未耕地を開發して以て農耕地を増加し、農民の移動を促して以て各農業者の經營面積を擴張し合理的に勞力を利用せしめんとするもの丶如し。是れ余が嘗て我が國の戰後の農業政策の一として論述せし所と恰も符節を合するが如し。（中央公論大正九年一月號參照）。

七　農業勞働者の不足

輓近獨逸に於て商工業の隆盛に赴きし結果、從來農業に從事せしもの丶内田舍を去つて都會に移るもの多く、農業界は爲めに人口減少し勞働者の缺乏を告げ、大中農の經營は大に困難を感じたり。是に於て乎之が救濟策として外國よりの出稼勞働者を多數雇入るゝに至れり。戰前獨逸に入稼せし外國勞働者の數は毎歳百萬に上り、其の内六七十萬人は農業に從事し、多くは春季に來りて秋季收穫を終りて再び本國に歸れり。戰爭中は外國

都市に在る労働者も一時其の職を得可く、木材及び石材の如き建築材料は田舎に於て容易に蒐集し得べし。四十萬戸の家屋も決して一日に建築するにあらずして五年乃至十年間に徐々に之を建築して可なり、又現在ある建築物は成る可く之が利用の途を講じ、堅牢なる貯藏庫倉舍の如きは寧ろ之を労働者の住宅に改築し、農作物は簡易なる建物に貯藏して可ならん。新たに建築する家屋は須らく木造たるべし。又戦時中用ひたる材料例へば戦時衛戍病院捕虜收容所等の如きものを利用するは可なり。斯くの如く先づ一時的の建築をなし他日事業の基礎確實となれるの暁に於て永久的のものを建設す可し。家屋の建築に對しては土地金融協會不動産抵當銀行等は適當なる信用を與へざる可からず。田舎の社會的境遇を改善するが爲めには四十萬戸の家屋を新たに建築する外倘從來ある労働者の家屋をも漸次改築するの要あり。

二、労働者に庭菜園を供與して以て蔬菜及び果樹を栽培せしむること。

三、小麥、麥粉、肉類、馬鈴薯、飼料等の如き現物を給與する事。

四、少なくも一頭の野羊、一頭の豚及び十羽の鶏を飼養せしむること、地方の事情に依りては牝牛其の他の家畜を養はしむること。

五、場合に依りては、燃料をも給與して以て生活の安全を計ること。

六、現金賃銀にある一般の規定に基きて定むべきものなるも、特に雇主と労働者と互に能く相談して之を定むべし。而して常に物價上の關係に注意すべし。受負賃銀制は農業に於ても必要なり、多くの場合に於て日拂賃銀制より成績良好なり。賞與金及び利益分與は效果多く、殊に家畜の飼養及び器械の使用の場合に於て然りとす。理想としては労働者をして農業經營の純收益と關係を有せしむべしと。

此等の所說は從來識者の既に唱道する所又實際行はれつゝあるものにして別に新しき労働者招徠策にもあらず。而して教授が多數の社會政策學者と多少意見を異にせる點は、農業労働者をして家屋及び土地を所有せしむるの可否如何是なり。教授は田舎に於ては大農場に於ける外常時労働に從事すべき機會少なきものなるに拘はらず、今若し小家屋若くは極めて小面積の土地を所有せんか、全然近傍の雇主に依頼し假令雇主と意見を異にする場合ありと雖も僅少なる不動産の爲めに束縛せられて其の身を自由に處分する能はず、地主も亦常に労力を提供せらるるにあらずんば土地を分與することを好まず、然るに農業労働

[illegible]の生活に甘んずるものにあらず、早晩他に小[illegible]
[illegible]たらんと欲するもの少なし。此
[illegible]より[illegible]にして[illegible]の[illegible]
[illegible]に若かずとなせり。只増加の[illegible]により[illegible]
[illegible]すべき[illegible]よると[illegible]を
[illegible]にし小[illegible]任せしたるものならん。殊に一段[illegible]乃至
[illegible]有する[illegible]三[illegible]三を
[illegible]くるは[illegible]たらんと[illegible]り。
[illegible]のごとく[illegible]的[illegible]
[illegible]も決して[illegible]にあらず、[illegible]
[illegible]する[illegible]
[illegible]たるもの[illegible]。[illegible]
[illegible]る[illegible]
[illegible]

[illegible]たる可し。但農事の繁忙期には工業及林業に従事するも
[illegible]、都市人[illegible]に便[illegible]すべく、[illegible]時小学児童[illegible]
[illegible]人[illegible]に[illegible]中[illegible]あり、都市の児童に[illegible]
[illegible]自然と[illegible]を[illegible]ふる[illegible]あり[illegible]
[illegible]り。
以上[illegible]の[illegible]
に[illegible]く[illegible]、[illegible]、[illegible]
[illegible]、[illegible]し、[illegible]的[illegible]
を[illegible]し、[illegible]自由[illegible]ふべし。[illegible]
[illegible]、[illegible]
[illegible]
[illegible]

一面の菜圃を含むと共に増加物に在れる所以たり。この說を免かれず。

八　住宅及園藝地　過小農

農業勞働者問題を論ぜる教授は更に進んで國民住宅及園藝地、大農及び中小農に就き之が改良策を論ぜり。五畝步の土地あれば以て一の家族に果實及び蔬菜を供給し傍ら豚兒の如き小家畜を飼養せしむるに足る。耕作敷地と合し一段步の土地あれば健全なる住宅を構へ副業としての農業若くは園藝を營み得可く、若し住宅を二軒續きとなすか二階建となすときは其の面積を更に縮少するも可ならん。五段步までの土地は人力に依りて耕作し副業として之を利用し收益あるも、此れ以上の面積に上れば最早役夫を使役し又は他より助力を仰ぐ必要を生ず。故を以て耕作敷地及び園藝地としては一戸當先づ五畝乃至五段步を以て至當とすとは教授の言なり。斯くの如く小地積の土地を以て足れるを以て大都市のものにも之を所有せしむるは難からざるべく、小都市人の多くは住宅の周圍に庭園を有せり。田舍に於ては云ふまでもなし。然るにも拘はらず現時五百萬の都市人は不健全なる密住生活を營みつゝあり。彼等に對して小面積宛與ふるに必要なる五十畝步の土地は都市の近傍に存在すと雖も、多くの投機業者の手中に在りて以て時々之を轉賣するが故に、のゝある有樣なるを以て、此土地の一部を買收し之を其の住宅地に供するも其の價の爲めに之より妨を及ぼすことなしと言ふ可しと。

此等の問題の解決は一面農業政策に關係ありとするも、主として都市行政、市制問題に屬す。教授は都市は充分なる土地を所有して以て私人の投機を防止する必要あるも、個々の關係上之が使用法を適用することは困難なる可しとなせり。然れども都市の內若くば其の近傍に於ける雜種地となり居る空地にして一ヶ年間何等之を利用するの途を講ぜず之を空閑に放置しつゝあるものあるときは、市は之を沒收し三ヶ年間時代にて自由に之を利用し得るの權を有せしめ、而して市は自から園藝なり其の他適當なる利用法を講ずるか若くは菜園地として廉價に之を貸與するも可なりと論ぜるは住宅難に遭遇しつゝある我が國の都市に於ても參考となすべき問題なり。

教授は更に進んで現今都市の住宅問題として住宅組合、職場よりの歸休兵に對する住宅問題種々分かるゝも、都市人に對して副業として而して又有益なる休暇の休養地として小地積の土地を利用せしむることの必要に就ては世人の顧慮多くの注意を拂はざるを嘆じ、例へば六百平方米の菜園、二百平方米の休養地、二百五十平方米の花園及び三百平方米の庭ありて

蔬菜及び果實を作るときは、蔬菜及び果實を充分に供給し一[illegible]家族の消費する所のもの〻一部分を生産し、果實、蔬、菜等の如きは市場[illegible]に輸送して一家の需要に餘り、其の外毎年々千二百[illegible]の[illegible]、二十五[illegible]の[illegible]、二百五十乃至三百斤の[illegible]を得可し。[illegible]所の[illegible]の貴重たることに[illegible]中の[illegible]之を分用して餘りあり、須らく數百萬の都市人士をして小地積の土地を利用せしむべきなりと論ぜしに、食料問題の解決と共に今日の都市生活の弊害を[illegible]するに於ても大の効果あるや論ぜり。

九　經濟單位としての大農

然れども既に[illegible]如く[illegible]の[illegible]者にあらずして、大中小農にはそれぞれ便宜あれば[illegible]に利益[illegible]するを以て一[illegible]の利益なりと[illegible]すものなり。例へば[illegible]の[illegible]の如きは極めて集約的[illegible]に[illegible]小農の[illegible]する[illegible]、[illegible]作物の[illegible]、[illegible]の[illegible]良[illegible]に[illegible]物なり。[illegible]に大農は小農に比すれば[illegible]を使用すること[illegible]なく、又[illegible]料として[illegible]を使用する場合もなきを以て、其の結果都市人口の何れ[illegible]に對してより多くの食料を供給する事得可し。[illegible]に於て大農を除き中小農のみを以て満さんとするは[illegible]

の成績不充分にして國民の食料を充分に供給する能はず、且[illegible]段及び行政上に於ても適當なる指導者を雇用すること能はざるは、[illegible]數の大戰爭中ブルガリヤの實情に之を證明して餘りありと云ひ、一般的に之を言へば若し大農にして必要なる勞力を充分に供給せらる〻ときは其の成績は小農に優れりとて大農を謳歌せり。然りと雖も中小農にては必要なる場合には一日十七時間の長き勞作をも辭せざるに反し、[illegible]に於ける[illegible]者にして勞働時間の短縮及び[illegible]の値上を計りに[illegible]に要求せんか、到底大農は經營に成功せず其の[illegible]を全ふし[illegible]はざる可しとて[illegible]なる[illegible]に反對の意を表せり。中小農が過度の勞働に從事するは周知の事にして、社會主義者中には中小農が大農に比して利益あるが如く見ゆるは過度の勞働と不充分なる[illegible]〔[illegible] u. [illegible]〕の結果なりとて大に之を非難せるものあり。カウツキーの如き其の一人なり。

教授は大農には小農に[illegible]て有利にして中小農の[illegible]たり得べしと[illegible]るに、大農は能く[illegible]の[illegible]を[illegible]分に利用し得べき力を有するが爲めにして、[illegible]には充[illegible]なる資本を有するの必要あると共に[illegible]其の人を得るにあり。自作農者に[illegible]も之が[illegible]者にして小作人[illegible]者もなく其の[illegible]に當り得べく、大農が[illegible]者としては[illegible]時にも[illegible]時にも[illegible]と

共に生長し、勤勉にして忍耐力に富み世人よりして信頼を受け且つ尊敬するに値する人物たらざる可からずとせり。而して大農經營者たるには一年志願兵たり得べき普通學を修めたる後、二ケ年間實地の農業に從事し、後ち二三年間大學に遊びて農學を研究し、修業の後は更に實地に農業に從事したるものにして始めて其の任務に當り得可く、國家も亦之れが爲め任務を授與するの制度を定む可く、國有地の小作人も斯くの如き資格を有するものより採用し、內國植民に於ける殖民農場も此等の士に拂下げ、國家の必要上土地を收用せざる可からざる場合に於ても、斯る資格を有する者の經營する農場は成る可く之を除外すべし。而して過渡時代に於ける一時の便法として老農に對しては斯る教育を缺ぐも、他の條件を具備するときは之を除外とし、漸次大農經營者に對する此等の要求の程度を向上せしむべしと論ぜるは傾聽すべき所說なり。農業を以て單に手足の勞働なりと考ふるは自給自足經濟時代の遺物にして、農業は他の生產業と等しく一の企業として經營せざる可からず、現代に於ては農業は寧ろ頭腦の働きなり、殊に大農の經營に於て然りとす。

我國の農業が二千有餘年の長き間最も重要なる生產業として保護し誘導せらるゝにも拘はらず未だ吾人の期待するが如き發展を見ざる所以の一は、徒らに過小農若くは小農のみ多數にして進步せる科學及び技術を應用して且つ合理的農業を經營し得べき大中農を缺げるが爲めに外ならず。此點の如きは大中小農の割合將來の宜しきを得、大中農經營者に對しては之が適任者を出すの必要となすべしと論ぜらるゝが如き程度に於ける以外の發達せるには更に幾年に耐ふべきなり。

大農の使命は中小農の模範たるに在り。中小農に至りては目よりして事物を見るより能く理解するものなれば、大農は須らく中小農の模範に於て之を說く可し。若し斯る指導を見出し難きときは大農の經營面積の一部を割きて以て中小農を創設すべし。然るときは中小農は或は大農より良好なる種子家畜等を得、或は大農と相共同して販賣及び購買組合を組織し、或は農繁の季節には早く自己農場の作業を終へて大農に於ける勞働に從事し、或は大農に於て始めて有利的に企業し得べき農產製造業に原料を供給し或は土地改良の利益をも享受することを得て土地の生產力を增進し農家の經濟を充實せしめ得べしと、故を以て大農を維持するが爲め教授は世襲財產制に依り之を表し、世襲財產地の面積にして森林を含みて二百五十町步乃至二千五百町步を超過せざるか、財產所在地方に於ける世襲財產が大農の面積の一割以上に上らざるか、若くは五十ケ年以上之を所有して其の經營宜しきを得たる場合に於ては、世襲財產を維持し若くは新た

にな[illegible]すること[illegible]可して可なり。[illegible]して[illegible]に[illegible]して[illegible]により一[illegible]く[illegible]るよりは[illegible]に[illegible]一[illegible]せる[illegible]すべきなりと。一九一三年に[illegible]る[illegible]の[illegible]十[illegible]にして其の内[illegible]なり。[illegible]し、[illegible]%に[illegible]一之を[illegible]すれば其の[illegible]は[illegible]だ[illegible]るに[illegible]其[illegible]に之を[illegible]する[illegible][illegible]に[illegible]、[illegible][illegible]。[illegible]に一は[illegible]二[illegible][illegible]入[illegible]、[illegible]得[illegible][illegible]しめ[illegible]にて中小[illegible]の状[illegible]なり[illegible]れ。[illegible]可[illegible]に[illegible]た[illegible]たるも。今[illegible]する[illegible]く[illegible][illegible]するに出た。

一〇　中小農の[illegible]

[illegible]な[illegible]には中小[illegible]なり。今[illegible]たる中小[illegible][illegible]可[illegible]し中小[illegible]じ。[illegible]しては其の[illegible]に[illegible]、[illegible]し[illegible]しも

に於て行へる[illegible]を[illegible]せしむるに在りとせり。[illegible]一大中小農は[illegible]に於ても[illegible]に於ても[illegible]く、又[illegible]に中小[illegible]の利害を代表せしむる[illegible]め中小[illegible]三[illegible]を[illegible]くるも可たる可しと[illegible]るは、[illegible]我[illegible]に於ても[illegible]に[illegible]するに足る。中小[illegible]に比[illegible]れば[illegible]なる上に、従来の[illegible]に依ることを多く[illegible]の[illegible]化を[illegible]くることとなり上[illegible]も、[illegible]して以て其の[illegible]を[illegible]らするや否なや[illegible]の人の[illegible]何に[illegible]く[illegible]大なり。[illegible]なる[illegible][illegible]と[illegible]せ[illegible]せざる可からず。[illegible]に於一[illegible]じて[illegible]く[illegible]よりし[illegible]内[illegible]け[illegible]は[illegible]す。[illegible]り[illegible]して[illegible]ることと[illegible]ざるを[illegible]て、[illegible][illegible]するに[illegible]とす。小[illegible]を[illegible]其の[illegible]は十六[illegible]に[illegible]に女子に家[illegible]に[illegible]の[illegible]し[illegible]たく[illegible]一を[illegible]するを以て[illegible]とな[illegible]ざる可らず。若し十八[illegible]二十[illegible]にして[illegible]に於て[illegible]に[illegible]しきを[illegible]に[illegible]するを[illegible]ば其

の効果必ずや大なるものある可く、又農村に於ける農學教員及び家事科教員の如きは何れも或は學理上に或は實際上に常に小農者の師範たるべし。而して又丁抹に於ける中小農は以て獨逸の模範となすに足るものなれば、小農の子弟をして彼地に見學旅行をなさしむるか或に農場に於て働かしむる樣努む可しと。又將來の中農經營者たらんと欲するものには、小農よりはより高き教育を授くるの必要あり。一年志願兵たり得可き普通教育を修めたる後若くは農業學校を卒業したる後、實地に農業に從事し、更に少くも二ヶ年間經營其の宜しきを得たる他人の農場に一勞働者若くは役員として勞働せしむ可し。大農程度の教育に至りては特に優秀なる子弟のみを撰んで之を受けしむべしと論ぜり。

尚中小農の發展を計るが爲めには從來既に行はるゝ産業組合、農産物共進會、農産物市場、講演會、講習會、田舍の祭禮等種々なる施設を更に一層擴張し一層之を普及せしむ可く、又都市と田園との關係を密接ならしむる爲めには夏季休業中都市の兒童を田園に引受け、又田園の兒童をして都市の文化を見物せしむるは良好なる一の手段たるべしと論ぜるも、田園兒童の都市見物は其の方法宜しきを得ざるときは却つて青年を促して離村熱の甚だしからしむる恐れあり注意を要する問題なり。

二　耕地整理

獨逸の農業界に於ける一の缺點は土地の分散に在り、殊に西部及び南部地方に於て然りとなす。之が爲め醸す弊害は頗る甚しく經濟上被る不利益は恰も此合衆國、南米若くは濠洲よりして穀類を獨逸に輸入するが爲めに要する費用と相匹敵すと云へり。此に對する策は耕地整理を措きて他に良手段なしとし、教授は盛んに耕地整理の利益を陳述せり。而して耕地整理を行ふには小農に對しては社會的關係よりして村落は密居制を採り、村落には教會、學校、旅人宿、手工業者、商人の住宅等をも建築せしむべし。中農は原則としては農場内に住宅を構へしむ可く大農に於ては勿論なりと。

獨逸に於ては耕地整理事業は既に早くして實行せられ良好なる成績を示しながら尚之に倣はざるもの多きは畢竟農業者が從來の所有地に特に愛着するの結果なり。故を以て此の事業の進捗を計らんが爲め法律の改正をなすを必要とせり。現今各州の法律に依れば耕地整理を行はんとする地區内の土地所有者總數の二分の一以上にして其の區域内の土地の總面積の二分の一以上に當る土地所有者の同意あるときは、他の不同意者を強制して其の事業に參加せしめ得るの規定なるも、之を改めて土地所

有者の[illegible]分の一以上[illegible]は土地[illegible]總面積の三分の一に當る所有者の[illegible]上に於ては[illegible]せしめ得んことゝなすも可なる可しと論ぜ[illegible]は、[illegible]の[illegible]法に於て[illegible]合を設けんとする[illegible]總面積の二分の一以下にして其の區域内の土地[illegible]分の二以上にある土地所有者の同意[illegible]大なるものあり。[illegible]後に於ける[illegible]して[illegible]耕地[illegible]に[illegible]する[illegible]は[illegible]の[illegible]なり。[illegible]

數段は町村共有地の利益を認め其の面積の過大なるものゝ外は決して之を分割すべからず。耕地整理を行ふの際開墾し得べくんば成る之を耕地とし、或は之を森林地とし或は之を家畜の放牧地若くは耕作地となすか或は所有地の少なき村落のものに低價にて分賣せしめ、時勢と地方とに適應せる利用の途を講ずべしと信ず。町村共有制は中間的地主制の一とも稱すべく、我が國に此の種の土地比較的少なく且つ存せるものゝ、利用の途其の宜しきを得ざるもの亦少なしとせざるを憾みとす。

一二 其の他農技術に關する革新策

我輩は以上[illegible]せし事項の外[illegible]農業經營改良策として種々なる點につき[illegible]に因りて論議せるも、技術上に關する事柄も少なからず。之を[illegible]するは徒に繁瑣に流るゝ恐あるを以て左に極めて其の必要なるを述べん。

一 器械[illegible]農具、特に[illegible]に[illegible]一[illegible]用機械の利用[illegible]に普及せしと雖も之を米國に比すれば[illegible]を[illegible]せしめんと欲せば[illegible]は[illegible]小農と雖も更に一[illegible]の利用[illegible]可なり。殊に今日の[illegible]の爲め[illegible]せしむ[illegible]、之に[illegible]以てする必要あり。[illegible]外に[illegible]る[illegible]を[illegible]も

大に其の用を減少せしを以て農業用機械の利用の增進は亦以て疲弊せる獨逸の工業の救濟手段ともなるべしとて、耕耘、播種、收穫、精製、運搬、病虫害驅除豫防、土地改良、飼畜、生産物貯藏等種々農業作用に關する機械に就きて一々論評を下せり。而して廣く此等の機械を利用せしむるが爲めには(一)獨逸の工業が農業界の要望に適應するものを製造するを以て一の目的となすこと、(二)國家、農業教育機關及び特殊の檢査所は新規なる機械の檢査をなし又機械の選擇に關し農業者の相談に應ずること、(三)農業者は機械を使用するのみならず之が修繕をも自から行ふこと、之が爲めには適當なる工場を設け勞働者及び管理者が其の任に當り得る樣養成することを以て必要條件とせり。

一　人造肥料、家畜の減少せし結果窒分の圃は廐肥の生産量は戰前に比し少なきを以て大に人造肥料の使用を獎勵せざる可らず。經濟其宜きを得たる農場にては一般の農家に比し四倍の人造肥料を使用せり。若し一噸の窒素肥料を與へんか穀類三噸、馬鈴薯三十噸若くは根菜類四十噸を增收し得べし。獨逸の農家は須らく先づ最初に此種肥料の使用量を從來に比し一倍加し、後ち之を三倍となすべし。勿論同時に他の養分をも增給するの要あり。加里及び石灰は獨逸國内に於て自給し得べきも、燐酸の一部は海外よりの輸入に俟たざる可らず。

人造肥料を合理的に使用せしむるが爲めには此種肥料に關する特殊の智識を與へ、適當なる分量の計算及び混合をなさしむ可し。元來人造肥料の利用は獨逸化學者の唱へ出したるものなれば他の國民に勝りて之を利用するは獨逸國民の名譽たりとて盛んに之が使用を獎勵せり。

一　廐肥及び綠肥、も農産物の增收を計る上に於て必要缺くべからざるものなれども、從來現今其の取扱粗略にして爲めに年々失ふ所の價格十億麻克の多きに及べり。今後は大に之が取扱ひ及び使用法に注意し、都市排泄物の如きも用法を改善し市民に對して蔬菜及び牛乳の供給を豐かならしむべしと。

一　飼料、としては農場内に於て生産するもの、外濃厚飼料を必要となすも、戰前の如く外國よりして七百萬噸を輸入し價格十億麻克以上を支拂ふは到底現時の狀況よりして期待し難し。須らく農場内に於て蛋白質に富める豌豆類を多く栽培し早く之を刈取りて以て其の用に當ると共に、戰時中に試みたる如く代用飼料の製造を盛んならしむべし、然るときは疲弊せる工業の一救濟手段ともなるべしと。

一　飼畜、將來獨逸の農業界に於て飼畜に如何なる程度まで

[illegible]を主として頗る重要なる問題なり。[illegible]今回の[illegible]非常に良[illegible]人の[illegible]に代り[illegible]を來さしめつ[illegible]詳明す。數[illegible]日く、[illegible]國内に於ける[illegible]國内に於て生産す[illegible]人に代り[illegible]得可き程度まで之を發達し得[illegible]にいたらず。從ひ[illegible]如く人類の食料に[illegible]し得べ[illegible]飼料となし、又穀類、[illegible]蔬菜、穀物類等[illegible]一[illegible]のみ[illegible]しは主な[illegible]して[illegible]作物を栽培する[illegible]如きは[illegible]供給し其の需を得たるも[illegible]しく[illegible]作物及び[illegible]し或は[illegible]移植す[illegible]改良を[illegible]して以て其の[illegible]を計る可し。勿論[illegible]を行ふ[illegible]にツイツサ、ルツエルン、サ[illegible]なり。又[illegible]を[illegible]ときは[illegible]以て飼料となすに足る。而し[illegible]エンシレージ[illegible]の[illegible]法を[illegible]用して飼料の貯藏を[illegible]可し[illegible]飼料作物を栽培する土地面[illegible]に能く之を栽培し、輸入飼料[illegible]利用の途を計るときは飼料の問題[illegible]りては別に缺乏を來すことなく、飼畜も何もなく

[illegible]前と同一程度にまで[illegible]從事せしめ得べく、後ち進んでは更に一層之を發達せしめ得べきなり。然りと雖も今や戰爭の爲めに家畜の數は大に減少せしにも拘はらず、牛馬の如き迅速に増加せしめ得べきものにあらざれば當分の間は此邊の農業は家畜の少なき農業として經營せざる可からざるなりと。

飼畜就中家畜に對し一般に特に中小農に於ては從來穀類馬鈴薯等を多く飼料に供し過ぎたる傾向あり。此等は須らく以て人類の食料となす可し。穀類も特類を飼料として[illegible]く經營するときは食料供給に[illegible]を及ぼすを以て、[illegible]と等しく主として農場内に於ける廢物[illegible]其の他自然が自由に與ふる飼料を用ひ[illegible]ふに少量の濃厚飼料を以てすべし。飼牛に就きては牛乳の生産に重きを置くべし。何となれば同一の飼料を以て肉の生産よりはより多くの食料を人類に供給するが故なり。役畜としての馬の一部は發動機に依りて代用せられ得可く、又[illegible]作の馬匹の需要に減少せしも、[illegible]利的[illegible]を[illegible]するには從前よりも更に一層多く役畜の努力を必要とす。又牧畜業に戰時中既に幾分[illegible]に向ひしが今後も[illegible]食肉[illegible]を供給するが爲めに之が增加せしめざるべからずと。[illegible]故に飼畜問題の最[illegible]に於て[illegible]して[illegible]前に比し戰時中よくも[illegible]を使用せし[illegible]方法にて[illegible]の[illegible]と共に[illegible]下に良好なる

効果ありたるのみならず大に飼料の節約をなせり。如何となれば肉の生産の爲めには穀類に比し六倍、馬鈴薯及び蔬菜に比し更に十二倍の土地を要する爲めなり。勿論食物の味を淳くし且必要なる蛋白質及び脂肪を供給する爲めには肉並びに脂肪の必要あるも量の絶對的に必要なるは言を俟ずと我國に於ける食物改良論者が動もすれば徒らに歐米の例に倣はんとするものに對しては三省を促すに値ある議論なり。

一三　林業の革新

教授は農業の革新と共に林業の革新策をも併せ論じ、先づ一九〇〇年に於ける獨逸帝國内の森林の種類及び其の面積を示せり。

御料林	二五七、三〇二町
國有林	四、四三〇、〇九〇
部分林	一九、七九三
町村林	二、二五八、〇九〇
公解林	二一一、〇一五
組合林	三〇六、二一四
私有林	六、五〇三、三六五
計	一三、九九五、八六九

此等各種の森林中國有林の經營法は最も良好にして之を私有林に比すれば一町歩に對し年々一フェストメーター其の價格二十麻克の増收あり。ザクセン州にては此の二倍に及ぶ故を以て若し私有林の全面積を國有となすときは一億三千萬麻克宛年々より多く生産し得るの理なり。恐くは經營法の進歩と木材の價格の騰貴とに依りて此の二倍の増收となるも亦難からざる可し。今回實施せらるゝ財産徴收税に依りて私有林中國有林に編入せらるゝものある可く、且經營其の宜しきを得ざる私有林を收用し又造林し得べき荒廢地を國有となすときは國有林は約百萬町歩を増加するを得ん。之に要する經費も多額に上らずして國家の財政上餘り重き負擔ともならず又現在の機關を以て能く之を管理し得可し。此れより多くの私有林を國有となさんと欲せば莫大の資金を要す。今假りに殘りの五百萬町歩を買收せんと欲せば少なくも一町歩二千麻克を、賠償せざる可からざるを以て總額百億麻克に上り到底現時の財政の耐ゆる所にあらず。私有林の外御料林、公解林及組合林も國有となすを以て可となす、其面積五十萬町に上る可し。町村林は一般に經營も悪しからず只特別の場合に於てのみ之を國有とすべし。故を以て林政の革新策としては先づ百五十萬町歩の國有林を増殖して總面積六百萬町歩となし、模範的經營をなさば總ての林業の基礎とな

り。而[illegible]には[illegible]する[illegible]に[illegible]
[illegible]し。[illegible]大[illegible]に[illegible]て中
小[illegible]土地[illegible]ときは[illegible]土地[illegible]なすと[illegible]に
[illegible]に[illegible]土地にありして其の缺を補ふ可きなり。

一四　資本の供給と物價政策

[illegible]の[illegible]を[illegible]するに當り[illegible]
すなはち[illegible]に[illegible]する[illegible]の[illegible]なり。[illegible]
のごとくなる[illegible]も[illegible]すること[illegible]ざるべからん。
[illegible]に[illegible]して[illegible]に[illegible]するに[illegible]り[illegible]
[illegible]に[illegible]一[illegible]に對し[illegible]一千[illegible]
[illegible]なす、[illegible]に[illegible]
[illegible]なるを[illegible]の[illegible]は[illegible]の[illegible]を[illegible]な[illegible]
[illegible]ざるべからん。然[illegible]も[illegible]の
[illegible]入[illegible]し[illegible]の[illegible]を[illegible]して[illegible]
[illegible]なすには[illegible]にして[illegible]可し。[illegible]たに[illegible]
[illegible]んとする[illegible]せる[illegible]不[illegible]なる[illegible]を[illegible]
[illegible]する[illegible]計[illegible]することを[illegible]計算せざり
しもの[illegible]可しと。而して[illegible]を得るには[illegible]
円及び[illegible]の[illegible]人[illegible]に依るより[illegible]なからん。[illegible]するに[illegible]

[illegible]なりと[illegible]するこ[illegible]は[illegible]の[illegible]
[illegible]にして[illegible]不充分なる所においては永續的に確實なる[illegible]
を積み殖しとせり。是れ當然の議論なり。
而して[illegible]の[illegible]せる如き大規模の内國植民を行ひ且つ發
林[illegible]の發展を計らんと欲せば廣大なる土地及び[illegible]の資本を要す
可し、[illegible]教授の計算にては此の種の資本は大體にては普通一町歩
に付[illegible]百[illegible]小[illegible]にては[illegible]百[illegible]を要するを以て三百萬町
歩の土地に[illegible]なすには[illegible]億[illegible]の資金を[illegible]
る可からず。而して現時の[illegible]の[illegible]に[illegible]の[illegible]
の[illegible]に[illegible]すること[illegible]は[illegible]の[illegible]は[illegible]一土地
[illegible]、[illegible]、地代[illegible]等の[illegible]に依り[illegible]より
して之を[illegible]すべし。然りと[illegible]の[illegible]せらるゝ
の[illegible]に[illegible]の[illegible]より[illegible]ふる[illegible]に國家
[illegible]なり[illegible]の[illegible]をなす[illegible]にして且つ[illegible]から
ざることゝならんとせり。[illegible]の[illegible]に[illegible]界は[illegible]して[illegible]の
[illegible]する[illegible]く[illegible]なる[illegible]の[illegible]に投入するの[illegible]
まりや[illegible]ひたるたにすと[illegible]も[illegible]の[illegible]は[illegible]ならず
[illegible]内の[illegible]を[illegible]作して以て[illegible]的[illegible]力を[illegible]に[illegible]せさ
るべからざることゝ[illegible]なれば[illegible]を[illegible]して[illegible]行に努力せさ
るべからざらん。

農業革新策として教授が最後に論述せる問題は農產物の價格に對する政策なり。教授の主張する如く農業の經營をして一層集約となして耕地殊に牧草地及び放牧地よりしてより多くの生產を上ぐる爲或は又更に一層農耕地を增加せしむるが爲めにも農業經營が收支相償ふとは一大要件なり。然らずんば長く資本及び勞力を之に投入する能はざるなり。教授は之が爲めには相當の價格を以て農產物を取引せしめざる可からずと云へり。而して農產物の價格殊に植產物と畜產物との相互間の價格の關係を適當に定むるの要あり、戰爭前には畜產物の價格は一般に植產物に比して良好なりしを以て、農業者は両者の生產に力を盡し其の結果農產物の總生產及び國民の食糧供給上に及ぼせる損害は少々ならざりしとて之を非難せり。

教授の說に從へば獨逸國民の營養に必要なる炭水化物、穀類、馬鈴薯及び砂糖に依りて充分に之を自給し得べも脂肪及び蛋白質は多少不足を免かれず、之が爲めには油作物及び莢豆類の栽培を獎勵せざる可らず。又衣服原料の少なくも一部を自給するが爲めには纖維作物の栽培に必要なり。是が爲めには價格政策に依りて生產物に對して相當の價格を保たしめざる可らず。然りと雖も價格にして餘りに高きに失するときは却つて國民の營養に對して重き負擔となり、土地の價格も不相當に騰貴し益する所二三の者の不利益ともなる恐あるを以て農產物の價格は之が生產に要せし消費を引き去り相當の企業利潤を殘し得るを以て標準となすべしと。故を以て教授は更に論じて曰く國家が農產物の生產を增加せしめんと欲せば價格政策の外生產費の節約を計るも一法なり。國民經濟上より之を論ずるに前者よりは後者は寧ろ安全なる手段なり。即ち之が爲めには人造肥料燃料、濃厚飼料等を廉價に供給し、相當の價格を以て農用器具を支給し、勞働の賃銀及び資本利子の如き餘りに高きに上らさるに在り。尙農業に關する科學的研究の結果を應用するに生產の增加を確實にし、且生產費を減少せしむ可しと。教授は戰後に於ては戰時中國民が耐へ忍びたる畜產物に對する需要が急劇に增進し假令外國よりの輸入を以てするも其の價格の上騰を抑制すること能はず、植產物の價格との間に著しき差異を生じて植產物の生產增加の妨害たらんことを恐れ、戰後と雖も暫くの間は戰時中に於けるが如き食物消費の制限、農產物最高價格の決定及び徵發制度を其の儘繼續し他日を俟つて漸次之を廢止すべく又國民を教へて自から進んで畜產物の消費を節約せしむ可し。要するに國家が農產物の價格の決定上に多少干涉を試むるは一般に農業を發展せしむる爲め又教授の主張せる農業革新策を實行するに當り最も重要なる手段なりとせり。

一五　農業革新策の實行

以上は貝林教授が農業革新策として主張せるものの大要なり。教授は此等の策を實行するに當りては特に一般方則に就き一言せしく指示して之が唯一の行動に從ふべきものとし、他より強制して之を實行せしめんと欲するも利害關係者の自由的態の發動に依る成績の結果を待つべきものにあらず、政府は其一般の代表者として先づ第一に公同的努力の發展を可能ならしむることに努力し、之に關係をなすものあれば宜しく之を取去り、進んで將た之に最も價値ある計畫的活動をなすに必要なる助力をなすべし。例へば政府は其の下に在る種々なる機關、教育及び研究機關、試驗所、圖書等のものを設けて以て實際家のみならず、商工業の代表者をして該實行手段の實行に協助する如く大に全體をなすは必要なりと云ひ、又は一般に教育普及し國民何れも皆な其の任務を自覺せるが如き國民に對しては非常なる經濟政策の大本なりと言はざるを得ず。

此等の事業を實際に施行するに當りては或は法律の制定を必要とす、之が爲めには或は其適せる事項は總めて一の法律となすも可ならん或は種々執行法を制定するも可ならんも、法律の制定の爲めに徒らに時日を費す可らず、直に之を實施し得る如くし之を制定すべし。何となれば農業を經營するには之が準備の爲めに多くの時日を要すればなりと、又法律は帝國法となす可きか國法となす可きかの問題は獨逸帝國の將來の構成如何に依りて定まるものなりと雖も、先づ帝國法に依りて一般的方則を定め之が施行細則に至りては國法若くは地方團體の規定に讓りて可ならん、恰も十九世紀の前半紀に行はれたる農政改革に於てフリードリッヒ、ウイルヘルム第三世が一八〇七年十月九日の勅令を以て改革の根本精神を明かに示したるが如くなすべしとせり。其他教授は從來行はるゝ內國植民事業の事務が專門官僚の手に委ぬるゝの弊害を指摘し、革新策の實施に於ては成事を簡易にし實際的たらしめ以て其の效果を收むべしとせり。

一六　農業革新策の終局の目的

而して此等農業革新策を實際に施行して以て效果を奏せんとする終局の目的に關して教授は種々論述する所あるが今之を解剖して其の要點のある所を述ぶれば、

一、農業革新策を實行せし暁には最近三ケ年間に於ける農作物の平均の收穫の五割を增加し以て將來の輸入と相俟つ一約百億馬克の增收をなすこと是なり。是れ教授が從來獨逸及び南米地方等に於て實際試みたる結論上よりの結論にして決して空論にあら

す、必ずや之を實現し得べく、然るときは増加せる農産物を適當に分配として供給し、獨逸國內に於て優に一億人の人口を養ふに足ると。

二　此の革新案に依りて差し當り他の階級よりして三百萬人は農業界に誘致され、開墾、改良、建築等の爲め臨時に一百萬人を要し、加ふるに既に陳述せし如く引續き尚三百萬人を農業界に於て引受ることとなるを以て獨逸帝國內に於て從業者、農産製造業者、並に農業者及び其家族の從屬者を數ふるときは全人口の二分の一を占め殘りの二分の一の人口も革新案の實施の結果として其の大部分は田園的境遇の下に健全なる住宅を得、園藝として園藝を營み、作物の改良をなし且つ自然及び農業と親しく接觸する爲め種々なる利益を得ること。

三　獨逸の商工業に對し農業界が最も安全なる市場たること。農業用地一町歩に對し農用器具、補助資料、紡織品、製革品其の他の工業品並に雜貨、農業從業者及び其の從屬者の用品等を計算するときは一ヶ年一百馬克に相當するを以て耕地三千二百萬町歩に對しては六十四億馬克に上る、加ふるに漸次分業の發展するに從ひ農産物の交換益盛んに行はるゝに至り農業界は自國の商工業に對して大切なる市場となるなり。

四、三百萬町歩の土地に植民し、百九十萬町歩の森林を國有とし、國有林の農業に適する者を加入し、必要なる所有權介入を確立し、信用機關の支所を擴張し、耕地整理を行ひ、大農場を以て模範農場となし、中小農の增殖を計る爲種々なる事業を行ふが爲めには新たに數千人の役員を要するを以て行政整理の結果職を失ひたる文武官及び戰場より歸還せる軍人を採用するの途を開き得ること。

五　農業者をして獨逸國粹の衰退の防禦線たらしむること。此の革新に依りて獨逸國內に於ける農村及び農業勞働者の子弟が各自の所有地に於て豐かなる生活を營み得るのみならず、戰時中他郷に在つて異民族の爲めに虐待を被りたる同胞も祖國に歸來りて自由の地に活動して以て祖國の發展に努力し得るに至ること。

六　他日植民事業に貢獻し得ること。從來獨逸は世界の各地に於て文化の開發に努力せしと雖も之が基礎たるべき農業者を送り出さざりしを以て他國民の爲めに容易く顛覆せしめられたるも、將來は農業界に於て鍛錬したる健全なる分子を送りて以て移住土着せしめ得るに至らんと。

之を要するに農業界の革新を計りて健全にして經濟的實力に富める農業者を養成し延ては沈衰せる商工業を復興し進んでは再び植民事業を計畫し遂には獨逸帝國をして世界の強國と相對立

（三）[illegible]は戰役の主張する農業從事者の終極の目的なり。

十數年來は戰役の前後に於ける獨逸の農業從事者に就て幾々批評を加へたれば、其の大要を紹介せり。本論は元より戰後の[illegible]に過ぎざる[illegible]其の目的は固る狹隘にして、且其の規模も[illegible]なり、[illegible]戰後も決して少々ならざるにも拘らず、[illegible]十ケ年を期し主として國民の自覺と努力とに訴へ[illegible]せんとするにあり一に吾人は其の抱負と勇氣と[illegible]せざるを得ざるなり。彼らは目前の小事にのみ拘泥する[illegible]に非ず。[illegible]獨逸農業が果して如何なる[illegible]に努むるや未だ知る[illegible]者の評論を喚起し鼓く社[illegible]せしめざるべからず。

由來獨逸民族は彈力性に富める國民なり、困難に際會し頑敵苦闘をなす毎に勇氣常に百倍し能く難關を切り拔け、却つて之を以て國家發展の基となし、遂には進んで歐洲の覇者となれり。歷史は繰返すの言にして果して眞理を含むものとせば戰敗國たる獨逸が必ずや現在の窮境より脫却するの日ある可し。其の時期の何れの日たるや又恢復の程度の如何は輕々しく論斷すべき者にあらずと雖も、今回の戰勝國が戰敗國に對して賦課する賠償金の額と獨國產業の赤化する程度如何とは至大なる關係あるべし。[illegible]克復し時の欲は今や我に來たり。吾人は戰後の主張の如き根本的農業革新策が實施せられ光輝ある獨逸文化が新裝の下に再び現れ來りて世界を稱仕せんことを遙かに翼望して已まざる所なり。

（大九、一一）

大正十年度の豫算案を評す

法學博士　堀　江　歸　一

原内閣の財政策

私は從來多くの機會に於て、原內閣の行つて居るやうな財政策が何時までも續けられて行つたならば、結局、我國の財政は非常の窮境に陷ると云ふことを論述した。隨つて此內閣をして財政策の根本方針を一新させるか、若し一新させることが出來なければ、一日も早く內閣の更迭を促すのが、國家の爲めに謀つて、最も忠誠の道であると信じて已まない。隨分世間には反政府熱、非原內閣說が昂進して、政局は殆ど行詰つて居るに拘はらず、未だ內閣を倒すまでの機運に達して來ないのは、畢竟我國民の多數に財政上の智識に乏しく、財政上に於て、原內閣の演出して居る秕政其ものを理解するまでに至らない結果であらう。然し如何なる人と雖も、原內閣が此程大正十年度の豫算大綱として、近頃世間に發表したものを見たならば、此內閣の財政方針が如何に間に合せのものであり、豫算案の表裏に何等見る可き經綸がないばかりでなく、却て國民の利益を傷ける廉の多いことを認めるであらう。

固より我國財政策の宜しきを得ないのは、何も今日に始まつたことではなく、財政の困難は近年殆ど免かれ難き所であつたが、其原因は官僚內閣の、政黨內閣の方針に誤まりのあつた結果であつて、殊に政友會內閣の積極政策の如きに、國費を以て地方に政治的勢力を伸張させる效果はあつたらうが、同時に我國財政に大なる累を及ぼしたのである。原內閣の財政策の如き、要するに此政友會の傳統的方針を逐うて居るのであつて、其れが衆議院に絕對的多數を擁して居るとか、貴族院の多數派を懷柔したとか云ふやうな關係から、無遠慮に行はれ、其餘りに無遠慮に行はれた爲めに、今や之に伴ふ弊害も著しきに至つたのであつて、大正十年の豫算は丁度其弊害の多くを發露するに至つたのである。

恐慌と財政

歐洲戰爭は我國に種々の影響を及ぼしたが、其經濟上に於けるものは、大體に於て我國に取つて有利であつたと云はれやう。即ち戰爭の繼續した數年間を通じて、我國の經濟社會は非常の好景氣であつて、租稅や官業も共に收入が增加し、毎年莫大な自然增收と剩餘金とのあつた爲めに、年々の歲計を處理することも出來たし、又外國から吸收した正貨を利用して、外債を償還するを得た次第であつた。然るに今日は如何なる狀態であるか。大正九年四月經濟社會に恐慌が起つて以來――否原內閣の施政に依つて恐慌が惹起されたと云ふ方が適當であらう――而

[illegible]は甚しく[illegible]して、生[illegible]、米価下落、生糸貿易減[illegible][illegible]に、[illegible]まで[illegible]の[illegible]に陥つた。而して今日に於て[illegible]化するにも至るであらうか、殆ん[illegible]ない。然らば之れを[illegible]に居つた[illegible]、[illegible]に於て、新たな明年度の予算に於て[illegible]するの[illegible]てあるとしなければならぬ。若しも斯る不[illegible][illegible]一面に於て、[illegible]に下落でもして居れば、[illegible][illegible]に、[illegible]として之に応じて経費を緊縮させ、斯くて[illegible]のすることが出来る道理であるが、今日経済界は如何なる状態に居るであらうか。不景気は既に到来して、[illegible]一[illegible]居るが、物価は必ずしも下落しないのである。[illegible]不[illegible]に[illegible]って、物価は下落しないであらうか、[illegible]に[illegible]く描き、[illegible]なる[illegible]一個の経済的現象として、円に[illegible]以上に、物価騰貴のために、経費は増加したが、[illegible]、[illegible]に、[illegible]入は減少し、両者の不均衡を大ならしむること[illegible]、争ふ可からざる事実であつて、[illegible]一般に何として も[illegible]大なる[illegible]を加へる所以であるとしなければならぬ。而して[illegible]年度の予算[illegible]は何[illegible]吾人に[illegible]るであらうか。[illegible]して[illegible]しなれば、政府は自ら物価を騰貴させ、更に[illegible]を[illegible]し、[illegible]の結果として発生し来つた不景気の影響を受けて、財政上の困難に陥つた事実の明瞭なるものがあるのである。政府は明年度の経費を十億六千二百万円と計算して居る。其[illegible]は如く描き、此[illegible]大の経費は前年度に比較して、二億二千八百万円の増加に当つて居るが、此の内の一億九六千万円は要するに物価の騰貴に基く経費の増加であつて、純粋に新事業が計画された為めに、増加する経費は六七千万円に過ぎない。物価の騰貴が我国の財政に対することも亦甚だしとせざるを得ないが、之畢竟するに、要するに既往幾年に亘つて、原内閣が放漫な財政政策を講じた結果であつて、国民は斯る内閣の存続、放漫財政の続行に災されて、大なる損害を蒙らざるを得ざるに至つたのである。私が従来放漫なる原内閣の財政策を攻撃すると同時に、物価騰貴の勢を抑制することの必要を力説して、已まなかつたのは、要するに財政上に斯る破綻を生ずることを懸念したからであつたが、今や吾人の恐れて居つた結果に到達することゝ為つたのである。

前々期の議会に於て、憲政会に於ける一部の議員に原内閣の物価政策に攻撃を加へ、政府をして物価調節に力を致すことを[illegible]はしめたのである。然し物価を騰貴させて、世間に好景気を[illegible]にすることとは、政友会内閣の本色とする所であるから、貴族院の警告など殆ど之を顧みず、有数な[illegible]は一として[illegible]せ

られたものはたい。而して其次の臨時議會に於ては、物價問題に就て、殊に政府が往年の公約を實行しなかつたことに就て、貴族院から別に大した非難も加へられなかつた。此點等が所謂殿樣式經濟綱の悠長な所であるかも知れない。或は之を善意に解すれば、貴族院の一部議員は既に臨時議會の開會される以前に恐慌が起つたことであるし、之に次ひで不景氣が襲來したならば、物價は下落するものと考へて、政府に對して別に註文を出さなかつたであらうか。されすれば是れは貴族院の大なる見當違ひであつて、恐慌が來ても、不景氣に陥つても、物價は少しも下落せず、却つて騰貴したものすらあつて結局今回のやうに豫算案に於ける經費を膨脹させるに至つたものであるとすれば、貴族院は往年の議會の手前、必ず原内閣に對して、一言なかる可からざる次第である。

不景氣の財政に及ぼす影響

原内閣は從來積極政策を以つて、財政上の主義として居つた。又之を主義とするので、地方の　心を繋ぎ、斯くて黨勢を四方に張らんとしたのである。而して大正十年度の豫算案に於ても、四圍の形勢に依り緊縮的綱を皆くしたければならぬ事情に迫られて居るに拘はらず、積極主義の病弊は深く浸潤して、如何ともすることが出來ず、各省大臣は盛に自己の管轄下に於て、新事業を計畫しやうと試みた。其或るものは削除されたやうであるが、何分黨勢擴張の必要があるので、色々の關係から復活したものがあり、結局明年度の經費をして未曾有の巨額に達せしめたのである。經費の増加必ずしも深く意に介するに足らないとする樂觀論者があるかも知れないが、私は明年度の經費に對しては、果して確乎たる財源が備へられて居るかどうかと云ふ點に於て、大なる疑を懐かざるを得ないのである。

明年度の歳入が如何なる狀態であるだらうか、此點に就ては、今後の經濟社會を支配する景氣の良否と云ふことが重大な關係を持つのである。政府は始めから恐慌の影響を輕く見て、不景氣の如きも瞬時の後に過ぎ去つて、再び以前の好景氣を迎へ得るが如くに、考へて居る。實際の信念は兎に角として、斯る空淡たる事を確信して居る。此觀察が正鵠を得て居るものとすれば、明年度の歳入豫算は餘程有望であるとしなければならぬ。政府が歳入豫算として公表したものを一瞥すると、詰り政府は明年度を通じて、好景氣が維持され、好景氣の結果として、各種收入が増加するものと推測して居ることが明瞭である。然し私の意見を以つてすれば、我國の社會に瀰漫しつゝある不景氣が僅々三四個月の時日を以つて經過し、好景氣時代が之に代つ

[illegible]て[illegible]されないで[illegible]と[illegible]一[illegible]

[illegible]今日の[illegible]して[illegible]

[illegible]代した[illegible]に[illegible]

[illegible]は[illegible]を[illegible]

[illegible]して[illegible]ない[illegible]

[illegible]

第一種の所得税として、[illegible]に[illegible]た、現に同年度の[illegible]に[illegible]ても、[illegible]人に[illegible]六千八百[illegible]円と計算されて居る。[illegible]の[illegible]に[illegible]る一[illegible]五千六百[illegible]円に第一種所得税[illegible]法[illegible]する[illegible]の収入であって、本年度までのやうに、[illegible]ばて[illegible]式に[illegible]したり、[illegible]に[illegible]したりし[illegible]た[illegible]代ならば、或は是れだけの収入[illegible]する[illegible]ない。然し[illegible]行[illegible]法の[illegible]されて[illegible]れる為めに、[illegible]を[illegible]に[illegible]為めに、法制に[illegible]の[illegible]こ[illegible]って今日[illegible]に[illegible]なくよ[illegible]大[illegible]に計[illegible]て、[illegible]ることゝ[illegible]った、此上に今後の不[illegible]を[illegible]しく[illegible]したこ[illegible]の[illegible]であると[illegible]すれば、法人[illegible]けで、[illegible]九千六百[illegible]の収入を[illegible]める[illegible]を、[illegible]に[illegible]たない。[illegible]の[illegible]にしろ、[illegible]に[illegible]て、[illegible]いて一[illegible]の[illegible]に[illegible]一[illegible]の[illegible]収入[illegible]時[illegible]なければならない。要する[illegible]は[illegible]た[illegible]時[illegible]ば、[illegible]て、

收入が不足したならば、經費の一部分を後年度に繰延べて一時を糊塗しやうとするものであるか、我國財政當局者が豫算編成に對して、誠意を缺くことも、亦甚だしとしなければならぬ。

假に大正十年度の豫算案が議會を通過して、無事に成立したとする。而して原内閣の物價政策は依然として舊の如く、物價が少しでも下落し掛けかば、種々の手段で之を阻止して、高い標準點に保たうとする、又今度の豫算案に掲げられた事業費は十年度以後に存續する一方に、大正十一年度以後には不景氣の影響が愈々濃厚と爲つて、各種收入に減少の傾向を示し、何としても豫算面に共見積り高を多くすることが出來なく爲つたとしたならば、大正十一年度以後の歳計は如何にして收入の均衡を保ち得るであらうか。事玆に至つては、政府は増税をする外に、何等策の出づる所を知らないであらう。然も此場合の増税は原内閣が放慢な政策の下に、物價を調節することを怠り、殊更に恐慌を喚起して、不景氣を誘致しながら、財政に充分の緊縮を加へない結果として、生ずるものであつて、他に何等の意義あるを認められない。果して然らば國民は原内閣の秕政の爲めに、犠牲に供される譯であつて、之を甘受するであらうかどうか、抑も亦斯る増税の近き將來に行はれる危險を包含して居る十年度豫算案に對して承認を與へるのが正しい道であらうかどうか、私の問はんとする所である。

公債募集の影響

一般會計に於ける公債所要額は五千數百萬圓に止つて居るが、此外に鐵道會計に於て、植民地會計に於て一億三四千萬圓の募債をしなければならず、加ふるに臨時軍事費を調達する爲めにも、一億二千萬圓を募債するであらうし、本年度の未募集公債は一億八千萬圓に上るから、結局十年度に於て募集を要する公債は五億圓に達する計算と爲る。思ふに政府は到底一會計年度内に、是れだけの公債を募債し得る成算を持つまいが、尚ほ本年度に於て試みたと同じやうに、種々の手段で、機會の乗ず可きものゝある毎に、募債を敢てする手段に出るのであらう。或は世間に於ては、昨今金融市場の存外平穏であり、諸銀行の手元にも大分遊金の増加し來つたことに重きを置いて、明年度に於ける公債募集を樂觀する者もあるやうであるが、我國金融市場の實際から云へば、金融繁閑の決せられる境界は極めて少額の資金の爭奪に外ならない。若干の資金が遊んで居つて、其れが自由に民間の諸事業に供されるとか、諸銀行の手元に殘つて、金銀在高を増加するとか云ふので、自然緩慢と爲る可き金融も其れだけの資金を公債の形で、市場から奪はれたならば、

直ちに騰貴の状に向はざるを得ない次第である。私は一個の布衣として、早く公債を[illegible]し、今日の不[illegible]を[illegible]せしめたいのである。然らば之を[illegible]せしめるに就ては、何が必要であるかと云へば、如何なる方法で[illegible]下落させることと、金融を充分に緩和させることとの二つに外ならない。然るに[illegible]如何なる政策に就て、少しも確定した方針を取らない。[illegible]何時まで立つても、公債の[illegible]に就く道はないのである。更に金融の方面に於ても、現実に充分の資金を供給するに至るまで、金融が緩和されたことは[illegible]必要の條件であるが、若しも内閣が[illegible]せんとする十年度の豫算が確立して、一年内に[illegible]の公債が發行されやうとする。金融が如何にしても緩和に向へば、直ぐ[illegible]を[illegible]へて、公債が發行され、市場を壓迫せしめやうとすることに[illegible]されると云ふ有様であるならば、[illegible]を[illegible]つて公債を[illegible]するの[illegible]ないものと云はざるを得ない。[illegible]は夫れとも明年度は金融非常に緩和し、公債を[illegible]して、[illegible]を引受するに[illegible]るかも知れないから、[illegible]の[illegible]で、[illegible]公債を發行すると云ふのであらうか。如何に非常識な財政當局者と雖も、斯る計算を[illegible]することは出來ないだらうと思ふ。夫れとも非常識に於て、[illegible]の財を[illegible]する點に於て、當代第一と稱される[illegible]長や、當局是當長の常であるから、平氣で此位の矛盾を敢てするかも知れない。不幸内閣、非常識、[illegible]と云ふやうな惡評は今に始まつたことでもないが、財政家には[illegible]である。

斯う論じて來ると、私は財政當局者は實行し得る考で、大正十年度の豫算案を編成して居るのか、夫れとも實行し得られないことは萬々承知の上、唯一時の辻褄を合せる當面の役目を濟ませるだけに編成して居るのか、其何れの存する所を知るに苦まざるを得ない。政府の當局者でありながら、實行し得られない豫算を承知の上で、編成すると云ふのは、不見千萬の話であつて、世人の[illegible]に値する所であるばかりでなく、彼等自ら豫算の執行上、窮地に陥つて、世間に失態を暴露する大禍である。或は原内閣は自分で其政治的生命に見限りを付け、到底大正十年度の豫算の實行される間、局に當り得ない、議會でも濟したらば、辭職をする決心があるので、斯る實行不可能の豫算案を編成して、平然たるものではなからうか。斯うでも解釋しなければ、私は原内閣が非常識な豫算案を編成した理由を知るに苦まざるを得ないのである。

財政上の無經綸

歐洲諸國や、合衆國は數年間の戰爭に於て、夥しの軍事費を

支辨した爲め、今や財政上に大なる負擔を荷ひ、軍事公債の利拂だけでも、容易なことではない。是等の諸國に向つて、今日直に財政の改革をせよとか、戰後經營に要する施設をせよとか云ふのは、甚だ無理な註文であるが、我國の如きは、戰爭の爲めに、財政上に於て、必ずしも大なる負擔を蒙つた次第ではなく、經濟上に於ては却て有利な地位に居つたものと見られる。然らば戰後の今日に於て、政府としては經濟上に充分の施設を講じて、將來の發展に資せなければならぬ道理であるが、大正十年度の豫算案を通覽して、如何なる邊に我國力を外に發展し、又内に充實する施設が見られるであらうか。既に述べた如く、經費增加の大部分は物價騰貴に基くものであつて、新事業費として豫算に計上されるものは、極めて一小部分に止まると云ふが如き、原内閣が國策に對して、無經綸であることを示すものと云はなければならぬ。固より豫算に大した關係なく行ひ得られる經綸もないではないが、裸で道中の出來ないが如く、多くの經濟的施設には必ず若干の經費の伴ふものがなければならぬ。日本の貿易は昨今次第に逆轉に爲つて、不景氣の勢を加重して居るが、如何にして此狀勢を一變するか、又は少なくとも我國輸出品の販路を維持擴張す可きものであるか、原料品の奪取は國際間に於て益々劇烈ならんとする趣がある、而して我國

諸種の工業は多く原料品の供給を外國に仰いで居るが、如何にしたならば其供給を確保して、我國工業の基礎を堅實ならしめるを得るであらうか、抑も亦食糧の需要供給を調節し、價格の均衡を維持することは、消費者の立場から見ても、生産者の利害から考へても、共に必要とする所であるのに、豫算案の示す所では、計畫の端緒すら知るを得ない。前議會で所得稅法の改正される際には、結局稅法の全體に亘つて、改革の行はれる樣子であつたが、更に着手の模樣に接しない。或は政府は是等の問題は總て調査會の決議を待つて、決定する方針であると辯解する積りであらうが、其れでは責任の逃れ場として調査會を設けたと云ふ當初の非難に裏書を與へる次第としなければならぬ、斯の如く國家重大の問題を解決することには、極めて遲緩であり又殆ど無能力と見られる原内閣は政友會の黨勢を擴張する爲めには、存外機敏であつて、内務省所管に於て、相當の程度の下に、治水や港灣改修の經費が計上されて、少しも憚る所なきが如き、如何に原内閣の關係が事物の大小を辨別するに就て、盲目であるかを語るの資料とせざるを得ないのである。

國民思想の動搖と財政策

國民思想が日に月に險惡に流れると云ふことに就て、如何に

政府が[illegible]して居るかは、[illegible]内務大臣か、司法大臣か閣下の
小役に下した[illegible]を一読して、之を[illegible]ることが出来るであらう。私は
日本の[illegible]の[illegible]へる[illegible]して[illegible]に[illegible]つて居るもの
とは[illegible]はない。一二[illegible]を[illegible]み、又名を[illegible]らんとする[illegible]の
[illegible]を[illegible]用する[illegible]のあるのは、[illegible]に苦々しき[illegible]であるが、之
を以つて直に[illegible]民[illegible]したものとは、[illegible]められない。然
し内務[illegible]の[illegible]のにして[illegible]に[illegible]に[illegible]の[illegible]を[illegible]へもつと
したならば、何故に[illegible]を[illegible]にするに[illegible]をしないのであ
らうか。内務大臣[illegible]りに[illegible]の[illegible]を[illegible]したとか、
[illegible]のやうなものを[illegible]たと云ふことに、国民
[illegible]を[illegible]するか[illegible]られた。[illegible]ので、司法官
やら[illegible]などと[illegible]して、[illegible]の[illegible]を[illegible]ることも、
[illegible]たならば、[illegible]にあるかも知れない。
然したならば[illegible]してには[illegible]如何なるものであつて、
何ら小さい[illegible]くに[illegible]ない。[illegible]にて今日[illegible]にも必な
[illegible]であつて、[illegible]ば、[illegible]民[illegible]の[illegible]
り[illegible]するは[illegible]ば、[illegible]くに[illegible]生活[illegible]に
[illegible]するに[illegible]くないのである。[illegible]何にして、民をして[illegible]と
する[illegible]に[illegible]んぜしめるを得[illegible]あらうか。如何にして[illegible]し
て[illegible]しても[illegible]、[illegible]した[illegible]を[illegible]せしめるを得

るであらうか。如何にして国民をして自己の修養、知識、技能に
相当する[illegible]せしめることが出来るであらうか、如何に
して[illegible]、[illegible]、不[illegible]の手段で、[illegible]を[illegible]す
る者の[illegible]るやうな不公正な[illegible]を[illegible]せしめるを得るであらう
か、如何にして国民をして[illegible]の結果を[illegible]に[illegible]させて、其
[illegible]族の生活たり。又に自己の[illegible]に[illegible]つた場合の生活たりに、
保険を[illegible]へる[illegible]あるであらうか。私は我国民[illegible]に何故[illegible]
の[illegible]があるかを[illegible]、[illegible]れる人々に対して、上記の[illegible]に思
[illegible]ことを[illegible]せざるを得ない。
今[illegible]の[illegible]では[illegible]何に[illegible]居
るであらうか。[illegible]の代に[illegible]民は、[illegible]の為めに、生
[illegible]あり、不[illegible]時[illegible]には[illegible]失[illegible]不
[illegible]あり、[illegible]
[illegible]の[illegible]、[illegible]に門閥とかふやうな[illegible]代[illegible]すら
[illegible]つて[illegible]つて、人をして自分の[illegible]自由に[illegible]させることを
不[illegible]ならしめる。[illegible]分に[illegible]たないから、[illegible]に相
当する[illegible]を[illegible]することが[illegible]であり、[illegible]者は[illegible]
[illegible]に[illegible]する人々が[illegible]後の生活に[illegible]する[illegible]は全く何ものを
もあつて居らない状態である。[illegible]を[illegible]
して[illegible]いて、[illegible]であり、又[illegible]すると

云ふやうなことは如何にして求められるであらうか、私は到底其然るを得るを信じないのである。而して今度豫算案に於て、何か國民生活を安定する方策でも藏されて居るならば、原内閣の閣僚亦政治に一隻眼ありと許されるが、豫算案は其全部を擧げて、一時の辻褄を合せ、收支の均衡を無理に付けただけのものであつて、眞に國民の今日の要務として望んで居る所は充たされないばかりでなく、政策上に於ける種々の間違は却つて國民生活を壓迫して、國民思想を過激な方嚮に向はしめることとなしとしないのである。

國民生活の將來

假に日本の財政が今日の儘で進んで行つたならば、國民生活は如何なる狀態に陷るであらうか。日本に行はれて居る現代政治の形式は紛れもなく、一個の金權政治である。金權を擁する者が政治を支配し、政黨を左右して居るのであつて、如何なる政治家も、如何なる政黨も金權を離れては、一家一黨の權勢を維持することが不可能である。民衆の利害は時に蹂躙する、民衆の要求は常に拒否する、民衆の意嚮とは離反すると云ふやうな民衆を散々の目に遇はせて置いても、少數金權者階級と欣を通じて居れば、優に政權を維持し得ることは、原内閣の現狀を

以つてしても、[illegible]ことはないか、[illegible]現はれたもの[illegible]であつて、現に大正十年度の豫算案に於て、經費膨脹の一大原因であつた[illegible]、好きも、世間の好景氣を維持して、所有者階級の歡心を繋がうとする見地から、膨脹されたものに外ならない。而して斯く經費が膨脹して、收支の不適合を生じた場合には、結局如何なる方法で、收入の不足額が填補されるであらうか。明年は增稅案は提出されないやうであるが、鐵道の運賃は既に引上げられ、貸金にも增率が施され、電信料金は早く高くなり、電話料の度數制度も事實加入者に負擔を增加することゝなつた。是等の負擔は誰れの蒙る所と爲るであらうか。其多くは一般物價を騰貴させることに依つて、間接に消費者の負擔する所と爲り、又直接に料金を支拂ふ場合に、彼等の負擔を加重する。而して此消費者は數から云つて、無資者又は無資力者が多く、是等の人々が有產者と金額に於て、同等の負擔に當ると云ふやうなことは、負擔顛倒も亦甚だしい。即ち我國の財政に於ては、徹頭徹尾反社會政策が行はれて居るのであつて、國民生活は始終財政を通じて、壓迫され、又蹂躙されざるを得ない。

私の懼れる所は實に此一事に外ならないのである。

俸給生活者の位置並に運動

法學博士　河津暹

（一）緒論

近來我國に於ても俸給[illegible]問題を議する者が多くなつて來たが、勿論此問題を論[illegible]めて居る俸給者の利益を擁護し、其生活を向上せしめ、其社會に於ける使命を完うせしむる事は極めて必要なるには相違ないけれども、之と並んで[illegible]の利益を[illegible]し、[illegible]社會に於ける使命を完うせしむる事も亦必要であらう。中流階級に於ける[illegible]なる[illegible]に就ては、一般に未だ[illegible]論ぜられて居らぬらし、私として云ふ所[illegible]い樣である。其中に[illegible]ければならぬ事は、中流[illegible]定める事と、同時に上下兩階級の間に[illegible]調和し、[illegible]を如何なる[illegible]の役を果たさない[illegible]上である。

斯くの如く中流階級に極めて重要なる階級であるにも拘らず、如何なる内容を持つて居るかと云ふに、其意義に至つては甚だ漠然たるものである。學者の中には所得額によつて其範圍を定めようとして居る者がある。例へば獨逸でも資本額十[illegible]の[illegible]円より、三千円の所得ある者を中流階級と云はんとして居る。[illegible]に於ても九[illegible]乃至九千[illegible]迄の所得ある者を中流階級と云はうとして居る。其他人によつて種々標準を異にする。例へば機械的に所得額によつて[illegible]定むる事は合理的ではない。[illegible]して[illegible]ない。[illegible]同一の所得額にても、之によつて營む生活の程度は[illegible]決して同一ではない。のみならず同じ[illegible]者でも、[illegible]に依つて其結果[illegible]同じくないのは、生活[illegible]を同じうする事が出來ない。例へば官吏の俸給生活者と小賣商人の生活状態とは、同じ所得額に於ても全く[illegible]ものである。次に學者の間に於ては、例へばシュモーラーの如く、[illegible]によつて中流階級

の範圍を定めやうとして居る。例へば地主であれば五十ヘクタール以上の土地を有し、勞務者であれば二千五百馬克から八千馬克までの所得がある者、資本から所得を得て居る者であれば十萬馬克以下の資本ある者、之れを中流階級と爲さうと云ふのである。此定め方は家族の生活狀態、其社會上の地位を標準としたものであるから、前の定め方よりはやゝ正確であると云へるけれども、之れとても甚だ不完全なものである。

斯くの如く考へ來れば一口に中流階級と云ふけれども、其範圍は甚だ漠然であると云はなければならない。私は甚だ不完全であるけれども、理論上から假りに其意義を定め一寸置きたいと思ふ。勿論統計的に其人數等を擧げるが如き事は到底出來ない。私の觀る所を以てすれば、中流階級とは少くとも所謂文化生活を爲すものでなければならないと思ふ。文化生活といふ文字は、近頃多くの人に用ひられ其意義も多樣にあるやうであるが、私は極めて簡單に人間らしき生活といふ意義に用ひて置きたい。即ち其生活は單に生命を維持し、生存をして居るといふだけでは足りないで、それより以上の餘裕が無ければならない。精神的にも物質的にも相當に餘裕のある生活を爲すといふ事に解釋して置かうと思ふ。而して此文化生活を營むに足りるだけの所得を得るのには、其資本と勞力とを併せ用ゐなければならぬ階級でなければならぬ。即ち其所有して居る資本の利用のみにては文化生活を爲す事が出來ない、然し自ら勞働を爲さなければならぬ狀態に在るものでなければならないと思ふ。此文化生活を爲すに勞働を爲す必要ありや否やといふ點を以つて、中流階級と資本家階級との區別になさうと思ふ。例へば土地を有つて居る者が、今述べた人間らしい生活を爲すには、其土地を小作せしめて小作料を得るのみにては爲す事が出來ない、自ら進んで鋤鍬を執つて耕さなければならない狀態に在る階級であると云ひたい。又同じ樣な理由によつて、文化生活を爲すのに其肉體的の勞働のみにては不十分である、熟練・學識・技能等によつて初めて所要の所得を得る事が出來る階級と云ひたい。熟練・學識・技能を得るには相當の年月勞働を爲さず相當の資本を用ひたものであるから、學識・熟練等は之れ亦資本の結晶と見るも遮げない。斯くの如くに考へて來ると、文化生活を爲すには自身の勞力と資本とを合せ用ひなければならない階級であると云ひたい。此解釋は甚だ不完全ではあるが、理論上から云へば之れより以上此階級の意味を明かにする標準は無いと思ふ。私の觀る所が大した間違でなければ、此標準で中流階級を考へて見る事にする。

此中流階級に屬するものは、或る學者の云つた如く二種ある。

一つは保中的階級、[illegible]小仕著、小商人、小[illegible]は小資本家である。二には[illegible]中[illegible]業は給料[illegible]生活者、即ち官公吏の大部分、下級[illegible]者[illegible]の如き俸給の者[illegible]階級と[illegible]下級の者を除く[illegible]であるが、其には自由[illegible]なる職業者、醫師、辯[illegible]、其他之に類似の者等である。自由[illegible]業者とは一[illegible]に[illegible]、[illegible]生活者に[illegible]して[illegible]、又一面[illegible]勞働[illegible]と資本[illegible]にする自由[illegible]者の大部分は中産階級者である。[illegible]とするのは[illegible]級の[illegible]者の[illegible]しく[illegible]中[illegible]一般[illegible]の[illegible]を非にする[illegible]中[illegible]つて居るものである。[illegible]のものは[illegible]の[illegible]力なき[illegible]者、例へば[illegible]ことは[illegible]に[illegible]つて居る[illegible]に[illegible]中[illegible]立つ者ではないから、[illegible]實[illegible]ま[illegible]に[illegible]る。

打ち[illegible]中[illegible]は生産[illegible]者[illegible]であるから、[illegible]する俸給が少くても高くある事を希望する。從つて其階級の[illegible]問題は主として生産問題である。之に反して俸給生活者は消費者として[illegible]に立つて居るから、物價が少しでも低くなる事を希望して居る者である。從つて俸給生活者は[illegible]を[illegible]して[illegible]しようといふ運動を起せば、直ちに小資本[illegible]人の利益と衝突し、小資本商人[illegible]に對して[illegible]反對運動を行ふ事[illegible]所である。[illegible]中産階級の中に於ても、斯くの如くに利害[illegible]するものを包含して居るのである。[illegible]の[illegible]は一に[illegible]する。[illegible]給[illegible]者[illegible]自由[illegible]と[illegible]見ると、[illegible]く[illegible]時に[illegible]階級[illegible]である[illegible]ある。[illegible]向つて[illegible]級[illegible]である。[illegible]給生活者から自由[illegible]者に[illegible]なる者[illegible]あるし、自由[illegible]者から俸[illegible]生活者に[illegible]なる者[illegible]少くない。[illegible]から、[illegible]し[illegible]自由[illegible]獨立して[illegible]階[illegible]である[illegible]俸給生活者の[illegible]其地[illegible]に[illegible]者の[illegible]より[illegible]自由[illegible]者は[illegible]

來らぬのである。從つて自由職業者の中には其名望が甚だ高い者は大いなる所得を得る事が出來るので、中流階級でない者が可也ある。併し乍ら大部分は前に述べた意味の中流階級に屬するものであると云へやう。

(二) 俸給生活者の運動の目標

近時歐米諸國に於て俸給生活者が、勞働者の如く、種々の運動を起すやうになつて來た。我國に於ても若干同じやうな運動を起す者を生じて來たやうである。然らば俸給生活者の運動の目標は何處に在るか。官公吏の階級と社員の階級とは、其地位も收入其他も同じくないから、多少の差違はあるけれども、結局次に述ぶる三つの目標に向つて運動を起すものであると思はれる。中流階級は上下階級の間に立ちて両者の利益を調和し、社會に龜裂を生ぜしめない使命を持つてゐるものであるが、かくの如き抽象的な目的の爲に運動を起してゐるものはない。但こゝに陳る運動の目標にして之を達することが出來たならば、間接には上下兩階級の利益を調和せしめることが出來るといひ得よう。第一は如何にすれば其收入所得を增加して生活の安定を得、文化生活を營む事が出來るかといふ事である。第二は如何にすれば其地位を安固にする事が出來るか。例へば我國に近頃起つた小學校教員の組合の運動の如き、其目的は一面には其俸給を增加するに在つたけれども、一面には其の地位身分を極めて不安固なるが故に、其安固を目的とするもののやうに考へられる。之れ一例に過ぎざるも、地位の安固が運動の目標の一つである事を證する。第三には如何にすれば其生活費を減少して同じく生活上の安定を得べきかと云ふに在る。消費組合、共濟組合其他種々の方法で生活費の輕減を計るのである。此第三の目標は云はゞ消極的な目標である。自己の得て居る所得の範圍に於てよりよき生活を爲さうといふ事に、此運動に於て若干の効果が揚がるとしても、前に述べた如く、小賣商人等からの反對が起るにしても、彼等に所得を與へて居る階級の利益とは衝突しないから、此目標を以つて起つた所の俸給生活者の運動には、其上長官又は資本家階級から妨害を蒙る事は無いのである。之に反して第一第二の目標を以つて起つた運動には、直ちに資本家階級或は雇傭者階級に迫つて其權利を主張し、其地位を向上しようといふ事であるから、勿論是等の階級から妨害を加へられる事になる。恰も筋肉勞働者の運動が資本家の喜ぶ所とならざるが如きと相似て居る。故に其運動は積極的の運動と云ひたい。消極的の運動は官公吏階級と社員階級との間に差違の認むべきものが無いから後に一括して説明する事として、積極的の運動に

おいて[illegible]を區別して少しく[illegible]して見よう。

（三）官公吏の所得に關する運動

[illegible]の[illegible]に關する問題及び運動は我國に於ても[illegible]早くより[illegible]に、[illegible]等に於て世人の知つて居る所であらう。[illegible]に[illegible]しく[illegible]の[illegible]めに、組織して運動を為す[illegible]なかつたので、[illegible]として[illegible]ないけれども、[illegible]には[illegible]やゝ組織的の[illegible]になつた。[illegible]ない。

[illegible]

あるから、啻り其當事者ばかりでなく局外者即ち第三者からも、之を冷靜に研究する必要がある問題であらうと思ふ。而して其運動は如何なる形式を採るにせよ、制度の改正、法律規則の改正の問題として現はれて來なければならぬ。此點が社會階級の運動とはやゝ趣を異にする所である。

此問題には之を二つの項目に分つ事が出來る。其一は官公吏の俸給は其勤勞に對して、他の職業に從事して居る者に比して、少しきに失しやしないかといふ問題である。何ぜ官公吏の地位は、法律的に考へれば、[illegible]伴ひ、又[illegible]の如く危險の伴はないものであるけれども、其俸給は實業家等の所得に比べて少いといふ事は已むを得ないけれども、同じ地位に居る實業家等の俸給に比して其の間の餘りに甚だしくはないか何うかを冷靜に考へる必要がある。此點から見て官公吏が報酬を得て居る事にも相當の理由があると思ふ。第二には同じく官公吏の俸給ではあるけれども、其職務によつて同一でないから、其間に權衡を得て居るか否かの問題である。例へば武官と文官との間に權衡が取れて居るか。司法官と行政官との間に權衡が取れて居るか。官學の教員と行政官との間に權衡が取れて居るか。斯く考へれば其所で種々の官吏や公吏の職務に從事せる者の間に權衡が取れて居るか否かの疑なきを得ない。少くとも自ら最も權力を得

きる者であると信ずる者が、此種の運動を起す動機となつたのである。往年我國に於て司法官が増俸運動を起せる如き、或は近年學校教員が同様の運動を起せるが如き、皆其好例である。第三の問題は、現今の俸給制度は其司る職務並に地位によつて一定して居るが、其在職年限によつて大いに之を増減する必要が無きや否やである。其司る職務並に地位によつて俸給が一定して居る事は、今日の俸給制度としては蓋し已むを得ない事かも知れないが、資格等があつて他の職務に移る事が出來難いものである。斯くの如き人は自ら身分上の階級を生じ、又俸給の點から云つて大いに増加して貰ふ望かないものであらうかといふ事になる。例へば文官高等試驗に合格しない所の者は、高等官として立身する望は無く、終世屬官として同じやうな職務に從つて居なければならぬ。其結果は不平となり怠慢となり、能率の減退となる。現に我國に於ても諸官廳に於ての狀態を見ると、高等官と屬官との間には截然たる區別が立つて居る。一つは支配階級として立ち、一つは支配せらるゝ階級として立つといふ狀態である。又普通の事務官と技術官との間に於ても、或程度までは斯くの如き區分を生じて居る。世の中の學閥の攻撃とか法科萬能論の如き、若し其論の中に相當なる理由ありとすれば其原因は此處に在る事を注意せねばならぬ。而して上に昇つて行く事の出來る試驗のある者でも、上級官に缺員がなければ昇進する事が出來ない。從つて場合によつては自己の最も熟れて居る事務を捨て、全く不熟れな事務に携つて以つて昇進しやうとする者などが少くない。斯くの如きは極端かも知れないが、大體から云つて一定の職務に長く止る事を欲しないで、其職務に熟れない中に他に轉じ行かうとし、轉々彷徨するは獨り我國のみでなく、同じ制度を取る處に通有な現象であると云ふことが出來る。此の事は一面から觀れば相當に弊害のある事で、十分考慮を要すべき問題であると思ふ。然らば其の司る職務を動かさずして、其就職する所の年限に應じて、少くとも或程度まで俸給を増加する制度を採用すれば、前述の俸給制度の弊害の一部分は之を除く事が出來るけれども、一面から云へば、此制度にも亦弊害が伴ふ。此制度によると自ら俸給總額が増加し、財政の膨脹を來す弊がある。然し此弊はまだ忍ぶとして、此制度によると新陳代謝が行はれ難い事である。無能の者が或地位を占めて終へば容易に之を動かす事が出來ない。又其地位が動かされない結果として、種々の弊害が生ずる危險がある。故に俸給制度は如何に改正すべきかは餘程難しい問題であるに相違ない。けれども或程度までは、此兩制度を併用斟酌したら改善せられ得ると思ふ。獨逸邊りに於ても此種類の運動を起したやうであ

る。其結果として一千八百九十二年同様從來の俸給制度に若干の改正を加へたるに過ぎないのである。俸給制度については[illegible]問題並に[illegible]動の目的は斯くの如きものである。之に關聯して所謂俸給制度の問題もあるが、此等は次節に於て[illegible]して居るから省略する。

（四）官公吏の地位に關する運動

行政[illegible]多くの者は、自[illegible]上は此[illegible]にはならぬが、[illegible]までも長[illegible]の[illegible]によつて[illegible]せらるゝ事さへある。從つて其地位の安[illegible]といふことは云へない。官公吏の内に於て自分の地位を得るに[illegible]爲めに[illegible]で、不當の理由によつて罷免されないやうにする運動に[illegible]て居つた。此[illegible]に[illegible]下[illegible]の[illegible]員といふやうな[illegible]、[illegible]い者に[illegible]一[illegible]に[illegible]せらるゝのである。小學校教員の如きは、[illegible]に[illegible]て[illegible]地[illegible]なべきもののやうに思はれる[illegible]。[illegible]學官[illegible]たしきに[illegible]ば[illegible]、[illegible]の[illegible]によつて罷免せらるゝ[illegible]あると云ふ。さなきだに地位の[illegible]い[illegible]其[illegible]に[illegible]べきものであるのに、更に其上に[illegible]へば[illegible]の中に[illegible]の[illegible]があり、之に對して[illegible]を[illegible]ぐ時は父兄から[illegible]みを買ふ一[illegible]せらるゝといふ例は往々我々の耳にする所である。如何に柔順なる小學教員に於ても、其地位の不[illegible]を[illegible]慨せざるを得ない。此種の運動を起すに至るも又已むを得ざる次第であると云はねばならぬ。又官公吏の中には終身官といふのがある。一方に於ては新陳代謝の作用が行はれず、其者の地位の安固は大に賀すべき事であるが、能力の減退となり、下僚の者の不平となつて來る。茲に於て、是等老朽者の爲めに進路を遮げられて居る階級をして種々の運動を起さしめるのである。

以上に官公吏の[illegible]の問題の[illegible]を掲げたのであるが、以下社員階級の俸給並に身分の問題に移つて、簡單に之を論述しよう。

（五）社員階級の俸給並に身分に關する問題

社員階級の俸給に就いて言ふべき範圍に、何[illegible]の[illegible]階級[illegible]はない。[illegible]の社員階級は其俸給[illegible]官吏と[illegible]すれば、其俸給に於ては[illegible]て[illegible]得とある。其地位も不安固である。[illegible]はゞ[illegible]階級で、よしんば[illegible]ないまでも少くとも之に近いものである。[illegible]し[illegible]れば[illegible]は[illegible]階級としては、主として中以下の社員に關してなさるゝ問題である。

社員階級の運動に[illegible]觀察すると、從來[illegible]に[illegible]れた所から

云へば、俸給問題よりは身分の安固問題の方が寧ろ重要なる地位を占めて居るやうである。勿論中以下の社員の位置は決して豊かでないのみか、其下級の者に甚だ薄いのである。是等の豊かでない者の地位は筋肉労働者と類似するものである事は前に述べた。此社員階級の多くの者と筋肉労働者とを比較すると、前者の後者に優つて居る點は、資本家又は雇傭者との間に人的関係がある點である。(而して其関係は初めは無いけれども、後には生じて来る。)従つて資本家階級は彼等を優遇し、彼等も亦資本家階級に信頼する者が少くない。加之、彼等の一部分は責任ある地位に置かれて居り、功罪共に現はれて来るものであるから、業務を為す上に於て興味が多くある。のみならず彼等の中に於ては資本家階級に上つて行く者もある。是等は大體に於て労働者階級と比較して優る點であるけれども、此等の點は社員階級の全部が實現し得べき事でなく、僅に其一小部分のみが實現し得べきものなのである。謂はゞ彼等の多數は、此の資本家になれるといふ可能性に誘はれ迷はされて、而して生活をして居る者と云つて可い。即ち社員階級の多數は労働者の境遇を脱する事が出来ないのである。否、労働者の境遇を脱する事が出来ないのみならず、俸給生活者の常として、物價が高まるのに、之に順應して俸給が増加して行く事が出来ない。筋肉労働者に於ては物價が高まるに伴れて賃銀が増加するから、此點になると労働者階級の方が寧ろ俸給生活者よりも勝つて居る。且又社員階級の多數は知識階級であるから利害の念に非常に明かで、團結力が少く、従つて微力で、却つて筋肉労働者に比して資本家階級から壓迫を受ける危險が多い。加之、教育の普及せる今日、社員階級の大部分はさまで特有の技能も有たない上、社會主義者の所謂 Reserve army が多いから、資本家階級又は雇傭者階級は、自由に之を取換へる事が出来る。故に此階級も表面に我々が考へる如く優つて居る階級ではないのである。然らば我國に於て學校を出た者が今日爭つて此階級に入らうとするのは寧ろ怪しむべき事であると思ふ。之れ畢竟教育を受けるといふ事は職業を得るが為めに為すといふ者が多い事と、自ら事業を起したり自由職業者となるには危險の伴ふものがあるから、寧ろ此階級の比較的容易に生計を立て得る道を選ぶ事とに據るので、難きを捨てゝ易きに付かうとするのである。併し乍ら大局から考へて、教育あり知識ある青年が爭ふて此階級に入らんと望むは、果して選ぶべき傾向であるか何うかは大いに研究すべき問題であらうと考へる。

それは兎に角として此社員階級の俸給が餘りに豐かでない所から増俸運動を起す者が生じたのである。社員階級の俸給と官

人[illegible]の俸給上の[illegible]は、官公吏の俸給が經濟社會の景氣不景氣によつて影響を受けないに對し、社會階級の俸給は之によつて影響を受くる事少くない點である。例へば不景氣になれば減俸せらるべき者が出來ず、手當を受くべき者が受けずして、賞與の收入が減ずる。故に歐羅巴に於ける社會階級の此種の選擇を爲す者の中には、物價の騰落によつて俸給を上下すべき事を主張した者もある。又甚だしくなれば、其俸給の多少は企業の利潤の多少に關係するから其利潤をして企業の經營に與からしむべきを主張する者もある。

官公吏の如く[illegible]社會階級の事情に依るよりも身分の安固問題に[illegible]重要なる問題がある。此等階級の身分の安固の程度は官公吏より遙に低い。民間の勞働者と相似して、經濟界が不況に陷ると[illegible]の[illegible]を受ける。其解職休職等の處置によつて[illegible]する者も亦少くない。[illegible]の[illegible]又は其[illegible]の如くべき上官に、多く解職休職者、處置によつて決定せられる狀態に在る。此點が社會階級が[illegible]不安な點で、恰も筋肉勞働者の如くに[illegible]して相つ事になるので、其運動を起す事情に近[illegible]にせねばならぬ。

（六）解決方法

積極的方面に於て俸給生活者階級の地位並に運動の性質は略ぼ前述の如くである。其要求は、上に述べたる範圍に於ては、大體に於て合理的である。然らば如何にして是等の要求を容れ、之れの救濟を爲すべきかは餘程難しい問題である。簡單に云へば、上級官或は立法家或は經營者が是等の事情を審かに研究して、事情大いに諒とすべきものがあつたら同情を以て其の要求を容れ、事情の許す限り其制度を改正する事が上策と思ふ。併乍ら官公吏の場合に於ては法律規則の改正であり、財政上の犧牲であり、種々の故障があつて容易に實現出來ない事も亦之を諒とせねばならぬ事柄である。社會階級の方は之を實現する事が比較的容易であらうが、之れとて在來經營者が物分り[illegible]と事を行ふ前途がなければ、容易く之を實現する譯には行かないに相違ない。要は輿論によつて此等上級者・資本家階級・立法者・經濟者の反省を促し、進んで之をなさしむるに由るの外である。輿論といふても多くの社會的な力の無いものではない。此點からでもあらう、或・評論に於ては、社會主義の運動に參加して其主張を唱へ、不當の壓迫を排し一面は[illegible]目的を達しようとする者が生じた。此點に就て、我々には[illegible]らない事であるが、注意すべきは俸給者階級が此利益を擁護する爲めに組合を作るべきかどうかといふ事である。之れには組合を作るに困難な事情が幾分か

ある。一は俸給生活者階級には幾多の階級があつて利害の念が一様でない。或る一部分には資本家階級になる望を有つ者さへある。從つて階級意識が明瞭でない。二には此階級に屬する者は利害を見る事が明かであるから怯懦である。強力なる組合があり、それに入らねば損であると感じた場合は兎に角、然らざる場合には濫りに他の煽動によつて容易に附和雷同するものではない。我國に於ても俸給生活者階級をして一の組合を作らしめやうと試みた者があつたが、所謂社員階級の者は之に共鳴して參加しようとした者が甚だ乏しかつた。勿論運動も其宜しきを得ず、其目的も明瞭でなかつた事も事實であるが、主なる理由は今述べたやうな點に在るのではなからうか。之には尙ほ上長官・資本家側が此種の團結の生ずる事を好まず、百方之に妨害を加へる事も與つては居るが、假りに出來ても其手段は穩和的であるから、其團結力も弱いのが常であらうから破壞さるゝ危險も多いのである。斯く組合成立の困難なる事情はあるが、漸次彼等の間にも團結を作るに非ずんば不利益であるといふ思想が起れば組合が成立するであらうと思ふ。現に歐米諸國にも晩近此種の組合が盛りに起つて來た。然るに我國に於ては筋肉勞働者の間にも尙ほ組合の運動が甚だ微力でもあるし又皆無とも云へない。故に、俸給生活者の如き者の間に此種の組合の起り難い事は我々も想像するに難くない。併し乍ら上にも述べた如く、折に觸れ時に臨つて此種の組合の生ずる萌の見えて居る事は明かであるから、歐米諸國の如く將來此種の組合の出現は不可能の事ではないと思ふ。

然らば此種の組合が起るとして、勞働者の組合と握手するであらうか。理論上から云へば此種の組合も、自分等も亦勞働者であるといふ自覺から成り立つて來たものであるから握手する理屈である。歐米の實例に見ても握手して居る。併し乍ら私の觀る所では、假りに我國に組合が生じても、勞働者の組合と共同するに至る事は近い將來には生じないと思ふ。其理由は我國の俸給生活者には、筋肉勞働者とは社會上別種の地位に在るといふ誇りが強く、且つ筋肉勞働者並に其組合は何と云つても今日尙ほ低級の域を脫して居ない。故に兩者の握手は近い將來には起らない。若し俸給生活者の階級意識がもつと明瞭になり、又筋肉勞働者の地位並に組合がもつと發達したならば、兩者は握手するかも知れない。

（七）俸給生活者の消極的運動

私は割合に多く俸給生活者の積極的運動に就いて述べたが以下消極的の利益即ち生活費を減少して生活上の安定を得る運

動に就いて簡單に說する。蓋し此運動は上長官憲の迫害を受けないのみならず、却つて奨勵を受くる程度に在るから、歐米諸國に於ては勿論、我國に於てもいろ〳〵な方面に現はれて居る。

然らば如何なる種類の運動が此方面に起るかと云へば、第一には共濟組合式の運動である。即ち組合員の中に於て疾病不幸其他のもの[illegible]には、其規定によつて一定の金員を支用して、[illegible]の爲めに生活の困難を生ぜしめないようにしようといふのである。我國に於ても此種の運動は可也に行はれて居る。[illegible]用する金額が[illegible]くないから、従つて好く[illegible]が[illegible]つた時、組合が之を用する[illegible]もさう多くある[illegible]には行かない。従つて組合が起つて來た目的を達するに於て[illegible]のいものであるや否やは[illegible]の場合が少くない。第二の運動は消費組合の運動である。[illegible]が[illegible]り、日常の生活品を[illegible]的[illegible]に得るの途を開く事である。之を我國に[illegible]ても諸外國に於ても相當に起つて居り、殊に諸外國に於ては其成績頗る見るべきものがある。第[illegible]運動は共濟組合にやゝ似て居る附近組合又は信用組合と稱すべきものである。其組合員に於て疾病其他の事由によつて[illegible]の金員の必要が起つた時、之に融通して其目的を[illegible]せしめる。共濟組合の場合には其支用すべき金額に制限があつて目的を達するに困難であるから、其缺點を補ふ意味に於て起つて來たものであると見る事が出來る。其他俸給生活者が自家の生活改善に關する途を講じたものもある。種々の方面に亘つて其消費經濟を抑制[illegible]して、以つて生活の安定を得んとする運動である。又やゝ積極的のものでは外部的にも及んで居る運動に物價に關する運動、即ち物價[illegible]に關する運動を起した者もあり、商[illegible]經[illegible]の變化に關する運動を起した者もある。[illegible]種々な方面に亘つては居るが、就中最も直接であるものは上述の共濟、消費並に[illegible]に關する運動であると思ふ。

[illegible]運動の性質として、之を仔細に調べて行くと、結局其運動が成[illegible]するや否やに[illegible]の良否如何によつて定まるやうである。[illegible]人を得ないと、[illegible]目的を[illegible]する事が出來ないのである。故に此[illegible]の運動は主として[illegible]否の問題に關係して居ると云ふ事が[illegible]つては[illegible]の運動の[illegible]に就いて[illegible]ねばならぬ[illegible]、これに[illegible]問[illegible]を[illegible]すものであるから[illegible]日に[illegible]つて[illegible]きたい。

新議會主義を提唱す

永井柳太郎

（一）

世界の大勢に順應すると云ふ事が近頃の流行である。人の思想を批判するにしても、理否と云ふ事よりは寧ろ新舊と云ふ事に重きを置くのが一般の傾向となつて居る。併し世界の大勢が果して如何なるものなるかに就いて、充分なる理解を有するや否やは、頗る疑問である。只先を爭ふて歐米に於ける讀書界の流行を追ひ、其新刊書を翻譯する事を以つて能事了れりとする輕跳浮薄の跡が無いではない。顧ると日本國民は戰前爭ふてオイケンを研究し、ベルグソンを讀み、タゴールに憧憬した。戰爭になつてからも一時獨逸の優勢な時には、トライチュケの軍國主義哲學に集り、終り頃獨逸が疲弊して聯合軍が勢力を得ると共に、何時しかウイルソンのデモクラシイを謳歌した　それがウイルソンの講和會議に於ける失敗の暴露せらるゝ頃から、マルクス全盛となり、ウイルソンの根本思想とは正反對であるマルクスの唯物史觀に随喜した。而して其マルクス崇拜も昨今は漸く極端となり、遂に無產階級獨裁政治の思想に耽る傾向となつたらしいが、然も之等の新舊思想の歡迎は、自己に一定の人生觀及び社會觀ありて之を取捨選擇したるに非ず、主として夫れが歐米の讀書界に於ける流行なるが故に、之を直譯するのであつて、其間に系統も無く、又十分の咀嚼も無く、恰も市井の子女が其時々の流行唄を歌ふに似たるものがある。所謂世界の大勢に順應すると云ふ事が如斯きものを意味するに過ぎぬとすれば、それは畢竟するに思想上の事大主義に外ならぬ。

假令世界に於ける一般思想の傾向であるとしても、それが自己の人生觀に反し、日本社會の要求に悖ると思ふ場合には、斷然反抗する程でなければ思想の進步は不可能である。希臘に於てもソクラティスが出る迄は、世界の發生した原因とか、世界を

[illegible]する[illegible]が、世界の存在する目的とか云ふが如き問題のみならず、[illegible]と云ふ事は[illegible]の流行となつて居たのである。併しツァァティズムに[illegible]になつた。そして世界を研究する[illegible]、自らを[illegible]、自己の存在の如何なるものかを知らざれば、いかで世界を知るを得んと論じ「[illegible]目的を[illegible]を云へたではないか。しも、十八世紀に至りて、[illegible]思想、[illegible]一の人心を[illegible]。[illegible]として[illegible]人の生活にも[illegible]にし、[illegible]化し、[illegible]自由[illegible]なる[illegible]する[illegible]を生じた。然にルッソー[illegible]に[illegible]し、自然の[illegible]なる人生の[illegible]し[illegible]に[illegible]化し[illegible]んで立つた[illegible]人に[illegible][illegible]する[illegible]た、[illegible]した。[illegible]である[illegible]ふ事のために、自己の實[illegible]存在するを[illegible]ないで、たゞ[illegible]と受入れる[illegible]あつて、[illegible]に自己の存在の[illegible]し、[illegible]に[illegible]ない。

（二）

[illegible]に、[illegible]たにあらず、今[illegible]ける[illegible]と為つた、[illegible]り

世界の大勢と云ふ程ではないけれども、現代政治思潮の一主潮となりつゝある事は争はれない。レーモンド・ロビンス大佐は米国[illegible]主義を代表して露国を訪ひ、帰りて米国聯合議會の上院[illegible]自宅に臨み一介にクレムリン宮殿に於てレーニンを見たり。レーニンは露国革命の創造を成就し、ロシヤ人は未だ資本主義の[illegible]を摘出に[illegible]じ得る程度に資本主義を知らず、又社會主義[illegible]、如何なるものたるかを理解するには其智識余りに幼稚なり。故に露国革命は恐らく失敗に終るべしと雖も、然も露國に發したる革命の精神は、露人を[illegible]後にさるも、将よく露國の外に[illegible]出でゝ、ヨーロッパ諸国を[illegible]くに至らんと云へり」と報告して居る。ロビンス大佐のレーニンに會見したるは、一昨々年の事であるが、其後の形勢を観ると、露国革命はレーニンの[illegible]したるよりも更に[illegible]るべき[illegible]を以て發展し、今や露國々内に於ても、[illegible]の[illegible]には、デニキンも、ユーデニッチも、コルチャックも、セミヨノフも、ランゲルも相次いで倒れ、実質上に於て、露国は殆ど[illegible]に統一せられたる観がある。

然して露国に於ける[illegible]の[illegible]に直面すると同時に、欧米諸国の共[illegible]者やサンヂカリストに、希望や[illegible]を與へ、其[illegible]を[illegible]しつゝある事は争はれない。[illegible]の社會主義者の猛烈[illegible]として知られた[illegible]の[illegible]、千九百十九年正月

の總選擧には、其得票數未だ二百卅萬を出でず、僅かに廿二の議席を占むるに過ぎなかつたのであるが、昨年六月の總選擧に於ては、一躍して六百萬に垂んたる得票を收め、八十一の議席を贏ち得たのである。獨立社會黨が果して露國の過激派と提携し得べきや否やと云ふ事は久しく疑問となつて居たが、昨年十月十二日より十七日に亘り、ハルレに開かれたる大會に於て、論戰五日の後、遂に露國の過激派と提携するに決し、愈々第三國際社會黨の本性を現はすに至つた。嘗てカール・リープクネヒトの率ひたる所謂スパルタクス・グルッペは今共產黨と稱して居るが、之も昨年六月の總選擧に於て四十三萬八千餘の得票を集め、二個の議席を占めたのであつて、之等の事實に徴しても、獨逸に於ける無產階級獨裁政治の思想が如何に重大なる勢力となりつゝあるかを想像し得る。現にウィルフレッド、ウォルロック氏の如きも、最近獨逸の觀察を終へて歸り、昨年十月號の「社會主義評論」に其觀察より得たる感想を載せて居るが、其中に於て「予は獨逸の全般に亘り充分の研究を遂げたる後、獨逸の赤化は奇蹟の行はれざる限り豫防し能はざる事を確認したり」と云ふて居る。伊太利社會黨も昨年十月三日の理事會に於て、五對七にてモスコーの過激派と提携する事を決議した。伊太利の勞働者が昨年八月より九月に亘り約三百の金屬工場を占領し、自ら委員を擧げて其經營を掌握せんとしたるが如きも、其根本精神は露國の勞農委員制と同様の自覺に存したることは疑ひない。英國に於ては昨年十二月十一日ロンドンに於て開かれたるスペシアル・トレイド・ユニオン・コングレスに於て、勞働者は一・〇一五・〇〇〇對三・七三二・〇〇〇の大多數を以て直接行動に反對の決議をしたけれども、然も其前途を樂觀し能はざる事は露國のソヴィエットと共通の理想を有する所謂ショップ・スチュワード・ムーブメントが次第に勢力を張り、勞働組合中最大なる炭坑夫組合、鐵道從業者組合及運輸從業者組合の如きも亦、總て生產機關の國有を主張し、結局之を勞働者の組織する委員會に依つて經營せんとする事を目的とするに依りて明かである。其他歐洲内に於けるサンヂカリストも、米國に於けるI・W・Wも總て勞働者の產業自治を理想とし、議會政治に依らず、直接行動に依りて其理想に到達せんとする事に於て一致して居るのであるから、無產階級獨裁の思想が今や世界政治上に於ける重大事實となりつゝある事は爭ふ事が出來ない。

顧るとナポレオン戰爭後の歐洲と世界戰爭後の世界との間には、頗る興味ある類似がある。ナポレオン戰爭に於て、英國、普魯西、墺太利、及露西亞等の歐洲各國は、其聯合せる力に依りてナポレオンの率ひたる佛蘭西の軍隊を征服する事は出來た

[illegible]カール・マルクス[illegible]

[illegible]

[illegible]、[illegible]を利用して、或は[illegible]マンスクの[illegible]より、[illegible]にツァーリャの[illegible]より[illegible]、[illegible]に[illegible]め[illegible]らず、[illegible]を以て、[illegible]にさるに至つた。[illegible]に[illegible]すと云ふ[illegible]、[illegible]に入[illegible]はない。

（三）

[illegible]もなく[illegible]サンヂカリストには[illegible]に同じでない、サンヂカリストは[illegible]し、[illegible]に於ける[illegible]せんとするに反し、[illegible]すけれども、[illegible]を[illegible]し依然として[illegible]関係[illegible]に[illegible]つて居[illegible]けれど[illegible]には[illegible]カール・マルクスの[illegible]の[illegible]に於て一致して居[illegible]のサンヂカリズムの[illegible]ジ・ソーレル[illegible]に[illegible]してマルクスに[illegible]る者に[illegible]す。[illegible]つてマルクス[illegible]なり[illegible]に、レーニン[illegible]マルクス[illegible]であつて、[illegible]に[illegible]一[illegible]に[illegible]に於ては、[illegible]と[illegible]て居るのであつて、[illegible]に[illegible]

れば、今日の議會政治は畢竟するに有産階級の階級政治である。其議員は多く有産階級、智識階級の代表者で、無産階級、勞働階級の代表者ではない。然るに社會の眞の生産者は有産階級、智識階級でなく、無産階級、勞働階級である。然るに此の生産者を眼中に置かざるが如き政治は、眞に健全なる文化を生み出すべき政治でない。假に無産階級、勞働階級が幸にして議會に少數の代表者を送る事が出來たとしても、立法的手段に依つて自己の理想を實現せんと欲せば、議會に多數を制しなくてはならぬ。然し議會に多數を制するためには、勢ひ資本家階級に屬する他の黨派とも提携しなければならぬから、眞に勞働階級の理想を大膽に實現し得べき場合がない。若し社會主義者中、穩和派の如く、強て自我を沒却して他と妥協し、僅に其主張の一部分の實現のみを以て滿足するとせば、之れマルクス主義の墮落にあらずして何ぞと云ふのである。第二に彼等は如何に主義又は學說を同じうするとも、勞働者に非る者と共活動を共にする事を拒むのである。同一の階級に屬するに非れば同一の利害關係を理解し得ない。從來の社會主義者は、自己と主義又は學說を同うする者は、學者でも、新聞雜誌記者でも、政治家でも、軍人でも、總て之と提携して所謂運動の擴張に努めたけれども、同一の利害關係を有せざる者が、最後迄生死を共にして徹底的に戰ふ道理がない。故に勞働者の團體は勞働者自らにて組織すべく、同一の職業に從事する勞働者のみを以て勞働組合を組織し、其組合が各々其職業に於て産業自治を計るべしと云ふのである。第三に彼等は國家社會主義に反對する。假令現在の資本私有主義が顚覆せられ、土地及資本を國家の所有に移すことゝなるも、之を支配又は管理する者が政府の官吏とか、又は議會の選擧したる委員とかである間は、眞に産業自治の理想を實現する事は出來ない。官吏と勞働者の關係は、恰も今日の私立會社の重役と雇人との關係の如くであるに相違ないから人間が人間に命令し、其膏血を絞り取る惡弊は決して消滅しない。故に總ての土地及資本は眞の勞働者のみを以て組織せる勞農委員會の所有に移し、勞農委員會をして勞働者自身の欲する如く之を經營せしむべしと主張するのである。現に露國に於ける中央及地方のソビエット即ち勞農委員會の組織を觀ても、總てそれが此思想に基きて組織せられて居る。即ち第一に生産的にして社會に有用なる勞働に從事して生活する者、第二に、勞働者の家庭に在つて勞働者を扶くる者、第三にソビエットに屬する海陸軍の兵卒、第四に前條の孰れかに屬する者にして正當なる事故のため勞働能力を失へる者が、十八歳以上に達した時に、其の男女を問はず、宗教の如何を論ぜず總てソビエットに其代議者を

實行する權利を有するのであつて、如何にして勞働者の代表者のみを以て組織せられたソビエツトが、其欲する如く生産機關を運用し、其生産物を分配するのである。此等の點に於て勞働組合とサンヂカリストとは大に共鳴する所があるので、今や歐米の何れの國に於ても提携し、共に議會政治を否認して、直接行動を宣傳し、以て無産者獨裁の理想を實現せんとする事に協力しつゝある。現に[illegible]の首領たるレーニン、チノヴィエフの如きも、千九百十九年九月一日に發表した同黨宣言の中に於て「現代政府に於ける最も重大なる事物は政治的ソビエツトが之を決定するにあり。ソビエツトの代りに[illegible]するものは、凡そ[illegible]目的を達せよ、組合のサンヂカリストなるにせよ、又は[illegible]國のI・W・Wなるにせよ、凡て我同志たり。之に反し一議會政治を主張し、ソビエツトを排斥せんとする者は、英國に於ける[illegible]黨の如く、獨逸に於ける多數社會黨の如く、自ら呼んで社會主義者と稱するも、決して我等の同志に非るなり」と云ふて居る。如何にして彼等に純然たる一階級獨裁政治の理想を實現せんとするの[illegible]其[illegible]は如何[illegible]に[illegible]るのである。

（四）

凡そ學說上よりすれば如何なる國家と雖も一國民の權利を擁護する事を目的とするのである。併し之を歷史上の事實より觀る時に、如何なる政府も先づ支配階級の利益を擁護する事に努める。個々政府が支配階級のみならず、國民一般の利益を擁護せんと努むるが如き場合に於ても、其支配階級に屬する者は、階級的特權及び偏見のために、知らず識らず動かされて、其目的を達し得ないのが常である。例へば我國の今日の如きも、貴族院及び衆議院は、名義上に於ては共に國家の機關なりと雖も、事實上に於ては、孰れも特權代表の性質を有する。即ち前者は主として貴族[illegible]の代表者であり、後者は主として[illegible]の代表者である[illegible]に、從來[illegible]に[illegible]の[illegible]を[illegible]る事殆ど[illegible]を採び、[illegible]と云へば直ちに[illegible]の[illegible]を[illegible]の[illegible]たるべき[illegible]を有した。之が[illegible]の目的に[illegible]する[illegible]の[illegible]は當然である。故に[illegible]をして其に其目的を遂げしめんと欲せば、階級的特權及び偏見に[illegible]し、[illegible]となる[illegible]を有する點が必要である。然るに今日の[illegible]に存在する[illegible]にして、[illegible]命を有するものでないのである。[illegible]法に依り、[illegible]の公に[illegible]する事を[illegible]とする[illegible]でも、[illegible]

せずして行はれ能はざる限り、其選出せられたる代議士が、真に無產階級の要求を徹底的に實現する事に努め得べきや否やは疑問である。

今日の議會政治國中最も進歩せる選擧法を有するは獨逸共和國である。獨逸共和國憲法の第一編第二十二條には「代議士は二十歳以上の男女に依り、比例選擧の原則に基き、一般に、平等に且つ秘密に行使せらるゝ選擧權に依りて選出せらるべきものとす」とある。即ち該議會に資本勞働兩階級の代表者を網羅し、又男女兩性の要求を實現せんとする點に於て、如何なる他の文明國よりも熱心なる態度を示して居るのであるけれども、然も尚斯くの如くにして組織せられた獨逸議會でも、其無產階級の要求を滿足せしめ能はざる證據には、議會政治に對する不平不滿の聲が益々盛であつて、ソビエット政府の樹立を目的とする獨立社會黨及び共產黨の勢力が著しく增加しつゝある事に依り一層明白である。昨年六月六日の總選擧に於て獨立社會黨及共產黨はベルリン、ハンブルグ、ライプチッヒ等の大工業都市に於ては驚くべき大勝利を收め、兩黨の得票は一昨年一月の總選擧に於ては、總得票の僅かに七・六%に過ぎざりしものが、昨年六月の總選擧に於ては、實に總得票の二〇・五%を占めたのであつた。

ウェルナー・ゾンバルト教授は其著「社會主義及社會主義運動」に於て、米國に於ける社會主義運動の發達が遅れたりし理由を數へ、第一に米國の憲法は、自由、平等、友愛の大義を重んじ、其議會は普通選擧を基礎とし、自ら資本、勞働兩階級に屬するものゝ階級的僧惡心を緩和し、階級鬪爭の觀念を豫防し得たるがため、第二には、土地廣く、天然無限にして、苟も運命を開拓せんとする者は、隨時且つ隨所に其機會を發見し得たるがため、第三には米國の勞働者が、假令都會に於て生活し能はざる時も、其田園に殆ど無限の收用力ありて直ちに獨立農夫となる事を得しむるがためであると云ふて居るが、其米國に於てさへも、今や議會政治の墮落を歎じ、民主、共和兩黨の資本主義化に憤慨し、社會主義の必要を稱ふる者續出し、千九百四年及千九百八年の大統領選擧に於ける社會黨候補者の得票は僅かに三十萬内外なりしに拘はらず、千九百十六年の大統領選擧に於ては、戰爭の是非に關し社會主義者間に爭を生じ、多數の投票を失ふたけれども、猶且つ其候補者ベンソン氏は五十八萬五千の投票を得た。若し夫れ今度の大統領選擧に至ては、其候補者が入獄中であるに拘らず、社會黨の得票約一百萬に達したる由にて、候補者デッブスは獄中より檄を發して次期の選擧戰には必ず凱歌を奏せんと豪語して居る。此等の事實に徴するも現在

の經濟政治上の各種の職業乃至經濟階級に滿足を與ふる
ものにして、漸く盛時を過ぎて直接行動に傾かしめんとする傾向ある
に起る所以がない。

然し直接行動に依り、現存せる政府及議會に代ふるに、職業
なる組織乃至經濟階級の代表政治を以てする事が、果して其の
意義を實現するか否やは疑問である。今日の世界に於て經濟乃
至經濟階級の代表政治が如何なるものかを知らんと欲せば、勞
農露國のソビエット政治を見るの外ない。ソビエット政治は現在の
露國政治は殆んど全てを顧みない經濟階級に屬する者の生命及
自由を蹂躙し、之を實行せんとするがため如何なる殘忍をも惜まざる
事に於て現在の露國政治は恐るべきものであつたけれども、これと同
時に[illegible]するのであるから、其政治は勞農
自由及獨立を奪ひ、即ち現在の自由に反する事は、現今の勞
農[illegible]ない。

（五）

扨てベルトランド・ラッセルは露國勞農政府を視察し、歸つて英國
及び米國の雜誌ネーションに發表した勞農政府[illegible]
注目に値する。彼は露國に入ると同時にレーニンの[illegible]
となるものは、露國[illegible]ある[illegible]
權主義とは、其内容に於て、多大の相違ある事を發見したのみ
ならず、現に行はれつゝある所は其の階級の獨裁政治なるもの
も亦殆んど其文字に依つて判斷す如き單純なるものに非ざる
事を知つたと云ふて居る。世人は經濟階級獨裁政治と云ふ言
葉を聞く時に、其の經濟政治と云ふ言葉を、または直に昔の君主や
貴族の獨裁政治の如きものを意味するのでなく、其實に於ては、
現在の[illegible]を有して居るに相違ないと想像するのが常であ
る。然るにラッセルは如斯く想像する人を戒めて曰く「露國
に於ける勞農政治は、讀んで字の如く、純然たる獨裁政治なり。
然れ共其の所謂經濟階級と稱する者に至りては、反つて我等の想像す
る所のものと内容を異にし、[illegible]を意味するものに非
ざるは云ふ迄もなく、[illegible]の中に有力なる階級意識を有
し、其の[illegible]を有する一部分即ちレーニン自身の所謂る共
產黨[illegible]に過ぎざるなり」と。而してラッセルの云ふ所に
依れば、露國人民一億二千萬の中、所謂共產黨に屬し、之と同
一の思想を有する者は恐らく六十萬に過ぎざるべしとの事であ
るが、此[illegible]は多く[illegible]て居まい。然し露國に於ては、多年の
專制政治の結果、[illegible]者の多大なる事驚くべく、其人口の約
八割九分は殆んど文字を解せずと云つてよい。斯く多數の無識
者を有する國にありては、[illegible]政治を行ふ事頗る難く、從て

當分少數專制は止むを得ないのであつて、レーニンが其共產主義の理想を實現せんとするに當つても、之等の無教育者を相手に、一々其意見を質す事は出來ないであらう。茲に於て工業勞働者、即ち勞働者中の比較的教育ある者のゝみを基礎として獨裁政治を行ふに決したのは、又止むを得なかつたに相違ない。現にラッセルがペトログラードにゴルキーを訪ひたる時にも、彼は病床に呻吟しつゝ、ラッセルの何故に如斯き專制政府を援助するやとの問ひに答へて「予が勞農政府を扶くるは、之を以て完全無缺なりと信ずるが故に非ず、之を失ふ時は、之に代つて起り來る者は、恐らく之よりも更に恐るべき專制政府なるべければなり」と云ふたさうであるが、此言葉に依ても、勞農政府は、永く專制政治の下に呻吟したる特殊なる國民の特殊なる產物であつて、露國に於ては止むを得ざる者かも知らぬが、決して一般民衆の意思を尊重するデモクラテック・ガヴァーメントでないことは明白である。現にレーニン自身が、ハンガリーの共產黨政府が樹立された時、之に送つた手紙の中にも、露國に於て採用せられたる制度を其儘ハンガリーに採用せんとする事の愚を誡めた言葉がある。

勞農政府の獨裁政治が如何に過激派勞働者本位のものであるかと云ふ事は、其選舉機關に關する規定を見ても分る。レーニンは千九百十八年八月廿日付を以て米國勞働者に與へたる檄文に於て過去に於ける所謂ブルチョア政治の發布せる憲法が常も公正及自由を保障するに足らざりし事を非難し「我等の憲法に於て集會の自由を認むるも、如斯きは勞働者及貧農民に取りて何等の價値なし。何となれば會堂中稍ゝ廣大なるものは既に悉くブルジョア階級の手に獨占せられ、而して勞働者及貧民の使用し得べき者一も存せざればなり。故に我等は會堂に於ける總　の集會に必要たる建築物を悉くブルジョア階級の手より奪ひ、之を勞働者及農民の集會の必要に充てたり。我等の認むる集會の自由とは、實に斯くの如く徹底したる　のなり。」と誇つて居るけれ共、然も之等の會堂は過激派に屬する者にのみ使用せしむるのであつて、其他の者は、假令共產主義者中の穩和派と雖も、其使用を許さぬのであるから、其所謂集會の自由なるものは、只過激派勞働者の間に於ける集會の自由に過ぎない。言論の自由に關する他の機關も亦凡て之の通りで、ソビエット共和國の憲法第二編、第五章、第十一節には「勞働階級の言論を自由ならしむる目的を以て、新聞、小冊、書籍其の出版に必要な　機械、材料を、勞働者及貧困たる農民に所有且つ經營せしむ」と規定してあるが、ブルジョア階級に屬する人々の言論機關は之により一つ殘らず沒收せられ、獨り過激派勞働者のみ

おこなはれて、[illegible]つゝあるのである。[illegible]者は早より[illegible]も遙に多く文字を解する人々が、出版及言論の自由をかふと云ふ事は、決して諸国の文化を促進する所以でないのみならず、斯くの如き方法に依つて共産党以外の者を[illegible]する事は、ツァーが其政治に依りて労働者及び農民を圧制したると同一の罪悪である。圧制の罪は、其圧制せらるゝ者の数の多少に従つて、決して軽重あるものでない。

人類の歴史は[illegible]の文明より自由の文明へ、部分的自由より全開文明へと進み行く。[illegible]圧制は之に反するが故に倒れた。教会専制も之に反するが故に倒された。貴族専制も之に反するが故に[illegible]した。資本家専制も之に反するが故に将に崩壊せんとしつゝある。[illegible]も、総ての専制と同様の運命を免かるゝ事は出来ない、我は現在の[illegible]政府及び[illegible]が民衆全般の生活を[illegible]し、其日々に[illegible]たなる生の要求を満足せしむるに必要なる[illegible]統制せるを認むる事に於て敢て人後に落ちぬけれども、[illegible]代ふるに、又た[illegible]階級の[illegible]政治を以てせんとするに、賛成[illegible]ふるに於ては[illegible]ものであると思ふ。今後の改造は、[illegible]一に階級[illegible]より不問に[illegible]へ、[illegible]て於ては[illegible]より人[illegible]へ、と云ふ事が其標語であらねばならぬ。

（六）

カール・マルクス及其門徒は人類の歴史を以て階級闘争の歴史であると云ふ。マルクス及びエンゲルスは其著共産党宣言の第一章の「ブルジョアとプロレタリアン」と題する章の冒頭に於て「今日迄の人類社会の歴史は総て階級闘争の歴史なり。自由人と奴隷、貴族と平民、地主と農奴、ギルドマスターとジャーネーマン、即ち一言にして云へば、圧制者と被圧制者は、互に絶えざる反対の地位に立ち、時としては隠に、時としては顕に[illegible]たりと雖も、然も常に絶ゆる所無き闘争に従事したり」と叫んだ。[illegible]去に於ては[illegible]にさうであつたに違ひない。けれども将来も亦然らざるべからざるや否やは自ら別問題である。蓋し今日の[illegible]アスキスの[illegible]に従へば「[illegible]圧制者」ある所[illegible]ブルジョア階級に、曾ての[illegible]貴族の専制に反抗し、個性の尊厳及び自由を確立する上に於て重大なる任務を有したのであるけれども、今や彼等は其任務を果し、既に其勢に於ても、又其力に於ても、[illegible]マルクスの所謂「[illegible]制者」に及ばざるものとなり、ブルジョア階級[illegible]力それ自身が、今日の新文化の建設に対する[illegible]に至つた事は争はれないのであつて、ブルジョア階級専制の時代が既に過去に埋葬した事

は、苟も思慮ある人の認むる所であるに相違ない。而して之と共に從來ブルジョア階級に對抗し來れる勞働者階級が、新文化の建設に對する重大なる使命を果すべく將に大に勃興せんとしつゝある事は疑ないけれども、勞働階級の勃興は、新たなる階級專制を繰返す事に於てゞなく、一切の階級專制を根絶して、此社會に專制者と被專制者との鬪爭なからしむる事に於て其重大なる意義があると思ふ。

全體人間が物質慾望のために絶えず階級的鬪爭を繰返し、永久に階級鬪爭の悲むべき運命より脱出し能はずと爲する事は、唯物史觀に囚れたる一の迷想である、クロポトキンは人間の相互扶助の本能を認め、鬪爭本能を無視した事に於て種々の非難を受けて居るが、マルクス及び其學徒は、人間の鬪爭本能のみを認め、相互扶助の本能を忘却したる事に於て、同じく大なる過ちに陷入つた。マルクス及其學徒が稱ふる社會革命が、啻に富の分配を平均する事をのみ目的とする階級鬪爭に過ぎないとすれば、それは實に今日の資本家が富の獨斷を目的として勞働階級を壓制すると同じやうに下等な事である。全體人間は食ふ事のみが目的ではない。人間は食ふのみならず、感じ又考ふる事を欲する生物である。否、感じ又考ふるがために食はんと欲するのであると云ふ事が出來るかも知れない。從て人間は如何なる手段に依つてゞも、物質慾望を充たす事さへ許されたば、それで幸福になれる者でない。マルクス及び其學徒は只それ丈で幸福な生活を得らるゝものであると考へ、其物質的慾望を滿足するがために、人類は永久に階級鬪爭より脱出し能はざる運命をなすとなし、而して其階級鬪爭のためには何物をも犠牲とするを厭はざる者であると主張する所に、彼等の最も大なる缺點がある。ベルンシ、タインはマルクスの唯物史觀の不備を論じ、人類歴史の創造に個性の力の與つて大なる事を指摘して、經濟的宿命論に反對して居るが、個性の創造力を無視した事も亦、僅かにマルクスの學説の一缺點である。然し此個性の創造の力を無視すると云ふ事で、又啻に人間を以て一個の物質となし、精神の偉大性を顧みなかつたに基くのである。總ての個性は、或は道徳的に、或は藝術的に、總ての事物の創造の本源であつて、各個人は或意味に於て總て天才であるといふ事も出來る。私共が社會改造の必要を叫ぶは、此個性の尊嚴が資本主義制度の犠牲となり、ラッセルの所謂「創造の衝動」が「所有の衝動」に抑壓せられて居ると云ふ事の不合理に堪え能はざるがためであつて、一の階級に屬する個性を助けて、他の階級に屬する個性を蹂躙せしめんと欲するためではない。各個人の自由を解放し、各個人をして其天才に應じ、其創造の能力を遺憾なく發揮せし

を得べき所以を徹底する事が目的なのであつて、私共が考へる制度の良否は、人間生活の最も高き、又最も尊き部分である個我の能力を助長し、以て各個人をして瞬間、代備及び人生の意義を[illegible]しめ得るや否やによりて決するのである。故に社会の改造の理想は単に政治上に基くのでなく、各個人の上に立たなければならぬ。如何なる意味に於ても、一階級が其階級に属せざる者に対して強制の法を以てし、自己の要求を以て他の要求を強制せんとする事には反対である。

又此点に於ても、[illegible]現代政治の原則に反対し、[illegible]に依らず、不断の改造運動の必要を説く者の増加しつゝあるは、其の事である。一昨年六月一日から同五日に亘り、ロンドンの[illegible]ホールに於て労働党大会の[illegible]開かれた。其席上に於て著名なる労働運動の指導者が種々な意見を述べて居るが、就中[illegible]バーンス氏の如きは、[illegible]に於ける労働者が、動もすれば労働運動を以て賃銀たるパンの問題に帰着せしむる傾向あるに反対し、労働問題は単に[illegible]に於ける賃銀問題なり。労働者を単に商品を以てせず、人間を以てせん事を要求する運動にして、之を以て賃銀なるパンの問題となすが如きは、之を要求する人自ら何をも要求しつゝあるかを知らざるなり、乍にマルクスの唯物主義を信ずる能はず。然かも尚且つ労働運動を必要とするは、各人が其生存の真目的と信ずる所に徹底すべき均等の機会を求むべき[illegible]の権利あるを信ずればなり。」と叫んだ。アーサー・ハンダーソン氏に至ては、自己の労働運動の根底に宗教的信念あることを自白し、「余はデモクラットなり、故に余はデモクラットたらざるべからず」と云ふて居る。氏は国民の幸福に対し、深き興味を感ぜざるを得ない。何となれば人間を人間のために利用する階級を認め、人民を階級に分つ事を不快とし、其の[illegible]を廃せんとする改造運動には、其根底に於て、各個性の尊重と人格の平等とを信じ、個人共存の倫理に根拠せんとする信念なくてはならぬと信ずるからである。

（七）

既存[illegible]の政治組織は、自由意志の[illegible]に加へ権力を加ふるや、民衆を支配する者も、支配せらるゝ者も、[illegible]の代表者を選出し、政府を組織するに決し、未だ[illegible]に至ては、[illegible]を行して、[illegible]の思想を持たしめたに止まつた。今日の[illegible]は、漸く之を自覚せんとしつゝあるが、[illegible]の団体的[illegible]、実際[illegible]に[illegible]なるべく[illegible]を説

防がんと欲するならば、今日の支配階級に屬する者自ら大に反省し、先づ有産階級の獨裁政治を放棄すると共に、勞資對等の産業組織を基礎とする新議會を設け、勞資兩階級は共に被支配階級であると同時に又支配階級であり得る政治組織を起す事が急務であると思ふ。ルッソーの民約論は今日の進步した批評眼より見れば種々の缺點がある。個人が契約に依て國家を組織したと云ふ事も歴史上の事實に反する點があるのみならず、個人の自然性は平等且つ至善なれども、社會が之を破壞するのだと云ふ事も正鵠を得た社會觀でない。然かし之が久しく君主及貴族專制に跼屈したる平民の耳朶に觸れた時、彼等は俄かに其理否を考ふる暇なく、猛然として起て自由革命を叫んだ。それと同樣にマルクスの階級鬪爭論も亦、學説としては幾多の非難があるけれども、それが久しく資本專制主義の下に呻吟して居た勞働者の不平不滿に結び付たゝめ意外の大勢力となつたのであるから、其不平不滿を根絶すべき新制度を建設せずして、絶對無條件に、勞働階級を抑壓し、經濟革命の風潮を阻止せんとするが如きは、結局不可能の事であらねばならぬ。然かし之と同時に其不平不滿を根絶し、其生活の安定を保障するに足る新制度を建設するを得ば、之に依て露國革命に見る如き極端なる無産階級の獨裁政治を免かるゝ事は、決して不可能でない。

最近露國に於ても、今日の[illegible]に於ては、既にそれが[illegible]界か比例選擧の作用に依て選出せられた代表者を以て組織せられたとしても、デモクラシーの本義を徹底する事は出來ない。さればとて無産階級の獨裁政治は有産階級の獨裁政治と同じやうに惡い。露國の如き文化の低級なる國に於ては已むを得ないかも知らぬが、獨逸の如き進步せる國家社會に適用すべきものでない。如何にせば議會制度を維持し、之に依て急進的でなく漸進的に、專制的でなく合議的に、階級的でなく調和的に、政治上及經濟上に於けるデモクラシーの實現を期する事が出來るかと考ふる者が増加しつゝあるらしい。ワルター・ラーテナウは獨逸政府の財政經濟顧問として有力な人であるが、此の改造案は、旅館とか料理店とか小賣商とか其他地方的性質を有する産業は凡て之れを地方自治の管理に一任すると同時に、製鐵業とか製絲業とか化學工業とか云ふ如き一般的性質を有する産業は、それ〴〵其關係の企業家及勞働者を以て組織せる組合の自治的經營に委ね、國家は其上に立つて各地方及産業自治體を國民生活の大目的に統制すべく、各産業自治體に其利益中より國家及資本家に一定の金額を納入する義務を負ふ事にしたいと云ふのである。民主黨の一領袖にして有力なる實業家たるウイルヘルム・フェルスホーフェンも亦之に似たる意見を有し、獨逸は地

[illegible]多くの自治団体より成立する如く、経済上に於ても亦多数[illegible]組合の結合せるものであらねばならぬ。各種の産[illegible]の条件によつて組成せられたる各部門に依て自治的に[illegible]るべく、而して国家は唯此等の各産業自治団の共同文化[illegible]に統一し得れば足る。教育の如きも真に有効且有意義なるものたらんと欲せば、之を教育者及教育関係者の自治に委ねべきであつて、各学校を一の独立団体と做し、教師、教育に関[illegible]一定の年齢以上の生徒又は学生を有権者として[illegible]に、[illegible]講に其の一般的な計画及其の利用を定むべき[illegible]ある。

[illegible]

産者に之を隷属せざるべからざる制度を一新すると同時に、解放せられたる其の生産者が消費者を基礎とする新政治組織を確立せんとするにあるのみ。而して此新にして新設せられたる政治組織こそは初めて一方に於て地方的及産業的自治体の意見を代表すると共に、又他方に於て国家的国家の要求を解説し得るものだ。」と云ふて居る。惟ふに英国における改造論者の多数が、ギルド社会主義に、其根本思想を求めんとする傾向あるは争はれない。

我国に於ける無産階級の自覚は、之を欧米諸国のそれに比ぶれば、尚ほだ幼稚にして、所謂階級闘争と称するが如きものも政策綱目に於て見る如き組織的のものはないけれども、之れでも[illegible]や下級労働人の間には生活の不安や[illegible]増加が[illegible]に反する事をきに於て不平不満が[illegible]し[illegible]思想は[illegible]外に強く瀰漫して居る。現に[illegible]問題に関する[illegible]は最近著しく[illegible]したのみならず、直接行動の観念も[illegible]勢力を有する事は、本年の米騒動を見ても明白である。従て我国にも[illegible]、動もすれば[illegible]んとする傾向は既に出来て居ると云ふても[illegible]ないのであるから、[illegible]者たるものは、[illegible]府が、明治初年に、自由民権の[illegible]を[illegible]したる前轍の[illegible]に鑑み、或は[illegible]んじて立憲政治の[illegible]、[illegible]

關を開きて以て我が政治思想の革命化を豫防し得たるが如く、此際率先して有產及無產兩階級の要求を實現し得べき新議會主義を提唱し、眞に鮮成せられたる民衆政治の確立を以て無產階級獨裁の過激思想に對抗する事が緊急の要務でなくてはならぬ。

現在の我議會は、其組織頗る不完全にして、衆議院は直接國税三圓以上を納むる少數の獨立生計者に依りて選出せられたる代議士を以て成り、貴族院は主として華族と多額納税者と退職文武官との集會である。從て現議會は、其實質に於て、貴族及有產階級の代表機關たる事は免かれ難いのであるから、何時迄も此儘で放任すれば、議會否認の風潮は益々甚しきを加ふる危險ある事云ふを待たぬ。然らば如何に之を改造すべきやと云ふに、私の考へ得る最低限度は、貴族院を改造且つ改名して之を專門智識及職業利益の代表機關となすと共に、衆議院をして眞に國民全體及消費者全體の要求を體現する者たらしむることである。而して之がためには、華族の稱號を廢すべきや否やは別問題として、更に何華族の現在の政治的地位を一般國民と同樣になし、其上院議員たる特權を廢すると同時に、適法に選擧せられた場合は、上下兩院孰れの議員たるをも妨げずとする事が必要である。改造されたる上院議員中專門智識を代表する者には、[illegible]、[illegible]、[illegible]、法律、[illegible]、[illegible]、社會學者及政治學者の如き[illegible]のであつて、之に[illegible]から選出すべきであると思ふ。其他[illegible]者には一般的勢力を有する各種の生產業を一定比例に[illegible]し、資本家及勞働者の双方より同數の代議士を選出せしむるのである。資本家の代表者たればとて必ずしも資本家自身たるを要せず、勞働者の代表者も亦勞働者にあらざる者を選んで差支ない。下院は、大體に於て、現在の府縣を一選擧區となすべく、其選擧は普通選擧及比例選擧の併用に依るべきは云ふを待たぬ。如斯にして組織せられたる新議會は、未だ理想的完全を期する事難しと雖も、現代日本國民の文化の程度に適合し又比較的速かに實行し得る範圍內に於て、貴族及有產階級の獨裁政治を去り、社會共存の倫理の上に國民生活の基礎を確立するものではあるまいか。固より此組織に關する私の意見は未だ決定的のものでないのみならず、勞働組合が認められ、勞資對等の產業組織が出來なければ、其實行を期し難いのである。從て有志の諸君と共に何人に研究を進むる必要があるのであるけれども、更に今日の我國に新議會主義を提唱し、一方に貴族及有產階級の獨裁政治と戰ふと同時に、他方に無產階級の獨裁政治を防ぐべき重大なる時機に達したと信ずる。而して新議會主義の標語は須く、"Each for all, all for each" であらねばならぬ。

現代通有の誤れる國家觀を正す

法學博士　吉野作造

（一）國家に關する新舊思想の對立

西洋で帽子を取るのがお禮だとたつて居るのは男子に限るので、婦人については却つて帽子を取らないのがお禮である。人の家などへ行つて帽子を取る必要を感ずると、御免下さいと斷つてから取る。男子の慣例を見て之を一般西洋通有の禮儀と誤解した日本の某高官などが、謁見の前に盛裝して出た西洋婦人に脫帽を命じて彼等を啞然たらしむることが屢々ある。自分でいゝと思つて居ることが、對手方の誤解からわるい事と評價されて面喰らうと云ふ事は官憲との交渉に於て昨今我々の屢々經驗する所である。殊に思想問題について、分けても國家に關する思想の問題について、斯う云つたやうな彼此兩者間に最近頻繁に目撃させられた事は言ふ迄もない。同じものに對する評價が多少違ふと云ふ事は如何なる時代にも免れないが、昨今のやうに一方には之を國家社會の範圍の外に置き、他方には之を國家社會に大いに關するものと見做すと云ふ風に、全然相容れざる兩極端の見解が同時に成り立つと云ふ事は、未だ曾て他に其例を見ない。昨今所謂思想界の混亂が叫ばるゝのも、畢竟此邊の事情に胚胎する。如何に帽子を取れ〳〵と言つても、取らないのが禮儀だとすれば、西洋婦人の容易に官憲の命に從はざる、しぶしぶ從つても後に不平怨嗟の聲を漏らすは當然だ。官憲の方でもあくまで自分の態度を正しいと信じて居るから、脱く者の腹が分らず漫然として不埒呼はりをする。斯くして茲に感情の疎隔を生じ、冷靜に話し合ふと云ふ餘裕を我から遠くするやうになれば、其落ち行く所は、云ふ迄もなく唯混亂の一事あるのみである。予輩は曾て斯う云ふ形勢に對し、政治協調よりも思想協調が必要だなどゝ云つて見た事もあるが、何れにしても國家に關する此兩様の見解に接し、其乖離の由つて來る所を明かにし、以て正しい立場の何れにあるやを究明するのは時節柄頗る必要の事と考へる。

国家に関する二種の見解、対立は、人について云ふなら、行政の衝に居る当局と、新[illegible]の教育を受けた青年との対立である。一切の官僚は、行政官と云はず、司法官と云はず、更に政界の要[illegible]に[illegible]れ一[illegible]に[illegible]なく[illegible]もの一切を含み、軍人や代議士や、又[illegible]つた者、又より学者教育家に至るまで概し一[illegible]階級に属するものは、[illegible]に[illegible]なるのが[illegible]だとす[illegible]に国[illegible]の[illegible]せんと欲する連中である。此等の人は[illegible]の[illegible]にきうてない[illegible]事に気附かないのか、[illegible]ぐ分りさうなものだが、[illegible]でない、と云ふ内に[illegible]に[illegible]の[illegible]あることを[illegible]なるものである。彼等が繋って国[illegible]に[illegible]し、誤つた[illegible]固執して動かないと云ふのは[illegible]の上に、[illegible]があるやうに思ふ。[illegible]、[illegible]とは[illegible]な現代の青年[illegible]、[illegible]ならぬ[illegible]の[illegible]。[illegible]は今の青年が[illegible]たないのを見て、[illegible]の、[illegible]に[illegible]ものだ。[illegible]ふのである。[illegible]人の[illegible]に[illegible]られないのである。[illegible]青年には、[illegible]へられたい[illegible]から、[illegible]流れ過ぎる嫌いはあらう。然し理想に憧れて、現實を無視するのは年若きものゝ特徴で、[illegible]り現代に限つた事ではない。彼等に向つて明治大正の歴史的背景を説くはいゝ。[illegible]い[illegible]彼等の思想を着實[illegible]ならしむるは好ましい事だけれども、度を過して彼等の理想に對する[illegible]を[illegible]してはならない。

国家に関する二種の見解を説く前に、予輩は先づ茲に国家の概念を明かにして置く必要がある。何故なれば[illegible]今[illegible]に於て、国家なる文字は不當に濫く使はれて居り、而して之[illegible]た思想[illegible]の[illegible]因となつて居るからである。ここで予[illegible]の[illegible]る所では、国家に関[illegible]の[illegible]の原因は二つある。一つは国家の[illegible]念の[illegible]た事であり、一[illegible]に国家[illegible]云ふ事[illegible]本[illegible]は[illegible]して国家に関する二種の観念を比較[illegible]るが、[illegible]前に[illegible]を以て、国家の[illegible]なる[illegible]すについて一[illegible]して置かう。

[illegible]ふと、我々の[illegible]てはない。[illegible]上には[illegible]くとも[illegible]に一[illegible]かに[illegible]されなければならない。人[illegible]の[illegible][illegible]である[illegible][illegible]たらしたる[illegible]のものは、[illegible]の

生活を統制する最大原理があるからである。而して其統制の原理は、法律と武力即ち一言にして言へば權力である故に、共生活を國家生活と云ふのである。國家生活は我々の團體生活の中、權力によつて統制さるゝ一方面を言ふに外ならない。國家とは即ち權力によつて統制さるゝ方面を抽象したる團體生活に外ならない。從つて其の外に、我々の生活の中には、權力によつて統制さるゝにあらざるいろ〳〵の方面あることは云ふを俟たない。今、我々の團體生活は權力によつて統制さるゝ方面あり、又然らざる諸〳〵の方面あり、抽象的に考へれば、種々の相を呈して獨立して居るけれども、具體的に觀れば渾然たる一生活體に過ぎない。之を我々は社會と云ふ。社會が主で國家は其一面を抽象したるものに外ならない。少くとも理論上は斯く考ふべきものと思ふ。

然らば我々の團體生活の中、國家と對等の地位を主張し得べき意味の對立生活體があるかどうか。換言すれば、國家は社會の一面でなくて、社會即ち國家ではないかと云ふやうな考へ方もある。國家と社會とは單純なる概念的區別に過ぎずして、其實二者全然同一物なりとの說の當否は、尚次項に於て說かう。玆には只理屈の上で、社會と國家とは別のものだと云ふ事を諒解すればいゝ。

然るに我國に於ては普通俗界の用例に於て、此二者を區別してゐない。即ち社會と云ふべき所に國家と云ふ言を無條件に使つて居ることが少からずある。殊に帝國と云ふ文字になると殊に甚しい。例へば帝國の文化を進むるとか、或は國家に須要なる學術技藝などゝ云ふ場合は大和民族の團體生活と云ふ意味であつて、何も玆に權力と云ふ考を入れる必要はない。大和民族の文化の進歩と云つても、大和民族の發達に必要な學術技藝と云つても、云はんと欲する丈けの意味が十分に云ひあらはせる。國家の秩序を紊るとか、國家の命令に從ふとか云ふ場合の國家とは、其内容を大いに異にするのである。西洋の用例では斯う云つたやうな混同はないさうだ。國家と云ふ文字に當る西洋語は、すべて皆權力服從の關係で統轄さるゝ一面だけを云ふので、團體生活の全班を云ひあらはす場合に無條件に此文字を使ふことはない。國家と云ふ文字を斯くまで廣く使ふのは日本特有の例だと思ふ。加之我國では斯う云ふ廣い意味の使ひ方を公けの法令にまで用ひて居る。よく學校の規則などに、國家に必要なる學術と云ふやうな文字を見るが、若し此文字を嚴格な意味の國家と解するなら、法律や政治や兵式體操などを教ふるものはいゝ、天文學や地質學なぞは所謂國家と何の係はりもなきものと云はなければならぬ。故に此場合の國家は日本民族の團

門[illegible]と云ふやうに解せなければならない。新聞の場合にも同じ意味な文字があるが、政府は国家的秩序の破壊を理由とする[illegible]存したのは此の文に該当する[illegible]と云ふ意味であつたのは[illegible]でもない見当外れであつた。所が之と同じやうな思ひ外たは、世間にはまだ〳〵沢山ある。即ち吾人は、[illegible]を[illegible]く解し[illegible]一時の[illegible]で押し通さうとするのはいけないと云つて[illegible]に反対だと云ふと、他のものは、[illegible]く解して、国家を[illegible]に反対するのには取りも直さず、[illegible]国体[illegible]を根本的に[illegible]と思ひ込んで居る。国家主義に対する[illegible]も、殊に[illegible]に対する評論の中には、[illegible]なかつた。同一文字に対する内容の誤りから[illegible]は、[illegible]する[illegible]国家に対す[illegible]概念の相違であつた為めである。

即ち云ふ[illegible]は内法では[illegible]例がないのに、[illegible]に於て[illegible]はどう云ふ訳か。只一寸した問題に止るものなら、之を[illegible]に[illegible]の必要も感じないが、予の観る所によれば、も少し立入つた問題があるやうに思ふ。一つは[illegible]とする問題[illegible]理由から[illegible]く我国の[illegible]国家の問題を判較した[illegible]と云ふ事である。此事は何れの項目に説く。も一つは当局の一部に存する笑ふべき意見が、社会と云ふ文字の使用を不当に[illegible]、[illegible]なる文字を之に代り用ひしめた事である。[illegible]でも[illegible]と云ふ[illegible]に[illegible]り名残けがよくないが、明治以来まで[illegible]は[illegible]れて居つた。それは驚くべき[illegible]の[illegible]で[illegible]つて、すべて[illegible]といふた字を使ふ事すら忌はれた。今日こそ[illegible]などと云ふ名称が用ゐられたが、一[illegible]は故らに避けらるゝ[illegible]と云ふ[illegible]すらあつた。元の[illegible]物集井上友一君は[illegible]文として採用した[illegible]の一門を公刊するになつて、元老が[illegible]の[illegible]を[illegible]して、[illegible]といふ名に代へた。[illegible]物[illegible]となつた事[illegible]話であるが、[illegible]に[illegible]るゝの[illegible]、[illegible]と云ふ文字についてすら驚くべき[illegible]の情を寄せて居つた事は疑ひない。此間にはどうか知らぬが、曾て文部省では教科書[illegible]の方針として社会と云ふ文字の[illegible]使用に絶対に許さないと云ふ事であつた。多くの場合に於て、国家と云ふ文字を代用すべきことを内命したが、之が余りに[illegible]るやうなら、[illegible]と[illegible]けて使ふと云ふ[illegible]したと聞いて居る。文部省の[illegible]人が不[illegible]の[illegible]に押されて、[illegible]その[illegible]を使ふやうになつた今日から見ると誠に隔世の感があるが、併し老人の頭脳には今猶同じやうな考が伏在して居ることは疑ひを容れない。それは何れにしても、更に[illegible]のやうな[illegible]を[illegible]有

つて居つたと云ふ事は、國家と云ふ文字に不當に狹い意味を有たしめた原因になる。

斯くして國家と云ふ文字の意味は特に我國に於て甚だ曖昧に取扱はれて居る。俗間でもさうだが、公用語としてもさうだ。此混同から前に述べたやうな誤解と混亂が來るのであるが、併し今日の思想界に於てどんな極端な過激派でも、絶對的個人主義を取つて國體生活を根本から覆さうと主張するものはない。國家と云ふ意味を廣く解するなら社會主義も無政府主義も皆國家主義である。彼等が今日所謂國家主義に反對するのは、主として權力服從の關係に着眼して居る。權力服從の關係に着眼して云々するのを、國體生活其のものを否認するのは不都合だと云はれては、今日の青年は只其語の意味を嫌ふに止るであらう。要するに此等の點は國家の概念を正せばいゝ。それで問題は簡單に極る。只國家を右述ぶるが如く狹く解して、偖其上で之が本質をどう考へるかと云ふ點に意見が分れる段になると、問題はさう簡單ではない。

(二)指導階級の國家觀

我々人類の團體生活をして可能ならしむる所以の根本的の原理の何たるやは、今日の社會學が明かに之を我々に示して居る。我々の團體の生活に於てはそこにいろ／＼な原理に[illegible]されて、いろ／＼趣の異つた制度の中に我々の生存を全うして行く。所謂權力のみが、我々の團體生活を可能ならしむる所以の唯一の原理ではない。少しく物事を立ち入つて考ふるものには、之は極めて明白な事で、今更之を我が[illegible]繰返す[illegible]の嫌ひがある。けれども[illegible]の[illegible]は[illegible]てゐない。少くとも今日の社會學が[illegible]ふるやうな[illegible]等の政治見を統一してはゐない。政治家たる[illegible]日常の問題を取扱へず何とか處理するといふ[illegible]に[illegible]れ、[illegible]一對すれば個々の問題に個々獨立の原則を立てゝ處理して居るものであるが、よし之に[illegible]が附いても、自分の[illegible]や[illegible]に拘束され、理論上一貫したる統一的見地を取りない[illegible]が多いのだ。それにしても我々今日の政治家なる[illegible]は[illegible]自然なものである。予輩は彼等の思想の[illegible]のに驚くよりも、[illegible]や瓦斯の今日の時代に、提灯を持ち[illegible]政治家の横行跋扈を許す今日の社會が不思議で堪らない。

然らば今日の政治家乃至指導階級の國家觀は如何なるものか。彼等の見解は國家に關するいろ／＼の觀念の分類の中に如何なる位地を占めて居るか。問題をなすものに就ては、公然無用の[illegible]立てゞあるけれども、現に[illegible]斷んな[illegible]を有つ

一[illegible]であるから、少し[illegible]つた[illegible]であらう。

手[illegible]り早く云へば、[illegible]の[illegible]する[illegible]として、権力一元[illegible]する立場にある。我々の[illegible]生活を[illegible]する[illegible]本の原理は、[illegible]一元ではない[illegible]しながら、我々の共同生活が此[illegible]によつての[illegible]、やうになるのは遠い先きの[illegible]的状態に於ての話で、人性の不完全なる現在の下に於ては、此の理想的状態に[illegible]く[illegible]に更らに別に[illegible]のいろ／＼な[illegible]を必要とするのではないかと云ふやうな根本的問題は暫く[illegible]の研究に譲るとして、茲にはたゞ[illegible]的に我々はいろ／＼な[illegible]に統制されていろ／＼な[illegible]的生[illegible]作り、以て共同生活の[illegible]たる[illegible]を[illegible]りつゝあることを[illegible]置かう。此點に於て[illegible]に[illegible]し、多元説が許されたもの[illegible]前提せねばならない。然るに[illegible]は、之に反して権力一元説を取つて[illegible]ない。曰く、我々人類の共同生活は[illegible]の統制あるによつてのみ可能である。宗教・学術・経済等の[illegible]に属する各種の共同生活は所謂[illegible]あるによつて初めて可能なものであつて、[illegible]の作用ではない。[illegible]は即ち[illegible]生活である。[illegible]を外にして社会[illegible]はないと。斯う[illegible]からすれば、社会即ち国家で、[illegible]の統制[illegible]から権力を[illegible]ることは即ち共同生活を[illegible]に[illegible]することになる。[illegible]とは[illegible]りも[illegible]にして、社会の[illegible]ない。[illegible]になり、[illegible]になり、[illegible]になる。権力の前には[illegible]ばならぬと云ふ精神[illegible]する。であるから彼等は[illegible]力の作用に対する[illegible]、[illegible]に[illegible]生活の根本を傷けるものと[illegible]な[illegible]る。[illegible]の[illegible]に[illegible]る政府の[illegible]、又は規制[illegible]の[illegible]此[illegible]を前提せずば[illegible]ないことになる。斯う云ふ[illegible]つたり[illegible]者なる[illegible]可なりある。彼等は[illegible]たゞ[illegible]ふ、[illegible]なければ[illegible]には[illegible]い。此統制[illegible]なければ我々の生活は[illegible]いと云ふ[illegible]に於て正しい。けれども[illegible]生活を[illegible]に[illegible]の生活を考ふべからずと云ふ[illegible]味に[illegible]ようとするなら、[illegible]の以外に人類の生活を考ふべからずとする[illegible]一ではないか。

権力[illegible]の[illegible]りは[illegible]だ。けれども[illegible]の如き[illegible]なか／＼[illegible]あると云ふ事を我々は忘れてはならない。[illegible]やうな[illegible]の[illegible]は所謂[illegible]の間にもある。多元説を[illegible]るものは多く[illegible]の間に、甲乙の[illegible]を[illegible]ける[illegible]とする。[illegible]では[illegible]を以て最高の[illegible]とする者は漸々強くなり、中には此[illegible]の[illegible]を

ゐるを理由として國家を否認せんとする所謂無政府主義者もあるが、前の極力一派と同じ中間に立つものは依りて最高の地位に置かんとするのである。我々の團體生活はいろ〳〵な原理で統制されるが、一番高い所に存すると、權力によつて畫然と統制さるゝやうになる。國家生活は即ち此種生活の最も發達した形式であると云ふ。只之は一種の政治の發達なりと云ふ一時獨逸に流行つた學說即ち之れで、之に感染れて居る學者も政治法律の學問をするものゝ間にチョイ〳〵見受ける。甚だしきに至つては一方に於ては一應之を取りながら、同時に他方、此立場を取つて居る學者もある。學者の立場としては甚だ亂い態度であるが、現に斯くの如くになる所以のものは、國家の權力と云ふ所に大なる意義を置かうとする一種の要求に動かされたものであらう。故に此後の立場を取るものは、權力は唯一の原理でないけれども、最高の統制原理だから、專ら之を大事に立てゝ行くことは我々の社會生活を最高の段階に進めて行くことに外ならない。斯く說く所に彼等は滿足を見出すのであらう。要するに、國家なり社會なりを見て行るが僅に研究するものゝ間には、團體生活統制原理としての權力の値打が段々明かになつて行くのに、側の政治法律を取扱ふものゝ間には、理論家たると實際家たるとを問はず、或る形式の權威が今尚支配して居るのは一日猶だ不可思議な現象である。

（三）誤れる國家觀の流行する理由

學問上國內に間違ひだと決つて居る理論が、何故一部の政治家法律家に固執され、又多くの國民から默認されて居るか。是下らない迷信が相當に天下に通つて居る世の中だから怪むに足りないやうなもの、考へて見ると不思議で堪らない。殊に有識者と云ふ階級から信ぜられてゐるのだから不思議なのである。そこでいろ〳〵其由つて來る所を考へて見た。斯くして斯うでもあらうかと氣が附いたもの二つ三つを擧げて見れば次のやうなものである。

第一には、封建時代の政治思想が今日尚政客の頭腦に流れて居るといふことを見なければならない。封建時代に於て國土國民が君主の私有として取扱はれて居つた爲、政治は即ち君主の管理經營權の行使に外ならなかつたから、君主の政治に對して人民の政治なるものはない。民は依らしむべし知らしむべからずと云ふ原則ありし所以である。然るに今日といつても、所謂官僚だか、取扱の說を聽けば世の中は[illegible]れる。大に[illegible]之を感ずる[illegible]

すらに[illegible]の[illegible]とに[illegible]、所謂政治の[illegible]な[illegible]いろいろ[illegible]に考へられて[illegible]た。[illegible]だけか[illegible][illegible]する[illegible]のもの[illegible]、又同じく[illegible]代に[illegible]せられたのである[illegible]丸で[illegible]ふ今日の[illegible]権利として要求するになるに反し、昔は[illegible]自分のものにしたいと云ふ[illegible]として民衆の[illegible]計らたのだ。[illegible]立[illegible]までも上の、分に[illegible]のもの[illegible]い。[illegible]の政治[illegible]の上[illegible]はない。[illegible]中心[illegible]せら[illegible]である。[illegible]に置くと云ふやうた[illegible]の[illegible]ものである。[illegible]中は[illegible]して、[illegible]下の天下となった。各[illegible]を[illegible]近し[illegible]によって[illegible]、[illegible]的た[illegible]は[illegible]たない。[illegible]の[illegible]に[illegible]断[illegible]にある[illegible]であるが、これには[illegible]の[illegible]。[illegible]代に、[illegible]の[illegible]には、[illegible]

といふものは[illegible]であって、下[illegible]指之に従ふやうたればいゝと考へて居る。これでも[illegible]行に[illegible]つて[illegible]代の[illegible]に行かなくなると、[illegible]は[illegible]的な中[illegible]をこしらへて無理に天下を[illegible]はしめんとする。所[illegible]なるものは[illegible]云ふ[illegible]的[illegible]求に[illegible]たものである。さうすると[illegible]中心[illegible]だと[illegible]れるもの[illegible]であるし、[illegible]中[illegible]を作って[illegible]んと[illegible]の[illegible]して[illegible]に[illegible]の[illegible]なるの[illegible]る[illegible]に移[illegible]川ない[illegible]へる。[illegible]を一人一[illegible]下[illegible]に[illegible]なく[illegible]めには、[illegible]に[illegible]下[illegible]の[illegible]と云ふ[illegible]の下に[illegible]一人の[illegible]する[illegible]一[illegible]って行くと云ふ[illegible]に[illegible]くものだ。[illegible]下に、[illegible]に行はる[illegible]の[illegible]の[illegible]一人としては[illegible]に[illegible]ない[illegible]、[illegible]しなければならない。[illegible]して[illegible]ば[illegible]に、今[illegible]の[illegible]したる[illegible]を[illegible]に[illegible]て[illegible]するといふ[illegible]に[illegible]ものである[illegible]さね[illegible]な[illegible]の[illegible]合として[illegible]

さに對しては批評を許さない。斯くして政府に役人は立つ、天下もかよく治まる、政治の要諦は茲にあると考ふるのである。從つて彼等は政治家の仕事と云へば、いろ／＼細目の經綸を立つることだと考へて居る。豈んぞ知らん、斯くの如きは政治的技師の仕事に過ぎずして、本當の政治家の任務は國家の經綸を輿論の内容となし、天下萬民の諒解と後援との下に實行せんとする所にある。政務官と事務官との岐るゝ基礎は茲だ。日本には此點の諒解が無い。之れ亦封建時代の考へ方から全く脫却してゐないからである。

第二に我國に於て政治法律が餘りに專門的に取扱はれ、殆んど國民の常識となつてゐないと云ふ事も考へねばならぬ。西洋で政治は國民の要求によつて民本化したと云ふ沿革から觀ても、多年自治的訓練を受けてゐたと云ふ點から謂つても、所謂民主政治の採用によつて從來經驗した事のない、丸で新らしいものを與へられたのではない。若し夫れ其法律に至つては彼等の間に昔から行はれ、慣習慣行を集成し、之に多少の理論的體系を附したものに過ぎないから、法律の文句は嚴格なものでも内容たる原則は國民の生活とピツタリ合つて行く。然るに我國では、訓練の無いのに突如として權利が與へられ、權利を與へた後に於ても社會と政府とを混同した結果、下級は常に政府の訓練を受くるの機會は無い。ここで與へられたものゝ、何時如何に權利を行使すべきやに迷はざるを得ないが、之と同時に國民は之を所謂政治家に托して自分達には分らないものと諦めて了う。法律に至つては概して我國古來の慣行とは何等の連絡なき西洋の諸法則を其儘翻譯的に模倣したものに過ぎないから、之れこそ專門に之を研究したもの〻外には全く判らない。斯くして法律も政治も國民の日常生活とは極めて緣の遠い專門の技術なるかの如き觀を呈するに至つた。電氣や瓦斯の事が素人に分らないと同様に、法律、政治の事も素人には分らない筈のものとなつた。であるから專門の事については專門家の云ふ事を聽け、少くともそは我々普通市民の容喙すべき限りにあらずとする風があつた。斯くして政治法律專門家の途方もない誤謬が長く國民の常識的批判を免れ得た所以である。此頃になつて漸く他の方面の思想家などが政治法律に批評を加ふるやうになつて、其の道の專門家も又素人も初めて從來の考の大間違ひに間違つた事に氣が附いた。日進月歩の時勢に氣附かず、狹い城壁の中に永く國家の旗を振り翳して居つた政治家法律家が、一度び歴史家社會學者倫理學者乃至哲學者の公平なる批評に逢つて如何に見苦しき狼狽を極めたか、又現に極めつゝあるか、是れの

[illegible]にあらざる所であらう。

[illegible]の夢も漸く醒めつゝある。[illegible]

門の投機上手な者は今や明かに[illegible]しく[illegible]れた。それでも[illegible]

[illegible]一[illegible]に立つ[illegible]なか／＼多いや

うに見える。ここで予[illegible]に今日の[illegible]

[illegible]の[illegible]に知らずして[illegible]られて居るの[illegible]

を考へて[illegible]ならぬ。

[illegible]によつて[illegible]を

[illegible]する[illegible]は、[illegible]の[illegible]

[illegible]しく[illegible]た。今いち／＼[illegible]を[illegible]な

い。[illegible]して[illegible]

[illegible]くに[illegible]について[illegible]内[illegible]の

[illegible]の[illegible]である。云ふ[illegible]もなく[illegible]の[illegible]

[illegible]に[illegible]い一[illegible]を[illegible]し、[illegible]の天

[illegible]いふ[illegible]て居つた。之を[illegible]の[illegible]した[illegible]

[illegible]の[illegible]で、[illegible]も[illegible]に[illegible]ら

ない、[illegible]に[illegible]ばならぬ

と云ふ[illegible]い一[illegible]であた。[illegible]と云ふ者を[illegible]から

しむるに[illegible]ては、[illegible]を非常な[illegible]を以

て見て居つたと云ふ[illegible]力が[illegible]ない。[illegible]

て[illegible]に於ける[illegible]代を[illegible]て[illegible]、[illegible]日

本の[illegible]に[illegible]たのだから、[illegible]

囚へられたいは[illegible]もない[illegible]て[illegible]内[illegible]

ば[illegible]し[illegible]となつて[illegible]、[illegible]

[illegible]主々[illegible]を[illegible]する一[illegible]あれば、又[illegible]を

呼ぶものもあつたが、[illegible]ある多数の[illegible]には[illegible]の[illegible]によ

つて[illegible]けられた一[illegible]からして、どうしても[illegible]の[illegible]

[illegible]に[illegible]することと[illegible]た。加ふるに[illegible]日本

統一の[illegible]られ、[illegible]なか

つたのみならず、[illegible]を[illegible]も

備へねばならなかつた。[illegible]に[illegible]に[illegible]内

[illegible]があつた[illegible]一し[illegible]たない、[illegible]ま

つて[illegible]く[illegible]。[illegible]ら

当時は[illegible]に[illegible]を[illegible]。

此[illegible]を以て[illegible]を引受けた。[illegible]の此

大任を受け[illegible]く[illegible]の[illegible]のは、[illegible]の[illegible]によつて

内閣の[illegible]に[illegible]たからである、[illegible]は

憲法取調べの[illegible]に[illegible]り、スタイン、グナ[illegible]

の[illegible]に会ひ、日本の[illegible]の下に於ては、[illegible]に[illegible]の[illegible]

法律的に採るべきを説かれ、政治家として大いに語る所あつたと云ふ。蓋し獨逸は國内にいろ〳〵の異分子があつて、最も民心の統一を缺く國内である。斯う云ふ國柄に於て強いて統一の實を擧げ、又急いで民心を統一するの必要ある以上、先づ以て法と力とを樹てゝ最高の統制原理としなければならない。伊藤公は此理論を日本に輸入した。而して之と同時に所謂獨逸思想、所謂普魯西主義をも不知不識我國に輸入した事は云ふ迄もない。斯くして之が根元をなして我々の國家生活に於て權力の確立が何よりも大事だとする謬見が深く我が政治家にまで染み込んだ。此點に於て予輩は今日の官僚政治家の所謂國家主義こそ獨逸思想の模倣にして、外來思想の餘毒を受けたものと云はなければならないと考へる。

斯う云ふ所から今日の政治家や法律家は、國家の命令と云つたら理が否でも聽けと云ふ。國家の命令として有効に成立したものには、固より絶對に服從せねばならないが、其内容の是非得失を批評するの自由は我々に與へられて居る筈だ。今日の政治家には此點の諒解が十分明かになつてゐない。甚しきに至つては大臣官吏の態度を罵倒したのがわるいと批難さへする事すらある。若しそれ一旦國家の名に於て發現した事は、理が非でも押し通さうとするの弊は屡々目撃する所であるが、所謂國家の體

而ならぬのは、斯く道理の當然の要求を無視して迄も押し立てねばならぬものか。朝鮮で以前憲兵が戸籍調べをする時、男と女とが同居して居るのを一概に夫婦として登錄した。其中には實親子なのが頗る多かつた。後で之に氣が附き息子がお母さんと夫婦の取扱にされるのは心外だとて訂正を求むると、一旦お上で決めた事は改め難い、強いて訂正を求むるなら、離婚届を出せと答へたものが少からずあつたさうだ。之は極端な一例であらうが、兎に角一旦言ひ出した事だから、理が非でも押し通さなければならない、官廳の威信に關するからと云ふ説明は内地でも屡々聞く所である。此等は皆道理の要求を押し通すよりも國家の權力の威光を押し通す方が、より大切だとする謬見が可なり深く行き渡つて居ることを語るものである。權力一點張りの國家觀が誤りだと言へば之に誰も異存がない。而かも此謬見が禍を爲していろ〳〵な不都合な現象の行はれて居ることに氣が附かない人が案外に多い。否、氣が附かないのではない、氣が附いても政治法律の事はまた別だと考へてゐる人が多いのだらう。だから此方面には案外許すべからざる謬見が平氣で公行して居るのである。

茲まで述べて見れば最早や誰しも權力一元的國家觀を執つても

の[illegible]くなる[illegible]、[illegible]有力なる學者によつて[illegible]もある[illegible]、[illegible]されても居る。して居ると、[illegible]よく[illegible]された上で、それでも[illegible]の[illegible]の[illegible]すく、[illegible]することを許さなければならない。[illegible]に我々は[illegible]の[illegible]する[illegible]根本的な[illegible]して人生觀[illegible]と云ふ事に迄へ及ばざるを得ない。人[illegible]の[illegible]ど[illegible]へば人を[illegible]た[illegible]へ[illegible]も[illegible]し、[illegible]にいとする[illegible]、[illegible]の[illegible]よ[illegible]觀[illegible]るのである。

人[illegible]ど[illegible]いては、[illegible]科學[illegible]としても[illegible]として[illegible]いろ／＼の[illegible]する。[illegible]の[illegible]ではない[illegible]し[illegible]な[illegible]なりは、[illegible]提として[illegible]にば[illegible]して[illegible]は[illegible]人の[illegible]の[illegible]に[illegible]にも[illegible]ことであらう。[illegible]し[illegible]つ[illegible]って[illegible]、他人を[illegible]と[illegible]に[illegible]は、[illegible]力によ[illegible]らすれば[illegible]する[illegible]することを[illegible]ないと[illegible]に[illegible]ないと云ふ人生觀を前提とすると、[illegible]の[illegible][illegible]であるとするを[illegible]るに從つている。[illegible]し[illegible]大分によって[illegible]人生觀[illegible]するといふ[illegible]する以上、[illegible]觀に二[illegible]の對立[illegible]るのは[illegible]、なら[illegible]

人生[illegible]に二様の對[illegible]する[illegible]な[illegible]、[illegible]に[illegible]ば[illegible]にも[illegible]自ら[illegible]る。[illegible]は今は[illegible]い。[illegible]代には[illegible]かと云へ[illegible]人生觀[illegible]あつ[illegible]人を一個の[illegible]として之を[illegible]る。[illegible]の[illegible]。[illegible]には[illegible]を[illegible]ない。[illegible]の本[illegible]あるので、人間の[illegible]に[illegible]するに[illegible]る。[illegible]に立つて[illegible]くべく[illegible]に[illegible]の[illegible]者[illegible]として[illegible]へ[illegible][illegible]の[illegible]い[illegible]のとすべき[illegible]それている。[illegible]に[illegible]て[illegible]し[illegible]の中、[illegible]して、[illegible]を指いて行く[illegible]に[illegible]して、人間の[illegible]とする。[illegible]の[illegible]人[illegible]人たる[illegible]以の[illegible]するを觀るから、[illegible]も亦自ら[illegible]性の中に[illegible]せんとするのである。斯くして[illegible]一

類の人生觀の歴史上に於ける經驗論者と、他の一面から云へば自然科學と理想主義的哲學との成敗消長とを云つてゐる。

自然主義的人生觀に立つて權力一元的國家觀を立てた最も著しい代表者としてはホッブスを擧ぐることが出來ると考へる。彼は人間を自然の状態に放任すれば永久の戰爭あるのみと考へた。斯くては人間は生存の目的を達することが出來ないから、各々其自由を抛つて團體生活を營んだ。彼の社會契約說は同時に權力一元的の國家觀に立つものである。之れ程鮮明でなくとも例へば今日の官僚政治家が動ゝもすれば云ふが如く、自分丈は偉い、一般民衆は暗愚だとする立場を取れば、どうしても權力服從によつて天下を率ゐて行くの外に途はないと考ふるのは當然だ。牛馬をして我用を爲さしむるためには結局鞭が必要だと云ふと同じである。

尤も自然科學的人生觀を採る國家觀が常にホッブス流の見解になると限るのは誤りだ。同じく人間を一個の自然物に過ぎずと觀たものゝ中にもクロポトキンのやうに、人間の自然の本性を殺伐なものと觀ず、自ら團體生活を可能ならしめ發達せしむるに都合のいゝいろ〳〵の仕組を創造する所の相互扶助の本能が最も本質的なものだと說いたのもある。從つて彼は人類の生活に國家は要らない、國家に却つて此自然の本能の發達を妨ぐると見た。彼は人類を[illegible]的動物と見ない。飽くまで自然主義の見解を取つて居るが、然し其結論として出て來る國家觀に至つては、普通の理想主義者以上に人類の自由を主張する。但し之は稀な例外で、多くの自然主義的人生觀は皆人類の本性を利己的な、殺伐なものと見たのである。斯う考へて見ると我國の先覺政治家の手本となつた獨逸の國家觀は獨逸特有の事情を背景として發生したと云ふ事の外に、當時歐洲の思想界に於て自然主義的人生觀が頗る優勢を占めて居つたと云ふ事實を閑却することは出來ない。之と同時に之を感染れて歸つた我國の政治家は、其後に於て思想問題を理解すべき、又は世界の思想の推移に對應して自己の立場を正すべき能力を全く缺いて居つた。昨今の大臣宰相だつて一度思想問題なぞに言及すると驚くべき程の低能を臆面もなく曝らして居るではないか。之れ一時覺えたものは終生之を金科玉條とする。やがて世界の思想は一轉する。それでも彼等は五十年前の舊夢に迷うて醒めない。今までは迷から覺める機會もなかつたらうが、先達ての講和會議であれ程明白に彼我根本思想の隔離を暴露しながら、尙それでも氣が附かないのだから呆れる。

前世紀の終り頃から段々理想主義的立場が勃興して自然主義的立場を征服した。其結果自ら國家に關する見方も大いに變つ

たので、それが自然[illegible]の青年にも[illegible]した。今日の青年は境遇[illegible]に於て、[illegible]の[illegible]とは全く別の天地の空氣を[illegible]。[illegible]て云へば[illegible]作つた教育[illegible]門で多少のよい[illegible]つたに[illegible]ない[illegible]、[illegible]せられた大[illegible]自ら[illegible]に[illegible]たので、[illegible]は[illegible]に[illegible]の問[illegible]ために何時までも門へらかない。斯くして[illegible]の[illegible]。門に[illegible]、[illegible]に[illegible]界の[illegible]した。あ[illegible]く[illegible]の口を[illegible]には、之を[illegible]い[illegible]は[illegible]けれども、今や[illegible]も十年を経過した、[illegible]しい時代の[illegible]ではないか。

[illegible]新聞[illegible]の[illegible]

今[illegible]に[illegible]たが、甚だ[illegible]的人[illegible]んにな[illegible]て[illegible]すべか[illegible]で[illegible]くても[illegible]に[illegible]の[illegible]つた。[illegible]に[illegible]。大[illegible]べ[illegible]のであるが、[illegible]ではない。[illegible]の[illegible]つた[illegible]つ[illegible]に[illegible]と[illegible]む[illegible]は、之れ亦去年一月號の拙論の中に説いた。一旦行われた[illegible]く[illegible]なる[illegible]は、自分獨りで急に矛先を收むる譯にも行かず、大勢に驅かれて止むなく軍閥的威勢を張ると云ふ事になると、[illegible]にも内外[illegible]の勢力を統一するの必要に迫らるゝ所から[illegible]の自由の制限だの、[illegible]心から[illegible]などを一々問[illegible]にして[illegible]ない。理窟はどうであらうが、實際に於りを唯一つ[illegible]なその如く見做して、[illegible]なる指[illegible]らねばならなかつた。單にそれ丈ならいゝ。[illegible]く[illegible]立てた[illegible]に[illegible]し[illegible]り一層よく[illegible]功したので[illegible]に[illegible]ると[illegible]るやうになつた。そこで[illegible]など[illegible]、[illegible]の[illegible]界の進歩と[illegible]にドシ／＼[illegible]な[illegible]抜けなつてある。西洋では[illegible]が一[illegible]であつた事は云ふ[illegible]あたいが、[illegible]も之に倣ふた。[illegible]に不[illegible]ゝもう[illegible]少くなかつた。

併しながら新らしい人[illegible]に[illegible]かた[illegible]の人心[illegible]、[illegible]うしても[illegible]かゝる[illegible]に[illegible]は出来なかつた。そこで[illegible]の[illegible]として押し出さないまでも、少く[illegible]たる一[illegible]て權力的[illegible]に對する[illegible]たる事はこと空[illegible]。[illegible]如何にも[illegible]て行くので、[illegible]の事に[illegible]人たる[illegible]者からは、何[illegible]つた[illegible]

揮であつた。恰も此心には學徳の高い老先生が、自分の弟子が愚鈍な方法で實業界に於て華々しい活動をなすを見て、如何にも不安に感じ乍ら何分實際に成功を遂げて居るので、思ひ切つた忠告も出來ないと云ふやうなものであつたと思ふ。併しもともと間違つた方法で[illegible]何時迄も續く道理はない。以前の時代には以前の方法で成功もしようが、世の中が安定すれば行き詰る時が來る。國に乗つて行つた如何成功の夢が俄然として破れると、初めて所謂老先生の思想が勇氣と確信を以て社會の表面に乘り出すことになる。而して今度の歐州戰爭は、更に有力に云へば世界の結局の失敗は、隠れたる底流をして表面の上騰たらしむる機縁となつたものではないか。之れ從來の偏り一元の國家觀を打碎し、相當見識の精神主義の上に我々の國家生活を築き直さんとする運動の勃然として起つた所以である。

但し皮相的に觀れば、今度の戰爭を契機として我々の國家觀が甲から乙に急轉回してしまつたやうに見ゆるけれども、實はさうではない。物事はすべて一朝一夕に變轉するものではなく、常に其由つて來る深い筋があるのである。戰爭以前に於ても新らしい國家觀を生み出すべき努力は可なり盛んにあらはれて居つた。只從來の國家觀が頑強に勢力を張つて居つた爲に、新思想の發達に資すべき運動は目前の障碍を排除すべくちよいちよい斷片的にあらはるゝに過ぎなかつた。詰り此等の運動が明白にあらはれた時期が[illegible]戰爭と相前後して今日の新國家觀に到達するのである。

權力一點張の國家觀に對する反抗の一番古い形の一つは、人民の自由の擁護と云ふ事である。人類の政治生活は權力の關係によつて初めて可能だとせられて居つた時代にも、人々は[illegible]本能的に其自由の全部を擧げて國家に托するに忍びなかつた。そこで矢張り人民の自由をどれだけの範圍で之を認むべきやは、當時にあつても重要な實際問題であつた。それでも初めは權力の統制と云ふ事が非常に大事なものとされて居つたから、之に[illegible]從ふ。只權力の發動――此の[illegible]たる國家の[illegible]に人民の自由意思を以てせしめようと云ふ事で權力と自由との調和を見出さうとした。國家の意思の構成には一般人民の自由意思をして與らしむる。併し一旦國家の意思が定まると之に[illegible]つたら人民は絶對に之に從はなければならない。[illegible]る點に於て人民に強要しようがそれは問ふ所でない。[illegible]人民の政治的自由とは、國家意思の構成に人民が與ると云ふ事である。約言すれば政治的自由とは統治權の[illegible]と云ふ形式[illegible]したのであつた。一旦斯うなつた自由の要求に、權力[illegible]に[illegible]されて、當初此處で止つて居つたのである。併し[illegible]

々の自由を要求する本能が十分に満足されない。國家意思の形成にも參與したいのに任ぜられたが、之で斯くして作られた國家の權力は又我々の生活に對して、我々の本來の自由を損はないやうに活動して貰はなければならない。即ち我々の自由は形式的に保證さるるのみならず、又實質的にも保障さるゝを必要とする。今我々の要求は之のみでは十分でない。更に我々の實質的自由を保障するの爲めには、[illegible]の活動に對し自然の法則を立てねばならないと云ふ事になる。斯うなると政治は權力一點張りの國家觀は成り立たなくなる。如何にせば權力の威力を立てゝ、國家の活動を導いて行くかと云ふ問題でなくして、どう云ふ條件の下に權力の活動を支配すれば政治が旨く行くかを說くのが政治學の任務となつた。一方には飽くまでも權力一元で押し通さうとする政治家があるのに、他方民衆は權力の活動を支配すべき原則を立てんことを要求する。茲に、少くとも權力一點張りでやられては困ると不平を云ふ人に、國民は觀念の轉換が行はれたと云つていゝ。

我々の自由を形式的に保障するだけでは足りないとする要求は、やがて國家觀を支持すべからざるに至らしむるものであるかは前者の通りであるが、此方面の自由の爲に政治家も與つて力あるものは社會主義の活動である。社會主義は如何に政治的自由が形式的に保障されても、其物質的基調が不完全である以上、我々の實質的自由は實現し得るものではない。我々を本當に自由な人間たらしむるには、先づ以て共生活問題を解決してやらねばならないと云ふのである。此考から社會主義は國家に對していろ〳〵の要求をなして居るが、それは時として權力主義の國家觀を強めたこともあるが、又其反動になつた場合もある。社會主義と權力國家觀との關係は一概には云へない。社會主義は最近の各過程に於て違ふ。が、少くとも最近の或時期に於ては著しく國家觀を根柢から動搖せしめて居るのであつた。

社會主義者も其初めは政治的自由の形式的の保障によつて彼等の理想を實現し得べしと考へたのであつた。社會主義の理想は即ち現在の經濟系統一切を勞働者の手に收めせんとするにある。それには勞働者が天下を取ればいゝ。而して勞働者は何なる國に於ても國民中の大多數を占めて居るから、普通選擧の下に投票の結果を得れば容易に議會のマヂョリティを制することが出來る。かくて彼等は一方に普通選擧の施行を主張し、他の一方に勞働者の階級的結束を說いた。即ち形式的意味に於ける政治的自由を完全に獲得し、之を十二分に活用すれば彼等は[illegible]には成ると見たのである。彼は自分等の意思が最も多く[illegible]とし

て發生するのだから問題はないと考へた。彼等が說く如き制度で止まつて居る間は、權力的現象の政界に於ける資本勢力は免れない。無論彼等は其常時の指導階級に反對するけれども、之は普通階級の權力濫用に對する反對であつて、權力其物を非とするのではない。彼等は現在の指導階級に取つて代つて自分達自ら權力を握らんとするのである。此點に於てクロポトキンは徹頭徹尾に社會主義を罵つたものだ。又此點に於て社會主義は如何に現在の國家に反對すると云つても、要するに相對的國家否認主義の域を脱するものではない。

然るに近頃の社會主義の仲間の中には、現在の政治組織を利用して此理想の實現を計らんとするのは根本的に間違つて居ると主張するものが多くなつた。そこで一方には直ちに革命的手段に訴へて現在の國家を破壞すべしと說くものもあるが、又他の一方には民衆の自由集團の中に理想實現の途を見出すべしとするものもある。前の立場は如何にして早く現在の支配階級を斥けんかの問題で、いはゞ一日も早く自分達が權力を握る世の中にしたいと云ふのである。成功を急ぐ所から自然尚一層猛烈な權力主義に陥らざるを得ない。けれども他の一方のものは、代表と云ふ制度では民衆の直接の意思が通らない、強いて此制度を立てると、民衆の意思が非代表者と稱するものゝ意思によつて強制される。かゝる中央集權的組織は[illegible]資する所以にならない。民衆の自由を保障するには、[illegible]團を單位とし、此等のものの自由な合意[illegible]ふやうにしなければならないと云ふ考へに[illegible]。露國のソヴイエット・システムの如きは正に此の理想に基くもので、即ち權力の統制によらざる社會生活の可能と[illegible]を信ずるものである。ソヴイエット・システムは一つの代表的のもの[illegible]ろが、近頃の社會主義の中には斯う云ふ系統に屬する[illegible]ものが段々に多い。

社會主義の理論は人間の本質的自由を餘りに物質的に偏した所に難はある。然し社會主義は物質的方面さへよければ、人間の自由の問題は完全に解決すると云ふものばかりではない、單に的人間の自由は物質的境遇を相當に與へてやらなければ實際的に完うせらるゝものでない、と云ふ事を教へた點に於て大いに貢獻をなして居るものである。之によつて少くとも形式的自由の外に考ふべき實質的問題の存する事が明かにされた。その實質的自由を如何にして保障すべきかの問題になると、一派の社會主義は權力的國家觀と兩立する答案を與へたものもあるけれども、權力以外の內面的な自由裁量に社會生活を[illegible]せしむべき根據ありとする者は、此等社會主義の理論によつて大いにそ

の信を高めらた事は無い。

自然主義に對する反抗として最も著しいものは、無政府主義に對する國民の所謂國家主義の再興である。昨今極端な無政府主義を排斥するものもないではないが、之は同主義に對する所謂破壊と見るよりも、寧ろ該主義に對する消極的な結果と見るべきであらう。何故なれば之に對する反感が起り初むると、天下の人心がこぞつて同じやうな傾向に趨つて居るものによつて、自家の保守者を求めんとするに熱心なるは世の常であるからである。從來政府が注意して居ると、自分の根本の立場を論じ云ふやうな事に就いて、何時も沈默され、立場を明確にしなければども、少くとも何時の間にか默然として無政府主義に對り、自然に主義に對する不滿の感情に一時の満足を與へようとするのである。從つて國家主義的傾向なるものも一時は唱へらるゝやうなことがあるけれども、併し然ながら長く續くべき事ではない。何れにしても昨今は政府の權力が無政府主義に對するやうな狀態の間へられることは明瞭であらう。何者かは此の現象を見て大いに憂慮して居るけれども、予輩は寧ろ此傾向に慰めたなる國家主義の頭を擡げんとするものである。と云つて國家主義に關する昨今の理論が何物も主張していないと云ふ考で

ない事は云ふまでもない。

昨今流行する所謂國家否定說には絕對的否定說と相對的否認說との二種を區別する必要がある。相對的否認說は資本家の設備に抵抗を有する現在の國家を否認すると云ふので、我々の社會生活が權力によつて統制さるゝの事實を根本的に否認するものではない。權力を資本家の手から勞働者の手に回收せんが爲めに、資本家の據る國家を破壊せんとするのである。國家は資本家が勞働者に對抗する爲めの武器となつて居る。資本家の武器なるが故に之を打破すべしと云ふので、武器其物を絕對に用ふべからずと云ふのではない。之が所謂多數の社會主義の立場である。けれども無政府主義はいはば武器其物を絕對に用ふべからずとする立場であつて、資本家が權力を握るのがわるいと同じ理由で、勞働者の權力を握るのも亦同じくわるいとし、國家否認に對する反抗の念は、初め社會主義の立場を自分達の代辯者と考へて居つたのに、近頃は更に進んで絕對的國家否認說の無政府主義にたよらんとする傾向のあるのは大いに注目すべき事である。

無政府主義の代表者としてはクロポトキンを數ぐるを常とする。殊に昨今切りに研究さるゝもクロポトキンの學說である。

ロポトキンは人間の共存生活は全然權力の統制を缺いても可能であると云ふ事を說いたのみならず、更に進んで權力の統制は却つて圓滿なる團體生活の進行と發展とを攪亂すると說いた。斯くして國家は如何なる形態にあるを問はず——資本家の國家でも、勞働者の國家でも——絶對に之を排除しなければならないと說いた。彼に從いて更にいろ〳〵極端な過激な說を吐いて居るが、併し彼の主張は何處までも科學的基礎に立つもので、只現在の國の政府が餘りに專制だから、之に叛逆して起つたと云ふやうな性質のものではない。此點に於て彼の主張は學問上無政府主義の名を與へられて居るが、併し今日から觀ると、非學問的根據に立つ謬論であると云ふ事が明かになつた。蓋し彼は人間の本能を相互扶助の本能により、自ら圓滿なる團體生活を創成するものと觀た。當時は所謂自然科學的人生觀の所謂盛なる際で、彼も亦御多分に洩れず、人間を單純な一個の生物としてのみ見た。只普通の生物學者の人生觀と異る所は、他の多くの人は生存競爭の爲めに私慾なる競爭を辭せないものと觀るに反し、彼は人類の根本の面目は相互扶助にありと觀た點にある。此點に於て彼は少くとも全盛時代のダルウインと正に正反對の極端に立つものである。人間に非自然の本能の殘るが儘に放任して置けばそれでい丶、彼等はひとりでに必要な制度を工夫して圓滿に生存を遂げる。[illegible]と云ふものが出て來るからわるいのだと云ふ。若し人間[illegible]に[illegible]る彼の前提が正しいものなら、彼の無政府主義は千古不易の[illegible]理に相違ないが、併し其前提が正しくない。相互扶助の本能もあらう。けれども其反對の本能もあることは[illegible]ない。ダルウインの說く所も一面の眞理なら、クロポトキンの說く所も亦同じく一面の眞理たるを免れない。斯くしてクロポトキンの誤つた根據に立つた無政府主義は學說としては成り立たない[illegible]になる。從つて最近まで一寸變つた珍らしい說として[illegible]一部にその名を傳するに止まり、クロポトキンの名は[illegible]に今日生存してゐる人なるに拘らず、學問上に於ては[illegible]人なるかの如くに取扱はれ、現[illegible]とは殆と沒交涉となつてゐたのである。

然るに昨今に至つてクロポトキンの名が[illegible]彼の名[illegible]さる丶無政府主義が、急に持て囃さる丶やうになつたのは[illegible]どう云ふ譯か。彼の說の據つて以て立つ所の[illegible]學問上[illegible]であるとする點は、今日猶も變らない。それにも拘らず彼の名が過去の墳墓から復活した所以は、思ふに、彼の[illegible]に價値すべき說を見出したのでなくして、彼が[illegible]に[illegible]する議論の進行の中に、個人の自由に對する如何にも深厚なる同情と、國權干涉の弊害に關する如何にも深刻なる指摘とに共鳴し

存在せぬからである。国家の作用なき下に[illegible]何[illegible]り人間の社會に[illegible]、共[illegible]の[illegible]を創始するにつき、クロポトキン程明白に云つてのけたものはない。彼は[illegible]の[illegible]として自ら[illegible]な[illegible]た村[illegible]の[illegible]を知つて[illegible]をなさしめたものであらねばならぬ。彼の天才は常に[illegible]を[illegible]的に[illegible]するに止らず。我々は[illegible]につき可なり深い智識と[illegible]とを付與して[illegible]、今日我々が之を讀んでも[illegible]する所頗る多きを覺ゆるのである。何れにしても斯くして彼は[illegible]の今日に貢獻した。

只[illegible]の今日に[illegible]所以は、尤、無政府主義の[illegible]に從するは[illegible]とたる[illegible]の[illegible]に[illegible]するのであるけれども、一面[illegible]の名が[illegible]せらるると、彼の名に伴ふすべてのものが[illegible]一[illegible]ることになるのは[illegible]ない。從つて無政府[illegible]も[illegible]に[illegible]いに於て語ることとになつた。[illegible]の[illegible]行[illegible]のあるは[illegible]くも[illegible]にもあるまい。只我々はクロポトキンの[illegible]に[illegible]せる所以の[illegible]を[illegible]らなければならない。

[illegible]に[illegible]し[illegible]の[illegible]として[illegible]いた。[illegible]し[illegible]と云ふ名[illegible]について[illegible]べき[illegible]るは[illegible]してゐつたからである。[illegible]しく[illegible]は日本に[illegible]つたものにはない。[illegible]でも[illegible]ては[illegible]どで[illegible]の[illegible]や[illegible]と国家を[illegible]するといふやうな[illegible]べき[illegible]を[illegible]以て[illegible]へて[illegible]たこともあるからである。けれども[illegible]に[illegible]るが如く、[illegible]くの如き[illegible]の[illegible]政に於ける[illegible]で、いは[illegible]の[illegible]所であつて、[illegible]究の結果ではない。從つて[illegible]問題のやうな[illegible]兩者の間に於てさう云ふ[illegible]な無政府主義には[illegible]たつて[illegible]やうな[illegible]ないのである。故に[illegible]に[illegible]く[illegible]さる、無政府主義は、一[illegible]人[illegible]心[illegible]するやうたも[illegible]にまで[illegible]なものと[illegible]なければならない。[illegible]中には[illegible]りを[illegible]くものがない[illegible]はない。その[illegible]りに[illegible]て[illegible]一[illegible]の[illegible]たる[illegible]れないとはいへ、所謂[illegible]無政府主義は[illegible]に[illegible]て[illegible]を異にする[illegible]あるを認めなければならない。

近代無政府主義の一[illegible]に、「[illegible]の[illegible]として[illegible]力を[illegible]てることとを[illegible]し、之に代らしむ[illegible]に[illegible]以てせんとするにある。[illegible]ふのではない、[illegible]ふのだと[illegible]にしようと云ふ[illegible]である。[illegible]みの[illegible]する[illegible]の中と云ふものは、夫れ自身の[illegible]者は人によつて[illegible]にする。クロポトキンは[illegible]の自[illegible]的[illegible]いては[illegible]に排斥したけれども、今日の[illegible]に人々の不安全なる[illegible]許にして[illegible]を

支配するやうになる爲めに、權力の行使によつて人類の生活を調節する必要あることを認めて居る。權力は目的ではない。道理を行はれしむる爲めの手段と云つてゐる。此意味に於て近代の思想は絕對に權力を否認するのではないけれども、從來の國家が餘りに權力の濫用に過ぎた爲めに、特に權力一元の國家說排斥の意味を强く云ふ爲めに權力の否認卽ち無政府主義を主張するのである。尤も今日云ふやうな無政府主義の理論が堅まるまでには、從來の國家が餘りに權力を濫用した事に對する反抗の餘り、一時は隨分極端な說も出た。權力の濫用が格別甚しいと云ふ特別の政體の下に又滅茶苦茶に權力を提說しようと云ふ思想と運動とが起つたのである。之れ露西亞に於て無政府主義の說と虛無黨の運動とが起つた所以である。けれども只徒らに反抗するのでは滿足し得ないので、いろ〳〵研究した結果只政治上の反抗ばかりではない。そこには相當の理屈があると云ふので、そこに一つの學問上の根據を摑まんとしたのがクロポトキンである。故に無政府主義の發達を歷史的に觀て區別するたら之を三段に分つことが出來る。第一は空想的無政府主義、第二は科學的無政府主義、第三は人道主義的無政府主義と云つていゝ。之れは恰度社會主義がマルクスに至つて空想的より科學的に移り、昨今また哲學的科學の綫を切つて理想主義的根據に立たんとしてゐるのと同様である。空想的時代に於ては理想主義の方が強かつたが、無政府主義の方には科學的傾向によつた。此意味の無政府主義は如何にも合理的である。併し斯う云ふ事の無政府主義は協調の所在であつて、斯くの如きもの發生せしむべき丈けの條件を備へてゐない所に於ては強ち之を恐るべき理由はない。斯う云ふ違つた境遇の下に於て無政府主義が盛んになつたとすればそれは必ずや理論の方から來る。理論の方から來る以上は、少くとも無用の壓迫を加へて故らに激發せしめる限り、無政府主義は忽ち實際的危險を失ふ筈のものである。況んや昨今指し唱さるゝ無政府主義は實は無政府主義と云ふ名に煩はされ不當に危險視されて居るので、其實一種の極端な人道主義の主張に外ならざるに於ておや。

尤も無政府主義と云ふ文字が使用せられるのは、無政府と云ふ文字が特別の例に於て丸で違つた意味に使はるゝことからも來る。前にも述べた如く無政府主義は卽ち權力の否認であつて――正しく云へば、權力を以て社會秩序の唯一の根據とする立場を排斥するものであつて、結局に於て世の中の事はすべて道理によつて解決せしめんことを主張するものに外ならない。所が他の一面に於て道理の行はれない權力で强行する無政府と云ふ意味を以ていひあらはすこともある。例へば極端の同

[illegible]な[illegible]総て[illegible]も物者はない[illegible]の[illegible]に
ま[illegible]を指して[illegible]と云ふ。今[illegible]
[illegible]
[illegible]ら之れ[illegible]云ふ[illegible]
[illegible]図[illegible]して、[illegible]るは[illegible]に
[illegible]云ふ[illegible]である。[illegible]を[illegible]
[illegible]るは[illegible]とは[illegible]
[illegible]るのでは[illegible]
[illegible]るの[illegible]
[illegible]一日[illegible]
[illegible]
[illegible]ロ[illegible]は[illegible]の[illegible]
[illegible]はない[illegible]
[illegible]は[illegible]
[illegible]へ[illegible]しき[illegible]
[illegible]云ふ[illegible]ロ[illegible]トキンの[illegible]
た[illegible]いはば[illegible]
[illegible]しくいへば、[illegible]
あせなたい[illegible]しい生活を[illegible]ふのおき

事なのである。権力あつて人あるにあらず、人あつて権力ある
のだ。権力[illegible]は人[illegible]くは人格[illegible]の要求によつて[illegible]
作せられ[illegible]ばならぬ事を[illegible]するのである。即ち我々の[illegible]
活をして[illegible]る丈け[illegible]的[illegible]求と一致せしめようとする
のである。[illegible]をして[illegible]のために存するものとする[illegible]
[illegible]に流れる。[illegible]ら云ふ[illegible]クロポトキンの[illegible]
[illegible]に[illegible]つたに[illegible]大いに今[illegible]
[illegible]する[illegible]ある、
クロポトキンを現代に[illegible]の[illegible]に[illegible]
したも[illegible]なく、[illegible]トランド・ラッセルであらう。
[illegible]の中にクロポトキン[illegible]
[illegible]なら、彼[illegible]ラッセルと[illegible]
[illegible]い[illegible]ない。ラッセ[illegible]おいてはクロポ[illegible]
[illegible]より[illegible]れない。けれども[illegible]
[illegible]ては、[illegible]
かない。ラッセルは人間にクロポトキンの[illegible]くやうな[illegible]
[illegible]あること[illegible]むしろ共に、人性の[illegible]説いた[illegible]
[illegible]こさし[illegible]とを[illegible]めた。[illegible]に[illegible]
[illegible]と[illegible]の二つがあらゆる行為の源泉であるとし
た。併しながら[illegible]は[illegible]本能[illegible]にする外[illegible]また[illegible]

には理性の選擇が行はるゝことを認め、やがて創造的衝動に所有的衝動を抑へて獨り盛んに行はれしめんとすることを求めて居る。理性の所産たる社會國家の諸ろ／＼の制度は此爲めに起つた。而して彼は更に進んで、有るべからざる所有的衝動をなからしめんとする理性の要求と、無かるべからざる創造的衝動を有らしめんとする要求と、の間に價値の上下を附し、無かるべからざるものを有らしめんとする方面を盛んに振興する時は、有るべからざるものは獨りでに無くなる。有るべからざるものを無からしめんとすることによつては、決して無かるべからざるものは出て來ない。此點に於て國家は須らく開發的教育的であるべく、決して防止的警察的であつてはならないと説いて居る。彼が更に國權發動の細目について論ずる所は必ずしも全部首肯し難い點もあるが、兎に角人類の本性の自由なる發展を妨害すべく、權力の之に濫りに干渉するの非を指摘した點は近代人の新國家觀を最も明白に代表したものといはなければならない。

之を要するに新國家觀は、舊式の國家主義に反對する。國家主義に反對すると云ふ事は國權が即ち社會生活の唯一の統制原理なりとする論者の屢々唱ふるが如き團體生活其物の根本的破壞を希望するものではない。又絶對的無政府主義者の空想するが如き權力其物を否定せんとするものでもない。只權力の濫用に反對し、權力一元の獨裁を排斥し、權力の運用をして其適當なる分野に止り、道德の要求と合致せしめ、以て其の鞏固なる社會生活の維持と發達とを圖らんとするものである。

(五)新國家觀と關聯して起る二三の謬想、

新國家觀は權力の價値を權力無くして完全に治まるやうな社會生活に導く爲に、不完全な人性を訓練するの用をなすと云ふ所に置く。斯くして權力によつて訓練さるゝ我々の社會生活の究極の理想は無權力即ち無政府の狀態である。此事は東洋にも昔からある考で、例へば彼の刑は刑無きを以て其理想とすると云ふやうな言葉にもあらはされて居る。此意義に於て我々も亦政治の理想は無政府主義にありと云ふ事もあるが、ウッカリ無政府と云ふ文字を使ふことにいろ／＼の誤解を生ずる。無權力を理想とすると云ふ事は、我々の努力の主觀的方針としては、不撓不屈の精神を以て理想實現の目標に突進することであるけれども、又事實の冷靜なる客觀的認識としては、凡そ理想なるものは無限の努力の上に初めて到達せらるゝと觀念すべきもので、有限の時間内に於て實現せらるべきものではない。

故に[illegible]の[illegible]の為に努力すると云ふ事は到底[illegible]み得ざる政物[illegible]として努力するやうなものである。[illegible]に實現し得ざるものを、[illegible]實現せんと欲求する時に、理[illegible]の理想た[illegible]ある。我々の政治家は多く[illegible]に過ぎ、[illegible]云ふ事は馬鹿々々しい[illegible]とするから[illegible]に[illegible]がない。[illegible]に實現し得べからざるものゝ上に理想に[illegible]めをつけるのも[illegible]だが、又他[illegible]するの[illegible]に之を實現し[illegible]るもの[illegible]も[illegible]る。[illegible]も亦段[illegible]例へば[illegible]に於ける[illegible]の[illegible]開を[illegible]して、[illegible]力を使用とするもの、又[illegible]を計り[illegible]的[illegible]へる[illegible]ふる[illegible]と同じやうな[illegible]の例[illegible]た。例へば[illegible]的[illegible]とすると云ふ事に、[illegible]的に[illegible]するも、更に[illegible]滅すると云ふ[illegible]だと云ふの[illegible]價値[illegible]化して[illegible]ふる事は[illegible][illegible]ふべからざる誤りであるのに、裁判官[illegible]で之を犯し、而かも此[illegible]の上に人を罰するに於っては最も亦甚だしい。[illegible]に云ふ[illegible]になると云ふ迄の

裁判官に分らないの[illegible]だ。自分の知らない事についてはそれぐ専門家の[illegible]を必要とするのに、獨り[illegible]問題について我[illegible]官[illegible]り[illegible]みの見解を押し[illegible]とするのは[illegible]であると同時に又[illegible]である。

要するに[illegible]すると云ふ[illegible]は、我[illegible]力がないと云ふのではない。[illegible]の[illegible]云ふ[illegible]い事をいはずとも、我々の[illegible]に[illegible]な[illegible]の事に[illegible]したいと云ふの[illegible]なので[illegible]にならずんば[illegible]かない人性を[illegible]て、[illegible]くやうな、[illegible][illegible]な[illegible]に[illegible]な[illegible]たし[illegible]るやうな[illegible]作りたいと云ふの[illegible]が、も[illegible]の[illegible]くあり、[illegible]て此理[illegible]によ[illegible]せられ[illegible]ばならない[illegible]ふのと[illegible]ふ[illegible]になる[illegible]

一我々は[illegible]に[illegible]

[illegible]には、我々の全生[illegible]行使すべく、[illegible]目[illegible]によつて[illegible]せられなければならないとする[illegible]我々の[illegible]は無[illegible]力の[illegible]つて、[illegible]我々の今日の[illegible]

家生活は固より完全なものではない。我々の社會生活は極めて幼稚なものから今日の國家生活にまで進歩した。けれども此國家生活はまだ進歩の途中にあるもので、此先き尚發展して他の形に變らなければならない。斯くして今日の國家生活は我々の理想的見地からすれば甚だ不完全なものであるが、若し單に不完全だと云ふ點にのみ着眼してギルド社會主義の說く所のやうに考ふるのは我が所謂新國家觀の立場ではない。彼も我も現在の國家生活を不完全とする點に於ては同一だが、ギルド社會主義に在て不完全と云ふのは空間的であり、我が新國家觀にあつては時間的意義に於て、之を云ふのが二者の大いに相異る所である。

新國家觀は現在の國家生活を更により高き理想的狀態にまで進むべき途中のものと觀る。永い進化の過程に於て、低き地位にあると云ふのである。然るにギルド社會主義に於ては國家が更に進んで完全な社會生活に進むものと見ない。我々の全社會生活は各職分によつて各方面を異にする各種の集團生活の全體によつて成し遂げらるゝ。各職分的集團はすべて相集つて一つの完全な生活體を爲すので、夫れ自身は不完全なものだ。而して國家は我々の生活全般を蔽ふものではなくして、或一面の職分を抱持するものだから、即ち空間的意義に於て不完全だと觀るのである。國家は政府や議會や社會やなぞと同じやうに、我々の生活の一面を司るものであつて、此等を全部集めたものが即ち渾然たる全一の生活體である。思ふに斯う云ふのは、要するに教會其他の對等な團體を認むる英國特有の社會思想を代表とするは云ふ迄もないが、又一つには近代の國家組織が權力の行使を誤つて其本來の目的に裏切つた爲めに起つたものであらう。即ち權力の濫用が一面に於て正しい國家觀の發達を促したが、英國特有の社會思想は又ギルド社會主義のやうな特な國家觀をも發生せしめたものである。一つ事が間違ふと、それに刺戟されていろ〱な說が起るものだ。が、やがて間違つた、又偏つた說は篩ひ落されて、正しいものが一つ殘る。ギルド社會主義は此點に於て英國を離れて何所にも擴まるべき普遍的性質を有する學說と認むることは出來ない。

尙ギルド社會主義に人は己れの人格を全體として代表せしむることは出來ない、各職分の特殊の方面に於てのみ代表せしむることが出來る、然らば今日の代議政體の下に於ては我々は各種の方面に於て代表されなければいけない。我々の生活の一面を代表するに過ぎざる議會に我々の生活全體の規律を托するのは誤りだ。斯くして彼はナショナル・ギルド會議を主張するのであるが、若し此說を正しいとするたらギルド會議と議會のみ

[illegible]ない。[illegible]の部門を
[illegible]代[illegible]せしなることの[illegible]人[illegible]の代[illegible]
[illegible]で、[illegible]の人[illegible]によつ
[illegible]せし[illegible]ことが[illegible]へる。[illegible]
[illegible]人をして行はしめることへ[illegible]
[illegible]任するといふ[illegible]人の[illegible]を取つ
[illegible]人の[illegible]中に自分
[illegible]ことが。[illegible]へたけれ
[illegible]ならない[illegible]になる。[illegible]考へ
ても[illegible]る。
[illegible]人[illegible]に論
[illegible]ない。[illegible]する人心の
[illegible]ないけれども、[illegible]代[illegible]の位
[illegible]はないと思ふ。

一六　結論

[illegible]につき[illegible]なる[illegible]を払い
て[illegible]に、[illegible]にも[illegible]に
[illegible]なくして[illegible]の[illegible]より、日本今
[illegible]ことである

[illegible]



文學者開業時代
―『俺の自叙傳』第四―
大泉黒石

一

世間には閑人が多いと見えて、俺の書いた物がどうのこうのと勝手なことを言ふて來る、二回目の自叙傳が出た時に「また黒石張りですか」とハガキで挨拶した男があつたが、黒石張りも鉛張りも無暗に小賣りはしないのだ。業物なら村正だ。氣をつけろ。何の祟で文學者になつたのか知らない。兎も角も自叙傳を書いて米屋と酒屋に面食はせた時は痛快だつたが、何しろ家がぼろ／＼で取り壊すから立ち退いて呉れと前々から追立てられてゐた矢先に金が入つたものだから家主につけ込まれた。そして到頭追ひ出されて了つた。止むを得ないと思つて俺は東京中を一日駈けずり廻つたけれども空家は一軒もない。桃太郎の鬼ケ島も正直爺さんの雀のお宿も、行きさへすれば的があつて外れつこないが、俺の家探しは暗がりで鐵砲うつやうに見當がつかぬ。コロンバスだつて厭になるだらうと思つたが、其うちに雜司ケ谷の墓地に迷ひ込んだ。忌々しいから石塔に腰掛けてポツケツト・ウヰスキーを呷つてゐると、其時分墓地の側に住んでゐた艶書學者の小田呑舟が散歩に來て俺の姿を見つけたものだから其處で何をしてゐるんだい、探しかい、ないだらうと云ひ乍らやつて來た。

「なあ呑舟。三界に家がなくつても女は亭主にくつついて居れや大丈夫だが、東京に家がないとして見ると俺は飯の食ひあげ

だ。人間は不自由なもんだと時々お思ふだらう。どうだい家は
ないかね。」
「ないとも限らないが四十円出せるかい。」
「せちがらしい世だね。本郷の家見たいに八畳位のところはない
もんだらうね。家賃ばかり出世したつて仕様がない」
すると作州が
「有名になつたから四十円位造作はないさ」
と傍で云つて、お困らせて了つた。俺は俺で何んだが、
[illegible]へ引越すことも出来ないから、も少し辛抱しませ
うとなりに口を寄せて、苦しくつて堪らないけれども、まだ
動かずに黙つてゐる。何だか俺の家見たいな気がしなくて、
[illegible]のやうだ。今月三十日になると家賃が倍だぞ
つてゐるぞ。俺はないのだから明ば[illegible]の下に行つてゐる。雑司ケ谷の門
[illegible]は何処だと云はれたら直ぐ解る。[illegible]中途半端に似た大
きな[illegible]の門があるだらう。門の内に物凄い大銀杏がサガレン
半島から押し寄せて、風と戦つた跡を残し乍ら、北へ北へと枝
をかしてゐる所だ。この枝にあん坊がおしめを干してある。そ
れから[illegible]七月から家賃を一度も納めずに何処
だと聞けば大抵分る。もう以前のやうに早々と夜逃げも出来な
いお家だから仕方がない。ことへ来てから雑司ケ谷と云ふ所には俺の

やうな夜逃げの出来ないで困つてゐる文學者が有名無名に拘はず
住んでゐることを発見した。小川未明君もその一人だ。
俺の家は雑司ケ谷の入口にあるから、又た村の[illegible]だ。こん
なことを吾輩以下の文學者が聞いたら、怪しからぬ奴だと怒
るかも知れないが、相手が俺だから辛抱してくれさうだ。こう
した、みて引越した翌日から、「吾夫人の主」と「獣を啄くる女」
に取りかゝらうと考へた。一つは中央公論に一つは[illegible]日に
出すのだ。ところが何故か不思議な話がある。新たに一人の男が
「小泉さんにお出で」と例の恰大なる門からのそのそ入つて来
た。一寸会つて聞きたいが、僕は新聞[illegible]には何の定見もな
い男だ。名刺を見ると[illegible]
[illegible]とある。不思議な[illegible]があるさうだ。
「どういふ御用ですか」
「この人を御存になれば[illegible]
んこつちへお出なさい。」
と後ろに隠してゐた男を俺の前に引張り出した。これが[illegible]
から驚いた。[illegible]
て[illegible]
数を[illegible]
て東京へ来た。人々を日返して一寸お話した。こう申したら[illegible]

この音吉さんが牧盗されたやうに聞えますが、牧盗ほどの大罪を犯したのではない。北海道を逃げて東京へ帰る途中、仙臺市外は吉岡町へ差しかゝる頃俄かに降り出す雨、ふと見れば傍なる農家の壁にかけたる古簑があつた。その脇に一丁の鍬があつた。これは彌陀が守護行眺やと音吉さんは押しいたゞいて身に纏ひ、鍬を擔いで、仙臺さして行くうちに雨は晴れたが其儘市中を徘徊する。そこを東通りの交番巡査に怪しまれて捕はれたのが運のつき。白状すれば右の始末であるから窃盗罪で三日間警察に留置かれますた。今度東京へ放たれる囚人があつたのを序に身寄りの此方様まで送り届けましたから、宜敷お引取下さい。」と云ふのだ。音吉がにやにや笑つてゐる。坊主は俺が承知しましたと云ふと、安心して引揚げた。「どうしたんです?」「いや。酷い目にあつたよ。」「何だつて鍬なんぞ擔いで仙臺の町を迂路ついてたんですか」「實は少しでもいゝから東京へ戻る路銀を拵へたいと思つてね。賣り飛ばす積りで盗つたんだが。へつへ」「呆れたね。」音吉はまたにやにや笑つた。音吉の告白によると、北海道へは淺草公園で誘かされて行つたのだ。行つた先は札幌から十里ばかり山の中で、仕事が辛い上に碌々食ふ物も食はないし、段々寒くなるばかりだから命賭けで逃げて來たんだ。

札幌を出てからもう一ケ月になるんださうだ。音吉は昔の一等卒だ。一等卒になるほどだから人間が薄のろで兵隊を罷めてからも碌な仕事にありつかなかつた男だ。内務省の小使を拜命して十七圓四十錢貰つた歴史もある。深川の糧秣倉庫に人夫をやつて梯子から落ちた經驗もある。女房のお袋の死んだ妹の亭主なんだ。俺が錢多を稼ぐ時分に北海道へいゝ口が見つかつたから行くと云つて別れに來た。それつきり逢はないのだ。俺の親類と云ふのは此のんだくれの音吉と、音吉とは兄弟の血を分けた大阪の封助の二人つきりだ。話を聞いて見ると世間の文學者は揃ひも揃つて上品な紳士と淑女ばかりを親類縁者に持つてゐるさうだが、俺の方は音吉と封助だ。音吉に暇さへあれば「現代富豪の財産しらべ」を香具師から五錢で買つて來て感心したり酒を飲んだりして生活する無學者だ。弟の封助は梯子を擔いで年百年中大阪の道頓堀をぐるぐる廻つてゐる梯子賣りだ。たまに金のある奴に出逢ふかと思ふと彌猫だ。事件が起つて親族會議を開くと、貧乏徳利を持ち出してカマボコを摘み乍ら「そうなつちや割に合はねえぜ。俺の身になつて見ろやい。五錢の損だ」などゝ云ふ手合だ。一年に一度位大阪から封助がやつて來る。品川の木賃宿から手紙を寄越して用談があるから是非來いと云ふ。行つて見ると背中に灸を据ゑ乍ら「實はな、

牧野[illegible]よつて、名[illegible]歩いて[illegible]よつた。これから三流に[illegible]よつたんだ[illegible]と云ふ[illegible]だ。その外にまだ利いた風な[illegible]いくら[illegible]、僕の顔を見ると直ぐ逃げるんだ。この[illegible]を[illegible]つかけて[illegible]のソフアに悠々と納まつてゐると[illegible]て來て、[illegible]だつてそらだらしのない[illegible]似をしくれ、人ですな、少しは[illegible]名[illegible]といふことを考へて下さい。昔の[illegible]おやたいんです[illegible]らな。と一時間ばかりのべつに小[illegible]は[illegible]せてゐた[illegible]に、くそつてゐた昔[illegible]甘[illegible]大[illegible]たにおや何[illegible]大[illegible]だい[illegible]つた。やれやれ。昔の[illegible]な。[illegible]一[illegible]出してくんた。久しぶりで[illegible]に入つて、モツキリを一杯引つかけてきんだ、と云ふから[illegible]出すると、僕[illegible]までは[illegible]つて來なかつた。ねえあなた。まあ人には[illegible]ですよ。[illegible]の中でブツブツ云ひ乍ら、にやにや[illegible]てきますよ。[illegible]何だな[illegible]いわ[illegible]そめる。

「何と云ふ[illegible]出して[illegible]だらうか」と[illegible]が心配する[illegible]ほつと[illegible]。ほつとけ。[illegible]には[illegible]へ[illegible]んでれが[illegible]なんだ。今に[illegible]をひつけて[illegible]か、[illegible]つちまうぞと云つたが、俺[illegible]さ[illegible]うに、そのまはつてゐなかつた。翌日もなつてゐないのが、お[illegible]で[illegible]出せると[illegible]つてすんつゐると、またお[illegible]込んで來た。文學者の[illegible]をかけて、[illegible]

路の販賣をはじめてから、色んな人が毎日二人ばかり俺の顔を見に來る。顔の見[illegible]け[illegible]支へないが、仕事の邪魔になるのだ。

「御[illegible]お斷り」と云ふ札をかけてゐると「こんな札が落ちて居りました」と態々引つ剝がして[illegible]人に及ぶ[illegible]があるから始末が悪いのだ。[illegible]の[illegible]は[illegible]から[illegible]を送つて俺を悩ますことばかり考へてゐる。その中でも一番念の入つた[illegible]一葉子と云ふ男が毎日九州からやつて來た。顔の眞中に[illegible]見たいな[illegible]てくした鼻が[illegible]をしてゐる。鼻ばかりの顔だ。一葉子といふ名前からして人を馬鹿にしてゐる。この男が満洲から手紙を寄越して、文學をやるからも[illegible]のお宅の書生に置いてくれ。それが[illegible]たら[illegible]を世話してくれと云つた。飛んでもない不心得な男だと思つたから、文學をやるのには[illegible]を[illegible]するのと同じことだ。食へないことは[illegible]だから止めたらよからう。それでも來るといふなら仕方がない。[illegible]に何[illegible]奔走しやうと返事を出すと、有難い、そのうちに行きますと云ふて來た。此頃の男い[illegible]によると、彼は俺と同じ町の生れださうだから、同じやうな不良少年だらうと内々軽蔑してゐると、すつと後でやつて來て、俺の留守に[illegible]へ上り込んでゐた。この男には散々ひどい目にあつて[illegible]だが、人の顔を見て、パツタのやうにぺこぺこ頭を下げる奴と、あべこべに後ろの方へあけぞる

奴は油斷が出來ぬ。この骨男が俺の家へ始めて來た時、玄關に兩手をついて鯱鉾立ちのやうなお辭儀をするのは珍な光景だ。お辭儀で拜み倒す魂膽だからあさましい。「何故滿洲の會社をやめたんです。首斷られたのですか」俺は新聞で此會社が一萬人あまりの社員を放逐した消息を讀んでゐたのだ。「へい。左樣ですたい」「これから如何する積りです」「差し當り十內樓さんの處へ厄介にならうと思ひますたい」十內樓と云ふのは俳句の宗匠だ。「あなたは俳句もやるんですか」と尋ねると骨男は異樣な口をあけて、げら〳〵笑つた。生肉を舐ぶつたやうに赤い口だ。

骨男が十內樓の家へ行くと入れ違ひに小田香舟が來て「あいつは何だい。君の情者か？ 家守見たいな感じのする男だね。」と云ふ。「どうだい原稿は出來るか」「一枚も書けない。君のラブレターは其後どうなつたかい」香舟は澄ましてゐる。何うして食つてゐるのだか解らぬ男だ。香舟は時々やつて來るが話がないものだから、「雨川が來たら、俺の家にも遊びに來るやうに言つてくれ」などゝ云ひ殘して直ぐ歸る。「あの人は尻が早いのね。來るかと思へば直ぐ歸るのね」「變な男だ」「香舟さんも變ですが、家の床の下も變なのよ」と狐につまゝれたやうな格好で「子供の下駄がなくなると思へば皆床の下へ行つてるんです。此外にゴム鞠や玩具の靴まで貴郎の尻の下ん處へゴタ〳〵溜つてるんですよ氣味の惡い女房だ。「嘘だと仰有るなら疊をめくつて御覽なさい」と目色を替へてゐる。「子供の悪戯だらう。」「さうでせうか」女房は腑に落ちぬ風だつたが「それはさうと伯父さんは一體どうしたのでせう。昨日も姿を見せなくつてよ。」「淺草の貧民窟に馴染があつたから其處に潜り込んでるんだらう」「さうね。何だか風見たいな人ね。あんな無頓着者でも矢つ張り家にゐづらいと見えるわ。妾あの人が東京へ戻つて來たことを大阪の封助さんにハガキで一寸報せて置きました。」「止せばいゝのだ」「だつて心配してるんですもの」「兄貴が戻つたら迎に行くなんて來られちや厄介だ。」すると翌日封助から返事が來た。「兄貴を賴んます、皮屋を廢めてからあんたの景氣も惡かろよつて、皆はんをつれてこつちやへ來なはれや。ちつき近所に汽車會社が出來なはつて人夫を募集してやはるさかい。いつでも傭ふてくれやす。母貫島町封助出す」流石は封助だ。親切に俺を人夫に取立てゝ與れる。折角の厚意だから人夫になつて稼ぎたいが作品黑石張りで忙しいから駄目だと折り返してやつた。封助は俺が文學者に早變りしたことを知らないのだ。返事を認めてゐる處へ「御免！ 御免！」と鳥見たいな聲が玄關に聞えたかと思ふと、小庭へ明治大學の角帽を被つた書生が忽然として現はれた。此角帽が出し拔けに「や！ 黑石先

串・胡蝶の作に例を引て言ふ[illegible]を読んだが、その[illegible]何とな[illegible]を解して[illegible]と[illegible]新しい[illegible]は[illegible]おありますが。今度是非一つ御作を頂戴したいですね。元来日本の文壇なるものは一寸取って頂ればいゝ様になって居るのだ。[illegible]の[illegible]の作を[illegible]もんだ。大和[illegible]の枝に[illegible]の[illegible]に[illegible]いても[illegible]た時に[illegible]日本文壇[illegible]にボタ／＼[illegible]は[illegible]世の[illegible]と、[illegible]たいなお世話を[illegible]道理はちよ大きい今[illegible]一[illegible]だ。ある[illegible]のために[illegible]は一[illegible]何ですとつれた。するよ[illegible]だてゝ一寸！ 本[illegible]と漸く[illegible]に見んだ。[illegible]は[illegible]だ。仰向の中[illegible]入つて来るなが付[illegible]にあるものか。[illegible]の[illegible]です[illegible]って[illegible]。[illegible]ですか[illegible]いえ[illegible]の代わ[illegible]です一[illegible]い夕。[illegible]ですよ、と[illegible]の八分子大の[illegible]くれた。[illegible]だと思ふと「私に[illegible]の一人です。[illegible]と申します」と答へつた。云ふことなどの[illegible]だが[illegible]一日[illegible]たなおカクス／＼笑ひ乍ら円で来て[illegible]／＼[illegible]しないことと[illegible]です！ それに[illegible]

の[illegible]に[illegible]。[illegible]が壊れるだから一寸八分。すると配するなやないの？」「へ[illegible]。[illegible]な[illegible]ですが[illegible]生活に関[illegible]ってる[illegible]たいのです。[illegible]は[illegible]として有名な[illegible]子さんの[illegible]です。[illegible]たる[illegible]数学者[illegible]の[illegible]に[illegible]の[illegible]です。[illegible]さんも[illegible]お[illegible]になったでせうが。ある[illegible]です。そんなものを読むものか。[illegible]子の[illegible]を[illegible]が、何[illegible]して行くほどに用は[illegible]一[illegible]れたが、[illegible]れた[illegible]数学者になって[illegible]にお父に[illegible]ったなら[illegible]だ。世の中には[illegible]な[illegible]くて困る。[illegible]の[illegible]、何だか[illegible]の[illegible]れ見たような。さう云はうかと思つたが止めた。そんな呪者だと到つてゐたらもつと叮嚀に応接する筈だった[illegible]のうちに隠れて了ふものだ。[illegible]たない。然しよく[illegible]だと思ふと[illegible]小[illegible]に[illegible]を[illegible]せん。[illegible]には[illegible]しても、お宅に[illegible]下文名[illegible]行中だ。[illegible]に[illegible]よる[illegible]でもいいとよ[illegible]は一[illegible]たから[illegible]ておきました。一つ御[illegible]を聞いませんね。[illegible]ではない[illegible]はヤルシーで[illegible]は私[illegible]コンマ二三です。本と[illegible]だ一[illegible]一[illegible]が[illegible]から[illegible]と[illegible]甲[illegible]です[illegible]いたいです[illegible]ました。[illegible]

を卻ゞて顏面もなく俺を凹ませに取りかゝらうとするから感心に感心だお餘りが月蠅いから好い加減に應らつてやると「や！どうも有難う！　吞舟も喜ぶでせう」と云ふのだ。秋子女史を親分に奉りたげた腕で吞舟を親友にしたのだらう。この分では俺のことを、「あいつは僕の家庭教師だ」位に觸れ廻るかも知れない。俺の話は、縷々云ふやうだが、雙六の骰子なんだから、その積りで京都の方へ飛んで行くが、ずつと後で大阪見物に出けたことがある。その時筑風亭子が京都驛まで俺を迎ひに來た。筑風亭子と俺は三年ばかり前淺草の赤木屋で一枚二錢の探偵小說を書いて居つたことがある。その筑風亭子が、どうした物の行違ひか、松之助の脚本主任に出世して大島紬を着て現れたから驚いてゐると役者の松之助を捕へて「こいつは俺が昔から面倒を見てゐる乾兒です」と云ひ乍ら俺を乾兒扱ひにして紹介した。文學者の俺も此には閉口した。健鬪家の様子では吞舟と共謀になつて儲けを折半しさうな形勢だ。「御用がありましたら遠慮なく僕を使つて下さい。」と云ふ。健鬪的にやるのだらう。中庭をぐる／＼見廻してゐたが「與さん。床の下に坊つちやんのカツコとおクチユとボールと便器が入つてますが、縮小便の咒禁ですか。おや／＼こんなものが」と云ひ乍ら、床の下でも掃除する氣で、片つ端から引出した。一番お了ひに內だら

けのお杖が一所に　だらけになつて現はれた。呼ぶなり三和を見合せて、恐ろしい瑞示を受けたやうに黙り込んだ。雙方の齊原が頭に引つ掛つた蜘蛛の巣を拂ひ落し乍ら歸つた後、俺は急に不安に襲はれた。人殺しの行はれた家に何故住んでゐる積つてゐるやうな氣持ちだ。俺は血痕のついた古い杖を倚々抱んで裏庭に出てた。女房に便器と髑物を井戸端へ持つて行つた。そこへ例の吞舟がぶらでやつて來た。二升の牛乳瓶を寄越したのか。矢ヶ間しい男だぜ」吞舟が呆れた顔をして「何だい」と云ふ。「健鬪家が俺の家へ寄越したのは君だと云ふぢやないか」「冗談ぢやない。俺が知るものか。彼奴の近々しい奴だな。俺が紹介したと云つて來たのか」「君は知らないの」「いや知らないこともないが、彼奴の牛乳は毒を飲めたものぢやない。まるで米汁だ。怪しからんね。」と吞舟が躍氣になつた。それに彼奴は蟒蛇色情狂だから危險だよ。俺ん處へ女から貰つたと云つて色んな艶書を持ち込んで俺に見せると一つぱしの色男見たいな面をしやがるから見てやると君、堀端へもんなんだ。自作のラブレターぢやないか。山木のお貞さんを知つてるだらう。」「あの女流小說家か？」「さう／＼。死んだ山上の妹さ。お貞さんが天ぷらを食つてビールを飲んで、俺の家で恐ろしい下痢をしたことがあるんだ。俺が藥を買ひに出た留守に彼奴がひよこりや

つてゐて、お貞さんの膝を枕んだり背中を擦つたりしたさうだ。それはいゝが、了仙にはお貞さんの足の裏を一寸見たいに[illegible]ろ／＼眺めやがつたと云ふぢやないか。帰へて見たまへ、いく、ら女の足が綺麗だつて君。ひつきりなしに便所へ通つてる時中だぜ。洒れた色目ぢやないか。お貞さんが、あんな厭な奴はないといつて使が行つて来ると、いきなりぷん／＼怒るんだ。いへえ。こんな馬鹿ないことはない」とクス／＼笑つた。藤村もげらげら笑つた[illegible]るがいゝ」「あの画相でさへかね。」「それで[illegible]人の[illegible]なくやるから物騒さ。俺あいつを[illegible]けちやいけないぜ」藤村も[illegible]だから殊なしに[illegible]る。藤村の下宿に往へば、牛乳[illegible]始める前に[illegible]ふりもやつたさうだ。四谷下宿の[illegible]に[illegible]つてゐるが、大学か[illegible]にすこんだ[illegible]ないのださうだ。そして[illegible]牛肉の搾乳を石井ばかり分けて貰つて、それに米の汁を混ぜて[illegible]ふのを飲つたり、[illegible]の時にたつぷりして生活してゐるのださうだ。二人で話々笑つてゐる所へ下宿の家から一[illegible]が[illegible]を見せに来た。いつ見ても目障りになる奴だが、今日はまた[illegible]とテカ／＼磨き立てゝゐる。[illegible]をはふたびにこの[illegible]がダンスをやる。

二

秘馬天狗が内職に造つたやうな家と怖い口をパク／＼操つて「あれから下宿様さんの家を出て女子大学裏の下宿屋に宿をとつたが何しろ一文なしで國を出たもんですから明日からでも稼ぎませんと食へゝ。」と云ふが無暗千萬な男もあるものだ。「そこで早速捜作の小説をお目にかけますから是非どつかへお世話願いたいと思つて來ました。自分で捜作と云ふ位だから傑作だらう。」「これから直ぐ下で食を負はふこんですね」「はあ。[illegible]での貸付で上京したのです。國の方は嬶と親爺が酒屋をしてゐますから私は當分有名になるまで一人口を稼げばいゝのです。」「存分が呆れたやうな顔つきで一然しお書きなつた物が直ぐ賣れるかしら、僕の力作さへ容易に捌けなくて困つてる位だからね。」すると一寸「失禮ですがあなたのお名前は」と尋ねる。「小川[illegible]だよ」お前に拜見して居ますが、お名前に始めてお[illegible]ます。」似たり寄つたりの男だ。しかも俺と云ふ捜作を見なければ返事が出来ない。俺にした所で四五日前になつたばかりの文士だから、世話するにはしなければ[illegible]買つて呉れるか如何かは保證は出来ない」と云ふと「そこを同[illegible]で一つお盡力下さい、ええ何にも[illegible]がありませんからこれでも纏めて下さい」と云ひ乍ら大風呂敷に包んだ[illegible]な原書を出すやうに摑み出した。こんなに澤山いらないと断つても聞かないと[illegible]

氣を出して「どうです古代艶書はありませんか」と首を出した島が百年の知己を見つけたやうに「艶書がお入用ですか」「僕の專門だよ」「實は私も同好の士ですよ。あなたとは話が合ひさうですね。お宅は何處にですか。結構ですね。私は艶書や性慾のデカダン藝術崇拜家でして其方の文書の賣買なんかよくやつたものでさ。然し其筋が八ヶ間しいので往生ですよ。露國の絶品を友人に一度賣らせたところが肝腎の賣上代金を其奴に着服されて物が物だら訴へる譯にも行かないで泣寢入した經驗もありますよ。これから私が進んで行く方面がつまり此デカダン藝術の奥の院でさ。この方面の猛者に佐藤春夫や谷崎潤一郎がありますな。先づ日本一でせうな」と達者なもんだ。佐藤や谷崎が聞いたら喜ぶだらう。「僕はどうです」「えへゝ。まだ〳〵」と鼻の先で拂らつた。其俺に原稿を頼む魂膽が太い。その癖何分宜敷と云つて歸る奴だ。古文書を引つくり返してゐる春卅が「おや〳〵。明治八年の讀賣新聞まで入つてるぜ。妙な奴だね。俺の名前を始めて聞いたと吐しやがる。俺の「艶書大觀」を知らないのかしら。妙な奴だと云へば、龍造寺美梅軒が昨夜無心に來やがつたが。何でも質に入れたカンヴスと繪の具が流れると云つて騒いでたつけ」「品川に出して貰へばいゝんだ。」「さう〳〵出してくれるものかい」「あゝのらくらしてないで眞面目に繪でも描きやよさゝうなもんだ。」「描くだけ無駄だよ。何しろ今の日本と來ると、眞中に道路があつて兩側が堤と相場が決つてるんだ。何處へ旅行しやうが狙ひ處が其處より外にないんだよ。その道路、道路に見えて堤が堤に見ゆれば、まだしも買ひ手にあるだらうが、困つた畫伯だよ」春卅はさようなら、今に大將がやつて來るぜと云つて歸つた。打ち切りのいゝ男だ。處で本當に美梅軒がやつて來た。「黄夫人の手」を五枚ばかり續けて「戀を賭くる女」を三枚ばかり片づけたら「弱つた。弱つた」と美梅軒が鬼子母神の方から、ふらついて來た。「昨夜から何處にゐたんだい。春卅が先刻まで君の惡口を列べてゐたぜ」「美梅軒にはカタ附の黒紬の上から一つ紋の羽織を引つかけて油繪具で汚れた袴の裾をまくり乍ら揚り込んだ。「戯曲家のアマノジヤクさんとところに始めて貰つたんだよ。大分寒くなつたね。春卅が何て云つたかい」と云ふからよく見ると、秋の末に襯衣も着てゐない。これで前月號の話の中にも一通り述べて置いたが、美梅軒は美術學校を卒業した江戸ツ子である。江戸ツ子と云へば幡隨院長兵衛や、め組の親分見たやうに勾配の早い連中が揃つて年中啖呵を切つてゐるんだと思つたら美梅軒のやうな男もゐるから妙だ。俺が知つてゐる江戸ツ子と云へば、この男を筆頭に辻潤と坂本紅蓮洞がゐる。いづれも先祖は江戸の眞ん中で鐵棒を食

つたり夜はさたたりしてゐたのださうだ。「カンプスと繪の具が流れさうだつて云ふぢやないか」「そんなとは大した問題ぢやないよ。あいつら意氣地がない。僕の顏を見るとまだ何にも切り出さぬ内から金がないと云ふぢやないか。失敬だよ。貧乏したつて藝術家だ。」「そう〳〵先祖は江戸の旗下だ。」「だが、もつと失敬な奴が居るから驚いたよ。」「僕だらう」「あはゝゝゝ君見たいな田舍者ぢやない。同じ江戸ツ子だ」「誰かい」「澁澤男爵さ」と云ふから今度は僕の方が驚いた。澁澤男爵の自動車が美梅軒の大切な枝付にでもハネて逃げたかと思ふと「せつは詰つてどうにもこうにも動きが取れなくなつたから澁澤に五百圓貸せと云ふ手紙を聊見に認めて出したところが、澁澤が癪に障る」「澁澤男爵は君の何だい」「無論他人さ」と當り前のやうな顏をした。「あなた見たいな人が毎日幾人も來るから一一應じ兼ねますと云つて執事の名で體よく斷つて來るぢやないか。而も其の返事が例の手紙に全文印刷してあるんだ。」「すると君のやうな間抜け者が世間にはいくらもあると見えるね。五百圓はいゝ思ひつきだ」「然し非禮極なに對し、君が失敬ぢやないか」どつちが失敬だか解るものか。僕が文士になり立てに、かの辯共を安心させる積りで米を一俵に酒を五升買ひ占めに行くと、米屋も酒屋も眞個にしなかつた。愈々研究に取り上げた日に大學の門前で美梅軒に出會したから「君にも少し分けてやらうか」と親切に云ふたところが、まるで相手にしなかつたものだ。そんな了見の小さい奴にこんな大外れた料當がよく出來たものだと思つたから「冗談だらう」と笑つてやつた。「本氣だよ。本氣だから腹も立たうぢやないか。僕は昨年見たいに醉つ拂つて質屋の看板を外したり村役場の窓ガラスを叩つ壞して拵つて歸るやうな惡戯はしないから私」と他人の云ひさうな尤もらしい辯護をするのだ。話をしてゐる最中に、表戸でコソ〳〵働いてゐた女房が絞め殺されるやうな悲鳴をあげ乍ら、子供を抱へて逃げて來た。どうしたと訊ねても顫へ乍ら竦めてゐるばかりだ。すると茶の間にみし〳〵と足音がした。てつきり空巣狙ひに違ひないと思ふと、僕の右の手は自然に机の上の支那硯を鷲掴みにした。一圓五十錢で古屋から買ひ取つた支那硯だ。こつちへ來たら一息に投げつける覺悟で、障子の隙から茶の間を覗くと僕は息を殺した。泥棒でも幽靈でもない。晉吉が血だらけになつて突つ立つてゐる。「君。僕は失敬する」と美梅軒は中庭から飛び出て行つた。いゝ氣だ。これが僕の太刀の仇だと知れて見ろ。忽ち美梅軒に感付かれて了ふのだ。僕は晉吉の姿を發見した刹那に何と叫んだか自分でも分らないが、兎に角馬鹿のやうな格好で竦んでゐる晉吉を長火鉢の前に坐らせて置いて、どうしたの、

どこから來たのかと繰り返して訊くが相手は唖のやうに默つてゐるから譯が解らぬ。その亂髮の生え際から油汗が一杯滲み出てゐる始末だ。「お母さんは何處へ行つたんだい。」「早稻田の終點までお茶買ひに行つたんです」「お茶なんぞ飲まなくつたつていゝんだ。」「もう歸りますよ。」そしたら鬼見たいなお袋が戻つて來たから三分の二位助かつた。お袋が仰天して、ひどく責めつけたら、漸くしどろもどろの話を始める。話と云ふよりも中氣病みの片言だ。それを繼ぎ合せて判斷すると、晉吉は三日前から床の下に蹲んでゐたらしい。俺は此んな目に逢つたことがないから驚いた。蹲みたければ外に幾らも蹲むところはあるのに、何が不足で床の下なんぞへ潜り込んだのか、本人に聞いても解らぬさうだから、俺には猶更解りこつがない。人を驚かす晉吉も大概にするがいゝ。こんな伯父がくつついてゐるから、新進作家の生活が滅茶なしになるのだ。吃驚した後で無性に腹が立つた。魂の拔けたやうな凹んだ眼つきで四邊をぎろ〳〵見廻すことからして陰に籠つて物凄い。俺は硯箱の中へ棄てた古手拭を思ひ出した。彼は茶の間の床下に隱れて飲まず食はずにゐたのだ。そして堪らなくなつたから窮屈のハメを外してのそ〳〵出現に及んだ樣子だ。茶の間の床下は低い所だから健閉所が覗いた時も見つからずに濟んだらしい。仕方がないので俺の古袷と襦袢

させて例の雜誌に冷酒一杯やつたら、むしや〳〵食つたなと思ふと、横なぐりに寢込んで了つた。それからだ、一刑淺たゞには ないことぢやない。早く封助んとこへ送れやよかつたんだ。今更どうするつたつて始まらぬ話だが。この人は精神に異狀があるんだ」するとお袋が「氣が狂ふ譯もないし、この人はこれが持病なんだよ。いつぞやも寒中に淀川の淺瀬をザブ〳〵渉つてゐたし、天下茶屋の鐵道の眞ん中に仁王立になつて汽車の來るのを待つてゐたことがあるんで、暫く起らないから心配はしてゐたんだけどね、アルコール中毒の報いさ。放つとけばやがて正氣になりますよ。」と案外樂觀してゐる。高い金で飲む酒だから、中毒したら今少し洒落た茶番でもして見せれやいゝ。忠臣藏の九大夫が見榮を切るのは刎際の緣の下だから左程へまいが、俺の家の床の下と來ると、地球の表面だか何だか解らぬ。年中じめ〳〵してゐるから、弱る筈だ。「時間が經つて正氣に返るとしても、更に何とかしないと度々やられちや降參だ。」本人のためにもよくないだらう。仙臺の町を鍬擔いで悠々と去來して捕つたのも此手だなと思つた。警察が手を燒いて蒼海禪師に托したのかも知れない。晉吉との交際は二三年來のことであるが、こんな事件はこれが皮切りだから狼狽したのだつた。翌朝晉吉が夢の醒めたやうな面つきで、「これから淺草へ行くんだ、市乘

頁をくふな。「よいふのを聞いたならば、表各番付だつて、人を食つてゐる位と思ふだらう。いかさま算盤した狂言だ。然し相手が頭だから面目だから滅多な事にも行かない。吉原と云へば吸殻も町のことだで手放していいかしら」とお前に聞くと、「倅にさせとくさ。困つたやうだね」と云ふ返事で、吾吉を浅草へやつたらまた一日たつて来ない。行先は髪結の家だとは解つてゐるけれども此の頃いくらなんでもいつて置けない。だからお袋に手を探らせると、助六さんの部屋に入り込んでゐたさうだ。尼さんの師匠さんがこれから円覚寺に出掛けるので、俺も一緒に連れて行つて貰ふのだと一人で決め込んでゐたさうだ。この人のやうな円覚一回知つてゐると直ぐ怒ります。から、是非用しておやんなさい。丁度いいところですよ。南無大師遍照金剛。南無大師遍照金剛」と勧めたさうだ。吉原の抱主は腕の中を一めぐり回ると直ぐ抜けるさうだが、其の下へ附た病気は円覚を一回廻ると癒るといふことは只た今知つた。お袋が読んで曰つた。「いい具合に押しつけて来たよ。五十円もあれば済むとだから就合してやつたらどうです」聞けはするけど、円覚寺詣なんて、そう度々出来るものかね」と師匠さんに聞いて行くんだから大丈夫ですとも。それに大阪にも近くなるしね」そのうち伯父さんの身の駄になつていいわよと女房まで賛成する。その晩八時夕飯を食つてると吾吉が師匠さんに連れられてやつて来た。助六さんの近所に暫く住んでゐたが、尼さんに用がないものだから、始めて顔を見るのだ。五十位りの円満然とした頑丈さうな中婆さんで、腹中呑み込んだやうに、「吾吉さんは引受けて御目にかけます。又は御承知の様には若い連れを揃へて出掛けますがな。四国廻りに行つて来る時は二百円からの預金が出来てゐるから恐ろしいもんおやありませんかな。南無大師遍照金剛」と自慢をする。そんなに儲かる商売なら文画家に暇乞して俺も一つお遍路をしたくなつた。吾吉がいそいそする様だ。そこで出発は何日お立ちです」「あなたの御都合は」「尤もだな。二日ばかりのうちに余の工面をしませう。然し仕度が、どうせう」「いいえ。南無なもんでさ。着物だか一枚に脚絆が一つ、その外に観音様と御詠歌と笠と杖が一本あれば、あとは御霊のままで深山です。明日から物を貰ふ工面は私でいたしますからね」吾吉が出掛けなお経を列べて米を施して貰ふ形には吾吉さんだらう。師匠の行脚の跡には師匠の声が残る。吾吉がついた跡にはバット吸殻が一つ残るまい。箸に落ちて居る物に片つ端からひと上げる訳だ。暫くしてからでは何卒お頼みします。何分とよつてことにしますから」と師匠さんは翌十三日に金剛杖を持ち乍ら吾吉を連れて帰つた。もう吾吉さんになつたやうでゐる。気まぐれた男だ二人も

あるもんだ。「一層のこと順貞さんと夫婦になつちまへや世話がなくていゝ」すると女房が「およしなさいよ。あなたは妾の事なんか虫ケラ見たいにお書きになるけれども、それに御自分の模樣だから御自分が人に笑はれるばかりです。その調子で他人のことなんか狂瀾に書くと酷ひ目に逢ひますよ。かねぐ\云ふやうですけど、妾にだつても少し箔をつけて下さいな。いくら妾が無學者だと云つてあんまりだもの。あなたの小説を見ると妾目から火が出てよ。いつかけ怒つてやらうと構へてゐるんですが、あなたの顔を見ると、ふき出したくなるもんだから。」と御突くつて了つた。女房の顔だつて見ればいつでも噴き出したくなる。馬鹿にするな。狂然口も利けない世の中だ。つい此間も或女文士が或男文士と結婚した時に俺が仲人の役を勤めたことがある。新郎も新婦も此仲人の俺も貧乏者だから結婚の費用に差し支へを生じたのだ。俺に親切だから參列者から「會費を五圓づゝ徴集したらどうだらう」と云ふと、も一人の仲人が怒り出して「日本人は婚禮の式に會費をとるやうな國民ぢやないです。お控へなさい」と恐ろしい古風な小言を食はせた。その時は恐れ入つて置いたが、西洋人だつてアフリカ人だつて婚禮に會費をとるものかと憤慨した。どうにもならぬから提議した譯だ。順貞さんと春吉が歸つた後で金の工面に惱んでゐると、

一葉子が歸つきで原稿を持つて來た。讀んでゐると何ともたい小説だが、一番お了ひ迄に持つてになつて「此物語は未だなれ共江湖の諸士諸彦希はくは興味湧くが如き後篇を期待し　待たれよ」と書き足してある處が氣に入つた。而も此と前篇と云ふのが必死の創作と來てゐるから、俺は直ぐ「談話倶樂部」に宛てゝ一葉子の紹介狀を書いてやつた。彼は喜んで「明日談話倶樂部へ行きます」と云ふかと思ふと直ぐ歸つた。久しぶりで溜つてゐるスケッチ帖を擴げてゐたら「これは世兄がお書きになつたのですか。實は私も此道には隨分苦勞したもんですよ。」と云つた。興味湧くが如き稿を書くのだらう。そしたら翌日晝頃またやつて來て、「あれや駄目でしたよ。談話倶樂部の記者も解らない奴です。原稿を見せて、是非にどうです！　と挨拶してからさて一枚一圓で買つて下さいと云ひました。すると、私の原稿をたつた二枚讀んで、いりませんと斷るのですよ。ひどいぢやありませんか。仕方がないから一枚五十錢でもいゝから買つてくれと云ふと、五十錢では氣の毒だから、どこか外の社へ行つて一圓でお賣りなすつた方が得ですよと云つたつきり編輯部屋に引つ込んぢまつて再び姿を見せないと云ふのは一體全體私を何だと心得てゐる奴の了簡でせう」と呟いてゐる。

それは殘念だ。せめて前後の頁を一枚讀んでくれたら、もつ

[illegible]かつたから[illegible]一[illegible]しました。この創作は一[illegible]を[illegible]と云ふ[illegible]には[illegible]一[illegible]介した。そこで[illegible]たと云つて[illegible]につて來た[illegible]る[illegible]に一[illegible]には非常な[illegible]をなければ世に出ないのではないです。何[illegible]文學とは[illegible]許[illegible]ないのですから[illegible]して行く、その次にはもう何時に[illegible]してくれと云はなくなつた。多分[illegible]ものをつけて諦めたのだらう。[illegible]して呉れと云ふから私の家から五六[illegible]へ[illegible]した。その[illegible]ける[illegible]に[illegible]明た。[illegible]のために[illegible]へねばならぬ。今[illegible]はおの一[illegible]に合せて[illegible]つたが、久しぶりに[illegible]て[illegible]ら[illegible]な[illegible]く[illegible]いてゐるた[illegible]げた一[illegible]大人の[illegible]と[illegible]の小説の[illegible]から抜き[illegible]つて[illegible]りみないと[illegible]ると、おつかりした。中央公[illegible]たのに、[illegible]丁目の[illegible]て、お[illegible]の木を[illegible]ふ[illegible]になさいますかと[illegible]ねた。だから[illegible]す[illegible]なと[illegible]が[illegible]も[illegible]も必要です」と云ふ。それだ物を[illegible]、[illegible]の下[illegible]まで[illegible]た。[illegible]る[illegible]の前に[illegible]へて一文でも[illegible]な[illegible]は[illegible]へそれ、[illegible]で[illegible]を[illegible]の方へ[illegible]にすると[illegible]はなくも

おる。出發の晩に冷酒を呑つてやつた。「もし[illegible]底の川口で[illegible]助さんに逢つたら、お[illegible]度へ[illegible]るやうになつたから、[illegible]の人とは見合せたいと云つて下さい」と頼むと、「あゝ、だがおまへも[illegible]の[illegible]に[illegible]入りしねえやうに氣をつけな。[illegible]くなるぞ」と[illegible]してくれた。そして「伯父と云つたところで[illegible]他人の[illegible]をこうして[illegible]てくれるなお[illegible]の[illegible]れるほど[illegible]て[illegible]の柱をつるく[illegible]つてゐた。大分昔も[illegible]人に逢いつけた。[illegible]人と云ふのは[illegible]人[illegible]の「[illegible]」が抜けたのだ。[illegible]に[illegible]山さんと[illegible]を[illegible]町まで送つて行つた。ペンチに腰かけてゐた[illegible]稲田の[illegible]がお互に顔を見合つて「あれだよ。あれだよ。」と私語いた。[illegible]を[illegible]し一寸あれだよ。とは何だ。[illegible]こ[illegible]樣な[illegible]の[illegible]、[illegible]だと氣がつくと、一層妙な顔をするから下等な奴だ。面白な[illegible]に[illegible]つた[illegible]昔[illegible]めの[illegible]山さんの側に[illegible]然として[illegible]みながら、[illegible]中で向の方へ歩ばれて行く姿を[illegible]つてゐると、あのまゝ山さんと二人で[illegible]遠へ[illegible]けたりするじやあのやうな[illegible]がした。せめてもろな[illegible]して[illegible]ればよかつたと思つた。[illegible]ろなく人だ。僕が引返して門口を入らうとすると、[illegible]だ。[illegible]れた[illegible]お[illegible]頭から[illegible]り[illegible]けた。何だか[illegible]のやうな[illegible]だ。[illegible]下[illegible]に[illegible]つたのもなになつてもう閉めてくれりやいゝ。新

年來の雜誌に頼まれた原稿が總體で拾種を跳び越えてゐたが、曲りなりに出來上つたは「貴夫人の手」一つだ。こうなると、一つでも多過ぎる。俺は草臥れて了つた。翌朝鐵岡屋が牛乳配達に來て、「ねえ先生。こないだ原稿を取りに來てちよいとお座敷を覗いたら鼻の高い男がゐましたね。あの鼻之助が今朝中島屋の暖簾を潜つてきましたぜ。而も大きな夜具を擔いで」と報告した。中島屋と云ふのは質屋だ。芥舟や俺の新が置いてある。他所に行く時は英雄のやうに構へて通るが、中島屋だけは左樣威張れない。そこへ陰陽亭の主人でございと斷つて來た老爺さんがある。「甚だ失禮でがすが、あの一葉さんですな。お宅樣の親類で、お宅樣が一切の事を引受けて呉れると云ふので部屋をお貸し申したが、定つた仕事もないと見えて、毎日ぶら／＼遊んでゐなさるから樣子を見てゐると、腑に落ちぬところもあるので、念のために一寸あの御仁の素性をお伺ひしたいと考へましてな、お訪ねしましたのでがす」と此老爺さんが怪しからぬことを云ひ出したから、あの男は俺とは赤の他人だ。十八樓の家を頼つて來た酒屋の若旦那だ。萬事を引受けるなんてあるものか。俺は自分の事が手一杯だと云つてやつた。すると陰陽亭が「それは話が違つてるですぞ。あの御仁は肥料問屋の坊つちやんだと云ふ話で。これは不都合な」と慌てゝ歸つた。それから一ケ月ばかり後の話になるが、一葉子が下宿を飛出したり一円電車賃を食物にしたり、陰陽亭の同宿人に借りを拵へたり、八方塞りになつて、大阪へ走つた時、俺に手紙を寄越して、復讐をするから覺えてゐろ、遠からず貴樣と貴樣の一族を撲滅する、日本中の文士に貴樣の無責任を鳴して見せる、その爲に俺は今大阪で百圓あまりの金を貯つてゐるのだと云ふて來た。鼻の容貌にあてられて弱つてゐる處へ、撲滅までされては迷惑だと思つた。

「あんな正體の知れぬ人が、これからもやつて來るに違ひないですから御用心なさい。この原稿も手紙もあんな手合から送つて來るのでせう」と云ひ乍ら鐵岡屋が俺のテーブルの上に積んである他人からの送り物を親切さうに檢出し始めた。これが俺の文學者になつた忙しい十日間である。これから二十年も三十年も此商賣をやつてゐるうちには、またどんな物騷な奴が冷かしに來るか知れない。

太平象戯談

村松梢風

[illegible]日本[illegible]將棋に[illegible]いふ[illegible]た。此の人は下手の横好き[illegible]いふ[illegible]好きで、有名な爛柯[illegible]いふ[illegible]人[illegible]し[illegible]。[illegible]大先生の宅へ御用かあ[illegible]ました。[illegible]に依つて[illegible]指してなるほどに[illegible]では、[illegible]間、よく[illegible]る[illegible]中[illegible]た、[illegible]の[illegible]間[illegible]しなかつたので[illegible]ズン[illegible]中々[illegible]してゐる[illegible]先生[illegible]関心[illegible]でいてゐると、見物して[illegible]人[illegible]手だ上手[illegible]にする[illegible]して、オイ[illegible]だよ、[illegible]すると、エイ今にね入れてやるんだ。[illegible]人間だといふに……

[illegible]松本の[illegible]人[illegible]人[illegible]へ[illegible]た[illegible]へおいて[illegible]

黙つて置いてまる[illegible]どつち[illegible]彼は[illegible]好き[illegible]いい物が出来る早速一番指さうぢやないか、宿から[illegible]しいふので指し始めて双方夢中になつてゐるところへ、女中が[illegible]て、[illegible]椋木の何々さんから[illegible]電話で[illegible]お出で[illegible]と言ふ エイ[illegible]今忙しいからない、[illegible]電話を聞いて来るからと一人が立ちかけると、ふン[illegible]人の方も[illegible]に思ひ出した事があつて、それぢやア序でに僕も一日宅へ電話をかけて来る事にしやうと言つて両人一緒に電話の所に離れた。[illegible]電話の用事を済まして[illegible]座敷へ戻つて来て[illegible]の続きを指し始めたがどちらも変だ、変だと思ひながら[illegible]指した時[illegible]一人が腑に落ちない顔をして、オイ僕の王はこんな処にゐる筈はないぜと言ふと、も一人のがさう言へばこの[illegible]中も[illegible]な処にゐる[illegible]と言ふ、両人首をひねつてゐる、[illegible]間、ア、さうか[illegible]時[illegible]……

遠州の仏の生まれた村に、仏どもが子供の時分盲目で碁と将棋の上手な爺さんがあつた。此の爺さんの本名は大竹吉右衛門であつたが、通称定吉とか定斂とか言つてゐた。元來は磐田郡豊田村南谷村の出生であつたところから一般に「南定」で通つてゐた。

南定は幼少の頃私共どもの村うちの寺の小僧になつた。寺の和尚が或る時退屈半分「小僧や将棋といふものを教へて遣らう」と言つて南定に初めて将棋の指し方を教へた。すると小僧は直きに覚えてしまつて、それから幾日か和尚と指してゐるうちに到頭和尚の方が負かされるやうになつた。和尚は忌々敷くて仕方がないのでそれ以来将棋を指すのを止めにして、客でも来ると碁ばかり打つてゐた。「和尚様私に碁を教へておくんなさい」と南定が言ふと「莫迦を言へ、碁といふものは将棋なぞと違つて大變六ケ敷いもので子供なぞに解りつこはない」と言つて和尚は頭から馬鹿にしてゐたが、餘り熱心に賴むので試しに教へて見ると、小僧は苦もなく覚へてしまつて直きに是れも和尚より強くなつた。

程なく南定は碁将棋では近隣に並ぶ者が無いくらゐになつた。其の後彼は寺を飛出し、[illegible]して、本物の碁打ち将棋指しで旅に出た、江戸へも来て、将棋では名人伊藤宗印の教を受けた。碁は生涯[illegible]段で、将棋は[illegible]段を許されたに過ぎなかつたが、双方共實力は大したもので、[illegible]本因坊[illegible]の賭け師が本職であつたため、高段を許す事に當人の[illegible]とするところでもあつたのだ。南定は碁将棋の外に易者にも堪能であつた。當時此の技にかけては東海道には南定の敵手は無かつたといふことである。

晩年の南定は不遇であつた。永い放浪生活の間にうけた病毒のために兩眼の明を失ひ、窶れた姿を知己の人達の前に見せなければならなかつた。彼は方々の家を居候して歩いた。私の家なぞにも三年餘り居たさうである。先年歿した私の父は此の南定に碁を教はつたさうで、碁は弱かつたが布石だけは其のせいか立派であつた。盲目になつても南定は自由に碁将棋がさせたのだ。どんな時でも、碁石のハマ一つ誤魔化せなかつたさうである。

私が知つてゐる時代の南定は、徴兵のがれのために彼の養子になつた寅吉といふ男に養はれてゐた。そうして此か按摩などもやつてゐた。寅吉の家と私の家とは一丁位しか離れてゐない。

私は祖母に言ひ付けられて其の家へ按摩の南定を呼びに行つた事なぞを覚へてゐる。南定は碁将棋では眼明き以上だが、平常は甚だしく勘の悪い盲人だつた。平坦な縣道を摸り歩きながら出来

ないので、私はその女の詞を持つて引つ張つて家へ伴れて来て遣つた。それだのに私は今後の事を考へつつ、どんな姐さんだつたらうと考へて見るのだが、一向思ひ出せない。丈の高い人だつたやうな記憶だけは僅かに残つてゐるが、それもこつちが小さかつたのでそんな風に思はしたのかも知れない。[illegible]したのら何年頃であつたか……。

（二）

方今文壇に專ら將棋の流行してゐる事は、いつぞや何[illegible]氏が[illegible]八月[illegible]いた「將棋の話」の中にもある。其の時私なども文壇の棋士の一名として同氏の[illegible]を受つたやうな訳で、甚だ光榮の至りである。上高[illegible]の何[illegible]氏の宅で折り折り將棋會が開かれる。私にはまだ一回もそれに參列の資格を得ないが、聞けば毎度盛會で大小の棋客が集を押して集まるさうだ。

平林でも何[illegible]氏の[illegible]をとられると何れか此で將棋を指してゐる。時には[illegible]て、それには[illegible]人[illegible]附いて、[illegible]將某[illegible]所の[illegible]を見してゐる。[illegible]の[illegible]氏の技倆には[illegible]段に一枚違ひといふ處であらう。小説の場合と同じく限りのある指し口である。[illegible]何氏の宅で將棋を指してゐると、丁度[illegible]へ[illegible]の大家[illegible]氏がやつて来た。[illegible]氏には私の

友達[illegible]田明山の師匠である。將棋は何[illegible]氏と[illegible]だが関根八段に就いて修行してゐるだけに指し口が鮮やかで一寸素人離れのした技である。私は曾て[illegible]と一枚落ちで指して[illegible]様に負かされた。それに懲りたといふ訳ではないが其の日は[illegible]とは指さなかつた。私は、中央公論の新年號へ將棋の話を書いて見やうと思ふから、後學のため一度関根先生の宅へ伴れてつて頂き度いと言つて頼んで、其の日を約束して貰つた。

平河町九丁目の関根氏の宅を訪問したのは小春の[illegible]の[illegible]ないやうな[illegible]味を帯びた暖かい日だつた。明山が習作を持つて来て今帰つたばかりといふ處へ私が行つた。先生は丁度一[illegible]人の指し掛けを[illegible]けてゐたので、私は其の側で[illegible]の[illegible]など見せて貰ひながら暫らく待つてゐた。一寸の十畳の[illegible]には珍しい[illegible]に付いて、[illegible]も[illegible]りであつた。其の家の頭には高い[illegible]があつて、其の[illegible]を[illegible]てゐる[illegible]人の[illegible]を[illegible]し[illegible]けて見る。[illegible]人[illegible]子に[illegible]の[illegible]た[illegible]してゐる。[illegible]といふよりも[illegible]文人の[illegible]らしい[illegible]に[illegible]たまれてゐる。[illegible]に向つて[illegible]しく[illegible]を動かしながら[illegible]に[illegible]して[illegible]けて[illegible]と[illegible]に[illegible]ような[illegible]もちで[illegible]には[illegible]の[illegible]いて、一度[illegible]には[illegible]見ましたが、[illegible]だけでも[illegible]のに、

北の下見を詰めたら猫を置く所はないだらうと思ひますから出ました」と云ふ。

清楚な石珠夫人の小身体が出来上ると直ぐ夫を下で待つてゐる蕗開町の使に持たせてやつて、主は私と一緒に外へ出た。関根氏の宅は平河町二丁目の日坂の上に在た。格子造りの門口を這入ると、玄関に机を据えて座つて居る十四五歳の門弟書生が私達を出迎へる。私は最初関根夫人に紹介されて暫時茶の間で雑談をしてゐた。暗い日なのに二階からパチパチと駒を打つ音が聞えて来る「二三條さんもお見えになつてゐます」と夫人が言ふ。

私は関根氏と奥の座敷へ通されて其處で主の関根八段に会つた。五十恰好の可成りよく肥つた福々しい容貌を具へた人であつた。上に紬の被布のやうな物を着てゐた。初対面の印象が、私をして不図其の二三日前に見た私の祖父の義太夫の師匠である豊澤團平の風貌を想起させた。年齢も遥かに違へば、顔立ちと一も全く似ても似付かぬのであるにも係はらず、総て名人上手と称される人々に共通してゐる一種の気分を私は感ずるのであつた。因に團平も将棋は初段を指すのである。

関根氏は頗る洒脱な態度で、現代の名士に関する将棋談や、自身の若かりし頃の経験談などを話して呉れた。

徳川幕府の倒潰は一時将棋道の発達に非常に大きな打撃を与へた。囲碁も同じき有様であつた。徳川時代には其時の名人と云はれて将棋所といふものがあつて、是れを領する名人は家禄五十石の食禄を与へられた。将棋所附属の将棋指しは十分に待遇せられ、高段の棋士は大概諸家のお抱へになるのが普通であつた。又高段が保護されると同時に名誉が与へられた。総じて昔は一芸に秀でた者をば尊重する気風が盛であつた。芸道の中で社会的に重んじられなかつたものは歌舞伎俳優くらゐなものであるし。然るに明治政府は悉く此の制度を破壊してしまつた。現在に於て稍復活されてゐる物は芸術だけである。絵と彫刻とだけが日本の文化を代表するまでもあるまい。もつと一般的に芸道の士を優遇する道を拓いて貰ひ度いものである。閑話休題、明治維新と同時に、保護奨励の原動力を失つてしまつた将棋道は一時甚だしい衰退の機運の中に彷徨しなければならなかつた。昨日迄は天下将棋所の棋士も今日からは唯一介の将棋指しであつた。大橋伊藤の如き宗家すら、僅かに市井の同好者の力に頼つて家門の名を支持するに過ぎなかつた。名声赫々たる高段の将棋指しも、碌々として口に汲々しなければならなかつた。時様なとんに時

代が何度り永く續いた後で、將棋は囲碁よりも餘程遲れて再興の機運に恵まれたのである。「新聞將棋が流行り始めて以來將棋がメキメキ盛になつて來ました」と、それに就いて關根氏は言つた。新聞將棋の鼻祖は神戸新聞ださうである。其の後間もなく萬朝報で大いに是れに力を入れ始め、遂に現今の盛大を見るに到つたのだといふ。

中央門戸開放主義の文壇にまで將棋會が開かれる世の中である。一般社會に是れが流行してゐる事は非常なものであらう。將棋は一時は平民將棋の卑賤の如く見なされてゐたが、近頃では却つて上流社會の方に非常に流行してゐる。今上陛下も大の將棋がお好きださうである。一條公などはよく御相手をするといふ事である。華族會館、同氣俱樂部、水交俱樂部、其の他慣例にも紳士の集まる處に必ず將棋室の設けがあつて、いかな日でも駒の音を聞かぬ日はない。それぞれ稽古日が定まつてゐて、其の日は關根、土井、などいふ專門家が出張して教授をしてゐる。現今俱樂部での將棋家と言へば先づ第一に松浦伯に指を屈しなければならない。松浦伯の將棋は實際に素人の域を脱してゐる。現在の格は[illegible]段で、實力も十分備はつてゐる。素人[illegible]の出來るのは稀。人[illegible]其の他の[illegible]中に在つては先づ上席あるやうである。試みに名を擧げると、一條公、[illegible]公、德川圀久公、[illegible]伯、伊[illegible]地伯、小笠原長幹伯、德川達孝伯、松平頼壽伯、京極高德子、奥平昌恭伯、大原伯、大河内子、大隈信常氏あたりが就中段中の錚々たる處である。一條公は平手に近く、二條公は上手角落の將棋を最も得意とする。小大隈は關根八段と二枚落ちで近[illegible]に指すといふからなかなかお強い。政友會にはなかなか將棋家がゐる。大岡育造、伊藤大八、小久保喜七、當[illegible]原傳などの諸氏が領袖株である。小久保氏に就いては特記すべき一事がある。關根八段に將棋といふ物を教へたのが小久保氏だといふ事に、千葉縣の[illegible]である關根氏が幼時[illegible]に預けられてゐた頃の竹馬の友が小久保氏で、同氏から初めて將棋の指し方を教へて貰つたのだといふ。さう聞いて見れば、將棋に於ける小久保氏の[illegible]が偉大なものだと言はざるを得ない。關根氏は[illegible]つても偶にでも決して二面以上は指さないさうだ。「[illegible]でもよく考へてやれば二面が丁度宜い[illegible]」それから後をやると疲れて來る。其のために[illegible]をした[illegible]なに、[illegible]だ[illegible]なら[illegible]の人が[illegible]くなつてゐる。お負けに[illegible]へ[illegible]をさせたり、[illegible]にお[illegible]をさせたりして[illegible]かしも[illegible]な事とは[illegible]つてゐないが時[illegible]も[illegible][illegible]だ、小久保氏[illegible]にはは[illegible]し[illegible]てゐ[illegible]といふもので[illegible]に[illegible]の[illegible]である。

刀圭界では、中濱博士、樋口博士、朝倉博士、土田博士、渡田ドクトル、飯塚紀一氏あたりが中位の方である。實業界には猛者が澤山控えて居る、御大が久米民之助氏で、是れは柳澤伯と同格の三段だから大したものである。福澤諭吉翁は將棋が强かつたさうで、自然其のお弟子中にも將棋黨が多い。阿部泰藏氏の如きは初段を指すさうである。大橋新太郎、馬越恭平、服部金太郎、渡邊亨の諸氏は何れも王と飛車との區別を問はれる組である。晝飯時に倶樂部へ集まる實業家連は、一刻千金の忙がしい身で自動車を待たせた儘將棋室へ這入り込むのである。大橋博文館ほど負け嫌ひで誰れにでも負ける人はないさうだ。偶により以上下手な相手を捕へて勝つたが最後倶樂部が割れる程の聲で大笑一番するのだが、其の笑聲たるや割れ鐘と言はふか斧が鳴つてゐると言はふか、實に珍中の珍たるもので、歡笑に滿ちた其の響きは恰も木曾の荒武者が都を陥れた時のそれのやうだと、專ら評判であるさうな。處が負けた時は靜かなること林の如く、默々として「もう一番」を繰り返す、かうなると給仕が電話を取り次ぎに行かうが、職工が同盟罷業を起こさうが見向かうとしない。負け嫌ひと言へば、法曹界の大家大場茂馬博士の將棋も大橋氏以上の下手の負け嫌ひで、其の勝敗を眼中に置くこと正に古今無類である。「大場氏と指すと一面のうちに五段位勝負が付く」と言ふ程な[illegible]時間に說明すると、博士は盛んに「待つた」を連發する、待つた待つたの末に負けきつて了つても、最後の[illegible]で更に[illegible]の一「待つた」を食はせなければ諦めが付かないのである。此の中では、馬越化生居士の將棋は可成りうまいさうである。

○

故人になられた芳川顯正伯の將棋は天下に著名なるものであつた。伯の將棋は七段と稱した。但し自稱である、芳川伯ほど將棋の好きだつた人も尠い、と同時に是れほどの强がり屋は古來一人もあるまい。關根八段と指すのに平手と香落ちの交りで向かつた。香車が二段であるから、其の二分の一だけ關根氏とは遜色がある譯で、七段といふのは其處から割り出されたのであらう、すでに關根氏に對して此の手合せをするのであるから、五段位の者には香車を外し、二段三段どころの連中とは大駒を引いて指したからとて不思議でも何でもない。指し方は非常に速かつた。何等の考慮も廻らさずにパツパツと駒を運ぶのだ。將棋は速馬の如くといふ諺には頗る適つてゐる。だから一時間のうちに尠くも五六番は片附く。考へない將棋だの端唄なぞいふものは疲れないから幾らでも續くものだ。大抵の人は飽きが

なるので……たので、ために……岡村に至っては其の洒[illegible]かういふ風で指し掛[illegible]判氏一人では相手が[illegible]まらない。[illegible]は必ず[illegible]二人位連れて行つて、交[illegible]向ったものである[illegible]たが、前に言ったや[illegible]に[illegible]思はれて「行つたさへなければ[illegible]なものだ」[illegible]一四上の[illegible]お取り一といふや[illegible]はない、[illegible]一手の[illegible]ふのだ。

八[illegible]一手一[illegible]

[illegible]

を失つた程の人物であつた。此の洲崎老人が上京して[illegible]人の岡村四段の家に寄寓して居た時の事である。或日岡村氏は老人に「まだ長い石板が出て居ませんから掛けて下さい」と頼んだ。老人は承知して「将棋所」といふ石板を持ち出したまではよかつたが、つい長の柱へ掛けべき石板を抱き込んで昨夜の端書を考へながらウカウカ歩いて行つて、一丁ばかり先きの郵便局の前まで行つてポストの中へ投げ込まうとしたが、二三尺余りの石板がポストへ這入る筈もなくハッと気が付いて、あたりを見廻し自分の頭を掻き掻き戻つて来た。

[illegible]

强いのだと。其の考へは頗る論理的であつた譯だ。然し、段々に大養と尾崎とが指した。するとどういふものだか大養に尾崎には勝てない。所謂三すくみといふ結果に了つた。三人の豪傑は互ひに顔を見合せて呵々大笑した。病床で是れを見てゐたもう一人の豪傑は「よくしたものだ、彼等は政界へ出ても矢張り三竦みだ、あッはッは」と腹の中で笑つた。

○

西暦紀元前二千四百年頃の事、印度にシネグラムといふ王様があつた。此の王様は大層強い人であつたから、他國を征服して自分の領土を擴め、王室の勢力を張り度いといふ考へから、年中戰爭ばかり仕事にしてゐた。其のために國内が疲弊して人民は非常な艱難苦辛を嘗めた。どうもこれではならぬといふので重臣老職の人々が心配して王様を諫めたけれども王様は承かなかつた。それはかりでなく、さういふ忠義な人々に對して、自身の命令に從はないと言つて大層腹を立てて側から遠ざけてしまうのであつた。だからしまひには誰れも王様を諫める者は無くなつた。王様は好い氣になつて戰爭にばかり沒頭していたのだが、其のために民心は益々王様から離れていつて今にも内亂が起きさうな形勢になつてゐた。

其の時婆羅門族(僧族)の中にシッサといふ智者があつて、何んとかして王様を諫めて戰爭を止めさせ國内の政治を安んじ度いものだと、日夜いろいろと苦心して考へた末に漸々將棊といふ物を工夫した。其の將棊は現今西洋に傳はつてゐる將棊で、其の駒には王だの后だの僧官だの兵士だのがあつて、それ等が互ひに救け合つて戰ひながら敵を攻める仕掛になつて居た。シッサは此の將棊を王様に獻上した。王様は非常に是れに興味を覺られて、發明者シッサの智惠を深く賞美した。其の時シッサが王様に向つて言ふには「將棊では相將士卒があればこそ戰ふことが出來るので、若し王ばかりで他の駒がなかつたら敵に克つ事は出來まいと存じますが、あなたはどう思し召します?」と訊いた。すると王様は分り切つた事を聞く奴だといふ顔をして「勿論王一枚で指す事が出來やうか」と答へた。此處でシッサが透さず「あなたもさう思し召すでございましょう。是れは獨り將棊ばかりでなく、國の政治も外征の戰ひの場合も同じ事、相將士卒の心が離れては假令王が如何程勇猛であらうと才智に富んで居らうと、決して王の意志の如くになるものではありません。願はくは我君、此理を覺られて内政に力をお用ゐ遊ばすやう」と言つて諫めたので、王様も初めて是れ迄の非を覺つて俄かに國内の政事に心を向けるやうになつた。幾許もなく其の

時間に間に合[illegible]の間になった。

[illegible]はシッツの助を[illegible]し、何なりとも望みに任せて[illegible]を取らせようといった。するとシッサは「[illegible]は[illegible]格の第一格に一粒、第二格に二粒、[illegible]格に四粒、と段々其数を倍加して[illegible]六十四格に充たるだけの米を賜はり[illegible]の望み[illegible]います」と申上した。[illegible]はシッサの[illegible]にも[illegible]のを[illegible]しながらも之れを許したが、後になって仔細に其の数を計算して見ると、其の米の量は国[illegible]に[illegible]足りない[illegible]の[illegible]に上るの[illegible]った。これはシッサが[illegible]の[illegible]を[illegible]るための[illegible]であった。

かういふ[illegible]になってゐる。今の西[illegible](二[illegible])[illegible]に[illegible]したのといふ[illegible]の[illegible]の[illegible]人[illegible]の作[illegible]は[illegible]の作であるといふ。又は[illegible]ケデスがトロイ[illegible]の[illegible]に充て[illegible]作ったのである[illegible]ある[illegible]見れば[illegible]年前の[illegible]ある[illegible]といふ[illegible]でもある。

[illegible]世中[illegible]も[illegible]に[illegible]て、[illegible]十年[illegible]に[illegible]

伊太利に[illegible]学校が建てられたのを始めとして続々各国に[illegible]学校の[illegible]を見るに至り、[illegible]として行はれ、国々から選手を出して[illegible]があった。又、英国では倫敦のセント・ジエムス街に[illegible]があって、十七世紀の頃から、但、[illegible]、其の他の国々の選手の[illegible]があって盛んに[illegible]行はれたが、十九世紀の初めに至って遂に[illegible]学校が[illegible]られたといふ[illegible]らと大[illegible]のやうだが[illegible]見せ付けるばかりな[illegible]学校だの[illegible]人其[illegible]校だのといふ[illegible]に[illegible]した[illegible]にあるまい。[illegible]人は[illegible]る[illegible]である不[illegible]指したいふ[illegible]いるのである。[illegible]人[illegible]の[illegible]なといふ[illegible]の中[illegible]るのだ[illegible]しこ不[illegible]にも[illegible]。

○

[illegible]に関しては[illegible]の[illegible]な文字は[illegible]つこのない。本[illegible]の[illegible]る中川[illegible]は、其の新[illegible]「[illegible]りに[illegible][illegible]一般[illegible][illegible]

師を下さん前きに、岡上の易々たる旨に属すれども、其の判断の信じ難むに足らざるを如何にせん。此故に將棊の起原を確知せんと欲すれば、其事の一小戯技に屬するの故を以て之を輕視せず、慎重の態度と耐久の精神とを以て、引證すべき典籍を爬羅剔抉し、且之れを正解詳評し、而して後始めて斷案を下すべき也」と言はれてゐる。斯の如きは吾々淺學者流の到底爲し能はざる處であるのみならず、匆忙の間に而も制限されたる紙數を以て臨むが如きは、唯徒らに無識の誹を受くるのみであらう。

私は是れに關しては、單に稿を進むるために必要を感ずる程度に於て、先人の研究の一端を紹介するに止どめて置かう。

「象戯」の二字が支那に在つて最も夙く見えたのは、宋玉が「招魂」の一節である。(楚辭今集第七卷第十六葉)菎蔽象棊有六簙些分曹並進遒相迫些成梟而牟呼五白些晉制犀比費白日些鏗鐘搖簴揳梓瑟些とある。宋玉は楚の懷王の臣屈原の弟子であるから、二千四五百年前既に「象棊」なる物があつたと言へる。楚辭以後に於て現はれたる「將棊」の二字は、漢の劉向が「說苑」の一章(卷十一、善說篇、第十葉)雍門子周といふ者が孟嘗君に對して說く段に見えたのを以て古いとする。今若ニ足下千乘之君也、居則廣廈邃房下羅帷來淸風倡優侏儒處前迭進而諂諛燕則鬭象棋而舞鄭女とある。孟嘗君は齊の君で宋玉と相前後した人である。然し今の此の時代の象棋なるものは、現今と此日本等に行はれてゐるところの將棊と同じ範圍に關係あるかどうかは疑問としなければならない。即ち是を以て直ちに將棊の起原となすことは早計である。太白の「碁」なるものは象牙を以て作れる馬子をうつて碁を爭ふ物の意味で將棊の場合にも圍棊の場合にも用ゐられる。又以降にも用ゐたものである。黄帝の時無用先生といふ仙人が終南山の山に於て神棋したといふ故事がある。是れを以て支那では圍棊の起原としてある。又古き西洋の將棊に、骰子を投げて而して駒を動かしたといふのがあるさうである。是れは勿論双陸を聯想させるものである。茲に於てか圍棊、將棊、双陸の此の三つの間には餘程密接な關係の有る事を考へなければならない。或は同一の起原より發したものであるかもしれないといふ想像も許されない事ではない。此の問題は姑く留き、楚辭說苑以後象戯の二字を典籍時文に見ざる事數百年、北周の天和四年に至り(西暦五百七十年、本朝欽明天皇の朝)武帝自ら象戯を作り、象經を制したといふ事がある。「周書」(第五卷第十五葉)武帝天和四年の條に「五月己丑帝制象經成。集百僚講說」と明記されてある。故に支那でも日本でも古來象戯の起原を論ずる者は、多く武帝を以て創造者としてある。和漢三才圖會には、太平御覽を引き象戯

は「[illegible]ノ[illegible]ノ作[illegible]シ[illegible]之レヲ行フ。日月星辰ノ日アリ云々」としてある[illegible]、[illegible]に「[illegible]聞く中[illegible]せられたことがあり、[illegible]日月[illegible]を[illegible]の[illegible]を述ぶ。宋の司馬温公[illegible]を作る。此れ益し[illegible]を[illegible]の中に滅し天下安しとせしも[illegible]なり」とある。[illegible]に、戦争の[illegible]、何故の[illegible]各々に[illegible]を入れた[illegible]なるもの[illegible]したさうである。[illegible]にも此の[illegible]後世にはいなかつたが、戦[illegible]の[illegible]作した[illegible]とは[illegible]な物であつたかで[illegible]は[illegible]にも後世の[illegible]とは何らの[illegible]も無い物であるかも知れない。

宋の司馬温公が作つた「七国象棋」といふものがある。此れは[illegible]戦国七国争霸の状態を減した[illegible]の象戯である。七国象戯は[illegible]各十九道あつて[illegible]の数は九十六ある。[illegible]た書きは三間四方もあつて、七人で之を囲んで作つたのやな物をもつて[illegible]したといふことである。此の外にも[illegible]作つた「[illegible]象戯」といふものたそうであるが今は[illegible]。

現今支那で行はれてゐる象棋は、縦[illegible]の[illegible]は各々十六である。横は十[illegible]あつて、両中間に、[illegible]する敵味方の境界[illegible]がある。[illegible]に従つて此の河を[illegible]せる物と[illegible]せない物とある。「[illegible]」と其の[illegible]の「[illegible]」とは、[illegible]められたる[illegible]めて狭い[illegible]の外へは一歩も出ることは出来ない。[illegible]、其、日本の[illegible]の如く[illegible]を[illegible]にし以て味方の[illegible]に充てるといふ[illegible]ないから[illegible]である。敵の[illegible]を取つて打つのは日本[illegible]、[illegible]に[illegible]り[illegible]を[illegible]するになつたのである。

保元の[illegible]として[illegible]の[illegible]長の日記にたる[illegible]と称する物の中に「[illegible]九月十[illegible]日、[illegible]前、[illegible]」とある。[illegible]に於て象棋に関する[illegible]で[illegible]あると[illegible]である。[illegible]日本へ[illegible]したのは[illegible]であるか、[illegible]の[illegible]と、[illegible]というもの[illegible]しい[illegible]であつたらしくも[illegible]される。[illegible]に[illegible]、[illegible]してある[illegible]のことであるから、[illegible]であるならは何も[illegible]に[illegible]する[illegible]も無い[illegible]前回に[illegible]つて[illegible]しく[illegible]て[illegible]の[illegible]空[illegible]く、

[illegible]の[illegible]の「[illegible]」[illegible]の「[illegible]」の[illegible]たものがあるかは[illegible]。[illegible]」とは、[illegible]に馬

子に特性のある意味かも知れない。古來日本には大象戯、中象戯「小將棊」の三種があつて、大象戯から中象戯が生れ、中象戯から小將棊(即ち現今の將棊)が生れたとなつてゐるが、それには確實な根據がある譯ではなく、却つて小將棊即ち普通の將棊があつて後に、大象戯、中象戯が[illegible]されたのであるかも知れないと言ふ人さへある。現今行はれてゐるといふ事を以つて一番新らしい物であると斷定する事は出來ない。古るくとも良き物は殘り、新らしくとも價値無き物より廢るのが自然の理法である。且つ、現在行はれてゐる支那の象棋と日本の將棊とが、盤面の上より見て大差の無いといふことが、小將棊を以て古しとなす說を一層有力ならしめてゐるやうに思ふ。

偖ほる處の大象戯といふものは、縱橫各十五桝の局で、其の駒子は 玉將一、金將二、銀二、銅二、鐵二、石將二、桂馬二、香車二、醉象一、盲虎二、猛豹二、猫叉二、反車二、獅子一、鳳凰一、麒麟一、惡狼二、嗔猪一、猛牛二、奔王一、龍王二、龍馬二、角行二、竪行二、横行二、飛龍二、飛車二、步兵十五、仲人二、一軍の計六十五、敵を合せて總計百三十個である。此の指し方に至つては今は少しも分つて居ない。

中象戯は其の局縱橫各十二桝、其の駒は、玉將、醉象、麒麟、鳳凰、奔王、獅子、各一。金將、銀將、銅將、猛豹、香車、反車、角行、盲虎、[illegible]、步兵十二を以て一軍とし、敵を合せ[illegible]。

中象戯に關しては初代[illegible]の著はした「[illegible]象戯圖式」(全四卷)といふ書物が今も世に傳はつてゐる。猶、元祿十六年日本橋[illegible]衛代の「中象戯指南」(全一冊)といふ書物もある。其のどちらも[illegible]居られたので、私はそれを借りて來て一應眼を通して見たが、其の駒だけには本統の指し方までは解らない。中象戯の特色を[illegible]擧げると、第一に[illegible]取り捨てゝある事、敵の駒を取つて打つといふ事はない。それから「醉象」といふ駒は敵地に入れば「太子」となつて全く王と同等の働きをする。だから中象戯では王を取られても太子が殘ればまた負けではないのである。「獅子」の居喰といふものがある。獅子といふ駒は、一間八方自由に動けて、一間八方にゐる敵の駒をば居乍らにして喰ひ取る恐ろしい性質な駒だ。「仲人」といふ駒は戰爭の仲裁でもするのかと思ふと大きに違ふ。是れは上下ばかり行き敵地に入れば醉象に成る。「香車」は昔から一本槍だが、「反車」は上下走りが出來るだけ文明的だ。

舊幕時代迄は物好きな人達の間に中象戯が多少行はれたらしいと見える。「中象戯覺えてゐるが相手なし」といふ川柳がある、單に將棊通の故實として存在してゐたに過ぎなかつたのであら

う。名人小野五平翁は[illegible]此の中の一段を指した[illegible]があるとかいふ噂である。

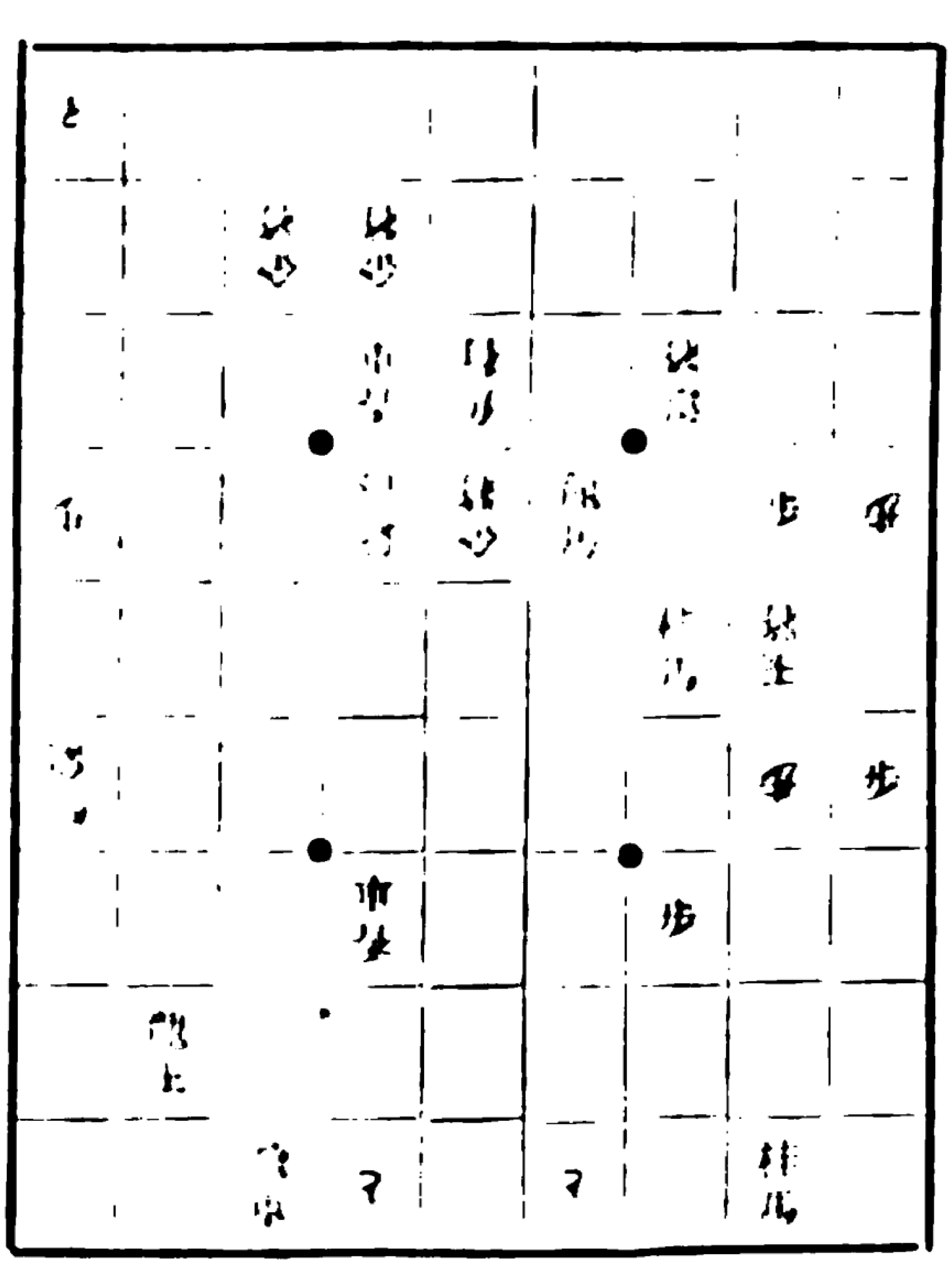
小將棊時代になつても「醉象」と「猛豹」だけは[illegible]を使つてゐた。王の側に醉象を置き、其の両脇即ち金の側に猛豹を一つ宛置いたものである。其の時代の將棊は、此の三つの駒があるために却つて[illegible]用の妙を缺く憾みがあつたが、後奈良天皇の時、時の象戯の好手大納言藤原時光と伊勢守平[illegible]とが評議の末、遂に全く之れを取り去ることになつて、茲に始めて現在の[illegible]なる將棊が出來たのだといふ。

一説に依ると、象戯は吉備[illegible]が唐から歸朝の際に[illegible]から持つて來たとも云ふ。其の時の圖といふ物を見ると矢張り小將棊で見たに前記の通りの醉象猛豹が加はつてゐるだけださうだ。[illegible]後世に至り、[illegible]が[illegible]を[illegible]いたものであるといふ。此の説には[illegible]な[illegible]は[illegible]い。若し[illegible]時代に[illegible]したものとすれば、[illegible]代の、[illegible]みを[illegible]として[illegible]といふ[illegible]を[illegible]した官人[illegible]ではなく、從つて[illegible]の生活の反映であると[illegible]に此の事を[illegible]かなければならないのだが、[illegible]でも[illegible]つても[illegible]の事に[illegible]向[illegible]といふ物に[illegible]ないらしい[illegible]を見ると、其の[illegible]

つたのに過ぎない。

寛永四年板の本野[illegible]著「象戯[illegible]」といふ本に、小原大介作の詰將棊が載つてゐるが、これには「醉象」を使つてある。餘程珍らしいもので、露伴先生も此の事を「將棋雜考」の中に書かれてゐる。茲に[illegible]馬場先生が其の本を持つて居られたので寫し取つて置いた。

持駒 桂馬 桂馬 香車



[illegible]

將棋の好きな方は何かの折に何かで懸賞の詰物を拵らへてやつて御覧になるといい。

總ての倣事が大成するためには一人の天才が世に現はれて來なければならない。日本の將棋が殆完全無缺の域に到達したのは、名人初代大橋宗桂の時からである。彼は前名を宗慶と言ひ、織田豐臣時代の人である。碁に於ける初代本因坊算砂と時を同うしてゐるから不思議である。信長曾て宗慶の將棋を觀て「一是れ陣法に象る、武人宜しく習知す可きの藝也」と言ひ、桂の一字を賜はつて名を宗桂と改めさせた。信長は圍碁も好きであつたが、史上に現はれた彼の性格から推すと、テキパキした將棋の方が適してゐたらうと思はれる。軍旅のつれづれに將棋盤など出させて、美少年蘭丸を相手に夜を更した事など想像して見ると詩的である。此の時に當つて初めて碁將棋所といふものが出來て、本因坊算砂が是れを預かつた。算砂は碁に於て名人であつたのみならず、將棋にかけても八段であつた。後に碁所と將棋所とは分離して、將棋所は大橋宗桂名人の故を以て是れを預かつた。宗桂は將棋を以て、織田、豐臣、徳川の三代に歴仕し、寛永十一年に歿した。

宗桂の後に、將棋の宗家として代々其の職に任じ、世祿二十石十人扶持を賜はつた。然後に至つて大橋の分家と伊藤家とが將棋の宗家たる事を幕府より命ぜられた。大橋分家は、二代宗桂の次男が別家を立てたもので、伊藤家は、大橋家の二代目宗古の門人宗看が、寛永十一年名人の故を以て特に命ぜられたのである。德川時代には將棋の免許を出すのは以上の三家に限られてゐたが、大橋別家と伊藤家とは幕末頃に於て既に家系が絶え、獨り大橋本家のみは十一代續いて來たが、明治四十四年大橋宗金が歿すると共に相續人が無く是れも家名が斷絶してしまつたといふのは眞に惜む可き事である。

偖、將棋所出仕といふとどんな事をしたのかといふと、年に一回登城して將軍の御前で將棋を指して上覧に入れるだけの事であつた。是れを御城將棋と稱へた。私は先年本誌のために「將棋飛傳」を草して、御城將棋の條に於て其の模樣を詳述して置いたから、今回は重複を避けて簡單に記して置く。當日の棋士は何れも五ツ半に登城して、碁方も將棋方も同時に將軍の御前で勝負を決するのである。手合せは夕七ツ時を以て終局する定めであつたが、何を言ふにも年に一度の晴れの勝負で互ひに容易に手が下せない。其處で後には下指しを行ひ當日は唯指し直しをして上覧に入れるだけの事にした。但しお好みに依つて其の

みで指させることもある。大将家には御前将棋に用ゐた将棋盤[illegible]合せ[illegible]将棋[illegible]になつてゐたさうだ。将は時の将軍の御前[illegible]行が細[illegible]して長くの[illegible]で、是れは其の場限りの達者さ[illegible]れて年々新らしい紅を用ゐた。御前将棋は勿論所謂御[illegible]の目的を以て行はれたので、[illegible]になつてゐた。然し将にして将軍自身が好める道であるが、年中[illegible]日でも将棋好きに観て居られるが、代々の将軍の中には[illegible]の嫌いな人もできないとは限らない。だから時々御[illegible]が下つて御座所には刀掛けばかりが飾つてあるやうな事もあつたといふ。将棋の[illegible]すれば両角を下げるといふ[illegible]方法があるからいいが、[illegible]

[illegible]

享保時代に[illegible]の人で名村立摩といふ将棋指しがあつた。江戸へ出て来て當時有数の指し手と言はれてゐた。此の立摩が時の名人伊藤宗看と対局することになつた。享保二十年九月十七日の事であつた。立摩は其の時六段であつたから、宗看に対しては香角の交りで向ふのであるが、初番は角落ちで指した。下手方の立摩としては、此の角落番にはどうしても勝つて置かなければならない勝負であつた。[illegible]が、段々其の将棋に負けてしまつた。

立摩は[illegible]

[illegible]

上に現はれてゐた。「香落ちでも油斷はならない」と宗看は自分の心を戒めた。

愈指し始めてから、宗看は相手の駒組みを見て再び驚かされた。立廓の駒組みは全く獨特のものであつた。さうして其の一つ一つの駒を打つ時、立廓の體から何とも言へない殺氣が迸つて出るやうで、流石の宗看も氣後れがして到頭此の香落番の將棊を負けてしまつた。

後に至つて此の話が人に知られ、其の時の將棊も有名になつた。所謂「立廓流」の駒組みとして世に傳はつてゐるのが此の將棊である。

○

名村立廓と對局した伊藤宗看は伊藤家三代の祖である。前名印寿、享保八年相續、同十三年名人になつてゐる。此の人は古今の指し手であつた。餘り強いので、誰れ言ふとなく鬼宗看といふ名が附けられた。

宗看の五男に看壽といふ者があつた。後に八段に昇進し、死後名人を賜はつた人である。此の看壽がまだ若くて四段でゐた時の事である。最早十分實力も備はつて來たので五段に昇進させ度いと思つたが、或事情から大橋宗與がそれを拒んで果させなかつた。悶着の結果が、宗與看壽の手合せとなつた。宗與は八段であつたから香車を引いて看壽と對局した。此の一番で看壽が宗與を破る事が出來たならば、無論其の五段昇進に對して宗與は異議を唱へる餘地が無くなるのであつた。

看壽に取つて必死の勝負であると共に、親の宗看も自身の指す將棊以上に心配した。手合せは將棊所に於て行はれた。宗看は自宅にゐて刻々報告して來る門弟の言葉を聞きながら盤に向つてゐた。

上手方が五十七手目を指した時であつた。盤面を見て考へてゐた宗看は側にゐた門弟を顧みて

「今度倅が六九の歩を打てば此の將棊は勝ちになるのだが」と言つた。

門弟には其の歩の意味が解らなかつた。そこへ表から一人の門弟が駈けて來て「若先生が六九の歩をお打ちになりました」と言つて報告した。

それを聞くと宗看はにつこり笑つた儘、釣り竿と餌を手にして、飄然として魚釣りに出掛けてしまつた。

將棊は果して看壽の勝ちになつた。六九へ打つた歩が遙か後になつて役立つて來て敵の死命を制するに至つたのである。

[illegible]人になつた小林の[illegible]の不安時代に、矢[illegible]本石は[illegible]田[illegible]次郎、[illegible]此の介[illegible]が[illegible]駿河の[illegible]ことにした。[illegible]

[illegible]

「日が暮ば勝が無いと指せさせぬ様……すこらは九日から大晦日迄年が年ちう馬の手綱を取つて血を流る人間で、死る際にご拍えませんから、商賣の御品は是でも有目[illegible]まず」

と一一盤に仲々面白い事を言ふ奴だ」と余所は矢張に入つて「さうか、それでは一番指して見やらか」

[illegible]で指ました……四手、七六歩――と言つたやうに両人は口頭で指し始めた。

富士山が頭の上に[illegible]……[illegible]しに窪い高く見えた。神には自然が[illegible]のやうに[illegible]いてあた。一人は[illegible]の上で、一人は手綱を取りながら、踊りに将棋を指し続けた。[illegible]わ中の行程を、馬の首目が[illegible]と共に過り行いたが、此の将棋は余静な勝になつた。

[illegible]日の[illegible]が余静の[illegible]れて[illegible]で、[illegible]将を指したけれども[illegible]い人に出逢つた事がない。今日は[illegible]といふ[illegible]して[illegible]した。

[illegible]つた

明治にた〔?〕東吉といふ人があつた。将棋は八段で明治初期に於ける有数の人である。或る時此の東吉が東海道を旅行に出掛け、沼津の町に足を止めた時のこと、頃しも夏のことで、夕涼に町へ散歩に出掛けると、或宿屋の前で床几を出して盛んに例の縁台将棋といふやつを指つてゐた。東吉も好きな道の事だから、ふと足を停めて覗いて見た。すると其の中で宿屋の主人といふのが中々の指し手と見えて一同を相手に頻りに気焔を揚げてゐた。

「中々お盛んですね」ようです、私が一番お相手しませうか」

と東吉が宿の主に言ふと、

「ハ、ア、お前さんも指せるかね。おやア一番指さうか平手では無理だらうから飛車を抜かうかネー」

と大層威張りで言ふのだ。東吉は心中可笑しくて仕方がないのをお堪へながら

「いや初めての事ですから何でも平手で願ひませう」

「ヘエー、それはやあなかく指せると見えるネー」

早速二人は縁台で指し始めた。東吉は主の腕前が不断指かつたので、一つギューの音も出ない様に負かして遣らうと思つた処が、いざ指して見ると主の指し口が中々鋭く並一通りの掛けで来るので、東吉は馬鹿にしながらあしらつてゐるうちに何と言ふ事もなく負けてしまつた。二番目を指すと、是れも矢張り東吉の負けになつてしまつた。三番目には[illegible]なかつた。

「いや御主人、あなたは中々お強い。到底私には[illegible]ます」

と東吉が始めて名乗つたので主人は非常に驚いてしまつた。

「大先生で御座いましたか。いやどうも何とも存じませんで飛んだ失礼を致しました。それにしても日頃に[illegible]よく平手で指せたものです」

と主人は頭を掻いて恐縮した。それから又もや数番指したが、もう主人は一番も勝つ事が出来ず、遂に一枚落ちも負けてしまつて、先づ二段といふ事に相場が決まつた。東吉は其の場で主に二段の免許状を与へた。

是れと似た話である。今から十年も前の事、小野五平翁が黒田清綱の邸へ伺候すると、丁度其処へ来客があつて将棋の話が出た。清綱は其の客に向つて五平翁の名前を告げずに、何処の老人は将棋が好きなやから貴公一局指して見てはどうかと言つた。来客も興を催して然らばといふので対局した。五平翁と知らないので、[illegible]平手で指す事になつた。指して見ると、来客の鋒先きが中々鋭く時々は馬鹿に出来ない

[illegible]指すので、九[illegible]を見ずに指して見せる。四段の人と指した位の力を用ひて判断するには驚いた。此の人は段位指す人であるが、何れ位あるだらうと思つてゐると、主人がカラカラと笑ひ出し、

「まあいゝ、呆れたよく指したなあ、此のお人は小野五十鈴だよ」といつた、[illegible]としてしまつた。本多は確に本因坊であつた。

「私が[illegible]有明を聞いたので、[illegible]て指さなかつた」といつて[illegible]は笑つた。

根本の[illegible]の段位は何段も無かつたのである。

一、さし方といふ事がある、是れは外局の、人の外に上手な人が[illegible]に、力へ助けするのである。助けると云ふことは相手にするやうにやつては無論苦情が出るから、是れを[illegible]方法を用ひてやるのである。然んな事は到底尋常な場合人は出来てゐる。余程の力にならうといふ事なのである。[illegible]も通し難である。どうしてやるのかといふと方法は色[illegible]、人[illegible]なのになつ[illegible]数の調べ一九九とか一八と[illegible]いた札を下げる。無論相手の背後へ下げるのである。

かな、此方からは是へこちらにはずつとない。[illegible]の段目からずを[illegible]いて見[illegible]指に[illegible]。其の糸の引き方に依して指すのもある。其の[illegible]に依[illegible]口[illegible]もある。例へば東[illegible]……ムと言へば九[illegible]帰れの[illegible]。[illegible]は九寸[illegible]……と言へば九筋に[illegible]といふ。[illegible]九[illegible]と言へば、[illegible]し[illegible]六[illegible]目にうしたとは[illegible]指[illegible]本出しかきに九[illegible]の九へ、[illegible]手の[illegible]を[illegible]開いて[illegible]けて[illegible]本[illegible]ば[illegible]の調の[illegible]に[illegible]の—とは関係[illegible]た気になることである、成に[illegible]ならない[illegible]である。

[illegible]州[illegible]本[illegible]に[illegible]人があつた。多少[illegible]たかずつ[illegible]の[illegible]い[illegible]、[illegible]村の若者[illegible]手に[illegible]指しては[illegible]から[illegible]上げてゐた。[illegible]の[illegible]行る土地たけに[illegible]人と[illegible]に[illegible]ない者は[illegible]た。若者達は何[illegible]に[illegible]の[illegible]と[illegible]の[illegible]して[illegible]、東京から[illegible]た[illegible]の[illegible]か[illegible]いて、若者[illegible]に[illegible]て無論[illegible]して、[illegible]は是れ[illegible]の[illegible]りたいと[illegible]から十分に[illegible]に[illegible]れ、且[illegible]

路用にさへ事缺く折り柄でもあつたので小柄の若者を言つてゐる者が無く「宜ろしい請け合つた」と即座に若者の手首を取し合せて、例の盤で先生を一人の若者が或る料理屋へ呼び出し、下座敷でパチリ／＼指し始めた。

一方先生は大勢の若者達と一緒に同じ料理屋の二階へ押し上つて花客を呼んで大散財をすると見せかけ、障子の穴から下座敷の盤面を覗いて見ては、「三筋の歩を突け」とか「九筋の角だよ」とか出鱈目の節を附けては歌ふ。すると若者達は聲を揃へ、三味線太鼓に合せてヤンヤと怒鳴る。

可哀想な盤は、一と晩の中に今迄の勝ちを殘らず吐き出してしまつた。

「飛どころか飛車手王手を食つてゐる」

大阪の盤面勝之助といふ將棊の先生がまだ十二三の子供の時分の事、丁度夏の夕暮近くに中橋筋を通ると、或家の前で軒下に床几を据ゑ五六人寄り集まつて將棊を指してゐた。勝之助先生も好きな道の事とて立停つて面白く見物してゐたが、中でも其家の主人と見える六十以上の爺さんが一番強く、得意々々と自慢してゐるので、子供心にも片腹痛く思つて

「濟みまへんけど、わたいに一番教へて上げておくなはれ」と言ふと、爺さん陶然として駒を並べながらニコリとして

「あんた、將棊を知つてなさるのかいな、これは感心、では一番教へて上げまへう」

といつて先づ試しに平手で指し初めた。勝之助先生は其の頃既に初段位の腕前だつたので苦もなく爺さんを負かしてしまつた。

「ハハン、油斷大敵や、もう一番」

幾らやつても爺さんは勝てやう筈はなかつた。忽ち三番作に負けてしまつた。

「偉う強いしやさかい」と見物人は指驚いて舌を卷いてゐた。が、爺さんは忌々しいやら面目無いやらで顔焦れて「もう一番」といふので倒頭四番目を指しかけた。其時分にはもう日が暮れかけて盤の上がすこし暗くなつて來た。先刻から此の爺さんの配偶のお婆さんは、夕飯の支度が出來たからと言つて何遍も門口から顏を出して爺さんを呼ぶのであつたが、爺さんは一向聞えぬ振りで頭から湯氣を立てて指してゐた。

「お爺さん、先刻から御飯だ言ふて呼んでるさかい、あんた聞えんのかいな」婆さんは到頭焦り兼ねて側へやつて來た。

「うるさい、齡は取つても耳は確かやぞ、ちやんと知つてゐ

「[illegible]下る[illegible]」
「[illegible]なれ[illegible]日が暮れてしまふぢゃないか」
[illegible]いなさんと見え、ちょっと[illegible]の手を伸ばし一盤面を
ガッツリと[illegible]してしまった。
「[illegible]此の[illegible]たが[illegible]はカッとして起ち上るや
[illegible]面をボカリと喰はせた
「[illegible]人をふるたは[illegible]た」
「[illegible]おどうしたのか」
「[illegible]い、[illegible]間違[illegible]にさす
ふい[illegible]」
[illegible]に[illegible]らぐらにしがみ付いた[illegible]さんは[illegible]の
局[illegible]ボカボカ[illegible]付けた、[illegible]が飛び、[illegible]んだ、騒
騒ぎ[illegible]いたやうに往来を[illegible]った。
[illegible]行[illegible]れ込んで[illegible]日前に[illegible]した

[illegible]には[illegible]はへぼの名人
[illegible]にたのともいふ。上手でも心の[illegible]で却ってへボ以下の
[illegible]ることがある。[illegible]物[illegible]したも段違い[illegible]の
對局で、気が[illegible]取りと何を[illegible]った[illegible]の時某氏に一時間以上も

考へた末に、彼の飛車を[illegible]めに一日後へ引きいた[illegible]。それ
が大っ嫌いの[illegible]の方へ[illegible]けたために、直ぐに其の飛車を
取られてしまって[illegible]々々しい敗を取った事がある。此の某氏
は非常なる熱心家で、對局中は一日でも二日でも決して自分か
らは[illegible]を發せず、身を[illegible]して盤面にのみ心魂を[illegible]してゐ
るが、それでも萬一見落しをしたり悪手を指したりするとハッ
と手を膝に落して額から油汗を流したと言ふ。若し此の人が
今日まで生きてゐたら恐らく敵は無かつたであらうが、惜しい
事には餘り心身を労し過ぎたために四十[illegible]にも達せずして逝か
れたのである。此の人にはまた[illegible]んだ話もある。或る人との對
局中、某氏は頻りに[illegible]へ[illegible]て[illegible]へ持
って行ったが、火のある處へ持って行かずに火の無い處へばかり持
って行くのでいくらやっても火がつかない。スパスパ吸っても
始末がないのでウッと[illegible]ち上ったから何[illegible]と見てゐると、
煙管へ煙草を詰めて一[illegible]りに吸ひ付けてゐた

名人と下手との[illegible]は、[illegible]いものである。[illegible]、両者の間には
下[illegible]段違いがあるが、天地の[illegible]
[illegible]ある。上手とは名人界に在って[illegible]した者を指して[illegible]ふの

であるが、名人に在つては彼の[illegible]として野鶴に跨り白雲を追ふて仙境に遊ぶ人のたぐひである。上手迄は達し易いが、名人の域に入るは難しである。が、更に進んで、名人以上の名人といふものは無いであらうか。たとへば仙家に棲まずして神の交りをなす如きものである。畢竟、技に窮りの無いものであるからには、それも架空の話として片付けるわけにはいくまいではあるまいか。

古來の將棊道に於て名人以上の名人を探ね求めるならば、唯一人僅に天野宗歩を得る事が出來るばかりである。彼は、其の身が宗家に生まれなかつたために位は終生七段に止どまつてゐたが、實力は遙かに是れを凌駕して十一段に相當したと言はれてゐる。九段を名人と言ふから、彼は名人を拔く事正に二段である。古今無類の天才で、眞の棊聖と稱ふべき傑物である。私は、四五の書に現はれてゐるところの記事を綜合して、玆に極めて簡單な彼の評傳を物さうと思ふのである。

文政の初年の頃である。江戸の將棊指しの間に、本郷の菊坂に神童が生れたといふ評判が立つた。其の子は四五歳位の時から將棊を覺え初めて、今では大人も敵はぬ程に指すといふ評判である。やがてそれが十一世大橋宗桂の耳にはいつた。宗桂は人を以て探らせて見ると、確かに評判に違ひなく、當年僅かに六歳の小兒の身ですでに初段近く指すといふなかなかの[illegible]。宗桂は驚ろき且つ喜び、是れ[illegible]のために將來に用逸無いと言つて、早速自身で親元へ交渉して其の子を自家の門弟にした。此の小兒こそ、後年天野宗歩と名乘つて天下の將棊指しを眼下に睥睨した大名人の卵であつたのである。

小兒の名は留次郎と言つた。留次郎は宗桂の教へを受けるに及んで益天稟の才を發揮して、十三歳の時には既に三段に進んだ。其の頃の三段は優に當今の五六段に匹敵するのである。其の後十五六歳の時、江戸を發つて單身諸國遊歴の旅に出た。彼は到る處で、あらゆる人と技を闘はし、已れが研究の材料とした。此の遊歴は彼を益する事實に尠くなかつたのである。彼が非常なる底力を養成する事の出來たのは多く此の時代の賜物である。後年彼が再び故郷の江戸へ立ち歸つて來てお膝元の棊界を震駭せしめた時、幕府の役人で初段を指した荻嶋といふ人が、それを見て「天野は諸國を修業して歩いて將棊を調べてゐるから實に妙な事を指す」と言つて驚嘆したといふ事が記錄に殘つてゐるが、古人の糟粕を嘗めて甘んじてゐた當時の宗家の子弟などに取つても、天野の指し口が如何に驚異であつたかは想像するに難くない。

彼は其の後久しく京都に足を停めてゐた。京都に居る間に彼

[illegible]に臨[illegible]指手
こと人[illegible]段々[illegible]出て来[illegible]
[illegible]文化十[illegible]年の生れで
[illegible]となつた
[illegible]に於ける大野の働きは目[illegible]ましいもので、[illegible]
[illegible]其[illegible]無く[illegible]してゐる。当時[illegible]中に住へてゐた橋
[illegible]といふ人の[illegible]し[illegible]に依つて[illegible]は可成り[illegible]
[illegible]には[illegible]を[illegible]にしとめて[illegible]の成者
[illegible]にしよう
[illegible]に於ける[illegible]の大家を[illegible]と、大野の[illegible]
（[illegible]段）[illegible]段（[illegible]し段）[illegible]石（七段）大[illegible]六
[illegible]として、市川太郎松（六段）川[illegible]
[illegible]段）[illegible]々たる[illegible]つた。大[illegible]
[illegible]人[illegible]手合せをして[illegible]
[illegible]して、[illegible]大野が[illegible]
[illegible]下手に於けては八段の力[illegible]
[illegible]はこれ[illegible]あつたが、大野は此の[illegible]
[illegible]勝利を得てゐる[illegible]
[illegible]八段の[illegible]これに依つて[illegible]大野は気
[illegible]來る[illegible]大[illegible]といふ[illegible]

の努力を[illegible]めてゐる人の[illegible]へ行つて、[illegible]所といふ[illegible]段と
[illegible]の外に[illegible]段の者を制[illegible]に[illegible]手合せをしてゐ、
一番[illegible]大野が[illegible]つてしまつた。[illegible]なことは[illegible]と指して[illegible]
て、[illegible]した[illegible]に大野が[illegible]一[illegible]取られて、今度は[illegible]
でも負けたと思はれた。すると大野は[illegible]かり[illegible]へて
指して、それも[illegible]の勝つてしまつた。大野の[illegible]は[illegible]に近
かつた。彼の眼から見れば何れも[illegible]々たる相手ばかりな
ので、[illegible]を[illegible]までの必要を認めなかつたのだ。[illegible]作
といふ[illegible]段[illegible]手合せをした時なとは、相手が[illegible]へて
[illegible]を待ち[illegible]相手が[illegible]出した[illegible]ツ／＼と指して[illegible]
[illegible]に指し[illegible]してしまつた。江戸[illegible]の[illegible]は[illegible]々[illegible]へて
[illegible]た[illegible]と彼は人にも[illegible]た。
大野は[illegible]人の[illegible]行く[illegible]く江戸の[illegible]を[illegible]して
まつた。彼の[illegible]は[illegible]く[illegible]た。江戸へ出て来た[illegible]
[illegible]に彼は[illegible]段に[illegible]して[illegible]
に向つて[illegible]したのには、[illegible]な[illegible]級が彼の[illegible]
に[illegible]して何の[illegible]もなかつた[illegible]である。
市川太郎松は[illegible]一の[illegible]つた。彼は大野と[illegible]
[illegible]た[illegible]の[illegible]も、大野の[illegible]
[illegible]下に[illegible]、[illegible]それだけに熱心の[illegible]

も人並みに外れてゐた。彼については恁んな逸話がある。或時太郎松は吉原へ遊びに行つたが、其の儘何時迄も歸つて來ないので師匠の天野が心配し出して、他の門弟に命じて太郎松の居處を探索させに遣つた。門弟が廓へ出掛けて方々心當りを尋ねて廻ると、太郎松は某樓へ登樓したは宜いが勘定の金が無かつたために行燈部屋へ捕はれてゐる事が分つた。平常温和しい男の事だから嘸かし弱つてゐるだらうと思つて、大急ぎで金策をして迎ひに行つて見ると、薄暗い行燈部屋の中へたつた一人で擲り込まれてゐる太郎松が、どうした事か欣々然としてさも歡ぶに堪へないやうな面持をして座つてゐるのであつた。「どうしたのだ」と訊ねると、彼は友達の顔を見たので稍勇み立つて「いや實に有難い、ゆうべから掛かつてお蔭で妙手を工夫したんだ、まあ聞いて呉れ、恁ういふ駒組みの處で……」

天野の家にはいつでも門弟食客の五六人位は絶えた事はなかつた。今の名人小野五平翁も曾ては其の一人であつた。其のほか力士などもよく贔負にして家へ置いたりした。蓄財といふ事をば考へなかつた彼の生活振りは可成り豪奢なものであつた。彼には妾が五人あつた。そして平常は酒ばかり呑んでゐて滅多に將棊を指すといふ事はなかつた。けれども彼の念頭からは寸時も將棊を忘れてゐることはなかつたのである。盤に向はずにゐる間に却つて彼の想が練られるのであつた。彼は毎晩床に就いてから必ず寝言を發する癖があつた。其の寝言にいつでも將棊に關係した事ばかり口走つた。五平翁なども度び〳〵師匠の寝言を聞いたものださうである。こんな風であつたが、修業中の門弟に對する態度は頗る嚴しかつた。彼に一人の年少の弟子があつたが、それに向つて毎晩詰將棊の課題を一つ宛與へて「是れを詰めて見よ」と言ふのが例であつた。少年は一心不亂に其の詰將棊を盤に並べて考へるのであつたが、六ケ敷くて容易に詰まぬ事が多かつた。夜が更ける迄考へ考へしても一向詰手が發見されない。冬は寒氣が身に浸み渡り、夏は蚊の群れの餌じきにされた。それでも最後には睡たくなつて來て、駒を掴つた儘思はずコクリ〳〵と居睡りを始めては、ハツと氣がついて再び盤面に精神を集中するのであつた。それでも正しい解答が出來上らぬうちは師匠は寝る事を許さなかつた。餘り可愛相なので、時折りは市川太郎松が密り行つて詰手を教へて遣ることもあつた。此の年少の門弟こそ、後年天野宗步が門人中の隨一として、師匠と香落ちの手合せに達して名人の實力を認められた渡瀬莊次郎其の人であつた。

天野と市川太郎松とは兄弟もただならぬ交りであつた。二人で酒を飲みながら、太郎松が師匠で指した將棊の話しを始めた

[illegible]

其の好みに依つて所々に御前で指す可しといふ命令であつた。[illegible]宗桂[illegible]大野に[illegible]したのであるが、[illegible]大野には勝つた事はなかつた。けれども、今度の[illegible]は是非勝たなければならなかつた。[illegible]に対して[illegible]なかつた。其の上今度の御前将棋で自分が負ければ、既に大野を八段にしなければならないのであつた。[illegible]段以上の者は[illegible]に於て、名人の許状[illegible]将棋[illegible]に関係の無い将棋指しは[illegible]素人と称されてゐた。[illegible]それ以上に[illegible]る事は[illegible]門の[illegible]前からも[illegible]である。[illegible]でも勝たねばならぬ。と宗桂は考へた。

其の手合せ[illegible]表された時から、宗桂の[illegible]大の[illegible]人に[illegible]つて[illegible]日[illegible]行つた。[illegible]日は[illegible]し、御前[illegible]へ」と[illegible]は一心不乱に[illegible]するのであつた。

宗[illegible]にして、[illegible]であつた。宗桂[illegible]一[illegible]であつた。[illegible]であつた。

今[illegible]日は[illegible]といふ[illegible]

る方人の家へ遊びに行つた。すると其所で酒を出されたが、いける口だけに宗歩は飲み始めるとつい量を過した。と、其席に居合せた一人の男が些細な事から宗歩に口論を吹つ掛けた。宗歩も平常負け嫌ひではあるし酔つてはゐるので堪らない、忽ち大喧嘩が持ち上つた。すると不思議な事には、其席に居合せた者はみんな口を合せたやうに相手方の男の肩を持つて宗歩を罵るのであつた。宗歩は癇癪を立てて帰るにも帰られなくなつてしまつた。

大野の家では師匠の帰宅が遅いので一同心配してゐたが、漸う居所が判つたので門弟が迎へに行くと、右の有様で悶着が片付かないうちは帰れないと言ふのである。門弟の力ではどうにもならないので、到頭大先生の宗桂の許へ人を走らせて此の事を報告した。宗桂は非常に驚いて早速駕籠を飛ばしてやつて来た。これで漸く喧嘩は納まつたけれども、其の時は既に夜明け間近になつてゐた。前後の事情を聞いて宗桂は非常に立腹した。平常と異り明朝は御前将棊といふ大役を控えてゐる人間である事を知り乍ら多数を以て斯様な狼藉を仕掛けるに就いては何事か深い意趣が無ければなるまい、此の事を逐一公儀へ訴へ出て黒白を付けて貰はふ、そして次第に依つては明日の宗歩宗看の手合せは延期を願ふ事にすると言つて息まいた。関係者一同は今更の如く困惑してヒタ謝りに宗桂に詫びた。最後には宗看さへやつて来て其々に謝罪するので、宗桂も行懸りを捨てたが一ト夜は門人の身に就いては飽く迄も案ぜられてならなかつたので、「お前はこれで今日の御前将棊が勤まるか」と言ふと、「大丈夫でございます」と宗歩は泰然として答へた。

こんなトックリのために宗歩は遂に一睡もする事が出来なかつた。彼は我家に帰るか否や直ぐ仕度を整へて登城をした。

例刻から手合せが始まつた。此の日のあらゆる手合せを通じて、宗看宗歩の対局が人々の興味の焦点になつてゐたとは言ふ迄もない。宗看の面上には必死の色が現はれてゐた。宗歩も敢て油断はしなかつたが、彼の心の落ち着きは平素とは異しく変つてゐた。殊に最初に臨んだ殿内の物々しい有様が、町人の家に生れて初めて斯様な所を見た宗歩の眼を幾らか眩つた。上様の御出座を知らせる警蹕の声を聞くと同時に、悲しい事には彼れは子供に返つたやうな謂はれのない畏ろしさを覚えた。宗看と対局してゐながらも、絶えず頭の上から見下されてゐる上様の事が心にかかつてゐて将棊を指す手の邪魔をした。手筋も平素の様にスラ／＼とは頭に浮かんで来なかつた。昨夜の飲み過ぎと徹夜でした疲労のために乱れてゐる頭脳が、乱れた儘に固まつてしまつた様で、容易に盤面と思慮とが解け合つて来なかつた。

さうして作れば作る程駒の働きは自由を失ふのであつた。

其の日は御前で十五手迄指して指し掛けになつた。其の續きは、翌る十八、十九の兩日に亙つて老中安藤長門守の役宅で指し繼いだ。然し、最初の出發點に於て既に敵に一籌を輸された形の宗歩の駒組みは何時迄も其の祟りを受けてゐて、どうしても退嬰的に傾きがちであつた。

四十七手目であつた。宗歩は六八銀と引いて安全を求めやうとした。すると隙かさず宗珉は八六歩と附け入つて來た。宗歩の弱氣な此の一手は返す〲も失敗であつた。彼ほどの大名人でも失敗のおかした過失はあるのである。それから宗歩は益苦戰に陥るのであつた。

此の將棋は遂に宗珉の勝利に歸した。其の譜は現に傳はつて名高いものとなつてゐるのである。

宗歩は憤慨懊惱の極み遂に吐血したと言はれてゐる。が、勝ちを得た大橋宗珉の方は更に更に惨であつた。宗珉と其の後のふたりは、勝負の餘り遂に逆上してしまつた。そして前後して狂れ死にを遂げたのであつた。世間ではそれを目して[illegible]をつた報いだと言つた。

○

古い「將棋新報」に將棋の駒に關する研究が載つてゐた。駒の形から始めて、駒の文字、駒の種類、駒の用材、或ひは漆の入れ方等に迄亙つて流石に專門家だけあつて夫れ夫れ素人の知らない事が言つてあつた。駒とは將棋の隱語にもなるから、すこしばかり要にも書き加へて置くとしやう。

西洋將棋と支那將棋の駒はまだ實物に接した事がない。繪で見てゐるだけである。西洋將棋の駒は各々物の形に倣つてあつて文字は記してない。例へば王樣、后樣、馬、砲臺などといふのがあつて、何れも其の形に造られてゐるのである。だから文字を識らない子供などでも容易に弄ぶことが出來る。支那將棋の駒は、圓くて、敵味方に依つて黑白の別があつて、それに文字が記されてゐる。クロークの胴へ文字を書き入れた物と思へば大差はない。

日本の將棋の駒は、仔細に考へて見るとよほど面白いものである。一體何からあのやうな形が生まれて來たのであるか判然しない。一説に依ると支那の時代の駒がさういふ形狀だつたものだと言ふ。それに支那の古代の將棋の駒は木材の札であつたといふことが何かの古い書き物にあるさうだから、將棋の駒形が恰度今の木札に似通つてゐるのを結び付けた説であらう。何れにしても、まづ此の邊り先端が細く下方が太くなつてゐるために、敵味方の區別も附か

であるし、盤に並べた時の具合も何んとなく勇ましく戦争的気分を喚起せしむるものがある。支那の駒の如く黒白の差別を付けないのは、敵の駒を取つて打つといふ事が行はれるからである。いづれ漸次に改良されて来たものであらうが、とに角洗錬されたものと言はざるを得ない。

偖て将棊の駒には、水無瀬形、金龍形、昇龍形、安清形、金津形などといふ様々の種類があるそうである。駒の形は大同小異だが、只文字に依つて名称が異つてゐるのである。水無瀬といふのが古来・最有名である。豊臣時代に水無瀬中納言といふ人があつて、後に剃髪して一齋と號した。此の人は能書家であつたので、豊臣秀次が将棊の駒の文字を書せたのが所謂水無瀬形の起りである。昇龍、金龍などは昔安(?)の米庵、菱仙(?)などが書き始めたもので何れも江戸出来である。金津形と言ふのは行書や草書で書いたもの、安清形といふのは文字が穏やかで上品なところから、現今も大阪辺では盛んに此の形の駒が愛用されてゐる。

駒の用材としては水晶、象牙、紫檀、黒檀などもあるが、矢張り柘植が最も宜ろしい。堅過ぎてもいかず、軟か過ぎてもいかず、又毀れ易いものや汚れ易いものでは實用に向かず、又打つ時音の悪いのも心持が好くない。あらゆる點に於て柘植が最上である。然し柘植にも幾通りかあつて、古来三宅島の産出を以て第一としてある。普通の木目のものが一番下等で、柾目(?)のものに杯、藤倉(?)が最上である。上等の駒には木のいたむ(?)が多く、使へば使ふ程益光澤を生じて来るのである。

矢張り駒に關した事だが、「王将」が正しいか「玉将」が正しいかといふことに就いては古来論議されてゐるが、未だにどちらとも決しないやうである。大抵の駒を手に取つて見ると、一組の中でも一方には「王」と書し、一方には「玉」と書してある。普通の俗用品としては「王」で通つてゐて不思議がられてもゐないやうだが、又中には必ず「玉」と呼んでゐる人もある。

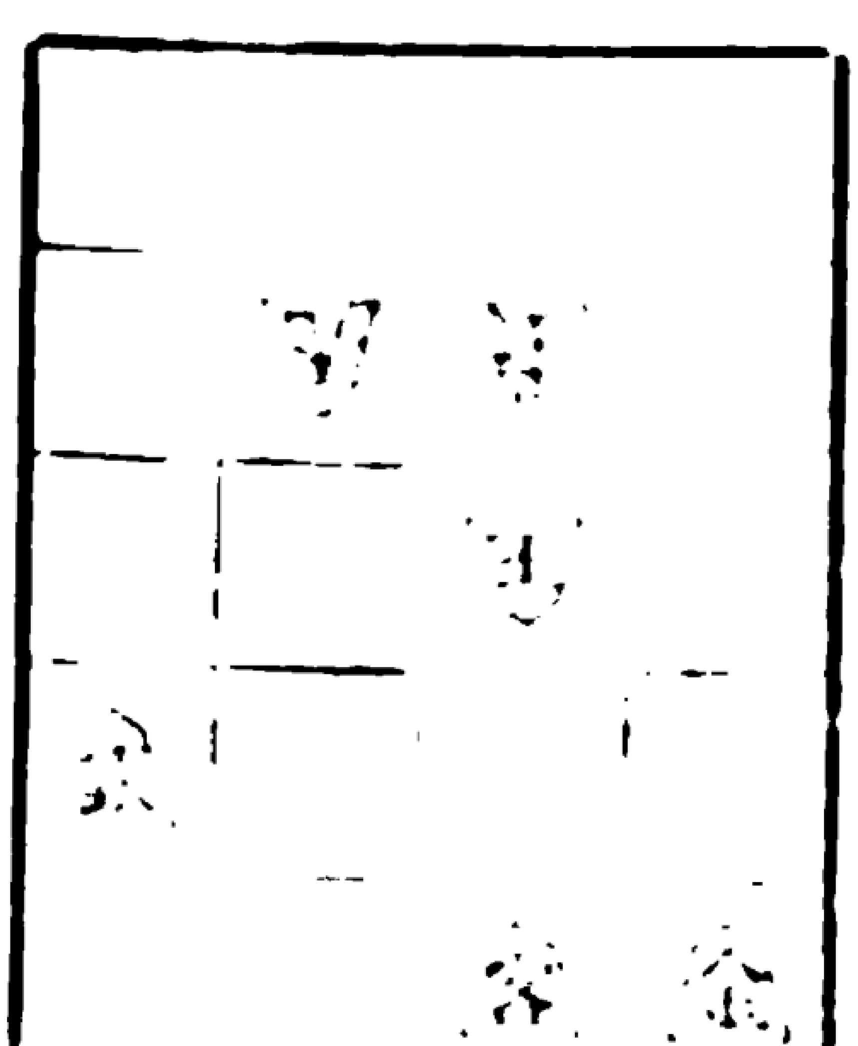
玉将を以て正しいと主張する人の説に依ると、既に金銀桂香の寶があるのだから、其の上に位するものとしては珠玉の外にある筈はない。若し王（ワウ）の意味であるならば「王将」は如何にしてもおかしい、王なら王でよさゝうなものである、王将では字義をなさないと言ふのである。又一方「王将」側に言はせると、王手と言ふ語は古くからあるが玉手と言ふ語は決して無い。壒嚢抄といふ書に、一つは王と書き一つは玉と書くは國に二王あるを忌む也見手跡家の口傳なり云々、とあるのを見ても元は双方とも王将であつた事は明らかであると主張する。

偖て将棊の書物で見ると殆んど「玉将」となつてゐるそうであ

る。又、四時代に年々に指定から剣戟将来の芸術を上るのが古よい時代になつてゐたが、其の名詞には双方共「王将」と書いて、「玉将」とは書かなかつたさうである。是れは中象戯に「玉象」とあるのを「玉将」と改めたのが本来のものであるとも言ふ。又ある人は略して「玉将」を以て正しいものとしてゐるさうである。然らば「王手」といふのはどういふ事だと追究される。これに對しては、「王手」とは王手と書くから問題を生ずるので、本統は「追手」と書く可きである。則ち追手、搦手の追手であると言ふのだが、是れは何うやら怪しいものだ。

山東京伝の作に「手段詰物娼妓絹籭」といふ洒落本がある。是れは「将棊綱目」といふ書に擬へて作つたもので、總て將棊の術語を用ゐてゐる處に所謂洒落があるのである。第一回「詰押と角の二タ道には間者子もならぬ梅川の所謂手玉手」第二回「つかひはたして二歩なる亀屋忠兵衛は我らびやうでもいきらぬ身の上」第三回「分銅をつかふ客にもかまはずに桂に行くは女郎の道。朝の分道」の三段になつてゐる。大體の筋を言ふと、大坂新町の槌屋治右衛門が抱えの梅川といふ女郎がぶら〲病によつて不眠の夜で若き者の養命の看病を受けながら暮らしてゐる連続時で、ふたりの女は秋の夜ながのつれ〲に譜の噂など始め、何時しか話題は梅川の馴染客亀屋忠兵衛の事に移る。梅川は自分の此の病氣ももとは忠兵衛といふ男のためから起きた事だと言つて、別れてゐる當時の事を追懐して物語つてゐるうちに疲れて其の場へ眠つてしまふ。妓迄が第一回で、第二回以下は梅川の夢になるのである。夢の中には、梅川自身に關係の無いさま〲の人品が出て來る。詰り梅川の夢をかりて一篇の世態、男女の人情を描寫するのが此の小説の目的なのである。梅川忠兵衛といふ名前も好い洒落なもので、大阪新町といふのは無論吉原になつてゐる。

此の本の序文は有名なものである。花街を將棊の局面に擬へて、娼妓の駒下駄、茶屋の格子、敵で客夫に間者子、野郎の角道、廓中の間の入王——と言つたやうな洒落を連綴したものであるが、其のあとにこんな物が附いてゐる。



客はしこをこ?ても、女郎こうづの駒に下駄に行く、歩中を一枚もつ、女郎二けん目のけふへこけも、開いて大手を取る、又一けん逃げる、あたまからとらう、女郎不足に出ひやがてわきへこゑ、客をうつ、女郎がそこで死ぬ。

右詰何故

支那には古く庾開府の象戯賦といふがある。それに對抗すべきものが支考の將棊の賦である。是れは將棊の盤面を戰場に見立てゝ、その陣組みを陣法に擬へ、一箇一箇の駒の使命を說き、或ひは其の働き振りを面白可笑しく論評し、入り亂れたる戰爭の狀態を眼前に彷彿せしむるやうに書いてある。將棊の事を書いた文章の中で最も卓拔なるものと言はれてゐる。露伴先生も其の「將棊雜話」の中に支考の將棊の賦を掲げて處々に自家の評を挾み、「才筆縱横、所謂俳諧文字の上乘といふべきものたり」と推賞されてゐる。

直接將棊を題材にした文學的作物は餘り澤山は無い。此の外には曲亭馬琴の作「春駒將棊行路」と「盤州將棊合戰」、森羅亭萬寶の作「將棊指南太平話」位なものであらう。馬琴の「侏の駒」は享和元年の版で、馬琴が三十四才の時の作である。大體は將棊の駒を人に見立てて書いたもので、先づ女郎を玉とし、客を王とし、玉を手に入れやうとする王の望みから事が起り、玉方には大盤の角行やりての香車などが附き隨つてゐる。王は金銀を振捨てて掛ると敵は桂馬で袖を掛けさせ、又は兩天秤で王を惱ませる。或ひは王が飛ぶすまに食つて裸にせられ、窮して雪隠へ隠れて、龍王の忠節に依つて纔に身を免れる條などもあり、桂馬と歩とが屋根の上の戰ひで、桂馬は歩のために惱み

閉されたりする。最後には入船十六夜さなげ、玉を殺がちには[illegible]する處で目出度し目出度しとなつてゐる。「盤州の戰合」は文化十四年の版で馬琴が五十四の時の作である。是れも矢張り玉の將監と王の將也との爭ひで「侏の駒」と同じやうなものである。是れらに依つて見るも馬琴が將棊を指した事だけは明かに判るのである。「將棊指南太平話」には豐國の插繪などがあるが、是れは唯譯もない洒落以成で格別面白いものではない。

將棊と川柳とは大分深い關係がある。川柳の題材の中でも將棊は居候や下女には敵ふまいが相應に重きをなしてゐるだらうと思はれる。古い處から秀逸と思ふ句だけを拔いて見やう。だがどうもヘボ將棊の事を書つたのが一番多い、由來川柳は口が惡いものだから。「下手將棊王より飛車を大事がり」「下手將棊袖を引かれてねめまわし」「時過ぎて一歩を見付ける下手將棊」「負け將棊逃げるたんびにお手を開き」お手を開き一思ひ出すが小說家菊池寬氏位左川雖くお手を開く人も無いものだ。「下手將棊勝つ手と見えて煙草吸ひ」「指し際に拔れてゐると負け川意」「詰んでるに腑甲斐なく下手將棊」「[illegible]歩を打ち」「負けた日は女房氣嫁を取り彼ゐ」「吹けば飛ぶやうな將棊に附け木の歩」「下手將棊補ばかり習ひけり」「[illegible]なる場所でならぬも飛車の一騎馬」「僧何を成りは成つたが手にならず」「[illegible]

[illegible]を四十何に[illegible]た[illegible]の面目躍如[illegible]
つ[illegible]になる[illegible]人生になる[illegible]に
[illegible]おりと人[illegible]は明治年間[illegible]」と手に「面白い
[illegible]今[illegible]の一は人[illegible]詩である。「[illegible]指しか坊の[illegible]に親
出た[illegible]門[illegible]　[illegible]の非なんて[illegible]ふくし」
「[illegible]なんだよと極[illegible]、川柳は[illegible]位にして、[illegible]に
[illegible]面白いのを紹介しよう　是れは[illegible]を指し[illegible]酒を
[illegible]文学にはならない。なお／＼馬鹿に出来ないのがあ
[illegible]別[illegible]人の[illegible]分する[illegible]
[illegible]時代な[illegible]面[illegible]
さて一介の[illegible]は[illegible]い[illegible]
へ[illegible]申しますと[illegible]面[illegible]には色[illegible]
また後らでもあるが[illegible]しいから此の[illegible]にして、
[illegible]次に[illegible]を掲げ出しますが。

○

[illegible]の[illegible]にも[illegible]て居る人であるならば、[illegible]
[illegible]に於て非常なる[illegible]行しつつある[illegible]
ならば[illegible]して居らないであらう。殊に大正九年の秋は因[illegible]
[illegible]の下に名人小野[illegible]九十歳の[illegible]

開かれ、[illegible]は[illegible]明治[illegible]
[illegible]の[illegible]した[illegible]たのであった。[illegible]は
自ら[illegible]の[illegible]を世に問ふに至った。[illegible]の[illegible]
（十七歳）と[illegible]（十七歳）両者の[illegible]の天才
[illegible]はれた事も一面時代の[illegible]であると言へよう。[illegible]には古
への[illegible]時代をも再現せんとする形勢である。日本古来の遊
戯たる将棋道のために大いに[illegible]する[illegible]である。私は由
来[illegible]と[illegible]とを[illegible]者であるが、先年一[illegible]傳一
[illegible]に関する古往今来の[illegible]的[illegible]をめて本誌に寄せ
た事があるので、更に同一[illegible]を同一[illegible]みんと思ひ
[illegible]た次第である。即ち一面[illegible]から見たる将棋[illegible]史であ[illegible]
ると同時に、此の趣味を[illegible]味的に[illegible]なる物を
も良いといふのが私の[illegible]であった。私はこれが
ために[illegible]のみを[illegible]満足せず、或は[illegible]
[illegible]、[illegible]は[illegible]の[illegible]たる[illegible]
[illegible]の[illegible]を[illegible]き、[illegible]に関する[illegible]を得ると共に[illegible]
[illegible]とがあったのであった。けれども私の[illegible]、
加ふるに[illegible]の[illegible]を得るに乏しかったが、
[illegible]十分に[illegible]
[illegible]、稿

を了つて讀み返して見るに及んで所期の十分の一の目的をも達して居らぬ事を識り、此の點に於て深く自ら愧ずると同時に讀者の笑ひを恐るるものである。されど讀者諸君よ、總て良き物を將來に求むるの雅量を以て、斯かる未熟の著を發表する者のあるも、單に思付其の儘行に任かせての記述として寛揚に看過し玉へかし。

大正九年十一月一日於鳳声居

酒の功德

寺田精一

一

かついふ顔を掲げると、私を知つた人々は「君にそんなことが解るものか、僣越な」と開き直つて攻撃しませう。元來私は酒を口にして美味くないとは思はない、けれども三杯位の限度が自分をよい心持に導くので、普通これ以上は飲まないやうにして居る。のみならず私は酒が飲みたくなつたと思つたことは殆んどない、只飲む機會の出來た時に、少しふばかりである。從つて酒間に發生する纖細な技巧や放漫な感興といつたやうなものは、自分自らの經驗としては餘り養成されて居ない。只同席の人々から強ひられたり、教へられたり、見せつけられたり、聞かせられたりするのに過ぎない。或時、酒の上では私よりも遙に先輩たる人が、私がなみなみと注がれた杯を端坐したまま口へ持つて行くと、其友人が先輩らしくいひ聞かして呉れた。

「君のやうに杯を口へ持つて行くものがあるか。口の方を杯へ持つて行き給へ、いや頭は申すに及ばず、上半身から杯へ持ちかけて行き給へ。」

聞いて見れば如何にも尤もなことである。それ以來私は酒の先輩らしい人と席を共にする時には、酒間の禮として又先方を喜ばせる爲めに、忘れないやうに上半身を杯へ持ちかけて行くやうに心掛けて居る。然るに初めて酒席で會合したやうな人に、

つこの有様を見て、

「君は飲ますよ、飲ますことに決したから遠慮なくやり給へ」

と強ひられるには私も閉口する。

この位の程度の話であるから、酒の功徳なんど解るものかと、評されても仕方がない。けれども私自らには、酒飲みといへないやうな人にも、酒のことには述べられるといふ色々な消息がある。

二

今日の社会へいへば、人々の口にて居られる様に、自分で飲んで見て効果のあることを実地に確かめた上で、病人に與へられる場合のみではないやうである。私の知人や世間に知られた医者の中にも、自分には一滴も用ひたことはないが、今迄多くの患者に用ひて効果があつたといふところから、頻りに其の効を説いて居る人がある。これ等の世間の人は決して不思議なことゝは解しない。

現在の我々が常に聞かされる如く、酒の弊害は深刻であるが、それらの害毒は常に飲みを自らよくする人達である、政府の言つて居る禁酒運動の論者たちも、実は常に飲んでさういはれる。けれども飲まずに否定することには、少しも興味を持ち得ないやうな人でなければならぬとは限らない、否寧ろ時には、節酒を自ら思ひ得ない経験の専門家の方が、正しい実行をなし得る場合は幾らもある。

私が一寸旅に居つた時分に、同窓会を開いたことがある。その時に一人の友人はひどく酔つてしまつたので、私ともう一人が介抱してやらうとすると、「何を情けないのだ、五合の酒に酔ふと思ふか」と怒鳴つた。そこで兎に角其の儘にして置いて、さあ閉会して帰らうといふ時になると、酔つた友人は肘を枕にして容易に起きて来ない。「おい帰らう」といふと「何だ、もう皆酔つてしまつたのか、情ないなあ、俺なんど五合の酒位に酔ふものか」と、どんよりと大きな眼を瞬きもせずに見開いて居るが、どうしても立つことが出来ない。そこで二三人で肩に手を掛けさせて自宅に帰つた。酒々と体を酔つたと思ふと見当が違ふ。そ、やい、いいかい、を度々に聞かされた。そこで私は思つた。精神病者は自分の精神の狂つて居ることには氣がつかない。そればかりでなく他からいふても、これを否定するものであるが、そのやうに酒飲みの場合も、酔つた気分は私と意識するなり。とか「酒飲みの者は酔はねば酔つたなり」と川柳子のいふのが当つて居るのであらう。

これ等の事實には、酒に関する深刻な自己を顧みたい私でも、

否寧ろ自己錯誤に陷る程の銘酊をしたことのない私の方が、却つて酒の功德を述べる上に適當して居るやうにも思はれるのである。

三

そこで私は、暫く酒飲みの言ひ分を聞くことにする。

「賞與が思つたよりも多かつた、一つ祝酒と行かう」

「賞與が出なかつた、何だ馬鹿馬鹿しい、半年の辛勞も水泡か、何、構ふものか、燒け酒だ」

共に言ひ分が立つことになる。

「褒められたといつて餘り有り難くもないが、まあ飲らう」

「叱りやがあつた、何、元氣の盛し返しだ」

共に言ひ分が立つことになる。

「ああ寒い、一杯ひつかけねば、やり切れない」

「ああ熱い、暑氣拂ひ暑氣拂ひ」

何れも理由になる。

「やあ暫くでの會合だ、大いにやらうよ」

「これで當分逢へないなあ、是非一盃傾けやうよ」

何れも理由になる、

「こんな目出度いことはない、まあ一つやつて下さい」

「こんな不幸にばかり祟られて居ては仕方がない、[illegible]、さあ飲み直しだ」

何れも飲む人の言ひ譯となる。

「何のことだ、ご馳走もないのか、ちや一杯注入でもしなければ飯も甘く食べられないぢやないか」

「おや、珍しくご馳走があるな、直ぐに飯にしては惜しいよ、まあ、一寸つけて呉れ」

何れも飲む人の言ひ草となる。

「どうも一人では淋しくていかぬ、酒でも飲まなくちや氣が晴々しない」

「こんなに多勢集ることは滅多にありはしない、やらうやらう大いにやらう」

どれも酒の用ひられる機會となる。

「每日顏ばかり合せて居つて話も盡きるなあ、どうだ今晩[illegible]はつかないか、大いに語らうよ」

「久らくだな、色々面白い話もあらう、一つ傾けるとしやう」

どれも酒の用ひられる機會となる。

「勝つたぞ勝つたぞ、さあ祝勝會だ」

「また負けた、敗軍の將は兵を語らずか、よし、それでは[illegible]これから慰勞會に移らうぢやないか」

これなども、何れも酒の罪として數へられ得るものである。泥醉して居るとか惡口酒に醉したといへば、世間に罪を見つけて責めたいのは特別だといふ。或は喧嘩の原因となつて、酒が、面々に仲直りの媒介ともなる。このやうに酒飲みの言ひ分は、全然相反對した矛盾した場合に、何時も兩立するやうになつて居る。

四

全然吾々に、矛盾した二つのことを同時に認めることの出來たいやうに造られて居る。普通の行き方の步まれない意氣地のたい人や、自己を主張しなければならないや、又た哀れな運命の人や、精神の狂つた人などは別として。併かも酒飲みの場合には、全然相矛盾した場合に、各々理窟ないひ分を立てて、然かもそれを怪しさない。それは必ずしも、所謂の酒精中毒や一時の陶醉に基いた精神異常から行はれることとではない。ここに私が酒の功德を述べたい點があるのである。

そこで私は、吾々の日常生活で、酒のやうに不調和矛盾したやうな場合に、共に認められたいひ分となつて居るものに、何があるかを考へて見たい。すぐに思ひつくものは食事である。即ち人と會合する時にも、送別する時にも、生れ・時にも死んだ時も、淋しい時にも賑かな時にも、食事が伴つて行はれることが少くない。然かもこれ等の食事の動機となつて居るものは、全然相矛盾した性質が共に承認されて居るのである。尤もこのやうなことは、何れも共同的の古い傳統に基づくものであるから、個々に分離することは出來ないけれども、恐らく食事は吾々に最も離るべからざる必要なものであるから、換言するならば吾々の最も痛切な要求を滿たすものであるから、自然それが樣々な場合を媒介としては、行はれるやうになつたのであらう。これは遊びたい遊びたいの連中が、色々な娯樂を求めて機械に補えては、遊ぶ場所にするのと同じことである。芝居の好きな人に、芝居を見る機會が多く出來たり、散歩好きな人に散歩する口實の多く出來るのと同じことである。要求のあるところに、それを滿足せしめんとの努力となる。これはいふまでもないことである。

酒は、それを好む人からいへば、食料であるが、元來吾々の日常生活に於て、始め一色々な場合に用ひられるのみでなく、普通ならば理由や口實として成立しないやうな矛盾した二つの場合にも、各々立派な理由や口實となるところに興味がある。これを私は、吾々の日常生活が酒といふものを最も痛切に要求して居る一つの證據として見たいのである。其の機會を與へていふならば、吾々の日常生活には、酒のやうな矛盾的な分子を與へる

刺戟物が必要なのであつた。而して其の刺戟物が酒となつたのは、人類が其の日常の食料として居つた穀物や果物を主な材料とした關係から、これ等の物が醗酵した場合が偶然に發見されて用ひられるやうになつた爲であらう。

五

自己を知り自己を反省し得る人類は、自己の内的經驗を人爲的に色々と變化せしめて、それを一層好ましい快感を味ふやうな狀態に導くことを心得て居る。今日の吾々の持つて居る種々な傳統の中には、恰かもこの要求を滿たさしめる上に發生し、さうしてそこに永く傳へられた運命を見出し得るものが少くない。

自然の脅威と壓迫とから脱することの出來なかつた原始民族は、自然といふことに如何に恐れ戰いたことであらう。この自然の脅威や壓迫は、原始的民族の夢想だもしなかつた發達した文明によつて、少からず脱れ出ることが出來た。文明民族に、これを喜びそれを誇つた、さうして人類の凱歌を叫んだ。けれども程なく其の喜びや誇りや叫びは、自己反省に伴ふ苦しみや悶えや疑ひといふことで、次第次第に其の影を薄うしなければならないやうになつた。然かも其の苦しみや悶えや疑ひといふことは、[illegible]たやうな[illegible]混沌な[illegible]といふことであつた。この頻繁な[illegible]な混迷たる閑寂に心づいて、今更のやうにこれに亂いた文明人は、讚仰憧憬の神境を見出すために、あちらこちらとさ迷ひ彷徨した。固より中には煌々たる燈の輝く神境に、まつしぐらに近づいて跪くことを得たものもあつた。けれども其の多くは暗い暗い狹い小さな窓から差し込んで來る薄明に、足元危げに辿り辿つて、果ては跪くべき神境を見出し得なかつた。そこに失望や自棄や厭世や無謀や悲哀や自殺が起つた。

けれども自己の内的經驗を人爲的に變化し得る人類は、假令極めて不徹底なるにせよ、又假令一[illegible]しなかつた結果に陥つたやうなことがあるにせよ、様々な方法で其の失望や自棄や厭世や無謀や悲哀や自殺を逃れて、生存の欲望に暫時の安住を與へ、或はその欲望を益々内容ある樂しいものとしやうと努力した。かくて酒の發見、即ち陶醉的刺戟物の發見には、正しく薄闇い殿堂の廻廊の一隅に立てられた微かな燈火の一時の明るい輝きに比すべきものであつた。この燈火の明るい輝きに比すべき酒の發見は、古代から現代に至るまでの人類に、如何に一時の慰めや滿足として迎へられたことであらう。かくて一時

飲物の中で何はさて人類と密接な關係を持つたものは酒であつて、殆んど何れの民族に於ても其の最も古い傳説の中には酒に關したものが、何かに意味づけられて殘されて居る。

六

近世から現代へかけての文明の進歩には、實に驚くべきものがあつた。けれども此の文明は、吾々を上に述べたやうな單純なるみの間にのみ從はないで、これ等の快樂を拋げだしからしめたばかりでなく、寧ろ病的な精神錯亂的な異常な方向へ導いたやうに思はれる。殊に現代文明の發達して見るべき一部市の生活には、様々な方面から市民の神經系統を過度に強いた。何よりも複雜な社會の組織から、努力に努力を要する時代の状態から、不自然な人工的環境の内の生活から、其の一瑣事から逃さかつた種々な事情から、現代人が精神的や身體の上に不健全な影響を受けたことはいふまでもなく、近代の生活そのものが如何に大都市の生活者を疲勞せしめたか。人の往來や、車馬の響きや、軌道上の電車の響きや、瓦斯噴射の爆音や、目も眩しい廣告の光や色や、騒々しい機械や樂器や、空想を絶した物質的の眩惑や、けたゝましい警笛や、夜に至るまでの雜踏や喧騒さなど、如何に神經を消耗することとなく、それが休息の時間を得せしめることも無く、かくて大都市の生活者は、何時も絶えず神經質な精神錯亂的の病患に罹さしめられるのである。

過勞な状態や神經質な精神錯亂な状態、それ等は事實上現代の大都市の人々の主な一特徴である。それは電車に乗るのに先きを爭ふ人々の眼にも、電車内のりなや欠伸にも居眠りにも、何とはなしの落付きなさにも、現はれて居る。かかる状態は、何等かの生の感を與へるやうな刺戟を要求しつつある状態であつて、普通な事物には興味を失ひ、激越な異常な變態な突飛な新奇な事物に注意し目をそれに引付し、若しその等の事物が得られない時には、一種の物足らなさを感じて居るやうな状態である。この種の事物は、現今の大都市に行はれて居る興行物にも演藝物にも見られ、のみならず高級な藝術の方面に於ても見られて居る。演劇にも音樂にも繪畫の題材にも舞臺に上るものにも、その種の傾向が見られて居る。

かかる人々に酒は、斯る迎へらるべき性質を有つて居る。固より其の特殊な刺戟と、瞬間に現はる一時的の醉つた内的經驗、然かもそれが興奮や頽廢を惹起せしめることは、恰かも要求されたところに満足を與ふべき好材料といはねばならない。

七

むしろ人類は他の動物と異つて、自ら官能の滿足其のものを享樂することを知つて居る。換言するならば、生存の當然な要求といふことから離れた、時には却つて生存の爲めに不利な官能の滿足すらも追はんとする傾向がある。

私の友達に次のやうなことをした人がある。學生の頃に、叔母の家へ遊びに行つたところが、自分の大好物のお鮨を出された。勧められるままに味つたところが、何時もに増し大層美味に感ぜられた。そこで遠慮せずに腹一杯食べた。けれども尚出された半分位しか平げることが出來なかつた。然るにこれ丈け美味なお鮨を、みすみす殘すのが惜しくてならない。けれどももう腹は一杯でどうすることも出來ない。そこで一思案して廁へ驅け込み、指を咽喉へさし入れて今迄食べたのを皆吐き出してしまひ、更に悠々と殘り全部を平げてしまつた。かういふことは人類でなければ敢てしないことである。只味覺其のものの享樂であつて、他の動物が食つて腹に滿てば顧みないとは、大に異つて居る。官能其のものの享樂、それは誠に吾々に賦與された特徴であり特權である。そこに吾々の文化の少からぬ部分が根ざしても居るのである。そこに饑渇を離れての飲食ともなり、避姙を企てての性慾滿足ともなるのである。

繪畫や彫刻や建築などは眼からの享樂に、音樂は耳からの享樂に、各滿足を與へるものである。けれどもこれ等の官能による滿足其のものの享樂は、他の享樂のそれと異り、精神や身體に多くの餘裕のある時に於て適當であるばかりでなく、享樂するのに相當の素養が必要である。けれども舌や皮膚によるものは必ずしもさうではなく、只幾分の餘裕があればよいのである。酒による官能の享樂の如き、殊に豊かな素養なくしても味ひ得られるものである。

次に又吾々人類は、他の動物と異つて、自己の内的經驗其のものを深く享樂することが出來る。思索の喜びや、瞑想の悦びや追想の樂しみの如き、人類に於てよく經驗され得ることである。かくて酒に因る酩酊時の恍惚狀態の如きも、單にそれを享樂せんが爲めに酒は少からず用ひられて居る。原始民族に於て、初めて酒が發見された時、素樸的な彼等は如何にこの恍惚狀態に驚いたことであらう。然かも其の多くの場合が、發揚的刺戟となるが故に、苦しみや悶えや憂ひを去らんが爲めに、如何に用ひられたことであらう。のみならず酒に因る恍惚は、他の多くの官能による享樂のやうに複雜な素養や煩瑣な手數や心身の餘裕を要しない。これが又素樸な單純な内的經驗を有するものにも、高級な複雜な内的經驗を有するものにも、酒が親しまれ勝ちになつて、其の何れの場合にも相當な享樂として味は

かけることもあるが、ここに[illegible]一ヶ月に行はれた[illegible]低く見られ
るのである。

八

亜米利加で禁酒令を布いたことは、他方に精神病者や累犯者
などには[illegible]を行つて居る手段としてやりさうなことであ
り、又見上げたことであつた。未丁年者に酒[illegible]すら許さ
ず、又[illegible]の源となる酒を下[illegible]の食卓から斥つこ
との出来ない[illegible]などに[illegible]して、頗る徹底したものであ
る。これだけこの禁酒令施行の成績に就いては、世人が深く
興味と注意とを向けた。けれども其の結果は余りに芳しいも
のではなかつた。

聞く所に依ると酒精中毒に罹つて居るものには、[illegible]の酒精を用ひ
ないと、各種の仕事も出来ない為めに、亜米利加の禁酒令では
例外として一定量の酒の飲用に許可した。これは酒飲みの安全
瓣であつた。即ち医者へ行つて処方箋を書いて貰つて、[illegible]の
薬局へ行つて定められて居るだけの一定量を買ふことが出来
た。従つて[illegible]其の酒を飲むことは、頗る困難なことでは
なかつた。こればかりでなく、かかる安全瓣を通らないで、不
[illegible]くなるといふ形式で、それから酒が私かに飲用された一層た[illegible]

てある。而してかかる結果に対して、吾々は今尚ちに[illegible]する
ことは出来ないけれども、酒を用ひなければ仕事の出来ないと
いふやうな酒精中毒者のみが、かのやうな安全瓣を濫用したり
又密造をしたとは思はれない。恐らく禁酒令が効用として[illegible]さ
なければならなかつた程度の酒精中毒に達して居ない人々が、
それから用ひたことであらう。それでなければ消費された酒量
が余りに多いのである。ここに頗る興味がある。

私は、何から禁ぜられたものを私かに犯す好奇心や反抗心を
も認める。即ち「宜しくいつてくれ給へ」といふ俗語が、毎日
のやうに顔を合はせて居る人であるに拘らず[illegible]伝へられない
のに、「それは内密のことであるから」と禁止条件を以つて伝へ
られた話は、所謂内密のことであるが[illegible]との条件附きで、極
めて容易に伝へられるものである。この好奇心や反抗心も、禁
酒の場合にもかからず働いては居やう。けれども私は、矢張り現
代の人々には何か制約物を要求するやうなものがあつて、そ
れが禁酒令をも犯して酒に至らしめる力強い大きな根抵となるの
であらうと思ふ。私は酒その物の価値を否定するものでは勿論ない
が、上述の點に私をして酒の功徳を述べしめる感慨があるので
[illegible]

九

現代の社會で、如何なる階級に酒が最も多く用ひられて居るか、これは遽にいはれないことであるが、けれども逼迫した生活狀態にあるものの間で、割合に多く用ひられて居ることは、爭はれないことである。かかる生活階級にある殆んど總べてが、口腹の欲求に支配されて居ることは、餘裕のない狀態として、蓋し已むを得ぬ否寧ろ當然なことでもあらう。そこで口腹の欲求に聯關した酒の享樂が、かゝる場合に用ひられて來るのも、自然の傾向といふことが出來る。

のみならず哀れな彼等、それは多く自分を哀れなものとも自覺し得ない程に哀れな彼等は、其の不幸な境遇から、纖細な趣味や高級な娯樂を味ひ得る丈け、素養を得なかつたものである、假令幸にして幾分か其の素養を得たものであつたとしても、生存の爲めの生存に追はれ追はれて、それ等を味ひ得る機會の捕えられないのが普通である。そこで吾々に最も痛切な最も根本的な欲求である口腹の滿足に聯關して、酒の用ひられることが、如何に彼等の過勞や衰微や時には不平や猜忌を忘れる上に效があるのであらう。其の陶醉的氣分に踊躍として大言し豁語し、以つて素樸な内的享樂に浸つて居る有樣は、又とない

[illegible]た哀れさである。私は嘗て、この種の醉倒した人々と[illegible]かなりを、或街路で過ごしたことがある。其の時に、或一人は大空を仰いで心からの微笑を湛え、或一人は腕を拱きながら首を垂れたまま「明日は明日だい」と獨語して行くのを見て、私は憐愍の情を起すに先立つて悲痛の感に襲はれた。かかる場合に酒の害は、彼等を酒から遠ざけるには、餘りに力が弱い。

けれどもこのやうな陶醉的恍惚狀態は、必ずしも生存の爲めの生存に追はれ追はれて居る人々に限つたものではない。吾々は假令生存其のものに餘裕があつても、其の内的經驗には何等の餘裕も與へられないことも、何等かの刺戟を受けなければ新生の氣を保ち得ないことも、自己反省の苦痛を忘却しなければ堪えられないことも、或は又常軌を逸した興奮に自己を投じなければ滿足されないこともある。かかる要求は、やがて生活に逼迫した人々以外にも、酒の使用を及ぼさしめることとなるのである。かくて全然相矛盾したやうな口實も、相共に易々と承認されて、酒を呼ぶ媒介となるのである。

十

鑛山の坑夫などの中に、ダイナマイトを喰るもののあるのは何故であらうか。露西亞の窮民の中に、石油を口にするものの

あるのは何故であらうか、一部の人の間で香水を嗜むもののあるのは何故であらうか。現代の人々が一般に、刺戟的飲料などを多く用ひるやうになりつつあるのは何故であらうか。

勿論かかる事實には、吾々に共通した好奇心も關係して居やう。けれども私はそれよりも、一層根柢の深いものの存在を認めるのである。かかる特殊なものの使用者の生活が即ちそれである。假令ば都會や機械や停車場や混雜や旅行や中毒や不節や興味、それ等は如何にも望ましいものである。けれどもかかる生活のもの一日も缺かさなかつた生活をして居て、物質や粗野や刺戟や能はぬ欲望や關係や偏見や嗜欲や趣味意識の中に包まれたものは、吾々が其の外部から得る刺戟のみでは滿足出來ないやうになる。即ち何等か人為的な特殊な強烈な刺戟でも求めなければ、生活は耐へられない事を經驗するのであるから、ダイナマイトを嚙る人も、在來の日に對する酒精の需要、香水を嗜む一部の人々、刺戟的飲料を好む現代人、これ等は誠に人為的な特殊な強烈な刺戟を求めつつある人々である。況して吾々は、肉體的精分其のものを消耗するやうに、強烈に對することを以て居るものであらう。此の意味に於て此やうな要求が起り、又それに應じたやうな施設も出て來たのであらう。

ここで私は思ふ、若し吾々の生活を今日のままに繋ぐならば、又纖細な趣味や高級な娯樂を味ひ得るだけの素養を與へることも出來ないものが少くないならば、或は又これ等の素養は與へられても、纖細な趣味や高級な娯樂を享け樂しむだけの特殊な社會的施設や精神的肉體的の餘裕の得られない状態のものが少くないならば、假令酒は有害なものとして極力警告されても、酒のやうな陶醉的作用に導くものを、吾々の社會から驅逐さけることは出來ないであらう。假令又酒は人類を衰滅せしめるものであるといふので、吾々の總べてが相協議して、其の跡を絶たしめる事は出來ないにしても、恐らくはそれの代用となるやうな他の刺戟的な陶醉的なものが、程なく人類の主な嗜好物として廣く用ひらるるやうになるであらう。私は敢て酒の功徳といつた、正に酒は特殊な功徳を與へるもののやうに取扱はれて居る。これは酒の有無といふことを超越して存在するだけの痛切な要求のあることを示すものである。

十一

禁酒に異論はない。けれども禁酒の問題には、先づそれを要求して居る吾々の生活自らに注意して、適當な改造をしなければならない。それでなければいたづらに目的を達せしめることとは出來ない。即ち要求の根本を改善して、これを滿足せし

める一つの手段を絶つた場合に、更に他の手段が崩れて来ることを知らねばならない。しかも或者の方面を黙諾に附して、供給者であり満足を與へる者である或形式の實務をのみ絶たうと努めた場合に、それが何時も不徹底に終つたり、失敗に歸したりするやうに。

私は、現今酒精の含まつた飲料の消費量が減少しないばかりでなく、強い酒精飲料の益々廣く行はれるやうになりつつある事實と、現代人が其の社會生活から得て居る精神狀態とを對照して見て、一層酒の問題に興味が湧くのである。かくて今日隆盛を極めて居る酒場(バー)の如きも、假令異性に聯關した問題や其の他が力を添えて居るにせよ、兎に角それが青年に歡迎されて居るのには、それ丈けの根柢のあることを知らねばならない。

要するに現代の吾々の生活には、種々な要求がある、然かも其の要求には現代の社會生活の不備な解決の與へたものが少くなく、且又其の要求を満足せしめて居るものの中に、吾々自らを破滅に導き、吾々に注意すべき悪影響を及ぼして居るものの存在することをも知らねばならない。

そこで吾々の理想は、吾々自らが築き上げた燦然たる美觀を呈した文明の殿堂に入つて、讃仰憧憬の神壇に、さ迷ふことなく近づいて跪けるやうに、煩瑣な窮屈な混迷な薄闇さを明るみに照すことである。この明るみを得んが爲めに吾々は現代の文明を時に嘆美し時に呪つて居る。而して今は其の明るみが、果敢ない酒で間に合はされて居ることが少くないのである。

支那に入る 北京篇

木村莊八

一

大正九年八月二十七日の朝十時、瀋陽(奉天)驛を出る京奉線列車に依つてまつすぐ北京へはいることにしました。列車の切符を買ふことや寝臺の心配は瀋陽館のポーターがみんなしてくれた。彼は行李をかついで車室まで來てくれた。チップを渡して

とこで別れた。朝八見送りには木村氏十夫妻が來てくれた。新子は心八にしてゐた[illegible]は別れ[illegible]きさうである。兄さんに[illegible]の[illegible]に[illegible]へ寄る[illegible]と聞いてゐた。私は之れで北京へ行けば、[illegible]方が所をきはつて、歸りには[illegible]上海から直接日本へ行く豫定である。[illegible]はきはつて來ない。然し答へました。[illegible]彼はによるかも知れない。そして自分でも、或ひはよるかも知れない、と思つた。此[illegible]寄りたいことと、[illegible]富へ今此[illegible]で別れ[illegible]へないことと[illegible]、[illegible]計に[illegible]り切つてゐるのはイヤでした。私はもし何だつたら一緒に行つてもいゝと思ひました。弟の[illegible]にいたりておとなしくそこに泣つてゐた。やがて汽車が動きました。[illegible]大切に。[illegible]御[illegible]ぶら。[illegible]この[illegible]い挨拶は、然し[illegible]にしみすぎてゐて苦いものでした。暫く弟夫婦のことを思つてゐました。弟はいつも忘れにしてゐるからおことさんも心[illegible]から。――私は私一人きりの[illegible]に腰かけて、カナアミの[illegible]つてある窓から外を見てゐた。――そこから見える風景、その[illegible]のレール[illegible]並木の中に、[illegible]の砂利を踏んで[illegible]少年が一人何か[illegible]を[illegible]つてゐたシーン[illegible]やて[illegible]に[illegible]てきます。少年は何か白いものを大切に両手に[illegible]へて[illegible]のぞいてゐる[illegible]下[illegible]て、そ[illegible]て安心して[illegible]無心に菓子を食つてゐた。その[illegible]からポツポツ小[illegible]になりました。私は心がはずむのを感じた。

通信に鉛筆で一行、

「マス子よ。今「中ぐけ」針でいろ／＼つくろひものをするところだ。(北京行き中午後五時)」

といふのがあります。一種とりとめなき心持ちで何か、ツツク[illegible]が何か破れをつくろつたことを思ひ出す。その針袋に「中ぐけ」と[illegible]いてあつた。このことをわざと知らずと、家で妻がどういふ風にしてそれを[illegible]み、そのシーンを[illegible]像するか、それ[illegible]わかつて特に針を[illegible]め、一行この[illegible]信をかきました。それから針仕事をつゞけて微笑を浮べてゐた。

「自分」へ「自分」が[illegible]りするやうに、[illegible]の便りを見て東京で妻が自分の[illegible]の私を想像する、その[illegible]像と[illegible]るおかしさがよくわかる。手にとるやうに。フム、妻がどんな[illegible]像をすることか――

……だんだん歸る時が近づいた。[illegible]にこそくるくるきはつて、その結局は[illegible]るのだ。それがたゞ[illegible]みで歩いてゐる私なれきへすよ。然しもし僕が今まだ結婚してゐなかつたなら、僕は必らずどうかしてこのまゝイタリアへ行くだらう。(八月二十八日)

私は六月[illegible]日から[illegible]月[illegible]日[illegible]に[illegible]てゐるのです。

「……何しろ今度の旅行で得たる經驗に至つては千金にかへがたし、何の間にか落付いていろ〳〵書かう。家のこと片時も忘れぬ。たのしい家があつてかうして通信もかけるから、張り合ひがあるのだ。此の廣い滿洲へ來て見ると家なき人など、全く「さすらひ」たくもなるだらう。」（六月十日、汽車にて）

「大正九年六月十一日。木村マス殿。――先刻電報を打つたが着いたことゝ思ふ。昨夜九時頃に大連につきすぐ此所（遼東ホテル）へついた。同行すべて同じホテルへ着いた。ホテルには宿所と旅館とある。云々……

「今小泉（策太郎）氏の室にゐるのだ。小泉氏は僕が之れをかいてゐる目の前でMYと云ふ人とゴをさしてゐる。今又來客が一人あつた。凡て之等の人の前をかくことになるかと思ふ。云々

「昨夜胸が惡くて驚いた。今も稍元氣でないが、――多分汽車で食ひすぎたらしい。大したことではないと思ふ。その後食慾が起らないので朝飯一杯たべたゞけだ。道中疲れもある筈だ。が、かうしてお前に手紙をかいてゐると元氣になり、氣分も和らぐ。小泉氏はゴをさしてゐるし、客とは話せないのでかうして得意の紙持ちがきを初めたのだ。外は雨ふりだ。

「以上、今日二時頃にかいた。小泉氏はそれから外出したので、僕は我が家へ歸り、少しくひるねをした。まだ何か物足りなかつたので、一少しすると、小泉氏から迎ひが來た。僕の室からはかなり遠い、三階の二十號と云ふ室にゐるのだ。之れに出かけて、符號八號をかきかけた。

「……氏と一所にゐると氣分が和らいで助かる。他の知らぬ人と五分も一所にゐると妙に臆して心寂しくなり、さう云ふ時にはつい知らず〳〵家のことをいつか考へてまぎれてゐる。もゝ、人に家のあると云ふことが如何に大なることよ。自分のことは忘れるとも家のことは忘れぬ位ひだ。いつもは我がうちに入り、全き「內部」となつて忘れても忘られてゐる生活の城が、今はそれから自分だけ出て、外の風にすぐ當るからだ。

「旅行」は生活の一つの病氣だよ。

病氣の時からだをイヤに思ふやうに、旅び以來イヤに家のことばかり思つてゐる。ホームシツクは多分東京驛を立つた瞬間からもうとくに通り越して、持病の慢性となつたらう。

凡ての點で「洋行習作」を經驗しつゝある。

つまり日本の留守宅にお前さへ丈夫でゐてくれゝばいゝ。さうするとかうして日々通信することで心が和らぐ。日本を離れしいのではない。お前だけを思ふのだ。まだ家を出てからほんの少しにしかならないが、隔たる距離が遠いせひか大變久しい間

に宜しく。

元気でゐよ。

僕の此度の旅行がこれから如何なるか、まだ見当は殆んどつかない。今月一杯は恐らく北京にゐるだらう。金も多少は出来ると思ふ。それから何所へどう行くか。どうせこんな機会へ来るのはたぶん一生に一度か二度だ。少しは苦しくとも辛くともあとで後悔なきやう、見るだけの所は見て行きたいと思つてゐる。支那の北北京、此所からそんなに遠くないのだ。行つて見やうと思つてゐる。百聞一見に如かずだから。[illegible]へは[illegible]行く。この節頃に[illegible]内地は[illegible]見歩くつもり。どうとでもなれ、この二ヶ月間我が身を「旅行」に委ねるつもりだ。

我が所信をかけ元気である。

隣りに思ひが深すぎる。寸時も離れて住むことが許すまで[illegible]仕だ。もお前が此所にゐたら、僕は一生でも此所にゐるだらう。といふのはいつも一所にゐたい。ゐるのが自然だといふ意味だ。しり立てゝは別に何にも思はない。お前のことを思ひつめてゐる。とにかく今は旅中僕の元気である。

どうだ、やつて来ないか、呵々。

何か[illegible]には二人で一所に行つた方がいゝね。このが見ての上にもおつて[illegible]らしい。景色を見るにも。

旅行以来頭がいゝとは無理して云へない様だ。妙にいつも悲した気分があつて手紙をかいても家でくつたくなくかく時とは違に様子が違ふ。かきたい事は無数にあり乍ら、さてかいて見ると同じやうな事ばかりかいてゐる。つまり愛情が手紙をかゝせるので、手紙にする特別の必要は強ちないのだらう。――今もさうだ。何時間でもかうしてお前に手紙をかいてゐる間心は平和である。この平和の為めにかうして筆を持つてゐるのだと思つて貰はう。

大連へ着き落ち付いたので一先づ筆を執つた。汽車旅行中はいろいろ刺戟があつて、心も多忙であつた。その刺戟が今一段かくれたかの様で、又妙にとりとめのつかぬ心地である。四五日すればよくなるだらう。

吐き気はなほつたし[illegible]も揃つて夕飯を食つた。安心してもらひたい。僕のことは心配するな。体に気をつけて[illegible]常にお前自身を大切にして、「あいつは元気でゐるなら」と僕の思ふ時必ず元気でゐるやうにしてくれ。それが留守中お前のつとめである。

まゝ、何時までかいてもきりがない。さてやめやう。又明日かく。何の用件もあるわけではない。小[illegible]人の[illegible]一生に[illegible]を[illegible]一所に行くか、今のここ

ろまだ未定である。然し暇して、スケツチだから二三回描けば感じは出るのだ。氣分もその爲めに多少調節しやう。だ。夜八時になつた。それでは今日は之れにて、みんなによろしく。

莊　八

追　加

今芝川さんへも手紙をかいて漸く心が落付き、手紙以外の他のこと、つまり繪を思ふより他へも心をうつせる氣分になつた。何れ落付いたら文もかく。概して旅行中、仕事は思はしくあるまいと思ふ。「仕事」即「旅行」の工合だ。心理が。

僕の手紙が長ければつまり僕は寂しいのだ。短かければ何か忙しいか氣分を他へとられてゐるのだ。——然しまだ此の手紙、封をしたくない。

朝起きを練習せよ、僕は旅行後朝起きとなるだらう、今迄日平均七時だ。氣分もいゝ。

* * * * *

夜十一時になつた、今迄番地帖を見て一通り知人へ旅行の通知を出した。二十枚かいたがかなり疲労した。

それからもう一應この手紙に未練の一句をかきつけた上で、愈々今日は之れにて封をする。ではお休みなさい。夢や故郷に迷ふらん、だ。もう少し此の地に親しめるといゝのだが、明日か

らポツポツ大運研究。ここは又同日。かなり疲れた。荷もつへ旅館でつける札を同封した、とつておけ。凡て善いデザインだ。清宮にたのんだら凡て旅客にさぞいゝ記念品が出來るだらうに。」

途中、汽車から

「……今日は何かお前に用事のある様なつまらぬ氣がする。それを俺が知らずに之れをかいてゐると云つた樣な。然しさう「思ふ」時にはそんな事はないものだ。安心々々。僕は大々的無事、且元氣だ。絶對に安心あれ。

今フト思つた。若し留守中もし「おしやくれ」が死んでゞも了ふことがあつたら、俺はこのまゝ風の如く外國へ旅行する、と。無論、無論。何しろ俺は無事だ。」

凡て私——と同時に「私の旅」——の作品をにじませてゐますから、最初の紀行記の初めに之れだけ記しました。

二

「汽車から見える景が直にもう支那になつた。既でに出發後七

時間程経つた。何れ電燈が残んで外に見える所へ来るだらうと、心待ちしてゐる。（八、二十六便）

暫くは満洲一帯で見なれた「支那」の景しきでしたが何所からか大分に變つて来ました。

「此の汽車は純支那式の汽車なので車中は全く支那気分だ。奉天などではどこか支那紳士の家へ呼ばれたやうだ。もう日本人には日本の金と共に、全く不通だ。只汽車では、係りの人に、英語が利くから心もとだ。之れから先づ必死の支那語である。しやべつてわからなければ書くのだ。その點は同文故助かる。（八、二十八便）」

この外に定期にかう書いてある。

「何しろとう／＼支那人へ、行き渡した、呪！」

期待も、恐々と。「北京へ行くのか、——以前家にゐた頃も、既に六月頃まだかへの北支に出て以来に於く、その日大陸の有の話も、七月位にな話も、八月的食畑を歩いてゐた話も、か……にはもうそろ／＼解きた時にもい……てここまでは来たのだから、一もう一足、行つて見たい。にさう思ふことには一種強い意慾のあつた、——その「希望」の地へ行くのだとはつきり意識しました。

一種子供の感じの元祖があります。私は寝台へ横になつて支那旅行案内の北京の章を讀みました。もう幾度も讀んだ同じ章ですが實に感慨深く、新鮮に感じます——北京に到着したる旅客が劈頭第一にその眼を驚かすものは内城及び外城を圍繞する雄大城壁の壯觀なるべし」と書いてある。その「到着したる」が字のまゝに生きて感じられる。私は度々寫眞で見て想像したその城壁の様を樂しく想像に浮べて見た。然し此度はもう想像するより見る方が早くなつたと直接に思ふ。その不確かな想像を蹴散らす、いゝことした。滿足の情があり、樂しみすぎて却つていけない。

三

滿鐵旅行案内で見ると、汽車は滿鐵時刻十時五分、北京までへの中間驛に當る山海關へ夜九時二十五分着、となつてゐます。支那汽車はのんきなものだから今更時刻表など當てにならないが、兎に角山海關では暗く、ねむかつた。十時か十一時近かつたでせう。……で見ると、もう……州……と云ふあたりこころを通る頃に日がくれた。……には電氣のつく……茶を……ゐまし

た。

私は腰かけの赤ベッドへザラザラ光銀貨を二十並べておいた。まだ日のくれぬ頃、隣りの寝臺車（寝。——支那の汽車は一車内幾室にも區切られてゐる）にゐる同行太田正雄氏から奉天で換へた支那カネをそれだけ受取つたのです。私は初めてそれに支那の金を見た。大きく、立派なのに驚いた。が、今後札もはまあ大儀利かねと思ふ方がよく、旅費は之れで持つて歩くのだと聞いて大變だと思ひました。私のガマロ（蟇口）へ五枚はいらない。が、何と珍しい大きな金だ。自分だけで見て驚いてゐるのは飽き足らない。私はそれを紙の下へ敷いて、裏、表、厚さと　まく鉛筆でコスリとり、表てへは浮彫りで「中華民國三年」の下に軍人横顔の背像が左向きで出て來る。袁世凱の顔だ相です、さし渡し曲一寸二分ある。裏は月桂樹（?）を結ひた中に「壹圓」と現はれ、厚みはギザギザ模様で約一分あります。——その刷りとつた紙を二三枚手紙の用紙にこしらへました。

「金は大洋と云ふ銀貨か本位で日本の一圓五十錢がこつちの一圓程度に當る。太田氏よりその大洋銀貨二十枚（つまり日本の四十圓弱）受取つた。その他に現在朝鮮銀行發行の十圓札にて××圓、一圓札にて××圓、小札×錢、銅銀貨×錢　所有してゐる。北京へついたら、太田氏に聞いてそれだけを頼まずる（それがどうも心細くて閉口。今日でに銀貨二十枚で旅行に困つた。」

いさゝらば、金のなくなるところまで、になつた。元氣だ。いさとなれば俺は廃刷はいゝのだから。安心せよ。約一ヶ月や一月半はゐるだらう。ゐられゝば。凡て歩く當てが只難故汽車汽船が高くて閉口。四五百圓はそれだけでなくなる。（八、一八便に」

最後に別行で、

「何とホンモノの旅行だ。えらいことになつた。」

その封筒に（降雨）とあります。

いろいろ小さなメ切の寝臺室で金勘定をしたり、断へず手紙を書き、心寂しかつた。がフツと如何にもジョンドレットの感じがして苦笑した。汽車はドンドンと進行をつゞけた。——前に、東京を立つて汽車が下の関近くへ走つた頃、かいたことがあります。

「汽車の中ではハガキをかくのが一つの樂しみだ。さうして東京のことを思ふ。昨夜は寝臺ではいるとすぐに熟睡したが、一時頃、急に起された樣にはつきり目がさめて了つた。汽車が何

[illegible]駅へとまつて森閑としてゐた。實にひつそりと落ついつきこゝに停車してゐた。それで初めて目がさめたのだと思ふ。

僕は上段小室の方へねてゐるがそつと起き上つて[illegible]の垂れ幕をあげて見た。電燈が近くてまぶしかつた。車内はねしづまつていへ、き[illegible]聲がきこへた。イヤに[illegible]と何にも[illegible]に聞かれまゝ何の[illegible]もしないので、氣味が悪かつた。

一とうへハガキをかき、ボーイにたのんではそれを出すので少し氣が引ける。ストリントベルヒの芝居に深山ハガキをまとめて出しに來る男がある。それに似てゐる。（あの男には實に神秘の深い、富の感じがある。）又昨夜は目が冴へてから、せまい寝台の中にちぢこまつて方々へハガキをかき、オルボー停車の時があつた。もしマリユスがのぞいてゐたらたのんでも話しかしたかつた。云々。

一日もたくれば[illegible]れるだらう。車内漸く下車仕度に[illegible]いつつあり。いろいろかく事はあるが氣忙しい。ボーイにいゝだ。今何時頃く、若かげて見た[illegible]の様をしこたま[illegible]てせつせとみ[illegible]い一ゐた。[illegible]人間がその[illegible]のやうに俯々しく思へた。[illegible]もそのゴタゴタある[illegible]の一つにてつてゐ[illegible]のな[illegible]一[illegible]みにこつていゝに。人の[illegible]も人に[illegible]くのは[illegible]一だ、いあな[illegible]だ、[illegible]はあるさいと思ふが。いろいろ又後便。平和に愉快に過す可し。みんなによろしく。（六、六便）

この後も汽車にのると、よく此の手紙の日のことを思ひます。

北京行きの時、第一信、

「いよいよ此の汽車へ乗り込んだ。我が希望よ！明日は支那帝都の人となる。兎く此度の[illegible]作期には字の仕事の方で多忙を極めた。それは今朝出發前までやつてゐた。汽車の出る五分前に最後の頁の(ヘトヘト)と云ふ原稿をプラツトフオームの敷石へ紙をのべて打つた程だ。文をかくのは苦しくないが、それの清書は僕には全く辛い。云々。どうせ來月にたればわかる。不自由があつたらどうか許してくれ、もう少しの辛抱だ。汽車がとまつたのでかきよくなつた、いろいろかきたいことで一杯だが。

「八、二十七便」

かくて八月二十八日ヒル一時頃、北京前門車站へ着きました。

九十日、ずい分長い汽車だから目脂にいろ／＼今も思ひます。蒲い水色の支那服を着た角がりのボーイが直に[illegible]を運んでくれた。持つて來てまだ一口ものまぬのに又熱いのと代へてくれたりした。これは大分チップをとられるだらうと思つたが二十錢か三十錢ですんだやうです。安い。それと、タオルを熱くしぼつてかしてくれた。僕はそれで顔や手くびをふき、さつぱりとしたが、あとで聞くと支那人はおまけに鼻をかむといふ。聞かなければよかつた。彼（ボーイ）はどうにか英語をしやべつた。然し奉天から乗つて間もなく切符検査に來た白ヘルメットに何か洋服姿の支那係員は、世にも流暢に英語をしやべる。此の男は今聞いてゐるかもし何れこめばつめるからそのつもりで、と云つたのだと思ふ。――彼を聞いて成程「外國へ來た」感がいたしました。僕も、あとで食堂へ行くのにボーイに「[illegible]」と聞いて見た。「彼方」と指さして答へてくれた。これが日本語を封じられてからの人との會話の最初です。
何とうまい洋食だつたらう。食堂は、ふつかりとしてゐる。つ[illegible]コブのある支那料理が化して[illegible]チャウ・やライスカレーの[illegible]題をとつてゐるのです。飾りもないので洋食好きの友人を思ひ、一人緩々と本當にかつた。彼に洋食のハガキをかきなした。――ここで大田氏が[illegible]な支那カネで拂ふ有様を見た。タンとテーブル、[illegible]をおくとその[illegible]、[illegible]にすじい食[illegible]ボーイ（[illegible]）[illegible]に[illegible]とげ、小銀貨でソロリとつりを[illegible]ピンとチップをはじへはねのけ[illegible]氏がしまふ。はじかれた二十錢を平氣でボーイの手がさらつて行く、[illegible]。何か[illegible]取引の[illegible]でも[illegible]で小さかしく[illegible]い。――その後で[illegible]たが[illegible]く[illegible]かなかつた。支那[illegible]は金[illegible]ふのに「[illegible]」といる。[illegible]など[illegible]円十錢[illegible]つたら[illegible]し一[illegible]です。支那人は手のひらを使ひ、お札を指で數へて時機のやうにうまく使つてパラパラの多くの[illegible]を。
山海關へ着いた時私は[illegible]受けて車外へ出ました。案内記に、そこからは萬里長城の[illegible]天下第一關[illegible]て見えるとかいてあるのです、それを見に。
然し夜が暗すぎて見えませんでした。
プリッヂに立つて見ると[illegible]闇を破つてかどりが[illegible]き、[illegible]立つてゐた。汽車のとまつた、ラットフォームにはすみ[illegible]と支那人[illegible]で、[illegible]物、[illegible]を[illegible]つてゐる。[illegible]の[illegible]ランプを[illegible]つてゐました。[illegible]の丸焼やキビパ[illegible]、[illegible]の[illegible]る[illegible]、水[illegible]ありました。[illegible]で林[illegible]の[illegible]する[illegible]人もゐた。[illegible]

です。せまいプラットフォームを[illegible]してゐる。

二[illegible]を[illegible]いて[illegible]、[illegible]

た。カツ[illegible]と[illegible]中に[illegible]く目に

[illegible]。[illegible]

の[illegible]く[illegible]には[illegible]た。[illegible]

[illegible]にし

[illegible]ふ。

フオームを[illegible]

二[illegible]て[illegible]な日本

[illegible]キ[illegible]トをし

た[illegible]いて

た[illegible]キ[illegible]ゐる。

そ[illegible]た。[illegible]

おいてやつた。

[illegible]の一[illegible]ふとその淡い

[illegible]。[illegible]い[illegible]

つ[illegible]した。これ[illegible]なり

の[illegible]。[illegible]人々。

「[illegible]す。

[illegible]

客車の入口に米国婦人が立つて隣りの車と話しをして
ゐた。車内には入口の近いくらゐみに[illegible]人が二三人よ
りそつて立つてゐた。次私はプラットフォームから汽車に這ふ
ていつていつ一々の光りを投げる窓から車内を見、不具な[illegible]
[illegible]を[illegible]きに[illegible]ました。[illegible]婦人が[illegible]て[illegible]を[illegible]行
[illegible]くなてゐる[illegible]を見た。ゴタゴタに人が乗つて行く、或る者
は[illegible]座[illegible]の上に座り、一二三人外国人が黙つて[illegible]の前
にかけてゐる[illegible]車内を見た。ワイシャツの[illegible]人が[illegible]ピン
ホ[illegible]ツ[illegible]飲みして[illegible]をしてゐた。[illegible]い[illegible]んでゐる[illegible]
[illegible]窓に[illegible]る[illegible]地よき[illegible]人の窓に思
へた。[illegible]には[illegible]へよせて[illegible]てゐるのカーテンをしめ、そ
れから[illegible]入りすることにしました。
[illegible]のはいつ[illegible]ません。

[illegible]なにりりませんでしたので目をさまし、[illegible]の深
夜[illegible]一[illegible]ました。
[illegible]にとまつてゐた、[illegible]氏[illegible]らしい。[illegible]して
一[illegible]になつた[illegible]のりに一[illegible]人[illegible]でプラ
ットフォームに立つてゐました。私は[illegible]たると[illegible]なつて[illegible]
[illegible]を[illegible]つて[illegible]、[illegible]

も月があつたやうです。驛にノクターンで簡素に四角くまとまり、あたりは淋しく、並ぶ木さくの外は一望はてなき耕地となつて一本大樹がすぐそばにあつた。ゴオホの「アール、ローマ人墓地」風景に似てゐました。

太田氏は私に洛陽の驛の話をした。そこへ行くと大きな漢字のガンドー提灯(?)で旅館客引が驛へ迎ひに出て來る、と。その「漢字」が見えるやうに思つた。

何か少年が待つてゐてほしいと思つたが多分柿だつたかも知れない。

然しちき車室へ返つて、熟睡しました。

五

翌朝天津からの何時間かゞ長かつたこと、非常です。つい寝過したからいけないのでせう。それにしても大分延着して、まだか／＼と思はせてやつと北京へ着いた。あゝ、その汽車が高い城壁の直下をグルグル添ふて前門車站へまはり込んだ時、―城壁下には青く房々とアカシア(?)が繁つて樹間に人などゐた。壁は高く、近くて窓から仰ぎ切れない。私は一かたづを呑んだ」のだと思ひます、

ボーイがやつて來て「トーラ」

太田氏「今の支那人にはわかつたらう？」

私「イヤ」

氏「到(トー)了(ラ)だ。着いた」

それから靴をしめ、ゲートルを巻き、いろ／＼見まはして注意して驛へ下りました。驛ではすぐに旅館のボーターとぶつかつて彼に従ひ、驛正門でない、お客の通行口から外へ出ました。―水門兒と云ふ口だとあとでわかつた。下には水が流れてゐる。

我々は旅館の馬車に乗つてポカポカ北京の町へはいりました。實際入市式の思ひ。―― RUE MARCO POLO と或る壁へ名のかいてある通りを通つた。角をまがるとゴチックの教會尖塔が並びへ、ベルギー兵の歩哨してゐるところがあつた。MOTOR CAR DRIVE SLOWLY と道に注意が書いてある。―あとで分るとその辺は凡て居留地、つまり交民巷で通過した。赤い例のポストある日本郵便局の前も通つた。どうも元は保塁らしく、機関銃でも据へてあつたと思ふ小高い町角の段を通り越すと、――そのすぐ前に北京宮殿の黄瓦が見える――廣い通りへ出て、ガラガラ走つて、東單牌樓へつきました。中央と左右に三つの屋根のつく門(牌樓)が通りの入口にがつしりまたがつてゐる。それをくゞつて、まもなく旅館へ着いた。

「疲き、喜び、酔て、酔くらひで」八月二十八日ヒ／＼、此所を

頂の、[illegible]入る。[illegible]し。[illegible]

[illegible]は、今だから[illegible]を[illegible]

りすで試[illegible]みようとしたら、

[illegible]人[illegible]多いので驚いた。町に[illegible]で[illegible]だと思ふ。[illegible]く

附く、[illegible]ない[illegible]さい。[illegible]して[illegible]に

たく、[illegible]してゐると思ふ。また、[illegible]

了[illegible]するところにころがつてゐる。よくわからない。[illegible]部

[illegible]ことにはこれにはしたが、[illegible]人らなかつた[illegible]は

[illegible]ないやうです[illegible]

[illegible]

[illegible]ある。それを出して、やつと[illegible]すことなど[illegible]

[illegible]あへ[illegible]たと思ひました。——[illegible]にはとでこの[illegible]をあげりました。

[illegible]ここ[illegible]て、[illegible]つきなと[illegible]た

[illegible]いらんと[illegible]と思ひます。

六

[illegible]へ来て向くらつた。一目に[illegible]ば、[illegible]びんだ[illegible]である。その立派なことに驚く。へアの[illegible]所に[illegible]網目と[illegible]た如[illegible]である。そして[illegible]のやうにガヤガヤしてゐる。[illegible]ホテルと[illegible]たら、[illegible]には少ない、[illegible]人[illegible]などゐる、[illegible]

[illegible]ない。[illegible]して[illegible]はいつたと[illegible]に、[illegible]へ[illegible]けると[illegible]けそ。[illegible]う

[illegible]円[illegible]八、二十九日)

[illegible]前後、[illegible]四時の切、[illegible]し

だ。ふそい晩飯の後、明るい入浴をすまして。凡一睡いた。いきなり「北京」が眼前に露出した。先づ前門——前門と城門の横綱が二つ踏ん張つてゐる大都の入口に一驚し、気が清々とした。「どうだ、この北京らしさは！」雄大な瑞親を墻が張る如く、思ひ切つてそれから左右へガッシとした城壁がずつと一直線につゞいてゐる。町はその内外にゴタゴタで何だかさつぱり分らない。気に入つて仕方ない。電信柱がゐない。電車がゐない。それこそみんな支那人で充満してゐる。——尤も来るすぐに例へば「浅草」へ太田氏の案内で連れ込まれたのですが。

そのゴヤゴヤとした繁栄の様は、現に見てゐながら何を見たか、今もはつきりは浮びません。

かきまはされたやうだ。

その夜家への手紙に、（絵ハガキに添へて）「前門街の前面である。そのやかましきこと、大変。北京には電車がない。から云ふ所を自働車、多く人力車が全く織る様に通るのだ。東京の車夫を此所へ（殊に夕方）つれて来て見せたら、僕がミケルアンジエロを見た位ゐ驚くだらう。」作者の所感で、と妙なかき方がしてあります。

蝿をまいた様に町一杯、敏捷な車夫が駈けちがひ、すれすれになり、列を作り、大水のゴミの様に流れてゐます。一寸とまるとみんな止まる場合がある。きはどく衝突しかゝつて一寸[illegible]はによける。[illegible]にかじをまはし、又は、うまく[illegible]、いきなり水雷の様に飛び出して町を右から左へ横断する。

全く出水の川である。北京の町は。人[illegible]なく[illegible]る。丁度大水の時、萬年橋のゴミが流れて大川へうまく出入り出来ず、「かじをとげたゝ」と怒しつながつて川の出口へとまる事がある様に、車も厭い前門大街からせまい大柵欄へ引き込む時など全く進行がにぶり、又はとまつて、つゞいて了ふ。騒式のやう。「チエ、クアン、チエ、クアン」（御免よ、御免よ）

自分はその中を徒歩で歩いて始終前後左右に危険を感じ、ちどこまつて立ちすくんだ日がある。一度臆したらもう一歩も出ません。——時には通りで車が前を突切る支那苦力とぱつたり出逢つた。その時車力はぐつと力をためて前進を控へ、苦力の背をドンとつきとばす。ところが苦力は突かれてフラフラと浮足になり、然しふり向きもせず、——ハハア、又かたと思ふ如く——そのまゝすたくいゝ様な方角へ行つて了ふ。鬼様な—ボけた感を受けます。「東京ならばすぐに喧嘩だ。」

[illegible]な[illegible]して行後進が騾馬や騾に荷をつけ、裏町を通つて大街へ出て来る。兵士が何か高くまぐさ（？）を積み上げた馬車

に乗り、ゴロゴロつゞいて大道を通る。長いムチをいゝ案梢のやうにしなはせてゐる。

* * * * *

私は或る日中央部の前門大街を車で通つてハッとしました。煙も見えぬに、町に水管を引き、何かザワめいて何所か桜町に火事があるらしい。すらりと人が出て消防を見てゐる。その水管を蛇のやうに引いた大街の中央の一區劃には人通りなく、みんな大きはりして円になつた人込みへ消へ込む。――私の車だけ、その無気味に開いた空地へ一散に引き込んだのです。行手に前門がガッチリと控へる。門は三層で円く、下に小さく門形の口を開き、二三十層には一面に並んで角窓(?)が開けてある。

「堂々たる石門。[illegible]だ、と云ふやうに見える。」(八、三一夜)

ところが突進に[illegible]けよつた[illegible]私の車夫の背中をピシッと撲くつた。私は[illegible]に背をちゞめて撲ぐられたやうに縮じました。暫く中央の[illegible]の前に[illegible]な時を消えたかつた。

* * * * *

夜、如何に[illegible]であらう。

天氣がいゝので空には星が散らばつて光つてゐる。

夜風は寒い。外套の襟をかき合せ、手袋がほしく思はれます。車夫はキコキコ云ひ、小さな燈火をつけ、いつか仲間が集まつてかたまつて走る。前門外には露店がすらりと出てシャツや煙草、雑貨、水菓子類を賣つてたます。それ故ポーッと明るくつゞいてゐます。角形の正陽門はくつきりと黒く天へそびへて見える。

宮殿外部の長い壁には所々に角ランプがとり付けになり、ボンヤリ道を照らして、その下を人が断へずぞろ〳〵と通る。

交民巷へはいると道は平らで、微風の中をすべる思ひです。矢庭に行く手から扇形円光がサッとまはつて來て、両眼の様に開き、まぶしく輝き、すれちがひにその自働車がさつさうと通る。又サーチライトが光つて自働車が通る。それ等にも今夜夜食の紳士を乗せてゐる。

北京の初めての夜、二十八日にも、さうしておこく[illegible]門から還つて來ました。

七

あとで十月初め、二度目の北京滞在の時、[illegible]のことなど、――

「北[illegible]兄。その後は御無沙汰してゐます。御元氣のことゝ

思ふ。いつだつたか、こつちの日本人クラブで[illegible]か何か見て見の本お寺院堂から出る消息など見、懷しく思つた。僕は或ひは近く時あるが、模様に依つてはもう一息河南龍門へまはつて、兎に角今月中には歸京します。存外長い旅になつた。最近には半月大同の先き雲崗（ユンカン）の石佛古寺に泊つてゐました。そこの自然岩十町程の間に石窟となつて殘つてゐる無數の北魏の彫刻佛龕には、全く感服した。支那へ來た甲斐充分です。北京とその近傍、長城、十三陵等のものも大體目ぼしきものはみんな見ました。が宮殿内武英殿の工藝美術品が立派なものです。文華殿に現もあるがそれは大したものではない。

やつと支那日用會話の手製のコツをおぼへて此の頃はポツポツ一人で車に乘つたり買ひ物したりしてゐます。字が日本と共通なので會話を必要だけ納得すればよく、語法は英語式に動詞のあり場を日本語と逆に行けば大ていわかるので（さぞ知つてゐて聞いたら我ながら赤面するだらうが、）自製支那語でやつてゐます。我要上前門去（ウオーヤウサンチエンメンチエイ）、車夫何錢（チヨーフドルチエン）、（前門へ行きたいがいくらだ、のつもり。）といふ式に。大てい通じるからこれでいゝのだと思ふ。呵々。僕のことを木村莊八先生（ムーツンチヤオパーシエンシヤン）と呼びます。誰れでもシエンシヤン〳〵と云ふ。大人（ダーレン）は餘程上でないと使はない（らしい）。

今日[illegible]こつちの[illegible]話したくなつた。芝居もなかなか[illegible]ました。時には[illegible]感じさせてうまい。然しそれには[illegible]に近いと思ふ。うまいことは事毎に感じます。活動のチヤプリンを見てゐる感じと似てゐる。餘り才があるので目まぐるしく、はたの役者は殘らず材料の感じがします。然し日本にはこれだけ相と云ひ聲と云ひスタイルと云ひ、條件の備はつた役者は一寸ゐ相もない。若い女に扮して歌ひ乍らおどる時など實さい奇態な美くるしい感を受けます。さう云ふ方だけたらいゝのに妙に事件を運ぶ新劇などやるので、さうなるとそればかり見えて少しイヤになる。然しそれが大人氣で他の人々とは人氣から地位から段ちがひです。

今日讀んだこつちの日本人のかいた支那芝居の本に、先夜梅蘭芳の相手役（立役？）としてついてゐる王鳳卿（ワンフオンチン）と云ふ好男子が主役でつとめた「捉放曹」と云ふ劇のことがかいてある。丁度それを僕も見たので、その事を此の手紙で話したく思ふ。王は云はゞ日本の吉右衞門位ひの位地でしぐさもうまく、評判らしい。梅蘭芳が日本へ行つた時には彼も誘はれたが、日本では阿片がのめないので中止した由、（その爲めに日本では梅蘭芳は相手方の男がなくて思ふ樣に行かなかつたとか云ふこと。）

この芝居の筋は、――寂しいので手紙をかくとつい氣が晴れる、おかた手紙で却つて迷惑だが――時代は後漢、人物は縣知事陳宮、曹操、その他。（陳宮を王鳳卿がつとめる。曹は郝壽臣では[illegible]になります。大體この二人の歌でつなぐ場面です。）

當時董卓が漢の帝位を纂ふのを曹操が知り心配して、王允に七星の寶刀と云ふのを借り、董の寝間へ忍び込んで殺さうとする。が目をさまされたので、あわてゝその刀を捧げる振りにごまかして、その場は逃げる。然し董卓の義子呂布が曹の殺意を察して父にその事を告げ、やがて各地にフレが出て曹操を捕へよと云ふことになる。曹は致方ないので[illegible]中牟縣に逃げた。然しそこで關所の役人に捕まつて了つた。

その地の縣知事に陳宮と云ふ男が居つてゐました。曹に[illegible]たがいつか捕へた陳宮が詮議して、共に逃げのびて兵を上げやうと云ふ約束を結び、此度は二人で道中をする。途で曹の親友呂伯奢に逢ひ、呂の家へ泊る（芝居の場面はこゝから起る。）

呂は好人物で、親友の子が來た故大變に喜んで、家人に豚を殺して馳走せよと命じ自分は外へ酒を買ひに出て行く。曹は客室に居つたが、次の間で「殺せ」と云ふ声が聞こえ且刀をとぐ音がするので、さては俺を殺す氣かと思ふ。且呂も出て行つた様子だ。定めし土地の者を語つて俺を縛し、官の役人に預からうと云ふのだなと思ふ。陳宮は[illegible]辯解せず、呂の好意を無にしてはいけないと云つたが曹は聞かず、次第に別室へはいつたかと思ふと一家の者を一人殘らず殺して了ふ。陳も驚いてその方へ行く、と、家の[illegible]には豚が[illegible]ト と思ふ、曹もこれにはしくじつたと今更思つたが、然しもう家中殺して了つたので、逃げる外はない。二人は早速その家を逃げ出す。（音樂[illegible]）

その道で向ふから酒を持ち、いそ〳〵として歸へつて來る呂に逢ふ。いきなり曹は又刀を抜いて呂を[illegible]し、これで胸を[illegible]つた、といふ。陳宮はもうその前にもたまらない氣になつてゐたのに、又それに出逢つて、すつかり曹操のやり方に驚いて了ふ。その後は仕方なく同じ宿へとまる。その夜、[illegible]をかき出して、私かに馬にのつて彼は[illegible]中牟縣へ逃げ返る。翌日曹操は起きて陳宮の逃げたことを知り、非常に怒つて、よし俺が諸侯を制して天下をとつた時には、そのまゝにはおかぬと云つて宿を一人で立つ――と云ふのが筋です。（猶曹操を主題にした劇は種々あるらしい。これが一番いゝとされてゐる。）

で、芝居の方では、一齣文は芝居に[illegible]ナシで一[illegible]から二齣目へ移るにも一寸ツナギに[illegible]だけでダラダラですが、恐らくこの形式も適せぬ[illegible]あるらしい。他に王

鳳卿の時と二回この狂言を見たのに二度とも其中の一場しかやりません。と云ふのはつまり曹が主役とならず、陳が主役になるからと思ふ。で、今迄の筋はみんな影にかくれて居る。

陳は黒鬚を長くたらし、冠、長衣、昔の繪の官廷役人の姿をしてゐる。顔は殆んど塗つてゐない。(王は好男子なのでそれが又よく似合ふ)。曹は支那芝居によくあるそれこそ出鱈目の無氣味なクマ取りをして武裝し、始終威張つてぶつきら棒にしてゐる。殆んど對話と云ふ様なことなく、斷えず音樂を奏しそれに合せて二人で交互に歌をうたふ。第一場は呂の家へ二人がついた所ですが筋を知らねば何だかわからぬ調子で三人で互ひに歌をうたふ。その間に呂は一人引込んで了ふ。(かき落したがそれよりも先づ先きに、曹が舞臺眞中に立つて多分名を名乘り、武張つた恰好をする。チヤルメラ、ドラ、鐘、大變な騷ぎ。)

すると――おかしな事に――ラシヤの黒外套を被つた男が上手から下手へ舞臺を通りぬける。つまり豚のつもりと思ふ。影で刀をとぐ音などはまるで聞こへないし、やりもしないと思ふ。只、その豚が通りぬけると、陳宮(王鳳卿)が一種悲哀を現はすチエスチユアでかなり長く、獨唱をする。その歌がつまり山なのでせう。呂の好意を無にするなと云ふ歌か。見物は調子に合せて「好(ハオ)、好(ハオ)」とどなり、人氣が立つて來る。何かその歌つたあとに事ありげな様子になる。するとバタバタと舞臺へつまり呂家の人々が出て來て、曹と陳との前を一人〳〵通りぬけ、一人〳〵曹に刀で背中を切られ上手から出て下手へ消へる。筋では曹が別室へ行くのだが芝居では殺される奴のちから曹の前へ出て來る。殺すにも寫實は全くなく、只みんな刀を浴びて消へうせる丈けです。然しその時に鳳卿の陳は目を大きく開き手を長いひげの影に入れて、指をハラハラ振はし、腰をかゞめて、一見非常な驚きの情をしぐさで示す。(王でない役者はさうしなかつた。)そして悠々と刀をおさめて引込む曹に從つて下手へ消へる。それと同時に鳥打などかぶつた變な奴が出て來て背景を變へる。背景にヱをかいた垂れ幕です。左右にそば屋の様な入口がついてゐる。

その幕布つまりバツクが變るより早く、再びついさつき左手へ消へた曹と陳とが改めて右から舞臺へ現はれて來る。幕を一まはりまはるわけ。それで然し呂の家から逃げ出した途中の形ちとなる。彼等二人が――間斷なくその間種々の音調で奏樂してゐるが――舞臺中央へ出ると、右手から呂が老人の服裝でやつて來る。そして曹の前を通る。例の如く殆んどしぐさに感情なく、刀を浴びせられてそのまゝ左り手へ引込む。その呂の引込むあとを見送つて、然し陳は兩手をわな〳〵ふるはせ次第に地

へ片膝をつき終始首は目の走り方を注視しながら、アアアアの連續音で非常に長いメロデイの細かな京歌を唱ふ。(この歌を蓄音器でもよくやつてゐるし町でも有用な奴がよくどなつて歩くのを聞く。)胡琴のコキユーと全く節があつて我々にも一種の快感と或る感じを感じさす。見物はすつかり熱狂して好々(ハオハオ)〳〵わく代た騒ぎをする。その間に全く非常に長い陣の巧みなアアアが最後の内容歌の代にしつかり「ア」ととめる音できれると、同時に顔がハヘヘヘへと咲きする。それから二人でわりに短く歌ひはひつゝ静々ながら引込む。

(――すると又パックが鳴つて左手から役者が現はれ、スグ次狂言が初まるのです。歌舞の音が烈しく、非常に耳(聞)てゐて疲れる。)

妙なものです。然しこれを支那人が好きになる所にはよくわかる。どこも大てい満員です。上等席で一圓かゝらない。昔はどんな風だつたかしらん。何しろ僕の見た舞台では筋は解る知らぬに中心として、第一に役者さへいゝ声をしぼりさへもよくやつてくれゝば、一度の上[illegible]舞台の設備はその意味で、始終面白く見続けました。

その他いろ〳〵狂言の筋には面白い趣向があるのに、何しろ此の調子で動作を簡単にしたとは[illegible]の方の設備

知識に任せ、演劇は只十中十まで歌曲専門です。歌劇の歌のいゝ所だけをバラバラに舞台へまき散らす様なやり方だ。云ふ迄もなく「劇」には成つてゐない。餘り「急所」の連續ばかりで結局に何だかわけがわからない。簡單な。然し梅一座の王にはやつと表情があるわけでせう。他の一座はてんでんばらばらに勝手の獨唱で朝鮮に似てゐます。

＊　＊　＊　＊　＊

以上、手紙にて結局話し。

この手紙、家へまだ表現せぬ居のことを詳しくはかいてやつてないから一緒にそれで見せて、その上で兄の許へ送らせます。いつも僕は見た事や日記を手紙にかいて通してゐます。

御無沙汰を断る。茂子さんによろしく。

北京にて　荘　八

八

「八月二十九日。いきなり大都會の真只中へ投げ込まれたので今のところ頭が混亂中です。昨日の散歩で「北京」をバラバラに見て、然しその感じがうまく結合出來ません。さすがの「旅行家」も呑まれた形ちです。

昨日少し正陽門附近の繁華なる町と、夜は芝居を見物しまし

た。同封番組がそのとうです。残念なことに今回は[illegible]に不在です。然し芝居は非藝術でつまりません。「見る」にはいろ〳〵いゝ材料で服裝、色どりなど心を奪きますが動作や所、音樂で救れ、頭痛がして了ひます。こつちは「觀劇」でなく「聽劇」だ相です。何しろそのやかましいこと、火事場です。

物價の安きことを變に感じます。尤も日本カネが元來安いのですから從つて當り前ですが、今三百圓兩換したところ百九十弗五十錢來ました。全部銀貨で。重きこと非常。（紙幣は所により不信用でカミクズの如く、不安也と云ふ。）

同封書紙、その引換證です。今日の銀相場、日本一圓に對し支那六十三錢五厘。毎日變るらしい。奉天でかへずに損をした樣ですが、わかりません。

物價が安いと云ふことは、(一)ヘルメットを買ひました。銀一圓二十錢。(二)擷華樓と云ふ民國第一とかの料理店にて二人鱈腹夕食、銅貨九十五錢。(三)何とか云ふ獨逸商人パン菓子店にて二人分パン、洋菓子。計、銀三十四錢（銅なら五十錢位）。(四)茶店にてそのパンを食ひ、休憩三十分以上。茶代銅五錢。(五)人力車二臺朝十時より夕六時まで諸方見物、二人にて銀一圓五十錢……等。

この堅實なる支那大國の都市へ來て倍三倍に滿韓殖民地の無

[illegible]く[illegible]します。午後六時退館す。

「同便で芝川氏へ銀貨一圓の各種刷りを送つたから家へは銅貨各種刷りを送り出す。金兩換のこと等、芝川氏便へかいた。結局――略――お僕の旅中財産だ。今整理をした。箱へ入れたが油桁箱餘計に一つ入れた程重い。

大洋銀貨を持つて歩けばつまり昔日本人が小判千兩箱等を持ちしに等し。之れを馬賊かれらふ也。日本の昔も矢張り同じ、馬賊は國定忠次也。實際忠次が昔群馬でしたやうに、今支那でしてゐる馬賊の長が、さう認められて、在る。或る偏避の土地は、却つて馬賊あるが爲めに統治されてゐる例も聞いた。

欲望の小さき一なりしヘルメット買つた。ムギワラは不潔で見つともなく、「もういらない（ハイプヤウ）」。全白。帽裏に「國貨」とあり。國貨は結局排日の意味也。マークは丸形車輪模様にて裝地に金がき、北京、興起、製帽、工廠と字が入れてある。中央に矢車形カナ具容氣ぬき。いゝよ。價格一ドル二十文。日本の約二圓弱。どちらで召しましても六圓、八圓、十圓と云ふ所は動きませぬ。どうだ武、ほしいか。少し買ひに來るには遠いね。（八、二九便）」

之等の一揃ひをかきよせた目には例外なく、眼をさました。間もなく外へ出て、食料にパンを買ひ、車を雇ひ、市街陣営をまつすぐ城内の中へ、踏み込みました。

それに眼下で街を見たから思つたが、[illegible]を進めば進む丈け、[illegible]はや消えてなくなり、却つて平和らしくカッチリとして来る。支那[illegible]く見かける[illegible]は[illegible]瓦の洋式な[illegible]純支那のものとなり、[illegible]が出て来る。外人に少なく、支那人ばかりになる。殊に往来で[illegible]が二人、[illegible]へつけて一ぱツ、ザツと頭に水をかいてゐました。[illegible]に。それは[illegible]に、[illegible]心して来た。何と生活がし[illegible]だらう。子供が[illegible]る。その人は何かしてゐる。[illegible]。[illegible]を[illegible]して、[illegible]にさいたり[illegible]ます。[illegible]何にもみんな悠々と[illegible]く仕事をしてゐる。この[illegible]で、大陸を[illegible]んでてらしてゐると[illegible]へました。[illegible]に感心した。

「[illegible]のやう」

と同行の[illegible]ました。

「こんな[illegible]いか?」

「[illegible]ある。そこで[illegible]パンを食べることにしよう」

何か[illegible]して、やがて[illegible]についた。つまりはたり、[illegible]めし屋のやうです。[illegible]のテーブルが[illegible]にも並んで腰をかける様に[illegible]がおいてある。——[illegible]はいると男が[illegible]を持つて来た。

そこで私は大感心して見たが[illegible]の職人が、[illegible]の一間にかゞんでしきりに[illegible]ズミの何かしきりに作つてゐました。[illegible]ズボンをはき、だるまの[illegible]た[illegible]靴をはいてかゞみ、上身は[illegible]で、せつせと白いもの[illegible]り、[illegible]を[illegible]ねてゐた。命の心[illegible]も[illegible]の心[illegible]もないかの如く、只この[illegible]がうまくくつついてさへくれればいゝと云ふ風に見える。[illegible]安住を[illegible]せます。[illegible]しい。

「——[illegible]州はひどいんだなあ」

と[illegible]つた。

「[illegible]人は[illegible]に見える。[illegible]ない。[illegible]をくどくどイヤにいつて来たせいか、さつきからどうもこの[illegible]人に[illegible]心してゐたけだ。[illegible]いてゐるよ。悠々とやつてゐる。おしもさされもせぬ[illegible]だ。[illegible]ところではない。

「つまり[illegible]の[illegible]も[illegible]ない[illegible]には[illegible]になれ。[illegible]につたりとしてゐる。[illegible]した。

[illegible]は[illegible]くひどいよ。[illegible]にあきたいかな。

無料で聞いてたまらなかつた。——ここに至つた。悠々と安住

してやつてゐるではないか。」

フト、腹が立つて、

「滿州にのさばつてゐる日本人はこの「支那」へ來たらコツコツ逃げるほか無いな。下等だ。一刻も組せまい。この落付きへは。「やつと支那に樂に好意が持てた。立派な國だ。さすがは帝都だ。感心出來て氣持がいゝ。」

私はさう一人でしやべつて好機嫌になつた。機嫌よくなるにつれて猶湧く樣に土地の衣食住ぴつたりとした生活のグリムプスに好意と愛、及び尊敬がわき、自分は日本から來た旅客である。自分も日本の故郷に安住してゐる、――時には意識が「金」の上に立つ生活を厭はうとも、無形的には――生活を感謝する者だ。諸君はゆつたりと此所に諸君の日を送つてゐるやうに見える。その氣持がよく傳はつて感じがいゝ、諸君の生活を尊敬する、と思ひました。

一種亢奮の情ですがすがとした。

間もなく茶代を拂つてそこを出ました。若いたくましい男が代を受取り、茶器を片付けてあとの卓上を拭いてゐた。主人(?)は何かしきりに手入れ最中の二階の間取りかなにか、指圖してゐた。

一面こんな生活だ、いたしかたないものだと思つた。

――だが待てよ。俺に今から言はせて貰へて、然し不滿足な氣持の しく思ふ感じが消へ失せない。考へても見よ。何であの支那の茶店や水まき、その他街一帶の雜な生活が「立派で」「たしかで」、「尊敬す可き」ものであらう。寧ろそこには俗のことや過度の勞働、過ぎ去る地上のことばかりしか考へてゐない生活の淺はかな影が、今理性から見れば多い筈だ。とても「感心」出來るわけのものとは違ふ。

成程、純反動だ。ひどいものだ。俺は餘りに滿鮮で生活の者と共に浸入の者の生活の亂鬪、土地と人間の不調和、不和合を苦々しく見た。目をあいてもつぶつてもついいつか。昨日までもその奉天にゐ、今日はいきなり五二二哩六こつちへ俺だけ急に寄つてゐる。眼や神經は昨日まで三月の間滿鮮で見てゐたと同じつゞきで支那の都をすぐ見たと見える。都の生活の落付きが矢庭に異色を持つて俺に映じ、俺の心を展いたのだ。

何しろ今日長らくの南滿州から北京へはいつた第一の日には、街で支那生活にすつかり好意を持ち、感心したのが實情だ。俺は餘りこれまでこの細々とした支那茶店又は町家の、然し「落付いた」、その落付きさへない、およそ地上で最も土地と人とに

和合のない、美のない殖民地生活を見せつけられ、當てられてゐた。

滿洲に於ける生活には、――一概には簡單に云へぬとしても――それを目撃した眼に假令一時にもせよ、この何でもない、實に醜い、支那の町家の平凡の生活を然し殺ちがひに思はす。それ程、地上に立てた不健全なものが少なからずあるのだ。

何にしても然う「良心出來る」と云ふ愛嬌は、紙共がいゝ。

「おい君、此の上は早くあの滿州的装備を去らうじやないか。殖民地風俗にはもう一刻もたまらないし、第一支那にも同化でない。あゝ、汚ないヌルヌルの湯へ今まで我慢してつかつてゐた様だ。やつと此の地で滿々した、先きがからうして落付いて土地にぴつたりとしてゐれば、從つてこつちものつくりとのび〱く樂には外國へ來るわけだからな。――何だか氣が引けて外國を歩くやうな、なまづい苦々しい思ひだつた。南滿あたりは。地上の勘ちがひである。」

さうして北京へ着きました。

九

「昨日は雍和宮へ行つて見た。東單牌樓の通りの極く先きにある。滿の雍正帝が宮殿をラマ寺に下されしものと云ふ。建築は中々立派だ。佛像等は然しグロテスクで藝術品とは違ふ。宗教心なきものが、無闇に過度の勤行や禁慾生活を行ふので全く滑目の悲劇になつた宗派と思ふ。生活が全く世を離れて陰地獄へ狂つてゐる。陰陽和合の佛像などを拜む。馬の様な動物形の女を踏まへて何か人の死骸をふりまはし、踊つてゐる佛像がある。又はクラクラ貧へ立つ酒の盃からニユツと人間の手と足が出てゐるといふばかりの繪がある。人の頭骸骨を器にして酒を盛り、神にそなへ、一つ一つ説があるがひどいものだ。男の頭骸と女の頭骸を繼合せにつないで骸骨には兩方半間に切り、人間の皮をはるとか云ふ。人間が心を失ひ、然し何か無氣になつて時と生活を洗たさうともかくこんな奇形を生み出すかとおびへる。それにしても此派のラマ僧はかなりエネルギーをふりしぼつて宗派の邪道の只中に立ち、色彩の觀念と佛像を案出し出したものと思ふ。およそ人間の能力を無用にしぼり盡した例かも知れない。未來派などより信仰的、つまり音樂がないから、却つてすさまじい。或る藝術の大家連の像などはまなじりを決して描いてゐる氣がする。その人達もし親しく見たらウゴリノ伯に出逢つた代にも慄然とするだらう。

地に人間の生める想念の極盾だ。から其向にまちがつて生命を傾倒されては人生は苦のうづく地獄の釜のやうになる。そこ

で彩られて[illegible]の中でラマ教を考へたとしか思へない。眞理や藝術を見たことがないのだ。何所から傳はつたものか。パラモン教か何かゞ變化したのかと思ふが、(パラモン教も知らないが、)恐らく何所か交通不便な、東半球の地上の鬼界ケ島のやうなところ、耶蘇からも釋迦からも遠い所で、暗闇の中に醱酵した寄と思ふ。

眞理が缺ければ宗教は盲信で人間の弱點となり、結局こんなものである。人はその信仰の中に一身を埋めやうと望む。その結果こんな醜か怪氣になる人間の最高才能を現に角要する怪宗派が出來上る。

つまり性慾やさう云つた生活の盲目力を拜むのだ。人間が淺ましく思はれて來るが、又かう云ふものが起るのも道理だ。盲目力の人生を支配する力は闇では絶對なのだから。

オリヂナルのラマ僧の生活を考へると洞穴の光る蛇のやうに、怖くなる。チンギスカンの土地から一體來たらしい。越へるのに駱駝隊で何週間とかかゝるタクラマカン大沙漠などある地方だらう。才能が美と添はず、只盲信のうちに燃へ上つてから言ふグロテスクを作り上げた。印度の佛教藝術を缺點的に受れ入れ、發展させたかも知れない。痛々しいまでに突込んだ、醜惡なものだ。或る生首だらけの佛畫は線と彩色だけでも毎日つゞけて十日はたしかにかゝりさう[illegible]方位ひにしてある。[illegible]てある。且、そこから彼の盲目力の奥[illegible]のすさまじい[illegible]の威力ありありとしみ出す。これで見ておて[illegible]へる。人のまよひ盡して發揮された力に。

それは別として、昨日丁度ラマ僧對付のところへぶつかつたのは面白かつた。今日のラマ僧はのんきな醉生夢死の、拜む賊のやうなものだ。ねむ相にゴロゴロしてゐる。只何と云ふことなしに邪神を拜んで政府の當てがひぶちか何か貰ひ、(一體雍正帝がラマにこの宮殿を與へたのはさうして西藏、蒙古を牽制の爲めと云ふ。)朝夕大變な讀經をしてゐる。丁度夕方のそれにぶつかつたが、何れもボロの衣裳を着て暗き堂内に並び、およそ一間大のすばらしい喇叭を汗もろ共に吹き鳴らし、小ラッパを甲高に吹き、太鼓を打ち、斷へずジャランボンどらを打ち添へ、中に長老の一人が經文を非常な低い催眠のバスで斷へず唱する。

全く驚いた。そのボロの服裝の色が又得も云へぬ美しい古色である。

いつもは深い紫の長衣を着て赤のバンドをしめ、勤行の時には上から眞紅の布をけさの樣にかける。

不思議だ。中に一人少年僧がゐたが、紅のはげて白桃色に化したボロにくるまり、やせた肩を出して太鼓を打つてゐた。一體どうするつもりか、氣の毒になる。

一人若い生意氣の様な僧は、あとで僕が別の建物で休んでゐた時、何か繪をかいたかどうか寫生帖をこつちへのぞきに來た。勤行をしながら、この時こつちが窓からのぞいて寫生帖を出した、これを見て知つてゐたと見える。」(八、三一便)

この歸途近い門の時、孔子廟とをはり、鼓樓、鐘樓を經て日のくれに近く。

八月三十一日の日記に「氣分の異や興はをなす。十一時半起床。氣分とに眞く何ものか術に於て擊たれず、不滿である。尤も陰翳の餘りにさすぎたか。」

その一種物凄いディスイリュージョンは、二三日つゞいた。そのせひか、九月一日の夜は晩走に招かれて無氣味なフカのヒレ、燕の巣を食はされた。これをあとで聞き、然し自分に知らず出たものを食ふと食つて、どれがそれかは今思つてもわからぬ。

二日には飽きたが「天橋」へ出かけた。——で、その歸りに、實火事を見た。

十

「よく毎日通る通りに北京飯店と云ふ大ホテルがある。そこへアイスクリームを食ひにはいつたが、無し。却つて店内に骨董店あり。ついひやかしたところ、ラマ佛カンギテン(?)をこつちの云ふ値に負けられ、一個求む。この佛像の類が多くの如し。(略)」怪異様怪の感起る。まあ一つは話の種に、あつていゝ、世にも思ひ切つた宗教の偶像だ。淺草聖天様の御神體かも知れない。

この手をふり上げた牛頭(ハツカイの様だが)神が男で、かぢりついてゐるものすごい女形は觀音様だと云ふ。何でも印度か何所かで、或る王が他人の女に戀した。が思ひを容れられないので我れ死なば牛王となつて思ひを遂げん、と呪つた相だ。そいつが本當に死んで牛王となり、やつて來た。觀音様がその時女の身がはりに立つたとか聞いた。——此の像の傳説であらう。

醜下な人間の慾力か煩か信仰心か、その弱點を鋭よくえぐつた傳説である。觀音様もやりきれません、だ。そして此の和合像には、稚拙のあり得るありがたさは無く、(日本の安達ケ原鬼婆の話や傳説にはもつとうるはしい情もある)、却つてあくどい牛王の思ひが露骨に出てゐると思ふ。

之れを拜む生活はかなり分らない。むしろ[illegible]の毛根
ことにいた女の髪の毛や一叉大根を描でいたゞめて[illegible]話を思ひ
合はすと、爪の燒ける樣な臭ひで感じはおぼろに立ち迷ふが。
「それより前門外に出で、夜店を見、昔日本にあり！煙草ピン
エット、求む。ピンヘット〳〵サンライス、オールド、カメオ
にパイレートと云ふ歌有り。そのピンヘットとパイレート、此
の地に今もある。銀紙同封。品海(ピンハイ)及び一方は「海賊」だから「大
刀」牌香煙。——つまりあの歌のあつた頃の日本開化の樣が今
の支那だ、概して。

此の煙草のひろめ元は米國だが米國は今のところ支那開化
(?)の盛んな後ろ楯となつてゐる。臭氣甚だし、(九、一便」

十一

今、北京の地圖を開いて見ると、その劃然とした横町や帶の
やうに長く正しい大街、四辻々々に牌樓の番印、——凡て黃色
と赤、白の天津製地圖が記憶の中に立體となり、其所此所の今
もよくおぼへてゐる小路や通りへは現に此の圖の中を、何かそ
こいらをテクテク自分が歩いてゐる樣におぼへます。地圖には
不思議な情があるものだ。ある人は此の邊にゐる。此所まで一
所に歩いて此の角で別れて自分はこつちへ來た。此の横町のか

どお[illegible]で計つた。それ[illegible]のことを上から[illegible]に見下
ろす如く思ふ。譯ないものゝ

北京は一體どの位ひの大きさか、はつきり知りません。數字
では知りませんが、——成程、案内記に書いてある。全面積
五方里、我東京市と略伯仲の間、とある。さうであらうと思
ふ。私は地圖を見るが、大方ここはこんな風であらうとは思ふ
が猶知らない個所が[illegible]山にある。地圖は横さしわたし巾一尺六
寸五分でたてに長い長方形です。たては凡一尺二寸ある。私
がゐたのは東四牌樓で牌樓から北京の西端(西直門)までまつす
ぐにすに一尺三寸ある。この地圖の一尺三寸を無論ぐね〳〵曲
がつては行くのだが、よく車で行つて正味一時間強かゝりまし
た。地圖の一番上(地壇)から一番下(天壇)まで、二尺弱、車で
二時間位ひかゝるでせう。——(東京の感じよりせまい樣だが。)
「之れを別ちて内城及外城の二となす。由來内城の地は歷史の。
紫禁(ツーチンチョン)城を中心として發達したるものにして、近く滿朝に於り
ては八旗の居住地に充てたる處なれば、商業の繁榮は固より外
城のそれに及ばずと雖も、城内各門に通ずる大街路縱横に走り、
無數の胡同(フートン)(小路)之れと交叉して通行に便し、街衢の整然たる
こと恰も我京都の如きものあり。」(鐵道院發行案内記)

街のぐるりに城をめぐらせてあるのです、城を、支那の名ある

蛮行はどこでもあるさうだが。——私は私がまだ北京へ行かない前にそれを[illegible]んでも何かしら文字の影から「北京」が不思議な影絵[illegible]を出す様に此の一節を[illegible]きたいと思ふが、日露戦争の絵によく[illegible]大[illegible]何[illegible]城[illegible]取るところがあつた。あの絵に灰色さ[illegible]でこま[illegible]い[illegible]があります。あの——石垣はうそ一部[illegible]北京[illegible]城[illegible]すつと「北京」と云ふものをかこんである。[illegible]（日本七里[illegible]）、高さ三丈九尺九寸。内[illegible]云ふのは、北京[illegible]中央に[illegible]の[illegible]あり、[illegible]中央にありて別に一区を築くもの即ち是なり。その[illegible]して[illegible]色に[illegible]られ、四面に城門を設く。」それ[illegible]ぐるりと四角く「内城」を取り、その中に[illegible]云ふ[illegible]乃至「宮城」、宮[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]でたう[illegible]の細く[illegible]合する[illegible]外きはり[illegible]、一[illegible]の[illegible]に[illegible]らしい[illegible]の[illegible]たおりしを以つて[illegible]の[illegible]に[illegible]するにおらずして北みたりと云ふ。「それは明の嘉靖三十二年（西暦一五五三年）のことで、今は内城の南面から後ろ（南方）へ張り出しの様に、二十八[illegible]形に[illegible]がきはつてゐる。

円形な内城（北）へ横長い外城（南）がくつついて「北京」になつてゐるのです。内城外城の接する[illegible]て一方に[illegible]天へ、他方に[illegible]へ走り去る。内城[illegible]に[illegible]へ引込む正陽門となつて、城壁中央部に位し、[illegible]、二つの[illegible]がある。（[illegible]二つ向き合つて建つてゐる。）[illegible]門の前に[illegible]門が立ち、「門外たる[illegible]門[illegible]の地は北京[illegible]業の中心地点として百貨の[illegible]するところ、[illegible]椅比し、車馬の往来[illegible]し。」——それが[illegible]への[illegible]となる。

外城の北部、「北京」の後ろの方には大きな[illegible]（一四二〇年）以来の[illegible]たいつてゐる……その[illegible]、段、圜[illegible]、[illegible]の二[illegible]、南[illegible]形成する[illegible]めて[illegible]小な[illegible]……」[illegible]加へた様[illegible]、[illegible]二三二[illegible]と特にそこだけローマ字を[illegible]にも入れてあつて、[illegible]）があります。

「[illegible]大なる[illegible]を初め[illegible]、林[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]く、この今[illegible]る[illegible]入口[illegible]。

字の通り「[illegible]」として[illegible]

「[illegible]に[illegible]、[illegible]する[illegible]へ、」

臨川壽泉氏著「北京名所案内」には、「此の地もと琉璃窯を設けて五色の瓦を製したる爲め」街にその名があると書いてあります。

私の日記の餘白に、「ルリチャン、龍模様コップ、大清雍正年製茶わん。前門大街、光緒ブリキ(?)コップ、支那芝居服」と飛びがきがあつて、大清製茶わんだけずつとはすに消しにしてある。それは買つたからです。買ひたいもの丶控へで、散歩の歸りに忘れぬうち、或る日、その日の注意の分をかいた。よく、殆んど二三日おき位ひに、前後三度一月弱の北京滯在期中、あの邊へは行きました。「買ふひやかしと純見物に。陶器と石佛等には下手な博物館以上の立派な作が軒別にと云つてい丶――在る。

私は歸京してから三四日目に上野博物館へ行つて見ましたが、あすこの或る階段下にある二三の支那石佛は、よくないものだ。私が向ふでためしに二百圓につけて然し賣らなかつた石佛に、(もう一息買ふエネルギーもなかつたが)、非常に味のい丶六朝のものがあるのだが。

只何にでも變にかけ値を云つて困る「I say in one price. プ、クエ(高くない)」

「之れはいくら?」(ナーカ、トルチエン)

「乾隆、二十圓」(チャンルンアルシユーカイチエン)

「此所拔了的(何とかケチをつけて)我要買五圓。行不行?」(ナカホツイラーデ ウオーヤウマーイウーカイシンプシン)

之れが私の支那語です。わかると見える。

「不賣(プーマイ)」

結局然し八圓位ひで賣る。面倒でいけない。(何と假令「支那」の文にもせよよく金のことが出て來る稿だ。氣が引けるが。)

或る――それは然し琉璃廠ではなく、汚ない街中の九尺二間でしたが――綢屋では、そこへはいると壁一面、前後左右、天井からも芝居すの子の様にフーラフラかけじが一杯下がつてゐる。そこで花の絹と化物退治の(多分厄除かけじ。大津繪の鬼のやうに)絹を買ひましたが、六十圓と云ひ、二圓で買つた。

「奴、まだまうかつてゐるのだぜ」

「でなければ何でチャンが賣るものか」

さう云ふ氣になる。

買ふのはつい金目が氣にか丶つてイヤになる。支那ズボンめを買つた。六十錢。支那人が買ふと二十錢。一寸した雜貨でも値をかけ合はぬと損をする。支那車屋と麵を食つた。車屋の分、恐らく十錢。私の方は三十錢。目の前で違ふ。

「餘り露骨だと却つて拂ふ氣になる。」

* * * * *

あとで十月四日に、水幽兒(シェイコアル)の邊から內城々壁へ乘つて見ました。その面白いことは!

次の城壁の上り口は正陽門と東のもう一つの門との中程にあります。上り口は城壁內部からはすに傾斜だゝみで幅廣くついてゐる。二十歩かその位ひ歩くと城壁上へ出る。「城上の廣さは大した外國軍隊に貸いてあるがそんなにあつたかしらん。あるかもしれない。何しろずつと行止まりになつて草が生へ、灌木も小さなのが並つてゐた。上つてすぐのところには四角く高い城壁用の見張り（それが何門おきかにある）が出來、何か壊れた小屋があつて、白塗ペンキが斑らちかの如く、一二三對かひに向き合つて並へてあつた。

私は滿足した。氣がすんで氣がすんで仕方がなかつた。什錦樂器を出して、城壁上に銃丸（丁度拳程ある）のギザギザした面へ當てたり、路の城の下には北京の城壁の銃丸のところどころが食ついてゐる」と云ふ様なことを家へ書きかきしました。

「たれない」と思つてゐたのです。支那人は上ることを許されない（おとこ聞くとすぐ公使館（外人居留地）が近いから暴動などあつて鉄でやられたらそれまでと云ふ）階かきの頭領が一上つて御らんなさい。ナーニ外國人はかまふもんか。私も何時ものやうに案內します。居たどによくあの上で食堂を開く。」と話してくれた。それで上つて見る氣になりました。午前四時頃で閉まつてゐた。好奇心一杯で合しようとおがになかつたに相違ない。

上ると誰も人はゐなかつた。シンとして、寺の境內のやうにずうと石の道が向ふへ走り、突端につき當り、又後ろへもずつと一直線に走つてゐる。その先きに正陽門が見える。

私は「漫遊」のハガキをかいてから暫く銃丸によりかゝつてボンヤリ下を見おろし、汽車と東交民巷の町を見ました。その灰くすんだ屋並みの中に白壁の松尾屋と云ふ日本旅館がわかつた。かねてそれを知つてゐたので。――それからどつち（東か西か）へ行かうかに迷ひましたが、自づとそつちが向いてゐたので、東へ歩いた。

町は私が城壁上を歩き出すと、見えなくなつた。銃丸に邪を遮ぎられて。――私はそれには不服なので、內城よりのふちに添ふて見ました。町一帶に綠樹が多く、綠樹とひくい屋並みの向ふに、宮殿の黃瓦、四角な北京飯店（ペイキンホテル）、今出來つゝあるロックフエラーの高層病院が見える。日本同仁醫院もわかる。

「僕はあの路にゐるのか――。」

又城壁とすぐ近くの向ひ合ひには樹木の中に開けひろげた白い外人の家の窓々が見える。さも住みよさそう。

然し氣が付いて氣になつた。何でも北京城壁の古い石道りの間には、カッと云ふ雜草がゐる。支那人が足でしらへをかた

めるのらその爲めだとか人に[illegible]、それに[illegible]
きれてはかたはない。成る可くまん中の安心なところを、行くことにしました。

　はるか向ふから西洋婦人が來た。何れ一本道故とつかでぶつかる。餘りに人がゐなすぎる、——あいさつをしたければ爲からうと思つた。がその人はツカツカ歩いてギロリとこつちをにらんですれちがつて了つた。中老人でした、小さな犬がついて歩いてゐた。

　チラリと右手銃丸と茂る灌木越しに外城天壇の紫屋根が輝つて見えたところがあつた。伏せた飾ゴマのやうに。それ等は遠くから見るとさすが面白い。

　内城の方をふり返つて見ると北海（ペイハイ）のラマ塔や、景山、鼓樓、鐘樓・遠くの角櫓等がポツポツ町の海に浮いて、見えます。のどかな日和の日だ。

　又外城の方へ出張つた小廣い個所があつてそこにベンチを据へ、それだけ一段高く、後ろには木が茂り、ベンチにはソト通りかゝつたのに米國士官が女と並んで腰かけ、しきりにしやべつてゐたが僕の足音で默つて了つた。士官ははすに腰かけ、長い細い足を一方コムパスの樣に尖らしてのばしてゐた。女はよく見なかつたが白つぽかつた。活動の場面のやうでした。

[illegible]、白い[illegible]やうた[illegible]にて、いきなり三[illegible]門の[illegible]した。

　そこですつかりたんのうして、城壁を下りた。

「今の北京城は明の永樂十九年（一四一七年）六月より起し、同十八年（一六〇年）十二月竣成したる大工事なり。愛親覺羅氏滿洲より起り明を滅して支那に君臨するや、明朝の舊によりて此に都し爾來現代に及べり。

「内城は周圍四十華里……周圍に九門あり。宮城の南方正陽門を中央とし左に崇文門（哈達門）、云々、四隅には各一の角樓を有す。内城壁の南北二面は各一千二百三十餘丈、東面は千七百八十餘丈、西面千五百六十餘丈ありて稍不正の長方形をなせり。城壁には一萬一千三十八の銃丸、二千百〇八の砲眼を開き、城壁の周圍には護城河ありて金城鐵壁の稱ありしも、世運は永く太平の夢を結ぶを許さず、外國との交通開けてより國勢頓に一變し、咸豐十年（一八六〇年）及光緒二十六年（一九〇〇年）に於て、さしもの北京城も容易く外國兵の蹂躙に委するの已むなきに至れり。

「試みに城壁上に蹈登せば、崇文門の西百步に獨逸の砲臺、正陽門の東五十步に米國の砲臺あり。義和團事變に際して築造せ

しものにして、宮城は殆んど該国商業の中心に介在するの観あり。(脇川氏、北京名所案内)」

私たちは崇文門に近く、城壁上で最後に出逢つた白色の杭は、元は何処の国旗でした。――米国のそれは宮城正面の城壁に記念なくて殊勲柱を立て、たしか何か碑ものであつた。

「公使館所在地域は独立たる各国共同居留地にして條約上支那人は一切居住するを得ざるのみならず、軍隊の駐屯所は何等外国の管理に信頼の委任する所にして戦敗の紀念は存するところたる砲臺を築き所謂八角台をなし、北城を深くし壁を厚くし西南は城壁に托して宮城を睥睨せり。一條の濠路を隔てゝ壮麗宏壮なる使館建物と雄大壮麗なる宮城と相対峙せるは、眞に是れ如何の配合にして世界第一の奇観と云ふ可し。」

強ち名所案内記者の誇張ばかりではないと思ふ。それにしても、何と兵士の多い地であらう。背灰色の服装(日本の式に似てゐる)の支那兵に加へてカーキ色の小粒でヒリリとした日本兵、逆のめりの白ヘルメットを被つた一面に弾薬入れを吊り、二列の金ボタンをきつちりとしめ上げ、白袋になり色のゲートルをはいたしやれたベルギー兵、たしか折り襟だつたと思ふフランス兵。トム、ムアーの様な英国兵。「反非的」のツパある羅紗帽を被つてゐる。

崇文門から見はらすと、そこから東單牌樓へかけての間に広大な南面の原のやうな、空地がある。大ていの日そこで各国兵が訓練してゐます。フランス兵はケースにクラリオネット、大太鼓、それから喇叭二種をそろへ――これ等がキラキラ輝く――中々複雑な行進曲で、やつて来る。朝は晴れ晴れとして聞けます。アロン、ザンファンも聞いたことがあります。米国はどんなか忘れたが、――彼等はいゝ位置に席を占めていつもボールやクリケットに夢中だ。見物の兵が鐵丸に一杯食はけ、やんやと喝采してゐました。――支那は日本と曲が同じで一寸讃いおしまいを支那式に節声に丸めて、面白い。日本は何処らか理屈をかみ切るやうな「勇壮」な喇叭をならす。

よく日本兵は何かやつてゐるのをこつちで支那兵がかたまつてボンヤリ眺めてゐるのを見ました。支那兵は、帽子があとのめりで既にヌルヌルかぶつてあり、間抜けたたよりない感じがする。或る者は帽子を背中にしてそこの中にしまひ、無理に帰休兵のやうにしてゐます。日本兵はイヤにカチカチと訓練をする。何れもよその国のピンとした所を一寸真似てゐたと思ふ。

その練兵場のそばを城隊を巡と並んで支那の時を知らせに通つたのを見た。何と不思議な時計であらう。遠くからで模様は一々に

はおぼへないが、何しろチャルメラかドラが鉄くメラメラ鳴つてゐた。赤、青、黄、何か派手なコツや旗印しが見えた。音楽け賑嘆を喚くかのやうにきこへた。「綿々」と云ふ感じです。

然し各城門へ行つて見ると、支那兵はすごく、強く見えた。今は徐樹錚が逃げ、猶さうでせう。――城門わきに板を下げてそれへ日本公使館潜入の「反徒」を一人々々寫眞で針付けに並べ、黒々と一々に名を書き、若しやこの一人でも通りはしまいか、番をしてゐる。日夜。付け働たつたと思ふ。一時は通る自働車馬車を一々誰何して、止め、中をのぞいた所である。それ等の番兵の中には、つい此の間までは徐樹錚達のボーイをしてゐた者もゐると云ふ。主に奉天張作霖の兵らしい。つまり「関東武者」です。

公使館潜入の仲間については、例へば段芝貴がぜい澤でいつも燕巣などを食ひつけ、それ故困つてゐるとか、誰が阿片吸飲癖で嗜く止めると病氣になる。それで小量を特に許したとか、彼等の第一班、第二班迄が日本公使館近くへ住居をはじめた。誰は斯々して公使館へはいつた。扶桑館に泊つた一人は或る日ドヤドヤ政府の者に踏み込まれて、口を大きく開き、丁度病氣でやつれてゐたが引きずられる様にして一言も云はずに拉し去られたとか。――その傳説はいろいろ、大變です。

私はこの事件故に初めて久しく宮殿が開かず、見られずにゐた。

・　・　・　・　・

再び地圖に依つて、内城の中央所りを見ることにします。その通りは北京の純北京らしき血管となり、城壁の南から北まで異色を以つて一貫してゐる。

先づ前門から正陽門を通つて群が街を踏み、中華門をくゞつて天安門に至る。――然し地圖ではから來られるが本當だとか、ら直様には通れません。昔の清朝皇帝か、恐らく大總統か彼等が仰ぎ敬ふ米國の何かしらでなければ。が假りに地圖を便宜に進むとして、――

それにせよ、何と北京（に限らず一體支那）は要心堅固に出來てゐるだらう。一つ要所の門をしめられると、城内へは出るも入るも即座にかなはなくなる。先づ大體切りに内城外城がさうで、中の宮殿がさうで、猶且一々の家が（その由緒よきものは）又さう出來てゐる。今でも人が家を訪れる時、禮儀正しくするには、先づわざとよし開けてあつても門を閉めて、静かに二三回扉の環カンを鳴らすと云ふ。曾て（近い話かも知れぬ。徐樹錚の亂の）さうして「北京」をしめ、西直門をもかたく閉した時に、朝そこでは或る時を限つて一寸扉を開け、その折りをはかつて城外からは八百屋が來る、内城の者がきはどくそれの買入

れたする。又は用に出てすぐに返る。人が門へ[illegible]倒して異様な異を呈したと聞きました。話はちがふが同じ號の時一齊に東屋が前を一杯群走したと云ふことは、如何にもその様が目に見えてものものしい。早く何所かしらうまい所へ逃げぬと、東屋は前後に只でコキ使はれる——

で、前門の開かぬ「天安門を女では通り越し一端門も過ぎ、午門へ來るとその次ぎに太和門が控へてゐる。も早や紫禁城の内部です。次ぎに太和殿がある。大理石階にて上り、石段正面には段なく、下から上まで登龍の高[illegible]彫となつてゐる。——この大理石側に[illegible]の階段が出來てゐます。話に聞くと、昔天子は此の上を踏んで上り、左右から兩側の侍[illegible]が支へたといふが、うそか本當か（[illegible]は深いからすべりにしない）如何にも支那式ではありませんか。

「皇居の壯大なるを知らずんば焉ぞ天子の尊きを知らんや」と昔から支那で云ふと名所案内のかき出しにかいてある。）

これから中和殿、保和殿とつゞき、[illegible]門ある一劃に至り、その和後が元の皇居となつてゐる。皇居の中には一段高く寶座の場所があり、ガランとして[illegible]がかいてあり立派な[illegible]がありました。出入口の方には[illegible]門[illegible]がゐました。私は十月二十九日にこの皇居の背面の段で、四十位いの[illegible]と並び、

先きの方を指差して、あすこに「北海（ペイハイ）」が見えるが彼處はあそこは先月見物した、此所は今日初めてだがテン、ハオ（大變いゝ）だとか、余りの[illegible]が退屈らしくこつちも何かしやべりたかつたので、話しをしました。彼は大變[illegible]に[illegible]を[illegible]つたやうに見えた。

武英殿見物の歸りにまはつたのです。滯在の中武英殿（古董美術品陳列）へ二度、文華殿（繪畫陳列）へ二度、行つて見た。と云ふのはそれだけ北京宮殿へはいつたわけです。兩殿は殿共に宮殿の内部にある。武英殿は太和殿の西、文華殿はその反對にあるのです。宮殿は右の東華門又は西華門から一般にはいる。

私は何時も[illegible]から[illegible]に行き（行けるらしい）[illegible]内部は[illegible]は[illegible]せん。何しろ[illegible]は古木道、大理石[illegible]ばかりで[illegible]に並んでゐるのです。その石階一コマ毎につくく[illegible]石[illegible]だけでも[illegible]は大したものである。殊に太和門外の[illegible]い場所には石だゝみの中に、次ぎ次ぎ[illegible]けて大理石の橋が五つ殊更に作つてあつた。その[illegible]たことも[illegible]い一[illegible]。

よく[illegible]か（[illegible]でさへ）わからないから一先ず[illegible]門へ出る。——もう一度宮殿[illegible]外へ[illegible]門を出ると、ところどころに小さなランプのとりつけてゐる宮殿外の[illegible]走るのを見ます。その[illegible]には東へ下りとまた、[illegible]並んで、[illegible]にしく小川町の[illegible]に[illegible]なつてゐます。一[illegible]發行[illegible]

店があつた。その家は大きく、詰まり屋根が四個區切りに割れて、區切り區切りの上部が古めたアーチ形となり、アーチに一々花模様浮彫りが漆喰で作つてあつた。その花が七様うまいので感心しました。誰が作るのか。名なき職人でせうか。

支那は装飾の國です。その天才を至るところに見る。今も不死の傳統として。北京にゐる人よ。多くの家の入口わきにある扉おさへの石の彫りやエンピー（家へはいる突き當りの壁）の模様を見よ。立派な装飾美術が忍ばれると思ふ。

何所か横町入口に黎元洪筆「陸軍大學校」か何かの文字を横に渡した針金細工の切りすかしがかけてあつた。その複雑に切りすかした線が空を透して見ゆる美しさ。

私は又行ければあれ等をよく見たい。

* * * * *

景山と云ふ人工の山が前皇居のまつすぐ裏に聳へてゐます。「其蒼翠滴らんとする明媚なる山態は城内何所よりも瞻仰するを得可し、突兀として」全く突兀として立つてゐる。上に五つの亭があります。紫又は黄色の屋根瓦で出來てゐる。

元の世祖が北京に都を定めた時、戦時を豫想して石炭の山をこしらへ、萬歳山（ワンスイシャン）とした。之れが此の山の起りと云ふ。ところが後明末李自成が居庸關からやつて來て北京を犯した。帝崇禎[illegible]の景山へやつて見ると[illegible]してゐる。「我只[illegible]しむるのみ」と嘆き、[illegible]亭を[illegible]ことが出來なかつたと云ふことである。然し宮殿へ返つて、太子を逃し、劍を抜いて長平公主を斬り、皇后を自殺させ、妃嬪何人かを斬殺した。その翌朝、内城が李の爲めに陥落した。帝は鐘を鳴らして百官を集めたが集まる者は一人もなかつた。（何れも李自成へ走つた。然し李は又それ等の者を斬り殺したと書いてあつた。）[illegible]て、帝は又景山に登り、遺詔を襟に書き、亭の軒に縊死した。

私は九月三日、寒い日でしたが朝早く西直門へ車行して景山の下を通り、亭を見ました。歴史が忍ばれて異様の感を抱かずにはゐられぬ。帝の無残な最後は恐らくレオナルドの素描した「バンディ＝刑死圖」の如く、あの軒の何所かに見えたらう。

八月三十日には此の山を又側面の北海、ラマ塔上から望みました。人工の小さゝはあるが、廣い四邊に山なき眺めの中に突兀とそれが出てゐて、異観です。

元の世祖は[illegible]へて北京を定めたと思ふ。北海は更に中海、南海とつゞき、宮殿内皇居の西にあつて、總稱太液池と云はれる。「夏時は蓮華紅白の色を爭ひ、荷香苑に滿ちて暑に惱める貴妃嬪御此に凉を納れ、冬時は八旗の武夫集りて氷上馬を走せ、騎射

を試みたときある。今は古い北海ラマ塔が消防兵の見張り番となり、内部、前僻にはただ縦板、[illegible]がゐるらしい。「四百餘州の[illegible]中より出づ」と云ふ風のかき方をされます。

私の見た北海は西太后が[illegible]いとかで萬壽山へ行かず、然しな萬壽山が非常に好きである。それで成るべく萬壽山に似せて、此所を手入れしたとか云ふ話があつた。乾隆た離宮で今は何にもならず、荒れはてゝ紙障子などボロボロに破れてゐる。

昨日の[illegible]公布が二月か三月かくれてゐたと云ふ。

見て池に[illegible]から水を引いて、世界[illegible]一の場合、飲料水に作つたのだ相です。如何にも、北京には此の他に水が少ない。

景山から[illegible]北に地安門門前をまつすぐ北行すると地安門へ出て來る。それで宮城區域は終つて、一直線の大街があり、大街の外れに、鐘樓鼓樓が堂々ときつ立つてゐます。

「毎夜午後八時と午前四時に百〇八聲を打ちて時刻を知らしめ、市街夜番の指揮をなしつゝあり。毎夜二時間毎に市街に木板を叩きて夜廻りするは即ち步兵統領の技勇兵にして、午後八時鼓樓の百〇八聲に夜警の準備々なし、午後九時鐘樓の鐘百〇八聲を撞き終るや技勇兵は滿城の大街小巷に現はれ、一齊に夜警巡邏をなす。」

その百〇八聲を打つところはつい昇りたくなくて[illegible]ひました。鼓樓へは上つた。

「樓下[illegible]からそのつゞきを一まはり一週した。その時下に支那兵隊が日本の喇叭より和らかき調に一町を[illegible]の方からまつすぐに行進し來るのを見た。[illegible]となつて[illegible]する盛があつたよ。」（エハガキに添へ、八、三一信）

わざとこんなかき方がしてある。然し一列の[illegible]のやうに百尺ばかり下を遠くから兵士の町をやつて來るのは、今も目にのこる。外人夫婦がゐてコダックを向けてゐた。

北京内城の中央の通りはそれから間もなく、[illegible]の北の[illegible]り一直線へ直角にぶつかる。

西四門通りの左右には宣武門通り、崇文門通りが縦に一端から一端へ、正しい平行線で南北貫通してゐる。これが大街で、縦の[illegible]が横となり、東西に[illegible]して内[illegible]を[illegible]めてゐる。私は崇文門通りの方は（その中途に[illegible]にゐたから）略知つてゐるが、宣武門通りの方に殆んど行りません。中央に宮城一割の[illegible]があつて、[illegible]と[illegible]られてゐました。

十二

九月三日、朝五時に起きて、私は白夏服で出かけたが秋冷を感じた、——市街の西端西直門まで行きました。それから西直門車站で車夫をのりかへ、その後一日その車夫に乗つてゐたが丈高い若い男、私の昔の或る友達によく似てゐた。その男に引かれて近郊西山の山麓にある萬壽山まで行きました。

八時になるかならないかであらう。日がうらゝかに輝き、小鳥のやうな氣持になる。まだ早いので入山者少なく、或る切符賣場はしまつてゐました。滑快な氣分で池添ひの石敷歩道——又は廻廊——を歩いた。つい池中の向ふ正面に橋下を半圓のアーチつゞきにした石橋が見えます。それは多分池中の浮島につゞき、浮島には木が生へて何か建物がポツンとある。上野不忍のほんもの〻様です。くつたくなく氣持がい〻。中學遠足の朝のやうです。いざ友來れ野に出で〻、の歌の感じがする。

廻廊には日がはすに當り、緑樹が反射して初々しく感じる。朱塗りの柱がずつとつゞいてゐます。如何にも朝の爽快な感がある。元氣な少年と交るやう。

或る時妙な男がついて來ました。支那服のそでに兩手をつ〻込み、背をかゞめてゐる。太田氏が、「ついて來い、金はやらない」と云ひました。彼はそれで逃つてしまつた。園内案内者の由。

途中大理石造の船形があつた。昔貴人がそこで休んだものと思はれる。つまり御座船形で二階になり、二階には椅子テーブルをおいてコーヒー店となつてゐました。私はその船のトモの所にしばらく立つて水中を見てゐた。小さなメダカの様な魚が群泳してゐました。

ところがそれからあとで妙に道を迷ひ、小牌樓ある石橋を渡ると行きどまりになる。渡らずに木立の下を水流に添ふてまはると納屋の裏手へ出て了ふ。その邊ずつととりかこむ白亜の壁には、角形、丸形、菱形等種々の形ちの穴があき、ガラスがはめてあつた。蝙蝠の形ちもありました。——がそれよりもどう行つていゝか、道が分らない。

一人、男が道を掃いてゐました。彼に道を聴いた。彼は帚をすて〻先達してくれたが、次第に坂道をのぼり山中の變な石橋へか〻つて、左折し、つかつか何か人家の中へ引き入れました。

「おい、こんなところへ來ていゝのか。」

然し傳はりつこない。結局異樣な水邊の倉庫へ出て、その戸を鍵でこじ開け、中へはいれといゝました。

何とつまらぬ話だ。そこには昔の御座船が半分沈没して、倉

門の甘いよどんだ水の中に将棋の駒の如く、つないであるのです。更に面倒なしこにれを見た。実に面白かつたが、つまらぬ話だ。

それに三十女ばかりとられました。

「ハハハハハ。何のことだ。」

これから又役に案内されて、頤和園山上に出で、山上の亭で一休みしてから、萬壽山を出ました。山から玉泉山の塔を見ました。すつかり暗くなつた。我々がそこを出る頃にはポツポツ支那紳士など入園してゐました。その一人は可愛いゝ黒装の男の子を連れてゐた。

頤和園向ふのドブ川の対岸で手をふり、我々を待つてゐる。彼等に手の字で合図をした丈。西直門から帰ふ時に、腹を叩いて、ここが西門だから何とかしてくれと云つてゐた。胡似せずに早くから仕事に出たらしい。

それ十時近くまはつてゐたことでせう。それから道を[illegible]へ、さう云ふ所へ車を向ひました。遠い田舎道を。——それが今日、見物の当てないのです。香山山麓にあると云ふ。途中、那様所のやうな門のところで、車夫が一人一人通行税をとられた。

一時間ばかりで着したと思ふ。

「(北京の郊外よりエハガキに添へて)今日北京郊外(三十哩以上出たのでこの駅の小さいのを見た。野道一杯だつたが気がすんだ。(九月三日)」

碧雲寺より、(エハガキに添へて)

「之れは寺奥の大石塔寶座に至る途中木堂の内部だがつまらず。写真で想像すると裏切られる。ガラクタだ。

この地に有名な五百羅漢堂あり。劇場のやうになつてズラリと等身大の羅漢が五百、おいてある。その入口正面には羅漢の大将が舌を出し、手をふり、足をふんばつてヘラヘラ笑つてゐるやうに立つてゐる。実に気味が悪く、キタない。堂の中で、然し一概にこれで作にはどんなものかと注意する気になり、比較的に丁寧な奴を立ちどまつて見たが、(技術だけの泥い仕事也)、その間に連れとはなれて了つた。一瞬、たつた一人で羅漢群にとりかこまれ、ぞつとした。鬘に手を出してゐるのがあるかといつ、様をつかまれさうで、あわてゝ羅漢の並ぶ中を逃げ出した。まさ好奇心をそゝかすだらう。何しろ、全く支那でなければない大山師の仕事である、驚いた。その羅漢の顔が又それぞれに大変だ。(続)。こんなだ。河野が見たら笑つてぶつたおれ、死にたへるだらう。あきれた。(九月三日)」

寺は全くのまゝ香山の麓にポツ然と立ち、次第に段々上になつて奥の段上には全大理石二層の寶塔が雄へ頂上に古いビール状さ

の様なギザギザ尖塔が五つ立つてゐる。

寶座は各面に緻密な浮彫りを施してあるが、カタイ、冷たいものだ。石の感がぬけない。

寺それ自身は、――その環境と合せて――異觀あり、面白いものだが、藝術品にはなつてゐません。（北京の名所、恐くさうです。）好奇心と見物慾はつまらぬ石一つにも充分に起す。

もし私が美術作家でなかつたら、私は氣樂に感心して歸つたでせうが。――批判心と云ふものは、恐らく人生をせまくする。鑑賞心は深くなるから、無形には自由で廣いわけです。

歸り、臥佛寺にまはり、ゆつくり車にのつて歸途につきました。臥佛寺では世にも醜體の釋迦涅槃像（二丈餘）を見、不快を感じて氣分を投げる氣になりました。案内僧の片こと英語をしやべる青年が氣に食はなかつたところもあつたが、行儀を惡くして、そこいらへ痰唾をペツペツ食ひちらしてやつた。涅槃の腰へも靴で乘つた。わざと。

あとでフテくされなつまらぬ氣がした。

かくて夕日の頃、北京へ返つた。一日車にのりづめで、車夫に愛情を感じ、菓子を一所に食ひ、歸りには麵をつき合つて腰かけて食べました。

西直門附近の云はゞ裸のれんででしたが、我々のはいるのが珍らしく、向ふ横町でも女がよりこつてしまりにはこかたし館一、子供が一杯店内に群れて來て、閉口した。

只その中に二人可愛いい奇麗な子がゐて――兄弟ですが――それだけはそばにゐても邪魔ツ氣でなかつた。すこし何かあらその子が私のすぐ前にゐた。一所に麵を食べるかと聞くと食べないと云ふ。太田氏に「兄弟か」の支那語を聞いて「兄弟か」と聞くとウンと答へる。みそつぱで、小さい方はおぼへませんが大きい方は十位ひ、白の汗ヂルを着てゐました。

別れに何かないか考へ、紙袋から色鉛筆を出して私も必要故短かく切り、紫と黄がいゝと云ふのでそれだけ二本を持たせてやりました。丁度祭なので天壇の屋根をかいてやつた。――お宮はまだ他にも澤山子供はゐて、みんな見て事件を知つてゐるのです。困つたと思つた。鉛筆は澤山ないし、子供は切りがなく、殊にたいてい汚ない、顔中をほこりにして鼻をドロドロたらしてゐる。變なうろんの眼でこつちを見てゐる。怪しんでゐる十五六のもゐる。どうも愛情が持ちにくい。それ故、氣になつたが、――あとで益々氣にかゝつたが――その場は目をつぶつて歸つて來ました。どうぞ鉛筆で喧嘩なぞ起つてくれぬとよいゝが。私と仲よくした兄弟は極く弱虫らしい。

同じく車夫に親愛を感じて了まつて、閉口した。次行れがこ

つちになつかしくして、今もそのしばだゝく目を思ひ出します。よく湯をくんでくれ、茶をかへてくれた。車上ではわざ／＼林檎か何かすつぱい果物を私に二つくれました。餘りうまくはなかつたが快く食つた。只かけながらよくへをするので、それがまとも故どうも感じはよくなかつた、が、仕様のない奴だと思ふ。さうするとつい耳や襟の汗など見て、感情がしんみり沈んで了ふ。

少し餘分に金をやつて別れた。

・　・　・　・　・

あとで十月九日に、はからず北京大柵欄（ターシャラ）の雑踏の中でその車夫にぱつたり出逢ひました。さもうれし相に、私を見附けて人込みを分け、寄つて來た。

私もうれしく思ひました。たしか河南行の必要品をいろ／＼買ひ入れに出歩いた日で、今日は車の上客になくともよく、いろ／＼荷はもう一杯に出來てゐた。

彼は既でに私がその車へのるものと決め、見張りの警官に叱られながら然しカチを人通りの片わきに仕舞に下して、へーへー御辭儀してゐる。私も何しろ久しぶりの舊知でなつかしく思ふ。否應なくその車にのつて、引き出しました。つい行く先をも云はぬ位ひ、自然に乘つた。

が買はまだのるには早い。まだ歸り途に是非寄るところが一つあるのです。ゴムや6Bその他を買はないと明日にも困る。——只うまい事にその家は歸りまでの途中に一軒アメリカの家があるのです。そこを通つて歸ればいゝ。

「交民巷（チャオミンシャン）」

と行先を云つて、氣分よく前門街からゆられました。——どうしたのだらう、此の男は。西直門にゐたのが大柵欄へ來るのは大分遠い、が、誰か人をそこまでのせて、その道すがら俺を見付けたのだらう。こつちへ持ち場所を變つたわけでもあるまいか。

「も一然し此の頃は此の邊にゐるのなら、馬場前を除いて、どうせ大ていの日車の用はあるのだから成るべく此の男に乘つてやりたいものだ。」

さう思つた。

その中彼はすらすら道のいい交民巷へ引き込んだ。そして TIENTSIN PRESS 云々のアメリカ商店の前へかゝりました。

「[illegible]好了（ハオラ）」

いくら？ときかうと思つたが聞くまでもないと思つた。之れは仲よしである。時によると往時、さあ十錢なら高い筈を聞きれる位ひ高い賃銀の道のりだが、今日は測らず再會したのだか

ら、特別に二十錢やらうと思ひました。それで、二十錢玉を出して、黙つて彼れの手へのせてやつた。

ところがそれをとらない。

何とかたい正直な人だらう。之れでは過ぎると云ふのだらうと思つた。「貴君は特別の客だ。」私は彼れに深くなつかしまれてゐることを自分の同じ心理からおして、感じました。――兎に角それだけはまた親儀だ。又あとをのつたらあとを渡す。

「好、好」

いいからとつておけ、のつもりで私は云つたが、それから驚いた。段々に驚いて誇張なくしまひには怖くなつたが、彼れはそれでは「過ぎる」のではなく、足りないのです。(貴君は特別の客だ。)鼻をスースー云はせ眉をよせて光る銀貨の載つた手をこつちへ差し出し、ふりながら、しきりに何か云つた。度々壊了々々と云つて下を指さしたが私はもしや車が壊れたのかと思ひました。然しさうではなく、彼は右足に白く繃帯してゐる、それを「けがをしてゐる」のつもりで私に訴へたのだと思ふ。次第にけがをしてゐるから察してくれ、もつとくれと云ふのだとわかつた。強制的に感じた。

私はその状を見てけがよりも彼の心理が、無氣味になつた。

彼は銀貨をふりながら頻に僕のそばへ寄り添ふて來る。眉根は鼻へ引き寄せて目をしばだゝき、僕を見てゐる。手をつきつける。

僕は情けない氣になつて又十錢、手へのせてやつた。

然し依然として彼はゴソゴソ訴へ、手を出してふり、眉根をよせてゐる。イヤニこつちへ寄つて來る。

どうすればいゝのか。

私は金よりも氣味が惡く、急いでアメリカ商店へはいらうと思ひ、戸に手をかけた。が、運惡くその日は休みか、かたく閉まつて開かない。――當惑した。すた〳〵交民巷の角の方へ目的なく歩いた。車夫は車を引いてその私のあとへがらがらついて來る。つまりもう一度私々のせる氣か、まだ金が思ふよりも足りないのか。私の顔を見て、ついこつちがチラと彼の視線とカチ合ふと唇を動かし、眉根をよせてゐる。

あゝ、世にも異様な情。

それに私には全く口が何と云つていゝか、きけないのです。

――出來ればどうかして此の男をこれで返したい。もう別れたい。怖い。

やつと、

「後不用的歸去」

さう言葉が口の中で出來て、それを切なく彼に近づいてつぶ

やき、賃銀があといくらだつたかボロボロ渡して、更に角私は川野日に MOTOR CAR DRIVE SLOWLY の立札ある角を左へどんどん歩きました。ふり向かずに逃げました。追はれる気がした。

彼はその角からやつと元来た道へ引返したやうだ。暫くから、その車が町中でぐるりとまはるのを見た。

（大正九年十二月上旬）

目出度い記

田中貢太郎

一

目出度いから、其の日に因んで、『目出度い記』と云ふのを書くことにした。と、云ふと、読者には余計な事だと云ふかも知れないが、併し、一寸お断りして見ると、かうした天下の時世には多ければこそ、日本には目出度い事も目出たければ、シンフエンの譲も出来ない。晴れて天下の臣民なる、のだ、

話と云へば、土地柄、芸者の幽光等に限つてできる馬鹿者の事を云ひたくなるが、直ぐそれを云つては、あいつ馬鹿だから他の事は云へないと来る。で、土地柄と云ふ所から、南洋樹とやつて、失楽園のミルトンを思ひ出すとやら。併しから云ふ門したもの、奇想に関係の事に並べつけたいから、精しい事は分らないが、何かで見たことのある英国の有名のアダムにお附合して、小柄な、色の白い男が目録で見かけになつて、長く目に残れた。余計な事はいろいろすこしく上にあかしてみる。

彼は何人か一寸分らない、クロムエルの拉丁秘書として、両派に対する関係の消息もその手で書き、その不快に送つては、スエデンとの条約、同盟協約とやらで、問題があつたが、チヤールス一世の依頼を受けた仏人サルメーシアスが、故

王の政策を辯護し、合せて王權の神權を論ずるために、デフエンシオ、レギスと云ふ政論を發表したので、彼は共和政府を代表して、デフエンシオ、プロ、ポプロ、アングリカノと云ふのを發表して爭ひ、これがために終に失明したと云はれてゐるが、私はその病性を詮索する眼を持たない。その盲詩人は、一千六百六十年、チヤールス二世が王位に即いて、王黨の世になると共に、僅にその迫害を免れて、一千六百六十五年、即ち五十七歳の時に失樂園十二卷を完成した。

盲詩人の亡くなつたのは、六十六の歳であつた。人間としても不幸であつた彼は、家庭の人としても不幸であつた。ソクラテス以來、學者思想家に纏綿する事になつてゐる、惡妻が、彼の家庭に二人までは入つて來た。彼が三十七歳の時に初めて娶つたメリーと云ふのは、同棲して一ケ月ばかりすると、ミルトンの粗食と勤勉とに閉口して、親里へ逃げて行つて、歸つて來ない。ミルトンが怒つて、離婚論と云ふやうな文章を書いて、彼の女を離緣しようとしたので、彼の女は恐れて歸つて來て、再び同棲することになり、その間に、アン、メリー、デボラの三人の女の子を生んだが、夫婦の間は、何時も氷のやうに冷かつた。その惡妻が旨く死んでくれたので、カザリンと云ふ女を後妻にしたが、これは善良な女で、ミルトンも喜んでゐたが、

これは一年足らずで死んでしまつた。その時に、ミルトンはまだ眼に故障のない、景氣のいゝ時であつたが、それから失明と失意の季には入つたので、家政整理の必要上、三番目の妻を迎へたが、それは箸にも棒にもかゝらない惡妻で、三人の繼子をいぢめるし、ミルトンが呼吸を引きとらうとすると、その繼子を騙まして有金を懷に入れた。それのみでない、その三人の子と云ふのも、揃ひも揃つた不良少女で、親爺の大切な書物を盜み出して賣り拂つたものだ。

由來、ミルトンに限らず、親爺が堅くるしい倫理道德の、お化にでも憑かれてゐるやうな事を云つてゐる家の子供に、碌な奴のあつた例がない。當代の漢學者の名家で、侍講であつた某の伜などは、親爺にピストルを指しつけると聞いてゐる。吾輩が昔ゐた麹町の下宿屋の親爺は、陸軍省の屬であつたが、毎晩膳先の肴に、その時分小學校に行つてゐた男の子を捕まへて、『そこが、人間と獸の分れる所だ、』なんてやつてゐたが、その小供達はと云ふと、一番上の兄の方は、母親から『遊びに行つておいで、』なんどと云はれて、自分が會社から貰つて來て渡した月給の中から、小遣を貰ふと云ふやうな意氣地無し。妹は下宿人と結婚なんか云はれてゐる不良少女。その弟は、下宿人の着物を質に入れたり、それを受け出しに行つた母親を、その質

家の路次に待たして置いて、その金を横取して逃げると云ふ不了簡の奴であつた。

二

市内電車ならば、大塚行に乗つて、清水谷停留場か、高等師範前かで下車して、左へ左へと谷をおりると、茗渓学校前の三叉路に出る。その高等師範校――と云つては何谷の在学生に叱られるから、教育大学と云はふ。その「教大」と向き合つた崖地の上にあるのが、曲亭馬琴の翁の眠つてござる茗荷谷の深光寺だ。

馬琴もこの大作、八犬伝を書いてゐる内に、右の眼から先に悪くなつて、これが完結しないで失明してしまつた。彼の眼は、虹彩炎であつたらしい。その病状を知るために、彼の日記を引いて見る。

『天保五年二月十七日。予今朝より右の眼中不例、少々痛有之、右眼一向に見えず候間、宗伯に申付眼中黒目ニ今日ニ洗薬用ゝ之、今日四時、如例一同就枕。』

『天保五年二月十二日、予夜中投下剤服用故、左の眼も少しいたみ、目もはつきり無く、依之今後夜分は休業保養すべく、四時頃よりいたみ去る。』

同外刷中には、先々（天保八年）の秋の時候より、何んとなく左眼も亦弱むやうなりしに、夏に至りてはいよいよ其甚るを覚えしかど、尚悟らず、こは眼鏡の曇りたる故ならめと、思ひて、俗に水玉と唱ふ水晶製の眼鏡の価貴きを購はで、此彼とかく購求めて、掛替掛替凌ぐものから、己亥（天保十年）の秋に至りては、いよいよかすみて、病眼なるを知りながら、本伝（八犬伝）未だ大団円に至らねば、書肆の需々辞を得せず、猶推して綴るものこの外にもあり。天保十年から、もう余程眼が不自由であつたらしい。もうすこし日記を引いてみる。

『天保十年三月十二日。予眼とかくかすみ、且朝々めやに出候間、今日より洗薬三番湯用之。』

『天保十一年正月十二日。○精丸お路一人に丸し候に付、予今朝より多く丸し、夜に入四時頃お路と予両人にし皆丸し畢。予眼気いよいよ衰へ細字見えず、八犬伝九輯三十七の巻の末枚下書本校訂○は更に見えざる故に、明日お路によませ聞んと為に丸薬手伝ひ日を暮し畢。』

『天保十一年五月十二日。八犬伝九輯四十二の口六行六丁是を綴る、今日眼気宜しからずさぐり書也。』

『天保十一年九月十八日。八犬伝九輯四十四の稿本今日より是を初め、六行六丁是を稿す、此節書に見えかね、只手かげんのみにて是を書く。』

この日記も手探りに書いたことは勿論である。回外剰筆には、『十一月に至りては宛雲霧の中に在如く、又朧月夜に立に似て、一字も寫すこと得ならずなりぬ。只筆硯不自由のみならず、書冊を見ても楚と見えず、僅に晝夜を辨じ東西を知るのみ、』と、云つてゐる。そして、傲岸不遜、痩我慢の彼も、仕方なく、嫁のお路に口授筆記をやらした。天保十二年正月六日の日記には、『八犬傳九輯四十六の卷口お路に口授致字を教て下書をなさしむ。八つ半時より夕方迄也、三丁出來。』

と云つてゐる。なにしろ天保九年の春から悪くなつて、十一年の春には全く見えなくなり、それ以後は、著述はもとより、日記、雜記、書簡に至るまで、皆お路が代筆したが、回外剰筆には、このお路に代筆さした時の苦心が出てゐる。『一字毎に字を教へ、一句毎に假名使を諭るに、婦人は普通の俗字だも知るは稀にて、漢字雅言を知らず、假名使てにをはだにも辨へず、偏傍すらこころ得ざるに、只言語をのみもて教えて寫する吾苦心はいふべうもあらず、況て教を承て寫す者は夢路を辿る心地して、困じて果はうち泣くめり、』

この時、馬琴は七十であつた。彼は天保六年に我が子の宗伯を喪つたので、一方我が儘者の悪妻に惱まされながら、非常の節儉力行をして、宗伯の子の太郎の爲めに御家人株を買つて、安穩を作つてやるなど、老作者が一家のために苦闘した跡には同情に値するものがある。

馬琴の亡くなつたのは、嘉永元年十月十二日で、年齢に八十二歳。天保十二年の二月に佛になつた悪妻お百の後を追うて深光寺の墓畔に眠るやうになつた。饗庭篁村翁によると、馬琴は、太田南畝の蜀山人が創めた狂詩と、四文錢が新鑄になつた明和四年に、世に出たものである。呱々の聲をあげた所は、深川浮心寺門前。最初彼に與へた文學的影響としては、父の運兵衛と、長兄の左馬太郎の二人がやつた俳諧であるらしい。馬琴の云ふ所によると、彼が年少の頃、父の知人で、當時才人の第一人者建部綾足が、俳席へ行く路で、浮心寺前の彼の家へ立ち寄つたとのことであるが、それも、彼を刺激した大なる影響の一つであらう。

今時の事務員のやうに、彼方此所と主取をして、僅な禄に有り付いてゐる者を父親に持つた馬琴は、もう十二三から口を減らす爲めに、彼方此方と屋敷奉公に出され、十六歳には、神田小川町に住んでゐた御殿醫山本宗洪の許へ塾生にやられて、其所では頭を剃つて坊主となり、茯苓や肉桂を藥研でおろしてゐたが、それも勤まらず、旦那寺の深光寺へ行つて、和尚に逢つて、僧になりたいと云ひ出したが、和尚からその不心得をさと

されて、それも思ふ通りになれず、こんどは手習師匠にならうとしたが、これも思ふやうになれる譯のものでない。母の姉の嫁入先へ預けられたり、彼方此方を迂路ついてゐる間に、寛政二年となつたが、その年、深川の永代寺で、京都七條の辨財天の開帳があつて、その境内に、仕掛狂言を興業する者があつて、その狂言綴が境内に流行した。戯作氣のあつた馬琴は、それから思ひ付いて、二十日ばかりかかつて、五十枚程の用紙に分冊と云ふ黄表紙物の原稿をこしらへて、銀座に居た山東京傳の許へと行つた。

當時は京傳の他に、通笑、喜三二、戀川春町、芝全交、唐來參和の六人が、天明の戯作者の六家撰と云はれて、名があつたから、出版書肆では、作者を求めて、手付金を持ち、稿料を出し、新作を依頼し、それが評判が好くて賣れたとなると、書肆の方では作者、畫工、板木師などを招待して、大に御馳走をしたものだ。これを當り振舞と云つて、それに招待せられるのが、作者として一大名譽とせられてゐた。一大名譽とせられてゐたと云ふものの、たかが一度の御馳走にすぎなかつた。大家の待遇がそれであつたから、大家ならぬ作者の待遇はおして知るべしだ。彼等が腦漿を絞つて作つた大傑作を出版しようとするには、入銀と云つて、出版の費用を、三分とか二分とか納めなければならなかつた。今も其所らあたりの書肆で、自費出版する先生達も、大家ならぬ待遇は、今も昔も變つて居ないと思へば、悲觀するにも當らない。そして、その當時の出版物と云ふのは、美濃紙一枚を二つ切りで、一冊の紙數は僅に五枚、それが上下二冊續なれば十枚、上中下三冊續なれば、十五枚と云ふ小冊子であつた。その相場はと云ふと、二冊續で二十八文、三冊續で四十八文、他に切付表紙の物は、七十二文と云ふことになつてゐた。稿料などの例になつても、それ行き渡る頃で、製本が間に合はなかつたと云ふ程の物でも、二千部の上を出たものはなかつた。

馬琴が京傳の所へ行つたのは、京傳の力で、入銀なしに出版して貰ひたいためであつた。京傳の弟の京山は、馬琴の事をこの前後の馬琴の消息を記して、「寛政の初、家兄の許へ酒樽一ツ持て初めて來り、門人になりたき由を云ふ。所を聞けば深川仲町の裏家に住むよしをいふ。家兄曰、戯墨の作は世を渡る家業ありて、旁に慰みにすべき物なり。今時鳴る作者皆然り。因て戯作に弟子として教ふべき事一つもなし。然ればおのれを初め、古今の戯作者一人も門人はなし、先づ弟子入は斷りなり、作しだい讀み給へ、又出來たる物あらば、閲るだけは見てあぐべしといひければ、度々來りて一句を問ひけり。」と云つてゐるが、瀧澤翁に云はせると、始終大名屋敷へ姿

になり、三十歳を過ぎた京傳の許へ、京山は京水作と云ふのもあらうなを拵へてやつた。京傳は自分の書いた話には、故意に馬琴をこなし付ける事があるとの事であるが、或はさうかも分らない。

馬琴は京傳の紹介で、芝神明前の和泉屋と云ふ書肆で、その黄表紙を出版して貰つたが、それは京傳門人大榮としてあつた。その出版物は四百部位賣れて、書肆へは損も掛けなかつたが、もともと和泉屋の方では、京傳の原稿が欲しかつたが、京傳のは日本橋通油町の蔦屋と云ふ書肆が獨占的に出版してゐて廻つて來ない。どうかして手に入れたいと思つてゐる矢先へ、京傳からの紹介付の原稿が來た。で、その顏を立てゝ置けば、原稿も貰へるだらうと云ふ、今も昔も變らない出版書肆の心理から割り出して出版した物で、その目的は京傳であつた。だから書肆の方では、損をしなかつたのが目つけ物位に考へて、馬琴の出版の方は、問題にしないので、馬琴は力を落して、京阪方面へ行つて、身の振方を付ける積りで、江戸を出て神奈川宿まで行つたが、旅費もすくない上に、寺々を取つてゐた倂が病氣で、その代りが入ると云ふから、そのまゝ其所へ足を留めてをる内に翌年の九月になつて、江戸に暴風雨があり、深川方面には海嘯があつた。馬琴は心配して江戸へ歸つて見ると、留守にしてあつた自分の家は、壁が落ち、疊が腐つて、横になる所もない。兄の家にあつたが、住居が狹いので其所へは行けず、京傳の事を思ひ出して訪ねて行つた。

京傳はその夏人情本を教訓本として出版したために、五十日の手鎖に處せられてゐたが、好い代作者が來たと思つたので、自分の家へ置いて、出版書肆の蔦屋重三郎にも相談して、實語教幼稚講釋、龍宮羶鉢木など云ふ双紙を馬琴に代作さして出した所が、案外に人氣に投じて、京傳の手鎖と一緒に、身上半減の闕所に處せられて泣いてゐた蔦屋も、それがために利益を得たので大悦び、馬琴を京傳の家から連れて來て、自分の家へ置いたが、その内に、九段中坂下の伊勢屋と云ふ下駄屋から養子にと望まれた。身分は輕くても武士の家に生れてゐる上に、學才の自負もあつた彼は、初めは承知しなかつたが、他に活計の目的も立たないので、到頭行く事になり、醜妻の會田氏と結婚した。會田氏のお百は、もと大洲加藤の奧向に仕へてゐたもので、最初の養子が病死した爲めに、馬琴をその後釜へ直したものであつた。馬琴はその時が二十七歲、女は三つ姉の三十であつた。

馬琴の著作生活は、それから初まつた。その頃から出版書肆の方で作者に對して原稿料の潤筆料を拂ふやうになつて來た。この風は馬琴が始めた形になつてゐる。その馬琴の原稿料にと

云ふと、八犬傳一輯五冊の潤筆料が金二十五兩であつた。人の顔を見れば原稿料のことばかり云つてゐる先生達に、これを四百字一枚の原稿料に直して貰ひたいものだ。馬琴の著述は生涯を通じて四百餘部二千餘巻で、彼が本當に世間から巨匠を以て目さるゝやうになつたのは、年四十即ち文化三年に弓張月を出した頃からであつた。この要敬すべき文豪は、その名聲の裡に、不幸な家庭の材料となつて、のんびりした閑日月の詩趣を味はふやうなことは、夢にもなかつた。馬琴の家の不幸の中でも、その子の宗伯を亡くした事は、不幸中の不幸であつたに違ひない。それがために家の内は寂寞として、何時も時雨の降らうとしてゐる空のやうであつた。さうした中で、お百は嫉妬を起して、氣の盡た老作者を苦しめた。天保九年四月十日の日記に、

一昨夕に入、お百女子に對して怨言をのべ、捨身すべしなど云。平生にこれを察して、七年以來吾家治らざるは、邪見苦不徳の致す所、人を怨むるによしなし、夫婦七十餘歳に至れば餘命幾何かあるべき、無益の怒りに心を労する事なかれと、萬事我不徳にして致す所を以教諭す。

とある所を見ると、その實際が想像せられる。天保九年五月十六日には、

『有内亂にて今日も著述休筆諸事廢業也、事皆吾不徳の致す所人を怨るの心なし、その罪吾一人にあり、おそるべし、つゝしむべし。』

嫉妬の對照の話であつたかは、云ふまでもないが、七十を過ぎて、もう半佛になつてゐて、死ぬるの生るのと騒ぐお百婆さんの顔が見たかつた。

深光寺の本堂の前にある馬琴の墓石は、もと「拓太」を見下す高い所にあつたが、この十年位以前に其所へ直したものである。それは、寺の和尚さんがやつたことか、今に仲坂下にゐる馬琴の子孫のしたことか、それとも、文士などと云ふおせつかいな者のしたことか、それは分らないが、なるだけなら、最初の所へ置いて貰ひたかつた。

深光寺には馬琴の墓ばかりでなしに、瀧澤一家の墓があり、又その當時馬琴が他から持つて來た先祖の墓もあるが、晩年馬琴の家に種々の不幸が起ると、馬琴はそれを墓の祟りとして、深光寺の住職に唆されたためだ、と悪口を云つてゐるが、或はその住職が上手者で、馬琴を口車に乘せて、他の寺にあつたのを持つて來らした位は、事實かも知れない。その住職で思ひ出したが、今の住職も手腕家と見えて、最近地所のない崖へ、無理に石を高く築きあげて、其所に大きな貸家を建てゐるが、野暮

の老婆心からだと、その地所の持ち方が無理であるから、若僧谷に天變地異の起つた際は、イの一番に潰れはしないかと思はれて、心配で仕方がない。

家の事を云へば、その寺の前の三叉路を小日向臺の方へ行つてゐると、路の左側に三階か四階かの望樓のやうな奇怪な建物があつて、その上層には、硝子入の小窓が眼のやうに四方に付いてゐる。その小窓から夏の夜々、サーチライトのやうな光が落ちて來て、闇がりで湯浴をしたり、縁側で涼を取つてゐたりした若い女を驚したので、附近から苦情が出て禁じられたと云ふものがある。私の家は崖い工合で、その怪塔も見えたければ、そのサーチライトの光も來ないが、來たとて根が佛のやうな逸民にはよう怒らない。

三

『左の眼に故障あれば、氣が向けば、お茶の水の病院に行き、向かざれば、二階の火鉢に倚り、ほうさん盛りたる丼やうの陶器をかけて、眼に掩法を施す。文債ある雜誌記者來れば、ほうさんしめしたるガーゼにて、やたらに眼を押さへて見す。他の債務者來るもその手を用ふ。眼病も亦捨てたるものにあらず。』と、云ふと、甚だ横着に聞えるが、その實、この逸民は何時

も小心翼々として、世間の思惑、友達の顔色を氣にし、病院へ行つては、醫者や看護婦の氣を兼ねて、眼藥を注して貰つた後で、看護婦に隅つこの椅子に突きやられ、躓いてよろよろとする拍子に、壁板に頭をしたたか打ちつけても『有難う』と、謹心に頭をさげてゐると云ふ有様、あゝこれ根が正直な男なればこそだ。

吾輩の眼病は、昨年二月の或夜、某所で、酒を飲んでゐて、マドロスパイプの灰を入れたが、酒の上の豪傑、洗もせずに揉みこんで了つたから、朝になつて見ると眼れあがつてをり、それが近因で發病し、いまだに癒らないでゐる。病名は虹彩炎。虹彩炎と云へば　吾輩の經驗では、充血の激しい時には、兩國の花火で見る昇龍のやうな光が、下瞼から左右に分れて、上瞼へ悠然とあがつて行く。その氣味惡い奇怪な氣持と云つたら、商賣柄傳説的夢幻的な感じに浸される。

その虹彩炎の眼に生ずる光で思ひ出した事がある。今年の夏、土佐の室戸岬へ行つて、岬の東南端、御空海その初め修業したと云ふ廣い大きな岩窟へは入つたが、空海が其所で修業して居ると、明星が飛んで來て口中へは入つた。空海がそれを海の方へ向つて吐き出すと、その光が海へ沈んで、今でも闇夜には、海の中で光つてゐるとか、又、その室戸の海には、惡龍がゐて

空中に何か光る物が出る時に、時々に姿をかくして出て來た。そこで空海上人が唱へて、是をにらみつけると、それは忽ち消えて逃げ去つたが、元來之は、海岸の砂石に落ちて、今に夜々光のやうな光を放つ、と云ふやうなことだが、其內道遙者が發行者の隨水、其光は電氣器械の中にあるが、さあそこでだ、この明星の光だの、硝子だの、それから電の光など云ふものが結び合して見なさるが好い。虹彩炎の症状が病的として來るぢやないか。

神奈川縣の登戸と云ふ所に、丸山教と云ふ富士教の一宗派がある。その教祖の事蹟を讀んで見ると、教祖が夢中に富士山へ登つて、八合目の岩室で祈つてゐると、天地開闢の大降雪の日でありながら、明闇一尺位ある日の光が、何時も岩室の口に射してゐた。これもどうやら虹彩炎的な匂がするぢやないか。

宗教の天才と虹彩炎、私は時々こんな事を考へる。ユダヤの野をほうついてゐた若い奇術師は、この天才特有な虹彩炎の眼で、時々種々の物を見たではないか。その奇術師に限らずその一行中には、虹彩炎家が多かつたらしい。その後になつて中世の歐洲に出來た虹彩炎家は、何時も空中に十字架を見、日本の海上に生活する虹彩炎家は、空中に不動の御姿を見た。

眼い形で思ひ出したが、早く蕃界の生蕃地を探險した一外國人。野蕃人の眼を興奮さすのを知つてゐるから、蕃人の隱れてゐさうな山の曲などへ行くと、必ず立ち止つて片方の義眼を摘んで引出し、遠くの方にも見えるやうに頭の上あたりで、ハンカチで拭つて、それを復たその眼窩に收めて、それで、四邊をギロギロとやつたので、首狩に出て人の來るのを待つてゐる蕃人も、眼の玉を入れたり、出したりする魔人のやうな男を見ては、眼光が眩んで打つ事が出來なかつた。外人は至る所でこの手段を用ひて、首尾よく蕃界を踏査してしまつた。

四

支那の随筆には、奇怪な眼病の話がある。長安の都に方棟と云ふ風流才士があつたが、彼は何時も狭斜の巷を往來して、美女などの後をつけてゐたと云ふから、不良青年の一人であらう。

それに清明の日の前日、方棟は例によつて、ふらふらと町を歩いてゐると、向ふから赤い色の車がやつて來た。車の左右には青い着物を着た澤山のお供がついてゐる。方棟はそれを見ると、平生の好奇心から、そつと傍へ寄つて覗いた。車の窓から若い綺麗な女の顔が見える。

其所で方棟は、後になり前になりして、それに喰付いて行つた。すると、車の中の女がそれを知つて、供の女を呼んで、帷

をなみさした。佐の女は方棟に向つて、

『この方は芙蓉城の七郎樣の奧方でございます。失禮な事をなされてはこまります。』

と云つて、突然砂を掴んでその顏へ投げつけた。方棟は驚いて、それを拂ひ落したが、邇脇くそれが眼へは入つて、痛くて開かない。やつと唾をつけて洗ひ、今の車はと思つて、向ふを見ると、もう車も人も見えぬ。不審しながら家へ歸つて來たが、その夜から眼に痛みを覺えて、細君に見て貰ふと、瞳の上にかすかな雲がかかつてゐる。そして、日を經るに隨つて、その雲がだんだん擴り、それが錢の厚み程のものとなつた。その上、右の眼の瞳には、螺旋のやうなものが出來た。藥を付けても何の功もない。光明經を讀むと、眼病が除くと云ふので、人に賴んで讀んで貰つたが、別に功は見えなかつた。それでも一年ばかりすると、もう諦めてしまつて、氣も落付いて來た。

所で、或日、方棟が一人で靜に坐つてゐると、右の眼の中で蠅の羽音でもさすやうなかすかな聲がしはじめた。

『眞暗で厭になつて來た』

と云ふと左の眼の中で、

『少し外へ出やうぢやないか。』

と、答へた。不思議な事もあるものだ、と思つてゐると、鼻[illegible]中が[illegible]くなつて、中から何か外へ出るやうである。何んであらうと考へてゐると、出て行つてゐた奴が歸つて來た[illegible]か、復た鼻の穴から眼の中へとは入つた容子である。すると、又兩方の眼で、話が始まる。

『しばらく見ない内に、庭の蘭が枯れてしまつたな。』

『そうだ、枯れてしまつたよ。』

方棟は蘭が好きで、何時も庭へ蘭を植えて、それに水をやるのを日課にしてゐたが、眼が見えなくなつて以來、その儘にしてあつた。其所で細君を呼んで、

『家の蘭は、枯れてしまつたと云ふぢやないか。』

細君は庭へ出て見ると、成程枯れてゐる。不思議に思つて、次の室から方棟の方を見てゐると、豆粒のやうな人間の形をした者が、鼻の穴を出たり入つたりするのが見えた。

二三日たつた所で、方棟の左の眼の方で、又聲がしはじめた。

『隧道を通ると、どうも遠い、いつそ門を開けやうぢやないか。』

と云ふと、右の方で、

『こつちは、壁が堅くて、とてもだめだ。』

と答へる。すると左の方が又云つた。

『では、俺の方をためしに開けて見やう。』

忽ち左の瞼の内側にがりがりと爪かなんぞで掻きやぶるやうな痛が起つた。方棟は泣き面をしてこらへてゐると、暫くして、見えなかつた左の眼が、急に開けて、物が見え出した。方棟の聲に斜目もやつて來た。瞼の上の翳が取れて、中に瞳が光つてゐる。翌日になると、右の眸も左の方へ集つてゐて、右の眼は[illegible]まゝにして、眇になつてゐた。

この逸話は、納蘭本には入つてから、一眼がなくなるまで新調が出したもので、眼科の醫者が見たらおかしからう。吾輩もおかしい。

眼病で思ひ出されるのは、德坂寺の片ほとりに住んでゐた澤市の物語だ。この頃、その物語と一所のものでないかと思はれる物語を見付けたので、吾輩はそれを基にして、ある種の創作をやつてゐるが、それは切支丹に關係した話である。最後の魚津あたりに、鈴木孫右衛門と云ふ、切支丹の殘黨があつて、魚の眼を探して玉を手に入れ、それで病人を癒してやつて信者をこしらへた。その土地に、澤市と云ふ坐頭があつたが、それは十三の時に魚の毛で眼をはじかれて盲目となつたもので、それもその信者となり、四十年の間に、十四年目に眼が開いたと云ふことが書いてある。そして鈴木が後に磔刑になつた時、澤市も金澤で押へられたが、その女房の出生地が能美郡と云ふ所から、そこで磔刑せられた。

また眼の話は、幾等でもあるが、第一話が嫌になつて、あまり出過ぎても困るし、その上材料の必要から、禁じられてゐる頑張をして、充血でもさせたくなるのなら、病院の先生に叱られるから、眼の話は、これで目出度く納め申候。

金力と女權と競技と舞踏の亞米利加

佐々木指月

「金は神なり。」と、云ふ言葉は、亞米利加にもあるにはある。

然し、流行の亞米利加人も、さうは信じてゐないらしい。

子供が母親に訊く。「ママ、あなたに、いくらだけ、私を愛してくれて？」

母親が答へる。「さうねエ、ママァは、一仙だけ、お前を愛してあげるよ。」

子供がおこる。「たつた一仙。もつと愛して頂戴よ。」

子供が、「もつとよう！」とねだる。

「それでは、五仙だけ。」

「それでは、十仙だけ。」と、母親が云ふ。

子供は、なかなか承知しない。母親は、だんだん買ひ上げて云つて、百弗から、千弗になり、それから、十萬弗になつて、それから百萬弗になつて、それから、萬億弗まで買ひあげて、「おゝ！、私は知らないよ。いくらだけお前を愛してゐることやら？」と、云つて、子供を、胸に、かかへ込んで接吻する。

これを見ると、亞米利加人にも、親子の愛だけは、金で直段をつけることは、出來ないと思つてゐるらしい。

だが、それを、だんだんに、金の直段に見積つて、買ひ上げてゆくところは、日本にはないことだ。

やつぱり、こんな、子供をあやす云ひ草にも、金の亞米利加と云ふ氣分は、はつきりと出てゐる。

[illegible]中で、金のない者と云へば、[illegible]乞食[illegible]この[illegible]チャンピオンと見なされてゐる。

亞米利加の乞食もその格にもれず、[illegible]目されてゐるが、實は、さうではないのである。

尤も、亞米利加の乞食のなかには、素人乞食と、玄人乞食の別があつて、素人乞食の方は本當に貧しい。けれども玄人乞食になるとなかなかどうして、貧しいどころの騷ぎではない。

かれらは、その持場と云ふもの〻賣り買ひをしてゐる。

たとへば、ここの橋のたもと、或ひはあすこのお寺の前と云つた風に、各々の持場があつて、それは、各乞食の專有物になつてゐて、うつかり素人乞食なぞが立つてゐやうものなら、それこそ、はり倒される。

その持場の直段のいいのは、貰ひの多いところで、安いのは、貰ひの少ない場所である。

のみならず、乞食をする方法、くはしく云へば技術には、色々新案があつて、その新案も賣り買ひをする。

顏をどう云ふ風に作つて、人の同情をひくとか、或ひは、目をどう云ふ風につぶつて盲目に見せるとか、手をどうかくして手くなに見せるとか、または、足をどう組んで、片脚をなくしたやうに見せるとか云ふその工夫を、發明したものは、これを他の乞食に

賣るのである。

それでをかしい事には、一つ新工夫が出ると、それと同じタイプの乞食が幾分、紐育の第六街なら六街の、諸々に立つてゐる。

それらは、晩になると、その顔を洗ひ、かくしてゐた手や足を出して、立派な紳士や淑女になつて、やつぱり我々たちの行くところへ來て晩餐を喫してゐる。

紐育で、十年ばかり前に、こんなことがあつた。ある乞食が死んだ。警察で遺産を調査するものがあつたので、その乞食の財産を、公共の用に供した。なんでも四萬弗ばかりの貯金があつたさうである。

日本の乞食にも、さう云ふことがないとは限るまいが、乞食術の研究を商賣にするところなぞは、流石は、金の國の乞食だと思へる。

金を目あての商賣と云ふものは、亞米利加には、さらにある。このうちでも、これはその最もはつきりしたものであると思はれる商賣があつた。

紐育のある雜誌の原稿讀みをしてゐた女に、Eと云ふ廿四五の娘があつた。

かの雜誌はC雜誌と云ふ月刊の雜誌で、またその雜誌は、原稿讀みと云ふ、左樣さ、日本には一寸さうした職業があるかないか知らないが、兎も角、あの國の、ある種の雜誌は殆んど投書原稿のみを集めて、月々の紙面を埋めてゐるので、さう云ふ雜誌社には、大抵、編輯主任のほかに二三人の原稿讀みと云ふものが置いてある。

第一の原稿讀みが、投書原稿を、片つぱしから讀んで行つて、目ぼしいものだけを拔いて、第二の讀み手に廻す。第二の讀み手は、その社の眼目にはまつたもの〻うちで、いいのだけを取つて編輯主任に渡す。編輯主任はまたそのうちからいいのを拾つて、それを採用して、一字いくらで、書き手の方へ原稿料を拂ふ。讀み捨てられた原稿は、投書家の方へ歸つてくる。と、かう云ふ仕組みになつてゐるのであるが、このEと云ふ娘は、その第二の原稿讀みをしてゐた。

かの女は、勿論文藝と云ふものに對しての最新の目を持つてゐたし、自分でも、短篇ものや、詩なぞを時々作つてゐたほどであつたから、亞米利加の若い女としては、先づ智識階級に屬してゐた。

SSM雜誌のEと云へば、一寸、投書家たちに、ことにもてのしてゐた女流文士だつた。

世界大戰がはじまつた。亞米利加の若者たちは、みんな軍隊の服をつけてしまつたと云つてもあまり大げさには聞こえない日が來た。

娘たちは、軍服をつけてゐる若者とでなければ、一緒に外を步かないと云ふ時が來た。

平生は、家のなかにばかりひつこんでゐて、ふけばかり掻いてゐた詩人や小說家も、筆のかはりに鐵砲を持つて太西洋を渡ると云ふ亞米利加としては開國以來の熱狂の秋が來た。

戀人が戰爭に行く。生きて歸つてくるか、死んで歸つてくるかわからない。約束をしてゐた結婚も、この世に於てとげられるか、とげられぬかわからない。もう何も、かれのために自分の身を惜んでゐる時ではない。自分の持つてゐるものは、皆んなかれにくれてしまつて、さうしてかれを心殘りなく出征させやうと娘たちは覺悟をした。出征する戀人を持つてゐた娘は、恐く、その戀人と結婚をしてしまつた。

高慢なEは、戀人なぞを持つてはゐなかつた。かの女は、自分が大切にしてゐたものを誰にもくれる事が出來なかつた。

然し、かの女は、この機會を利用して誰かにそれをくれたかつた。

Eは、急に、兵隊たちの澤山あつまる、舞踏場へ毎晩出掛けた。

さうして一週間たゝないうちに、ミネアポリスから出て來たPと云ふ兵隊さんを、自分の勇士（ヒーロー）に見立てゝ、かの女の友人たちのところへつれて來た。

かの女は、私たちのゐるところへも、そのP君をつれて來た。

P君は、田舍育ちの、見るからの勇士で、何んとかのパッタリオン、オブ、デス、と云ふ決死隊に屬してゐる金箔附きの猛者だつた。

かれは、スエーデンから來た移民の子で、その英語にも、なまりがあつた。

都會の娘が、戀人にしたかれは、何となく一種の不安な翳をして、我々と話しをした。

日は立つて行つた。かれが軍隊と共に出征しなければならない三日前になつた。

いよいよEはPと正式の結婚をすると云ふので、私たちは、市廳（シテーホール）へ行つて、結婚の立ち合ひをさせられた。

それから二人は、私たちの住んでゐる部落へ來て、私たちが二人のために結婚の御馳走をして、米を撒いて、二人をホテルへ送つた。

二人は、この時、どこかのホテルへ行つて泊つた。

Pは、もしも戰に目覺めたならば、熱中する市民の送別を受けて、戰に從つて歐洲へ行つた。

Eは、正式にPの妻であつた。然し、Eはこの翌日から、ほかの陸上兵を取つて、往來を歩いてゐた。

S・S・M社の校正方をしてゐたBと云ふ娘は私たちに、かう云ふ事を云つた。

Pはきつと戰死するだらう、さうすると、Eは、その遺族として資格の扶助料を政府から受けるし、また、米國軍人保護法から、Pの生命保險料の全部、つまり一萬弗を貰ふことになる譯。と、かう云つた。

私は、この時、日本人の私には、わからずにゐた、その間の消息に氣がついた。なるほど、娘たちが争つて兵士と結婚したがつたのに、あながち戀愛のためばかりではなかつたのであつたと思つた。

戰争は、了結した。人の善いPは死なずに歸つて來た。そして?いところへ歸つて來た。かれは懷中から、Eの寫眞を出した。

戰場に於ても、肌身を離さずに持つてゐたその寫眞と、彈丸を潰して自分で作つた指輪とを出して「これがEへのお土産であるが、Eは私を待つてはゐずに、どこかへ身を隱して了つた。

今日、私が、Eの借家の處へ行つたら、かの女は私を家のなかへは入れないで。これを外へ行つて讀んでくれろと云つて、このEの置手紙を出した。」と云つた。

Pは涙をこぼしてゐた。私たちはPを慰めるのに言葉がなかつた。

のみならず、私たちは、二週間前にEが遠方にポートランドから、オレゴンへ、他の男と、つつぱしつた事を知つてゐたが、これすらPには、告げなかつた。

さうして、その後、さう云ふことから起つた悶着は、私たちの部落ばかりにも二三件あつた。

「色と慾との二た道かけて」と云ふ言葉が日本にはあるが、亞米利加では、そんなことは問題にはならない。色と慾との二た道かゝらない戀愛なぞ、あの國にはありはしない。金があつてこそ戀愛も出來るのだ。

日本では、親が子供を教育するのに、出來と云ふものなさ…、教へる。

少なくとも私は、さう教へられて來た。然し亞米利加では、

どうもさうでないらしい。子供には、金と云ふものに對する觀念を、しつかりとつぎ込むらしい。

私は、富豪なぞの事はよく知らないが、何んでも子供が一人出來ると、その子の產れた時から、その子の財產と云ふものはきまつてゐて、それに對して管理者と云ふものが設かれて、その子の金に對する一切のことは、その管理者がやるのだと云ふことだ。

一度分けてやつた財產は、その子の父母でも、もう自由にすることは出來ない。親子の間で、財產の訴訟沙汰は當然の事になつてゐて、やるものも、聞くものも、別に不人情なことだなぞとは思はないらしい。

親は老年になつて零落をする。子は、追々富貴になつてくる。親は、株で損をして最後の財產を、たまなしにして、子供のところへ借りに來る。子供は、それを、はねつけてしまう。親は自分の子供は、金錢に對して、立派な觀念を持つてゐると感心する、と、云ふやうなことは、まんざら芝居の上の事ばかりではないやうだ。

私の知つてゐた辯護士にHと云ふ人があつて、Jと云ふ男の子と、Aと云ふ男の子とがあつた。

或る日の事、私は、その人の住んでゐる處とは別な方向の町はづれへ行つた。

すると、JとAとが、一丁ぐらゐはなれたところに立つてゐて、新聞を賣つてゐた。

それは丁度、小學校の夏期休暇の時で、たゞでさへ暑い炎天に、二人の男の子は重い新聞のたばをかかへて、しきりにその、ヘッドニュースをどなりながら、賣つてゐた。

私は、はじめJから一枚新聞を買はされて、次にAのところへ行つて、また、つかまつて買はされた。

その後、私は、その辯護士のところへ遊びに行つた。その時には、もう休暇も終つてゐて、子供たちは、學校へ行つてゐた。

辯護士の奥さんが「あなた、この間、うちの男の子たちに新聞を押し賣りされたでしやう?」と云ふ。

『えゝ、同じ新聞を二枚買はせられました。』と答へた。

奥さんの云ふところによると、父君が、子供たちに、財產を分けてやつて、『それを今から殖やして、大學を卒業してからの、身を立てる時の資金にしろ。』と云つて聞かせたさうだ。

子供たちは、その翌日から、新聞賣りをはじめて、今でも、學校から歸ると、すぐ夕刊を賣りに出る。尤も、はじめのうちは、市の向ふのはづれでやつてゐた。流行に近所の女の子なぞ

にならかなれるのおいやで、はじめは、さうしてゐたが、近来では、もう一家の面倒を見て居て、父君が、事務所から歸つてくると、まづ一時間は坐らせられるので、父君は、もうこれは、頼んだからいらない。」と云つてことはるのださうなと、かう云つてこんだ。

「みな御父さんは、「あの子たちも、金を儲けたり、勉強をしたり、なかなかにしい事です」と、何か、他人が興味のあることをしてゐるのを許すやうなあんばいに、云つてゐた。

日本では、忠孝の前には親も敵だ。たしかに昔はさうだつた。

然し、亞米利加では、金に對する忠孝の方が、親に對する孝道よりも重く見られてゐる。

中流以下の家庭の子が、小學校を卒業して新聞の配達小僧でもやるやうになると、自分の食料だけは、自分で必ず毎週お袋に拂つてゐるのは事實だ。

また雇人が、主人に對して増給の請求をする時には、いつでも出るか引くかの瀬戸際でその談判を決着する。その間に何等の義理も人情も、さしはさまないのは事實だ。

情實などいくら話したつて、それが算盤ずくにならなければ、主人の方で決して増給はしない。下手な情實など話すと、却て弱い足を見られて、あべこべに給料を下げられるぐらゐなところが落ちだ。

日本人が、亞米利加人に對して、よく方外もない贈りものをする。一般の亞米利加人は、かれらの國情に照らして、これは何か、日本人に下心があるのだらうと、うす氣味惡く感ずるので、贈り物をした日本人は、それによつて却つて疎んぜられることがある。

○

女尊男卑の國と云へば、誰でも先づ、亞米利加に指を屈する。實際、亞米利加は、女尊男卑の國であるらしい。

妙なことを話するやうであるが、亞利米加の各都會の公園へ行つて見ると、女のためには所々に化粧所が設けてある。然し男のためには、手洗ひ場も設けてはない。

男だつて水を吞む。女だつて水を吞む。それでゐて、女には化粧所があつて、男には手洗ひ場が設けてない。そんな不公平なことはない筈である」、云つたところがしかたがない、實際、亞米利加ではさうなんだから。

日本人の赤毛布は、亞米利加人の家庭に招待されると、きつ

とそこの主人に、はばかりをきく。主人は大抵口をきまはす。向ふでは、女に、はばかりをきくなどと云ふ事は恥かしき事である。

三四回も、そこの家庭へ來た人で、やむを得ない時には、そこの主人に『一寸、手を洗はして下さい。』と云ふ。すると主人は、氣をきかして、はばかりへ案内する。

女ばかりの夜會なぞへ行つて、時間が延びて、手を洗ひたくなつたときには、向ふの男は、『一寸、煙草を買つて來ます。』とか、或ひは、『一寸、電話をかけて來ます。』とか云つて外へ出て、町角にはきつとある酒店(バア)へ行つて用を足して、戻つてくる。

然し、その手は、時々、成効しないことがある。『煙草たらここにあります。』とやられる。『電話なら、うちにあるのをお使ひなさい。』と云はれる。

『電報を打つて來ます。』と云ふのは、隨分苦しい云ひぐさである。

如何なる淑女も、これでは大抵氣がつくらしい。

あの國の男たちは外に於ても、内に於いても、そのくらゐ、女には氣がねして、首から下の事は云はないやうにしてゐる。

然るに、女は、男に對して傍若無人な暗示を間接に與へる。

それは何んだと云ふと、町の角々にある、藥品舖(ドラッグストア)の飾り窓のなかに、酒瓶を、麗々しく並べさして、それに、[illegible]はないと云ふやうな顔をして、平氣で、その前に立つて見てゐる。

女が禁酒案に投票して、亞米利加全體を禁酒國にして、男の手を洗ふ場所にしてある、角々の酒店(バア)を、片つぱしから締めさして、男に不自由をさしてゐながら、かの女たちは、藥品舖を無數にその跡へ開かして、そこで髮を洗ふ藥だの、家のなかの虫を驅逐する藥だの、顏へ撒く種々なお白粉類を、あんなに、なぜ賣れるのかと思ふ程、賣らしてゐる。

恐れ入つたのは、亞米利加の女であると、どこの外國人でも云つてゐる。

亞米利加人のもつてゐるやうな、女尊男卑の觀念は、日本人なぞにはとても持てるのではない。

亞米利加の男は産れながらにして、女にはハンデキャップをつけられてゐる。

弟が姉に虐げられるのは當然のことだが、兄も妹には虐げられてゐる。

母親はいつでも女の子の方へ甘い顏をむけて、男の子の方へは苦い顏を見せる。

中から以下の家庭になると、男の子は働きにやらせられる。女の子は、女學校へ通つてゐる。男の子が、ベランメ語を習つてる間に、女の子はラテン語を習得してしまふ。

男の子が小學校へ行くと、そこには、神經質な老嬢の教師がゐて、自宅の母親よりは、もつと恐ろしい顔をして、この悪い子供等がと云はぬばかりに睨んでゐる。

さうして女の子は、いつも成績がよくつて教師に褒められてゐる。たまに、女の子らしい事をする。男の子の方には理想があつても、同情は、赤いリボンをつけた女の子の方に集まる。男の子は、嘲笑せられる。

十四歳になつてくる。スヰートハートごつこをする。女の子は既に、ボーイスを集めて、嬢ちやん女王を氣取つてゐる。然し、ボーイが、若しも、女の子を嫌めやうものならそれこそ大變、たちまちに仲間はづれにされて、誰ももう遊んではくれない。

嬢ちやん女王は、悋氣して、その男の子を外の男の子に、なぐらせる。

廿二から、そろそろ戀愛をはじめる時になつても、やつぱりその式で行くのである。

娘たちは婿殿の候補者を澤山こしらへて置いて、そのうちからいいのを選ぶ。だが、息子が、それをやると、どの點からも愛想をつかされる。かれは、一人の女を愛してゆく程の勇氣がない、たのもしくないと云はれてしまふ。

凡て斯ふ云ふ風であるからして、向ふの男は、全く、女の前では、小さくさせられてしまつてゐる。

私は、ある時、一人の、ハイスクールの、女生徒に、あなたは、學校を卒業したら、お嫁に行きますかと、きいたことがあつた。

すると、その女生徒が、私に、私の生涯を通して、男のために、一ぱいの水をも炊いてやらうとは思ひません。と返事をした。

私はその權幕で、引きさがつてしまつた。

から云ふ、女生徒が、兎に角、偉大なる理想を持つて、さうして、神様か人間と結婚してやるのだと云ふやうな誇りを持つて、結婚をしたとする、先づ三年間は、新郎殿、大いに骨が折れるわけだ。

表門から見ると、針の目のやうに小さくつて、これを、通りぬけやうと云ふ事もないが、裏門から眺めれば、荷馬車でもどんどん這入れると云ふのは、亞米利加の女に對する道である

さうな

それは、その道に通ずる人の話しを聞いて知つてゐるから、一つ書いて見る。

日本では、結婚しやうと云ふ男女は、兩親に宜しくお賴み申して、花札のめくりでもやるつもりで結婚をする。中流からかけて、中流以上の家では、さう云ふ結婚方を先づ正當としてあつて、自分でさがすのは邪道と見なされてゐるらしい。

亞米利加でも、先づ消毒されてる階級の家庭で育つた子女は全然自由結婚と云ふ風には行かないらしい。宗敎上の關係があつたり、富の上の釣合ひがあつたり、またあれでも幾分家系と云ふやうな所から來た思惑があつたりして、さう息子や娘の思ひ通りには行かない處がある。

それで、母親は、娘たちのために、息子たちを集めて夜會をひらく、或ひは遠足會なぞをやつて、その集めた、息子たち、つまり、親の目の門を通過することの出來た、友人たちのなかから、娘さんが、自分の意に叶つたのを擇んで、それから追々に、息子殿に、自分の樣子を見せてゆく。

さてこゝでどうしても書かなければいけないことがある。書かないと話が徹底しない。

亞米利加でも、處女であると云ふことは、結婚する時の重大事件である。これを[illegible]して[illegible]と云ふこと[illegible]の[illegible]無で證明するのだらうが、

ところが、病氣とか、或は何かのアクシデントのために、または醫者の手術なぞのために、それを無くしてゐる娘がある。それをどうして證明するか、いくら親が、「いいえ、私の家の娘には決してさう云ふ事はない。」と云つたところで、あゝ云ふ男女交際の密接な國柄では、そこにどう云ふ間違ひがなかつたとも斷言出來ない、それではそれをどうするか？

醫者の證明書と云ふものが、その場合にものを云ふ。親から貰つた羅皮紙を無くした女の子は、そのかはりとして醫者から貰つた、一枚の紙を大切にして持つてゐる。

下流社會の人なぞは、おきに云ふ。「なに、あいつら、あゝやつて山や野を、二人ぼつちで遊び歩いてゐるのだもの、何をやつてるか知れたものぢやない。」なぞと云つて、若し森のなかなぞで、若い二人を見つけると、すぐ氣を廻す。然し、あれは、實は、さう氣を廻す必要はないのだ。

娘が、あれを無くすと云ふのは、實に一生の一大事で、それを信じない人があつたら、却つてその人たちは、自分が消毒されてゐない事を悟らなければいけない。

それで、話は、あとへ戻つて、さう云ふ、デイセントな娘が、

この男が見込んで、様子を見せると、男の方も、どうかして、これを手紙の力によつて、明らかにしやうと思ふ。だが、うつかりした自分では、ないかしらと思ふものだから、男もなかなか云ひ出せない。

花屋の儲かるのは斯ふ云ふ時である。男は花を持つて、娘を訪問する。――一寸云つて置くが日本からの赤毛布なぞが、矢鱈に西洋人の娘に花なぞ送る、あれはよすがいい、いい笑ひものになる。――娘はそのうちで、一番大きい花をとつて男の上着の襟にさす。

もうここまで行くと、大抵、切り出しても大丈夫である。そこで男は、女の前に、跪いて、いよいよ、言葉の上の解決に移る。

そこで娘が、言ひいれにくかつた一言の返事をするのであるが、『イエス』と云ふ、それから接吻の儀をする。熱烈にね。

然しこれは、昔からの行きかたである。

今日あたりの行きかたで、ただ人の前で話せるやうなのは、左様さ、斯ふ云ふのがある。

男の方がなかなか云ひ出さないので、女の方では一年も二年も、男の云ひ出すのを待つてゐるのに、男は云ひ出し得ない。花束は、三千本ぐらゐも送つてしまつて、キアンデーは、一万斤ぐらゐ送つてしまつて、それでゐて、まだ云ひ出さない。娘の方はもう時期の限りを盡してしまつて、ただ閏年の来るを待つてゐる。閏年には、女の方から男に向つて云ひ出し得る習慣になつてゐる。

去年、一千九百二十年は閏年だつたので、その一月一日の午前零時に、娘たちから電話をかけられた男たちは、青い顔をした。

私たちの部落にゐた連中は、みんなさう云ふ罪を作つて置いたので、去年は大分逃げ出すものが多かつた。私も去年の八月十六日に日本へ帰つたのだが、私は、さう云ふわけで逃げたのでないから誤解してはいけない。

然し閏年まで待つてゐると、大抵な熱愛は冷えて醗酵する。それを見るに見兼ねて、友人たちは、夜会の席に於て、一つの遊戯を案出する。

籤をひく。籤には、誰は誰それの鼻をつねれとか、誰は誰それの肩の上へ立つてそこから飛び降りろとか云ふ、色々な遊戯の命令が書いてある。

この命令は絶対にして犯すべからざるものになつてゐる。

そのなかに、『ミストル誰それは、ミス某の前へ跪いて、結

婦の申し込みをなすべし。然して、ミス某は、それに向つて快諾すべし。然るのち室內の電氣を消し、五分間の接吻をすべし。」とか云ふ命令で、[redacted]に順々に讀み上げられて、頭數は次々に行なはれて、遂に、その[redacted]がひらかれると、さあ大變、人々は狂喜して拍手をする、ミス某は、あまりの恥かしさとうれしさに、度を失して怒りながら、戸の外へ逃げやうとするが、もうちやんと戸には鍵が卸りてゐる。

主婦なる母は、命令に服從すべきを云つて聞かせる。ミス某が、椅子に歸ると、さあ大變、ミストル誰それは青くなつて震えてゐる。

それを年上の友人が、連れて來て、ミスの前へ跪づかせて、いよいよ、平生から百萬遍も、暗誦してゐた文句を云ひ出すのである。

クスツとも笑はれない喜劇である。ミスの聲の『イエース』がきこえると、ぴしやりと電氣が消える。

一分二分。誰かゞ、クスクスと笑ふ。電氣がピカリとつく。すぐ消える。

誰かがその二人に同情したものと見えて、すゝり泣く聲がきこえる。

四分五分。電氣のついた頃には、誰ももう、その室にはゐな

い。まさたたりは、人々の同情によつて漸く自分たちの窮狀を突破したところの評判にも、憐なる若き二人ばかりである。

インデイセントな女になれば、洋の東西を限らず、その行き方は大抵決つてゐる。

娘が一度、醫者の證明書が貰へないとなると、それからは死にもの狂ひになる。

それからは、自分の才智か、或ひは容貌か、何かでもつて、その缺點を補つて、良緣を求めやうとする。

然し、東部亞米利加の女たちは結婚難に苦しんでゐる。

西部亞米利加でも、結婚は容易だとは、云へない。

金があつての亞米利加だから、金のない男は、自分から求めて、結婚後の生活難を味はうと云ふやうな、氣まぐれな心はもたない。

また女の方でも、女の自活して行く道は、いくらでもある亞米利加だから、何も金のない男と一緒になつて、一苦勞しやうなぞと云ふそんな酔興な心は起さない。

月々の月給を自分の亭主だと思つて、暮してゐる女はいくらでもある。

紐育は、近世のバビロンだといふことは、常にきくところで

ある。なる程、都會には、割合に、インディセントな女が多く住んでゐる、然し、亞米利加全體から、ピユリタンの氣風が消えてゐるものとは、私には思へない。

執業婦や、女給等のことに就てはまた今度、書かして貰ふ。

○

運動競技と云つても、色々あるが、そのうちの大部分は、球技である。

ベースボールは亞米利加のナショナルゲームで、どんな所へいつたつて、どんな村へ行つたつて、子供たちが、あれをやつてゐないことはない。相手がないと、壁へボールをなげて、それをうけて遊んでゐる。

日本では、まだ、學生たちの間か、或ひは學校出のおとつちやん中でなければ、ベースボールの事なぞ、あんまり興味を持たないらしいが、亞米利加では、彼等、亞米利加人がこの道の達人をよぶことは、丁度、日本人が宮本武藏や、梁川庄八を呼ぶやうな有様である。從つて、あの國では、女連中まで、ベースボールでは血道をあげて騷いでゐる。

私たちのゐた宿舍の女なぞで、誰でもいいから、文でも作つてゐる連中までが、毎日の新聞のスポーツ欄に現れてくる、試合の表を眺めてゐる有様は、丁度、日本へ歸つたのちの私が、新聞に毎日出てくる梁川庄八を熱心に讀み耽ると同じやうな態度である。

紐育の或るチームが、シカゴへ行つて負けたとする。さあ問題は大きくなる。それは、シカゴは、紐育よりも地面が高く、從つて空氣の密度も違ふから、それから來た差のせいであるとか、何とか、それは、亞米利加中の騷ぎになる。

古い話しをするやうであるが、昔し或る王樣が狩に行つて一疋の猿を見つけた。大勢の弓の上手が、射つたけれども、猿が、その矢を掴つて、それを折つて遊んでゐる。

王樣は怒つた。するとその村に一人の狩人がゐて弓の名人だと云ふので、尋ね出されてその猿を射ることになつた。

狩人が、弓に矢を番へて引きしぼると、猿が手を合せて助けを求めた。

狩人が矢を放つた。猿は樹をめぐつて逃れてゐた。矢もまた樹をめぐつて猿に中つたと云ふ話をきいて、私は、子供の時、子供心に、例のおとぎ話だ、眞直ぐに行く矢が樹をまはるなんて、それは嘘だと思つてゐた。

然るに亞米利加へ行つて、あの、種々なボールのそれぞれのなげ方を見ると、[illegible]

ら、方向を轉ずる。あれを見ると、あのおとぎ噺も、まんざら嘘ではなかつた。狩人は、この猿がきつと樹をめぐつて逃げると思つたから、そこで、手もとにその呼吸を入れて弓をひいたに違ひない。猿もそれを知つたから、手を合して拜んだらうと、すつかり技術と云ふものの深い事に感心しちやつたことがあつた。

それからは、あのベースボールと云ふものにも、大なる敬意を拂ふやうになつた。

ところが、そこいらの子供たち迄が、そんな呼吸は知つてると聞いて、私は、自分を、莫迦だなあと思つたことがあつた。

然し私は、ベースボールよりも、ボキシングが好きである。

亞米利加人のボキシングに熱中することはこれまた非常なものだ。

ボキシングの方は、二人で戰ふのだけあつて、見てゐても實際、血湧き肉躍るの感がある。

たとへば、ヲールドチヤンピオンのウイラードが、新進のデンムシイと戰ふと云ふやうなことになれば、亞米利加中、どんな片田舍にだつて、それが爲の特別の電報を、待ち設けてゐる連中がゐないことはない。

一千九百〇九年に、其時のヲールドチヤンピオン、ジエフリーと、黑人の拳鬪家ジヨンソンとが、その選手權を爭つた大試合が、私は、その試合のあつたバアフアローから——たしか、バアフアローと覺えてゐた、何しろもう十年も前の事ではつきり記憶もしてゐないが、そこから——三千哩もはなれてゐる、オレゴン洲のメードフオードと云ふ田舍、然も、深山のなかの田舍で、きいてゐた。

いや大した騷ぎで、朝から新聞社、その付にあつた、何んとかガゼツトと云ふ小さい新聞社の前へ立つて、大勢の白人は、その試合地から來る電報を待つてゐる。私の友人のNと云ふ男は、もう狂氣のやうになつて、そこに掲げてあつた黑板を睨んでゐた。

電報は、一ラウンドごとに來た。三ラウンド目からジエフリイの旗色は惡くなつて來だした。

人たちは皆んな、正金を、その勝負にかけてゐるのだから、そのエキサイトメントは大變なものだつた。

七ラウンド目に、ジエフリイは少しよかつたので、さあこれからはよくなると云ふのでジヨンソンにかけてゐた人々は血眼になつてゐたが、八ラウンドから、ジエフリーは、もう、もり返しがつかなくなつてしまつて、たしか十二ラウンド目で負け

になつた。

殆んど百姓連は、一日つぶしての大さはぎで、その時、この村にゐた黒人は意氣揚々と、おもてを歩いた。

その、ジョンソンを倒したのが、ウイラードで、そのウイラードを倒したのが、デンムシイである。

デンムシイは、ウイラードを、オハイオ州トオレドーに於て、たつた三ラウンドで、ノックアウトしてしまつた。

この勝負は私は、紐育にゐて、やつぱり朝から、みんなと一緒になつて騒いだ

ウイラードは一ラウンド目に、顔が裂けて血だらけになつた。そうして左眼を傷はれてしまつた。

それでも、かれは常に微笑を含んで、ヲールドチヤンピオンとしての威容を崩すまいと努めた。

勝負のものには、こんな、つまらない努力に彼の精力を費すな、デンムシイは強敵だぞ。」と幾度注意したか知れなかつた。

二ラウンド目には、ウイラードは、顎をやられて、殆んど戦闘力がなかつた。そうして左の目は全く腫れ上つて目尻からは出血した。かれの、大なる肉體は、たゞ波にゆられる木の葉の如く、デンムシイの巨大なる亂擊をうけて、右に左に動いた。

最後に、かれは鼻をやられて、マトレスは血に染つた。前歯はこの時に折られて了つた。

三ラウンド目には、かれは、もう一とたまりもなくやられて、流石の、ヲールドス、ヘーヴエーチヤンピオンも、自分が流した血の上に、その體を横たへた。

一つ、二つ、三つ、四つ、十まで呼びあげる、呼び聲のうちに、かれは、身をもがいて立とうとしたが、立つことが出來なかつた。そうして、世界拳鬪選手權は、アリゾナ州の片田舎から出て來た廿二三のデンムシイの手に奪はれてしまつた。

ウイラアドは、どちらかと云へば、高雅な拳鬪家だつた。然し、デンムシイは、見るから獰惡な拳鬪家である。

かれの術は、偉大ではなかつた。デンムシイの術は、落ちついてはゐなかつた。然し、かれは、過去の拳鬪家が、まだ持つてゐなかつた新しい術をもつてゐた。

それは、振り重ねと云ふ術である。スウイングと云ふのは、腕を左右に振つて、敵の虚を見る法であるが、デンムシイのは左り右、左り右と振つてゐながら、時々、左り右右、左り左り右と云ふやうに、ダブルスウイングをやる、これで敵をなやます。

ウイラアドのは振り返しと云ふ術であつたが、デンムシイは、この振り重ねと云ふ術でそれに勝つた。

チンムシイは、この術をどこから得て來たかと云ふと、それは、かれの鄕里のアリゾナ洲の沙漠地帶に住んでゐる鎖蛇だ、その首を立てゝ、この振り重ねをやつて、敵と戰ふ。かれはそれから、この術を、得たのであると、云ふことである。

ペースボールに較べて、ボキシングは下品だ。下品だが、亞米利加人の氣性をよく現はしてゐるものは、このボキシングである。

その慘忍なところ、日本人ならば、昔から一本勝負とか、三本勝負とか云つて、あつさりとやる。然るに亞米利加人は、さうではない。とどのどんづまりまでやる。

血が流れたり、目が膨れたり、そこいらの皮が裂けたり、さうして倒れて、もう立てなくなる。實に無慘で見てはゐられない。

それを、亞米利加人は、痛快さうに見てゐる。あの黑人を私刑にする心理狀態は、斯ふ云ふところからも窺ふことが出來る。

のみならず、女がそのなかに大勢這入つてゐて、その血に染つた二人の男の戰つてゐる素肌を見て、ひいッ、ひいッと叫びながら、髮を握つて見てゐる。かの女たちは、實に、女性の持つてゐる、情慾の、最高白熱點に達してゐるのである。

とても日本の女などには、あすこ迄、行けるものではない。

さうして、亞米利加の女は、その他面に於ては、動物保護會などと云ふものをこしらへて、馬やなにかを虐待するのを人間の罪惡だと云つてゐる。

だが、日本の女は、この動物保護協會も作つてはゐないらしい。

テニスの事に於ては、日本からも熊谷選手なぞが、あの國へ行つて、向ふの大選手と競技して、互角の勝負をやつてゐるので、私がここで素人話しをするがものもなく、追々、さう云ふ人からの專門的の話があることだらうと思ふから、私からは、あまり云ふこともない。たゞ、テニスは、ゴルフなぞと同じく婦人も、それに加はつて、上品な遊戯としてやることが出來るので、あの國の上流の人たちの庭園なぞには、必ずテニスコートと云ふものがある。尤もそれは日本でも同じことであらと思ふ。

ゴルフに至つては、まだ日本では、さう大した流行になつてゐないやうに見うけられる。

ゴルフは、自動車の遠乘りに附隨して、あの國ではなかく大なる勢力を持つた遊戯になつてゐる。

中流以上の人が、日曜なぞに、自動車で、郊外へ遊びに行くときには、必ずこのゴルフの道具が、自動車のなかに持ち込まれてゐるのをみる。

また、日曜の新聞の、通信欄を見ると、何々ゴルフ倶楽部と云ふやうな見出しのなかに、政治社界や、交際場裡で、有名な人たちが、ゴルフをやつてるカルカチュアが出てゐる。

大きな、おとな様が、若い娘なぞと一緒になつて、ゴルフをやつて負けたり勝つたりして一生懸命になつてゐる。

ビリアーツは、日本から山田選手なぞと云ふ、その道の天才が行つてゐて、どうしてなかなかたいしたものである。

其の外に、競馬もどうして盛んなもので、これには、人々がみな、賭をして騒ぐ。

競馬の賭は、然るべき紳士や淑女の間に於ても行はれてゐて、好きの競馬の季節になると、立派な馬の寫眞などが、新聞の紙面を埋めて、それに就ての記事が書き立てられてゐる。

ヤッテングもなかなか上流社會の遊戯として強い勢力を持つてゐる。

どんな富豪の邸宅へ行つても必ず、ヤットの模型や寫眞なぞが、その應接室なぞに備へられてゐる有様で、夏の始めのヤッテングの季節になると、紳士淑女は、その話ばかりしてゐる。

百萬弗も百五十萬弗もするやうな、ヤットは、丁度、我々が水瓜でも買ふやうに、買はれたり賣られたりして、貧乏人の怒りと羨望の的になつてゐる。

どうも亜米利加の運動と云ふものは、それが單に體育のために奬勵され、或ひは發達して來たものとは、私には思へない。

そこに或ひは他の理由もあるのではないかと思はれる。

私は、私自身の生活に最も近かつた、私のゐた部落の男女がどう云ふ運動をやつてゐたか、さうしてそれがどう云ふ結果を彼等の上に持ち來してゐたかと云ふことを話さして貰ふ。

運動や、競技の上手なものゝ集まつてくるのは、無論都會であるが、都會の人たちは、田園の生活をしてゐるものより、競技なぞに興味を持つてゐて、また自分でもそれをやらうとしてゐる傾向のあるのは、何も亜米利加ばかりではあるまい。

概して都會人は、腦を使ふ割合に、體を使はない。ことに紐育や市俄古なぞにゐる人たちは、その足すらも、ろくには使はない。外へ出れば完全な交通機關があるし、家へはいれば昇降用のエレヴエタアがある。からだがくたびれなくなつて困つてゐる。

然し、神經はくたれびる。朝から晩まで鐵とセメントと、電

叫と騒音と、瓦斯と油の音をきいてゐるんで。さうして目のさなんで
云ふものは爪の垢ほどもないと云へたい。見るものは凡てこゝに
人工の世界である。

晩になつて、仕事がすんで、夜食をたべて、それからどうする。からだがくたびれてゐないのだから目はぱつちりと明いてゐる。神経が疲れてゐるのだから、氣はいらいらする。

一たいどうすればいいのだ。どうしたら寐られるのだ。

食べてるものは肉類である。バタアにミルクに珈琲に砂糖。日本人とはたべものがちがふ。のみならず、呑むものは、ホイスキイである。シャンペンである。カクテルである。チンである。おまけに、支那酒のウンガツピイである。

酒をのんで酔へば寐られると思ふなかれだ。營養の過ぎたところから來た精力は、酔ひが醒めたらどうなる。紐育はバビロンになる。市俄古はポンペイになる道理である。

私の住んでゐた家の三階に一人の若い女の挿繪師があつた。その女はよく云つた。『私の商賣ぐらゐいやな商賣はない。毎日毎日、インモーラルな書きものを讀まされて、さうして心にもないインモーラルな繪を書かなければならない。それから受ける感化が、知らず知らずに私の腦にくひこんで來て、私が近來世の中の、何が正しくつて、何が正しくないのかわからなくなつて來た』と云つてゐた。

この挿繪師が、夜食後になると、自分の室(ルーム)に鍵を下して、一人で何か、ことことやつてる。小一時間も立つと、髪も何もばら〱になつて、私たちが共同で使つてた湯殿へ、疲れきつてやつてくる。

私は、初め不審に思つた。私は、下の室(ルーム)にゐた、四十ばかりの女流小説家に、それを何となく質問して見た。するとその人が『あれは、かの女の秘密なんだよ。お前、鍵の穴からでものぞかうものなら、それこそ、帽子(ハット)の針(ピン)で目をつぶされるよ。』と云つた。

私はすつかり敬意を表して、その後はその事は、一言も口にしなかつた。

或る晩の事に、私の窓を叩くものがある。私の室(ルーム)の窓は、どこからも叩く方は出來ないはづだ。たゞ一つの避難梯子(ファイアエスケープ)が、上は、例の挿繪師の窓に連なり、下は女小説家の窓に連なつてゐるばかりである。

はてなと思つて見ると、その繪師が、運動服の胸をあけて梯子の上に立つてゐるではないか。私は驚いた。丁度私は自分の靴下をつくろつてゐたところだつた。私は慌てゝ窓を明けた。

『どうしたのです』ときくと『今、鍵(キイ)をどこかへしまへなくし

て了つ。どうしても戸の外へ出られないから、あなたの鍵をもつて來て錠前に合はして見てくれろ。」と云ふ。

私は、自分の鍵をもつて、室から出て、その紳士のあとから梯子を昇つて、室から、紳士の室へ這入つた。なる程、戸は締まつてゐて、あかなかつた。

しかし私の鍵も合はなかつた。私は、また自分の室から道具を持つて來て、やつと錠前をはなして、戸の明くやうにしてやつた。

そのあと、私は、かの女の室に、重い啞鈴のころがつてゐるのを見た。

かの女の昨夜の秘密と云ふのは、この啞鈴のことだつた。

この啞鈴をなげる時で、大分、紳士の方へ向いて喰ひこんで來たから、この次は、これでよして置く。

○

舞踏のすきな國民と云つて、亞米利加人ぐらゐ舞踏のすきな國民はほかにないと云はれてゐる。

實際、私が今年みてきた。どんな時間だつて、亞米利加へ行つて舞踏の出來ないやうな事は先づないと私は斷言して置く。

日本なぞでも、排斥される百姓達を送るよりも、踊りツ子でも澤山送つたらきつといゝに違ひない。

あの國の人は、どこの國の踊でもそれは歡迎する。

向ふで、キアラクタアタンスと云はれてゐる、日本で云へば、舞ひとか、踊りとか云ふものは、これは、更に、藝術のうちに屬してゐて、話すと長くなるし、また、書きだすと、とめどもなく書かなければならないから、その方はよして、ここでは、所謂ソシアルダンス、即ち社交向きの舞踏の事を書く。

社交向きのダンスと云つても、色々ある。タンゴダンスをはじめとして、フラフラダンス、シミイダンス、それからポルカ、ヲルツ、フオツクストラアト、それから、もう、毎日毎日新型が出來るから、それを研究してゐた日には、百年たつたつてその方の專門家にはなれやしない。

また、「金と色との二道かけて。」と云ふ言葉を持ち出すやうだが、舞踏は、男の方を見るときには、運動と、色との二た道にかかつてゐるやうに見える。然し女の方を見ると、或は、これらの三つにかゝつてゐるかも知れない。こんな事を云ふと、叱られないとも限らないから、これは内證で書いて置く。

先づ、社交舞踏と云ふと、凡て、男女が組つて一組とする、

時々相手がないと、女同志が一組となることもあるが、男同志は一組にならない。男同志が一組になつたり何かすると、女がパンチをひつかける。

パンチと云ふのは、酒とレモンの汁と砂糖とそれから色々な果物の汁でこしらへた呑み物で、夜会には必ず出るものである。私が云ふまでもなく、誰でも知つてゐる事だ。

紳士淑女のダンスと云ふものは、お互ひに舞踏中は、顔を見合せない事になつてゐる。淑女を擁してゐて、その淑女の顔をじろじろ見るなぞは、もう紳士の風上に置けない人物のやることである。況んや舞踏中に私語するなぞと云ふことは言語道断である。

斯ふ云ふ厳粛な舞踏は、無論、社交の一と道で、二た道も、三道も、かかつておるものではない。

紳士は、左手を軽く淑女の腰に置き、右手でそつと淑女の手を握つて、膝で淑女の膝にさわらないやうに、姿勢を正して、丁度日本軍人のやる『気を付け』の精神で眼は決して動かさず、淑女の息をはづませないやうに、最も丁寧に、最も慇懃に、淑女の裾を踏まないやうに、淑女の靴にけつまづかないやうに、音楽に合せて、ダンスするのである。その気骨の折れることゝ云つたら容易なものではない。

まして、一組ばかりでなく、ここにも、彼処にも、[illegible]るから、若しも、自分の相手になつて[illegible]そくなつて、他の組の[illegible]のお尻へでも、その淑女のお尻を振りあてやうものならば、それこそ大変。淑女は[illegible]い顔をする、自分に背い顔をする、[illegible]をする、居ても立つても居られなくなつてくる。日本魂のある日本人ならば、ささに割腹しなければならなくなる。

私は、さう云ふ舞踏には、決して出たことはない。つまらないから出ない。それより家のなかにゐて、椅子でも抱いて口笛を吹きながら独りで舞踏する方が、よつぽど面白い。椅子を振りまはつて、洋服箪笥へぶつけたところで、椅子は恐い顔をしないからね。

かゝる、斯々しくも上品な舞踏は、なる程あの国の人の云ふ如く、ピユリタテツクな気風からうまれ出たものであらう。然し、それがまた、あの国の偽善的なところを如何にもよく現はしてゐる。

私は、それと全くうらはらな、ソシアルダンスを、その上品なダンスをやつた人たちが、やつてゐるのを見たことがあつた。いや、常に見てゐた。

公衆舞踏場と云ふものは、亜米利加の、どんな小さな部村へ行つてもある。所謂ボールと云ふのはそれである。

ここは、何も紳士や淑女のためにひらかれてゐるのではない。先づ中以下の青年男女の為にひらかれてゐるのであつて、従つて、下品である。

兵隊さんたちの多く集つたのも斯ふ云ふところである。

広いダンスホールがあつて、フロアは堅い樫の木で滑らかに造られてゐる。

花ランプは紅色の灯をだいてほんのりとふくらんでゐる。

オオケストラは、所謂テンペン音楽を奏してゐる。

テンペン音楽と云ふのは、日本の音楽にしてみれば、かなだ[illegible]音楽とでも云ふべきで、先づお囃しに相当する。ラックタイム、日本なら、かつぽれと云ふやうなものを、皆様よく御存じである。

そのテンペン音楽に合して、一群の男女が、各々相手を擁し合つて、先づ、午后の八時頃から、十時半、若しくは十一時頃まで、夜中でも百度ぐらゐの熱を上げて、はねまはる。

良家の娘もゐないとは限らない。不良少女もゐないとは限らない。

そのホールの周囲には、卓が置いてあつて、踊りつかれて咽のかはいたものは、そこへ来て、ソオダ水や、レモン水や、アイスクリームを飲んだりたべたりして、一と息入れて、また、踊り出す。

『俺のガアルを取つた。』と云つて、怒つてゐる青年もある。『自分のボーイを取られた。』と云つて血道をあげてる少女もある。

いやもう大した騒ぎで、よく芝居でやる、カアメンと云つたやうな女の子が、一人で、幅をきかしてゐるやうなこともある。

さうかと思ふと、当代の、ナツシサスや、アドニスとも云はるべき美少年が、大勢のガールスを、エンチヤントダウンして当るを幸ひ組み合つて、踊つてゐるのもある。

これは、とても、日本では見られない図である。

十一時頃になる、ボールがしまる。この連中はどこへ行く。

ところが案外心配するに当らないもので、やつぱり、[illegible]連れゐて、二人を夜るの公園や、人の住まない森などへは、なかなかやらない。

きつと誰かあとからついて来て、かれら同志が邪魔のしつこをしてゐるから、世間と云ふものはうまく出来てゐる。

送り狼、ちやんと娘を、うちの前まで、安全に送り届けて一人でニヤニヤ帰つてゆくから、親が心配するやうなことはないのである。

男女同席交際と云ふことを喧しくいつて來た父兄たちはあつて、そこには、日本の親たちなぞの夢にも知らない、安全地帶がちやんとあるのである。

マスクボール、假裝舞踏會は上下を通じて、なかなか猛烈である。

顏をかくして、假裝して、誰が誰だか、わからなくなつてくると、人間は、不斷かくしてゐた原始のまゝの性情をあらはしてくる。

女もなか〱男にはまけてゐない。思ひきつて男のからだへくつついてくる。

私たちのゐた部落でやる假裝舞踏會と云ふのは、また一段と猛烈で、殆んとお話しにも何もならない。

私たちの部落にゐた、女の一人が、いつでもダンスを見るごとに、それを評した言葉がある。今、それをここへ持つて來てもぴつたりとあてはまる。

『あの男の左の手のひらを御覽、女の腰にぴつたりと糊づけになつてゐるよ。

右の手を御覽、あの高く二人で握り合つてる手のなかは、きつと汗でぐちやぐちやしてゐるよ。さうして歩くたびに、あの手が動悸をうつてゐる。

さうして、男があの右の膝を送り込んで、女の膝の上を鼠とばしてゐるの見たかい？

さうしてかれらはぐるぐるとフロアの上を廻つてゐるよ。

女の樣子を御覽、恐れを含んでゐるよ。然しそれを、待ち設けてゐるやうに。

何だつてあの人たちは、早く家へ歸つて寢ないんだらう。公衆場裡(パブリツク)と云ふものゝ蔭にかくれて、あの人たちは、姦淫してゐるんだよ。臆病だね。』

いや、臆病で結構である。あの上、勇氣を出された日には、どんな事になるか知れたものではない。

さうして、そのダンスをやつてる紳士や淑女は、さき程書いた、そのピユリタニツクな人たちである。

然しこの時には、彼等は、假面のなかにかくれると同時に、藝術家町のボールだからと云ふので、藝術と云ふものをも、自身を隱す屛風(スクリン)に用ひてゐるのである。

これ等の、紳士や淑女を、自分たちの部落へ招待した、藝術家連は、却つて口あんぐり、指をくはへて、それを拜見してゐる。

尤も、藝術家町でやる、ギヤザアーツとか、或ひはボザアー

ツとか云ふやうな謝肉祭のときにやるボールは、これはまた別物で、然もこれは巴里から流れこんで來た物で、亞米利加の物ではない。と云つて、亞米利加人は、それ程、露骨にはやり得ない。

ギャザアーツや、ボザアーツのことを、書くと、其筋のお咎めに觸るかも知れないから書けない。

終りにのぞんで私は、紐育の舞踏學校のことと云ふものを少し書いて見やう。

舞踏學校と云へば既に、ソシアルダンスを教へるところであるが、それには色々な種類がある。

紳士や、淑女のみを相手にしてゐる教師もあれば、またはコオリザンの開設をかたはらやるところもある。或はまた、中以下の事務員とか、職工や女工や、勞働者などを相手にしてゐる教師もある。

なかには、日本人紳士専門と云ふ妙な舞踏教師も紐育中に五六名あつた。

私は、ナインスストリートと云ふところにある、比較的高價な教師のところへ、どんなものだかひやかしに行つたことがあつた。

教師は、中年の女と、若い女と二人で、いづれも、一寸、いきな女だつた。言葉つきなぞは、私たちに眞似も出來ないやうな、ソサイテイの言葉で、柔かいものを、ぺらぺら着てゐた。

教師と云ふのは、スチューデオ式の廣間で、壁には、未來派の畫なぞかけてあつてこの教師たちの趣味もほゞ仄めかされてゐた。

廣間の、隅には、グランドピヤノがあつて、そのピヤノと反對の窓によつた方の隅には、日本の寐布團位大きいやうなのが、澤山綿がはひつてゐて、それがごく低く、フロアの上におかれてゐた。

ここへ來て、ダンスに疲れたものが、横たはるのであると云ふことは、どこの舞踏教室でも大概同じだから、ここでも、さうだと私はちやんと知つてゐた。この布團をダンシングマトレスと云つてゐる。

窓には、櫻色の模様のある窓掛がかかつてゐて、その下には、長椅子があつて、綺麗なクッションなぞが椅子の上にたてかけてあつた。

まだ宵の口で生徒は、集まつてゐなかつた。中年の方の教師が、「ダンスの手ほどきだと、夜の組にはありませんが、晝間の十時から十二時までならば、その組がありますよ」と云ふ。

なるほどこゝは、高尚だ、金持の息子か、娘でなければ、朝の十時から舞踏の稽古なぞをするものはない。こゝは莫迦にアリストクラテックだと思つた。

『いえ、私は、手ほどきはすんでゐますから、何でもあなたの教へて下さるものを習ひます、組（クラス）でなくても、別々にでも宜しいのです。』と、少しこちらも貴族的に出てやつた。

すると教師が、『それでは、あなた一人に教へると云ふことになりますと、十二レッスンで六十弗ですよ、その代り毎晩一時間づゝ教へて上げます。』と云ふ。

つまり一レッスンが一時間で、一時間が五弗のわけだ。

いくら私が、アリストクラテクでも、一時間五弗はちと痛いと思つたから、正直に云つてしまつた。

『私は日本から來た美術書生で、金なぞ澤山は持つてゐないのです。然し舞踏を國への土産に習ひたいと思ふのですが、うつかりしたところへ行くと、組育の惡い感化をうけるといけないと友人に云はれましたから、こちらならいいと云ふことを聞いて伺つたわけですが、それではまことに心惜しいことですが私には、とても授業をうけることは出來ません。』と、云つた。

教師は、若い方の教師と顔を見合せてゐたが、『それではあなた三十分、お取りなさい。そして、私にひまがあつたら、一時間でも、その時の都合で教へて上げましやう。』と、云ふ。

三十分二弗五十仙、それでもちとつらいが、二日四日、道樂にやれいと思つて、それで約束して、其晩からはじめた。

若い教師がピヤノを彈いて、中年の教師が手を取つて、初め、トウステップスから教へた。教へ方は丁寧だつた。

教師が『あなた、今まで、どこで教はりましたか？』ときくから、別に習つたと云ふのではないが、Kと云ふ人が、時々教へてくれました。と、答へた。

教師は、その、Kをよく知つてゐた。

そのうちに、生徒たちが、五六名、來て、私は、長椅子の上で見てゐた。

ピアノを彈くのをよして、蓄音機をかけて、二人で教へはじめた。

なかに一人、若い男が、私に、『君、一緒にやりませんか？』と云ふから、『えゝ、やりましやう。』と、それから、その若い男と組んで、一時間ばかり、練習した。

男は、教師よりも、よく私に教へてくれて、それは、ロハだつた。

私は、その晩、そこに、二時間ばかりゐて歸つて來た。それから一日置きに七八回行つたが、僅か舞踏のために、さう澤山

お父さん達つては、先祖に對して申し譯がないと思つたから、教師に「さうよします」と云つたところが、それでは、一週間三弗、賃貸として寄こせ、つまり、ピヤノ代や、色々の雑費の補助費として、それだけ出して、毎晩遊びに來いと云ふから、さう云ふことにして、暇があると行つてゐた。

そのうちに懇意になつて、しまひには、別に金を出したことはなかつた。たゞ時々南京豆でも買つたり、アイスクリームでも買つたりして、どうやらそこの、お弟子になつてしまつた。一人ぐらゐ、日本人のはひつてゐるのも、毛色がかはつてゐて、先方は喜こんだ。

ただ一つ困つたのに、日本のダンスをやつて見せろと云はれることだつた。私は、さう云はれるたびに、足が痛いとか、手が痛いとか云つて逃げたが、一度、そのうちの娘が、日本雑貨店から、一枚花嫁踊の譜を買つて來て、それを弾いて、さあ踊れ、さあ踊れ。と云はれた時には、全く弱り果てた。

さうして惱んだが、その譜に、ちかかだして、何ともわけのわからないものを、踊り出すではないか。

そしたら、とうとう、教師が私を引きずり出して、さうして押出相手をしてしまつたいで、私もやむを得ず、五つ六つの子供の時に習つた、流し踊をやつた。

それは、ここでは構はない。内證だからね。

あゝ云ふ時の亞米利加人は、まるで大きな赤ん坊で、箸にも棒にもかゝらない。

私は、また最下等な、舞踏學校へ行つたこともある。何んでも、女工然とした、教師が二三十人ゐて、二三百人ぐらゐな生徒に、五分間、十仙で教へてゐるやうなところで、まあ、最下等の公衆舞踏場といればいいやうなところへも行つたことがある。

舞踏がすんで外へ出ると、教師が、教師と云ふよりも、ダンシングガアルが、熱い珈琲にでもありつかうと思つてあとからついてくるやうなところへも行つた。

日本のものに譬へて云へば、丁度入れ込みの銭湯のやうなものだ。あれは、亞米利加の舞踏の銭湯である。

また、この外に、舞踏の出稽古をして廻つてゐる女教師もある。

或は、子供ばかりに、體操ダンスのやうなものを教へてゐる教師もある。

近頃では、太平洋沿岸の日本人が盛んに舞踏をやりはじめた。これには米化ダンスと云ふ名稱が、添られてゐるさうだ。

『完』

東京の春・大阪の春

生方敏郎

序

曾て私が三越見物を書いた時のことだ。或る田舎から來た人に「三越の入口に在る大きな獅子のことを何故書かないのです」と訊かれて私は「そんな物はないでせう」と答へたところが、共人は承知しない。遂に二人連れ立ち行つて見ると、何のことだ、居たも居た、大きな石の獅子が左右にあるのだ。

私は凡そ二十度も東京で正月を迎へた、だがその春の印象と云つたら、寒かつたことゝ、貧乏したこと位なものだ。

大阪の難波橋は一度も渡つたことはない。電車の中から見ただけのことだ。然るに橋詰にある獅子の姿は今尚ほ記憶に新らしい。

何といふ不思議な話だらう。

以て序と爲す。

一　私のする晦正月

前にも云つた通り、私は東京で、二十度も門松をくゞつたが、今心に殘つてゐるものは、寒かつたことゝ、貧乏した經驗位なものだ。

東京の年末は各商店が賣出しで、店頭を飾りたて、提燈をつるし、旗をたて、中には鳴物入りのところもあり、街が賑はふものだから、どんなに素寒貧の時でも、自分の貧乏は忘れてしまひ、店先で人が勢よく買物をするのを見て、自分が札びらをきつたやうなつもりになり、なんとなく嬉しく元氣づいて、少し小使錢でもあれば、銀ブラと出掛け、ライオンあたりを振出しにして、網喫催青柳だとか、メイゾン鴻の巣とか自分の馴染の家は無論のこと、彼地此地梯子をかけて飲み歩き、その晩に限り、電車が終夜運轉であるのも馬鹿にうれしく、何時も三時頃になつてやうやく歸宅したものだ。二三年前に私が本誌へ執筆した大晦日氣分と元日氣分といふ惡生徒と愚教師の對話は、實はライオンのその晩の氣分をうつしたつもりなのだ。

以に二三年前までは、三十一日到金頭に追はれたものだが、しかし好運にも、大抵成功して、一年中の債務を拂ひ、殘つた金で、市内目ぼし物に浮れ出したものだ。時には、貧妻を連れ、時には子供までも引きつれて、ありつたけの金を使ひに出掛けたこともある。さうして一杯つ掛つた勢で、ありつたけ散財してしまひ年始状のハガキを買ふ代に窮して、何處へも賀状を出さなかつたこともあつたが、今度は友達の有難さで、ハガキ代の無いとは誰も氣がつかず、「流行に變つてるなあ」とか、「あいつは虚榮・嫌ひなんだから」とか、「生活の改造を始めたな」とか、すつかり買ひかぶつて呉れて、本當の原因を知るものはなかつたであらう。と、いふと惡た識がいゝやうだが、實際「何故俺のところへは年始狀をよこさない」と、怒鳴り込んできた人もなく、天下泰平であつたから、大方こんな理由からだらうと、自分のことだけに、極めて善意に解釋して置くのだ。

それはさて措き兎も角も、私にとつては、本當のお正月は大晦日の晩だ。私の家は世間よりも一日先に出てゐるのだ。その大晦日の晩に、自分は本氣な正月をするのだが、歳德神を迎へるための門松には、從來餘り金を掛けなかつた。即ち三十一日の晩になつて、賣れ殘りの松お七五三とを十錢位で買つて來て、手元の暗いところで、釘で門口へ叩きつけた。お飾はこの通り殺風景である。しかし心の中は、あの幸々で打ち出す百八煩惱の鐘でも聞こうものなら、耐らなく賑かになつて來るのだ。それでなくつてさへ、私のただ一つの仕事である門松の打ちつけがすめば、ありつたけの金を持つて、街をブラつきに出掛るのだ。

「一寸待つて頂戴、買物がありやすから。」

と、貧妻は私を待たせて置いて、一筆したためる。その書付を讀んでみると、紅茶半斤、かまぼこ中板一枚、コヒー茶碗半ダース、メリヤスの女股引、塵取り一つ、便所の草履一足、チヨコレート・クリーム一函、等と書いてある。

「貴方が醉つ拂らはない中に、買物の方を先へしといて下さいよ。」

等と、いらないやうなゐるやうな注意をされる。他の時なら、もうそれだけで癪に觸つて、書付を地面にたゝきつけたまゝ、飛び出すところなのだが、大晦日の晩に限り、貧妻の牽制を氣にも留めない。ところが、ライオンで飲んでゐるうちにその書付を落してしまひ、一つも買物をしないで、そのくせ財布はカラケツにして歸つて來た晩には、たぶん叱られたことだと思ふが、醉つ拂つてゐたからなんにも知らない。二日の朝の時事新報を見ると、私の飲んでるポンチ料が出てゐて、御丁寧にその

書付までも披露されてゐた。私の後ろに、當時「時事」の漫畫家であつた岡田九郎君がゐて拾つたのだといふことだ。

一週なんぞは、貧妻を引き具して、お定りの銀ブラと出掛け新しもの好きに、ロシヤ屋へ飛び込んで、私はウオッカといふアルコール臭い水を飲み、貧妻にはナフーリカといふ薄い葡萄酒みたいなものを御馳走したまでは好かつたが、忽ち香取屋の駒下駄をねだられ、大いに飲代を減らされたこともある。全く貧妻の計略にかゝつたのだ。

またある年には、もう暮れではなく正月元日の午前一時だ。梯子をしての歸り掛け、桶屋の前を通りがゝつて、表の大きな風呂桶に眼をつけ、からかひ半分値切つたところが、

「今晩だからよろしう御座います。お引きして置きます。」

と、夜中の二時頃、風呂桶を擔ぎ込まれた。棺桶でなかつただけが幸せだと、その時は思つたが、今日物價が騰貴してみると、早く安いものを手に入れて、やつぱりいゝことをしたのであつた。と、此の間も貧妻と話したところだ。

たが、飲み暮して面白かつたのも、胃袋の達者だつた時分のことだ。金袋も大切だが、胃袋も人生幸福の最大要件だ。

二　案外淋しい正月の東京

さてこれから銘々本當にお正月の事だ。自分から人に年始狀を出すことは、可成り前からだが、元日の朝一番にバサリと賀狀のかたまりを玄關口へ郵便屋が投げ込んでいつたのを運ばせて、炬燵の上で見るのは、まんざら悪い氣持ではない。

私は國元の家から別家して、と、いつたところで、かけた皿一枚先祖のものを貰つたわけではないが、兎に角、戸籍上別家して、新に一家を開いた譯だ。私が死ねば、私の墓が御先祖さまといふ譯だ。そこで元日のことから大晦日のことまで、何もかも、自分一流の家法を創めるのだ。正月の雜煮も元日は自分一流の雜煮で、二日は祖先傳來の田舍式雜煮、三日は東京風の雜煮を食べることにしてある。それを食べてから年始狀を自分で書いた。今年まで一度も印刷したことはない。長い間丁寧に長文の賀狀を書いたが、出すところが增えるに從ひ、謹賀新年だけに留め、一昨年あたりから賀正と二字に儉約した。それでも、手首が抜けるやうだ。琴のうなりでも聞き乍ら、明るい部屋で、新しい筆で、ゆつくりと認めてゐると、如何にも正月氣分に浸ることが出來るが、こんなにふえてしまつては、最早勞働も勞働、馬鹿げきつた勞働となつてしまつて、却つて正月氣分を損することが大きいから、今年からは印刷物に決めた。

先には、午前十時頃からは、先づ門前に這入つて、早速年始

に出掛けたものだ。年始といつたところで昔世話になつた人二三軒に過ぎない。ところが、近年になつて、元日から私の家へも年始客が見えるやうになつた。それ故元日は家に居て禮を受ける。

元日外へ出た時分のことだ。東京の街は昨日までのお祭氣分に引きかへて、何處もひつそりかんとしてゐる。門松の前も、私の家などこそ、宵の飾りの安い松とは云ひ乍ら、昨夜たてばかりで新しいから生々してゐるが、商家の門松ときた日には門松を賣出しの景氣づけの裝飾に散々利用した揚句であるから、元日には、竹の葉はしぼみ、松の色も、なんとなく黄色つぽくなつてゐる。田舎の門飾りの宵のやうにはゆかない。そのかはり往來でカチリ／＼と羽子板ついてゐる娘さんや、奥さん達は見目にすゞしい。東京では、男までが羽根をつく。お床の下剃りまでが羽根をつく。

だが、元日二日は電車の中に色彩がない。恰も申し合せたやうに、電車の中に婦人の姿を見掛けない。洋服でなければ、紋付に羽織袴、それも屠蘇酒に醉しれて、稍々酩酊だが、流石に元日のこととて喧嘩をするものもない。

恵方詣り、七福神詣で、それから、[illegible]代といふやうなことも、あるさうだが、その參詣人を見掛けることはあるけれども、私は未だ寒いのに信心がないものだから、出掛けたことがない。消防の出初め式、それも新聞で見掛けるだけだ。

ことに平常賑やかな銀座通りなどは、お祭の後のやうに淋しい。商店は店を閉ぢて休業したり、又は幕を張つたりしてある。道には、昨夜の夜店の賑ひの跡か、今朝の年始客が捨てたものか、ところ／＼に紙切などが散つてゐる。

私は新聞社に勤めてゐた時分、普段なら午後に一寸二時間ばかり顔を出せば濟むのだが、元日といふのでとくに朝から引つ張り出されたことがある。そして、

「今日は手が少いから、君お氣の毒だけれど、これ等の原稿に筆を入れて、工場へ廻して呉れ給へ。」

と、外交記者の取つて來た元日の朝の方々の神社やら、お役所やらの景況を報じた鉛筆で走り書きの原稿を渡された。そして、自分が元日から働かされる辛さよりも、自分よりも前に來ても原稿を書いて廻つた人達のことを思ふと、氣の毒なやうな氣がした。

「さても勤めは辛いものだね、すまじきものは宮仕へかね。」

なぞと、冗談半分に言ふと、

「なあに、君、これや去年のと大抵同じものだらう。何の役所お向ふ島までわざ／＼出掛けるものか。毎年決つてゐることとな

んだから、天氣と雨天だけを引き換へて、後は鷗が一羽出たところへ三羽とでもすれば、それですむんだよ。」

と、笑はれた。

だが、それにしても、この原稿を書きに出て來るだけでもえらいことだ。印刷職工や配達も、無論出勤することを忘れてはならない。田舍の人が炬燵で暮す正月も、東京人はさうはゆかない。世智辛いことだ。

東京の正月で景氣のよささうなのは、大祭日の軍人と、藪入りの小僧と下女だらう。軍人の將校が、白い羽根のついた帽子をかむつて、金條の何本も這入つた軍服で劍を吊り拍車の音をさせて、道をゆく様子は、一寸羨しい。

三　大森の初日出とカルタ會の生命

まだ學校を出て間も無い時分、東京で矢釜敷しく云ふ初日出を見るために、外務省へ出てゐた腰辨先生を誘つて、大森の海岸まで出掛けた。まだ暗い間に、市内電車で品川まで行つて乘換へて、鈴ケ森へ着いた。そして、松林で旭日の出るのを待つてゐた。淋しいこと夥しい。松瀧か、何處か、さう云ふ料理屋へでも潜り込んで待てばいゝものを、まだその時分は、そんな智慧も無ければ金も無かつた時代だから、眞暗な海岸に立つて、頭愛ゝをしながら夜のあけるのを待つてゐたものだ。ところが夜が明けても、空も海も一面に墨を流したやうにどんよりしてゐて、何時までしても、日は出て來ない。寒い風が吹くばかりだ。今日に限り、眞帆、片帆の風情あるものは姿を見せず、蒸氣船さへ通はない。時々道を通る人が、私達を

「何をしてゐるのだらう。まさかに元日から身投げでもあるまいが、」

と、でも云ひさうに胡散臭さうに、まじまじと見て通る。

その中に腹は減つてくる。止むを得ず、東京へ歸つて來て、芝の増上寺の前へさしかゝつた時に、初めて太陽が薄ボンヤリと山門を照すのを見た。時計は十時半だつた。

東京のお正月の樂しみは、なんと云つてもカルタ會だらう。しかしそれは、學生時代の夢だ。それが如何に樂しいかは、紅葉山人の筆によつて、金色夜叉の開卷第一に、巧に描寫されてゐる。カルタ會ばかりは、東京の家庭のそれでなくては本當の味はひが出ない。若きは十三四から、二十四五までの青年男女が、早いのは午後一時頃からつめ掛けて、遲くも電氣が點く頃には、もう戰爭が酣にたる。隣の部屋から聞いてゐてさへも、その心が浮き立つぱりかだ。失禮といふ娘の聲がする。何糞といふ男の聲がする。お手附だわよ、ずるいわよ、と、云ふ少女

のけつたるい臭がする。遅れ馳せに参着して、沓脱ぎに赤い鼻緒の駒下駄や書生下駄がゴタ／＼あるのを見れば先づ胸がときめく。茶の間へ通れば、この家のお父さんやお母さんが、普段と違ひ、きよらかな身装をして、むつまじさうに長火鉢の両側に相対して坐つてゐるから、

「お目出度う御座います。」

と、それから今夜招ばれたお禮を挨拶しやうとすると、

「まあ、まあ、挨拶は後にして、もう戦争が初まつて居りますから、」

と、言はれて、襖を開けると、東洋古来の道徳に従つて日頃は仲に席を同じうせずして育てられた男女が、日頃のもの足り無さを満足するはこの時とばかり、いが栗頭と桃割れと、角丸と島田髷と、七分三分に分けた頭と束髪と、入乱れて、カルタに對つてゐる。横鬢に小判形のはげのある先生が——これが中で一番年長者——立つて高い所から一種の節づけをして朗々と読み上げてゐる。

「めつくり逢ひて」

と、読むが早いか、

「あら、」

白魚のやうな指先が、カルタの一隅にふれる、その刹那、それはキリ／＼と天井近く舞上る。

「見事」

と、七分三分が絶叫する。

「この野郎、敵に款を通じたな、自分の鼻毛を抜かれて褒める奴があるものかい。」

と、いが栗坊が怒號する。その間にまた一枚秘割のためにいが栗が抜かれる。

「天つ風」

「あらずるいわよ。」

とお下げが叫ぶ。

「貴方も味方して頂戴よう」

と、まつたく見知らぬ娘から私は應援を頼まれる。そして四五枚押しつけられる。これが當前の交際なら、一年も二年もしてからでなくてはと、思はれる程したしい口を見知らぬ娘から利かれるのだ。

ひと渡り勝負がすんで、新に初まる前には、読み手は鼻歌もので

「初めの一枚は空読みイ」

と、註をして、

「勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はば如何答へん」

だの、または

「浪花津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」

たど品のいゝところで初まるが、夜も更けて、皆んなが醉つたやうな氣分になる頃には、

「奥さんの錦のゆもじ質に置きうけ出すときの秋ぞかなしき」

と、いふやうな滑稽交りのものや

「鯨ほゆる玄海灘を過ぎゆけば、ゴビの沙漠に月やどるらん」

などのやうな學生らしい歌になる。

そのうちに、宿のお母さんが、鉢に蜜柑を山のやうに積んで持ち出すのをむいて喉をうるほす。また二三番進んだところで、手製のおしる粉なぞが出る。腹が出來ると藝が出る。

若いにお互に異性の優しさを感じて、草樹が春雨に濡れるやうな心持になるのは、正月のカルタ會だ。けれども、田舍の盆踊（ぼんおどり）とはちがふ。ぼん踊の後にしばしば見るやうないかゞはしい噺は滅多に聞かない。

四　正月の寄席と芝居

トランプも面白い。花も面白い。年寄までがパチリ〳〵と烏鷺を戰はす。だが、もうカルタ會に招ばれる年でもなし、それかと言つて、謠曲を歌ふ年にはまだまだ早し、と、いふ時分の吾々どもは、どうして正月を送つていゝか？

思へば萬歳と才藏のどうけた身振りを喜んで、春駒の歌や獅子舞ひの來るのを待つた少年時代の田舍の春が戀しくなる。

大正五年の正月の日記をみると、簡單に、

「家にゐても面白からず、散歩す」

と、記してある。

風に吹かれて埃（ほこり）つぽい街を散歩したとて何の面白いことがあらう。三日に淺草へいつてみた。相變らず街はゴタ〳〵してゐた。活動寫眞館の横手、射的店の店の軒並びに、一軒氷水屋があつて、其處へ醉つ拂ひの客が充滿して、醉醒（めざ）の氷水を飲んでゐたのを見てゐた時には、流石に東京だと思つた。寒中に氷水屋が繁昌するのだから。

小潟で天麩羅を食つて、街へ出て見たが、格別面白いこともなかつた。

寄席へ這れば落語家は、正月らしい噺をして笑はせるが、平常とさまで變つたところもない。芝居は流石に大入滿員の大繁昌だが、吉例により何處へいつても、曾我を見せられるに定つてゐるには閉口する。しかしこんなことも舊來のしきたりであるから、そんな心持で見たら、喫すのも嬉しいかも知れない。

五　壯哉春場所の國技館

さるだカルタも出来ず、爺さん相手に、碁を闘むでもあるまいと云ふ訳々位の年齢のものに、一番面白いのは、相撲かも知れない。四の下に居ては、櫓太鼓の勇しい音も聞かれないが、先づ朝の新聞に相撲の景気をそゝりたてられる。少しぐづ〳〵してお昼近くに出掛けると、両國行の電車はどれも殆んど満員だ。茶屋から案内されて、國技館へ這入り、桟敷へ通れば、土間に前、一階も二階も四階も見物の客でこぼれるばかりだ。眞中の土俵では、この寒中に裸体で、今取りくんでゐる最中だ。

「はつけよいや、はよいや、のこつた〳〵」

と、行司の聲も勇しい。

一勝負すむと、喝采が起る。行司は勝名乗を上げる。私は番付を見る。

「今丁度いゝところです。あれが新進十両です。一番うれしいところでせう。」

など〻、隣りの客が話しかける。

向ふの正面桟敷には徳川家達公がお見えになる。その他名士がちらほら見えると人が教へて呉れる。

「先年までは梅川さんの白い頭が、何時の場所にも見えたのですが、それが見えないので今年は淋しいやうな氣がします。」

など〻隣りの坪で兜町の仲買人らしいのが、案内して來た店の客に、説明してゐる。

その赤い毛氈の雛壇のやうなところへ、綺麗な藝者と雛妓とが、い、ちんとすましてゐる。新橋の何子たちが先へきて旦那を待つてゐるのだ。

「まだ、あつちの方にも、際立つて美しいのが見える。」

と、兜町が話してゐるから、私もその指す方へ望遠鏡を當てがつて捜したが、なかなかレンズの中へ入つて來ない。ひつかき廻してゐる中に、やうやく島田髷の可愛らしいのが見えて來る。

袴附を穿いた呼出奴が土俵の眞中へ出て扇をひろげて、東と西から力士を呼び出す。それがなか〳〵好い聲で勇しい。

双方から大きな图體な奴が、のそり〳〵と出て力足を踏み、蛙のやうな格好をして向ひ合つたと思ふと、またそれ〳〵柱の側へ戻つて來て含嗽をして、紙で一寸口元をひつこすり、出直して、又蛙の形になる。そんなことを何度もして、

「仕切だちが長いなあ」

と、見物客をいら〳〵させる。

それでいよ〳〵立上つたと思ふと、アッと云ふ間に、勝負は

すんでしまふ。私のやうなのろまには、時々どつちが勝つたのだかわからないことがあるが、行司が軍配團扇を上げて呉れるから、それでわかる。

出方が鰻めしの重箱を運んで來た。食べながら土俵入りを見る。一方の口からぴかぴかする化粧廻しをつけた力士の一群が、つか〳〵と土俵へ這入つて來て、手を左右にひろげて、それから座蒲團を二枚合せるやうに、大きな平手をふうわりと、たゝく眞似をする。そして引込むと、また他方の口から同じやうな一列が繰り込む。こんな珍らしい光景は恐らく世界の何處にもないだらう。

その中に人氣相撲の取組になると、もう前から後援會の連中が際限もなくつめかけて、今か今かと待つてゐる。

福柳と、矢筈山との取り組みだ。

しきりに歡呼の聲が湧る。

「福ちやん勝て呉れ。」

と、私の後の高い處から多勢で一度に叫ぶ聲が聞える。振り向いて見ると緋太々と、福柳後援會と張出してある側に、五六十人の男が、それに洋服を着たのが多い、銀行會社員か何かだらう。音頭取りの洋服が立つて紙のラッパを口へ當てゝ、

「振れえ、振れえ、福柳

吾等の愛する福助

こんども勝負に勝つて呉れ」

などゝ、大きく唄ふと、他の連中が一度に旗を振つて同じ唄を繰り返す。福柳は色男振つて、氣取つてゐたが、これでも嬉しさは包み切れないと見えて、時々ニコ〳〵した。愈々取り組となると、野次馬は蜂の巢をこわしたやうに騷ぎ立てる。皆一斉に立ち上つて、

「福ちやん、勝つて呉れ」

と、はねたり、叫つたり、旗を振つたりするので、見物客は皆その方を見る。

こうまでのぼせつめられると、福柳も責任を感じると見えて、一生懸命になつた證據は顏色が青くなつた。

「福ちやん、勝つてくれ」

ところが、天か命か福ちやんはケもなくころりころりとやられてしまつた。

まだ後に大錦、千葉嵜といふ大物が殘つてゐる。

その拍手喝采の眞最中に、ボールドへ白く何やら書いたのを持つて土俵の中を廻る人がある。

「おや鈍夫さん、貴方に木戸まで急用と書いてありますよ」

と、友達が敎へて呉れた。

子供が病氣になつたので、車夫が彼女の手紙を持つて、私を迎へに來たのだ。

六　正月の衆愚院

東京の正月は、議會のシーズンだ。新聞を見て、鈍夫は、多數黨の横暴振りや、少數黨の愚昧者どもの不眞面目さ加減を毎朝苦い事のやうに憤慨してゐたが、遂々耐らなくなつて、議會を傍聴にいつた、そして尼港事件に關する陸軍大臣の二枚舌、三枚舌の使ひわけの答辯やら、文部大臣の株式相場暴露されれの顔などを見て歸つてきた。そしていよ〳〵腹を立て、もう政治のことは何も言はない。

七　住吉の詣で

十二月三十一日の朝まだき私は梅田のステーションへ着いた。大阪に貸して置いた金がある譯けでは無く、自分の關係してゐた大正日々新聞社の命令で、大阪見物に行つたのだ。見物としては實に妙な日に行つたものだが、命令とあれば元日だつて、辭するやうな怠け者ではない。もつともその勤勉振りが何時まで續くものか分らないが、御馳走になつたり見物したりといふのだから、大抵勤勉にもなれる筈だ。

元日の朝は何處へ行かうか、何んでも多勢人の出盛るところへ行かうと、すりか巾着切のやうな考へを起して、友人に聞いたところが、今年の明け方は住吉のゑべす様だすが、大阪の人は男山の八幡へ參詣する人も仰山あるし、また生駒山のしやうでん様、稲荷山のお稲荷さん、住吉神社なども、雜沓するやろ、と数へて呉れたので、そのうちのどれかへ案内して貰はふと思つて、河東碧梧桐君から暇人だからと云つて紹介された宗右衛門町多喜乃屋の俳人藤原遊魚君を訪問することに決めた。

曾根崎の宿から、宗右衛門町まで、幌をかけない人力車で走ると、大阪市中の人々に、男振りを見せるには都合がよかつたが、寒いことは一通りではなかつた。そのうちに珍らしく小雪もちらほらして見えた。兩側の商店はいづれも定紋を染め拔いた幌簾を張つて店は休業の様子、それ等は東京と似てゐる。宗右衛門町だけに、黒の紋付を着た藝者達が其處にも、此處にも見えた。大阪では三ケ日の間、藝者は紋付を着るのだといふ。先年私は文展の日本畫で『宗右衛門町の夕』といふ畫を見た。芝居でやる吉田屋のやうな揚屋の前に、可愛いゝ舞妓はんが佇んでゐるところだと記憶する。

多喜乃屋の前で腕車を下りて、その門構へを見ると、どうもその畫と似てゐると思つたもその筈、その吉田屋といふのを描

いたのだとやら。以前その富田屋には八千代といふ名妓がゐたが、今ゐるのは、八千代第二世で、これも美人だか、またそんなに保くはなつてゐない。目下は果榮はんとやら云ふ人が牛耳を執つてるといふ話だ。私もその果榮はんには後日お目にかゝるの光榮を持つた。

餘談は措いて、遊魚君に逢ふと、成程如何にも暇人らしい顔をして、年始狀を見てゐた。お茶屋冥利で、その上俳人冥利で、東京の俳優、文士、その他、各方面の各士からの年賀狀もあつた。その一週間ばかり前に死んだ筈の大阪の代議士白河鯉洋君からのもあつた。代議士といふものは、冥土からさへも、選擧區民へは忘れずに、年始狀を出すのだから、そんな點は、感心すべきものだ。

「どないしませう」

と、二人で見物の相談をしてゐると、すぐ裏の道頓堀を一人漕ぎのボートで朝つぱらから漕いでる奴がある。こつちは陸から見てさへも寒さうだ。

女中が茶を運んで來る。そして菓子を運んで來た。

「詰らんもんですけれど、これが大阪の風習やさかい」

と、取つて呉れた菓子を見ると、勅題に因んだものだ。なるほど、大阪一般の風習と見えて、その後諸所を訪問したが、何處でも多少趣向はせつてゐるが、御勅題田家之早梅に因んだ菓子であつた。船成金の聞え高き勝本忠兵衛さんや、女成金の中村照子さんなどで出版した分は、緣起をかついで、東京へ持ち歸つて子供に食べさせた。自分にはとても金に運はなささうだからと、あきらめて食べなかつた。

仁助といふ男猫が瀬戸火鉢の前で頸をあぶつてゐる。遊魚君は、安全剃刀を持つて、火鉢越しに、私の髯を剃つて呉れた。春光融々たりである。つけただけの酒を飲んでしまつた時分に自働車がきた。

それを走らせて、天下茶屋を過ぎて住吉へ行つた。

有名な太鼓橋を渡ると、境内は早やなか〳〵賑ひだ。人に押され乍ら、開運のお護りを買つた。一つ二十五錢で、お護りとしては、なか〳〵高い方だけれど、錦の布で包んである。そして鬮になるやうに竹で挿むであるので女達は髪に男は帽子のリボンに誰もさしてゐる。お詣りにくる女の中には、藝者が可成り多勢ゐた。神社の裏の横手の小石をステッキや蝙蝠の先でかき廻してゐる人が幾人かゐた。訊いてみると、五の字の書いてある石を捜し當てた人は、その年運が好いのだそうだ。その直ぐ傍に末社があつて、それは緣結びの神様と見え、五六人の仇めいた新造を連れた色の淺黑い年增が、

「えゝ縁を結びなはれや」
と、云つた。娘たちは、紙を社の前の金網に結びつけた。
しかしその何れも、先刻見た芸者のやうではなかつた。遊魚君は「あゝなアスケに縁を結ばれる男は堪難やな、大方場末の女郎だつしやろ」
その中に雨が降つてきた。人々は右往左往に逃げ惑つて、幾つもある絵馬堂の軒端へ逃げ込む。今日を晴れと着飾つた色街の姐さん達が、裾をからげて、赤い湯もじの中から白い脛の丈もよく見れば大根のやうに恰好が悪いが――あらはれるのも構はずに、着物を大切にして逃げ歩く。混雑さは蜘蛛の子を散らしたやうだ。
「雨が降つて来て、別嬪さんと一緒に雨宿りするとは、神さんの御利益やなあ」
など、冗談口をきいてゐる老人もある。
私達も雨宿りかたがた絵馬堂へ這入つて、其処へ掛けてある絵馬を眺めた。由来住吉明神は和歌三神の一にして、謡曲などにも出てくるのだが、現代の歌人達は、住吉神社あるを知らない位で、神社へ参詣するよりは手取早く和歌雑誌の編輯人へ贈詣冥利に及ぶ方だから神社の方でも歌人を見放してしまひ、参詣人は讃岐の金比羅様と同様船乗りが多いと見え、山田長政が遠間神社へ奉納したやうな時の絵馬が大部分を占めてゐる。それには徳川時代の遊山船もあり、古く黒船渡来の時の船もあり、明治十年頃の風俗と思はれる蒸気船の乗組を写したものもある。
幾つもある絵馬堂をみてあるく中に雨は晴れた。
「どないします。高燈籠へでもいてみまひよか」
高燈籠は遠くから見ると、面白さうに思はれたが、登つて見ると中の階段が埃つぽくが届て、格別眺望もない。其処ら一帯いまは埋立地のやうで、大阪通ひの会社員の住居らしい家が沢山みえる。
お土産に例の住吉踊りの人形細工と、芋餅のふかし芋を買つた。五十銭で三本しかない。この辺は昔大阪の人達のくる出逢茶屋であつたといふ。紅梅亭で聞いた落語の中にも其処を材料に取つたのがあつた。
自働車の中で遊魚君と、その芋をかぢりながらこの辺から出る馬間商人の独特であつたことや、笠ケ峰の特殊部落の話などを聞いた。その晩は浪花新行を記者遊矢君等と共に、宗右衛門町の牛肉、日の出で夕飯を食べ、大阪の話を聞いた。遊矢君は寺田恒な出身の人だつた。大阪のやうなところに、吉田君のやうな粋の愛好者があらうとは、予期しなかつたことだ。大阪もため

にも、絵のためにも私は嬉しいと思つた。

言ひ落したが大阪の雑煮餅は東京のやうに四角でなく圓い。東京ののし餅はこしらへる時は簡單だが、そのかはり直ぐ角角が固くなる。これに反して、圓い餅は、こしらへる時手がかゝるかはり、長く柔いでゐる。上方は、京都は無論だが、こういふ一寸したところに、雅びなところがある。

八　大阪の流行神生駒の聖天

二日は遊魚君と同道で生駒の聖天様へ詣でた。

大阪の電車は込むと云つても、東京ほどではないのだが、この日には非常に雑沓した。電車の中から、千日前の方を見ると、人の頭が鋪石のやうに、道へべつたりすき間なく並んでゐた。東京の正月に於ける淺草よりもずつと賑やかだ。電車が込むのも無理はない。ふだん込み馴れてゐないので、乘客の心にはまだ幾分か遠慮するところがあつて、東京の電車のお客様よりは始末がいゝ。

だが、上本町六丁目から出る奈良行電車の混雑といつたら、これはまた東京でも見られない大混雑であつた。切符を買はうとする人は、三丁も列を作つて、町の方まではみ出してゐた。様々の悲喜劇を演じつゝやうやくそれに乘ることは出來たものゝ、生駒へ着くまで私達は約一時間以上立ちつゞけであつた。途中で[illegible]山へ廻らふと云ふ豫定であつたのが、その爲めに、中止せざるを得なかつた。生駒山をくり拔いたトンネルの長いこと。

「トンネルの長い云ふたら、これが、日本一だつしやろ」

と、乘客は口々にトンネルの長いのを感嘆し合つてゐた。

トンネルを拔け出たところでケーブルカーに乘り換へて、生駒山へ登るのだ。其處の雑沓といつたら全く日本一だつしやろだつた。

ケーブルカーの窓から、山へ登つて行く道を見ると、雪の降り積つたやうに小さい幟が無數に、立ててあつた。

山の上は、東京で言へば穴守、または小田原の道了權現のやうに俗地で、靈場の感じは少しも無い。流行神の止むを得ざるところだ。

地内では、盛んに香を焚いてゐるところがあつて、參詣の客は、帽子や手などをその煙にかざして、いぶ臭くして、手洗を使つたやうな氣で參拜するのだ。一寸珍らしい光景だと思つた。

電車混雑のために、夕刻五時頃生駒で歸途についた人が、やうやく十二時頃大阪へ歸ることが出來、または奈良を廻つて、汽車で歸つた人も多かつたとやら、その混雜は推して知ること

お円來る。參詣人には、婦人は極めて稀で、番頭や小僧のやうなものが多い。株式相場などに手を出す人が多く參詣するといふ。聖天様は富を授ける神様だ。

夜、宗右衛門町の菱富で夕食した。いろ〳〵の料理の後で、鰻飯を食つた。一月前などを見せたのはハイカラだと思つた。どの部屋もたてこんでゐるので、私たちは下の帳場やら、いろ〳〵道具がゴタ〳〵してゐる處のものの、茶の間で食べた。

九 呂昇の酒屋

四日の晩、松屋町の松の席で、豐竹呂昇の酒屋をきいた。呂昇が、女義太夫界で、唯一の人であることは、天下公知のことだが、何時になつても花々しいのに、何よりも驚く。私は前にも有樂座の名人會で、何度か呂昇をきいたことがある。十年ばかり前に新口村をきいたのも、まだ記憶に新しい。この晩は、非常な大入りで、途中で懸萩はんの艶やかた（僞）なるものを見たいと思ひ、新俳句發句燃各若衆な娘さんを誘ひ夕飯の御馳走になつたり、またその發句を拜見したり手間どつて行つたために、松の席へ行つても、もう席がなく、下足札もなくしまひになつた後なので、殆んどところなく新聞紙を一枚貰ひ、下駄を包んで持參して、廊下の椽側へ座蒲團を敷かせ聞くことにした。座敷としきりの障子をとりはなして、其庭には私と同様の聽衆が充滿してゐるのだ。この晩は少し風もあつたから、寒いこと夥しかつた。寄席がこんなに大入をとつたのを見た例は滅多にない。十五六年前、東京の小川亭に昇之助昇菊がかかつてゐた頃、ずいぶんの繁昌を見せたが、それも到底この比ではない。大阪人の義太夫に熱心なことはこれで想像がつかう。三四年あと、本郷の若竹に小さんの獨演會があつた時、それは丁度お盆のことだつた。やはり大入りで廊下は勿論、夏のことだから、庭にも澤山客がゐた。大阪の義太夫と東京の落語、丁度同じやうなものであらうか。大阪に、豐竹呂昇を初め義太夫の名人があれば、東京には、小さん、圓右の如き落語の名人がある。

それはさて置き、私が行つた時は、豐竹古昇の壺坂の最中であつた。その次が竹本東廣の赤垣源藏の、これも有樂座の名人會以來の馴染だ。最後に呂昇の得意な酒屋で、何時きいても耳を醒すやうな心よい聲で、その音聲の豐なことは、他に其の倫を見ない。

歸り路に、滋伯は

「あの、おも〳〵あ、このーオオオーオ、こオのオオーオが、といふところを一息にやつてのけることが、一寸他の人に出來ないところですやろな」

と、感心してゐた。そして口の中でブツブツと、その語り口を眞似てゐた。

寄席の構造が少し東京と變つてゐる。黒塗の手摺だの、天井に描いた松の繪など、吾吾には一寸珍らしい。

十　天王寺、庚申堂、丸萬の魚すき

六日に鐵成金勝本忠兵衞さん及び令息鼎一さんの御案内で先づ天王寺へ行つた。その日は風もなく暖で、とても東京の一月にはない好い陽氣だつた。天王寺の塔が高く聳えてゐるのを仰ぐのも、雄大な心持がした。境内はなか／＼廣い。這入ると間もなく中風のまじないだの、穴のあいた古錢の模造品を賣る店だの、丁度淺草の山門を這入つたところのやうに露店が出てゐる。そこで、御詠歌の折本などを買つた。天王寺の山門の柱には、小さな木の車輪がついてゐて、參詣人は手を洗ふ代りだと云つて、この車を廻して行く。

こゝの素敵に高い塔へは、丁度二十年前に來た時に登つて四方を見晴した經驗がある。こん度は登らなかつた。下には乳の出るやうにと祈る人々が參詣する布袋樣が薄暗いところに祭つてある。

南門の傍では、香具師が劍舞をしてゐた。その恰好が頗るお可笑い。足にはボロ靴もはいてゐない[illegible]「[illegible]」と、歌ふと、髪の毛をボサ／＼にのばした貧乏さうな香具師先生が錆びた長劍を拔いて舞つた。六つ七つの汚い女の子が、一ぐるりを取りまいてゐる見物人からお金を貰つて歩く。

打てば地獄まで響くといふ引導の鐘、左甚五郎の夜鳴くといふ猫の門、龜の池、等を見て、高サ二丈六尺、厚サ、四寸二千貫あるといふ大釣鐘を見た。この前二十年前來た時、丁度その模型が出來てゐた。今日それを見て、今昔の感が深い。だが、鐘は吊すことも出來ず、まだ一度も鳴らしたことが無いといふ。鐘つき堂の天井の龍の繪が、誰が見ても鬼の顔をしてゐるので、見る人が皆笑つて通る。

去年は申年だつたので、こゝの近所の庚申堂へ詣でる人も可成あつた。堂は青面金剛を祭つたものだ。くゝり猿の繪馬が澤山あがつてゐた。もとは地内に、こんにやくの關東だき即ちおでんを賣る婆さんの店があつたのださうだが、今はとり拂はれてなかつた。

猿小屋に猿が三匹ゐた。裏の方に、猿を彫つた石塔が、五ツ六ツ建つてゐた。

自働車を走らせて新世界前で下り、その大規模な花屋敷式興業物を見た。通天閣が高く聳え、ケーブルカーが客を滿載して

客中を走るのも奇觀だ。私は恐いやうな氣がしてそれには乘れなかつた。こゝは淺草のやうに雜沓してゐた。一つは景氣のいゝ興行中であつたからかも知れない。

戎橋の丸萬へ行つて、夕食をした。二階の上は東京で言へば、銀座の天金のやうに、座間は足も踏み込めない程滿員であつた。共處の料理は沖すきといつて、鯛その他の海の魚を煮て食べるのだ。東京で、はま鍋とか、牛鍋、鳥鍋、といふやうなところを、大阪では精肉すき燒、鳥すき燒、と、いふやうに言ふ。それを略して、沖すきだの、魚すきだの、いふのだ。

なか／＼美味いので、幾人前もかへて食べた。食べてるところへおたふく豆を賣りに來る。丁度寄席で中入に、菓子屋が來るやうなものだ。そのおたふく豆が素敵に美味かつた。

十一　文樂の越路

七日に御靈内の文樂を見た。此處も景氣のよかつたゝめか、素敵な大入で、とても素人に、いはんや旅鳥なぞに、その日になつて席をとるといふことなどはむづかしかつた。席は前日、前々日から賣れてゐた。五日に見たいと思つたのだが、そんなことで、七日まで延びた。御觀料もなか／＼安くない。一人前七圓といふのだ。劇場はまだ新らしかつた。人形芝居で、出し物は菅原であつた。舞臺の右に太夫さんの出語りの席が出來てゐる。後に低い金屏風をとり廻し、前に見臺をすゑて、並ぶのだ。新富座でやつても、歌舞伎座にかゝつても、太夫にあれ程の落着きと、あゝほどの榮えばえしさを、見ることは出來ない。やはり大阪の本場で語る時には、その心持が違つて緊張してゐるやうに見えた。賀の祝ひや、車引きや、寺小屋は、普通の芝居で常に見るところだが、これはまた菅相丞が流されて筑紫へ赴く道行きだの、天拜山で菅公が、祈つて雷になるところなど、私はこれで初めて見た。舞臺の眞中へ縫ひくるみの牛を引出すところなど、ナイイブでかへつて面白かつた。菅相丞はそれに横乘りに乘つてゐた。天拜山で雷になるところでは、花火のやうなものを盛んに上げるので煙は天井を這ひ、もう／＼と見物席の方まで來た。皆んなが津太夫がいゝの、源太夫がいゝの、綱がどうのと、評判し合つてゐた。

幕間ひに一寸越路の弟子の越代太夫が來て、私たちを越路の部屋へ案内して與れた。狹いその部屋で、越路から二十分ばかり、義太夫に關する抱負やら理想やら、現代義太夫界に對する痛憤やら、文樂座の經營やら、藝術談やらを聞いた。腹藏なく氣取らずに、話して與れた。

越代太夫の案内で人形の吊してある部屋を見た。第二の部屋

には菅相丞の人形を祭つてあつた。芝居をする時、祭るのは、菅公と佐倉宗五郎の二人だけだと菟代が語つた。

打ち出しの時、出口で、すぐいち(ヒョウトコ)の面とおたやん(オカメ)の面をかぶつた男が、鉦を鳴らすのに合せて、踊つてゐた。珍らしく面白いことだと思つた。

十二　大阪の經濟界

勝本さんの御案内で、北久太郎町の三品取引所やら、堂島の米相場やら、北濱の株式取引所などをみた。正月の故か、何處もそんなに活氣だつてゐなかつた。まだ景氣の好い絶頂であつたのだけれども。

中ノ島へ來て、岸本氏の鐵倉を見た。佐久間玄馬盛政が振り廻すのに丁度よさうな鐵の棒が、まるいのも四角なのも、多くの倉に澤山あつた。これは日本一の鐵倉ださうだ。

安治川の川口へ出た。船着場で朝鮮行だの岡山行だのと記した大きな荷物が道傍に澤山ころがつてゐた。正月の故か此處も靜で、たゞ恐しく寒い風が吹きまくつてゐた。

丁度流行性感冒の眞最中で朝日毎日その他の新聞社へは黒枠の廣告が、うんと出たときであつた。勝本さんは黒いマスクを當てゝゐた。風が寒いので築港の方へゆくのは止めて、立賣堀

偕に鐵岸町まで自動車を走らして、濱田氏夫人中村鼎子女史その他を訪問した。そして稲葉の大吉といふ大阪一の料亭で晩餐をしたゝめた。

十三　戎の夜宮、寶惠籠

九日の夜は、今宮の戎の夜宮だ。南の新地から、寶惠籠が出るのを見物する豫定で、また私をその寶惠籠に乘せて吳れるといふ有志もあつたのだが、丁度鳥居さんから北濱の「多景色」へ招れたので、寶惠籠の出る時間には遲れてしまつた。

その晩は、碧梧桐君も一緒で、同じ仲間の川上日東、伊藤歡魚の二君もともに宗右衞門町で落ち合つて、今宮まで歩いた。道は石ころを敷いたばかりでごろ〳〵して歩きにくかつた。かれこれ十一時であつたが、これから詣でる人も、歸つてくる老若男女も、ずゐぶんあつた。兩側には吉凶といふ縁起物を、丁度東京の西の市のくま手のやうなものを賣る店が提灯をつけてゐた。(十日戎の賣物は、お寶袋に、とりばちに、錢がます、小判に金ばん、さいづち、たばねのし、笹をかたげて千鳥足)と、唄の文句にある通り、その吉凶をつけた笹をかついだり、鬘をかぶつたりして、酒臭い息をふき乍ら、千鳥足でくる若人もあつた。神社では、しきりに

「商賣繁昌、竹持つて來い」

と、大きな聲で高いところで、多勢わめきはやしてゐる。

歸りに私は鬘を買つてかぶり、小鼓、鈴、とびぐち、等を買つてブラ下げて歩いた。お祭氣分になつてしまつた。

翌れば十日、朝からまた寶惠籠が出るので、宗右衛門町が非常な賑ひだ。私を乘せた自働車はその人波の中をやうやく分けて、昨夜の連中が待つてゐる遊興君の家へ行つた。座敷には榮龍、加代、里美、若英、秀若、里榮、きん子、君光、秀龍、千代丸、三勝、松蔵、秀野、松蔵、等の藝妓が代る代る夜まで續いて興を助けた。

お向ふの富田屋から十數挺の寶惠籠が出た。若い藝妓や、舞妓はんが、今日を晴れと着飾つて、それに乘つてゐる。丁度箱根の山駕籠のやうなもので、乘つてる人が外からよく見える。赤い着物を着た擔夫どもは駕籠の前後左右にとり廻いて

「ほゑかご／＼」

と、云ひ乍ら踊りつゝ歩いてゆく。

何處から何處まで美しい。

それが皈つたと思ふと、今度は伊丹幸から次は大和屋からといふやうに何度も繰り出した。

みんながよく話したり唄つたりした。藝妓が長くゐると、他所からのもらひがかゝるが、その時大阪では、合狀といふものを持つて來る。それを見ると、

何々様ゆゑ
一寸にてもお越しのほど
待ちいり候
何笑屋

と、してある。

一月十五日にそれ／＼新町の氏神様へ、一年間たまつた合狀を持參して、北濱で焼く習慣があるさうな。無論合狀の多い程が彼等の名譽であり、自慢であるのだ。それにつき一つ面白い話がある。否、面白いといふより哀れな話かも知れない。

北の新地、玉屋へその後遊んだ時に、ある女の口から、南のおかつといふ藝妓が、丁度、その七日か八日頃、流行感冒で死にゝつたが、其所遺言で一年間の合狀とゝもに、焼いたといふのだ。

十四　堀江と松島

川上日車君の

「堀江も一遍みといとくんなはれ」

と、いふ發議で一同は、堀江の一力へ自働車を飛ばした。若

僧、某田、豆蔵、眞子、その他多勢で馬鹿踊をして、君氏を梅田へ送つた後で、私たちはまた松島を見物した。少し格の下つた遊廓だ。町の様子は三階、四階の大厦高楼が軒を並べ、それに明りがついたところは如何にも賑々しい。嫖客はブラ／＼と道を行き來してゐる。こういふ場所にお定りの喧嘩が道傍にある。私たちは先小さなカフエへ入つて紅茶に喉をうるほした。横町へ入ると、射的などもあつた。

十五　流感と烟草の饑饉

去年の大阪の正月は流行感冒に攻められた。大阪城を見たいけれども、すばらしく多くの兵隊が枕をならべて寢てゐるとやらで、恐くつて近寄れなかつた。或る紡績工場では、三千人の女工のうち、二千人は寢込んでゐたと新聞にもあつた。私もおつき合ひに十一日の朝から十五日まで大熱を發して寢た。

それともう一つ苦しんだのは、煙草の饑饉だ。何處へ行つても煙草がない。一番先きに敷島がなくなつた。朝日もなくなつた。金口もなくなり相だ。新聞はしきりに煙草商人を攻撃した。そしてやうやくの事でチク／＼と煙草が出來て來た。面白いこともあればあつたものだ。煙草だからまだしも好いやうなものゝ、これが若しお米だつたら何うだらう。大阪市民の過半数は、此人工的饑饉に逢つてお正月だといふのに餓え死にしなければならなかつた。

十六　瓢箪山のお稻荷さん

十五日に病氣が恢復したので、遊魚、日車、一二君と共に瓢箪山のお稻荷さんへ參詣した。やはり上本町六丁目から奈良行電車に乘つて東へと進む。廣々とした冬の黒い田圃を見るのは嬉しかつた。私は冬の景色もまた好きだ。木村長門守の戰死したといふのも近いところにあるのだ。

瓢箪山といふ停車場で下りて、五六町でもうお稻荷さんだ。參詣の客はずゐぶんある。兩側には參詣人相手の、けれども少々怪しさうなお休み處が軒をならべてゐる。白い顔をした牝狐が何の家にもゐる。お稻荷さんの歸りだから化かされないやうに、眉につばをつける必要があるかも知れぬ。

お稻荷さんは少し小高い處にある。そこで皆なが御鬮を引いてゐる。私達も引いた。私がガチャ／＼と四角な木の箱を振ると、板が一枚出て來た。此前の鳥居の前の田圃道へ出て、第一に會つた人の風俗や云ふ言葉を聞いて、歸つて判斷所へ行つて判斷して貰もらへといふのだ。川上君が引くと二番目に來た人から辻うらを得るやうにとあり、遊魚君が引くと、三番目の人か

ら得るやうにとあつた。

茶屋へ寄つてダイヤモンドをいれて咽をうるほした。そして天井を見ると天井にもまた居労きにも辻うらた深山つるしてある。私もまたそれを一つ買つた。水地比木吉とあつた。奏的に好いことづくめだ。そして終りに芸者の背頭が一つ違つてゐて、その上に都々逸判断といふのがある。その都々逸に

ぬしの代なら命もあげる
苦労ぐらゐは我のうち

とあつた。田舎出とは思ひながらも、昔ならば悪い気持はしない。

鳥居前へ行つて向ふから人の来るのを待つてゐた。田圃の中の一ト筋の道だ。日に晒されたまく瞭つてゐたが、正月の風はなかなか寒い。暫く待つうちに一人来た。これが私の運命を定める人間なのだと思へば、冗談にするのだとは思ひながらも、何となく心が緊張して来る。

十二三の百姓の子供の姿が見えて来た。大阪の繁華な都市に幾日か遊んで来た眼で見ると、さすがに田舎の子供は、美しくない。日にやけて粗相な顔をしてゐる上に、正月だといふのに、髪も刈らないのか、ぼやぼやといがくり頭の毛がのびてゐる。如何に水呑百姓の子でも在所の正月なれば、もつと垢ぬけてゐたであらうに。私の運命を決定しやうとする重い責任をもつた此子供は、何といふみすぼらしい姿だらう。唯何とも頼とも我意を強くするものは其色黒く顔が丈夫さうなことだけだ。見ると彼は、何らや棒のやうな物を口へくはへてゐる。

「彼の子の口にくはへてゐるものは何でせう。」

と、訊くと、日東君は

「笛たんね」

笛だ。けれども少しも音がしない。彼は吹いてゐないのか。いよいよ私達の前を通る時近寄つてみれば彼は確かに吹いてゐる。吹いてはゐるが鳴らないのだ。鳴らないと定つた笛を何んで彼は吹きつつ行くのだらう。

遠くの方へ第二の人が現はれて来た。川上君は

「来た。来た」

と、叫んだ。そして遊魚君と二人でその近づくのを見つめてゐた。

その時、私の心の中には、自分の運命の判断が出来た。もう判断所まで引き返して、冗談半分に、訊きに行くには及ばないと思つた。

私の判断はかうだ。私は大阪へ来て、鳴らない笛を吹くのだらう。私は鳴らない笛を授けられたのだらう。鳴らないと知り

ながらその笛を吹かないわけにはゆかないのだらう。何んといふ厭な運命だ。それが私の今年引いた圖なのだ。

私は、ごつ〳〵する程身にしみて感じた。そして冗談に辻うらを引いたことを悔いた。もうお稻荷さんの參詣は冷かしではなくたつてしまつた。

當時、私は新たに出來た大正日々新聞社の記者として、勿論一日も出勤しなくも好いといふ條件つきで、その新聞社としてはかなり優待されて幹部の一人として迎へられたのだ。そして今度大阪へ來ても、これまでの素寒貧に似合はず、行くには自働車に乘り、私の前には珍味佳肴が供へられ、側には美人が侍べるのだ。それにもかゝはらず、その歡樂の裡にゐて、私は今度大阪へ來たその日から何となく前途の不安を感じ出した。別にこれといふ證據はないが、自分の今してゐる仕事が、何時まで續くやら、そして、我々の努力は、容しく水泡に歸することはないだらうか。といふやうな妙な不安が時々胸を襲ふのだつた。

私の書かうとした大阪見物記は、何ういふ理由か知らないが、つひに私の新聞には掲載されなかつた。そればかりでなく新聞社もまた解散するの餘儀なきに至つた。私は本當に鳴らない笛を投げられたのだつた。

第二の人は近づいた。それは工夫のやうな男で、毛皮の服をはいてゐた。彼は私達の前を通る時、ニコ〳〵と思ひ出し笑ひをした。これが日東君の今年の運命かも知れない。皆喜こんで笑つた。三人目には子守りつ子が來た。

十七　阿彌陀池、名物粟おこし

こんなことで大阪へ歸つたがまだ時間が早かつた。夕飯には間があるし、さりとて此處で散り〳〵に別れてしまふのは惜しいといふ考へが誰の胸にもあつた。そこで阿彌陀池へ行くことにした。物部守屋が佛像を浪花の堀江に投げ込んだといふ古蹟だ。小さな池があつて、池の中に一寸面白い堂がある。そこでは絕えず燈明をともして、昔から今日まで灯の消えたことがないのだといふ。

私が名物の粟おこしを買ひたいといひ出したので、有名な粟おこし屋へ案內してくれた。それは、更らに有名な二つ井戶のおこし屋とは違ふ。袋にも箱にも梅鉢の紋などが付いてゐた。

日が暮れたので、船場の丹䑓(丹頂雁彌助)の料理を喰べに行つた。此近くには、東橫堀が流れてゐて人々が布を晒らしてゐる。此處を曲りといふのだ。河童が出ると言ひ傳へて、醉者などはこゝへ船遊びに連れて行かれるのを恐れるさうだ。此邊は

其間はどんな處か知らないが、大問屋ばかりのところらしい。丁度日本橋の問屋街を夜歩く時のやうに、眞暗で淋しく人にも會はない。犬すらめつたに見かけない。正月といふのに恐い程淋しい。

晩に出來たので、今度は北の新地の川ら乃へと自働車を走らせた。藝者も多勢出たが名を忘れた。その頃鴨緑江節といふのが流行つてゐた。大阪は滿洲や朝鮮へ往復する人々が立ち寄るから、さういふ歌を殘して行くのであらう。北の新地は梅田の停車場に近いから、東京人の多く遊ぶところだ。馴染みの客があると見えて藝者はしきりに東京の話を聞きたがる。そして東京へ行きたがる。

十八　夕霧伊左衛門の古蹟

十六日に新町の吉田屋を見に行つた。夕霧伊左衛門の古蹟だ。京都へ行けば歴史上の古蹟が山程あるが、大阪へ來ると淨瑠璃の古蹟が山程ある、近松門左衛門と井原西鶴の名を弄ぶ者は、それらの作物の古蹟をも知らなければならない。

風の吹く寒い晩だつた。或る文學好きのお巡査さんが私を迎へに來たので、岩氏と共に新町へ行つた。奧西館三といふ人の家で、大阪の詩人にして大阪研究家たる岡田播陽君が待つてゐた。播陽君は元日の朝から六甲山へ登つて大鹽平八郎の遺蹟を探り、山の中に泊り四五日ゐて歸つて來たところだとて、いろ〳〵珍らしい話をされた。奧西の主人は前に新町には、本庄多田屋といふ茶屋が有つた、そこには古い記錄があつたのだけれども、もう滅びた、昔此處の娼妓は轉進（まんた）と云つた、昔新町橋西詰に大門があつた、また東詰の東辻に井戸があつて、それを井戸の辻と云ひ、嫖客はその井戸で身を清め、それから遊びに來たなぞと昔話をした。此主人が私を案内してくれ吉田屋へ行つた。その門口だけが昔のまゝだと云はれてゐる。茶の間には八方といふ古風な物が天井に釣つてあつた。燈し油の代りに今は電氣が這入つてゐる。何の部屋にも客があつたので、部屋を見る事は出來なかつた。又、夜のために夕霧の遺物も藏にあるので見られなかつた。裏は道をへだてゝ土手になつてゐるらしかつた。眞の暗で何も分らない。奧西氏がやうやくのことで、碑の句を讀んだ。

だまされて來て誠なり初櫻

歸ると、俳人青木月斗君も來て、藝者と一緒に踊つてゐた。

十九　千日前の大阪落語

十七日に大阪朝日の森山君から電話があつたので、夕方から

その社を訪ねた。あの宏壯美麗な建築物には感心した。それが新開社であるのだから驚ろく。これも大阪名物の一つと云へる。

二人で梅月へ天ぷら食ひに行つた。此家の良人は關西切つての哥澤唄ひで藝名を芝無名太夫と呼び大阪哥澤界の牛耳を取つてゐるとやら。

此家の天ぷらは輕くつて金ぷらのやうだ。客が多勢のため別室で暫く待たされた。

千日前の紅梅亭といふ小色物寄席へ行かうとして、道で遊魚君と會つた。そこで三人で行つた。千日前の夜の賑はひと來たら、その明るさは晝のやうで、非常な混雜だ。小便横丁は一寸暗いが、法善寺附近の賑はひは格別だ。紅梅亭はそこにある。

紅梅亭も殆ど滿員であつたが、特別席へ割り込むことが出來た。丁度圓枝の掛取りといふ大阪落語が初まつてゐたが、それは終ひまで何のことやら解らずにしまつた。筋も落も解らないでしまつた。けれども大向ふは大喝采(かつさい)であつた。私は一寸外國へ來たのではないかと思つたくらゐだ。そのつぎに、常盤津文字花の沼津があつた。圓馬は東京辯で芝居話をした。花橘は、壽限無の話をした。そして棆錆びを踊つた。神樂のお獅子を冠つた男が二人出て、勘平と伴内の道化芝居をやつた。

私達の直ぐ側に大阪の人氣力士二瀬川が、若い藝者を二人連れて來てゐた。今日まで全勝で通したのだといふ。そして明日は九日目なのだ、彼は私達にそこで持ち合せの帯を寄贈してくれた。

大阪落語にも私に能く解るのもあつた。さう云つては失禮かも知れぬが大阪の言葉は元來落語や茶番、時には喜劇にさへも持つて來いのやうだ。曾我の家が出たのも偶然ではない。

千日前のお多福といふ居酒屋で、一寸休んだ。もう夜はずゐぶん更けてゐるのだがまだ宵の口のやうに賑つてゐた。

二十　天滿、大長寺、大融寺

十八日はいよ〳〵主なる處を見てしまうといふので、自働車を傭つた。仁徳天皇の、玉の宮居の跡だといふ高津(かうづ)神社へ詣でた。それから直に生玉(いくたま)へ廻つた、どちらも高いところなので大阪を一と目に見下せる。

自働車を大阪城の方へ走らせて馬場(ばゝ)を過ぎ、天滿橋を打ち渡り大川べりを走らせて、左りに天神橋を見た。

「天神橋(てんじんばし)長いなあ、落ちたら恐いなあ、」と子供が歌ふその橋だ。淀川も此邊まで來れば、洋々として如何にも大河の感がある。橋は、大阪三大橋と數へられる物で大阪人の自慢の一だ。

私達は自働車を待たせて置いて、天滿宮に詣でた。境内の三

岡一の甘酒屋で甘酒を飲み、それから有名な稲荷ずしへ這入つて、ぬくずしといふ暖かいすしを喰べ、稲荷ずしを土産に買つた。

[illegible]の大道君に会ひ、君からの細かい説明を聴きながら、地内を散歩した。三人一緒になつて網島の大長寺へと走らせた。東京と違ひ大阪は、自由に狭い道を自動車が走ることを許さない。運転手は交番へ行つて頼んで通して貰つた。網島には藤田男爵の宏壮な邸がある。其邸を過ぎて大長寺へ行く。

小春治兵衛心中した跡だ。二人の墓は、円形な石に井桁の紋をこんな彫つて、上に赤いよだれ掛けを掛けた小さな地蔵さんが座つてゐる。座つた地蔵さんは一寸珍らしい。地蔵さまのよだれ掛けには、巳年の女と書いてあつた。

　作寒く見にゐげたの紋所

遊魚君が取りあへず口ずさんだ。

大融寺へ行く。此寺には千安座中安がある。前の柱におんべいを着た子猿が木登りをするところが彫りぬいてある。裏には淀君の墓もある。

二十一　大阪相撲

十九日には、大阪国技館の相撲を見た。十日目なのだ。大阪の藝者に芝居の話をすれば、

「成駒屋はんを見に連れてつとくんなはれ」

と、必ずねだる。しかるに相撲へ行かうかとさそへば、

「東京相撲なら見に行きたうてたらへんのやけれど、大阪相撲なんて行く気になりしまへん」

といふに極つてゐる。

私は南方へ行く電車の終点前の大阪国技館へ行つてみて、その理由が明かに成つた。

建築物も小さい。お客はバラ〳〵で桟敷はまるきり明いてゐた。

勝負の済んだ後、私は大阪角力協会の二階で年寄や四本柱の話を傍で聴いてゐた。そこへ洋服の紳士が来た。それは八田博士とか木下博士とかいつた。紹介されたのだけれども、つひ忘れて申訳が無い。ただ何の道博士は大阪角力の熱心な後援者である事が角者諸君は分ればいい。博士は頻りにその日の勝負の八百長的なのを憤慨して言葉を極めて協会を責めてゐた。協会では一言も無いと謝罪してゐた。

夜、楽天地を見た。大きな建築物の中に客は充満してゐた。新派劇歌劇活動写真等、恰で浅草の縮図と思へばいい。

[illegible]よし、といふ[illegible]で立ち喰ひした。

二十二　男山八幡の厄除

電車の中に廿日厄除男山八幡宮祭禮の廣告が出た。正月四日奈良春日神社節分の廣告も出た。それを見たから、私は厄年でもないのに一人で男山へ遊びに行つた。

ずゐぶん參詣の客があつた。白羽の矢をかざして歸つて來る人に澤山出合つた。

二十年前、私は矢張一人旅で此社へ詣でた昔を偲び出た。その時はまだ京阪電車はなく、汽車を山崎で下りて淀川を舟で渡り土手を歩いて來たのだつた。その時は茶屋も何軒も無かつた。參詣人對手に物賣る店なぞは一軒も無かつた。阪の中腹の清水の湧く處に爺さん婆さんがその時十二歳の一人の男の兒と茶店を出してゐて、木彫の小さい鳩を賣つてゐた。

もうその店は跡方も無かつた。爺婆もゐなかつた。

俗惡な露店や飲食店が澤山出來てゐた。私は何れにも寄る氣が起らなかつた。淋しい心持で大阪へ歸つた。

北陽、道頓堀を散歩して「旗のバア」でウヰスキーを飲んだ。お酌さんといふ口の大きい愛嬌者がゐる。此バアは大阪の智識階級の青年が來る店だ相な。

二十三　難波座と初大師

正月二十一日は東京でも川崎の大師さまへ詣る日だ。天下何處でも大師樣のお祭りだ。大師といへば弘法大師だ。

大阪の大師廻りは、それは〱盛んなものだつた。大師の數が大阪中では八十八ケ所ある。それを黄色いおさご袋を首に懸けて一週するのだ。之を仕組んだ面白い大阪俗謡さへも有る位だ。

今日は多喜之家の文學好きの仲居おしづ君が案内で歩いてくれるといふので、九時頃から出かけた。天氣はよし、非常な人出だ。

先づ千日前の竹林寺へ詣でた。そこには昆布茶の接待があつた。大師さまには生ぜんと云ふて大根と昆布の供へ物が仰山有つた。線香の烟が盛んに立つてゐる。

十數ケ所廻つて、下寺町で飴を買ひ、その先きの圓正寺で五もく飯の接待を受けた。こゝの二月堂へはお百度を踏んでゐる人もあつた。ゴーン〱と心地よい鐘の音が聞こえ。

何處の寺にも接待があつた。茶も無いところには焚き火の接待がある。人々はそれへ寄つて暖まつてゐた。

殆んど何の寺にも大師さんが有つた。小さいのも大きいのも

木のも石のも樣々有つた。中には又磁像のも料紙のも有つた。老若男女はそれへ米を捧げたり(極めて少しづゝ)錢を投げたりした。

天王寺の賑ひは、又一通りのものではなかつた。引導の鐘をついてゐた。そこで坊さんに木片に名を認めて貰ひ、龜の池へ來てそれを長い竹びしやくへ入れて中へ卸してゐた。池の周圍はさういふ人で押し合つてゐた。

覗きからくりも出てゐた。浪花さんの不如歸などを、哀れな聲で唄ひつゝやつてゐた。子供の乞食芝居もあつた。六つ位の女の兒が七八つ位の男の胡弓を弾つた男の兒の袂を抑えて、

「貫一さん。そりやあ、あんまりだわ。」

「何があんまりだ。人に知らせずに默つてこんなところで、初めつから富山と添ふつもりだつたのだらう。」

と黄色い聲の貫一が言ふ。

人々は周圍から小錢を投げた。

一番有名なドンドロ大師へは、天王寺からずゐぶん有つた。天王寺近くまで電車で來てそれから幾つもの大師を參詣して、やうやくドンドロ大師へ着いた。この邊は狹い道を人で押し返してゐた。

ドンドロ大師は津の國八十八ケ所の中で、一番有名なばかりでなく、又一番商賣も上手だつた。石の大師木の大師繪の大師は無論、人間の形をしたものは何んな佛像でも並べ立てた。大きな不動樣もゐた。前鬼後鬼を引き連れて役の行者までが隣接に來てゐた。善男善女は役の行者にお米を投げて

「南無大師、遍照金剛」

と口の中で呟いて過ぎる。

午後からは辨天座見物をした。正月の芝居が繁昌することは京阪ともに變りは無いが、花柳界の人氣者成駒屋はん中村雁次郎丈で客を呼ぶ辨天座の大入りと云つたら、又實に壯んなものだつた。

高土間で一人前金十七圓也とは、以てその景氣を知ることが出來やう。茶屋への祝儀や幕の內や酒代までも合算すれば實に少なからざる金額に成る。しかも此滿員。しかもこの大入りだ。

この日は兄さん將棋興甲君も一緒だつた。

一番目狂言はダメンチオの翻案物で大阪寄席夫妻とその弟との三角關係の戀愛悲劇だ。その次「西鶴吉之助と月照」では薩摩潟の波の起伏で見物を何よりもヤンヤと言はせた。

大塔寺堤の返り討。討たれる兄ゆ雁次郎丈で扇の藝妓はん泣かを迄とゞろかせ、眼を泣きはらす。雁ちやんもそな罪なお

弟さんたるかな。梅玉、雀右衛門、[illegible]、福助、長三郎の諸君又鞍揃ひと来てゐる。

紙治。しぐれの炬燵は雁次郎妙な手つきで泣くやら笑ふやら、おさんの福助、五左衛門の卯三郎、丁稚の三五郎が長三郎、何れも好評であつた。

二十五日は天満大神のお祭りで家内安全のお護りを出し、九段の祭りのやうな繁昌だつた。

こんなことで七[illegible]した。

その後、天下茶屋[illegible]八[illegible]でた。天神さまも此所では[illegible]の[illegible]で大小の[illegible]が[illegible]山上がつてゐた。

廿九日夜、碧氏が私を送別するとて[illegible]のれん[illegible]丸屋へ連れ行き、大阪自慢の料理を腹一ぱい食べさせた。そこの蒸むしの美味さは、今も思ひ出すと涎が流れる。（終り）

人買船

藤澤衛彦

黄昏の逢魔が刻を附込んで、いにし世の人浚ひといふものは跳梁した。隠蔵(かくれざと)の隠れ子に魔が射して其儘神隠し(かみかくし)にされたの、遊歩きの村童が鎮守の杜近くで天狗に掴まされて行つたなどいふ取沙汰の裏面には、えて此人浚ひといふものゝ秘密が纏綿してゐた。

其頃の神出鬼没なる人浚ひは、かくて只管に衆愚と天網の目を遁れて横行し、その結社の悪漢は、傳統の呪咀的策略を縦にして變幻自在に活躍した。或時は、普化宗派の袈裟がくれに尺八の音色を忍ばす虚無僧となつて、彼等は街より街を遊行して来た。或時は、消極的な曲調(メロディ)の身に泌む「父母(ちゝはゝ)の恵みも深き粉河寺(こかはでら)佛のちかひ頼もしきかな」西國第三番札所の御詠歌を歌つて、彼等は節と鈴とに餘りの涙を添して来た。また或時は、越中から来る[illegible]師、富山の藥商人(くすりうり)、イヤホウ……ポンポンと鉦も鼓打も[illegible]の素袍を着「常盤かに御萬歳(まんざい)……」と古

異な事詞に正月を三河萬歳に化けても這つて來た。今から凡そ四百年前、戰國の世の騒亂が鎮つた後にまで、引續き江戸時代の良民を苦めたので、徳川將軍は、再度、

條々（元和五己未年十二月廿六日被二仰出一御條目）

一、人を勾引し賣り候もの、死罪の事。

一、人を買取り、夫より先に賣り候もの、百日の籠舍、其上、過怠其分限を考へて可二申付一候、若し不レ出者は、死罪の事。

一、人賣買御制禁の上に、雖レ爲二譜代一或は我子賣候あたへ賣人買人從二双方一可レ出レ之、則ち賣られ候ものに取持し、可レ任二其身之存指一事。

一、かどわかされ賣られ候ものは、其本主へ返すべし、若し主人なきものは、是も其身存分次第の事。

一、人賣買之儀、久敷住候者に、可レ被レ行二死罪一、一夜之宿は、糺明の上、依二其罪一可レ爲二曲事一事。

云云といふ法令を出して嚴禁したけれど、不良漢や人身賣買者一味の徒黨は、お調べ嚴重な箱根の關所をさへ、自由勝手に往來し得てゐたのであつた。

されば道中の婦女子の、ふと此勾引されの策謀を被つた者、一々は擧げて數へきれぬ、昨夜の宿から近付の親切さうな道連が其親分であつた。乗つてゐる驛路の駕籠の雲助は其配下であつた。人も通らぬ山中をエイホウエイホウと誘拐されて、籠丁の掛聲も氣味惡い、とある辻堂などに舁下され、とゞのつまりの脅迫三昧、儘にされて憐れ人買の手に渡り、憂い辛い涙の果が、都島原花の吉原、太夫に花魁に賣られて來た類も隨分にあつた。

近くは徳川の治世に於てさへこのやうにして絶えなかつた。ましてずつと古の此種の手段の跋扈さはどうであつたらう。文獻に、千年の昔なる朱雀天皇の承平二年に、夙く京師に盜多く南海に賊起り人攫ひ人買の跋扈した事を記錄してゐる。傳説が次本帝子を傳へ男女組を傳へ譯代丸を傳へ秘事を傳へ、殊に酒顛童子鬼ケ岩屋の鬼賊が良家を襲ふて婦女を掠め、海賊重太丸の偶日が港港に船を動つて少年者を勾引した事を傳へてをるのも總て其頭の事で、それらの徒輩に誘入られた被害者の法外に悲惨な物語も段々に傳へられてゐる。

梅若丸といふ京の稚兒に、比叡の月林寺を離れ一往の途次、大津の浦に船を繋いでゐた陸奧の信夫の藤太といふ人商人に賺し欺かれて、知らぬ吾妻に連行かれ、貞元元年丙子三月十五日、藤太が秋田の人肉組に値入交渉の間隙、旅の勞の重くして、終に隅田河原に行倒れとなつた。隅田關屋の里人ども驅集り

『お前見しか、故郷に、名は、年はと問へば、其下の人にもあらず、京北白川吉田少將の一子十二歳とて、「尋ね來てとはゞ答へよ都鳥隅田河原の露と消えぬと」の辭世の一首あはれに、新柳烟ふかきを香華になぞらへしや、人々が昔亂の稱名新しき中に息絶えた。今木母寺の梅若塚とて、縁起は言ふにや及ぶ。物語の本謠曲にまで、見る者聞く者に新しき涙を催さしめる。それはかかなべて九百四十六年前の物語であるが、女の身の上では、それより更に四十年前、千葉もわが行手に騒ぎ、野分の風の後より吹き送れど、眞帆張詰めた船ならぬ陸路はまどろしと迎への輿にいそいそ、上野國沼田庄より同じ國の玉村へと嫁ぎ行く十六の處女が、土地の侫者に捕へられて、地頭の手から、當時下野の國府包圍攻擊中の平將門の許に捧げられたためしもある。俗說に和歌御前と呼ばれ、綾戸城に置かれた將門の寵姫は彼女だらうであるが、一說には、下總國結城郡山川村大字粕糧字若御前の平坦なる畑中に一小石祠をなして、春風秋雨一千年、呪はれたる戀を悲しく、彼女の眠るところとも言ひ傳へられてある。

思へば王化の陵夷して、風俗頹廢し、下情の上達せざる世態はあさましい。美人若御前の頃の東國は、朝綱いやが上に弛み、守介掾等僭恣を極めた時代で、漁獵盛んに行けれ、鬼賊盜人人從心の群、また時を得顏に跋扈した。

當時騷亂の犧牲者として、とりわけあはれを止めたのは、かの天慶の將門の同情者たりし故を以て、久しく兵貞盛藤原秀鄕等の黨に憎まれ、讒訴の末遂に國を逐はれ、延講勾留、罪なくして筑紫に配流となつた、前の奧羽五十四郡の太守岩城判官將氏（或は正氏、又政氏。）の身の上であつた。岩城の沒落が、所謂將門の僭亂とどのやうな交渉があつたかは明かでないが、俗說によれば、それら虛構の讒言中傷の間に、大江郡司時廉なる者の陰謀が巧まれてゐたといふ事は、隱れもない事實だらうである。

大江時廉は、岩城の一族であつたとも、或は又その從類であつたとも言はれ、「丹後舊事記」などによると、大江の族は殊に丹後方面に發展した形迹があり、「丹波佐渡山地藏菩薩緣起」によると、共遠大江繁時といふ者の領地であつたことなど見えてゐる。岩城氏の岩城地方に於けるは最も古く『稱德天皇神護景雲三年、文部山際賜二姓於保磐城臣一、大國造道島島足之所レ請也云云』と史に見えてゐる。將氏の事蹟は地方の記錄に見えぬが、將氏より後には、磐城好島熊野社藏延德中の古文書に岩城五郎、飯野八幡宮藏文永中の古文書に岩城尼御前の署名あり、「奧羽茶話記」によると、共〇磐城次郎大夫平則道は藤原清衡の女（秀衡

の妹)を娶つて五子を生み、五郎を割いて分與すと見え、「岩城傳記」には、文治五年岩城太郎平清隆當郡の地頭と見えて、その[illegible]野岩城居城のやうに記されてゐるが、青森地方の口碑では、奥州の郡司岩城判官正氏津輕居住の由を言ひ傳へてゐる。古淨瑠璃では、又、判官殿を、奥州信夫郡としてゐるが、それは宮城野の妹を信夫、伊豆の流人の侍女が陸奥のしのぶよづま、椎若を勾引したが信夫の藤太、岩城判官の息女安壽姫の父の名を正氏などと、總て奥州にゆかりのある者を誰とはなしに、唯わけもなくしのぶと呼ばせるのが、淨瑠璃作者の常套手段であつた。

岩城判官には、安壽姫の他に、彼女よりは四つ歳下の對王丸(一に津師丸、又、厨子王丸に作る。)といふ男子があつたが、其頃未だ幼くして、父が流されの身たるを知らなかつた。聞いて慕いたのは彼が九歳の折で、「或時謂レ母曰、凡爲レ人者必有レ父、我何無レ父、母告レ之以レ實也、於レ是欲下尋二其父一而與レ母同出上遂往也。」云云、と、「丹後國田邊府志」は、母子の一行が行方遙けき旅路に彷徨ひ出る徑迹を示してゐるが、これより他に確實な記錄は見當らない。とにかく、一行はどう道を取つたか、手許それの年それの月それの日越後國直江津に辿り着いた。既に說經の「山椒太夫」によると、[illegible]川に掛け渡した應化橋の袂に一群は來た。潮汲女の云つた通りに、新しい高札が立つてゐる、書いてある國守の掟も、女の詞に違はない。人買が立ち廻るなら、其人買の詮議をしたら好ささうなものである。旅人に足を留めさせまいとして行暮れたものを路頭に迷はせるやうな掟を、國守はなぜ定めたものか、不束な世話の燒きやうである。併し昔の人の目には掟はどこまでも掟である。子供等の母は唯さう云ふ掟のある土地に來合せた運命を歎くだけで、掟の善惡は思はない。云云」と、それから、潮汲女に敎へられた通り、橋の袂から河原に降り、岸の石垣にぴたりと寄せて立て、ある材木の下で、儲ろない一夜を明さうと定めた折、母子はここで人買の山岡太夫に出會つた事になる。山岡は勿論人買だなどと名乘りはしなかつた。「わしは山岡太夫と云ふ船乘ちや、此頃此土地を人買が立ち廻ると云ふので、國守が旅人に宿を貸すことを差し止めた、人買を捕へるとは國守の手に合はぬと見える、氣の毒なは旅人ぢや、ここでわしは旅人を救ふて遣らふと思ひたつた、さいわひわしが家は街道をはなれてゐるので、こつそり人を留めても、誰にも遠慮にはいらぬ。」と、たうとう母子のものは誑されて、山岡の宿を借りた。そして其處から船路を案内するといふ山岡の舟に乘つたが、間もなく又母子は山岡の手から佐渡二郎宮崎三郎といふ他の人買に賣渡されたと

いふのである。さういすると此忠勵の若人買船の如、だ海のす
く湧いた汐入の洲の果に、どんよりと光つてゐるのは夕暮の越
後の海、川口には商人船が二艘舫つてゐて、深い靄の下から
火光(ほかげ)がちらちら見える。すべて直江津浦ぞひの村はづれ荒川橋
の橋の景、橋の袂には岩城の遺族主従が大變に疲れきつた容子
で菅笠夜着に眠りこけてゐる。其様子を見た人買の山岡太夫は、
橋の上から川口にゐる船に聲を掛ける、『およい、およい、佐渡
の島の牛藏出て來い、蝦夷が島の九助出て來い。』聲に應じて兩
方の船から船頭が顔を出す、三人が聲を潜めて人商賣の談合最
中、かなた濱傳ひに大勢人の足音がして大江時廉の討手が現は
れる。人買の姿は船の中に隠れる、討手は忽ち一群の寢姿を見
付けて喚き立て競ひかゝる。一群はびつくらして目をさまし、
從者らしい前髪の若者が討手に渡り合ふ。一頻り劇しい立廻り
があつて、遂に若者は討手を追つかけて入る。その隙に老猾な
討手の頭が引返して來て母子のものを搦めやうとする。此時ぬ
つと横合から山岡太夫は現はれ出て、討手の頭を不意打にす
る。そして『今また敵が忍んで來まいものでもない、お前がたは
暫くあの船に隠れてゐなさるがいゝ。』と、從者を氣づかふ母子
に助勢を誓つて船に乘込ませる。もうしめたもの、山岡は、母
君を佐渡に、姉弟(はらから)を蝦夷に、引放ち引渡して漕出させる。母君
の船は北へ漕ぐ、姉弟の船は南へ漕ぐ、『あれあれ』と母様アよ、
母様ア』と呼び交はす親子は唯遠ざかり行くばかり、此れは子供
の行末を護らうため海に身を投げやうとして佐渡に摑み倒され
る。『この上は、お互ひに命を大切にして、今一度この世で逢ふ
やうに願つてゐる。』と、再會を期するうちにお互ひの船は隔つ
て行つた。淨瑠璃芝居は實に始めからしてかく涙を絞らせる
が、すべて傳説の筋はそれほど明かでない。然し大體の仕組は、
說經にしろ、淨瑠璃にしろ、小說にしろ、盡く一定の型に嵌つて
ゐて、例へば甫の船に、安壽姫對王丸は宮崎の手で津々浦を賣廻
された末、丹後國由良湊(ゆらのみなと)に非道に積み得た實を誇る三莊太夫の
家に賣渡される、二人は此處で慘酷に追使はれ、紋切形の愁嘆
場を展開するが、それら皆、「田邊府志」などに、『三郎遂レ船而
着ニ丹後國由良浦一、於レ是彼三庄大夫買ニ安壽津塵二人一而爲ニ奴
隷一矣、安壽汲レ水弟津塵採レ薪、其辛酸不レ可ニ勝稱一。三庄大夫之
三男就レ中勇悍強戻、痛加ニ呵責一、似ニ羅殺鬼一也。云云』とある
記錄傳說を敷衍し潤色したものに過ぎないのである。

弟は日に三荷の柴を刈れ、姉は日に三荷の潮を汲め、それで
さへ手に餘る仕事だのに、一刻の休息も與へられず、間があれば
弟に藻鹽焚く手傳ひをせえ、姉は絲を紡げと、殆んど人間の成
し得ない過度の勞働を強いられての虐待に、弟は柴刈り拂ふ鎌

お姫六、姉は荒磯路を行きなやんで雨的む葉にまだ馴れぬ顔き町の雨に□く、潮と川に濡れそぼつ稀淨波女が、明けゆく暁に、暮れゆく宵に、□□嘆く姉の呟くを見ては、あれは對王の歎く火か、□□方は父のゐます筑紫の空か、母がゐますといふ離れ島の方かと、見かへる度に胸せまり、泣けば泣くとて打擲せられる。女の身はどうでもよいが、大切な弟を卑陋たらしさに終らしたくないと、□日弟を勧めて密に逃れしめる。津輕藩通両寛□十於和江村國分寺、住僧津梁曇猛納二古笠二而隱取、三莊大夫及れ□□門水冊埋城捨、住僧□□答時、大夫五千容去。云云」と「□□□□」に見えてゐる。

その國分寺のいひ傳へによると、住持は、一日二日過ぎての夜のうちに、その古笠を背負ふて京師に上り、七條朱雀の權現堂に到□一對王丸を放ち去らしめたといふことである。これは役の□田□□□たどの傳ふるところと同じだが、一説には又、住持は自身背負ふて行つたのではない、從者に背負はして行つたのであるの、いふまでもない、對王丸を剃髪の小僧に仕立て逃がしたのだなど、こういふところ種々の異説があるが、そんな穿鑿はどうでもよからう。何にせよ對王丸に逃れ終はせたのだ、これだけはいつの氣もはらはらと弟の身を案じてゐる安壽姫のこれから□氣にかゝる。

あの方が逃げたからは、どうでもなくては濟まされまいと他の奴僕の思惑より以上の拷檻は、果して忽ち安壽姫の上に降りかゝつた。『知つて逃したか』『はい、』『どこへ逃がしたのだ』『知りませぬ、』姫も勿論強い打擲を豫期してはをつたが、これは又あんまりな、火責め水責めと日に夜に責め抜かれた揚句、酷たらしくも苛み殺されたといふ。否その間際を、醜い死骸を殘すまいとの處女の美しい心がけから、入水して亡き人の數に入つたといふ。その魂魄此土に留つて、母と弟とに付添ひ、一念はよく岩木の家を再興さしたと、『賢女烈婦傳』などに傳へらるゝ無類傳説の、その普殊に時間には附せられなかつたと見えて、安壽姫の靈異なつて神となるとの傳説ある津輕岩木山の神は、甚だしく丹後の人を忌嫌ひ、若し忍びても丹後の人の此地方に入る時は、天氣大に損じて風雨打續くと信ぜられてゐる。其穢所の出入無く、津輕領甚だ難儀に及ぶといふ事で、天氣惡しければ何時にも嚴しく吟味し、果して丹後人入込みをる時は急に送り出すの風習であつたさうだが、不思議と丹後の人津輕領の界を出れば天氣またたく間に晴れて風靜まると言ひ傳へた。此事たるたゞに土俗のいひならはしにて忌嫌ふのみならず、藩政の時代には、永く降雨打續き氣候不順なる時を限り、きつと、西は大間越より東は小湊迄、七十餘里の津々浦々は勿論、

國中一般に布令を出して、役所の船中まで丹後人の有否を改め、例へば相撲等の如き興行物も、その生國を改め、丹後人は決して入るを許さなかつたといふ事である。これは津輕の舊記類に見えるばかりか、立派に藩の記錄文書にも實證を殘してをる事で、安政五年五月二十四日の布令にはかうある。

　頃日天氣不正に付、御領分へ丹後者入込候哉も難計に付、右體之者見當候者、早速送返候樣、尙亦諸勤進等も吟味仕候樣被仰付候間、御家中並在町寺社共不洩候樣、此段可被申觸候以上。

　　　　　　　　　　　　御目付

　天明五年の頃、折から奧州津輕の外が濱滯在中であつた橘南谿子は、其地に打續く風の吹きかたが惡いといふので、所の役人の、丹後の人は居らぬかと嚴しく吟味してゐるのを怪しく思つた。由緣(いはれ)を問けば珍らしいので、其著「東遊記」に仔細を傳へ、『(上略)靑森、三馬屋、そのほか外が濱通り、港々最も甚だしく丹後の人を忌嫌ふ。あたりあやしければ、いかなるわけのありて、かくはいふ事ぞと委しく尋問ふに、當國岩城山の神といふは、安壽姬出生の地なればとて、安壽姬を祭る。此姬は、丹後の國にさまよひて、三庄太夫に苦しめられし故、今に至り、其國の人といへば忌嫌ひて、風雨を起し、岩城の神荒れたまふとなり。外が濱通り九十里餘、皆多くは漁獵または船の通行に一に世渡りのこととなしたれば、常々最も順風を願ふ。然るに、丹後人入りたる天氣にさはりあることとなれば、一國こぞつて丹後の人を忌嫌ふ事にはなりぬ。此武講境にも及びて、松前南部等にても、港々にては、多くは丹後人を忌みて送り出す事なり。かばかり人の恨みは深きものにや。』と書殘してゐる。

　說經淨瑠璃の多くでは、安壽姬の生命(いのち)につつがなく、却つてめでたしで終つてゐるが、古口碑は大方三庄太夫の鋸挽に斃れたとしてゐる。死骸は例の國分寺の僧が取收めて寺邊に埋め、塚を築いて跡葬ふたといふことで、今にしるしい庵を殘し、そのあたり幾多悲しき傳說を語り次いでゐる。佐渡には又畑野といふ處に、その後對王が母を尋ねて再會の砌り、かたみに建てたと言はるゝ姉の供養塔といふがあつて、昔は相當の祠堂であつたさうだが、寬政年中何ぞ官禁に依つて取崩され、今ただ名殘りの塚のみとなり、そのあたり悲しく、

　　くちてかひない安壽の墓に、誰が菫(すみれ)を植ゑたやら。

一種の民謠を傳へてゐるが、これぞ佐渡在來の古歌

　　陸奧(みちのく)にくちもはてなで菫咲く機野(はたの)の露と消えんとやする。

といふ、安壽祠堂奉納の一首から脫胎したもので、人はこの陸奧の歌を安壽姬の辭世ともするが、恐らく後世の附會であらう。明治になつて、佐渡巡遊の鈴木重嶺子が此邊に立寄り、

立ちよれば何に消れぬる年を經し畑野の奥の路の古塚。

と詠んだ時、それが何人の墓と認めて詠んだかは明かでないが、「佐渡名勝」などいふ土地の案内記などが、塚を安女の墓とし、且つそれもかれたいやなとして口碑を記してゐるのは遺憾である。

然し、對王丸が佐渡を訪ねたのは、彼が丹後守任官の後で、それまでには猶幾多の波瀾があつたやうである。傳說によると、對王丸は、七條朱雀の權現堂に放たれてから、那兒に扶けられて清水寺に到り、其處で偶々授けた子を前關白師實の上卿梅津院といふに斡旋してゐる。これが對王丸運の開け初めで、それより彼は梅津院と父子の契を結び、忽ち參內となり、忽ち僧階を與へられ、而して其年の除目に忽ち丹後守に叙せられてゐる。「[illegible]」には記して「上卿中有梅津院者、秘藏無老年無子、而詣清水寺祈以求二子一也、小竹就睡、夜夢告曰、汝子在堂裡、何以不覓之哉、梅津院夢覺而値二津[illegible]丸一、召而問[illegible]也、[illegible]我家[illegible]之、[illegible]拜[illegible]、諸[illegible]之、於是津[illegible]丸出[illegible]、[illegible]見而[illegible]所[illegible]、津[illegible]丸[illegible]丹[illegible]、即申官爲[illegible]於佐渡、云云」と言つてゐる。此事は六年の歳月にかかり、餘に妥協性なく傳說の矛盾多く、文字も亦誤謬であるが、後世の戯曲・淨瑠璃・小說など、多く事跡をこれに取つてゐるやうである。最も古くこれに取材したのが說經與七郎の正本「さんせう大夫」で、これに次げるが淨瑠璃山本角太夫の正本「都志王丸」、岡本文彌及び其門人の語物たる「三庄太夫」などで、これら皆民間に傳奇的に物語のあはれさをあとづける力となつてゐた。その後のものでは、紀海音に「山椒太夫五人嬢」(寶永九年豐竹座登場)及び「山椒太夫葭原雀」(享保九年豐竹座登場)、竹田出雲に「三庄太夫五人嬢」(享保十二年竹本座登場)、後れて寶暦十一年に竹田小出雲の「山良淺千軒の者(實は近松半二、三好松洛等合作。)などがあり、小說には江島其磧の「咲分五人娘」(享保二十年刊行)最も古く、降つて不乾齋雨露に「三庄太夫由良湊長者入船」(文化九年刊行)、東西庵南北に「山良湊入船日記」(文政五年刊行)などがあつて、時代を經るに從つて潤色の度が甚しくなつてゐる。

それは兎に角、對王丸は、記錄の傳ふるが如く佐渡に渡つた。その頃佐渡の國府は雜太にあつた。對王丸は此處に立寄つて、恐らく役人の手で隠密を、調べて貰つたでもあらうが、母の行方は容易に知れなかつたらしい。そのうちに、ふと鹿野浦あたりに、折々人買船の立寄るらしい形跡があるといふ事を耳にしたので、出雲の從者を連れて、片邊の路を辿つて見ることにした。此途に、俗に四十一町と呼ばれる佐渡國中略一の難所であ

つた。[illegible]下に盡して、[illegible]大字諸川村鹿野[illegible]の七[illegible]坂の下に出ると、其處に怪しい一軒の家があつた。諸ふた[illegible]主は留守らしいので、從者を裏の方にやつて見ると、畑の畔に立つ一盲目の女が鳥を追つてゐる とのこと、對王丸が行つて見ると、影のしよんぼりした憐れげな御姿が痛ましい聲に歌をつぶやきながら鳥を追つてゐた。

あんじゆ戀しやほうらほい、
つしわう戀しやほうらほい。

對王丸ははつとした。――私も此唄には思ひ出が深い、幼い折に屢々聞かされた山莊太夫の物語の、今もなほ耳の底に遺つてゐる佳の北唄の文句を口にすると、幻のやうに安壽對王の母君の鳥を追ふあはれな姿が腦裡に浮ぶ。昔は、ふと誰かがうたつてゐるのを耳にしてさへ涙を催さずにはゐられなかつたものだが、何故かその後六段の淨瑠璃にある鳥追ひの唄には一向なつかしみを持たなかつた。

安壽戀しや ほうやれほ、
對王戀しや ほうやれほ、
鳥も生あるものなれば、
追はずも立てよ疾う疾うと。

さあれ對王丸ははつとした。そして、直と鳥追ふ歌の主に駈

安[illegible]て、[illegible]に[illegible]たが[illegible]その[illegible]當[illegible]合つたといふ。」[illegible]によるに、[illegible]といふものゝ今も七回り坂の下に住するさうであるが、その後罪せられて子孫絶えた佐渡二郎の持地であつた跡へは、何を蒔いても一切生えず、耕地とならないので、今もつて荒地の儘で、印の榎が僅に殘つてゐるばかりであると、これは「佐渡風土記」に記されてゐる。奥方の怨みは、そればかりでなく、永く片邊の河の水にも殘り、奥方が眼を洗つたといふ中川には、日に三度の毒が流れると言ひ傳へられてゐる。

片邊鹿野浦中の水飲むな、毒が流れる日に三度、

この民謠の秘むる呪咀傳説について、同山溪北（明治二十五年、七十五を以て逝く。）の「行部日記」は、『（前略）飯後暫憩而發、有二一長坂一、崎嶇屈曲、俗稱二四十二折一、名洵不レ誣也、過二鹿浦村一、有二三水一、一曰鹿浦、二曰中川、三曰研米、相傳、昔有二佐渡二郎者一于此、隷レ人爲レ生、嘗獲二二女子一、皆公卿之子、適亂流離在レ此、二郎苦使極苛、二女弗レ忍二荼毒一、卒投二中川一而死、爾後、此水有レ毒飲者必斃、故俚諺曰、莫レ飲鹿浦中川水、有レ毒流來日三次、今無二此異一、俗説不レ足レ信耳、云云』と言つてをるが、溪北の時代には、既に口碑は奥方よりも安壽へ傾いた

傳說を作り、のみならず、小州與人傳說を混交してゐた。口碑傳說の訛説の甚だしきは、その他、佐渡二郎の傳說を山椒大夫として傳ふるものさへある。(「佐渡國誌」などの說がこれで、これには、其地に要を埋めたところ、萱草と化つたといふ說が見えてゐる。又、大正元年一月十二日東京朝日新聞所載、高木敏雄氏寄稿の「傳說安壽姬」も、之によつてゐる。併しながら古い佐渡の口碑は、決して之を安壽對王の上に言ひ傳へたものでなく、ましてや又丹後の由良の長者である山莊太夫の上に言ひ繼傳すべくもなかつたのである。即ち「鹽尻」に於之しとれは、佐渡より歸帆した志賀右衛門なる者の見聞を傳へて、小木より北九里ばかりに、俗云の都志王丸の母、此島に賣られ、粟園の鳥を追ひし所とてあり、今草木生せずといふ。云云」といひ、明かに安壽對王の母なる者の傳說であることを語つてゐる。たゞ小木より左里といへるもの、聊か不審せらるべきではあるが、これは、安壽の伴者塚傳說と母の傳說とを同時に混じ傳へたとすれば解釋が出來ぬでもない。

さて、對王丸がかくてめでたく母に伴ふて京に上り、更めて丹後國に下ると、例の「田邊府志」の「熊野郡於丹後、而入國分寺、同殿禮拜之矣」といふ順序になる。和江の四十八町、今の國分寺は名のみにて、昔の大伽藍の俤はなく、礎石ばかりを殘してゐるが、對王にゆかりのあるものとしては、姉の安壽が墓どころかしるしばかり、曾て對王が此等に馳込んで非常ならぬ護にあづかつた筈の三尊の阿彌陀如來も何時の頃からか田邊の國主の領からるゝところとなつたと、「丹後國變化物語」は記錄してゐるが、それも今ではどうなつたやら。

今の驛路を若狹街道から丹後に入れば、田邊を出てから大舟峠、越えて中山の驛、程なく由良の渡し、續いて和江村となる。「若狹紀行」には「かく和江村かつへ坂由良の湊千軒長者三莊太夫の古跡、七曲り八峠の險路には三莊太夫首代松あり。云云」と見えて、此處の險路の、佐渡の四十三折を髣髴させるものがある。その由良は鹽燒く磯邊、ところの人について聞けばすぐわかる、山椒太夫が屋敷跡、長者が的場、首引の松、山椒大夫の塚、その塚にもしるしの松が植ゑられてある。「記錄」に「北後國山椒太夫及三男三郎同左男左郎一也、餘三子救之於見被家殆滅焉、其松在于近所、見首拜以竹鋸挽三般山椒太夫之頸所也。」とある山莊太夫殺されのところは、海邊に近い山の谷間で、此處で竹鋸で引かれたといふのであるが、そんな慘酷なむしやうき、果してわが對王丸がさしたかどうかは保證しない。この點、淨瑠璃などの、長者自ら劍を拔いて腹に突立て、この上楼の竹鋸を竹鋸に見立て、主殺しの大罪人の刑罰に

よそへならば我とわが頭を叩つたとしてゐるが、作事にせよ紙を納める。その墓跡は、あたりの地より少し高くなつてゐて、常に線香などが供へられてある。何の爲かと尋ねて見たら、何時の頃からとなく、疫病除などに祈つて效驗があるといふ俗信を作つたのださうな。線香は其頭ほどきの捧げ物だといへば、信心がらで直つた者もあると見えると、これは見て來た者の話。

此長者名を何故さんせう太夫といつたか、それは屋敷に山椒の木を栽ゑて居たからだとか、由良橋立成相三個の莊の地頭職であつたからだとか、山分に住む太夫にて山莊頭であつたからだの、まつた所謂お手製の提灯といふをぶら下げられて、この長者の古屋敷の中に入つて來られた柳田さんは、算所と呼ばれた祈禱業者まで引張つて來て、まことに委しい說明をされたが、穿鑿は諸君に興味もあるまいから割愛するが、ただ傳說の場合、いつも三庄太夫が長者であつたといふ事は、決して沒却してはならない事で、昔は人商賣者が長者と結びついて仕事をしてゐた、いや少くも長者合手に渡つたり買つたりして來た人間を賣り込んだ時代があつたのではあるまいかと思はれる節がある。そして、かうした長者の沒落には、何時も、日輪招戾しとか、金鷄呪咀とか、財寶呪咀とか、血餅の怪異が結び付く。長

者が娘子の作留りであれば、如何に貴族ではなくなり、貧民へなどから、たつた一つの不足が現はれると、もうそれが長者の衰運の兆となる。或は美しい一人娘が入水して果てたり、蛇體の罰を取つたりする事も一つの形式であるが、山莊太夫の場合では、無道の極みを盡すといふことと、奴僕を酷使するといふこと、五人の息子が揃つて無慈悲だつたといふことが、その沒落の原因となつて居るが、淨瑠璃物語などでは、既に一人の娘が鷄娘で、毎日夜明の一番鷄の鳴く時分になると、床の上で鷄のやうに羽づくろひをして、狂氣のやうに鷄の聲作りをする不思議な因果が報ひ來てゐる事に作られてゐる。

かゝる長者沒落の傳說に、人の感興を唆るに足る對王丸の出世譚などが附隨した事は、偶々此傳說をして、長者モーチーフ人買傳說の權威たらしめた所以であつたらう。惜しい事には、此物語の主人公である對王丸の任官關係が明かでない。根氣よく丹後の國史舊記の類を繙いて見たが、大概對王丸在世當時前後の國守の記錄傳說を缺いてゐるので、遺憾ながら今のところ對王丸一族は、永く口碑傳的人物たるのみに終らなければならない境遇にある。（をはり）

想華

芝刈

吉村冬彦

私は自分の住家の庭としては寧ろ何もない廣い芝生を愛する。吾々階級の生活に許される程度の僅かな面積を泉水や植込みや石燈籠などでわざ〳〵狹くしてしまつて、逍遙の自由を束縛したり、唯さへ不足勝な空の光の供給を制限しやうとは思はない。樹木も勿論好きである。美しい草花以上にあらゆる樹木を愛する。それで若し數千坪の庭園を所有する事が出來るならば、私は思ひ切つて廣い芝生の一方には必ずさま〳〵な樹林を造るだらうと思ふ。そして生氣に乏しい所謂「庭樹」と稱する種類のものより、寧ろ自然な山野の雜木林を選み度い。

併しそのやうな過剩の許されない境遇としては、樹木の方は割愛しても、芝生だけは作らないでは居られなかつた。さうして木立の代りに安價な八ツ手や丁子のやうなものを垣根の裾に植ゑ、それを遠い地平線を限る常綠樹林の代用として冬枯の蕭涼を緩和する外はなかつた。仕合せに近所中一體に樹木が多いので、それが背景になつて樹木の綠にはそれ程餓ゑる事はない。

それで許され得る限りの日光を吸收して芝は氣持よく生長する。無心な子供等に踏み躪らされても、酷しい氷點下の寒さに曝らされても、此の粘り強い生命の根はしつかりと互にからみ合つて、母なる土の胸にしがみ付いて居る。さうして父なる太陽が赤道を北に越えて回歸線への旅を急ぐ頃になると、其の歸りを豫想する喜びに堪えないやうに浮き立つて新しい綠の芽を吹き始める。

梅雨期が來ると一雨毎に綠の毛氈が濃密になるのが不注意なものゝ眼にも際立つて見える。靜かな雨が音もなく芝生

に浮らて浸み込まれて居るのを見て居ると、本當に天界の甘露を含んだ一滴々々を、數限りもない若芽が、其葉脈の一つ〳〵を微音に波打たせながら、呼吸もつかずに吞み乾して居るやうな氣がする。

雨に曇りに、午前に午後に、芝生の色はさま〴〵な變化を見せる。或時は強烈な日光を斜に受けて針のやうな葉が金色に輝いて居る。其上をかすめて時々何かしら小さな羽虫が銀色の光を放つて流星のやうに飛んで行く。

それよりも美しいのは、夏の夜更けて家内も寝靜まつた頃、讀み疲れた書物をたゝんで椽側へ出ると、机の上に吊したゞ燈の光は開け放された間を越へて芝生一面に注がれて居る。真暗な闇の中に擴げられた天鵞絨が不思議な綠色の燐光（フオスフオレツセンス）を放つて居るやうに見える。或時はそれが又底の知れぬ深い淵のやうに思はれて來る事もある。此れを見て居ると疲れ熟した頭の中がすうつと涼しく爽かに和らいで來る。私は時々庭へ下りて行つて色々の方向から此の闇の中に浮き上つた光の織物をすかして見たりする。それから其の眞中に椅子を持ち出して空の星を點檢したり、深い沈默の小半時間を過ごす事もある。

芝の若芽が延び初めると同時に、此の密生した葉の林の中から數限りもない小さな生き動くものゝ世界が産れる。去年の夏の終りから秋へかけて小さなあはれな母親達が種屬保存の本能の命ずるがまゝに、そこらに産みつけてあつた微細な卵の中では、吾々の夢にも知らない間に、世界で一番不思議な奇蹟が行はれて居たのである。其の證據には今試みに芝生に足を入れる事とそこからは小さな土色の蚱蜢や蛾のやうなものが躍つて飛び出した。蟋蟀や蜘蛛や蟻や其他名も知らない昆蟲の繁華な都が、蟲の眼から見たら天を摩するやうな綠色の尖塔の林の下に發展して居た。

此の動物の新世代の活動して居る舞臺は又人間の新世代に對しても無盡蔵な驚異と快樂の材料を提供した。子供等によつて此等の小さな蟲をつかまへて白粉の空箱へ入れたりした。何の爲にそんな事をして小さな生物を苦しめるかといふやうな事は少しも考へては居なかつた。それでも蟲の食物か何かの積りで、むしり取つた芝の葉を箱の中へ詰め込んで、それで蟲は充分滿足して居るものと思つて居るらしかつた。其儘忘れて打つちやつて置いた箱の底にひつくり返つて死んで居る蟲を見付けた時は矢張りいくらか可愛想だとは思ふらしい。それで垣根の側や樹の下へ「蟲の御墓」を拵い

て花を供へたりして、さういふ場合に大人の味ふ濃密な感情の孔子に類したものを味つて居るらしく見える。子供は蟲をつかまへたり、いじめたり、殺したりするのは矢張所謂種屬的記憶と稱するものゝ一つでもあらうか。此のやうな記憶或は本能が人間種族からすつかり消へ去らない限り、强者と弱者の關係はあらゆる學說などゝは無關係に存續するだらう。とついこんな事を考へたりした。

子供等は又よくかやつり草を芝の中から捜し出した。三角な莖を裂いて方形の枠形を作ると云ふ六ケしい幾何學の問題を無意識に解いて、そして其々の空間の微妙な形式美を味つて居る事には氣が付かないで居た。相撲取草を見付けては相撲を取らせた。そして不可解な偶然の支配に對する怪訝の種を小さな胸に植ゑつけて居た。

芝の中からは蒲公英や酢漿草（かたばみ）や其他色々の雜草も生へて來た。私はなんだか其れを引拔いてしまふのが惜しいやうな氣がするので其儘にして置くと、何時の間にか母や下女がむしり取るのであつた。

夏が進むにつれて芝は益々延びて行つた。芝生の單調を破る爲に所々に植ゑてある小さな躑躅やどうだんや薔薇などの根元に近い處は人に踏まれない爲に殊に長く延びて、それが何となくほうけ立つてうるさく見え出した。母などは病人の頭髮のやうで氣持が惡いと云つたりした。植木屋へ端書を出して刈らせやうと云つて居る内に事に紛れて數日過ぎた。

其内に私はふと近くの街の鍛冶屋の店に吊してあつた芝刈鋏を思ひ出した。例年とちがつて今年は閑である。そして病氣に障らぬ程度に身體を使つて、過度な讀書に疲れた腦に休息を與へ度いと思つて居た處であつたので、丁度適當な仕事が見付かつたと思つた。芝の上に坐り込んで靜に兩腕を動かすだけならば私の腹部の病氣には何の差支もなさゝうに思はれた。尤も一概に腕や手を使ふだけなら腹にはこたへないと云ふ簡單な考が間違ひだといふ事は既に經驗して知つて居た。例へばタイプライターをたゝいたり、ピアノを彈いたりするやうな動作でも、どうかするとひどく胃にこたへる事が屢々あつた。殊に文句に絕へず頭を使ひながら急ぎ込んで印字機の鍵盤をあさる時、彈き馴れない六かしい曲をものにしやうとして努力する時。そういふ時には病的に過敏になつた私の胃はすぐに何等かの形式で不平を申し出し

た。併し此れは手や指を使ふと云ふよりも寧ろ頭を使ふ位らしく思はれた。芝を刈るといふやうな、器械的な、虚心で出來る動作ならば恐らくそんな事はあるまいと思はれた。少くも一日に半時間か一時間位づゝ、少しも急いだり努力したりしないで、氣樂にやつて居れば差支はあるまい。こんな事を考へたから私は試みに兩腕を動かして鋏を使ふ眞似をして見た。まだ實際には經驗しない芝刈の作業を強く頭に印象させながら腕を動かして見たが、腹に力を入れるやうな感覺は少しも生じて來ないらしかつた。念の爲に今度は印字機に向つたつもりになつて兩手の指を動かして居ると何時の間にか横隔膜の下の方が大分に堅く凝つて來るのを感じた。

此のやうな假想的の試驗があてになるかどうかは自分にも曖昧であつたが、兎も角も一つ實物に就いて試驗をして見て、もし障りがありさうであつたらすぐに止めればよいと思つた。

風のない蒸暑い或日の夕方私は一番末の女の子をつれて鋏を買ひに出かけた。燈火の乏しい樹木の多い狹い町ばかりの此邊の宵闇は暗かつた。めつたに父と二人で出る事のない子供は何かしら改つた心持にでもなつて居るのか、不思議に默つて居た。私も默つて居た。或る家の前迄來ると不意に『山本さん……セツ子さんの御内は此處よ』と云つて教へた。多分幼稚園の友達の内だらうと思はれた。「セツ子さんは毎朝お父さんが連れて來るのよ」……「お父さんは何時になつたら御役所へ出るの。……出るやうになつたら幼稚園迄一處に行きましやうね」こんな事をぽつり〳〵話した。表通りへ出ると流石に明るかつた。床屋の硝子戸から洩れる蒼白い水のやうな光や、水菓子屋の店先に並べられた梨や柿や黄い色彩は暗闇から出て來た眼に眩しい程であつた。併しその隣りの鍛冶屋の店には薄暗い電燈が一つついて居るきり一層恐ろしく陰氣に見えた。店にはすぐに數へ盡される位の品物——鉄や鎚、鋏や庖丁などが板棚の上に並べてあつた。私の求める鋏は唯二つ、長いのと短いのと鴨居から吊してあつた。

丁度夕飯をすまして暗い前で楊枝と團扇とを使つて居た鍛冶屋の主人は、袖無の襦袢のまゝで出て來た。そして鴨居から二つの鋏を取り下して錆びた歯を口で吹き〳〵しながら兩臂を動かして工合をためして見せた柄の短い割に刃の長く頑丈なのが芝刈專用ので、もう一つのは主に樹の枝などを刈るのだが、芝も刈れない事はない。

芝生の有様に負けない者でなくては通用しないが、少しばかりなら芝生でもいゝ。素人の家庭向きのには此はよいゝかられないなどゝ說明しながら、其處らに散らかつて居る新聞紙を刈つて見せたりしたが、かういふ物にはやつぱりの呼吸ですから……。こんな事を云つた又幾枚か剪り散して、其の切屑で刄の脊を拭いたりした。

芝を刈る鋏と云へば一通りしかないものと簡單に思ひ込んで居た私は少し當惑した。此のやうな原始的な器械にそんな分化があらうとは豫期して居なかつた。どちらにしやうかと思つて交る〴〵二つの鋏を取り上げて工合を見ながら考へて居た。成る程芝を刈るにはどうしても專用のものが工合が好いといふ事は自分にも明白に了解された。併しそれで枯枝などを切ると刄が缺けるといふ主人の言葉は本當らしかつた。

私は何だか試驗をされて居るやうな氣がした。主人は團扇と楊枝を使ひながら往來を眺めて居た。子供は退屈さうに時々私の顏を見上げて居た。

とう〳〵柄の長い方が自分の今の運動の目的には適して居るといふ或る力學的な理由を見付けた、と思つたので其の方を取る事にした。さう決めた傍でこんな事に迄あらはれる自分の妥協的な考へ方に對する不滿の念が隱れて動いて居るのを感じないわけにはいかなかつた。

鋏を柄に固定する目釘を未ださしてないから少し待つてくれといふので、それが出來るまで其處らを散步する事にした。暫く步いて歸つて來て見ると目釘はもうさゝれて居て、支點の軸に油をさして居る處であつた。店先へ中年の夫婦らしい男女の客が來て、出刄庖丁をあれかこれかと物色して居た。……私がどう云ふ譯で芝刈鋏を買つて居るかゞ此の夫婦に分らないと同樣に、此の夫婦がどういふ徑路からどういふ目的で出刄庖丁を買つて居るのか私には少しも分らなかつた。其の庖丁の未來の運命も無論誰れにも分らう筈はなかつた。……それでも妻を櫛卷に結つた顏色の妙に黃色い其の女と眼付の險しい男とを此の出刄庖丁と並べて見た時には何だか不安なやうな感じがした。此れに反して私の鋏が何だか平和な穩かなもののやうに思はれた。

長い鋏をぶら下げて再び暗い屋敷町へはいつた。今迄默つて居た子供は急に饒舌になつた。いつ芝を刈り始めるのか。

刈る時には手傳はしてくれとか。今夜はもう刈らないかとか。似た事をのべつに饒舌つて居た。父が自分で芝を刈るといふ事が餘程珍しい面白い事でもあるやうに。

しかし私自身にとつても、それは矢張珍しく新しい事には相違なかつた。

宅へ歸ると家内中のものがいづれも多少の好奇心と、漠然とした明日の期待を抱きながら交る〴〵此の新しい道具を點檢した。

翌日は晴天で朝から強い日が照りつけた。餘り暑くならない内にと思つて鋏を持つて庭へ出た。

何處から刈り始めるかといふ問題がすぐに起つて來た。それは何でもない事であつたが又非常に六ケしい問題でもあつた。色々の違つた立場から見た答解は色々に違つて居た。出來るだけ短い時間に、出來るだけ少しの力學的仕事を費して與へられた面積を刈り終るといふ數學的の問題もあつた。刈りかけた中途で客間から見た時になるべく見にくゝないやうにといふ審美的の要求もあつた。一番延び過ぎた處から始めるといふ植物の發育を本位に置いた考案もあつた。こんな事に違つた種類の見方をとつて來るとすれば、兎も角も科學的に能率をよくする爲に前に擧げた第一の要求を充す方法を撰んだ方がよさゝうに思はれた。能率を云々する場合には人間を器械と同樣に見るのであるが、今の場合には其れでは少し困るのであつた。もと〳〵自分の健康といふ事が主になつて居る以上、私は此際最も利己的な動機に随つて行く外はないと思つたので、結局日蔭の涼しい處から刈り始めるといふ極めて平凡なやり方に歸つてしまつた。

すると又すぐに第二の問題に逢着した。芝生と、それより二寸位低い地面との境界の處は、芝の生へ方も亂雜になつて居るし、葉の間に土塊などが交つて居る爲に、刈りにくゝ面倒である。其の上に刈り取つた葉がかぶさつたりすると始末が厄介であつた。それで先づ此の境界線の生へ際を整理した後に平たい面積に掛る方が利口らしくも思はれた。併し此の生際の整理は極めて面倒で不愉快であつて、見た處の效果の少ない割の悪い仕事であつた。

おしまひにはそんな事を考へて居る自分が馬鹿らしくなつて來たので、好い加減に、無責任に、だらしなく刈り始めた。

蒼白い刃が垂直に平行して密生した芝の針葉の形に動くたびにチャク／＼と気持のいゝ音をたてゝたほした。或は根元を切られても矢張り同志もたれ合つて密生したまゝに直立して居る。その底を潜つて進んで行く鋏の中頭につれてムク／＼と動いて居た。鋏をあげて覗すと、切られた葉の塊はバラ／＼に砕けて横に飛び散つた。刈つた跡には黄褐色にやけた朽葉と根との網の上に、眞白にもえた芽が、針を植ゑたやうに現はれた。そして強い土の香がぷんと鼻にしみるやうに立ちのぼつた。

無數の葉の一つ／＼が極めて迅速に相次いで切斷される爲に生ずる特殊な音は色々の事を思ひ出させた。理髪師の鋏が濃密な髮の一束／＼を剪つて行く音にいつも一種の快感を味つて居た私は、今自分で理髮師の立場から又少しちがつた感覺を味つて居るやうな氣がした。それから子供の時分に見世物で見た象が藁の一束を鼻で卷いて自分の前脚の膝へたゝきつけた後に、手際よく束の端を口に入れて藁のはかまを噛み切つた、あの愉快な音を思ひ出したりした。併し何故此の種類の音が愉快であるかといふ理由はどう考へても分らなかつた。音の性質から考へれば此れは雑音の不規則な集合で、音樂的の價値などは無論無いものである。併し或は此れは聽感に對する樂音に對立させ得べき觸感或は筋肉感に對する樂音のやうなものではあるまいか。音自身よりは寧ろ音から連想する觸感に一種の快を經驗するのではあるまいか。それ共又もつと純粹に心理的な理由によるものだらうか。或はひよつとしたら吾々の祖先の類人猿時代の或る感覺の記憶でないとも云はれないと思つたりした。

鋏の進んで行く先から無數の小さなばつたや蟀が飛び出した。平和——であるかどうか、それは分らぬが、兎も角も人間の眼から見ては單調らしい蟲の世界へ、思ひがけもない恐ろしい暴力の惡魔が侵入して、非常な目にも止らぬ速度で、空を蔽ふ森を薙き立てるのである。劇しい恐慌に襲はれた彼等は自分の身長の何倍、或は何十倍の高さを飛び上つてすぐ前面の茂みに隱れる。さうして再び鋏が其處に迫つて來る迄はそこで落付いて居るらしい。彼等の恐慌は單に反射的の動作に過ぎないか、或は非常に短い記憶しか有つて居ないのだらうか。……魚の觸感を研究した人の話によると海中で威嚇された魚は僅に數尺逃げのびると、もうすつかり安心して悠々と泳いで居るといふ事である。……今度の大

で荒らされた地方の木に巣をつくつて居た鴉は、砲撃が止んで數日經たない内にもう歸つて來て、尚も同じ彈丸の雨に吹き晒されて坊主になつた山の窪凹で、平然と子を育てゝ居たと傳へられて居る。尤もさう云へば戰亂地の住民自身も同樣であつたかも知れない。又或る島の火山の爆烈火口の中へ村落を作つて居たのが或日突然の爆發に空中へ吹き飛ばされ猫の子一つ殘らなかつた事があつた。さうして數年の後には其の同じ火口の中へ何時の間にか又人間の集落が形造られて居た。此んな事を考へて見ると蟲の短い記憶――蟲にとつては長いかも知れない記憶を笑ふ事は出來なかつた。無數に群がつて居る蟲の中には私の鍬の爲に負傷したり死んだりするのも隨分ありさうに思はれて、多少酷たらしい氣がしないでもなかつた。併しどうする事も出來ないので構はず刈つて行つた。此等の蟲は害蟲だか益蟲だか私には分らなかつた。

子供の時分に私の郷里に信心深い老人が居た。彼は手足に蚊がとまつて吸はうとするのを見付けると、靜に其れを追ひのけるといふ事がゴシップの口から傳へられて居た。そして其れが一つの笑話の種になつて居た。私も人並に笑つては居たが、其の老人の不思議な行爲から一つの謎のやうなものを投げられた。そして今日になつても其謎は解く事が出來ないで此儘になつて居る。のみならず此の謎は長い間に色々の枝葉を生じて益々大きくなるばかりである。例へば人間が始まつて以來今日迄付て斷へた事のないあらゆる闘爭の歴史に關する色々の學者の解説は一つも私の腑に落ちないやうに思はれた。……私には牛肉を食つて居ながら生體解剖(ヴイヴイセクシヨン)に反對して居る人達の心持が分らなかつた。……人間の平等を論じる人達が其の平等を猿や蝙蝠以下におしひろめない理由がはつきり分らなかつた。……普通選擧を主張して居る女人に、何故家畜にも同じ權利を認めないかと聞いて一怒を買つた事もあつた。

今鍬のさきから飛び出す昆蟲の群を眺めて居た瞬間に突然或る一つの考が腦裡に閃めいた。それは別段に珍らしい考でもなかつたが、其時にはそれが動かす事の出來ない唯一の眞理であるやうに思はれた。……もう昆蟲の生命などに方則の前の物質にすぎなくなつた。私と私の鍬は其の方則であり征服者であり同時に神樣であつた。私は昔々人間の頭上に恐ろしい大きな鍬を振り廻して居る神樣の殘忍に痛快な心持を想像しながら勢よく鍬の把柄を動かして行つた。……

多分その時は私の頭の工合が少しどうかして居たのかも知れない。

× × × ×

病氣に罹る事を恐れて初の日は三尺平方位にして止めた。翌週に行つて見ると、刈られた葉はすつかり乾き上つて、蒼白い干草になつて散らばつて居た。日向に曝らされたまゝの鋏の刃は觸つて見ると暑い程にほてつて居た。

學校から歸つて來た子供等は少なからざる好奇心をもつて刈られた部分を點檢したあとで、我れ勝に爭つて鋏を手にした。暫くして見に行つて見ると、芝生の上には鼠が嚙じつたやうに、三角形や、片假名や、ローマ字などが表はれて居た。九歳になる女の子は裁縫用の鋏で丁寧に一尺四方位の部分を刈りひらいて、人差指の根元に大きな可愛い肉刺をこしらへて居た。

色々の時刻に色々の人が思ひ〳〵の場所を刈つて居た。人々の個性は此んな些細な事にも強く刻みつけられて居た。大まかに不揃に刈り散らして虎斑(とらふ)をこしらへる者もあれば、一方から丁寧に秩序正しく、蠶が桑の葉を食つて行くやうに着々進行して行く者もあつた。或者は根元までつめて刈り込まないと承知しないし、又或者は或る長さの線を殘すやうに骨を折つて居るらしく見えた。

書齋で聞いて居ると時々鋏の音が聞こえたが、其音の工合で誰がやつて居るかは大抵分つた。

午前に私が刈り初めやうとするとよく來客があつた。そういふ事が三四回もつゞいた。來客を呼ぶおまじないだと云つて笑ふものもあつた。此れは無論直接の因果關係ではなかつたが、しかし全くの偶然でもなかつた。二つの事柄を制約する共通な條件はあつた。唯其の條件が必至のものでないだけの事であつた。

毎日少しづゝ鋏を使ひながら少しづゝ色々の事を考へた。色々の考は何處から出て來るか分らなかつた。前の考と後の考との關係も分らなかつた。昔ミダス王の理髪師が囁いた秘密を芦の葉が再び囁いたやうに、今此の芝の葉の一つ一つが、誰れかに昔聞いた事を今私に囁いて居るのかも知れない。

例へば私は自分で芝を刈る事によつて、植木屋の賃銀を節つて居るのではないかといふ問題に出會つた。そして色々

もう一段つて居る内に、此れがもう可也に古いありふれた問題である事に氣が付いた。それかと云つて此れに對する明快な解決はやはり得られなかつた。

のび過ぎ茂り過ぎた芝の根元が腐れかゝつて居るのを見た時に、私はふと單純な言葉の上の連想から、餘りに榮え茂り過ぎた物質的文化の陰に人間生活の根本が腐れかゝるのではないかと思つて見た。そして此れを救ふには何とかして少し此の文明を刈り込む必要がありはしないかと考へた。併し芝と文化とは何の關係もない。芝を刈るのがいゝと云つても文明を刈り取るがいゝといふ證據にも何もならない事は明であつた。餘りに皮相的な輕卒な類推の危險な事を今更のやうに思つて見たりした。實際そんな單純な考が熱狂的な少數の人の口から群集の間に燎原の火のやうに擴がつて、「芝」を根元から燒き拂はうとした例が西洋の歴史などにないでもなかつた。文明の芝は刈るわけにも燒く譯にも行かない。

始めの中は面白がつて居た子供等もぢきに飽きてしまつて、誰れも鋏を手にするものはなくなつた。唯彼女と私とが時々少しづゝ刈つて行つた。其内には雨が降つたりして休む日もあるので、一番始めに刈つた處はもう可也に新しい芽を延して來た。

最後に刈り殘された庭の片隅のカンナの叢影に、一きわ濃く茂つた部分を刈つて居た長女が、ここに妙なものを發見したと云つて持つて來た。子供の拇指位の大さをした何かの卵であつた。つまんで見ると殼がなくてぶよぶよして居た。一つ鋏にかゝつてつぶれたのを開けて見たら中には蜥蜴の成りかゝつたのがはいつて居たさうである。「人間のおなかの中に居るときとよく似て居るわ」と傍から小さな女の子が附加へた。私は非常に驚いて此の子供の知識の出所を聞き正して見ると、それは御茶の水で開かれたある展覽會で見たアルコホル漬の標本から得たものである事が分つた。

子供等は此の卵の三つか四つを日當りのいゝ緣側の下の土に埋めて置いて、數日たつた後に掘つて見たら、もう何もなかつたさうである。殼にも大きな合點はあつた。

×　×　×　×　×

十日程に亘つた芝刈がやつと終つた。結果は餘り體裁のいゝ方ではなかつた。刈り手の個性と刈り時の違ふことが芝生の上に不規則な斑を畫いて居た。休まず働いて居る自然の手が其の痕跡を拭ひ消すには未だ幾日か待たなければならなかつた。

保全の目的が達せられたかどうかは分らなかつた。大して身體に障りもしなかつた代りに別段のいゝ效果があつたとも思はれぬ。そのやうな效果が、秤や升ではかられるやうに判然と分るものだつたら、醫師は無論喜びもし又困る事だらうと思つた。——唯蜥蜴の卵といふものを始めて實見したのが恐らく此の數日間の仕事の一番の獲物であつたらうと思つて居る。

世界文藝全集

世界文學の古今に渉りて代表的雄篇を選び、是れが苦心の飜譯を得て、逐次刊行するもの、總卷數少くとも七十册を超ゆ可く、斯界空前の大出版と稱す可きものならむ。大方の同情、幸に小社の上にあり、此の擧がよく有終の美を濟さんことを切に希ふ。

第一編

フロオベル著　中村星湖氏譯

ボヴリー夫人

（四六版・六百頁）

製本出來

總洋布天金最上製　價貳圓五拾錢　郵送料拾貳錢

十年苦心の大飜譯
近代小說の眞典型

自然派の鼻祖にして、佛蘭西近代の巨匠たるフロオベルの「ボヴリイ夫人」は、實に近代小說の經典にして、これを讀まずして、よく藝術を談ず可からず。その夢想と憧憬とを、凡下の實生活に虐げられて、やる方なき愛慾の惱みより、遂に自ら殺すに至るボヴリイ夫人が墮落の生涯は、冷靜嚴肅なる觀照と、細緻靈妙なる描寫とにより、人生そのものよりも眞なる藝術の至境に於いて活現せらる。實に、原作者が此の一作に、六年の歲月を費せる苦心の大作にして、譯者中村星湖氏また實に十年の努力を捧げて、佛の原文より移植せる泣血の大飜譯也。曩に一度市に出づるや、不幸發賣を禁止せられたるが、こゝに再び公にするを得るに當り、更に大改訂を加へたれば、實に是れ白璧にして、微瑕を止めざるもの。近來飜譯界の一大收穫として、世に推すに敢て憚らざるもの也。

東京牛込矢來三番地　振替東京一七四二番　**新潮社**　電話番町（局）八〇九番・八九九番

時論

現内閣の運命を決すべき轉機

法學博士　吉野作造

原内閣は倒れさうにして倒れない。失政百出にして而かも議會に黨員の著るしく増加して居るのは、丁度町の爪弾き（つまはじき）を受けて居る高利貸が益々其富を増すやうなものである。それでも段々影が薄くなつた。國民の信望を失つたからである。而してそれは必ずしも比較的長い壽命を有する内閣の末路に常に見る如く、國民から飽きられたといふばかりではない。内閣自身に許すべからざる失態のある事が段々吾々の前に暴露されて居るからである。最もどんな政府でも所謂失政呼はりから免かるる事は出來ない。所謂失政の内には本當に失政と目すべきものか否か分らないが、只反對黨から斯く呼ばるゝに過ぎないものもある。然らざるも國の爲めに圖らんとして偶々豫期せざる結果を齎らしたといふやうな純然たる過失はどんな聰明な政治家にも免かれない。それでも其重大なものは負責引退の理由とならぬではないが、政界の常として此種のものは深く咎むべきではない。が、今日の政友會内閣はそれ以上許すべからざる道徳的失態を演じて居るのではないかとの嫌疑が國民の間に著るしい。如何なる事實を取つて之を云ふかは昨今毎日の新聞がまざ／＼と吾々に示して居るから、茲に改めて云ふの必要はあるまい。且つ吾々は政界の現狀並に政友會の從來の態度から右の如き道徳的失態の談の必ずしも誣言に非ざるべきを想ふものである。手短かに云へば、今日政友會は何の功績を以つて斯くも永く天下を掌握して居るのであるか。何に由つて議會に多數を制する事を得たか。國民の良心からの信任に由つてか、斷じてさうではない。一言にして云へば制度の實際に乘じて不正の手段を以て國民の良心を瞞着して機械的に作つた多數なのである。茲に彼は知つてか識らずしてか、道徳上許すべからざる一大罪惡を犯して居る。不正の手段を以て人を誘へるものは、又他の不正の手段を弄する者を責むる事が出來ない。國會議員を初め縣會議員

市會議員などが奸商と結托して不正の利を貪る者ある所以である。反對黨の云ふ所に據れば、政府自ら有力なる黨員に供するに鑛山獲得の機會を以てしたとの噂さへある。眞僞は予輩の斷定し得ざる所であるけれども、斯くの如き不正手段を以つて黨勢擴張の方策の手段として居る事は天下公知の事實であるから、昨今頻出する各種の醜事件に對し、今日の政友會内閣は少くとも道德上責任を負はねばならぬと考へる。無論役員自身は飽くまで潔白を云ひ張るだらう。然し我々は斷じてそれを許さない。其發展に今や天下の心ある者の非難は政友會の上に鋭く集まらうとして居るではないか。之れだけでも現内閣は精神的に瀕死の境に在るものと云はなければならない。

斯くして國民は少數の政友會關係者とこれに迎合せられて居る一部の地方民とを除き、悉く信を現内閣に置かない。天下を彼に托して安心だと考ふる者は殆ど一人も無からう。更に加ふるに現内閣は昨今殊に跋扈しつゝある民主的精神に面を背けるといふ點に於て多數民衆からも見離されて居る。同時に他の一面に於ては又時々民衆の意に迎合せんとして斷片的に時々民衆的政策——例へば陪審制度の如き——を行はんとするのが氣に入らぬとて、元老官僚の一派からも危ながられんとして居る。當今の政界の中心勢力に向つても信を喪ひ民衆との間にさ迷うて居る。此兩者から共に疎んぜられては、無理に作つた議會の多數を擁しただけでは立つ瀬が無い。之れ世人が一般内閣の壽命も旦夕に迫つて居るといふ風に感じて居る所以であらう。

之れでも現内閣が不思議に泰然——少くとも外觀上——として立つて居る。倒れさうにして倒れない。之れは何ういふ譯かと云ふに、他に之に代るべき適當なものが無いからであると思ふ。據つて以つて立つ處の積極的の根據が無くとも、自分の地位を取つて代る者が無いといふ消極的理由だけでも、我國今日の政界では可なり無理強く幅を利かし得るものと見える。

今日我國の政界に於ては政友會の外可なり多くの政治團體がある。憲政會國民黨などの政黨は申すに及ばず、所謂官僚系に屬するものでもいろ〳〵のかたまりがあるやうだ。政友會がいけなければ他の團體で内閣が造れないではない。人或は他の政黨では議會に多數の根據を占め得ざるべしと云ふ者あらんも、然し議會の多數なるものは自然に出來た多數でなくて人爲的に作つた多數であるから、現に何政府さへ取れば誰でも政友會の多數を覆して自派の優勢を作り得ない事は無い。大隈内閣は曾て之をやつたではないか。だから政友會内閣がいよ〳〵いけない

と協されば、他から幾許も之に代るべき政治團體があるやうだが、偖て國際問題になると差當り政友會を措いて他に代つて内閣を組織すべきものが無いといふ所に日本政界の特色が在る。即ち今日我國の政界に於て普通の團體では政權に有り付けないのである。詳しく云へば純官僚局の者でもいけなければ、純政黨者流でもいけない。要するに旗幟鮮明なる者は、今日の政界に於て天下は取り難いのである。

何故に斯くの如き特色を今日の政界は有するか。之に就てはいろ〳〵の理由を擧ぐる事が出來やうが、其内最も主要なるものに、中心勢力が動搖して未だ歸する所がないといふ點に在らう。是等の點に就ても細かに歴史を語る事は略する。唯大體の筋道を申さば、憲政創設以來十有餘年の間は、何と云つても、政界の中心勢力は元老を中心とする官僚に在つた。從つて内閣は所謂超然内閣又は大權内閣であつて、政黨者流の覬覦を許さなかつた。彼等の對政府反對の態度は、寧ろ御上に對する不當の怨懟のやうにさへ取扱はれて居つた。斯ういふ時代には官僚間に於ける政權の受授は極めて簡單に行はれた。伊藤がいけなければ山縣が出る。山縣が行き詰まれば松方も井上もあるといふ有樣であつた。が、然し明治三十年代の中頃から段々政黨の權力が伸びた。前の時代のやうに全然之を無視する事は出來ないやうになつた。斯くして政黨も亦政界の中心勢力の一部を成すやうな勢形で段々と發達した。其結果内閣を組織する者は、唯純官僚といふだけでは足りない。官僚に可く、而も亦政黨にも可きものでなければならない。詰り官僚と政黨と兩跨を懸け得るものでなければ内閣を組織する事が出來ないやうになつた。それでも初めは官僚出身にして而かも政黨の操縱に巧みなものが重寶がられ、政黨出身にして官僚と疎通に長ずるものが後廻しにされた。之れ斯かる過渡期に於て桂公が最も重んぜられた所以である。桂公一度び出でて、復た其衣鉢を紹ぐ者は無い、昨今後藤内閣といふ説の流布されるのも、同男ならば多少政黨の操縱が出來ると豫期さるるからでもあらう。併し乍ら時代は有繋に進歩して、官僚よりも政黨を取るといふ事になつた。けれども官僚の勢力も亦依然として拔くべからざるものあるが故に、今の所政黨者流にして而かも官僚との脈絡を心得て居る者でなければ、烏渡政府には立ち得ない。此點に於て政友會總裁原敬氏は一個の天才と云つていゝ。之れ政友會の獨り今日に處して長く天下を保ち得る所以である。

假りに原内閣が倒れたとしても官僚内閣主義が再び盛り返すといふ事は困難だらう。全く無いとは限らない。有つた所が直ぐ押倒されるに極つて居るから、大勢の上から云へば官僚内閣

に至内閣を以つて終りを告げたと云つてい〻。從つて官僚系の人でも苟りに政權に渇する者に非ざる限り、少し悧巧た者は後繼内閣組織の大任を引受くるに躊躇するだらう。之れ全然民衆の基礎に立たざる官僚主義の最早日本に許されざるを語るものである。されば上云つて純政黨で行けるかと云へば、之れ亦駄目だ。政黨政治を極端に嫌ふ元老の勢力は、まだ惰性的に相當に強いからである。そこで前にも述べたやうに、民衆と元老と兩股を掛け得る者が丁度現在の政界に立ち得る、また客觀的に觀れば、今日のやうな過渡時代の政界には、さういふ兩股主義の政治家の存在を必要とするものである。此點に於て政友會内閣は一種の存在の理由を有する。國民に又〻氏に感謝すべき理由もある。然し要するに誰も差當りの始末をする者が無いから、差當り間に合ふ者に留守番を頼むといつた形なので、國民の眞も亦今日の儘で政界が固定していゝとは考へて居ない。

原内閣にした所が飽くまで腐敗不鮮明の特色によつて政界に巧みに露命を繋ぐものの、代りが無いからとて何時までも立つて行けるものかどうか。吾々の觀る所では、今日彼の跨いで居る民衆と元老との二大基礎は、日に日に其距りを廣げつ〻ある。現今の思想界の有様、殊に思想問題に關する當局と青年との將來の進み方を觀る時に、益々吾々は此感を深うせざるを得ない。斯くして原内閣は兩者の距離の益々廣がるのを巧く堪へ得るであらうか。跨ぎ切れない時は即ち自滅の時であるが、昨今彼が一面老人の意見に聽いて取締の手を嚴しくすると民間からは極度の反感を受けるといふので、隨分苦しい板挾みの境遇にあるやうだ。有數の天才も此形勢に對して何時までも巧妙なる游泳を仕終せる者ではない。今の儘で行けば何れ自滅の期も遠くはあるまいと思ふ。

若し此際原内閣が此苦しい境遇を一轉して新生面を開かんとせば必ずや乾坤一擲の大英斷に出でなければならぬ。即ち兩方に跨ぎ切れないなら、右足を拔くか左足を拔くか、今まで愚圖々々して居つたので大分信用を損つては居るやうだが、然し今にして改むるも未だ左程遲くはない。淺薄な悧巧を賓物にして在來の方策を押通さうといふのは、餘命を繋ぐ所以では無くして、寧ろ自ら其墓を堀りつ〻あるやうなものである。孰れの態度に出づるかは斷定は出來ないが、兎に角新年を改めて現内閣の前に置かれた根本的大問題は此點の解釋に在ると思ふ。

支那の近状

支那も例によつて紛亂に紛亂を累ね何時統一の實が擧がるか

見極めが付かなかつたが、去年來青年學生の運動によつて新に興つた新氣運は、漸々支那の政界に泌み込んで、吾々局外の者にも新しい希望を抱かしむるやうになつた。世間では青年學生の運動は何になるかと罵倒する。實際政治の上に何等直接の影響を及ぼさない點や、又彼等の起した具體的の運動が官憲の手で譯もなく壓迫さるゝ點や、又彼等と共鳴すると稱せらるゝ二三の先覺が政界に何等の實權を持つて居ない點とを觀れば、論者の言にも一理はある。けれども人は換つても思想は貽る。今支那を支配して居る、否、支配せんとしつゝある思想が何かを見る時に、吾々は青年學生の一二年以來の奮鬪の上に多大の意義を認めざるを得ない。

青年學生の文化的運動は各方面に渡つて居る。此事は彼等の手になる支那最近の新聞雜誌を見ても解る。其内專ら政治方面に表はれた所を見るならば、專制主義に對する痛切なる反感を一般父老の頭に植ゑ付けたといふ事である。さういふ所から最近自然に起つた政界の二つの流れは自治主義と分權主義とである。自治及び分權の思想は、思想としては決して新しいものではない。けれども之が動かすべからざる大勢となつて、大いなる底力に裏付けられて、政界の表面に現はれ出たのは昨今の事である。予輩の觀る所では、之が一つの底流となつてもつと徹底

的に支那政界の不[illegible]を[illegible]するやうになつたら、世界に初めて本當の統一を見、支那に初めて本當に復活するだらう。

最近まで支那の政界に於ける一番大きな問題は南北統一といふ事であつた。統一といふ形が具はらねば、内外共に幾分の不便がある。そこで形式的に統一を口にするのであるが、然し彼等は眞の統一を實現すべき根本原則の涵養には着眼して居ない。各省の督軍省長各兵を擁して私を計り、利害によつて離合聚散する者が、如何にして本當の統一を圖る事が出來るか。從つて最近までの政界の問題は、唯表面の形式を如何にせば整へ得るかと云ふに在つて、國民の生活を實質的に改善向上するには何うすればいゝかといふ事には考へ至らなかつた。現に政界の表面に立つて彼れ此れ云ふ者は皆國民の膏血を絞つて私を營んで居る連中だから、國民議會の生活問題を實質的に考へるといふやうな事は期待されなかつたのである。即ち政治家は政治を商賣とする人の仕事であつて、國民自身の仕事とはなつて居なかつた。之れを國民自身の仕事とするやうになつたのは、青年學生の運動あつてからの事である。

今少しく遡つて支那に於ける革命運動の沿革を觀るに、其の

やうた狀態の政權爭奪は別問題として、國民の名に於て政治を改革するの要求は、孫文の明治二十八年の革命から初まる。孫文自身は昔からの革命を英雄革命と稱し、自己の運動には國民革命の名を與へて、近世的革命の眞意義を言ひ表はさんとして居るが、然しそれとても孫文一人の理想に止まり、彼と事を共にした多數の同志に眞に之を理解してやつたか何うか解らない。故に多少政治的自覺を伴つた改革運動と云へば、明治三十一年戊戌の政變を擧げなければならない。其後三十三年の義和團を頂点とする反動の流が現はれた事もあるが、やがて復た政治改革の要求が旺んとなり、以て日露戰爭後の改革斷行となつた。此機運に促されて日本に留學した各省の秀才は、中華同盟會といふ秘密結社を作るに至つたが、然し是等の出來るに就て深く其當時の内情を吟味して見ると、實は當時の青年は政治改革の積極的要求の動きよりも、寧ろ滿人の支配を脱したいといふ消極的要求に依つたのであつた。中華革命同盟會の入會宣誓の言葉には、滿人の排斥と中國の恢復と共和主義と社會主義との四大項目を掲げて居るけれども、當時最後の二大項目を挿入する事には非常に反對が多かつたと聞いて居る。にも拘らず之を入れたのに孫文が頑強に主張して已まなかつたからで、彼の所謂三民主義は當時謂はば大聲俚耳に入らざるの傾があつた。云ふまでもないが三民主義とは民族・民權・民生の三大主義の謂で、民族とは滿人を排して漢人の天下にする事、民權とは共和主義、民生とは社會主義の事を云ふのである。之を彼は革命の根本理想としたのであるが、當時彼を戴いた多數の青年は十分之に諒解が無かつた。即ち滿人の天下を覆せば滿足するので、更に自分の天下を取つた時の政治のやり方に就ては、特別の新しい意見が無かつたと見ていい。果せる哉第一革命成功後政界の表面に立つたものは、政治の理想に於て依然として舊人と異らない。多少新しい學問はして居るだらう。然し根本の肚は變つて居ないから、其後政界の紛々擾々に對して彼等の據つて以つて立つ處に、如何なる形式的名義の下に自己と政權とを結び付くるかにある。丁度我國の政友會と憲政會との爭のやうなもので、孰れが勝つたとて國民の生活には何の關はりも無い。政界の事は即ち政治家の遊戲となつた。斯くては何時まで經つても統一の實も擧らなければ、平和的進歩の見込も無い。昨今支那の青年は段々之に氣が付いたのである。斯くして彼等は別に新天地を開拓して民生の幸福を計らんとしたのであるが、日本の政治家などは愚かにも此新局勢に未だ更らに眼を蔽ふて、依然舊人の形式的爭端の是非得失に拘泥して居つたのは、寔に迂闊千萬なりと云はなければならない。

舊人が空名に拘はつて所謂大義名分を爭つて居る間に、國民生活の實質に着眼し初めた青年は、所謂政治家を捨てゝ獨自の天地を拓くべく努力する。此輩は東西軌を一にする共通の現象たるのみならず、或る意味に於ては現代世界の大勢と見てもいゝ。無論時勢に慷慨するの餘り言動極端に出づる者もある。言動極端に出づるの故を以つて之を抑へんとするのは飛んでもない謬りだ。然し斯ういふ間違つた考の者は支那にも多いと見えて日本と同じやうに彼の國にも若い者と年寄りとの反目が鋭くなりつゝある。我國一部の人は支那青年の赤化などと云ふけれども、眞に國民生活を實質的に考究して居る者の何方なるやは、少しく彼等の言論に注意すれば解る事である。孰れにしても彼等青年には私慾が無い。政權に對する執着も無い。他の何物にも執着する處無く、一直線に精神的並に物質的に國民生活の向上を圖るといふに在るから、社會の凡ゆる問題に向つて意外に而かも鋭い批判を加へる。舊人は之によつて大に狼狽し、彼等は　想界を混亂したと云ふけれども、之によつて支那の思想界は從來の型を破り内容が頗る豐富になつた。政界に於てもあはよくば敵を仆して自家の掌裡に實權を握らんとする野心家の手より問題の論究を奪ひ取つたから、從つて政治問題も直ちに國民の生活向上の要求に觸るゝといふ新しい面目を發揮するに至つた。斯くしていろ／＼新しい問題が起つて居る事は支那の新聞等に注目する者の看過し能はざる所である。

斯ういふ新しい問題の澤山起つて居る内、予輩の最も興味を有つて前途を見て居るのは、各省自治主義と聯省主義との前途である。

各省に昨今自治主義といふ事が流行する。單純な自治ではない。督軍省長といつたやうな役人を廢し、省民自身の手で庶政を取りまかなふといふのである。こんな事を云へば以前なら督軍や省長に直ぐ抑へられたものだ。今や然し得ざるに至つたのは、專制政治に對する青年の反抗が自ら父老の頭に滲み込んで、茲に朧氣ながら民衆政治的輿論の發達を見んとするに至らしめたからである。も一つは最近の形勢が從來の官人をして自ら守る爲めに不當に過大の軍隊を養はざるを得ざらしめ、而して財政の困難から給料不拂の爲めに兵員の不平を誘致し、是等の事情から自然官人をして以前のやうに兵權を濫用するを得ざらしめたといふ事情もある。要するに官人の威力は驚くべき程衰へた。斯くして民間には此實際に乘じて動もすれば省民自治を實現せんとするの風がある。此自治も巧みに成功するや何うかは

[illegible]ら[illegible]、更に[illegible]武斷主義と官僚主義との終末を告ぐる時によつて、段々平和的進步の萌しを見るに至るべきは想像するに難くない。[illegible]を早くするやうに努力せねばならないのである。[illegible]に南北を統一せしめねばならないと考へて居つ[illegible]ら、統一運動に形式に拘つて實質の如何を顧みなかつた。統一の名義さへ立てばいゝといふ考の舊官僚の間にかなり[illegible]い。は、十月二十九日の南北統一會でも解る。北方に對して[illegible]を[illegible]居つた現在妥協派が昔の仲間同様に誘はれ[illegible]々の[illegible]で持ち出す刹那、自堕落に南方の立派な取消の電報を打[illegible]らよつて、これ[illegible]統一の實を擧つたと稱し[illegible]のに、[illegible]に[illegible]の主人となつた[illegible]南方派から名分を[illegible]はうといふ[illegible]、これ、ロックの[illegible]合ひで天下を治めやうと[illegible]に[illegible]もなし[illegible]んだらうへと行かうとす[illegible]一[illegible]を[illegible]へやうとするのだから、[illegible]も[illegible]いふ事になる。從つて先づ中央に威力を備へて[illegible]いふのだから、北京政府の立て場に何等南方政府[illegible]には中央[illegible]に立つて居る。[illegible]は赤手空拳を以つて人事を盡すといふ事もあり、[illegible]つて現在の威力[illegible]、ないといふ事もあらうが、然し[illegible]は天下に號令する[illegible]一といふ[illegible]つたのはない。然るに今回[illegible]側、[illegible]方、所謂[illegible]東に赴いて立てた政府は、自ら聯省政府と稱して北方分權主義に立つといふ事に根本原則を變へた。今ま[illegible]のは天下に號令する中央政府といふのであつたが、今度は各省を以つて一先づ政界の主人公とし、是等の獨立各省が相合つて亞米利加のやうな合衆國を作るといふ場合に、其中央政府たるべきものといふ新しい原則の下に所謂聯省政府を作つたのである。深く考へる所あつてやつたのか何うかは知らないが、兎に角之は正に昨今盛んに興りつゝある各省自治主義の趨勢に應ずるものである。若し各省が、いよ／＼省民自治を以つて立つといふ事になり、中央政府も亦權力を以つて臨むに非ず、聯邦的組織に[illegible]適して不偏の利益[illegible]を圖るといふ態度に出れば、そこで[illegible]て本當の南北統一は出來るだらうと思ふ。

斯くして支那に近き將來に於て和平統一の實を擧ぐるか何うか分らない。[illegible]も未だ勢力を保持して居るから、紛亂は今後暫く續くだらう。これにして政界に於ける[illegible]の趨勢は段々良[illegible]なりつゝある。故に[illegible]支那が近き將來に於て良くなるか何うかは分らないとしても、段々良くなる事があるとすれば、之に[illegible]自治主義及び聯省主[illegible]に之に相關聯して居る[illegible]によるものでなければならぬと考へる。從つて來るべき一年間に於て、吾々は特に此方面の發達如何に着目

したい。之と同時に予等は又來るべき一年間に於ける隣邦青年の不撓不屈の獻身的努力を希望して已まない。

朝鮮問題

朝鮮の狀態も過去一年の間に殆ど何等目醒しい發展を見て居ない。總督が變つた丈けの事はある。總督の更迭と共に統治方針の大いに改善せられた跡は之を認めるけれども、併し乍ら日鮮兩族を眞實の意味に於て融和渾合する大方針から觀て、更に何等の發展を見て居ない事だけは疑を容れない。蓋し今日のやうな狀態では、何んなに政治を改善したと云つても、朝鮮人自身の要求には更に觸れて居ないからである。故に朝鮮に於ける統治の改善は幾分內地人の慈悲心を滿足せしめては居るだらうが、朝鮮人の滿足は買つて居ない。朝鮮人は滿足する筈だと一部の內地人は云ふ。滿足しないのは不都合だと性急な役人は罵る。惡いか善いか知らないが、滿足して居ないといふ事實は疑を容れない。

尤も吾々は朝鮮人の滿足を買ひさへすれば可いといふ考へであつてはいけない。朝鮮人の眞實の幸福と眞實の要求とを充たしてやる爲めに、彼等の一時の滿足は犧牲にせねばならぬ事もある。之れ丈けは自主的自覺が無くては本當に朝鮮を統治する事は出來ない。自分に確固たる自主的見識が無く、徒らに彼等の小さい滿足を買はうとすると、却つてとんでもない失敗を招く恐れがある。かういふ立場から觀ると、かの共同墓地問題の如きは最もよく淺薄なる官僚氣分を暴露したものだと思ふ。朝鮮には非常に墓場を尊重する風習がある。風水の地勢を案じ、一番好い所に墓場を作れば子孫が繁榮するといふので、金持などは年が年中墓地の搜索選定に憂身を窶して、此處が一番好いといふ事になると、他人の地面であらうが、お上の地面であらうが、構はず墓を作る。爲めに朝鮮には從來之れに關する土地の訴訟といふものが非常に多い。且之が無用に土地を使ひ又金を遣ふ所以であつて、朝鮮不振の原因も亦一つは此處に在ると云はなければならない。そこで寺內伯の時代には、かういふ私設墓地を禁じ、凡て墓は共同墓地に作るといふ事にした。之は寔に寺內式のやり方で、朝鮮人の爲めにも結構な事であるが、然し深い迷信に關係して居る事であるから、急激に之を禁ずるといふのが適當であつたか何うだか疑ひ無きを得ない。それは孰れにしても、此新しい規則に對しては朝鮮の古老の間には非常な反感があつた。例へば如何に利用厚生の爲めとは云ひ乍ら、神社佛閣を打壞して田畑にしようと云つたら、日本國民だつて非常

なる不平を唱へるだらう。然し之に不平を唱へる者は實は金持の古老の一部であつて、一般の青年は却つて共同墓地の制度を欣んだのであつた。然るに現總督の時代に至り朝鮮人の滿足を買はうといふ淺薄の心から、折角作つた共同墓地の制度を強制する事を止め、舊式の墓地をも作る事を許した。是などは一時の滿足を買はんが爲めに彼等の眞の利益を深く考へてやらなかつたといふ點に非難があるのみならず、古老の意見さへ聽けば一般の民の思惑は何うでもいゝと考へた點に、舊式政治家の特色を發揮して居る。されば折角彼等の滿足を買はんとしてやつた事が却つて有爲なる多數青年の不滿と侮蔑とを買つて居る。

斯くの如く吾々は朝鮮人の滿足を買はうといふ事を淺薄に考へてはいけない、縱しや世間の非難を恐れて繼子の要求を無茶苦茶に容れ、以つて心にもなき鷹揚振りを發揮するといふ事は寧ろ嗤ふべきである。吾々は時として彼等の要求を斷じて撥ね付ける位の自主的見識が有つて居なければならない。唯其自主的見識の基く所は何處までも朝鮮人の爲め、彼等の眞の滿足の爲めといふ事になければならない。自主的統治策といふ事を穿き違へて、吾々の滿足の爲めに彼等の利益幸福を犧牲にする事を考へてはならない。此點に於て朝鮮統治策は、官僚の施設する所と又一般國民の態度とを通じて餘りに内地本位に過ぎては居ないか。偶、朝鮮人の幸福の爲めにやつたやうな事でも、そは吾々の側の慈悲心を滿足せしむる爲めで、眞に朝鮮人の滿足の爲めなりや否やは大に疑しい。

吾々は朝鮮統治の根本方針に疑あるのみならず、昨今の騷擾に對する内地官憲の態度に就ても不平がある。讀者の知らるゝ如く、昨今朝鮮には排日の氣分が漲つて居る。北韓の方面には排日の實際運動を猛烈にやつて居る者もある。排日運動を實際の發行に現はす者は法に照して之を處分すべき事は固より云ふを俟たないが、只彼等の行動に對する道徳的價値に就ては、吾々はもつと廣い度量を以て考へてやらなければならない。吾々は動もすると彼等を不逞の徒と呼ぶ。焉んぞ知らん彼等は朝鮮人の間に在つては或は尊敬すべき愛國の殉難者であるかも知れない。詐欺とか泥棒とかいふやうな、凡ての人類が共同に憎む所の罪を犯した者なら、吾々が之を不逞の徒と呼んで朝鮮人も之を怪まない。けれども政治上の考で日本の統治に反對する者は、吾々からは敵だけれども彼等からは愛國の士として尊敬される。吾々の敵視する所以が即ち彼等の尊敬さるゝ所以だから、吾々が不逞呼はりをすればする程、朝鮮人の反日結束は固くなる。純然たる敵國なら是でもいい。朝鮮人を結局我同胞と

して治績を行かうとする上から云へば、是れ程拙い方策は無い。況んや我官憲は所謂不逞鮮人を取締るに遺漏なからんが爲め、往々良民を驅つて對日反感を强めしむるの失態を演じつゝあるに於ておや。

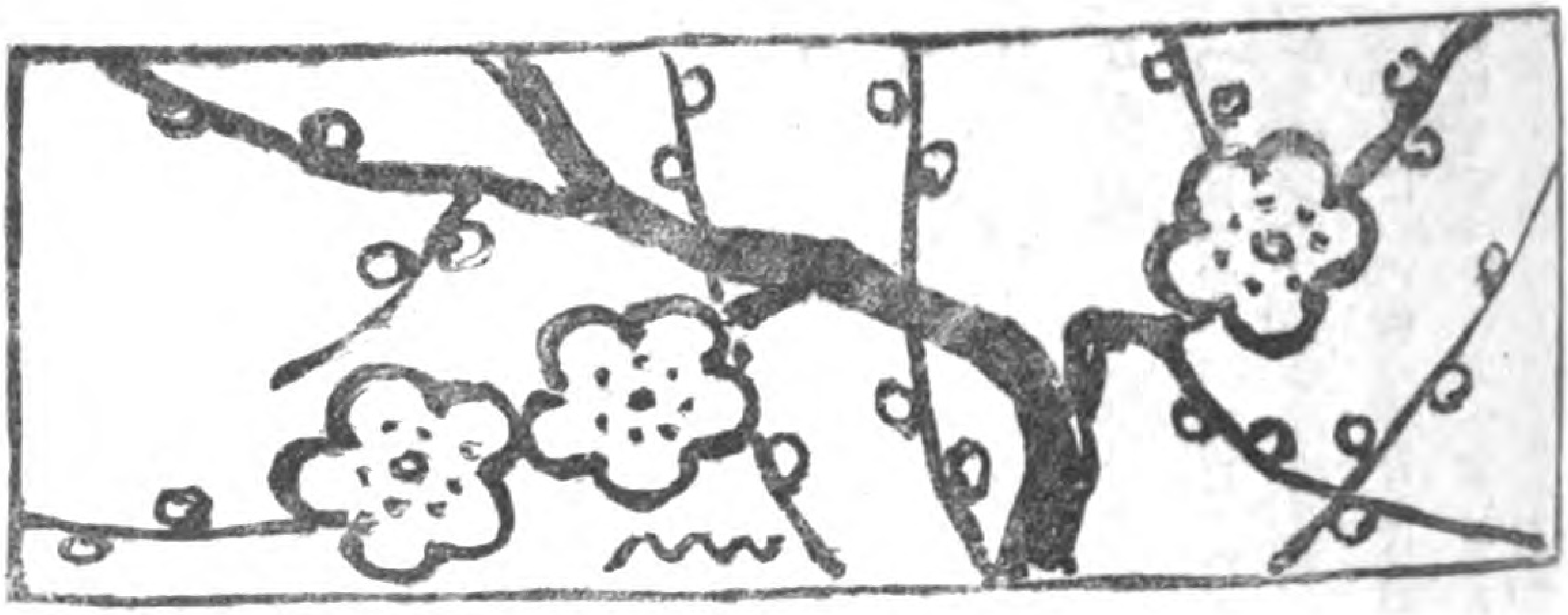
朝鮮人は法律上日本臣民である。けれども固有の日本臣民と同一に待遇する事は出來ないといふ事實に基いて、全然内地人と同樣の權利を與へられて居ない。是れ法律に於ても朝鮮人を日本人となすべきもので、既に日本人であるものと見てゐない證據である。形式上は日本人となつた、けれども實質的にはまだ日本人になり切らない。而して之を永い努力の結果、完全な日本人にするといふ事は吾々内地人の道徳的責任であり、從つて朝鮮統治策の根本要諦でなければならない。であるから統治策の出發點としては、彼等はまだ日本人になつてゐないといふ事實に立つべく、彼等に完全な日本人としての義務を要求するのは、我等の永い〳〵努力の最後の歸着點に於て之を爲すべきである。若し朝鮮統治の局に當る者が此見地を諒解して居るなら、彼等の反日運動に對しても多少の理解が無ければならない。固有の日本人が排日をやるなら、それは以ての外の賣國的行爲だ。朝鮮人の之を爲すのは多少之を諒とせねばならない。やつて可いといふのではない、之をやる事は殘念ながら日本の國法に背くけれども、道德上に於て之を罪惡とすべき理由あるを認識する事である。然るに官憲は固有の日本人に對すると同じ態度を以て彼等を責むる。法律上日本臣民たるの故を以つて日本人としての完全なる義務を要求し、之に背いたといふ理由で彼等を責むるのである。而して一般國民も亦官憲の此態度を深く怪まない。斯くして彼等は此問題に就き出發點を取違へた。彼等はまだ日本人になりきつて居ないといふ事實を出發點として、彼等を完全な日本人にする事を最後の到達點に爲すべきに、彼等は完全な日本臣民であるべき筈といふ假定に立つて彼等を責むるのであるから、謂はゞ出發點と到達點とを混同するものである。ヒステリックな我儘な細君が、よく仕込んで人にして下さいと頼まれた田舎出しの女中を、自分の思ふ通りに動かないからと云つて散々罵倒するやうなものである。出發點と到達點との混淆が、朝鮮統治の上に現はれた最も著しい謬であらうと思ふ。此根本的誤謬が悟られ且つ改められざる限り、吾々日本國民の懸案としての朝鮮問題は實質的に一歩も進める事は出來ない。

役人が僅か許りの自己滿足に欣んで、大勢は依然何等の進歩を見て居ないといふ憫むべき狀態にあるのに、他方間島の出兵問題なるものが起つて、更に世界に於ける日本の不信を强めた

つは、吾々の返す〳〵も遺憾とする所である。間島に於ける不逞鮮人の排日運動が多少の良民を傷け、耶蘇教會にも不當な壓迫を加へた事實は、軍事當局者も之を認めて居るやうだ。然し宣教師側の報告に據れば、水原事件以上の大暴行だと云ふ。宣教師の報道が誤りか軍事當局者の辯明が信ずるに足るか、其等の點に就て予等は相當確實なる材料を有つては居るけれども、今は云はない。只疑の無い點は軍事當局者が果して其の不逞鮮人と良民との區別を立てるに十二分の注意を加へたか何うかといふ事である。軍事行動の遂行上多少の過失は已むを得ないといふ事は、戰時非常の場合には可い。平時に於て而かも堂々たる帝國の軍隊が二三の馬賊を討伐するに、良民を完全に保護するの遑がなかつたとは、帝國軍隊の名譽の爲めにも云へまいと思ふ。尤も此方面に於ける宣教師が朝鮮に同情するの餘り、日本に對し惜むべき誤解を有つて居る事を知つて居る。予輩自身朝鮮に於ける文武兩官憲の行動に對しては可なり强い反感を有つて居るものであるから、宣教師達がそれ以上に强い反感を有つのも當り前だと思へて居つた。けれども去秋日曜學校協同大會參列の爲め來朝せる朝鮮在住の外國宣教師連と會談するに及んで、彼等の對日本誤解の極度に猛烈なるには有繫の予輩も一驚を喫した。であるから彼等の報道も俄に信ずる事は出來ないとはいふけれども、只彼等の報道をすら見ない位の事實に就いては疑を容るゝ事は出來ない。之に附する解釋は割引して考へねばならぬとしても、十人殺したと云へば十人殺したといふ事實丈は之を承認せざるを得ない。兎に角彼等の報道によつて帝國政府の軍事行動が世界の道德的判定の問題となつた以上、吾々は之に對して出來るならば正々堂々の辯解を爲し、出來るなら其罪を悔ひ、將來に對する新しい覺悟を宣明したらいゝではないか。さうでなければ朝鮮の問題も、之に關する日本の世界的信用の問題も實質的に解決され得ない。

然るに之に對する我當局の態度は如何。新聞雜誌に向つては朝鮮の事を書くなと云ふ。而して當局自らは我を責むる者が惡いといふやうな氣分を抱かしむるに努めて居るやうだ。日本の官憲を兎や角云ふのが惡いので、事實は公表しないが何も惡い事をやつたのでないと云ふのでは、國民から當局の失態を責めらるる結果は免れようが、問題其物は少しも解決されないのである。由來何か外交上の問題が起ると、肝腎の外交的活動にはそつちのけにして、之が内政上政府糾彈の口實とならないやうにと云ふ方面のみに、工夫を凝らすのが常だ。内政の爲の外交である。斯くして國民は政府糾彈の材料を提へ損ふ。之と同時に彼は吾々の同胞が外國に於て何を爲たかの事實を知り損ふ。其結果自ら反省して道德的に向上するの機會をも失ふが、世界に於て日本の信用が何故に又如何に議せられつゝあるかも諒解が出來ない。斯くても日本は依然國力の發達によつて世界五大強國の一に加はつたと誇示する。誰か惘然として我國の前途を憂へざる者があらうか。

中央公論第卅六年新年號創作



惡夢

正宗白鳥

（一）

飯田町のある大きな婦人科病院に職を奉じてゐる豐村久は、妻には勿論のこと、同僚にも部下にも、絶對に氣取られないやうにしてゐる情婦の鞆江を連れて、土曜から日曜にかけて大磯で遊んだ。この春以來、箱根とか鎌倉とか稻毛とか、東京近くの一晩泊でゆつくり遊んで來られるやうな土地へ、屢々二人連れで出掛けて、心置きなく若々しい戀を樂んでゐたのであつたが、今度はさうは行かなかつた。

相手に悟られないやうに、努めて快活にふるまつてゐた彼れも、稍々もすると鬱陶しい物案じ顏になるので、女らしい猜疑心の乏しい鞆江からも屢々疑ひの目を注がれた。

「今日は何か恐ろしいことをあなたから聞かされさうな氣がして心配でならないわ。でも、後生だから、今日は恐ろしいことは何にも仰有らないやうにして下さいね。折角こんないゝ所へ來てゐながら、厭な思ひをさせるやうぢや全く詰らないんですもの。あなた

どつてさうでせう。どうして私が心得て置かなきやならないことがあるのなら、東京へ歸つた後でお手紙で知らせて下さいな。さうしたらお手紙をよく讀んでよく考へて見ますわ。……此方にゐる間は一言の半分でも不愉快なことは耳の中へ入れたくないの。明日は明日の風が吹くでせうけれど、今日は日本晴のいゝ氣持で、この上もない幸福な女のつもりで、あなたの側で遊んで暮してゐたいと思つてゐますの。……だから、そんな機嫌の惡い顏なさらないでね」

松林を後にした砂山の斜面に脊を凭らせて足を伸してゐる將江は、淋しい願ひを籠めたやうな目付で男を見上げながら云つた。晩秋の夕日はあか〳〵と砂を照らし二人の顏を照らしてゐた。濤聲は他のすべての物音を沒して、周圍には人影が見えなかつた。

四竹は女の願ひに答へる前に、目元や口ばたに微笑を浮べたが、それはいかにも技巧的だつたので、見詰めてゐる女の目に快い感じを與へるものではなかつた。

「あなたは默つて芝居してゐらつしやるのね。そんな表情は私きらひよ。……さういへば先つき野立臺の前で活動寫眞の爲に稽古仕込みに來てゐた役者の樣子と云つたら。何だつてあんないやな眞似をするんでせう。私これまでも活動は好かなかつたんですけど、今日あれを見たので、一生活動寫眞なんかは見なくつてもいゝと思ひましたのよ。」

「僕も同感だ。活動寫眞だの芝居だのと、大變面白いもの〻やうに世間では思つてゐるが、僕等には理解出來ないよ。からやつて、大海の波でも空の雲でも見てる方がどれほど面白くつていゝ氣持だか知れやしない。」

四竹は心に蟠つてゐる陰鬱不穩な思ひを振拂つて、新たに大海に眼をそゝいだ。二三の漁船が浪を蹴立てゝ沖を切つて、陸の方へ急いでゐた。

「あなたもさう思つて?。だから、明日の晩歸る時刻が來るまでは東京の事は忘れてしまひませう。東京といふ言葉を

口に出してさへ、目の前が暗くなるやうで、脅かされるんですから、この上私を脅かすやうなこと決して仰有らない
やうにね」
「僕は決してお前を脅かさうと思つてやしないさ。人を脅かすどころぢやない、僕自分がどうかして脅かされないで、
毎日を過ごして行きたいと思つてるんだ。……今偶然活動役者の話が出たが、僕は先つき牡丹燈籠の芝居の錯覚を思出
してゐたんだよ。この夏一緒に帝劇を觀に行つた時にやつてゐたあれなんだがね。」
「へえ。不思議ね。あなたが芝居の事を思出すなんて滅多にないことですわね。あの幽霊なんかの出る芝居、あの芝居
の何處があなたのお氣に入つたんでせう。」
「氣に入つたから思出した譯ぢやないが……」と云つて豊村は言淀んだ。幸手堤(さつてづつみ)のお露殺しの場が、觀てゐた時よりも
今になつて却つて痛切に目に映つて來るのであつたが、そんなことは無論明らさまには云はれなかつたので、「あの晩は
銀座から日比谷を散歩して、アイスクリームを飲んだりしてゐるうちに、偶然帝劇へ入つて見る氣になつたのだね。一
幕でもいゝから久振りに帝劇を見たいとお前が言出して入つて行くことになつたのだつたが、いざ見るとなると後をひ
いて、つまり大詰まで見てしまふことになつたのだね。誰れが何をやつたのやら、役者の名も役の名も僕は大抵は忘れ
てゐるが、お前はよく覺えてゐるだらう。女は芝居や役者のことにかけちや隨分記憶がいゝやうだから」
「さうでもないわ。芝居小屋のやうな雜沓(ひとごみ)の中で大切な晩をフイにしたのを後悔したことは今でもよく覺えてゐるけれ
ど。……先きの事が不安心であるのなら、あなたに會つてる間に一刻でも粗末にするのが惜しくつてならないんですも
の」
先きの事を不安心に思つてゐる譯を、彼女が口に出して云はないのは何時もの通りであつたが、明らさまに云はれた

いため却つて豊村は不安焦燥の思ひに堪へられなくなるのであつた。これほど邪氣なく女の方から戀ひしてゐながら、末永く添遂げる望みのないのを諦めてゐるらしいのが豊村には不思議に思はれて、をり／＼は女の眞心が底深く疑はれてならないのであつた。藝者などの賣女にも二度や三度は馴り合つた經驗はあるし、職掌柄女といふものについて、人並以上に知つてゐるといふ自惚も持つてゐる彼れも、一年近く初戀同様の思ひをして馴れ親しんでゐる柄江の心持は充分に呑込めなかつた。妻のある男と知つてゐながら容易にその戀を容れた彼女は、早晩二人の縁を斷たねばならぬ破目になつたら、たやすく別れを告げる氣でゐるのであらうか。……

さう思ふと、邪魔者である妻の方へ憎惡の目が向けられた。柄江にはまだ知らさないのだが、二人の戀もこのまゝでは最早續けられないやうに危いところまで嗅付けられてゐるのである。

「あなたはまた默つて考へてらつしやる。いやになつちまふわ。私が側にゐてもそんな澁い顏してらつしやるのなら、私一人で宿へ歸つちまひますよ。よくつて？」

柄江は不機嫌らしい口調でさう云つたが、寢心地のいゝ砂の寢床を離れかねてゐた。ふと、青い顏した若い男が、ステッキを持つて砂山の陰から現はれて波打際をトボ／＼と歩いた。逞ましい犬がその後に隨いてゐた。

「おや、僕も宿へ歸つて湯にでも入ることにしよう。歸りは海邊を傳つて行かうか。お前は先きへ此處を驅けて下りて御覽。跣足で辷つて下りるといゝ氣持だよ」豊村は再び心を取直して快活に云つた。その瞬間、夕日を載せた雲は濃淡暗明の美を極めて磯に碎ける波頭は溌剌の氣に滿ちてゐた。

「私の砂辷りを見てひとりで笑つてゐようと思つてゐらつしやるの？。私一息であの波の側まで驅けて行けてよ。直ぐにあの人を追越して見るわ。」

網江は足袋を脱いで、草履と一緒に男に托して置いて、立上りさま、一二三と調子を取つて、勇ましく砂に足を踏み下つた。その生々した後姿に目を凝らしてゐた豊村は、満身の血の涌立つやうな思ひをした。今までとはちがつた戀しさ可愛さを新たに網江の五體の上に感じた。白い泡の吹寄せてゐる濕つた砂の上に白い足を印して、裾をかゝげながら此方を顧みた網江の樂しげな顔付は、この世の者としてはあまりに美くし過ぎた。をり／＼は汚らしい生物としてのみ女を見てゐる豊村は、その網江ばかりは女といふ者の仲間へ加へるのがわれながら無駄なやうに思はれた。

白い手で招いた。唇が動いた。聲はよく聞取れなかつたが、笑ひを含んだ兩眼は今日の今の幸福を語つてゐた。かの肺患者らしい若い男は、しげ／＼女の方を見てから、砂山の方を顧みた。

豊村もやがて裸足で、柔かい砂を踏んで波打際へ寄つた。肺患者の窶れた淋しげな姿がことに憫れに彼れの目に映つた。

二人は足の裏を砂で擽ぐられる快い氣持を話合ひながら歩を進めた。汐煙は二人を包んでゐた。

「私汐風をドツサリ吸つて身體を丈夫にしとかなければならない」と、網江は胸一杯に深い呼吸をして、「私はまだ若いんだから身體さへ丈夫ならば、先きの事を案じて萎れるには及ばないわね。」と、自から恃むところがあるやうに云つた。

「人間は粉飾をしなくつても、持つて生れた身體を傷けないやうにしてれば自然に美しいんだよ。人間はなぜ衣服なんど發明したのだらう。裸體で生れてゐることにしてゐればよかつたのぢやないかと僕は時々思ふことがあるよ。社會だの家庭だのと詰らない窮屈な道を定めないで、好いた者は好きな者同士で氣儘に生きてゐたらいゝんぢやないかな。」

「夏だつたら裸體になつてあの波の中へ入つて見るんだけど。歩いてゐてさへこんなに氣持がいゝんだから、裸體でこ

「砂の上を轉げまはつたらどんなでせう」稍江の惱んだ黒髮は、蒼い波の上に蕩けるやうに注がれた、ドツトと強い音を立てゝは碎ける海の波音も、彼女には何等の恐怖をも與へなかつた。「面白い海の唄は無いでせうか。あつたら教へて頂戴な。私唄つて見るわ」

「知らないね」晋村は昔教室で讀んだバイロンやコールリーヂの詩の中に海を讚美したものゝあつたことを朧ろに思出したが、稍江に教へて唄はせるには役立たなかつた。「僕のやうな無風流な職業をしてる人間は、唄も詩も全く分らないんだから駄目さ。だけど、今あちらの夕燒の光つてる方の海を見てると、このまゝ舟に乘つて遠い所へ行つちまつたらいゝやうに思はれたよ。人間は時々そんな馬鹿な考へを起したりするんだね。」

「馬鹿な考へですつて？。私も今さう思つてゐたところなの。舟に乘つてあちらの方へ行つて見たいと思つてゐたのよ。……あなたも私も同じことを思つてゐたのね。」

「だつて出來もしないことを思つて見たつて詰らないさ。」

「なぜ？。出來ないことないぢやないの。本當にさうしようと思つたら、今日にでも明日にでも出來ないことないと私には思はれますよ。あなたのやうな男の人は、智慧があつて物事がよく分るせいか知れないけど、思切つたことは出來ないものらしいのね。御自分で思ひついたことを馬鹿な考へだなんてケナスのは、頼もしくないやうに私には思はれますよ」

さう云つた女の言葉は、不斷の無邪氣な言葉とは違つて、冷やりと晋村の胸に觸れた。氣のせいか、女の眼差しも今までの無邪氣なやさしさとは違つて、鋭く光つてゐた。晋村は思はず目を外らした。

なに、稍江がおれの胸の中の暗い思ひを知つてゐよう筈はない。ましておれを唆かさうなんて、そんなふて〳〵しい

豐見を持つてゐよう筈はないと、彼れは自分の安堵を打消したが、自分も持つてゐる若い日の[illegible]にだ惹さ[illegible]れるのではなかつた。

「私の云つたことが氣に觸つたら勘忍して下さいね。」

「おれはお前の一生を幸福にしさへすれば、それでいゝんだ。外に不平も不滿もないんだから、それだけはよく覺えといてお呉れよ」

「仰有らなくつてもよく分つてゐますわ」

柄江はさう云つて微笑した。男の心盡しに對して、口先や涙で事々しく感謝の思ひを現はしたりしないのが、却つて豐村をして彼女を可愛く思はせた。

「日が入ると急に寒くなつた。」柄江は詠歎するやうに云つて、人家の燈火を顧みた。

二

二人の部屋はT館の二階の一角で、直ぐ下の路は、町の子供の遊び場所のやうになつてゐたが、彼等の喧しい聲も寂しい浪の音に壓せられるので、二人の靜居を亂すことはなかつた。障子を開けると、夕暮れの濱へ漁船の引上げられるのが見られた。

二人は一緒に風呂に入つて來て、月夜の海を見ながら食事をした。豐村は一本の麥酒を飲干した。汐風に乾いてゐた喉には、麥酒の味もよかつたし、動きまはつた後の空腹には新鮮な魚類の味もよかつたが、食膳に向つて箸を執り盃を持つてゐる間は、汽車の中や砂山の上にゐた時よりも、一層はげしく自分の家庭の有様が念頭に上つて來るのであつた。

この頃一日だつて自分の家の食卓で快い食事をしたことはなかつた。病院にゐる間あるひは書齋に入つてゐる間は兎に角、いやでも妻のかよ子と顔を向合はせてゐなければならない食事の際には、神經が錐か何かでガリ〳〵摩擦されてゐるやうに感ぜられた。昔からどちらかといへば陰鬱な方で、手輕ながらも晩酌の酒の香も漂つてゐる食卓を快くさせる手腕を彼女は持つてゐなかつたのだつたが、夫の身持について薄々勘付いて來たこの頃は、料理の皿の中にも炊立ての飯の中にも、銚子からうつす酒の中にも、小皿へ滴らす醬油の中にも、氣味の惡いやうな女の恨みが壓込んでゐるやうであつた。料理の拵へ振りが存在になつたことは云ふまでもなかつた。そして、食事中に一言か二言、當てこすり染みた不快な口を利くのを例としてゐた。

「そんなにまづさうにして一杯上らなくつてい丶ぢやありませんか」かよ子はよく云つた。

「わざとまづさうに食べる譯ぢやないよ。おれだつて一日いやな仕事を勤めて來るんだから、晩餐ぐらゐは旨く食べようと思つてゐる。しかし、この頃は辛かつたり甘過ぎたりして、おれの口にや旨く食べられないのだ。」

「それはあなたが何でゝ私のすることにケチをつける氣でゐらつしやるからです。一ころよりも料理には氣をつけてゐるんですけど、それを認めようつていふ誠意があなたに無いから駄目なんです。」

「さうかねえ。」

あるひはさうかも知れないと、岡村自身もたまに感ずることはあつたが、料理のことはさうとしても、陰鬱な顔付して前に坐つてゐる妻と相對して、どんな料理だつて快く食べられよう筈はなかつた。

かよ子は、まづさうにして食べる夫を非難しながら、自分もいかにもまづさうに箸を採つて、しかもわづかしか食物を口へ入れないで箸を擱くことがあるかと思ふと、平生よりも皿數の多い料理を、食べなければ損だといふ風に貪り食

ふことがあつた。その時の口は貪食に尖つてゐた。

「私、今死んぢやならないんですもの。」と、ニコリともしないで言譯をした。

勤め人には一日中の一番の樂みである筈の家庭の晩餐を、こんな風で夢村は厭うてゐたが、しかし、口實を設けて外で食事をする時、ことに、新江を誘つて鳥屋や洋食屋などの明るい座敷で、小ザツパリした食卓に向つて、睦じく快く箸を採り盃を採つてゐる時に、ふとした機會で、かよ子一人で淋しい食事をしてゐる自分の家の茶の間の陰鬱な樣が思出されて異樣な心苦しさを覺えることがあるのであつた。

多くの婦人患者をたゞの生物としてのみ取扱つてゐるばかりでなく、幾人もの知合ひの女をも、知慧の薄い生物として見て、さういふ者の愛憎好惡に煩はされないつもりでゐる彼れも、妻といふ名で呼ばれる關係があるために、かよ子によつては、日々の生存を惱まされるのが心外であつた。

「お前はヤキモキして無駄に頭を痛めなくつてもいゝだらう。一生お前を饑ゑも凍えもさせる氣遣ひはないんだから。」

夢村はある日眞心からさう云つて妻を慰めた。饑ゑも凍えもせず、下女一人使つて氣樂に暮らしてゐるかよ子に不平のある筈はないと自分極めにして、彼女の嫉妬を無法な病的な作用と見做しながら、をり／＼妻の歡心を買はうとするやうな口を利くこともあつたが、そんな口を利いた後の氣持の惡さつたらなかつた。

悟られまいとする夫の細心な注意と、秘密の正體を見つけようとする妻の執拗な探索は、半歳あまりも續いたのであつた。職務の都合上歸りの遲くなつた時や宿直の夜など、下女がかよ子の吩咐を受けて病院へそつと主人の在否や行先を探りに來ることもあつた。方法もあらうのに、かよ子自身で出掛けて新聞社の秘密探偵に頼んで夫の秘密の動靜を調べさせたこともあつた。

豐村は妻の不都合な所行を憤りながらも、素知らぬ顔してゐた。

だけど、最近になつては隱すにも隱し了せなくなつた。第一妻などの目を忍ぶために心を勞してなんかゐられないほどに稻江に對する彼自身の執着が月を追うて深くなつてゐるのだつた。世間體なんぞ憚つて油斷してゐる間に、稻江が何時自分を離れて行くか知れないと疑はれるにつけても、妻と自分との間の、早晩免かれがたい破裂を一日も早くしたいやうに心が急かれた。

「あなたのやうな不人情な人と一緒に暮す譯には行きません。離緣して下さい」とでも、かよ子の方で單純に云つて吳れるのなら、事件は容易に運ぶのだが、自分だちの夫婦關係はさう手輕にうまく片付きさうぢやない。……豐村は昨夕から今朝にかけての妻の陰鬱な狂態が、廊下の向うの薄暗い海の方に映つてゐるやうに思つては、快い酒の醉ひも俄かに醒めたやうに感じた。明日歸つた後、煩はしさが察せられた。

「さう四角張つてゐないで横におなりなさいな」

廊下で月を見てゐた稻江は、座敷の眞中に火鉢を前にして窮屈さうに坐つてゐる豐村を顧みて揶揄ふやうに云つた。

「稻毛で月夜の晩に砂の上を駈けつくらした時のやうな氣持には、あなたはもうなれなくなつたのね。アダムとエバ。私の一つ覺えの話を、あなたは感心して聞く氣はなくなつたのですか」

「このアダムは、毎日いやな稼業を勤めて行かなければ、飯が食へないんだから駄目さ。稻毛の松林の中であの話を聞いた時にや、成程さういふ氣でゐれば幸福だ、それでいゝんだと感心してゐたが、あゝいふアダムとエバになつて生きて行けさうぢやないね。」

豐村は陸地で横になつた。そして宵月の洩れてゐる松林の中に腰を卸して、夢のやうなエバの話を、女の口から聞い

た九月の夜を思出した。その話はかねて知つてゐる耶蘇教のアダム、エバとは種類違つてゐたので、彼れの耳に落ちなかつたが、女患者の病苦の訴へや、かよ子のヒステリツクな呟きを聞馴れてゐる耳には、いゝ音樂でも聞かされてゐるやうだつた。

「も一度あの話を聞かせて呉れないか。僕は目を瞑つて一心に聽いてゐるよ」と云つて、彼れは目を瞑つた。

「眠さうに目を瞑つてなんかゐちや駄目よ。起きて私の方を向いて聞いてゐらつしやい」

「横になれだの起きて居ろだのといろんなことを云ふぢやないか」

豐村は起上つて火鉢の側へ寄つて、昔噺を聞かうとする兒女のやうな邪氣なさを見せた。女中が膳を下げて行つた後では、この八疊の座敷は闖入者に亂される氣遣ひはなかつた。潮聲は近所の雜音を洗去つて、二人は孤島にでもゐるやうであつた。

「むかし〳〵、アダムとエバがありました。アダムは男、エバは女」と、納江は放心したやうな顔して、氣取つた口調で話の口を切つた。

豐村は稻毛の時とはちがつて、女の話しつ振りのわざとらしいのを冷かしたくなつたが、自から噤えて、默つて謹んで聞耳を立てた。

「二人は花園の中で日を送つてゐたんですつて、いろ〳〵な花が咲いていろ〳〵な木の實がなつて、いろ〳〵な鳥が鳴いて、そして、寒くも暑くもない花園だつたのです。衣服といつたら肌着一枚着ないで、裸體のまゝで丁度よかつたといふのだから、日本の時候にしたら、眞夏のやうに暑かつたのでせうけれど、二人とも汗を出したり、身體を日に燒かれたりすることはなかつたの。食物は木の實を食へば年中食べきれないほど、彼方にも此方にも手の屆く所に生つてゐるの

だし、味もいゝのだから、食物の事で屈托したり食物の事で爭つたりする必要はなかつたんです。柔かい青い芝生は、二人のためにひとりでに出來てゐる寢臺なんでせう。日が出て朝になつて、日が入つて夜になつて、二人は自然に歳を取るんだけれど、二人とも自分だちの歳がいくつになつたのか知らない。親もなし兄弟もなし、鳥や虫なんかは花園の中に生きてゐるけれど、自分だちと同じ形をして、自分だちの言葉の解る生物は外に一つもないのだから、二人が知つてゐる以外の昔の話を誰からたつて聞けないし、花園の外の世の事を誰からたつて聞けなかつたんです。だから、アダムとエバの間に、秘密はちつともなかつたんですの。アダムの知らない事はエバも知らない。エバの知つてゐることはみんなアダムも知つてゐる。二人の仲のいゝことは云ふまでもなかつたんでせう。駒鳥のやうな鳥が森の上で鳴くのが二人の耳には戀の音樂のやうに聞えてゐたのです。

二人はそれで滿足してゐればよかつたのね。……だけど、アダムの胸にもエバの胸にも、相手に知れない事を一人で考へてゐたくなつたんですつて。たとへ考へまいとしてもひとりでに考へられるやうになつたのですつて。アダムが果物を取つてゐる間に、エバが草の上に寢そべつて、木の葉越しに空を見てゐると、男の形をした眞黑い雲が現はれて來たことがあるのです。それでエバはその雲がアダムとちがつた人間になつて花園に下りて來ることを空想したこともあるのです。アダムはアダムで、エバが寢入つてゐる夜中に目を醒まして、キラ〱光つてゐる星を見てゐると、今までのやうに花園の中だけでアダムと遊んでゐたんぢや物足らないつて氣になるのです。そして、そういふ時には、手と手と觸れ合つて寢てゐるエバの寢床の側を離れて、もつと星のよく見えるやうな所へ歩きだすのですけど、何處まで行つても星の光は同じやうなので、足ばかり疲れちやつて、ガツカリしてまた元の所へ戻つてエバの側で眠るのです。エバはそれを知らないの。たゞどうしてアダムはこの頃、日が高くなつて朝露が消えてしまうまでも寢るやうになつた

のかと疑ふ時はあつたのです。

エバ、お前はこの頃おれに秘密で何か考へてゐることがあるんだらう。顔付が平生のやうぢやないと、ある日のことアダムがエバを責めたんですつて。言葉はさう鋭くはなかつのだけれど、そんなこと云つて咎められたことは、これまでになかつたのだから、エバは思はず兩手で顔を隱したんです。アダムは男の力で女の手を顔から離したのですが、さうすると、エバの顔にはもう以前のやうな穏かな天人見たいなところがなくなつて、刺々した相がちやんと現はれてゐたんです。(豊村は稻毛の時よりも話の筋立も調子も少し違つてゐるやうに思ひながら、邪魔な口出しをしないで、默つて聽いてゐた。お伽噺見たいな詰らない話でもいゝ氣持で聽かれた。そして、わがエバの顔には刺々した邪惡な相が現はれてゐないのが悦しかつた)

それでエバがいくら辯解しても、一度疑ひを起したアダムの心は融けなかつたの。でも、エバは何時ものやうに男の胸に頭を押付けて安心して宵寢をしてゐたのですが、アダムはこの頃の癖で夜中に目を醒した時に、星明りでエバの顔を見てゐると自分の知らない者がこの女の胸の中には潜んでゐるやうな氣がして、それを知りたくつてたまらなくなつたのです。知りたい〳〵と思つて見詰めてゐる中に、一心で夢中でエバの胸を裂破つたのですが、胸の中には變つた者はなんにもなくつて、變つたことは今まで生きてゐたたつた一人の同類の息が絶えたことなのです。そして不思議にも、エバの顔から先つきの棘々して居た相が消えて、元の通りに穏かに美しくなつたのです。

花園には相變らずおいしい果物が生つてゐるし、美しい花もいろ〳〵に咲いてゐるのだけど、アダムはエバ無しに其處に住んでゐられやう筈はないの。夜の明けるのも待たないで、自分で土を掘つてエバの死骸を葬つて、一人で星の明を手頼りに足にまかせて花園を出て行つたんですつて。寒い風の吹いてる暗闇の方へ足にまかせて行つたんですつて」

輛江はそこで話を切つた。

「五年も前に平崎さんから聞いた西洋のお話。……これには深い譯があるんですつてね。あなたにはその譯が分つてゐるの？」

「夢見たいなことはおれには分らないよ。遊んでゐても何にも不自由しないやうな所はこの世にはあるまいからね。」

曾村は文學書生の平崎なんぞが勿體ぶつて喰つゝけた意味なぞを訊糺す氣はなかつたのだが、かつて平崎から聞いたといふこの話を女が特別によく覺えてゐて二度も繰返して話したがるのが不思議に思はれた。

「あなた、今夜詰らないことを云つちやいやよ」輛江は男と差向いで默つてゐると、今にも聞きづらい事を持出されさうに氣遣はれたので、ふとさう云つて豫防した。

「いやに今日は僕を嫌つたがるんだね。だけど僕が腹の中にどんな恐ろしい企みを持つてゐるにしても、お前に對しては微塵も惡意をもつてゐないことはよく分つてるんだらう。お前との關係をもつと深くしようと思へばこそ僕もいろいろと心を使つてゐるんぢやないか。その點はよく察してゐて呉れなくちや僕も苦勞をする張合がないよ」

「私とあなたとの仲をもつと深くするつて、どうするんですの」輛江は何の氣なしに訊返すとゝもに、ふと不安の念に駆られて、曾村の何か持出さうとする口を塞ぐやうに、慌てゝ「だけど、私今のまゝで滿足してるんですから。これだけあなたに可愛がつてゐられゝばこの上の慾の過ぎた望みは決して起しませんから、あなたも私のために餘計な屈託はなさらないやうにね。くれ〴〵もお願ひして置きますわ。」

寢床に就く前に海の方か町の方へ散歩して來ようではないかと、輛江は氣を變へて男を促したが、曾村は最早心も身體も一つところに粘りついて動かなかつた。

「お前は一生僕と一緒に暮した、といふ氣はないのかい。今のうち笑つて遊んでゐればいゝつていふ氣で、行末の事は思つても見ないんだね。それともお前は自分の腹の中にちやんとした心當てがあるのかい。」

「それを云つて見たつてはじまらないぢやありませんか。」

輌江の顔は物におびえたやうになつて無邪氣さを失つた。

「あれほど私がお賴みしてゐたのに、あなたは私が一番嫌つてることを仰有るんだから駄目だわ。今日は今日でこのまゝでお互いに不足はないでせうのに、無理に私を暗闇へ連れて行かうとなさるのね。」

「暗闇なものか。お互いに明るい所で不安心の影のない生活をしたいと思つてゐればこそ、僕もいろ／＼に頭を使つてゐるんだよ。」

「でも怖いこと聞かさないやうにして下さいね。」

「お前のためぢやないか。お前を思つてゐればこそ……」

豊村は牴牾しくなつた。藝者でもなく遊女でもなくそれに似寄つた浮氣稼業してゐる女でもない輌江が、半歳も戀仲になつてゐる男に對して、終生の苦樂を共にしようと、ついぞねだつたこともないのが却つて歯痒かつたが、一概にそれを責めて彼女の機嫌を害ねるのは躊躇された。

輌江は逃げるやうに廊下の方へ出て月夜の海を眺めた。

三

輌江は夜よく眠つた。時々ふと目が醒めて眠づらくなつても、男に話掛けられるのを恐れて、わざと熟睡した風をし

てゐた。眞村は頻りに寢返りを打つたり、冴えた目で眞夜中の闇を見てゐたりしてゐたが、かよ子の陰鬱な狂態は晝間よりも宵の間よりも鮮かに、彼れの枕許に現はれた。鞆江の居所をもかよ子が氣付いたらしいとすると、今夜にもどういふ馬鹿なことをしないとも限らないし、明日から先の鞆江の身が危かしいかも知れないのだから、安閑としてはゐられなかつた。

そして、眞村のためばかりではない。かよ子自身のためにも、徒らに生きてゐるよりも早く死んだ方が幸福ぢやないかと、彼れの夜中の冥想はそこへ押詰められた。……身體に弱いし精神は錯亂してゐるし、子供の出來る望は有るではなし、實家の方が頼みになるのではなし、何時まで生きてゐたつて、傍の者に迷惑を掛けこそすれ、自分に生甲斐のある世が渡れるのではなしと思つてゐると、さういふ女の存在の息の根を絶つのが格別惡いことゝは考へられなくなつた。

病院で田舍から來た老いた患者の[illegible]醫師の手術をした時に、院長の過失で手術後の經過が惡くて、間もなく患者をして悶死させたことが、彼れの念頭に浮んだ。生物である人間の死ぬるのに雜作のないことが考へられた。怨みにしろ喜びにしろ、死者の思ひがこの世に殘る氣遣ひのないことは、彼れには寸分の疑ひもなく信ぜられてゐた。殺人などした後で幽靈に祟られたりするのは、肉體的の迷信のさせる病的な神經作用だ。

秘密に殺人をしても、他人に知られないかぎりは、平然として少しも心を惱まさないで自分は生きてゐられると、彼れは堅固な自信を抱したが、一つそれを實行して、寸分の迷信に累はされない自分の心持を試して見たいやうに思つたりした。すると、知らず〳〵かのかよ子の存在が恰好の材料になつて、彼れの妄想の手術臺に上つた。

職業柄手近かにある毒藥の利用などに却つて彼れの胸に浮んで來ないで、芝居で觀たり活動寫眞で觀たりした幼稚な血まみれ騷ぎが一層強く目の前にちらついた。噴火口や大海の水底などが彼れの實行の場面となつて現はれた。

醒めてゐる間の妄想は何時の間にか昏睡裡の夢となつた。彼れは夜明前になつてやうやく寝入を得たのであつた。枕許に朝日の差す時分になつて、眠足らない目を開けてあたりを見たが、輛江は部屋の中にゐなかつた。顔を洗ひにでも行つたのかと思つてゐたが、暫く立つても歸つて來なかつた。

「お目さめで御座いますか」と、女中が廊下から聲を掛けたので、豐村は頭を持上げて、輛江の事を訊ねると、

「どうなすつたんでせう。今朝から一度もお見掛けしませんでしたが」と、女中は不思議さうに云つた。

豐村は驚いて起上つた。そして輛江の持物が昨夕のまゝになつてゐるのを見た。

「どうなすつたんでせう」と、女中は氣遣はしげに云つたが、豐村は返事もしないで階下へ下りて行つた。

機嫌を害ねて獨りで歸つたのか知らんと、彼れは前夜の自分の言葉を思出して後悔しながら萎れてゐたが、宿の者に對しては自分のあはてた樣を見せないやうにしてゐた。顏をも洗はないで外へ出て、磯邊へ下りて左右を見渡したが、そこらを歩いてゐる人々のうちに輛江らしい女はゐなかつた。

清鮮な朝の空氣も彼れに何等の力をも與へなかつた。でも、宿へ歸つて、女中の手前極りの惡い思ひをして一人で朝餐の膳に向ふのはいやだつたので、波打際を傳ひながら當てもなく歩いてゐた。が、暫くしてふと見上げると、昨日の砂山の上に、輛江が昨日と同じ姿態をして此方を見てゐた。笑つて手招きした。

豐村ははじめて夜が明けたやうな思ひをしながら、裸足になつて其方へ上つて行つた。

「今目が醒めたんですか。まだ眠さうな顔してゐらつしやるのね」と、輛江は事もなげに云つた。

豐村は先つきの疑ひは口に出さないで、女の側に坐つて大海の朝景色を見やつた。

「お前は今朝は早く起きたのかい。珍らしいね。これまで旅で泊つた時には、何時も僕よりも遲くまで眠つてゐるの

に。」

「何故だか、今朝は暗いうちから目が開いちやつたの。」□江は顔も洗はない男の顔を見出して、「あなたは昨夕も、魘されてゐらしつたわね。それを聞いてから私から思つたのよ。昨日東京を立つた時からあなたが私に云ひたい〳〵と思つてゐらつしやることを、無理に私が口を塞いで云はせないやうにしてゐたものだから、それがあなた一人の胸に溜つて魘されたりなんかするに違ひない。だから、自分が聞きたくないからつてあなたの口を止めるのはいけないことだと思つたのです。」

「おや、僕のいふことを素直に聞いて呉れるんだね」

「仕方がないわ。怖くつてよ。」□江は溜息を吐くやうに云つた。

「僕を責めちやいけないよ。お前の為めを一心に思つてゐるのだから。何時までも今のやうにしてゐちや、お前も心もとないだらうし、僕だつて物足らないんだからね。……僕は一生お前の外の女を愛しようとは思はない。僕が有つてるかぎりのものは皆みんなお前に与へたいので、その中の幾分の一でも外の女に割きたくないのだよ。」

「あなたは其処へ来ると仰有る事は私好んで聞きますわ。だけど……」□江はまた溜息を吐くやうに云つた。

「だけども家庭を持つのはいやだと云ふのかい。お前が承知しさへすれば、僕は体をもつてその道をつけるよ。決して世間の人にお前が恥かしい思ひをさせるやうなことはしないよ。……僕は今日にもお前のしつかりした家庭を持ちたいんだ。お前が進んで僕の望みを容れて呉れようなら、僕の胸に溜つてるいやな塊りも直ぐに取れてしまふんだよ。」

「私が小さい〳〵としてることをあなたは無理に思はせようとなさるのね。私が前以つて恐れてゐたことは矢張り本当だつたんですね。」

鞆江は豊村の妻を追ひのけて自分がそのかはりに彼れの家庭へ入つて行くことを、實際の成行としてはじめて考へるとともに顔の色の變るほどに胸苦しくなつた。

「戀ひし合つてゐる同士が夫婦にならうとするのは不思議なことでも恐ろしいことでもないぢやないか。それとも、僕との關係は一時だけのつもりで、外に生涯の夫と極めた男があるのかい。あるのならハッキリさう云つて貰ひたいね。」

「あなたは假りにもそんなことを疑ふやうにおなりなすつたの。」鞆江は呆れた目をして、疑ひを籠めた男の目を見詰めて、「私言譯はしませんよ。」

「疑つてる譯ぢやない。悪かつたらあやまるよ。……僕はたゞ二人が生死を共にするといふ決心をお前の口から聞きさへすれば滿足なのだ」

鞆江は默つてゐた。戀ひをして生きてゐるのこそ、一日半日でも、かうして幸福を感じてゐられるのだけれど、死を共にして何のいいことがあらうぞ。死ぬるだの殺すだのといふことを假染に考へてもゾッと身慄ひされるやうだつた。

「氣が進まないのかい。お前の決心次第で僕の一生の運も決つてしまふのだよ。」

鞆江はまだ默つてゐた。

「私もあなたの奧さんの事まで考へなければならないやうになつたんですかね」と、暫くして低い聲で云つた。「あなたに大事にされてゐるし、私もあなたのことを思つてゐれば、それだけでこの上もない幸福だと思つて、その外の事はしみ〴〵考へもしないし、成べく考へもすまいとしてゐたのですけれど、何時までもさうしてはゐられないんですね。いやでも恐ろしい者を見なければならないんですわね。見まいとしてもあなたが無理に押付けて見せようとなさるんだから」

詰りは免かれ得ない運命がいよ〱身に迫つて來たのを覺えた柄江は、今まで憎みも憐れみもなくたゞボンヤリ心に描いてゐたゞけで、顏をも一度見たことのなかつたかよ子の影を、目の前に映しだした。その影は意地くね惡い醜惡な相をしてゐた。(電車の中か汽車の中か、何處かで彼女が見たことのある惡相の女がかよ子となつて、彼女の記憶から浮出て彼女の目の前に現はれたのであつた)そして、その影は相手を呪つてゐるやうな目で此方を見下してゐた。

「私東京へ歸つても今までのやうに浮かりしちやゐられないわ。」

彼女がさう云つた平凡な言葉の意味は豐村にはよく解らなかつた。どこかの店員の一團體が砂山の後から現はれて來たのを機會に、柄江は立上つて、男を促して宿の方へ歩んだ。

(四)

朝食後二人は戸外へは一歩も出ないで時を過してゐた。何物かに急立てられるやうに、早く東京へ歸らうとしながら、いざ立たうとすると躊躇された。豐村はまともに肝心な話に觸れるたびに女が不機嫌になるのを憚つて、同棲の決心を強く迫ることはしなくなつたが、彼自身の目ばかりではない、女の目の前にも、かよ子の影と形が濃厚に浮んでゐることは、ひとりでに分つて來た。そして、その影を氣にしだすとゝもに、自然に男を手頼る氣持の深くなつて來るのが、無言のうちにも豐村には感ぜられた。

「私此方にゐる間だけは、詰らないことを考へないで安心して遊んでゐようと思つてゐたのに、あなたが私に明日から先の心配をさせようとなさるから駄目になつた」と、柄江は屢々愚痴を云つた。

千疊敷や天王臺など、豐村は嘗て見て知つてゐる山の眺めを話したりしてゐたが、話は稍々もすると止切れ勝ちにな

つた。

午餐の料理の好みを云つて、酒をも添へて來るやうに女中に吩咐けてゐるところへ、番頭が廊下へ來て、旦那樣にお話したいことがあるから些つとお顏を貸してくれと、言葉を曖昧にして云つた。

「何だい、此處で云つちやいけないのか」

豐村は變に思ひながらも、譯ありげな番頭の眼差しに惹かれて、廊下の方へ出て行くと、番頭は遠いところへ連れて行つて、

「豐村と仰有る方が來てゐるから、その方に私が訪ねて來たと通じて呉れと仰有つて、玄關へ御婦人が來てゐらつしやるんですが、どういたしませう」と、小聲で云つた。

豐村の胸は早鐘のやうに打つた。昨日の朝家を出る際に見た毒氣を陰鬱な色で包んだやうなかよ子の顏付がふと眼前に浮んだ。

「僕が此處に泊つてゐると答へたのかい」

彼れは努めて心を鎭めて訊いた。

「いえ、まだハツキリ御返事した譯ぢや御座いませんが、……先樣はよく御存じなのです。」

「兎に角いゝやうに云つて斷つてくれ。泊り人を一々訊ねて見たがさういふ名前の人は來てゐないとでも云つて」

「ハイ」番頭は當惑しながらも承知して行つた。

豐村は玄關の樣子に耳を澄ましてゐた。どうしてかよ子にこの家が知れたのかと、不思議な事件として恐ろしいやうだつた。

が、間もなく、番頭は二階へ上つて來て、客が大人しく歸つて行つたことを知らせた。

「ゐらつしやらないと申上げたら、何とも仰有らないでお歸りになりました」と云つて、豐村が何か訊ねはしないかと顏色を伺つてゐたが、彼れは輕く首づいたゞけで自分の部屋へ入つて行つた。

納江は不穩な微笑を待設けてゐた。

「僕だちの居場所を搜しに家からやつて來たんだよ。ちよつと驚いたね。しかし追拂つといたからいゝ。」

「あなたの奧さんが？」納江は信じがたいやうだつた。

「昨日誰れかに後をつけさせたのかも知れないね。馬鹿なことをしたものだ。」

「……どうせ知られてゐるのなら、あなたはお會ひなされはよかつたのに。」納江はやがて落着いて云つた。

「こんな所で狂人染みた眞似をされちや困るからね。」

この不快な事件について話を進めるのは忌はしかつたので、豐村は成べく口を噤んでゐたが、この宿を大人しく出て行つたといふかよ子のその後の行動については頗るしく想像が馳せた。宿の周圍をうろついてゐるやうにも思はれたり、海の中へ身投げをしさうにも思はれたりした。宿の番頭や女中に對して恥かしい思ひをさせられたゞけでは事が濟まないで、廣い世間に自分一代の名譽を瑕した醜聞らしを、かよ子のためにさせられさうにも思はれた。

拵えた料理が持込まれると、箸を採り酒盃をも手にしたが、二人とも飲食を樂む氣にしなかつた。喧嘩をするにも笑ふにも物を云ふにも、戸外で立聽きされてはゐないかと氣に掛つた。

「あなた、打遣つといていゝんですか」と、やがて納江は詰責するやうに云つた。

「そのことは僕にまかせといてお呉れよ。お前の決心さへ確かりしてゐればいゝんだから」と、豐村は女を宥めるやう

に云つたが、その言葉は空虚で、相手に力をつけるだけの力をもつてゐなかつた。

「早く此處を立ちませう。東京へでも何處へでも。私こんないやな思ひをしに大磯までも來たんぢやないんですもの、」

「さうだ。……僕が惡かつたよ。」

豐村はひたすらに謝つた。女の顏が嘗て見なかつたほどに險惡になつたのを見て驚くとゝもに、かよ子を憎むの念は燃立つた。

「僕がこれまでに適當な道をつけて、お前と僕との間に障礙のないようにして置かなかつたのが惡かつたのだよ。」

「あなたを謝らせたつて何の得にもなりやしないわ。だけど、誰れにも勝つて私を愛してゐると先つき仰有つたわね。」

「それは不斷云つてゐることだし、お前にもよく分つてるんぢやないか。」

「今まではさう思つてゐたのですけど、今日は分らなくなりましたよ。あなたはお腹の中では矢張奥さんを憚つてゐらつしやるのね。世間體から云つても、いざといふ場合には私よりも奥さんを庇ひなさるに違ひないと思はれますの。私と奥さんとが波の中へ捲込まれさうになつた時には、乾度奥さんを先きに助けなさるでせう。」

絢江が意地惡さうにさう云つたのが、豐村には意外であつた。かよ子の事についてはあまりに淡白過ぎるくらゐであつた女が、はじめて敵意を含んだ口を明らさまに利くのに戸惑ひしながら、

「お互ひに口先で悦しがらせを云合つたつて仕方がない。實際に僕がどうするか見といでよ。早晩分ることだ」と云つて微笑した。

「だけど、今あなたは奥さんのことばかり心配してそれで胸一杯になつてゐるのね。私がどれほどいやな目にあつてゐるか些とも顧つて下さらないのね。私が惡者になつたり人の笑ひ者になつたりしてゐるのに、あなたは救つてくれやう

とはしないぢやありませんか。」

「こんな田舎の者の思惑なんぞどうでもいゝぢやないか。も一度此處へ來るんぢやないしさ」

「だつて東京へ歸りさへすれば、今日の事を忘れてケロリとしてゐられる譯ぢやありませんからね」

「おや、どうすればいゝのかなあ」

野村は憫然として云つた。居づらい所に何時までもぢつとしてゐるのは堪へられなくなつたので、歸りを急ぎだしたら、其處でかよ子に待伏されてゐることを思ふと躊躇された。躊躇してゐるのを、柳江の方では好意をもつて取つて呉れなかつた。

奥さんのことを氣にしてゐるのよと云ひたげな目で柳江は冷かに見てゐた。

（五）

日が暮れかゝつたので、野村も思切つて停車場へ向つた。氣詰つてゐたかよ子の姿は何處にも見えなかつたし、町の様子に變つたところもなかつた。

汽車に乗ると、宿屋へ訪ねて來た女はかよ子ではなかつたのぢやないかと疑はれたりしたが、どちらにしたつて、忍びの旅の樂みはさんざんに傷けられて、東京へ歸つて行く氣持も、何時ものやうではなかつた。柳江の所へ來る時とは人が違つたやうに默つてゐるのも、野村の心を明い方へ導くよすがとなるのであつた。

東京驛へ着くと、何處かで晩餐を共にして、それから柳江が寄寓してゐる駿河臺の家の近處まで彼女を見送つてから、麹町の自分の家へ歸るのが、從來の例になつてゐたので、今日もその例にならはふと思つたのであつたが、かよ

子の身について一刻も早く眞相を確めねば氣が安まらなかつた。

「明日の晩に是非會ふことにしようね」と云ふと、

「え〻……左樣なら」と、靜江は愛嬌もなく云つて、道を外らして電車を乘換えたが、このま〻安閑と自分の家へは歸られなかつた。見たこともないかよ子と豐村との今夜の密話がさま〴〵に邪推されだした。そして、今まで唯だとのたまの逢瀬だけを樂んで、後は世間晴れて男を我物顏にしてゐる他の女の手にあの人を渡して平氣であつた自分の放縱が腹立たしくなつた。いざとなると奥さんの方が大事になるものか知らんと思ふと、それで濟ましてはゐられなかつた。豐村さんをいくら好いてゐても、永い一生を共にする夫としやうとは夢にも思つてゐなかつた彼女も、あの人の妻といふ名前がはじめて欲しくなりだした。その名前が無いためにかよ子に負けるのが口惜しかつた。

豐村は自分の家の前まで行くと、足を留て耳を澄ました。誰れの聲もしなかつた。格子戸を開けると、下女が出て來たが、下女の顏にも變つたところは見えなかつた。茶の間にも奥の間にも、家の中にかよ子のゐるらしい氣色はしなかつた。火鉢の火は消えてゐるし、夕餐の仕度のされた樣子も見えなかつた。

「奥さんはゐないのか」と、暫くして訊ねると、下女は、「何處へいらつしやつたのか私は存じませんです」と、尖つた聲で返事をした。

「何時ころ出て行つたのだい。」

「よく存じません。」

朝のうちからゐないのか、午后から出て行つたのかと訊ねても、下女は飽まで知らないと言張つた。不斷からかよ子の味方になつて、主人を非道な人間のやうに思つてゐる下女は、今日もかよ子に言含められて、白ばくれてゐるのに

違ひないと、豊村は忌々しくなつたが、怒つて見たつて何の効もないので、寝臺へ入つて安樂椅子に凭れてゐた。

さうしてゐる間に疲勞が出て、暫くウト〳〵してゐて、下女が茶を入れて持つて來たのをも知らないでゐたが、ふと目を醒ますと、他所行の衣服を着た顔に白粉のあとの濃いかよ子が、椅子の側に突立つてゐた。口も利かずに此方を見詰めてゐる彼女の顔は、眠氣の去らない豊村の目には化物のやうであつた。

「何處へ行つてゐたのだい。」

油斷のならない場合と覺悟しながら訊ねたが、すると、

「私芝居を觀に行つてゐました。」と、かよ子は靜かに意外な返事をした。

その答へは、「大磯へ行つてゐた」と、いふよりも、却つて無氣味に豊村の耳に響いた。

「芝居へ？……誰れかに誘はれたのか。」

「いゝえ、私一人で行つて來ました。」

「不思議だねえ。」

「今のうち觀たい者は觀とかなければ何時死ぬるか分らないと思つたからです。一人ぼつちで芝居なんか觀たつて面白い筈はないのだけど、……今朝ふいに思ひついて、新聞の芝居案内を捜して見て、お夏(下女)にも行先を云はないで出掛けたのです。」

「一日ぢつとして見てゐたのかい。」

「見物人は一杯で、泣いたり笑つたりしてゐましたが、私には芝居の筋道も分りやしません。私の頭はもう駄目になつたのでせうか。生れつき馬鹿だつたのぢやないでせうが、いろ〳〵に頭を使つたためにこんなになつたのです。」

椅子の側にへたばつたかよ子の顔はます〳〵蒼褪めて目には涙を含んだ。

「芝居は何處だ。帝劇なのか」豊村は沈默の間に心に迫つて來る不快な影を避けるために、要もないことを訊ねた。

「市村座へ行つたのです。何幕目だかに斬つたり斬られたりのむごいことを演つてゐました。そのほかにオタ〳〵といろんなことをやつてゐたのだけど、私よく覺えてゐません。……私には怨靈が取付いてゐるんですからね。何處へ行つても、あんな雜沓(ひとごみ)の中へ入つて行つても、家の中にぢつとしてゐても、氣の休まる時はありませんよ。あなたは私が怨靈に虐められてゐるのを平氣な顔して見てゐらつしやる。」

「お前は自分の神經で勝手に自分を苦めてるやうなものだ。」

「あなたは、病院の患者に氣休めを云ふやうに、私にまでも神經のせいにして一寸のがれの安心をさせようとなさるんですね。」

「……ぢや、どうしたらいゝんだい。心を落着けてよく話して御覽」

「あなたは人間の思ひといふものにどんな力があるか分らないんでせう。私はあなたが何處へ行つて何をしてゐらつしやるか、この頃になつてちやんと分るやうになつたのです。芝居を觀てゐても、役者のしてゐることの筋道は分らないのに、あなたのしてゐらつしやることは舞臺の上にちやんと現はれて來ますよ。」

それぢや、おれの方が怨靈に祟られてゐるやうなものだと思ひながら、豊村は怨靈の化身見たいなかよ子の顔から目を外らして、「お前は今夜はどうかしてる。眠り藥でも飮んで寢るといゝ。」

「お藥をあなたが調合して下さるの。眠り藥だか何だか、私が安心してそれが飮めると思つてゐらつしやるんですか。」

「そんなにまでおれを信じられないのなら、一つ家に一緒に住んでゐられないぢやないか。」

「だから別れようと仰有るの。あなたにはさうなるのが何よりも都合がいゝんでせう」かよ子の目は凄く光つた。「私はあなたがあの女と大磯でどんな約束をして來なすつたかよく分つてゐるんですからね。」

先つきからイラ〳〵してゐた與村は、かよ子の口から大磯といふ言葉を聞くとともに、滿身の血が頭に上るのを覺えた。惡夢に襲はれてゐるやうだつた。この女の怨靈が市村座の見物席から脫け出て、大磯の濱まで來たやうに思はれて、

「お前は何時までおれに祟らうとするのだ。」と叫ぶや否や、飛びついて、かぼそいかよ子の首を、無我夢中で引締めた。弱々しい彼女は聲一つ立てずに、白目を寄せて、彼女の夫の手に縊つて息を絕つた。

與村は白痴のやうな樣で、突立つて死人の姿を見てゐたが、やがて我れに返ると、それが彼れとしの當然の義務であるやうに、死者をかい抱いて、胸の溫みや心臟の動きなど診た。少しの手當で息を吹きかへす望みがありさうに思はれた。

が、さう思ひながら、彼れはかよ子が假りの死から生返つた後の光景を、不愉快に思浮べては瞬間の躊躇を敢てした。

今後の彼女の苦しい生涯、そのために累はされる彼自身の生涯が、瞬時の間に彼れの心の中に鮮明に活躍した。



おれん

室生犀星

ほろ時雨のそぼふるうそ寒い晩であつた。かねて話のあつた實家からの荷車が、濕つた門の前の道路に停るけはひがした。間もなく門が開いて、雨にぬれた車屋が二人、のつそりと這入つて來た。

兄の駒一は、その瞬間からぶるぶる震えながら懷手をしたまま立つてゐた。

「お荷物を引取りにまゐつたんですが、荷作りができてたますか知ら。」

寒さうに縮んだ車屋の油とんはつぴから、雨のしづくがたらたらあぶらのやうに光つては、土間に垂りおちた。駒一は、それに目をとめてゐた。

「いや荷作りはできてゐないんだ。本人がちよいとでも來て呉れると早わかりするんだが、僕にはわかりかねるんです。」

「おれんさんなら、今すぐ一足ちがひに入らつしやいます。」

車屋は、バツトの青箱から、すうと纖いやつを一本抜き出すと、さつきから長火鉢

にゐた弟の彌一が手もとにあつた蹄けを投げてやつた。むんずりしてゐたが、目の鋭い中學を卒たばかりの子である。

「主人が來るつて言つてゐましたか。さうですか。」

駒一は、そのときいくらか解しさうに顏を柔らげた。彌一もちよいと、その表情を目にとまらぬほど動かした。

しつこい暁闇は音を立てるほど濃くなつて、氣のせいか直ぐ近くを馳つてくるらしい幌車の、雨にたたかれるけはひが駒一の耳もとに感じられた。彌一にも。……車屋はペツトの燈で土間をかすめてゐた。ちかちかと火ぐちが赤かつた。門人とも默つてゐた。ただ、車屋が身動きするごとにじくじくした草鞋の水氣ぐんだ音がした。

そのとき不意に呼鈴がけたたましく鳴つて、ごつとりと車が門前にとまつた。駒一は、胸をとんと小衝かれたやうにびつくりした。車屋はがやがや言ひながら迎へに出たが、間もなく音のしないやうに、すうとおれんが土間へ這入つてきた。

おれんは、あきらかに弾せて、械立つほど目が大きくなつてゐた。動かず、駒一の目と行きあつたが、わけなく微笑んだ。駒一もおなじいやうにほほゑみを泛べた。べつに挨拶もしないで平常のやうな一分ばかりの親しい視線が、もう半月も別れてゐた彼らの間に交された。

「まだ荷作りをしてないさうですが……。」

車屋は、二人の顏を披ねて言つたが、そのとき二人は視線を外した。おれんに向つてそれには答へないで、彌一と顏を合して、これにも駒一と同じいやうな目語をしづかに合せた。

「荷作りはすぐ出來るんだらう。彌一、お前も手傳つて呉れ。」

「あゝいいとも。」

駒一は、おれんが及笄になつてゐるのを見つめた。なで付さへ気がひけるほど痩せてゐたが、それでも目だけはやはり大きかつた。

「どうぞ……」

おれんは駒一に、目で笑つて、ちよいと頭をさげた。

「ともかく二階へ行かう。」

駒一は、さきに立つて梯子段をあがりかけた。おれんもあとから跟いて行つたが、矢絣銘仙の若々しい着物を着込んでゐるので、よその家の者のやうな氣がした。古い家の天井や梯子段になじまない生々した色合ひであつた。

二階のこれまでおれんの部屋になつてゐた四疊半は、おれんが居抜きになつたままになつてゐた。簞笥の上の針箱、圓窓にそふた鏡臺、壁ぎしの衣桁にかけられた不斷着と新しいタオル等。

「でも能く自分でやつてきてくれたね。來さうにも思へなかつたが……」

おれんは默つてうつ向いてゐた。か弱さうな頸すぢから、すつと肌の奥までひとすぢに両側からゆるい傾斜に盛られた、あたたかい一本の線が目にはいつた。そのしたに大きな胸部のあることまで、駒一はいちはやく考へた。

疊はさらさらと埃ばんで、人氣がなかつたので、冷たさが白々しい足袋のなかまで泌みこんだ。

「ほんとに能くきてくれたね。」

駒一は、同じことを再度言つて、からだを慄はせてゐた。弟とは、やつと四つちがひの彼は、生やさうと思つても髭さへ生えてこなかつた。

けれども、駒一は、肩に手をかけるのさへ平常とはちがつて不可ないことのやうに思はれた。

「もう一度お目にかかりたいと思ひまして參りましたの。」

おれんは既う泣いてゐた。いぢらしげに彼は見てゐたが、だんだんに近づき合つた。

階下では茶の間の達磨時計が、大きな背をゆつくりと、ねぢでも弛んでゐるのであらう、八つばかり鳴つたのである。

「兄さん。手傳はうかな。」

弟の聲がして梯子段をみしみし登つてくるらしかつた。二人はすぐ離れた。寒くて二人とも震えてゐた。けれども平常から氣のつく弟は、ゆつくりと時間をかけて上つてくるらしく思はれた。

ふたりとも慌てて簞笥や紙袋の始末をはじめ、彌一が這入つてきたとき

「お前は長持を整理しておくれ。押入のものを入れればいいんだから。」

「僕でもいいんですね。」

「いいとも。」

おれんは赤らんで彌一に

「どうも濟みません。いろいろ御厄介にばかりなつて——。」

さう言つて又ちよいと赤らんだ。彌一は、長持の中へ座布團などを入れてゐた。そのとき、かれは不思議さうに黒い箱に入れたものを長持の底の方に見つけた。手でさわつて見てゐた。

「ねえさん。これは何です。」

おれんは、長持の方へやつてきたが、黒い箱を見ると、赤くなつた。

「見ちや厭。」

彼女は、その上にモスリンの風呂敷をわざとかぶせて、へいぜいから潔良しすぎると言はれてゐた目をうつとりと微笑ませた。弟は風呂敷をとらうとした。

「ほんとに見なすつちやいけないわ。ごしやうだから、これだけかんにんして下さいな。」

彌一は、無理にそれを見ようとした。

「ちよつと位いいでせう。だつて、これきりで見られないんですから。」

おれんはどうしても聞かなかつた。わたし誰にも見せなかつたんだからと言つて、手を硬ばらせてゐた。

「何だ。あ、それか。おれも見たことがないんだ。」

駒一がそばへ寄ると、なほ、おれんは見せようとしなかつた。が、弟は無理にそれを引づり出した。それは新しい一挺のヴイオリンであつた。

「こんなものをお前が持つてゐたのかい。一度も彈かなかつたぢやないか。」

駒一は變な顏をして樂器とおれんとを交る交る見つめた。おれんは泪ぐんでゐた。駒一もすぐ簞笥の方へ座をはづして行つた。

彌一は默つてそれを元のまま長持の底の方へしまひ込んだ。ああいふものがあるとは夢にもおもはなかつたので、かれは、變におれんの目をみるのさへ恐れてゐた。三人とも默つて荷作りするといふより、品物を片づけるのに熱中し出した。

荷物をすつかり送り出してしまつてから、おれんは改めて座つて挨拶をした。

「お家へよろしくね。」

駒一はそれだけ言つて、おれんの濡れた顔を見つめた。それきりおれんは立ちあがつて土間へ下りて行つた。そして

「お母さんは――。」

低い聲で駒一にささやいた。

「ちよいと外出してゐる。會はなくともいいよ。あんな人には。」

おれんは弟に送られて門の前まで出た。弟は、もつと先きまで送つてゆかうと言ひ出したがおれんは斷つた。

「こんど又いらつしやるやうになつたら、きつと入らつしやい。」

かれが言葉の終らないうちに、おれんは泣き出した。車はうごき出した。しぐれの雨は本降りになつて幌をたたいてゐた。

母のおさとが歸つてくると、玄關が汚れてゐて藁繩の屑がちらかつてゐた。

「さとから荷物をとりに來たんです。」

駒一はあてつけて刺々しく言つた。

「そりやい丶鹽梅だ。いつ迄置いてもらつても此方が迷惑するばかりだ。」

おさとは、それきり茶の間に座つて默つてゐた。すぱりすぱりと煙草を吸ひながら落ちついてゐた。

「これでお母さんもすつかり肩が輕くなつたやうな氣がする。」

彌一の方をふりかへつて言つたが、彌一は辨解らしくちよいと睨むやうにした。が、默つてゐた。駒一は自分の部屋へはいると、その晩はとうとう茶の間へ出なかつた。弱い寧ろ意氣地がないほど温良しすぎる兄の寢顔は、目の端が濡れてゐて一人で泣いてゐたやうに、弟にはおもはれたのである。

「兄さん、もう寝たのかい。」

駒一は何かの雜誌をひらひら讀みながら、目冴えがして眠れなかつたので、幾度もさう言つて兄をおこしたが、ぐつたりして睡りこんでゐた。

おれんが家出をした四五日前のある夕方、母のおさとが駒一を呼んで、反對の納屋の方から見える勝手をさして見せた。そこには、よごれものを洗つてから、ぼんやり勝手の開き戸から荒れた庭さきを眺めてゐるおれんのほつそりした姿が見えた。となりは、大きな材木屋になつてゐて、塀の上で若い大工が一人、ごしごしと鋸の音を立ててゐた。冷たいしぐれに濡れた鋸屑が庭へまで吹かれて、それが濡れたまま、にぶく匂ふやうに光つてゐた。

「もう何時でせうか。だいぶ鋸日が見えなくなつてきたやうだ。」

大工は、黒いパッチを穿いた足を塀の上から下げて、こちら向きになつて言つた。

「もう四時過ぎですわ。半になつてゐるかも知れません。」

大工は慌てたやうに鋸を材木の伐り口から抜いた。

「そんなになりますかね。日が短くなりましたね。」

胸のどんぶりから煙草を出して火をつけた。まだ、二十を出たか出ぬくらゐであつたが、おれんのぼんやり過ぎるくらゐな顔立ちを、その皮膚(きめ)の細かいのを見つめてゐた。

「お母さんはお達者ですか。二三日見ないやうですが……。」

閾の上に、甲高に盛られたおれんの素足をちよいと見た。土踏まずが柔らかくたわわになつてゐた。

「え。お達者ですわ。お寄りなさいましなね。」

おれんは、やはりぼんやり立つてゐた。大工はそのとき、つるりと塀から辷り下りて、庭へはいつてきた。これまでにも、よく庭木を伐らせたりするときに、この大工は何時も塀から出這入りしてゐたのでおれんは別に何とも思はなかつた

大工は、そばへくると、茶の遅れ咲きをむしりながら

「茶の花つて奴は、寒くなると咲くものですかな。」

空つ聲で言つてやつて來た。そして不意に開き戸を見たが蝶番が外れてゐたので一何んだ。外れてゐる。」と呟いて、自分で、腰から金槌を抜き出して見る間にたほしてしまつた。

「済みません。だいぶさきから外れてゐるんですの。」

おれんは、戸を開け閉てしながら、工合よくなつたので嬉しげに言つた。

「これだけの事なら何時だつて直してあげますよ。わけのないことですから。」

大工は、また新しく紙卷に火をつけた。そして不意に

「おれんさんは何かい。頬になにか塗けてゐるんですか。それでそんなに美しくなるのかな。」

感心したやうに言つてみせたが、しかし何處かに狡るい意味が含まれてゐるやうにも見えた。

「いいえ。何にもつけてゐませんの。」

おれんは紅くなつて機械的に頬に手をふれてみた。

大工は自分の頬をなでたり、さすつたりしながら

「美顔水をつけてゐるんですが、なんにも滑つこくなりはせん。地がだめなのかも知れん。」

喉でころころ笑つた。色が白く、様子もいくらかしやれてゐた。

「男のくせにそんなものをおつけになるんですか。」

さうおれんは良家にそだつたもののやうに微笑つた。ひとの善すぎるやうな目が、大工の目にやさしく映つたのである。

「顔を剃つたあとで塗けるくせが、ついてんですよ。」

大工は、おれんが片手だけ、開き戸にもたらしてゐるのをちらりと見た。あかみを含んだ圓い手首が、快よげなつの字なりに柔らかく曲つてゐた。

「あんたの手はきれいだな。こんなに綺麗な手があるもんかな。」

さう大工は言つたが、もうおれんは、その手首に觸られてゐた。

「お勝手のことをするものですから荒れてしまひますのよ。」

男の掌にさわられてゐても、やはり平氣でゐた。

「ほんとに綺麗な手だ。」

かれが二度目にさう言つたとき、おれんは、べつに手を執られてゐるといふ意識よりも、そんなに手がきれいだらうかと、むしろ自分で自分の手をながめるために、ふいと手を自分の方へひいた、それが、あまりだしぬけであつたので、大工の方で赤くなつた。それをきつかけに何か挨拶らしいことを言つて、塀を乗り越えて行つてしまつた。

と、納屋の方から母親のおさとが、ふいに庭へ出てきた、それでも、おれんは平氣で、微笑んで言つた。

「お隣りの大工さんが、諸番をなほして下さいましたの、」

母親は、いつものやうに

「そりや結構だね。世間若い男を引つぱり込んだりして、よくそんなに白々しいことを言はれたものだね。」

汚ない歯なみをみせて言つた。そして「駒一もちやんと見てゐたんだよ。」と、毒づいて行つた。

おれんは何が何やら分らぬなりに、すぐ大工のことを思ひ出して、むしろ本能的に赤くなつた。

駒一に別にその晩、おれんには何もいはなかつたが、おれんが手をさわられたときのことを考へると、胸がわくわくした。それから何かにつけて煩さくおれんは母親から諷刺けられた

四五日過ぎてから、また、干大根を庭木からおろしたりしてゐると、れいの大工が塀の上から此方をながめてゐたが、両方に籠に採つた大根を持ちにこぼしてゐるので、かれは、黙つて塀から飛び下りると、いきなり手傳つて搬んでくれた。

「わたし一人だつて出来るんですから構はないでくださいな。」

おれんはさう言ひながら断つたが、大工は幾抱えも例の開き戸のある勝手へはこんだ。この間のこともあつたので、はらはらして早く塀を越えて行つてくれればよいと、そればかり冷たい大根の肌地をかかへながら考へてゐた。それにおさとや駒一が何時勝手へ出てくるかわからなかつたので、しまひには、声がしらさへ震へて来たのである。

「あとはわたしがお致しますから、ほんとに構はないで下さいまし。」

大工はそれにも答へないで、これも勢ひすぎたやうに呼吸をあらくしながら、あとに残つた一と纏め分まで外した。

「もうこれだけなんだから序にやつてあげますよ。」

かれはさう云ふ間もなく、その殘つた分まで勝手へはこんでくれた。おれんは氣が氣でなく、頭が混んできて、早くかへつて呉れるやうにと、そればかり考へてゐた。しまひには堪らなくなつて言つた。

「あなたに外していただいたことが知れると叱られますから、早く塀へあがつてくださいな。」

「これから何でもお手傳ひしますよ。さう言つて下されば……」

大工は立つたまま、おれんの怯々した初々しい目をみつめた。おれんは恐くてすぐ目をふせた。そして一生懸命になつて「早くかへつて下さらないと困るわ。」と言つて急がした。

「重い仕事はなんでも言つて下さい。」

大工は然ういふと、つるつると塀の上にあがつた。おれんは慌てて勝手へはいつて行つたが、勝手で弟の彌一が柿を剝きながら、おれんを微笑んだまま見つめた。おれんはすぐさま蒼褪めて了つた。

「さつきから此處にゐらしつたの。あなたは。」

「今やつてきて柿を一つ剝いたところなんだ。ねえさんにも上げようか。」

弟はさう言ふと、二つに割つた半分をおれんにわたした。霜どきの固い柿の肌はつめたくて羊羹のやうに甘美かつた。

彌一はおれんが未だおどおどしてゐるのを見てゐるうち、ことしの夏、おれんが行水をしてゐたところを見たことをおもひ出した。あのときも、弟であるといふ安心からか、べつに、自分のからだをかばふこともなかつた。夕方の李の木かげに、ありありと白く露はに刻みこんだ顫へるやうな姿は、彌一のあたまに永く殘つてゐた。

「彌つちやん。石鹼をとつて下さいな。勝手にあるのよ。」

彌一は石鹸を取つてきてやつた。その間に彼女は大きなタオルで肌をまいてゐた。――それから彌一がお行水をすると、いつも洗ひにきてくれたが、かれは恥しがつて、どうしても洗はせなかつた。

「まア變なひとね。どうしてでせう。」

しまひには、おれんは洗はせないので、そばに立つたままゐた。かれは益々はにかんで急き立てて

「あつちへ行つてゐて下さい。どうもねえさんが居るといけないんだ。」

かれは、とうとうおれんを追ひやると、寂しさうに一人でぽちやぽちやからだを洗つてゐた。洗つてもらひたいと思ひながらも、いつも洗はせなかつた。青白い永い夏の日ぐれの光と、小屋根を這ひ出て巣作る蜘蛛などが、かうしてゐるうちにも、かれの目のうちを往き來してくるのであつた。

「あのね。あの、わたし先刻から庭にゐたのを知つていらしつて――。」

おれんは言ひにくさうに、きよとついて言つた。なんだか彌一がみんな見てゐたやうに思はれてしかたがなかつた。

「いま來たばかりなんですよ。もう一つ食べないこと」

彌一は、あらたに又柿を一つ剝からうとした。おれんは自分で小刀をとりながら言つた。

「わたし剝いてあげますわ。」

「うん。ねえさんの方が上手にきまつてゐら。」

かれは、そのしなやかな手つきを嬉しさうに見つめてゐた。そこへ兄が、くると

「やあ、ずいぶん仲が好いな。おれも交ぜて貰はうかな。」

と、ここへ割込んだ。――併、おれんが嫁入つてきてから、弟はいつもよりずつと彌一と仲がよかつた。

「この皮の剝きやうは何んだい。彌一だらう。」

駒一は、肉を厚く喰つつけて剝かれた盆の上の柿の皮を見ながら微笑つた。おれんは、夫に座をあたへながら

「でも殿方はみなさうよ。彌一さんばかりでないわ。

長い睫毛のしたから、ちらりと彌一をみて言つた。兄は上機嫌であつた。

「おれなら最つと上手に剝くがな。」

駒一がさう言ひ終らないうちに、おれんは優しげに遮つた。

「あなたも同じだわ。わたしが、一番うまいのよ。」

おれんはさう言つて笑つて、するすると水氣のある長い皮を盆の上に盛りあげた。みんなは舐べはじめた。冷たい快よい甘みある味ひは、おれんの唇をもつと紅く冴えさせた。駒一はこころよげにそれを見つめてゐた。

隣では、材木を挽く音がしづかに聴えてきた。れいの大工の聲らしい流行唄が、しぐれ過ぎの雪に間もない荒れた庭からつたはつてきた。おれんは、またいやな思ひがちよいとの間浮んでくるのを感じた。

そこへ母がひよつこり出てきた。と、すぐ不機嫌らしく言つた。

「炬燵の火が消えてゐるのに、すこしも關つてくれないで平氣なもんだね。」

おれんは、おさとの顔をみるとすぐに

「今すぐ持つてまゐりますわ、どうもすみません。」

立ちあがりながら十能を持つた。

「亭主のそばにばかり喰つついてゐて、すみませんもないもんだ。」

おさとは、いそいそと出てゆくおれんの後姿をみながら言つた。「そればかりならいいが……」と、あとを言はないで、ぶいと、又勝手を出て行つた。

「お母さんには困りものだ。嫁さへもらへばああなんだ。」

おれんのさきに來た小學校の女教員をしてゐた嫁は、二ケ月もたたないうちに出て行つた。こんどはそんなことはあるまいと思つてゐるうち、もうおれんが嫌ひ出した。

「我儘なんだから。」

弟は口を揃へて言つた。駒一も、爾一も、子のないおさとに子供のときに貰はれて育てられた。おさとのつむじ曲りから、両方の實家とも、貰はれの謝り物をさへ斷つてあつて、ゆききしてゐなかつた。だから兄弟とはいへ、べつべつな實家から貰はれてきたかれらは、そつくり氣質がちがつてゐた。

若い同志の方では、くち惜しくおれんに當つけてゐる刺々しいおさとの聲が洩れてきた。駒一は眉をしかめた。――そこへ、おれんが下駄を持つて（それが力なさうに乘れられてあつた。）かへつて來たが、若い顏を怒りの上にあらはしてゐた。

「母さんをいいのにしてあげたらいい。」

駒一は、おれんをねぎらふふうに言つたが、氣の弱い彼女はそのやさしい言葉をきくと、目をうるませた。

「ええ。」

「やはり我慢が悪いかね。」

「え。」

弟は席をはずさうとした。

「わたし既うつらくつて。」

おれんの啜り泣きが、かれのうしろから聞えた。彌一はむしろ性的にその啜り泣きを半ば快よく、又悲しげに全身に聽き入れた。

母のおさとは炬燵にあたつてゐて、彌一が這入つてくると、その間が暗かつたので、母かどうかをはつきり初めのうちは分らなかつた。

「お前まで一しよになつて――さうだ、みんなぐるなんだ。」

おさとが小言をいひ出した。このごろ、三人とも顔さへ見れば、きつと小言を聞かされるやうになつてゐた。

「なにがぐるなんです。年甲斐もない……。」

彌一は聲を荒らげて言つた。

「顏ばかり優しさうに蟲も殺さないやうだが、ふてくされだよ、あの女は、お前なんかに分らないがね。」

彌一はむか腹を立ててしまつて、つツ立つたまま喚いた。

「そりやお母さんよりかずつといい人ですよ。あなただつて何をしてきたか分らないやうな人ぢやありませんか。」

おさとは金切聲をあげて、するすると炬燵から辷り出ながら叫んだ。

「もう一度言つてごらん。三十年この方後家で通してきたんだよ。お前なんぞが、生意氣お言ひでない。」

おさとは、もと、かなり大きな料理屋を町のはづれでやつてゐた。そのころの亭主に先立たれてから、商賣をやめたが、いろいろな噂がまだ町の古い人達の間に遺つてゐたのである。

「何が後家だ。」

弟は昂奮しながら、怒ると破裂するやうな聲で叫んだ。

そのとき勝手では、駒一と、おれんとが、またしても起つてくる母と弟との口ぎたない諍ひに耳をそば立ててゐた。

おれんはがたがた慄えてゐた。

「あ、毎日毎日いやだ。」

兄はひとりごとを言つたが、おれんはそれが自分をも含んでいはれたもののやうに、柱にもたれてしくしく泣いてゐた。母屋では、やはり材木を挽く唄がきこえた。」

おれんが實家へかへつてから、間もなく温かい春になつた。こんどは母のおさとが自分で嫁をさがしてあるいたが、むしろ、押しつけるやうに貰つてしまつた。駒一は、べつに嫁の話に口出しもしなければ、いやだとも、好きだとも言はなかつた。ただ、さきのおれんと別れてから半年ほど押へてゐた寂しさもあつたので、母の言ひなりになつてゐた。

おせんと言つて色黒であつたが、からだが頑丈で、あるくと頬の肉がゆれるほど肥つてゐた。何かから終考へこんでゐるやうなところがあつて、駒一には親しみがたいところがあつた。

駒一が銀行からかへると、飯をしまつてから、ふたりとも部屋へ這入つたきりで出てこなかつた。二人はこそこそと低い聲で何か話し合つてゐたが、弟とこれまでのやうに打明話をするやうなこともなかつた。よく活動や芝居にでかけ晩くかへつた。

「竹の皮包みなどを押入へ入れてあるんだよ。よごれ物だつて一つも洗ひもしない。まるで瞞されて貰つたやうなものだ。」

おさとは、一ト月もたたないうちに小言を云ひ出した。實際、活動がへりなどで、菓子を買つてかへると、皮包みを押入へよく抛ちこんであつたりしてあつた。彌一は、おれんのゐたときのやうに親しく話をすることもなく、通り一ぺんに毎日を送つてゐたが、兄はすつかり人が變つたやうに、おさととも、彌一とも親しまなかつた。

よく勝手で洗ひものをしながら、れいの塀の上で何時も木を挽いてゐる大工に聽えがしに「庭のちぐさ」や「ユーナの死」などをうたつてゐた。どこか艶めかしい聲音をふくんだ唱聲は、彌一に、よくおれんのことを考へさせた。「いつたい兄貴はおれんのことなぞすつかり忘れてしまつたのだらうか。」と、彌一は考へ込むことがあつた。

大工はやはり塀の上で、ぽつぽつ芽組み出した李や梅の枝越しに聲をかけてゐた。おせんも何か話してゐた。彌一がふらりと庭さきへ出ると、ふたりは話をやめた。

「いやな大工さんね。いつも話しかけるんですよ。わたし、はらはらしてしまひますのよ。」

おせんは、低い聲で彌一に告口をするやうに、わざと親密さうに言つた。大工は、さくさく木を挽いてゐた。

「煩さい奴ですが、さう悪い奴ぢやないんです。」

弟は、どす黒いかんじのするおせんの頬をちよいと見たが、あぶらぎつて、そとの悩ましい春の空氣にたらたらしてみえた。

「でもわたしが勝手へ出るのを待ち伏せにして話しかけるのよ。お母さんなぞに變に思はれてもこまるわ。」

わざと眉根をくもらせながら言つてゐたが、その目はやはり塀の上にそそがれてゐた。ときどき「おせん可愛や三度

日の縁に來て。」と出窓口に顔づけて叫つてゐることもあつた。おせんは、そんなとき勝手から手杓の水をぱつと窓のそばへハネ飛ばしたりしてゐた。

「水呪ひなら此方からするもんだよ。ほら、濡れてしまへ。」

大工は飛石の水をあべこべに投げつけたりした。

「いけすかない大工さん。邪さん。」

おせんは微笑ひながら怒つて叫んだりしてゐた。

ときには大工がこちらの庭へ下りてきて、勝手の開き戸のところへやつてきたりした。おせんは戸のきわまで出て拒んでゐた。

「よくそんなに肥つたものだね。何を食ふと、さう肥るんだらう。ほら、まるで團子餅のやうだ。」

大工はさう言ひながら、おせんの膝のところを撫でたりしたが、その手をぴつしやりと叩いてをいて

「いやな人。撫でまはしたりして、あつちい入らしやいよ。」

おせんは笑ひながら、何も彼も知りつくした、ふやけた目つきをしてゐた。彼の仕事ズボンが細い腰から踵のさきまで、かつきりと肉地をくひ込んで男らしい腰かしらまで、いち時に目にいれた。

「だつて先の奥さんは默つて手なんかに觸らしてくれたぜ。そりや見るから初心ないい女でしたよ。」

大工は、するい目つきでおせんを見つめた。おせんは、すぐ目をちかちかさせ、その上、苛々して言つた。

「わたしやそんな初心な眞似ができないんだわ。ひとの手にさわつたりして厭なことね。」

「することに艶があつたよ。それに奥さんといふより娘々してゐたぜ。そこの戸にもたれてぼんやりしてゐたところ

なぞ、繪にかいたやうだつた。」

大工は、ふいと戸の方をながめたりしながら言つた。おせんはすつかり怒つて了つて、立ちあがると

「わたしやそんな甘い人とちがふんだから、お氣の毒さまだ。」

さういふと、ぷいと立つて勝手の方へ這入つて行つた。荒々しく、ハメ板をぎしぎし鳴らした。

「何んだい。ふんだ。」

大工は嘲笑ひを鼻のさきであらはすと、また、塀の上へ猫のやうにあがつて行つた。その木挽小屋にそふた大きな桐の木の頂には、紫ぐんだ花がうすあをい空とすれすれに、逆立てた房を群生させてゐた。

「自分で勝手に捜しておいて、いまさら氣にいらないなんて餘りな言葉だ。」

駒一はめつたに言葉を返さなかつたのが、このごろになつて思ひきつて、おさとに食つてかかつた。かほぢゆうを眞蒼にしてゐた。

「それ、そんなに毒口をきくのも、みな女にならつたんだらう。何とでも言ひなさい。わたし女の顔をみるのも厭だから。」

おさとは、決しておせんに用事をさせなかつた。「いや、わたしがするから。」と炬燵のことも、食事の膳立なども自分でやつて、ひとりで小寂しく食べてゐた。おせんはおせんで、駒一の留守のときは一人で膳に向つてゐた。弟もいつ間にか、ひとりで膳の出し入れをして、ひとりづゝが別々にやつてゐたのである。

そのうち駒一は晩になると、羽織の下をふくらかしては、よく外へ出かけて行つた。駒一と玄關などで出會すと、兄は羽織の下に手をやりながら

「ちよいと行つてくるよ。お母さんがかへらないうちに歸るから。」

さう言ふと、せかせかと出て行つた。おかしいと思つてゐるうち、駒一の部屋の、銀行論とか、銀行法とかいふ重立つた書物が、だんだんに姿を消したばかりではなく、どこか部屋全體の物が數を減くさせられたやうに淋しくなつてゐた。何か思ひ出さうとしたが駒一にはその部屋にあつたものを一々考へ出せなかつた。しかし、數が足りないことは實際であつた。それは毎晩もつづいたし、朝出勤するときなども、風呂敷包みがよく提げられてあつた。

おせんとおさとは、毎日爭つてゐた。そのうち或る晩のこと、二人は口汚なく言ひ合つてゐたが、

「さうさうお母さんの小言ばかり取つてゐられはしませんわ。」

おせんは立ち上りながら言つた。

「…お嫁をとつてくれと言ひました。お前なぞにちやほやされなくともいいんだ。」

おさとは又「お前らが居るために命を取られるやうなものだ。」と、雛祇のやうな皮肉をばさばさせて嘲つた。

「ではわたしどうすればいいんでございますか。」

躍起になつて尖つた聲でおせんは膝をすすめた。が、おさとは冷たく流し默つて、かんかんと煙管をはたきながら言つた。

「お前のことはお前の勝手にするさ。わたしに相談しなくともいいだらうから。」

おせんは、そのときぷいと席を立つと、それきり部屋へはいつてその晩は出てこなかつた。そして翌朝起きると、お

せんはもう居なかつた。

駒一は默つて毎日冷たい辨當をかかへては出かけたが、晩もおそくでなければ歸へらなかつた。おさとは、べつにおせんのことも聞はないで、誰とも口をきかないで、ひとりで沸々言ひながら寝床にもぐりこんでゐて、冷やかに駒一を見てゐた。

「ねえさんはどうしたんです。」

彌一がさう言つても、兄はけろんとして、むしろ然ういふ話にふれたくないやうな顔をして

「どうしたのか、おれにもさつぱり分らないんだ。」

さう呆けて言つたきり詳しいことを避けて語はなかつたが、べつに苦にもならないやうであつた。

そのうち月給日になると、その晩駒一は歸つてこなかつた。その翌晩もかへつてこなかつたので、おさとはすぐかんづいて彌一に當りちらした。

「ちやんと示しあはして出て行つたんだ。しかも月給日までこちらを食ひ倒してをいて何といふ奴らだらう。」

朝から氣が狂れたやうになつて、銀行の方へ行つたり、重役の私宅をたづねたり、心あたりの親戚へ行つてみたりして、疲れてへとへとになつて歸つてくると、彌一を對手に怒鳴りちらしてゐた。

「しまひに乾干しにしてしまふ根性らしいんだ。わたしやまだ隠居しないから。」

「あなたが餘り喧しいからですよ。二人まで嫁をかへたのだから、こんどは兄さんも世間體があるから一緒になつてゐるんですよ。」

おさとは、彌一の背中をつつくと、こんどは彌一までぐるになつてゐると言つておいて、

「お前もきつと[illegible]やれまで作つて持ち出したのだらう。」

さなきや駒一が校に入つてから、とつくりと殴んだものらしく言つた。

「あなたは[illegible]門つてゐるから、何を言つたつて駄目だ。」

駒一は仕方にならなかつた。が、仕方はき　ますます内へ気をそげ込んで行つた。

「みんなでね、しまいに好きにしてしまつたのさ。」と言つて「給料もこちらへ寄越さなければ、わたし達はどうなることかわからない。」と、いくらか説き入るやうに言つたが「駒一が出つてくれなきや、こちらは銀行の小使さんに行つて頼めさへてしまふさ。」と[illegible]気に言つてゐた。

駒一はいくら言つても止みさうもないので、挨拶して庭の方へ出て行つた。

廊下には、れいの小工がゐて挨拶をしたが、すぐ

「このごろ若さんは何処へ行にでもゐらしつたんですね。ちつとも見ないやうですが。」

七つ目分にきれいに分けた髪が、駒一の目には気障にみえた。大空のいぶきにつれて高い樹の枝から、紫の花が[illegible]さうに二つ三つ落ちてきた。

「なんでもないんだよ。停車場へちよいと行つてゐるばかりなんだ。」

駒一はそれだけ言つて立ち去らうとすると、小工はまた話しかけた。

「せんの[illegible]さんだね。」

駒一は、びつくりして立ち止つて、「これはどうしたのかね。」と云つた。

「町外れの八百屋へお入つたんですよ。ご存じないんですか。」

「いや初耳だよ。さうかね。」

彌一は、おどおどした娘らしいおれんの姿をちよいと目にした。滲み出るやうな可憐さが眩しいやうに、かれのあたまに浮んできたのである。

「いい娘さんでしたな。やうすから、縹緻から申分のない――。」

大工はさう言つて鋸の手をやめた。きふにあたりが静まりきつて、杏と柿のわか葉の匂ひが温かい空気の間をたゞよつて来た。地上には桐のおち花が溝にも、踏石にも、柔かい草の間にも仄のりと匂つてゐた。

「君もやつぱりさう思ふかね。」

「わたしは初めからいい方だと思つてゐたんですよ。」

大工は自分でぽつと赧くなつて、いくらか恥らふやうに慌てたが、なほ小白い顔をあかく染めた。そして

「二三日前も八百屋の前を通つてみたら、店にちやんと座つてゐましたよ。わたしを見ると、おじぎして居ましたつけ。」

と嬉しさうに浮いた調子で言つて微笑つてゐた。彌一はいやな気がした。いつか見た白いからだが李の木のしたに、ぼんやり目にうつつてきて仕方がなかつた。

「初めるかな。」と言つて「みなさんによろしく。」と、髪をちよいと撫でて木を挽きはじめた。寂しい生木の匂ひと挽かれる響とが起りはじめた。

た[illegible]りながら[illegible]へ入つて[illegible]、[illegible]の一門を作り[illegible]的[illegible]がたづねた時は、[illegible]るい[illegible]つてゐた。

[illegible]は[illegible]る[illegible]、[illegible]、そのくに[illegible]おつた。それは[illegible]にはみた[illegible]のあるので、的[illegible]よく[illegible]ば一行つたくいらしかつた。[illegible]しいモスリンの[illegible]にくぐらせ[illegible]は[illegible]のた[illegible]い[illegible]を[illegible]た。

「よく[illegible]つたおつ[illegible]ね。[illegible]さんも知つてゐるのかね。」

いく[illegible]たので、すぐ[illegible]し[illegible]りらしくなつた。

「[illegible]つてゐる[illegible]にして下さい。」

「[illegible]なつたら、[illegible]よつと[illegible]るとき[illegible]り込む[illegible]も[illegible]たいよ。」

[illegible]はよい[illegible]やうな目をしたが、[illegible]ない[illegible]んだよ。まるで[illegible]から[illegible]で何一つ表し[illegible]ねと、初[illegible]であつた珍らしさに、[illegible]りした。

ここへ[illegible]きたせんに、[illegible]へるほどにやかに[illegible]になつて、[illegible]ぬき[illegible]をしたまま、[illegible]でならつ[illegible]、すぐ[illegible]た。

「さ[illegible]さん、すね。よく入ら[illegible]下すつたわね。どうしてゐらつしやるだらうと[illegible]ゐたんですよ。」

[illegible]にお[illegible]は、[illegible]くなつ[illegible]。そして

「でも、[illegible]わかつた[illegible]のですね。また[illegible]したくらゐよ。」

[illegible]も、[illegible]ついて、どつしりしてゐた。[illegible]に火をつけながら

「お母さんも此處のあたを知つてゐるのだよ。困つたね。」

おせんの顔をみいみい言つた。

「だから今度はもつと不明らないところへ越してしまへばいいわ。わたしおばさんの御機嫌とりだけは、もう本統に懲り懲り！だわ。」

彼女は眉をしかめた。そして茶箪から菓子箱のまま取り出して駒一の前においた。

「さう引越して歩けるものぢやない。」

弟は黙つておせんを見てゐるうち、その襟前をひろく開けて、雪はに胸肌をほんのりと匂はせたところや、家では見たこともない派手な柄を着込んで、帶腰もしてゐるのをいくらかだらしないと思つてゐた。駒一が何か言ひ出すと、すぐ覆ひかぶさるやうに物言いをするのも氣になつた。

「ともかく、すこしお母さんを樂にしたいと思つて取つておいたんだが……。」と駒一は立上りながら、ちよいとおせんの方を見て考へるやうにしたが、思ひきつて机の抽出しから財布を取り出した。なかから半紙で包んだ金をとり出すと「これをおばさんに上げておいて呉れ、こちらも隨分とかかりが要つたから充分にはできないんだ。」

駒一は、手にとつたままで居たが、かうして家出してゐる身に兄を想ふ弱々しいところのあるのを、かれは好意をもつてながめた。

「まあ、やつぱり親子つてふしぎなものね。あなたがそんな風にしてゐらつしやるのを少しも知らなかつた。なぜ打明けてこれはお母さんへあげるんだと言つて下さらなかつたの。」

おせんは覗込んで、いくらか涙を浮べ言つた。兄に叱られてゐたが、

[illegible]の方につい[illegible]るものはあるんだし、仲間も[illegible]ことだ。さうさう打つちやつておくわけにはいかない。」

「あなたわたしに[illegible]して下さればよかつた」[illegible]かけたんですね。」

おせんは[illegible]り返した。爲は、はじめておせんが、知つたらしい[illegible]しにされたらしい事情の[illegible]してゐるやうに、[illegible]らしく感じた。

「[illegible]して[illegible]つてゐても同じことぢやないか、はは……。」

[illegible]仲間を[illegible]なかつた。おせんは、くるつと[illegible]かへると、[illegible]出し[illegible]した。爲のあたり[illegible]かまうにはまくまくふりつく二つの[illegible]を、[illegible]た、それほど、あざやかに[illegible]かつた。

[illegible]ふたつには[illegible]にいつき[illegible]あけ[illegible]おく[illegible]ないでせう。」

爲一は、[illegible]目をみつめた。[illegible]は[illegible]息をついて「[illegible]ます。」[illegible]た。

「[illegible]へいくければいいんだが、これでその[illegible]と[illegible]なくなる一方だからね。」

内、こちら[illegible]そうことを[illegible]へてゐないので、今とき[illegible]つていいか分らなかつた。そのうち爲の方も[illegible]ち、[illegible]ふ[illegible]たしか、[illegible]へてゐなかつた。

「[illegible]たし[illegible]へりこふつても、お家へゆくのは[illegible]ですね。また、これまでいやうだと言ふ[illegible]ただけ[illegible]たたつてしまう。」

[illegible]をくの[illegible]にあてたまま、おせんとこうふ[illegible]いに[illegible]を[illegible]た。二つの[illegible]目と[illegible]ましい[illegible]れこ、[illegible]は[illegible]が大[illegible]いやうにいんじられた。爲に、[illegible]おせんが口を[illegible]むので、爲の[illegible]むつたつて、いつ[illegible]をした。

「お前の知つたことぢやないから、默つてゐなさい。」

さう言はれると、おせんは言葉を返さなかつた。三人とも默つてゐた。大通りから電車のひびきがかすかにきこえるほかは、しんとした四邊であつた。

「だいぶ遲くなつたから。」と、駒一は立ちあがつた。九時の時計がいま鳴つたばかりである。

「さう、歸へるか。」と言ひながら、おせんに向つて「ちよいと其處まで送つて行つてくるから。」と言つた。

「わたしも行つていい？。」

おせんは片膝をしかかつたが、駒一はすぐ遮ぎつた。「お前はうちにゐたらいい。すぐかへるから。」と言つたが、明らかにおせんは唇を尖らせた。

ふたりは外へ出ると、暫らく默つてあるいてゐたが、駒一は肩をすぼめながら言つた。

「來月からも家へ廻す分はちやんと除けてをくから、月末になつてたら寄つて呉れ。」

弟は兄の若いかほをちよいと見た。そして根がひとの善いところのある彼を、ほんとの兄のやうに考へた。

「でも、ねえさんに惡くないかね。そちらにも要るでせうから。」

「二人だけだから、どれだけもかゝりはしないよ。」

駒一は平氣で答へた。二人は小路の暗みから大通りへ出ようとして居た。

「おれんさんがね。」

弟はしらず知らず口を切つた。兄は、ひやりとしたやうに耳をさか立てた。

「おれんがどうした。」

「八百屋へ嫁入つたさうですて、大工がさう言つてゐましたよ。」

鉄一の目には何なのせいもあつたが、悲しさうな涙が浮いて見えた。

「さうか。あれからだいぶ経つからな。」

兄はしきりに口のなかで、ひとりで何かを探りあてるやうに、いらいらしさうにしてゐた。

「おれは姉さんはいい人だつたな。兄さんにはさう見えない。」

弟はまたかれの目をみた。

「うん。」と言つて「お前もさう思ふかい。」

兄はじつと何処の遠くをながめたまま言つた。すこしばかりの間がおりて、遠いほど街の灯がかすんでゐた。

「では又、そのうちに伺ひます。」

鉄一は帽子をとつた。兄弟は街燈の青みがかる灯のしたで別れた。



川波の音

里見弴

……ふと、目があいた。川波の音が、思ひがけないほど近くに聞えてゐた。それで、い、うちの寝床とも、船村のそれとも戸惑ひしずに、すぐ箱根の宿にゐることを思つた。と、目がはつきり覺めて了つた。十分眠足りたやうな氣持で欠伸が一つ出た。きつき床についた時分の、話聲とも、もの音とも、まだどこから聞えて來るともなく、たゞそこら一面に漂つてゐた賑ひが、灯を吹き消したやうになくなつて、宿の靜さが、しんかんと身にしみて來た。——瀬川は、暫時、たゞなんと云ふこともなしに、川波の音に耳をすましてゐた。

それから、何時だらうと思つた。目の覺め具合から推すと、やがてもう夜明けに間がなささうにも思はれた。さうかと思ふと、まだやつと一時か二時頃のやうな氣もした。——そんなに永く眠たやうでもなかつた。が、それは、机の上の亂箱にでもはいつてゐるだらうと思はれる時計を、態々起きて見に行くほどに、氣になることでもなかつた。

何となく、額を[illegible]にして、上を向いてゐる。顔には、[illegible]つけた笑ゝ、半白の、きれ〳〵とした分けにしてゐる[illegible]には[illegible]に、[illegible]、すこしほつれ毛を[illegible]て、むかふ向きに[illegible]て[illegible]〳〵といふ名の[illegible]、[illegible]ピンを、明るい[illegible]に、たなく、[illegible]は、[illegible]といふ[illegible]たか。)[illegible]く、[illegible]キャラコ[illegible]白なエプロンを[illegible]、ごくな[illegible]で、[illegible]に[illegible]。……くふつたり、赤くなつたりするもの〻やうに、その時[illegible]、[illegible]にやりと[illegible]についた。[illegible]は、[illegible]で、[illegible]に[illegible]と[illegible]に返した。

な[illegible]ても、しんかい、[illegible]た。十二[illegible]の[illegible]、[illegible]の[illegible]、頭のきつてあるところ、[illegible]ておつてゐる、あゝ、冬の夜らしい、[illegible]しい[illegible]に[illegible]つた。たゞ、川波の[illegible]、はくなつたり[illegible]くなつたりしてゐた。……[illegible]ともなく目を向いて、おつとさらしたまゝ、三円十分たつたやうなきがた。それだけのふいに、これたいに[illegible]つてゐたことは、この[illegible]にもなつたことのやうに[illegible]れた……。だん〳〵[illegible]ゐた……。

[illegible]の秋のやうに[illegible]た。[illegible]れ[illegible]もあるなさと、[illegible]なも[illegible]りなさはあつた。そこから、[illegible]おとし「夕[illegible]」のやうな[illegible]も、[illegible]しい[illegible]してゐた。

……[illegible]に[illegible]、[illegible]んのけ[illegible]を[illegible]の[illegible]、[illegible]んでゐた。――彼の[illegible]つた、それは[illegible]しいほ[illegible]つた[illegible]に[illegible]いところも[illegible]、一緒に通つて来た、二つしたものではないはずだつた。[illegible]に[illegible]、いなところのない、といふより[illegible]それのないやうなた。だつた。その間八十近くなつて[illegible]い[illegible]を、[illegible]い[illegible]る[illegible]を[illegible]入れて出いて、――

ほんとに、品物でも預けるやうに入れて置いて、自分は血眼になつて金策に駈づりまはつてゐた身、……いかにしてもは
親にあはせる顔がなくて、寺長屋のおかみさんを頼んで、そつと呼び出して貰つて、……淋しい頃だつた、もう陽に落ちて了
つたが、晴れ亘つた空に、いくらか光が殘つてゐると云ふ時刻に、寺の墓地で、顔を突き合はせるやうにして、ポツ〳〵
と何か話し合つて、それでも一圓か二圓の金を握らせてから、そのまゝすぐまた東京へ引返して來たりした……。そん
な頃を考へてみると、彼と妻とは、いつの間にか遠く離つて了つたやうな氣がした。……飽きるの、いやになるのと云ふ
氣持は、……一度でもそんなことがあつたかと、とても信じられないくらゐの遠い昔になつて了つた。その上瀬田は、今
までに、一度でも女の愛に溺れたことはないと、堅く自分で信じてゐたから、尚更もつてそんな氣持があつたとは思はれ
ないのだが、……然し、兎に角、もう十年近い前から、――彼の兜町の店が獨立した頃から、次第に疎くなつて行つ
たことは本當だつた。……疎く……？　つまり、病氣などしてゐても、あんまり氣にかゝらなくなつて了つたのだ。……
それから推して、やゝ誇張して云へば、いつ死んでも構はないやうな、――あつてもなくつてもいゝやうな人間になつ
て了つたのだ。……と云つて、死なれてみれば、決してさうでないことも、彼にはよくわかつてゐたが……。
彼はまた、思ふともなく、一人息子の蒼白い顔を見てゐた。その子は、水天宮の裏手の、小さな二階家に住んでゐ
た頃に出來たのだ。決して子供などが可愛く思へる人間ではないと、自分できめ込んでゐた彼が、相場を休んで、ミシ〳〵
鳴る梯子段に、足音を忍ばせて、幾度も容子を見に行つたりした。梯段の横手の窓――その形も、その煤けた障子紙に、
かッと照りつけてゐた六月の夕日の色も、昨日のことのやうに、はつきりと彼の心に浮んでも來た。……翌年の夏は、
その子の腸加答兒で、苦しいなかを、五十日も病院に入れて置いた。アルコオル漬の胎兒ほどに痩せ衰へて了つた姿を見
ても、ええ、いつそ死んで了へ、とは思はなかつた。今の平河町の家に移つてから、女中をつけて、田舍に附けもの叔

[illegible]に[illegible]は、[illegible]あたりで、[illegible]らしい[illegible]目に[illegible]くと[illegible]つて[illegible]た。……い[illegible]ら[illegible]た、けれど[illegible]こ[illegible]人[illegible]と[illegible]ん〱[illegible]つて了つた。中[illegible]ふやうになつてからだつた、[illegible]うち[illegible]そして、[illegible]下で、女中に[illegible]て[illegible]る[illegible]に[illegible]つた。[illegible]の[illegible]を[illegible]んだこともあつた[illegible]、[illegible]は一さい[illegible]を知らなかつたので、[illegible]に[illegible]つて、[illegible]くと、[illegible]る[illegible]た。たゞた、[illegible]のくせに―[illegible]、[illegible][illegible]らしく、そ[illegible]て[illegible]らしいやうた[illegible]した。な[illegible]と云ふことも[illegible]、ふと、[illegible]た、と思つたのだ。[illegible]に、よく[illegible]を呼んで来るやうにな[illegible]た。[illegible]、[illegible]すると云つて[illegible]んでゐ[illegible]だか、[illegible]にしてやつてくれ、と[illegible]した。[illegible]ついてゐたこと、[illegible]、[illegible]、ど[illegible]に[illegible]を云ふつもりだつたか[illegible]にもわからなかつた。そ[illegible]で、[illegible]ん[illegible]も[illegible]つた。[illegible]とても、[illegible]と云ふものを[illegible]せたこと[illegible]あつた後が、この[illegible]は、一[illegible]、それを云はうと[illegible]にさへなれなくなつて了つた。……なんで[illegible]の[illegible]かあ[illegible]、だん〱[illegible]する[illegible]がさば〱として了つて、[illegible]をしたといたのに、[illegible]をしたのさへ、心[illegible]に[illegible]へたところがあつた……。

みんなそれ[illegible]には、[illegible]の心が、一[illegible]も、―か、[illegible]について[illegible]からでも、[illegible]から[illegible]くれ　ゐることたつたと云ふ[illegible]、[illegible]ほど[illegible]てゐた。[illegible]、[illegible]には、[illegible]たのだつた。[illegible]くて大きい、[illegible]の、くの〱[illegible]に刈つた[illegible]ゐたまから、[illegible]ふの[illegible]、[illegible]ゐた、[illegible]いてゐる[illegible]と云ふものは、今この、[illegible]の[illegible]、[illegible]た[illegible]の上に[illegible]に[illegible]れてゐたこの[illegible]、[illegible]ぶりの[illegible]たと云つたこ[illegible]、大した[illegible]にはならないくら[illegible]た[illegible]、[illegible]も、そのことに、[illegible]に、[illegible]もち、そして今[illegible]なつて[illegible]うとする[illegible]みをもつてゐた。―○内の[illegible]と云へば、[illegible]い[illegible]で、この[illegible]にばた〱と倒れたなかに、[illegible]つて[illegible]を[illegible]めたか[illegible]のうちだつ

た。

……思ひ出すとも考へるともつかず、彼の心には、うちの人のことが、ぼんやり映つてゐた。――興のない、寂しい、あせたやうな色が映つてゐた。鉄の扉のついた石の門、夜更に、その前で自動車をおりて、自分で小門の扉をあけて、門番部屋へ声をかけながら振り返ると、額縁にはめたやうに、明るい窓のなかで、時代が軽く会釈して、自動車が動き出して行く。門番の爺さんが鍵をカチャつかせながら出て来る時分に、花崗石の敷石の上を、こつ／＼と玄関の方へ行く時の生温い白湯でも飲むやうな、淡々とした自分の心持までが思はれた……。

さうかと云つて、彼の心は、決して、その自動車について、時代の方へ行くやうなものではなかつた。――瀬川が、この二十六になる女の世話をするやうになつたのは、二度の勤めでいゝ顔をして、一週間たつかたゝない出たてからで、それからもう足かけ三年になる。その時分には、花園町へんに、もう五年でも囲つて置く女もあつた。店からちかいうちへ帰る晩は、年のうち数へるほどしかないが、初の頃は竹村へは、二日おきか四日おきくらゐに、それも必ず客か、でなければ店の者をつれていかけた。それが、半年ほど後に、囲つてゐた女の不埒が耳にはいつて、そつちの手を切つてからは、毎晩六七時頃から十二時一時まで、時代には、竹村が欠かされない出場所になつて了つた。相変らず一人と云ふことはなかつた。元来酒を好まない瀬川は、食事がすむと、客と花をうつたり、店の者に酒を飲せて勝手にはしやがせて置いて、自分は多く口を出さずに、面白くもつまらなくもないやうな顔をして眺めてゐたりした。時には、大勢で近所の活動写真館に出かけた。店から電話がかゝつて、食事もそこ／＼に引き返して行つたやうな時でも、十時頃までには、きつとまた竹村の方へ帰つて来た。どうかすると、芸者や女中を遠ざけて、店の主だつた人たちと、碁を囲んで夜を更すやうなこともあつた。一人で竹村の部屋に行くと云ふことは、月に三四度で、それも帰る前ほんの一時間かそこらの間

かつた。困ることは、一寸でも[illegible]見せない[illegible]と同じほど[illegible]だつた。[illegible]代としては時間の長い、[illegible]の川にも[illegible]た
つた[illegible]とり憎い[illegible]のではないが、いつまでもはまり込んで来てくれないのが、却つて氣づまりで、[illegible]も
狹い[illegible]でも、ちつとも心を[illegible]わけにはいかなかつた。

……[illegible]川の心に映つているものが、だん／＼、[illegible]ちを離れて、[illegible]村の方へ移つて行つた。そこでも、然し彼は、[illegible]い
自分を見なければならなかつた。

[illegible]の方が、[illegible]代に[illegible]、[illegible]てまた[illegible]があつた。生きてゐることがあつた。どうかすると、いくらか前へ[illegible]たやうな[illegible]
た。

「ほんとに、貴方[illegible]なたですね」
などといけ／＼云つ[illegible]りした。店の者たちが、ひやかしを云ひ／＼、[illegible]ました[illegible]つて。
「[illegible]いやだ。[illegible]い。[illegible]川さん、[illegible]つて見てゐるの。[illegible]……」
と云つて、ちや[illegible]上に突ツ伏してしまつたことがある。[illegible]晩、さう云ふ風に酔つて了つたかの女と[illegible]
になつた時に、心にあつて、[illegible]川は、[illegible]しいことを云つてみた。それは、[illegible]者たちばかりの、言葉すくなく[illegible]
時[illegible]げた[illegible]なか[illegible]出したと思はれる[illegible]代[illegible]だつた。いづれ前に出てゐる時分のことであらうが、
（自分の手によ[illegible]こゝなどは、[illegible]川にげたく[illegible]た[illegible]いやうであるが、それは然し、女[illegible]に
限つたことではなく、[illegible]な、[illegible]のやうな見上がりから出て来る、持前の[illegible]へ方だつ
た——いづれ前に出ている[illegible]分のことであらうが、（　）と云ふ[illegible]の役者と、関係があつたらしく知れたのだつた。
つ。それを云ひ出して[illegible]、[illegible]代[illegible]目を[illegible]つて、

「いゝえ、そんなことに、そんなことは[illegible]そですわ。……えゝ、それは、[illegible]者を知らないことは[illegible]ません。だ[illegible]

と、人が違つてます。此辺では……」

誰それ、此辺では誰それと、立派に云つてのけて、「だつて、いゝでせう？昔のことですもの……」

と、目を細くして微笑つたりしたこともあつた。

こんなことが、然し、女が生々とした心の動きをみせた折上で、[illegible]も、だん／＼ふふことと[illegible]すことに心持がなくなつて来た。幸ふにも、悲しがるのにも、たゞ／＼その場の調子に合せて行くお房なりが湖田の目には見え透いて来た。──生つきが利口でもあり、[illegible]者としての修業も十分であり、──[illegible]しいきつきや、[illegible]なものでなければ真似の出来ない大胆な味もあつて、いゝ、ことからどこをどうと抑へられるやうなところは決してなかつたけれども、常に湖田には、その徐々に覗つて来た[illegible]がよくわかつた。そして、それを、例の持前の考へ方から、自分の[illegible]化だと信じた。自分に対する心持だけが違つたのだとは思はないで、性質から、──或は、少くも世に処する根本の心持から、違つて来たものだと信じた。そして其れを、心細に、もう二十六にもなる女のために悲んでゐた。……一[illegible]時代に、不自然ではないかと思はれるほどだつた。彼の[illegible]自も、それに影響されてゐるところがないではなかつた。[illegible]の女の[illegible]分には、必しも今のやうでもなかつたのだから……。女の二十六、──湖田は、自分の[illegible]化ぐらゐ冷静だけれど、よく、[illegible]を守ることが出来ると信じて、[illegible]代のために悲んでゐた。……[illegible]代のために……？ [illegible]、彼にさう思つてゐるのだ。

……湖田は、ふと、この旅の間のことを心に浮べてゐた。[illegible]な、彼のやうに働きかけた湖田の[illegible]方を思つたりした。ちラッと見てゐる彼の目には、この三十二円になる[illegible]の明け、自分の[illegible]にあるところを、──[illegible]を一枚目ところで、自分を目立たせやうとしてゐる気持が、はつきり映つた、──み[illegible]代に見せたいばかりの[illegible]だつた。いゝ、

勝代が可笑がつて、くツくと笑ふのが見たいばかりの燥ぎ方だつた。――今の世の若いもので、女に「あなた[illegible]
さんね？」と云はれて、眼を立てる男は恐らく一人もゐるまいけれど、静岡だつたら勝代からその一言を引き出した
めたら、静岡が躍るほどなことでも、平気でやつてのけるだらうと思はれた。

……れども、お隣の勝代は、馬鹿のやうに笑ひこけにしなかつた。云ふまでもなく静岡の[illegible]を感じてゐて、折角の恋を仇にしないために、せいせいと笑がつてゐる、と云つた風が見えた。――などとおもへて、湖田は、ほつとした[illegible]に移つた。……結構なものだ、みんな今ごろ、口でもあいて、ぐつすり寝込んでゐるだらう……。

旅は一行八人だつた。店のものが五人、栗次と云ふ女中さん、それ――[illegible]がきまつた。[illegible]、静岡、代見、桃川、忙しい二晩かけの旅に、骨やすめのやうな意味で、この温泉場へ来たのだつた。ところが、[illegible]勝地中にとつては、お祭りなどはどうでもいゝので、昨夜から[illegible]と云ふ[illegible]になつて了つた。なんのかん、と村の[illegible]も一本くらゐに飲まされて、珍しく顔を真ツ赤にしながら、静岡を先頭に、みんなが浮かれて騒ぎ回るのを、大将らしい貫禄をみせて、にこにこと眺めてゐたが、いゝ時分を見計つて、こつちの離れの方へ来て了つたのだ。それから一風呂あびて、床についてからも、暫の間は、川波の音に消されながらも、どことなく[illegible]の騒ぎが続いてゐたが……。

湖田は　今度は　起きあがつて、左を下に横向きになつた。一度[illegible]つても、もう[illegible]、殆ど日本[illegible]のやうなところへ置いて了つた医者風の大きな鞄が、すぐ目の前にあつた。FとSと不器用に組合せた[illegible]が、チカリと光つて[illegible]へ、ホツと目を押えながら、ふと、湖田は、こんな時間の[illegible]を思ひ出してゐた。

「お店の松崎さんが、このピンを見て、いろんなことを云ふの……」

「なぜだつて……」
「Sがね、……Sつて字が可笑しいつて……」
「なぜ」
「だつて、Sは瀬田のSだつて……」
「ふうん。……それで、貴方なんてつた？」
（瀬田は、いゝひとの前では勿論のこと、二人きりになつた時でも、めつたにお前とは呼ばなかつた。いつでも貴方だつた）
「別に、……なんて、……私の名字だつて、あの人たちは知つてるくせに、わざと云つてるんですもの……」
もと〱それを誂へる時から、そんなことは、然し、二人の心に浮んでゐたのだけれど、一言も口へは出さずに、知らん顔をしてゐたのだ。それをまた、一月も二月もたつてから、もう一つ知らん顔をして、勝代が、いゝひとの言葉から持つて廻つて云ひ出すのを、瀬田の方では、その上にも知らん顔で、「なぜ」などゝ問ひ返してみるのだつた。——そんな、お互に相手の心がわかつてゐながら、白ばツくれ合つたりすることが、瀬田にとつては、この上もない楽みだつた。——この上もない、と云つても、それは云ふまでもなく、勝代との関係だけのことだが。……だから、その楽みを衒ひかすためには少しくらゐ甘つたるくたらうとも、もつと持つて廻つてゐることが望ましかつた。
「別に、……なんて……」
ではもの足りないのだつた。
「それア私、さう云つたわ。Sは瀬田のSです、どうぞ御心配なさいませんで……つて」
とでも云つてほしかつた。さうすれば、

「お姉樣はなんてつてた？」

と、また話の筋が續いて行くのだが……。

瀬田は、さう云ふ山形のあるピンを見詰めてゐるうちに、たゞなんとなく、だん／＼味氣ない氣持になつて來た。……彼の方の仕事に對する時のやうに、もつと、一息も二息も、うんと力をいれて、勝代にも對してみたい、――そんな氣持が、掠めるやうに、い、、あたまを通りぬけた。彼の方でさう云ふ氣持になりさへすれば、勝代が、一も二もなくはまり込んで來ることとは、瀬田には考へなかつた。それは、丁度、彼の感化で、勝代を冷靜な女にしたのと同じことで……。然し、考へてみると、すぐそれも、餘計な、馬鹿々々しいことに感じられて來た、――實際自分は、この状態に滿足してゐるのだ、滿足なればこそ三年も續けて來た状態なのだ、と考へられたのだ。

勝代には、姉妹のやうに仲よくしてゐる小秀と云ふ朋輩があつた。東京――G株式會社の社長でもあり、そのほかあちこちの會社に關係して、若手ながら實業界に羽振のよい西山修二の世話になつて、云ふまでもなく自前の一流どころだつた。この小秀が、瀬田の座敷で、よく鶴村へも來たし、勝代はまた、小秀の義理で、ほかの土地の大待合で客をすることの多い西山の座敷へも出たりした。

「この十七日に、西平の六時を受けてゐるんですが、どうしませう」

よく勝代が、瀬田にそんな相談をかけた。

「西山さんかい？」

「えゝ、だからおそくはならないんです」

「行つたらいゝでせう」

まだ交渉のない西田ながら、なんとなく潤田は、その人の口吻ぶりが好ましいものらしく思はれて、小秀に對する好意にまさつて、輕い敬意すらも持つてゐた。……小秀の指に金指環が一つふえたと、彼にそれと知れたやうなのが原因して來て、時代の身にもつけさせたくなつた。FSの束髪ピンも、全く小秀のおねだりの催促だつたのだ。たゞ。西山が、とかく忙しい體だけに月の十日も來られるか來られないので、小秀がよく彼の座敷へ來てくれるのに、時代の方は、西山のお出坊の時ばかりかゝつて來ても、斷りを云はなければならない時が多かつた。そんなことも少しは氣にかゝつてゐたところへ、ぱつぱとした性分の小秀が、

「西田さん、昨今おたくのとこは閑散なのね。うちではもう三晩、……いゝえ四晩よ、四晩も空閨を守つてゐるんです。どうぞ、少しはそこらのところもお察しくだすつてね、何ぶんともお手柔に……」

などと云ふのが、冗談ながら油断のないやうな氣がして、小秀の口吻の約束と聞くと、潤田は、快く時代をそつちへやることにしてゐた。西山の噂が小秀や、時代や、または小秀から時代を通して、彼の耳へはひつて來ることが多いやうに、彼のこともあの油断見隙を以つて鳴つてゐる遣手婆の耳へ傳つて行つてゐるとゝ思はれた。そんなことから一層親しみが增して來て、一度會つてみたい、いゝか、ちかづきになりたい、と思つた。勿論それは、全く縁のない方面の人ではなし、さう健實なことでも、また大して失禮にあたることでもなかつた。寧ろ彼れにとつては、さう云ふ人に知つて置くことは、商賣たから云つても得なことであり、同時に交際としても、彼を紳士らしくするわけだつた。折よく、彼が發起人として働いてゐる株式係の或る新設會社で、西山を引ツ張り込まうと云ふ話が出たところから、その交渉の役を引受けて、然るべき仲介者と一緒に、さしてこちらの體裁をさげることもなく會見した。それ以來、――丁度一月ほど前から、すつかりひらけて、だんだんに、評判でも、鶴村と日本とで、儲けて、お互に招びあつたりする程の仲になつてゐた。さうで云

な[illegible]りたには、云ふまでもなく、[illegible]、寿々の関係が与つてゐたのだ。

不[illegible]に、岡田は、この新しく出来た、年下の友人にはこゝを敬かれた……。

一[illegible]田のしんねりむつつりや、いかにも醒め切つたやうな態度は、未来の性分によることもあつたが、少しは拵へてある気味もないではなかつた。……或る彼には、永年の耳無間のほかには、殆どたんの変化もなかつた。[illegible]作家も、[illegible]町、[illegible]を[illegible]り出しに、やつとこ十年かそこらのもんだつた。本場の一流どころを見たのは、今少[illegible]だつた。それに年が年だつた。年田処もなく、人前で口籠つたり、てれ／＼いたりするほどの[illegible]もなかつた。——そんなこと、[illegible]一緒になつて、ゐつたりして、口数をきかずに、分らない客には、世辞をしてゐるなどと[illegible]なと[illegible]見分がつかないほどの、[illegible]とした態度が、——殆ど[illegible]の間に出来上つてゐたのだ。むづかしく云へば、[illegible]に己を守つてゐるやうなものだつた。

[illegible]きかへて[illegible]田のやり口は、——年も年だが、随分業々しいものだつた。八[illegible]とでもいひたい調子で、——い、[illegible]のお不[illegible]にならずに、——忽ち一座をさらつて行く、と云ふ風だつた。小秀に対しても人[illegible]けよそ／＼しくするとみえ[illegible]つたが、[illegible]ところが、随分めく／＼としたものだつた。それ[illegible]して珠く、[illegible]し、さ[illegible]つて、吹きならし[illegible]も見えなかつた。山茶の半数で、岡田[illegible]よいほどに遊ばしてゐたのだよ、

「[illegible]く。まアいゝでせう。[illegible]日は帰れません……ねえ、おふくさん、さうだらう？」

[illegible]ツほい目つきを、ちやつと[illegible]い山に抑へたりして、それを打してゐるのは、野暮らしいことにまかして了ふ。

[illegible]上[illegible]ふと、[illegible]の方ではいゝ[illegible]に潮加減を見計らつて、

「さ、小秀おねえちやん」

などと手を握つたりして、みんなのやんやと云ふ聲に送られながら、悠々と引つて行つて了ふ。そんな風な西山の口調ぶりが思ひ出されると、瀬川は一層寂しくされた。いつぞや、内藤の模倣を演つたときに、頻りに謙遜するのを、「まア／＼、まア／＼」などと、親しげに肩に手をかけたりして、玄關まで、追つて來たが、その時彼がそとに出るや否やだつた。急にうしろを振向いて、女中の手でも握りながら云つてゐるものらしく、閑な西山の聲が門まで來た。

「おきん、さあ、土俵を拵へるんだ……」

その忘れられない言葉からは、ふと、門前のさままでが新しく思ひ描かれて、瀬川は、いつそいやな心持にさせられて了つたが、——それと思ひ比べてみると云ふのでもないが、滿足してゐるつもりの自分たちの間が、急につまらなく感じられて來た。矢つ張り、もう少しは情熱があつてほしいやうな氣がした。こちらは、今までのまゝでも、時代がもう少しどうにかなつて來さうなものだ、と思はれた。——それには、小秀の、旦那に對する態度が心づかれた、旦那と比べられた。

小秀は、ほんの子供の時分から、市川團の×××に惚れてゐた。土俵を越す問題で、楽屋へも家庭へも、いつ何時でも訪ねに行けるやうな間柄だけに、その役者の細君とも、少くも表面だけは、至極の仲よしになつてゐたから、今更それ以上にはどうにもならない無理な關係だつた。そのことは、何遍か話題なぞに出たりして、旦那はもとより、旦那さへも知る公然の秘密だつた。小秀の方から、この天下御免の[illegible]が、跡を追つてゐることに移つたかたが、或る時瀬川の前で、醉ひたまりに醉つて了つたあの女がこんなことを云つた。

「ねえ、湖田さん、聞いて頂戴。……ねえ、貴方もつと身を入れて、ちやんと聞いてくださいつたら……。」はき／＼返事をするの！　よくつて、×××はね、私の心の戀人。旦那は館の……。ねえ、いゝでせう」

そんなことを云ふものゝ、少しその言葉を味つてみるものにとつては、それは結局旦那一人の惚話になるわけだつた。×××にきめてある心は、決してほかへは行かない、そしてその×××とは、假令どんな機會があつても關係はしない、體は旦那一人のものだ、――これ以上、旦那として何を望むところがあらう。心の戀人を、×××にきめてあると云ふことが、旦那にとつて、どれほど安心なことか知れはしない。――その上をますして成された效果は、今ではまた、[illegible]な小秀の心に植ゑつけてゐて、×××の惚話を云ふことは、寧ろ我が身にとつては悲しい唄であらうとも、旦那を喜ばすために唄はれてゐるやうなしきたりさへあつた。從つて、旦那と知り合の人の前でそれを云ふことには、旦那への御挨拶かでもあり、また聞く人に好感情を與へるやうな、旦那の惚氣にもなつてゐた。

――こんなにはつきりとではないが、湖田には、さう云ふ意味が、なんとなく感じられてゐた。小秀の、そんな云ひ心づかいを思ふと、時代などはまるで木偶のやうなものだつた。――それでは、生木、小秀とは比べものにならないほどの馬鹿なのかしら。決してさうは思はれなかつた。――どうしても、さう云ふ心づかひをさせる、基の氣持がないのだと考へるより仕方がなかつた。……云ひ直すまでもなく、まるつきり厚意のない、冷淡な心を、そこに、寂しく見詰めるよりほかはなかつたのだ……。

そのくせ時代には……

と云ふ方向へ、湖田の考は向いて行つた。……そのくせ時代は、今までに一度でも、彼に向つて不愉快な顔を見せたことになかつた。毎日三時か四時頃になると、きまつて店の方へ電話がかゝつて來る。

「もし／＼、こんち、こちらへいらつしやいますか」嘗て天下手波一つ狂つたこともないほどの、きまりきつた切口上を叩きながら、或る時、ふと、試みるやうな氣持になつて、今日は用事の都合で、どうしてもそちらに廻れない。と云つて置いて、それから食事だけよそでして、九時頃だしぬけに一人で御伴に行つてみたことがあつた。

「まア」

と、女中は仰山に驚いてみせて、「さつき姐さんからお電話で、今夜はお見えにならないからつて……」

「あゝ、そのつもりだつたが、思ひがけなく用の方が早く片づいたんで……」

さう云つてあがり込んでゐると、一時間とは待さすにどこかの座敷から、蝶代は、いつものとほりの蝶代でやつて來た。不機嫌な顔でもするか、困つたやうな素振でもあるかと、深い注意を拂つてゐた瀬田の眼に、「氣のせいか……」と思ふほどの翳りさへ映らなかつた。殊に、泊つて行くと云ひだしてみた時でも、べつに、嬉しさうにもしなければ、苦い顔もしなかつた。病氣でねてゐるとき、ふいにうちの方へ見舞に出かけたこともあつたが、うちのなかに、どこにも混亂のあとを見つけ出すわけにはいかなかつた。……今日までの記憶を、いかに細にたどつてみても、どこにも疑はしい點はなかつた。どう考へてみても、彼一人を守つてゐるに違ひなかつた。

それならば……、

と、瀬田の氣持には、欲が出て來た。……それならば、自分さへ踏み出して行けば、影の形に添ふやうに、すぐに蝶代も、一歩なり二歩なり踏み出して來るに違ひない……。が、この考は、殆ど彼を滿たさなかつた。西田のやうな男には、それは出來ても、とても自分には、出來ないことのやうに思はれた。口なり形なりで、その氣持をすぐに示すことを思

ふと、――思つたばかりで堪へられなかつた。瀨田はそれを、一種の侮辱ででもあるやうに感じた。

自分自身が、前晧に批評し盡された人ならば、或は、勝代に、ほかに男はないまでも、決して自分に對してなんの厚意もないことを痛感して、ええ勝手にしろ、と云ふ氣持になつたかも知れない。或は、自分から踏み込むことを欲しないのを、かうして、常にお互にもたらないやうな關係だから、つづいてゐるので、なまじつかなことをして、こつちの腹いろは出す、なかなかの信賴心が侮蔑にでも形を變へる、――そんな馬鹿げ切つたことはない、と云ふ風に考へたかも知れない。……けれども瀨田には、他人の心理をよく讀み、手繰し、批評するわりに、自分自身の心には疎かつた。強いて、まして「他人」のうちでも、勝代だけは例外にされてゐた事實にすら心づかなかつた……。

で、いい年をして、そんな馬鹿なことが出來るもんか、――僕のなかから情熱を示して行くなんて、そんな……、そんな……！ と獨りごとのやうに呟いてゐた。――その考へかたは、いかにも自分らしくて、一寸氣持がよかつた。けれども、それは、「落葉」のやうに寂しいことだつた、「刈田」のやうにも物足りないことだつた。さうして、そこから、釣瓶おとしの「夕闇」のやうな氣持ちも、胸ながら湧いて來た……。

打つ上の、半白の五分刈頭を、兩手を熊手にして、がりがりとやけに引ツ掻き廻した。とたんに、川波の音が、また耳について來た。

「あゝあ」

と、聲をたてゝ欠伸をして、それから、なんまんだぶなんまんだぶと呟いても詩はしいやうな、澄んだ聲を顫はせだし

て、それからまた、ぱんぱんと手を打つた。

「あゝ、ああツぁア」

續けさまにもう一つ欠二、今度は聲も一緒にした。

けれども、若い女の眠りは深かつた。

……氣がつくと、雨戸に近いたの障子は、いつの間にか美しい淡紫に染つてゐた。そとは硝子戸にまり光つた。彼は川波の音に耳を澄らせながら、淡紫が次第に白ッぽくなつて行く障子紙を、無心に見詰めてゐたが、もく/\と起き出して、フランネルに袷を重ねた寝間着の上から、衣桁にかけてあつた宿の丹前を羽織つて、川へ臨んだ縁側へ出てみた。

もうすつかり明けはなれてゐたが、空には低く雲が動いてゐた。山の紅葉は黝んで、却つて松の暗綠色や、榎の黄葉が美しく眺められた。川向ふの新築の屋根の上には、建築への御幣が白々と立つてゐた……。

寒いので、すぐまた瀬川は部屋へとつて返した。FSの束髪ピンが、もう一度彼の目についた。なんだか、それが、彼を嘲るために、なん遍も目の前に跳び出して來るやうな氣がして、いま/\しく見おろしてゐた。

と、その時、ぱッと電燈が消えた。……部屋のなかは、薄暗い、曇り日の光で、見違へるやうに、さば/\としたものになつて了つた。紅入友染の夜具に埋もれてゐる勝代の姿も、たゞくだらなく眺められた。



山鴫

芥川龍之介

千八百八十年五月何日かの日暮れ方である。二年振りにヤスナヤ・ポリヤナを訪れた Ivan Turgenyef は、主人の Tolstoi 伯爵と一しよに、ヴァロンカ川の向うの雑木林へ、山鴫を打ちに出かけて行つた。

鴫打ちの一行には、この二人の老人の外にも、まだ若々しさの失せないトルストイ夫人や、犬をつれた子供たちが加はつてゐた。

ヴァロンカ川へ出るまでの路は、大抵麦畑の中を通つてゐた。日没と共に生じた微風は、その麦の葉を渡りながら、静かに土の匂を運んで来た。トルストイは銃を肩にしながら、誰よりも先に歩いて行つた。そうして時々後を向いては、トルストイ夫人と歩いてゐるトゥルゲネフに話しかけた。その度に「父と子と」の作者は、やや驚いたやうに眼を挙げながら、嬉しさうに滞らない返事をした。時によると又闊い肩をゆすつて、嗄れた笑ひ声を洩すこともあつた。それは粗野なトルストイに比べると、上品な趣があると同時に、何処か女らしい所もあるものだつた。

路がだらだら坂になつた時、兄弟らしい村の子供が、向ふから二人走つて來た。彼等はトルストイの顔を見ると、一度に足を止めて目禮をした。それから又元のやうに、はだしの足の裏を見せながら、勢よく坂を駈け上つて行つた。トルストイの子供たちの中には、後から彼等へ何か、大聲に呼びかけるものもあつた。が、二人はそれも聞えないやうに、見る見る麥畑の向ふに隠れてしまつた。

「村の子供たちは面白いよ。」

トルストイは殘照を顔に受けながら、トゥルゲネフの方を振返つた。

「ああ云ふ連中の言葉を聞いてゐると、我々には思ひもつかない、直截な云ひまはしを教へられる事がある。」

トゥルゲネフは微笑した。今の彼は昔の彼ではない。昔の彼はトルストイの言葉に、子供らしい感激を感じると、我知らず皮肉に出勝ちだつた。………

「この間もああ云ふ連中を教へてゐると、――」

トルストイは話し續けた。

「いきなり一人、教室を飛び出さうとする子供があるのだね。そこで何處へ行くのだと訊いて見たら、白墨を食ひ缺きに行くのですと云ふのだ。貰ひに行くとも云はなければ、折つて來るとも云ふのではない。食ひ缺きに行くと云ふのだね。かう云ふ言葉が使へるのは、現に白墨を噛じつてゐる露西亞の小供があるばかりだ。我々大人には到底出來ない。」

「成程、これは露西亞の小供に限りさうだ。その上僕なぞはそんな話を聞かされると、しみじみ露西亞へ歸つて來たと云ふ心持がする。」

トゥルゲネフは今更のやうに、麥畑へ眼を漂はせた。

「さうだらう。[illegible]なぞでは小作までが、[illegible]位は吸ひ兼ねない。」

「さう云へばあなたもこの頃は、さつぱり煙草を召し上らないやうでございますね。」

トゥルストイ夫人は夫の[illegible]から、巧妙に話を救ひ出した。

「ええ、煙草はやめにしました。四五日に二人美人が来ましてね、その人たちに煙草は臭いと、接吻させないといふものですから。」

今度はトルストイが[illegible]した。

その内に一行はヴァロンカ川を渡つて、鴫打ちの持場へ到り着いた。其処は川から遠くない、雑木林の傍になつた、湿気の多い草地だつた。

トゥルストイはトゥルゲネフに、最も好い打ち場を譲つた。そして自分自身はその打ち場から、百五十歩ばかり離れた、右の一隅に位置を占めた。それからトルストイ夫人はトゥルゲネフの側に、子供たちは後部のずつと後に、各々分れて[illegible]になつた。

空にはまだ赤らんでゐた。その空を縁どつた木々の梢が、一面にぼんやり煙つてゐるのは、もう匂の高い若芽が、簇つてゐるのに違ひなかつた。トゥルゲネフは空を仰げたり、遠くすかすやうに木々の間を[illegible]してゐた。薄暗い林の中からは、時々[illegible]春への[illegible]風が、[illegible]に辺りを這つてゐた。

「[illegible]が[illegible]鳴いて居ります。」

トゥルストイ夫人に目を向けたから、釣り師のやうにかう云つた。

後に[illegible]い[illegible]時間が続きた。

[illegible]に空の[illegible]に[illegible]になつた[illegible]に、今は殆五十歩先、横に翔りを返つてゐる。——トゥルゲネフはもう一度、薄暗い木々の中を透かして見た。が、今度は林の奥も、あらゆる暗みに沈んでゐた。

この時一發の銃聲が、突然林間に響き渡つた。後に待つてゐた小供たちに、その反響がまだ消えない内に、犬と先を爭ひながら、獲物を拾ひに驅けて行つた。

「御主人に先を越されました。」

トゥルゲネフは笑ひしながら、トルストイ夫人を振り返つた。

やがて二男のイリアが母の所へ、草の中を走つて來た。さうしてトルストイの射止めたのは、山鴫だと云ふ報告をした。

トゥルゲネフは口を挾んだ。

「誰が見つけました？」

「ドオラ（犬の名）が見つけたのです。——見つけた時は、まだ生きてゐましたよ。——」

イリアは又母の方を向くと、健康さうな頰を火照らせながら、その山鴫が見つかつた時の一部始終を話して聞かせた。

トゥルゲネフの空想には、「獵人日記」の一章のやうな、小品の光景がちらりと浮んだ。

イリアが返つて行つた後は、又元の通り靜かになつた。薄暗い林の奥からは、春らしい若芽の匂だの濕つた土の匂だのが、しつとりとあたりへ流れて來た。その中に何か眠さうな鳥が、時たま遠くに啼く聲がした。

「あれは、——？」

「[illegible]です。」

トゥルゲネフはすぐに返事をした。

[illegible]はもうそれぎり啼きやんだ。それぎり[illegible]は夕影の木々に、ぱつたり静かに[illegible]しまつた。空は、——微風さへ[illegible]空は、その生気のない林の上に、だんだん冷い色を澄めて来る、——と思ふと[illegible]が一羽、寂しい聲を[illegible]せながら、[illegible]かけて通つた。

[illegible]二度目の[illegible]が、林間の寂寞を破つたのは、それから一時間も後の事だつた。

「リョフ・ニコラエヰツチには[illegible]でも、やはり私が負かしさうです。」

トゥルゲネフは[illegible]ながら、ちよいと肩をそびやかした。

子供たちが[illegible]出した時、ドオフが時々吠え立てる外は——それがもう一度静まつた時には、既にかすかな星の光が、木々と空に散らばつてゐた。林も今は見渡す限り、ひつそりと夜を封じた儘、枝一つ動かす気色もなかつた。二十分、三十分、——時は静に過ぎる上に、この森に近した湿地の上には、何時か仄明い夜の霧が、ぼんやり足もとへ這ひ寄り始めた。が、彼等の頭の上へは、未に一羽も鳥らしい物は、現れるけはひが見えなかつた。

「今日はどう致しましたかしら。」

トルストイ夫人の声には、気の毒さうな調子が交つてゐた。

「こんなことは滅多にないのでございますけれども、——」

「[illegible]さん、御覧なさい。[illegible]いてゐます。」

トゥルゲネフは[illegible]に、[illegible]のない方面へ[illegible]を移した。

暗い林の奥からは、實際もう夜霧が、朗かな冷を漂はせて來た。二人は暫時默然と、別別の事を考へながら、ぢつとその音に聞き入つてゐた。……

すると急に、――トゥルゲネフ自身の言葉を借りれば、「しかしこの『急に』がわかるものは、唯獵人ばかりである。」――急に向ふの草の中から、紛れやうのない啼聲と共に、一羽の山鴫が舞上つた。山鴫は枝垂れた、木々の間に、薄白い羽裏を閃かせながら、すぐに宵闇へ消えようとする、――トゥルゲネフはその瞬間、銃を肩に當てるが早いか器用にぐいと引き金を引いた。

一抹の煙と短い火と、――銃聲は靜な林の奥へ、長い反響を轟かせた。

「中つたかね。」

トルストイはこちらへ歩み寄りながら、鷹揚に彼へ問ひかけた。

「中つたとも。石のやうに落ちて來た。」

子供たちはもう犬と一しよに、トゥルゲネフの周圍へ集まつてゐた。

「探して御出で。」

トルストイは彼等に云ひつけた。

子供たちはドオラを先に、其處此處と獲物を探し歩いた。が、いくら探して見ても、山鴫の屍骸は見つからなかつた。ドオラも遮二無二駈け廻つては、時々草の中へ佇んだ儘、不足さうに唸るばかりだつた。しまひには、トルストイやトゥルゲネフも、子供たちへ助力を與へに來た。しかし山鴫は何處へ行つたか、やはり羽根さへも見當らなかつた。

「ゐないやうだね。」

二十分の後トルストイは、暗い木々の間に佇みながら、トゥルゲネフの方へ言葉をかけた。

「ゐない訳はあるものか？　石のやうに落ちるのを見たのだから、——」

トゥルゲネフはかう云ひながらも、あたりの草むらを見まはしてゐた。

「中つた事は中つても、羽根へ中つただけだつたかも知れない。それなら落ちてからも逃げられる筈だ。」

トルストイは嘲るやうに、ちよいと太い眉をひそめた。

「では犬が見つけさうなものだ。ドオラは仕止めた鳥と云へば、きつと啣へて来るのだから、——」

「しかし実際仕止めたのだから仕方がない。」

トゥルゲネフは銃を抱へた儘、苛立たしさうな手真似をした。

「仕止めたか、仕止めないか、そんな区別は子供にもわかる。僕はちやんと見てゐたのだ。」

トルストイは冷笑ふやうに、じろりと相手の顔を眺めた。

「それでは犬はどうしたのだ？」

「犬なぞは僕の知つた事ではない。僕は唯見た通りを云ふのだ。何しろ石のやうに落ちて来たのだから、——」

トゥルゲネフはトルストイの目に、挑戦的な光を見ると、思はずかう金切声を出した。

「Il est tombé comme pierre, je t'assure!」

「しかしドオラに見つけない筈はない。」

この時幸ひトルストイ夫人が、二人の爺に走らせながら、さりげない伝言を頼みに來た。夫人は使をもう一度、子供たちを探しによこすから、今夜この儘トルストイの屋敷へ、引き上げた方が好からうと云つた。トゥルゲネフはすぐに賛成した。

「ではさう願ふ事にしませう。明日になればきつとわかります。」

「さうだね。明日になればきつとわかるだらう。」

トルストイはただ不服さうに、意地の悪い皮肉を投げつけると、突然トゥルゲネフへ背を見せながら、さつさと林の外へ歩き出した。……

トゥルゲネフが寝室へ退いたのは、その夜十一時前後だつた。彼はやつと獨りになると、どつかり椅子へ坐つた儘、茫然とあたりを眺め廻した。

寝室は平生トルストイが、書齋に定めてゐる一室だつた。大きな書架、龕の中の半身像、三四枚の肖像の額、壁にとりつけた牡鹿の頭、――彼の周圍にはそれらの物が、蠟燭の光に照らされながら、少しも派手な色彩のない、冷かな空氣をつくつてゐた。が、それにも關らず、單に獨りになつたと云ふ事が、殊に今夜のトゥルゲネフには、不思議な程嬉しい氣がするのだつた。

彼が寝室へ退く前、主客は一家の男女と共に、茶の卓子を圍みながら、雜談に夜を更かしてゐた。トゥルゲネフは出來得る限り、快活に笑つたり話したりした。しかしトルストイはその間でも、不相變浮かない顏をしたなり、滅多に口も開かなかつた。それが始終トゥルゲネフには、面憎くもあれば無氣味でもあつた。だから彼は一家の男女に、ふだん

よりも会話を盛り返したさに、わざと主人の沈黙を無視するやうに機嫌を繕はうとした。

一座の男女はトゥルゲネフが、軽快な話術を弄する度に、何れも愉快さうな笑ひ声を立てた。殊に彼が子供たちに、ヘムブルグの田舎の役者の話だの、巴里のガルソンの身ぶりだのを巧みに真似て見せる時は、一層その笑ひ声が高くなつた。が、一座が陽気になればなる程、トゥルゲネフ自身の心もちは、益ぎこちない白々しさを意識するばかりだつた。

「君はこの[illegible]作家の[illegible]たつを知つてゐるか？」

話題が文学の方に移つた時、とうとう不自然な沈黙に堪へられなくなつたトゥルゲネフは、突然トルストイをふり向きながら、わざと気軽さうに話しかけた。

「知らない。何と云ふ作家だ？」

「ド・モウパスサン。――ギイ・ド・モオパスサンと云ふ作家だがね。少くとも外に真似手のない、犀利な観察眼を具へた作家だ。――丁度今僕の鞄の中には、La Maison Tellier と云ふ小説がはいつてゐる。暇があつたら読んで見給へ。」

「ド・モオパスサン？」

トルストイは咎めるやうに、ちよいと相手の顔を眺めた。が、それぎり小説の事は、読むとも読まないとも答へずにしまつた。トゥルゲネフは子供の時分、意地の悪い年上の子供にいぢめられた覚えがある、――丁度そんな心細さが、この時も胸へこみ上げて来た。

「新作家と云へば、こちらへも、珍しい方が一人御見えになりましたよ。」

彼の当惑を察したトルストイ夫人は、早速風変りな客の話をし出した。――一月ばかり前の或夕暮れ、余り身なり好くない青年が、是非主人に会ひたいと云ふから、兎に角客間へ通して見ると、初対面の主人に向つて、「取りあへ

[illegible]に多少は名聲のある、新しい作家の一人[illegible]たゞには、[illegible]ずにはゐられなかつた。……

それがガルシンと云ふ方でした。」

トゥルゲネフはこの名を聞くと、もう一度話の圏内へ、トルストイを誘つて見る氣になつた。と云ふのは相手の打ち解けないのが、益不快になつた外にも、嘗て彼はトルストイに、始めてガルシンの作物を紹介した緣故があるからだつた。

「ガルシンでしたか？——あの男の小說も惡くはあるまい。君はその後、何を讀んだか知らないが、——」

「惡くはないやうだ。」

それでもトルストイは冷然と、好い加減な返事をしただけだつた。——

トゥルゲネフはやつと身を起すと、白髮の頭を振りながら、靜に書齋の中を步き出した。小さな卓の上の蠟燭の火は、彼が行つたり來たりする度に、壁へ映つた彼の影を大小さまざまに變化させた。が、彼は默然と、兩手を後に組んだ儘、懶さうな眼は何時までも、裸の床を離れなかつた。

トゥルゲネフの心の中には、彼がトルストイと親しくしてゐた、二十餘年以前の追憶が、一つ一つ鮮に浮んで來た。放蕩に放蕩を重ねては、ペテルブルグの彼の家へ、夜眠りに歸つて來た、將校時代のトルストイ、——ネクラソフの客間の一つに、傲然と彼を眺めながら、チオルチュ・サンドの攻擊に一切を忘れてゐたトルストイ、——スパスコイエの林間に、彼と散步の足を止めては、夏の雲の美しさに感歎の聲を洩らしてゐた、「三人の輕騎兵」時代のトルストイ、——それから最後にはフエツトの家で、二人とも拳を握つた儘、一生の惡罵を相手の顏へ投げつけた時のトルストイ、——そ

れらの逸話を見ても、感受性の強いトルストイは、殆ど病的程他人の中に、虚偽を認めない人間だつた。殊に他人のする事には、虚偽を発見する人間だつた。これは他人のする事が、何も彼のする事を実行してゐる時のみではない。たとひ同じやうに、作為をしてゐる場合があつても、彼は彼自身を恕すやうに他人を恕す事が出来なかつた。彼には他人が彼のやうに、夜の空の美しさを感じてゐると云ふ事すら、すぐには信用は出来ないのである。彼がサンドを憎んだのも、やはり彼女の真実に疑ひを抱いたからだつた。一時彼がトゥルゲネフと、絶交するやうになつたのも、——いや、現に彼はトゥルゲネフが、山鴫を射落したと云ふ事にも、不相変嘘を嗅ぎつけてゐる。…………

トゥルゲネフは大きな息をしながら、ふと庭の前に足を止めた。庭の中には大理石の像が、淡い月の光を受けに、覚束ない形に浮き出してゐる、——それはリョフには長兄にあたる、ニコライ・トルストイの半身像だつた。思へば彼と親しかつた、この気質の優しいニコライが、故人の数にはいつて以来、二十年あまりの月日は、何時の間にか過ぎてしまつた。もしニコライの半分でも、リョフに他人の性格を思ひやる事が出来たなら、——トゥルゲネフは長い間、森の夜の更けるのも知らないやうに、この仄暗い庭の中の像へ、寂しさうな目を注いでゐた。…………

翌朝トゥルゲネフはやや早めに、新しい家では平常に定められた、一階の客間へ出かけて行つた。客間の中には先祖の肖像画が、何枚も壁に並んでゐる、——その肖像画の一つの下に、トルストイは机へ向ひながら、郵便物に眼を通してゐた。が、彼の外にはまだ子供たちも、唯一人姿は見せなかつた。

二人の客は挨拶をした。

その間もトゥルゲネフは、片手の帽子を弄びながら、少しでも早く狩猟に出られれば、すぐに同行するやうな：

トルストイはまだ読むのを止めずに、二三頁読[illegible]は、[illegible]ると、[illegible]
ルゲネフはやむを得ず、手近い椅子を一つ引き寄せると、こ[illegible]やはり新聞[illegible]、卓の上の[illegible]を[illegible]た。
陰気な客間には少時の間、新聞のかさかさ鳴る音の外には、何の音も聞えなかつた。
「昨夜はよく眠られたかね？」
郵便物に眼を通してしまふと、トルストイは何と思つたか、かうトゥルゲネフへ声をかけた。
「よく眠られた。」
トゥルゲネフは新聞を下した。さうしてもう一度トルストイが、話しかける時を待つてゐた。が、主人は銀の手のついたコップへ、湯沸の茶を落しながら、それぎり何とも口を利かなかつた。
かう云ふ事が一二度続いた後、トゥルゲネフは丁度昨夜のやうに、不機嫌なトルストイの顔を見てゐるのが、だんだん苦しくなり始めた。殊に今朝は余人がゐないだけ、一層彼には心のやり場が、何処にもないやうな気がするのだつた。せめてトルストイ夫人でもゐてくれたら、——彼は苛立たしい腹の中に、何度となくかう思つた。が、この客間へはどうしたものか、未に人のはひつて来るけはひさへも見えなかつた。
五分、十分、——トゥルゲネフはとうとうたまり兼ねたやうに、新聞を其処へ抛り出すと、蹌踉と椅子から立ち上つた。
その時客間の戸の外には、突然大勢の話し声や靴の音が聞え出した。それが皆先を争ふやうに、どやどや階段を駈け上つて来る——と思ふと次の瞬間には、勢好く戸が開かれるが早いか、五六人の男女の子供たちが、口々に何かしやべりながら、一度に部屋の中へ飛びこんで来た。
「お父様、ありましたよ。」

先に立つたイリヤが、得意さうに、手に下げた物を振つて見せた。

「僕が先に見つけたのよ。」

父によく似たタティアナも、弟に負けない声を張上げた。

「さつき来る時にはなかつたのですよ。白樺の枝に下つてゐました。」

後から説明したのは、一番年長のセルゲイだつた。

トルストイは呆気にとられたやうに、子供たちの顔を見廻してゐた。が、昨日の山鴫が無事に見つかつた事を知ると、忽ち彼の髭深い顔には、晴れ晴れした微笑が浮んで来た。

「さうか？　木の枝にひつかかつてゐたのか？　それでは犬にも見つからなかつた筈だ。」

彼は帽子を脱ぎながら、子供たちにまじつたトゥルゲネフの前へ、逞しい右手をさし出した。

「イヴァン・セルゲエヰッチ。これで僕も安心出来た。僕は嘘をつくやうな人間ではない。この鳥が下に落ちてゐれば、きつとドオラが拾つて来た筈だ。」

トゥルゲネフは殆ど恥しさうに、しつかりトルストイの手を握つた。見つかつたのは山鴫か、それともアンナ・カレーニナか、――「父と子」の作家の眼には、一瞬間、泣きたいやうな表情さへ、何時か一ぱいになつてゐたのだつた。

「僕だつて嘘をつくやうな人間ではない。見給へ。その通りちやんと仕止めてあるぢやないか？　何しろ銃が鳴ると同時に、石のやうに落ちて来たのだから、――」

二人の文豪は見合せると、申し合せたやうに笑ひ出した。

蘭學事始

菊池寛

一

杉田玄白が、新大橋の中邸を出て、本石町三丁目の長崎屋源右衛門方へ着いたのは、巳刻を少し廻つたばかりだつた。

が、顔馴染の番頭に案内されて、通辭西善三郎の部屋へ通つて見ると、昨日と同じやうに、良澤はもうとつくに來たと見え、悠然と坐り込んで居た。

玄白は、善三郎に挨拶を濟すと、良澤の方を振向きながら、

「お早う！　昨日は、失禮致し申した」と、挨拶した。

が、良澤は、光澤のいゝ總髪の頭を、輕く下げた丈で、その白皙な、鼻の隆い、薄菊石のある大きい顔を、ニコリともさせなかつた。

玄白は、毎度のことだつたが、一寸嫌な氣がした。

彼は、中津侯の醫官である前野良澤の名は、豫てから知つて居た。そして、その蘭學の評判に對しても、可なりな敬意を拂つて居た。が、親しく會つて見ると、不思議

に、此の人に親しめなかつた。

彼は、今迄に五六度も、長崎屋で良沢と一座した。去年加比丹が、此の客館に逗留して居た中にも、二度ばかり落合つたことがあつた。今年も三月の廿日に、加比丹が、江戸に着いてから、今日で七日にもならぬ間、玄白は三回迄も、良沢と一座した。

それでゐて、彼はどうしても此の人に親しめなかつた。それかと云つて、彼は良沢を嫌つて居るので[illegible]れて、憎んでゐるのでもなかつた。たゞ、一座する度に、彼は良沢から、ある威圧を感じた。彼は、良沢と一座をして居ると、良沢の[illegible]と云ふ[illegible]、彼の心にこびり付いて離れなかつた。良沢の一挙一動が気になつた。彼の一顰一笑が、気になつた。彼は、気にしまいとすればする程、気になつて仕方がなかつた。

それだのに、相手の良沢が、自分のことなどは、殆ど眼中に置いて居ないやうな態度を見ると、玄白は何[illegible]するやうな、段々と[illegible]に居られなかつた。

長崎屋の[illegible]への出入には、[illegible]があつて、可なり厳しく取締られて居たが、加比丹が、江戸に滞留中の数旬である、此の長崎屋への出入は、何くれのうちに、内証何のかのと[illegible]あつた。従つて、和蘭陀の[illegible]、本草、[illegible]の学問に志ある者を初、好事の旗本富商の人々までが毎日のやうに、押しかけて居た。

[illegible]の、医官で、[illegible]、同藩の中川淳庵、蘭癖の札差で、好事の名を取つた[illegible]兵衛、[illegible]の浪人平賀源内、[illegible]長崎、御儒者の大久保、水間などの顔が見えぬことは、稀だつた。

たゞ良沢は、学者らしい内気な[illegible]として、加比丹にいろ／＼な質問をした。それで、大概は和蘭陀の[illegible]

ての、たわいもない質問であることが多かつた。加比丹の答に依つて、それが何であるかが分ると、皆は腹を抱へて笑つた。

また、ウエールガラス（晴雨計）や、アレモメートル（寒暖計）、ドンケールカラス（暗室鏡）などを見せられると、彼等は、子供が珍らしい玩具にでも接したやうに喜んで騒いだ。

が、こんな時、一座を冷然と見下すやうに坐つて居るのは良澤だつた。彼は、みんなが口にするやうな質問は、決して發しなかつた。彼は、初から終まで、冷笑とも微笑とも付かない薄笑ひを、唇の端に浮べながら默つて聴いて居た。一座が、たわいもなく笑つても、彼のしつかりと閉された口は、容易にほころびなかつた。

が、ある瞬間で、一座が問ひ疲れて、自然に靜かになつた頃に、良澤は徐ろに、一つ二つ問ひ質した。一座の者には、その質問の意味が、分らないことさへ多かつた。が、加比丹が、通辭から、その質問を受取ると、彼はいつも、驚いたやうに、目を剝りながら、急に眞面目な態度になつて、長々と答へるのが常だつた。

一座の者は、良澤のさうした——彼一人高しとして居るやうな態度を、少しも氣に止めて居ないらしかつたが、玄白丈はそれが、妙に氣になつて仕方がなかつた。

つひ、昨日もこんな事があつた。それは、云つて見れば、何でもないことだが、加比丹のカランスが、座興の積りだつたのだらう、小さい袋を取り出して、皆に示した。通辭は、加比丹の言葉を受けて、こんなことを云つた。

「カランス殿の云はれるには、此の袋の口を、試みに開けて御らうじませ。口を開けた方に此の袋を進ぜられるとあるのぢや」

カランスは、一面に髯の生えた顔の相好を崩して、ニコニコ笑つて居た。

一座は、可なり打ち興じた。一番に、細井甚庭が、手に取り上げた。が、性急な彼は、暫らくいぢつて居たかと思ふと、直ぐ投げ出してしまつた。

「これ／＼拙者が、」と、安富寄碩が、仔細らしく取上げたが、これも暫らく考へて居たかと思ふと、思案に餘つて投げ出してしまつた。その次は、一座の者の手から手へ渡つた。一人一人失敗する毎に、一座は聲高く笑つた。カランスは持扱ひかねて居るのを、嬉しさうに、ニコ／＼見て居た。

玄白の手許に來た時、彼もニコ／＼笑ひながら取り上げた。袋の口には、金具が付いて居た。それは、恐らく智慧の輪の仕掛になつて居たのだらう。玄白は、到頭持て餘した。彼は、苦笑しながら、それを次ぎの者に渡さうとした。が、その時に、一座の者は、大抵それを試みて居た。たゞ玄白の右手に、坐つて居る良澤丈には、彼が餘り端然と控へて居るために、誰もまだそれを手渡し兼ねて居た。

「良澤氏、如何で御座る？」

玄白は、無造作にそれを良澤に、手渡さうとした。が、良澤は、冷然として、それを受取らうとはしなかつた。彼に、恐らく一座の者が、つまらない玩具物で、打ち興じて居ることが、餘りに苦々しく思はれたのだらう。否、士大夫ともあらう者が、つまらない玩具物で、加比丹から體よく翻弄されて居ることを苦々しく思つたのだらう。彼は、玄白が差し出したその袋を、見向きもしようともしなかつた。

その袋は、玄白と良澤との中間に、置かれたまゝ、一座は一寸白けかゝつて居た。

が、丁度その時、折よく平賀源内が、遅れては入つて來た。彼は、その袋の事を、一座の者から聴くと、それを手に

[illegible]一座に、[illegible]の学才を賞する[illegible]、充ち満ちた。[illegible]、一座の白けかゝらうとするのである。

が、玄白の良澤に対する、意地とも反感ともつかぬ物は、[illegible]心の中で、此時からだん／＼判然とした形を、取りかけて居た。

玄白は、良澤が一座に居ると、心に思ひ浮ぶ質問の半分も、口に出すことが、出来なかつた。良澤には、自分の訊いて居ることが、もうとつくに解つては居はしないかなどと思ふと、質問をすることが、良澤の前で、自分の無智を告白して居るやうで、何うにも気が進まなかつた。玄白は、さうした外聞とか見得とか云つたやうな心持を、心の裡で可なり恥ぢて居た。が、恥ぢながらも、それに拘泥らずに居られなかつた。彼は、阿蘭陀の事物、学術殊に医術に対する智識慾に渇えながら、妙な意地から、心のまゝに、質問することが出来なかつた。

その日も、彼は皆が来ない前、特に良澤の来ない前に、自分一人で、善三郎に訊ひたかつたのである。彼は阿蘭陀文字を読まうと云ふ自分の企てからの将来を述べて、その志願の可能不可能を、善三郎に質して見たかつたのである。

そのために、昨日よりは半刻も早く来た玄白には、良澤が自分よりも早く来て居たことが、可なりの打撃だつた。が、彼は良澤に介意ひすぎる自分の心持を恥ぢた。彼は、良澤ただ一人しか居ないのを幸ひに、自分の素志を述べて見た。

「西氏！　今日は、ちと御邊に折入つてお訊ねしようと思ふことが御座るのぢや、それは他の儀では御座らぬ。[illegible]、阿蘭陀の文字と申すものは、われら異国の者にも、読めるもので御座らうか。それとも、いかほど訓習いたしても読めないもので御座らうか。有様にお答へ下されい。われら存ずる仔細も御座るほどに。」

玄白の問には、質樸な気が、充ちて居た。西は玄白の熱心を[illegible]するやうに、二三度頷いた。が、彼の與へた答は否定的だつた。彼は、西洋の人に特有な快活な調子で答へた。

「されば　さ。それは、其国の方々から[illegible]られた事で御座る。なれど、われら答へ申すには、たゞ御無用になされと申す外は御座らぬ。いかほど、[illegible]なされても、所詮[illegible]ぬことゝ御座る。有様を申せば、われら通辞の者にても、阿蘭陀の文字を読み得るものは、われら[illegible]の外は、とんと御座らぬ。其の者は、[illegible]ばかりを假名で書き留め、口づから暗記に申して、折々の御用を弁じて居るので御座る。彼の国の言葉を、一々に理會いたさうなどは、わら異国人には、思ひも及ばぬことゝ御座る。例へて申さうなら、彼の国の[illegible]マダロスなどに、湯水又は酒を呑むを何と申すかと、訊ね申すには、[illegible]にて問ひ申すは、御座らぬ。[illegible]などを持ち添へ、注ぐ真似を致し、口に付けて、これはと問へば、デリンキと教へ申す。デリンキは、呑むことゝ承知いたす。其までは、仔細に御座らぬ。なれど、今一足進み申して、上戸と下戸との区別を、聞かうには、ヘタと[illegible]申す。手真似にて問ふべき仕方は御座らぬ。度々、呑む真似をいたして、上戸の[illegible]を示し申し、[illegible]手真似にはとんと通じ申さぬ。さればとや、多く呑みても、酒を好まさる人あり、少く呑みても好む人あり、上戸と下戸の別は、とんと付き申さぬ。かやうに、情の上のことは、いかやうに手真似を尽くしても、問ふべき仕方とて御座らぬ」

「なるほどなあ。御尤もで御座る」

玄白も、西の説明の道理を、首肯せずには居られなかつた。

玄白が、[illegible]するのを見ると、西は[illegible]顔に言ひつけた。

「[illegible]の[illegible]、た[illegible]しきには、[illegible]アー[illegible]ッケンと申す[illegible]

[illegible]御座るが、われら、[illegible]、幼少の折より、こ[illegible]、[illegible]申したが、[illegible]は、一向悟り申さなんだところ、年五十に及んで、此度の道中にて、やつと会得いたして御座る。アーンに、と云ふむこうて御座る。テレッケンとは、引くと云ふ事で御座る。アーンテレッケンとは、向ふものを手元へ、引きたいと思ふ意で御座る。酒を好むとは、酒を手元へ引きたいと云ふ意で御座る。故郷アーンテレッケンするとは、故郷を手元へ引き寄せたいほど、懐しむと云ふ事で御座る。斯様に、一つの言葉にても、むつかしきものに御座れば、われらの如き、幼少より阿蘭陀人に朝夕いたし居る者にても、なかなか会得いたし兼て御座る。況んや、江戸などに御座しては、所詮叶はぬことで御座る。御存じでも御座らう。野呂玄丈殿、青木文蔵殿など、御用にて、年々當旅宿へ、お越しなされ、一方ならず御出精なされても、はかばかしう会得も参らぬやうで御座る。其許も、さ様な御志は、必ず御無用になされたがよろしからう」

西は、自分自身も、とつくに諦め切つて居るやうに云つた。

玄白も、さう答へる外はなかつた。相手が切に止めるものを、強いて学習の方法などを訊く譯にも行かなかつた。

「なるほど。道理で御座る」

「なるほど。大通詞の御邊が、左様に思ふて居らるゝことを、われら如何やうに思ひ立つても、及ばぬことで御座る。所詮は、思ひ切るの外は御座らぬ」

玄白が、何気なくさう云つた時だつた。今まで黙つて、西と玄白との問答を聴いて居た良沢が、急に口を挟んだ。

「いや、御両所のお言葉では御座るが、われらの存ずる仔細は別ぢや。凡そ、紅毛人とは申せ、同じ人間の作つた文字言語が、同じ人間に会得出来ぬと云ふ道理は、更々御座らぬわ。われらが、平生読み書きいたし居る漢字漢語も、又わ

れらは大夫が、實證いたし居る孔孟の教も、傳來の初には、只今の阿蘭陀の文字同様一切不通のものであつたに相違御座らぬわ。これを、われらの遠つ祖どもが、辛苦いたして、一語半語づつ、理會いたして參つたに相違御座らぬ。遠つ祖どもの苦心があればこそ、二千年この方、幾百億の人々が、その餘澤に潤ふて御座るのぢや。良澤の志は、其處で御座る。われらは、此後に來る者のためには、彫心鏤骨の苦しみも、辭さぬ覺悟で御座る。杉田氏も、お志をお捨てなされいで、われらは、今年四十九では御座るが、倒れるまで、努めて見る積で御座る」

玄白は、良澤の志を聽いてゐながら、恥ぢずには居られなかつた。その雄渾な志を聽いて、心から恥ぢずには居られなかつた。彼は、之れを自分に對する有難い忠言だと思はずには居られなかつた。が、彼は餘りに觸れられたくない急所に、相手が無遠慮に、觸れて來たことに、可なりな不快を感ぜずには居られなかつた。此方が、半分は投げ遣り、云つて居ることに、何の容赦もなく、眞劍に向つて來た相手に、ある不快を感ぜずには居られなかつたのである。

二

玄白が、かのターヘルアナトミアを手に入れたのは、それから九日とは經たない日だつた。

玄白の志は、元來阿蘭陀の醫術に在つた。彼が蘭語を學びたく思つたのも、それに依つて外科方術に關する智識を、攝取したい爲であつた。

從つて、彼はターヘルアナトミアを、其の内容から示されると、彼は驚異の眼を、瞠らずには居られなかつた。[illegible]いふと脊とで、寫られた臓腑の圖の、精緻な構造を見ると、彼は其處に人體に就いての凡ての秘密が、解き明されてあるやうに思はれた。その圖と圖との間に挾まつて居る、蟹行の様な阿蘭陀の文字は、一字も半字も、讀めなかつた

けれども、彼の心は激しい好奇心で、それを求めずには居なかつた。彼は、心の底からそれに垂涎した。價は、二十九人扶持の彼に取つては、力に餘る三両と云ふ大金であつた。が、彼は前後の思慮もなかつた。懐中して居た一朱銀を、手金として、その商人に渡すと、彼は金策のために、そこから馳せ歸つた。彼が、馳け付けて行つたのは、家老岡新左衛門の邸であつた。門は、兼てから、玄白に好意を持つて居た。彼は玄白の懇願を聴くと、

「それは求めて置いて、用立つものか。用立つものならば、何れは上より下し置かれるやう、取計つて得させやう」と、云つた。

さう答へられると、玄白も感激した。

「されば、必ずかうと云ふ目當は御座りませねども、是非とも用立つものにして、お目に掛けるで御座らう」と、誓はずには居られなかつた。

丁度、座に小倉左衛門と云ふ男が、居合はした。

「それは、何卒調へて遣はされたい。杉田氏はそれを空しくする人では御座るまい」と、助言して呉れた。

ターヘルアナトミアを、自分のものにした玄白は、雀躍して欣んだ。

三

三月三日の事であつた。玄白は、その日も長崎屋へ出向いて居た。將軍家の阿蘭陀人御覽が、昨日滯りなく終つたので、加比丹を初、二人の書記役、大小の通辭達も、みなのび〳〵とした氣持になつて居たので、會談が何時になく賑つ

た。到頭、おしまひに加比丹が、珍能と云ふ珍らしい酒を出して、皆を饗應つた。

その日は、良澤の顔が見えない外、一座の者に、中川淳庵、小杉玄適、烏山松圓など、皆醫師ばかりであつたので、對話は多岐に亘らずして、緊張して居た。殊に、[illegible]役の一人のバブルは、外科の巧者であつたので、皆はバブルを囲んで、貪るやうに、いろ／＼な質問を發して居た。

殊に、玄白は、刺絡の術を、熱心に訊いて居た。

餘い永い日が暮れて、阿蘭陀人達が、食事のために、退いたとき、皆は緊張した對話から、ホツとして我に返つて居た。彼等が、急いで歸り支度にかゝつて居る時だつた。中川淳庵の[illegible]宅から、小者が赤紙の附いた文箱を持つて、駈け付けて來た。

淳庵は、その急を示した文箱を、一寸不安な顔付で、取り上げたが、中の書状を讀んで居る裡に、彼の不安な顔は、欣びで溢れてしまつた。

「玄白！ 喜びなされい！ かねての宿願が、叶ひ申したぞ。明日、骨ケ原で腑分がある！ 腑分がある！」

淳庵は、喜びの聲を揚げながら、一座の者にその書状を示した。それは、いかにも町奉行曲淵甲斐守の家臣得能萬兵衛から、明四日千住骨ケ原にて、死刑囚の屍體を、腑分けすることを、内報して來た書状だつた。

「腑分か！ 腑分か！」

皆は、口々に喜びの聲を出した。

淳庵、玄白、玄門など、阿蘭陀流の醫術に志すものに取つては、刑屍は年來の宿望だつた。が、その機會は容易に得られなかつたのだ。

殊に、彼等は今日此頃、バブルから、身體内景の有様を、詳しく聞いて居たので、腑分に對する好奇心は、火に油を注がれたやうに、燃えて居た。

殊に、玄白は腑分と聽くと、自分の心が、躍揚するのを抑へることが出來なかつた。彼は、ターヘルアナトミアを手にして以來、腑分の日を、一日千秋の思で待つて居た。彼は、ターヘルアナトミアの銅版が、古人の說と全く違つて居るのを知つて居つた。彼は、それを實地に照して、一日も早く確めたかつたのである。

一座の人々の顏は、欣びに輝いて居た。

「それでは、今夜は直ちに歸宅して休息いたし、明日早天に、山谷町出口の茶屋で待ち合はすことにいたさう」

淳庵は、座中を見廻して云つた。一座は、直ぐそれに同意した。

その時に、玄白の頭の中に、ふと良澤の顏が浮んだ。彼は、良澤がやはり、觀臓の希望の切なことを知つて居た。一座の誰にも、劣らないほど、切なのを知つて居た。縱令、良澤が、この席に居合はさずとも、明日の一擧に洩すべき人でないことを、感じて居た。

が、彼は良澤の名を、氣輕に口にすることが出來なかつた。良澤に對する輕い反感のために、たやすく口にする事が出來なかつた。その上、彼の心の一隅には、日頃一座に對して高飛車な、見下したやうな態度を取つて居る良澤が、大切な會に洩れることを、いゝ氣味だと思ふ心が、かすかではあるが動いて居た。

それに、誰もが良澤のことに、氣が付いて居ない以上、自分が特に注意するにも、當らないと思つて居た。

が、一座がその儘に、立ち上りさうになると、玄白の心は、だん〳〵苦しくなつて居た。輕い苛責が彼の心を鞭打つた。彼は、良澤に對する自分の態度の卑しさに、氣づかずには居られなかつた。

せ、[illegible]には[illegible]れて[illegible]った。
「[illegible]居る！ 前野氏が居る！ [illegible]も、何とかいたし[illegible]ない[illegible]る」
[illegible]つ[illegible]き、玄白は自分自身、救[illegible]れ[illegible]ち[illegible]るいな[illegible]
「おゝ、[illegible]居る！ 前野氏の[illegible]」[illegible]。[illegible]
玄白は、直ぐそれに応じた。が、[illegible]つて居[illegible]て[illegible]えて[illegible]
た。
「[illegible]にも、知らせたのは御座るが、前野氏[illegible]の[illegible]ほどに[illegible]らぬ。[illegible]の[illegible]」
玄白は、[illegible]よ[illegible]か」思った。自分[illegible]は、それ[illegible]る。[illegible]に[illegible]せれ[illegible]ほどの、[illegible]も責任もない[illegible]た。が、彼は自分[illegible]に、[illegible]いこと[illegible]心が、潜[illegible]ここに、[illegible]て居る[illegible]
「いや、[illegible]ないとは、[illegible]こと[illegible]御[illegible]へ、[illegible]ば、[illegible]とは[illegible]い。」
玄白[illegible]は、[illegible]。
「それは、[illegible]」
一[illegible]、[illegible]
玄白は、自分で[illegible]が、[illegible]ことが[illegible]。が、ふ[illegible]

分の持つて居るターヘルアナトミアのことを考へると、また別な心持が動いた。彼は、その書物を、持つて、披読するときの、得意な心持を考へた。殊に、良澤の前で――いつも、それとなく威壓されて居るやうに思ふ良澤の前で、ターヘルアナトミアを開いて見せる自分の心持を考へて見た。

彼は、やつぱり良澤を呼んで、いゝ事をしたと思つた。

四

三月四日の朝、玄白は寅の二つに近い頃、新大橋の濱邸を出て、淺草橋から藏前を通つて、廐小路に出て、馬道から山谷町の出口の茶屋に着いたのは、春の引き明けの薄紫の空に、淺草寺の明六つの鐘が、から〱と鳴り渡つて居る頃であつた。

茶屋の座敷に上つて見ると、もう玄適と良澤とが、朝寒の部屋に、火鉢を囲ひながら向ひ合つて居た。麴町平河町に住んで居る良澤が、自分より先きへ來て居るのを見ると、玄白は心中少からず、駭かずには居られなかつた。

良澤は、玄白がはいつて來るのを見ると、何時になく丁寧に會釋した。

「杉田氏！　昨夜は、貴所の肝煎で、使を下さつたさうで、有難く存じ居る。お陰で、拙者も斯様な、得がたき企に與り申して、大慶に存じ居る所で御座る」

さう、眞正面から感謝されると、玄白は自分の今迄の、良澤に對する心持を、心の裡でやゝ恥しく思はずには居られなかつた。

玄白は、良沢から目を[illegible]んだ。

「良沢殿。前野氏は、昨夜から、一睡もなされなかつたさうで御座る。彼の[illegible]子[illegible]で、あなたが出ら

れるのを、正午まで待つたと申す。それよりも、今日の会合のことを考へると、心が躍るやうで、一睡もなされなかつたさう

よ[illegible]。」

玄白は、良沢の熱心が、自分以上に、烈しいことを知ると、どんなにしても、良沢に負けたくないと云つたやうな、負ひ

しさを[illegible]すには居られなかつた。

が、さうした競争しながらも、自分が胸中に抱いて居るターヘルアナトミアに対する[illegible]、良沢のそれに、今日の参

会に、此の書物を持つて居るのは、自分一人だと思ふと、良沢に対する[illegible]出て[illegible]しまつた。

その[illegible]見えた。小半時ばかりたつた時に、淳庵と良沢とが、前後して[illegible]た。六人の顔が揃ふと、打

ち連れ立つて骨ケ原へ向つた。

その日は春の[illegible]に風を吹かせながら、六人を[illegible]とよく晴れて居た。六人とも、中には[illegible]した者もあつたけれども、彼らの心には、明るいのぞみに、躍つて居た。六人の[illegible]は、何の[illegible]にも、[illegible]て居た。八町の[illegible]は、ともすれば、[illegible]駈せであつた。

玄白は、いくターヘルアナトミアを、[illegible]の中に、[illegible]に[illegible]しようと思つて居た。彼は、[illegible]日[illegible]の茶屋で、[illegible]

[illegible]しさを思ひながら、つひその[illegible]を得なかつた。

骨ケ原の刑場に着くと、[illegible]に[illegible]して[illegible]木の下に、[illegible]死して[illegible]らないやうな[illegible]が、かけられて居た。その間

[illegible]、今日[illegible]分けされるのだと[illegible]くと、六人は一寸不快な感じを[illegible]すには居られなかつた。

非人頭が、六人を刑場の入口にある番小屋へ案内した。腑分けの準備が、整ふまで六人は其処で、待たなければならなかつた。

玄白は、今こそと思ひながら、懐中のターヘルアナトミアに手をかけようとした。が、それと同時に、良沢が思ひ出したやうに、右の手に持つて居た風呂敷包みを、解きながら云つた。

「左様！　左様！　各々方に、御披露するものが、御座つた。先年長崎へ参つた折、求め得つて所蔵いたし居る、阿蘭陀解剖の書で御座るが」

さう云ひながら、彼は風呂敷包みの中から、取り出した一本を、皆の前に指し示した。

玄道が、好奇の眼を輝かしながら、それを受取つた。五人の眼が、一齊にそれに注がれた。が、玄白は一目見ると、自分の眼を疑はずには居られなかつた。それは、自分が懐中して居る、ターヘルアナトミアと、寸分違はぬ同版同刻の書であつた。

彼は、茫然として動かなかつた。良沢に對して、主張し得ると思つて居た彼が、最後の拠りどころは、脆くも踏み躙られてしまつたのであつた。が、玄白は、懐中して居る自分の本を出さない譯にも行かなかつた。

「前野氏には、疾てから御所持で御座つたか。實は、拙者もこのほど、一本を求め申して御座る」

玄白は何氣ないやうに、披露した。が、彼が昨夜から、楽しみにして居た披露する折の得意さ、晴がましさなどは、微塵も感じられなかつた。非を悔むやうな氣持であつた。

が、良沢は、それを見ると、心から驚いたらしかつた。彼は玄白の差し出した本を取り上げながら、表紙や扉を、返して見た。

「[illegible]ござる。」

[illegible]ことなら、良[illegible]も手をおつた。良沢の態度は、大盤の如く円満だつた。

「[illegible]と[illegible]、[illegible]せずして、ターヘルアナトミアを所持いたし居るなど、これは阿蘭陀通詞が、聞くべき事項とも申[illegible]を[illegible]る」

[illegible]、[illegible]をつゞけて[illegible]した。彼は、[illegible]中の一冊を玄白に指し示しながら云つた。

「[illegible]これは、ロンゲと申して肺臓。これはハルトと申し心臓と申す。これはマーゲと申し胃で[illegible]これは、ミルトと申し脾臓である。[illegible]細に申す、五臓六腑、[illegible]六葉、両[illegible]の左三葉、右[illegible]などの記述は、[illegible]ことは[illegible]である。今日こそ、漢方が正しいか、阿蘭陀の人体図が正しいか、決すべき[illegible]でござる。」

[illegible]は、[illegible]に[illegible]する[illegible]いて居た。玄白も、良沢の[illegible]な[illegible]に[illegible]して居ると、自分の心の[illegible]には、[illegible]などは、何の間にか[illegible]て居た。

五

[illegible]、六[illegible]打ち[illegible]れて、[illegible]の[illegible]へ行つた。

[illegible]に、[illegible]を[illegible]く、粗末な[illegible]が、[illegible]れて居た。[illegible]の[illegible]、三人の[illegible]と、二人の[illegible]と[illegible]に[illegible]た。

[illegible]、[illegible]木の上に、かけられて居る[illegible]の[illegible]であつた。[illegible]云つて、[illegible]く[illegible]人[illegible]であつた。若い時、鬼名[illegible]はれたと云はれるだけに、[illegible]を[illegible]して居ると云ふにも[illegible]

い罪囚の身體には、まだ少しの皺も見えなかつた。

刀を執る者は、虎松と云ふ九十に近い屠多だつた。刑死人の屍體の脂肪が、にじみ出て居るのではあるまいかと思はれるやうな、赤黒い皮膚をした健やかな老人であつた。

彼は、若い時から、腑分けは幾度も手にかけ、數人を解いたことがあると自慢とした。

究理のために、勇み立つて居る六人ではあつたけれども、その首のない、生白い無恰好な屍體を見たときに、皆は思はず、顏を背けずには居られなかつた。眼や鼻から受ける醜惡な感じで、六人の胸は閉された。が、良澤も淳庵も、玄白も、必死な色を浮べて、さうした感じに堪へて居た。

老人の腕は、研ぎすました出刃を、逆手に持つと、獸の肉をでも削くやうに、屍體の胸を、つぶ〳〵と切り開いて行つた。まだ首が離れてから、半刻と經つて居ない屍體からは、出刃の切先の進むに連れて、かたまりかけて居る血が、とろ〳〵と滲じみ出た。

胸が、第一に切り開かれた。良澤も玄白も、ターヘルアナトミアの胸の繪圖を開きながら、眞赤に開かれて行く屍體の胸と、一心に見比べてゐた。

それが、良澤と玄白とに取つて、何と云ふ不思議であつただらう。出刃の切先に切られて行く骨の一つも、筋の一つも、肉の間に網の如く走しつて居る白い奇怪な線條も、白く浮き上つて居る脂肪も、ひろ〳〵と胸廓一杯に、氣味惡く擴がつて居る肺も、左肺の下から覗いて居る眞赤な桃の實の如き心の臟も、ターヘルアナトミアの繪圖と、一分一點の違もなかつた。

良澤も玄白も、他の四人も深い感嘆のために、聲も出なかつた。

ていて、殺され[illegible]。そこに見[illegible]、[illegible]で[illegible]名も知らぬ[illegible]國まで[illegible]、[illegible]分の[illegible]なかつた。

[illegible]、[illegible]を止め[illegible]、[illegible]て、[illegible]ように[illegible]。

「[illegible]おや。[illegible]。[illegible]の[illegible]と、[illegible]分[illegible]。[illegible]、[illegible]に[illegible]と、[illegible]申し[illegible]にも[illegible]をれし申した」

「[illegible]おや。[illegible]！」

[illegible]は、良[illegible]に[illegible]はせた。

[illegible]からの[illegible]、[illegible]良[illegible]とは、一[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]であつた。[illegible]は、[illegible]に[illegible]ていた。それは、[illegible]不[illegible]。

[illegible]、六七[illegible]の[illegible]、[illegible]は黙々と[illegible]々自分[illegible]、[illegible]と、[illegible]に[illegible]へならうに[illegible]た。

今[illegible]、[illegible]入るの[illegible]ない[illegible]と[illegible]、[illegible]付[illegible]に、[illegible]上[illegible]へは、[illegible]に[illegible]なる。それ〳〵[illegible]、[illegible]々[illegible]、[illegible]も心[illegible]、今日[illegible]日一日と、その[illegible]申し[illegible]、[illegible]、[illegible]日[illegible]につき、[illegible]にも[illegible]て、[illegible]ば、[illegible]」

[illegible]、[illegible]には[illegible]なかつた。[illegible]、[illegible]た。

「いかにも、其もの御意ぢや。それに付けても拙者は、如何にも致して、このターヘルアナトミアの一巻を、翻譯いたしたいものぢやと存ずる。これだに、翻譯いたし申せば、身體内外のこと、分明を得て、今日以後療治の上にも、大益あることゝ存ずる」

良澤も、心から打ち解けて居た。

「いや、杉田氏の仰せ、尤もで御座る。實は、拙者も年來蘭書讀みたき宿願で御座つたが、志を同じうする良友もなく、慨き思ふのみにて、日を過して御座る。もし、各々方が、志を合はせ下されば、何よりの幸ひぢや。幸ひ、先年長崎留學の砌、蘭語少々は記憶いたして御座るほどに、それを師と致し、共々此のターヘルアナトミアを、讀みかゝらうでは御座らぬか」と、云つた。

玄白も、淳庵も、玄適も、手を拍つてそれに同じた。彼等は、異常な感激で結び合はされた。

「然らば、善はいそげと申す。明日より拙宅へお越しなされい！」

良澤は、その巨きい眼を輝しながら云つた。

六

約の如く、その翌日を初とし、四人は平河町の良澤の家に、月五六回づゝ相會した。

良澤を除いた三人は、阿蘭陀文字の二十五字さへ、最初は定かには覺えて居なかつた。

良澤は、三人の人々に、蘭語の手ほどきをした。彼は、迫に長崎へ留學したことがある丈に、多少の蘭語と、章句語脈のことも、少しは心得て居たけれども、それも殆ど云ふに足りなかつた。一月ばかり經つと、良澤が三人に教へること

と、もう字も讀[illegible]なくなつた。

[illegible]人[illegible]ほどき[illegible]と、門人に向て、ターヘルアナト[illegible]た

が、解剖第一の頁から、たゞ茫洋として、[illegible]何せし[illegible]、何[illegible]の手の付けやうもな[illegible]、ある皆れにあきれて居るばかりだつた。

が、二年ばかくつ[illegible]間に、向けに伏し[illegible]體[illegible]名[illegible]聞[illegible]。彼[illegible]は[illegible]あつた。[illegible]門[illegible]のことは[illegible]、表部[illegible]ことは、その名[illegible]も一々知つて居ることであるから、圖に[illegible]け[illegible]と[illegible]とを、[illegible]ることが一番[illegible]しと[illegible]つた。

[illegible]は、[illegible]、口、唇、耳、腹、股、踵などに就いて居る[illegible]を、文章の[illegible]た。そし[illegible]、[illegible]、口、[illegible]言葉を、一つ一つ覺えて行つた。

が、さうした眼前の文字は、今思つても前後の文句は、彼等の[illegible]しいりで、一[illegible]に[illegible]なた。一句一章を、春の長き一日、考へあかしても、彼等として明らかならぬことが、度々であつた。門人[illegible]、一日[illegible]、考へぬいて、やつと解いたのは「眉トハ目ノ上ニ生ジタル毛ナリ」と云ふ一句だつたりした。門人は、さうしたなんでもない文句に歡喜しながらも、淚々嘆し合た眼の裡に、涙んで來たのを禁ぜずには居られなかつた。

「目から[illegible]下つて、鼻の所へ來たときに、門人は、鼻[illegible]はフルヘツヘンドせしものなり」と云ふ一句に、行き留つてしまつて了つた。

[illegible]、[illegible]全く解けはなかつた。たゞ、良澤が、長崎から持ち歸つた小冊子に、フルヘツヘンドの註釋があつた。それは、木の枝を斷ちたる跡、その跡フルヘツヘンドをなし、庭を掃除すれば、その塵土聚りて、フルヘツヘンドをなす」

と云ふ文句だつた。

四人は、その難語を、引き合はしても、容易には解しかねた。

「フルヘッヘンド！　フルヘッヘンド！」

四人は、折々その言葉を、口ずさみながら、巳の刻から申の刻まで考へぬいた。四人は目を見合せたまゝ、一語も交へずに考へぬいた。申の刻を過ぎた頃に、玄白が躍り上るやうにして、その膝頭を叩いた。

「解せ申した。解せ申した。方々、斯様で御座る。木の枝を断り申したる迹、癒え申せば堆くなるで御座らう。塵土聚れば、これも堆くなるで御座らう。されば、鼻は面中に在りて、堆起するものゆゑ御座れば、フルヘッヘンドは、堆しと云ふことに御座らうぞ」と云つた。

四人は、手を拍つて欣びあつた。玄白の眼には涙が光つた。彼の欣びは、連城の玉を、獲るよりも勝つて居た。

が、神経などゝ云ふ言葉に至つては、一月考へ続けても解らなかつた。

彼等は、最初難解の言葉に接するごとに、丸に十文字を引いて印とした。それを、轡十文字と呼んで居た。初一年の間、どの頁にもどの頁にも、轡十文字が、無數に散在した。

が、彼等の先驅者としての勇猛精進は、凡てを、征服せずには居なかつた。一ケ月六七回の定日を、怠りなく守つた甲斐はあつた。一年餘を過ぎた頃には、譯語の數も殖え、章句の脈絡も、明かに、書中の轡十文字は、漸く少くかき消されて居た。

先驅者としての苦闘は、やがて先驅者のみが知る欣びで酬はれて居た。章句の末が明になるに従つて、次第に蔗を噉むが如く、[illegible]未知の[illegible]、彼等の[illegible]た。

[illegible]以上に、彼等[illegible]を踏み入れ代へて、[illegible]の頭目には、見出す[illegible]に
て、彼の胸くそのむかつき来るほどになつて居た。

七

玄白は、彼が良沢に対して懐いて居た反感などは、もう跡形もなかつた。彼は良沢の為人とその学殖に、心から
推服して居た。

が、研究が進んで行くのに従つて、玄白はだん〳〵自分の志と、良沢のそれとが、離れて居るのに気が付いた。

玄白の志は、ターヘルアナトミアを、一日も早く翻訳して、治療の実用に立て、世の医家の発明の種にすることだつ
た。が、良沢は、心の裡に思つて居た。漢学が、日本へ伝来して大成するまでには、数代数十代の努力を要して居る。それと同
じように、蘭学の大成も、数代を要するに違ないと思つて居た。彼は、そうした一代に到達しがたい大業を志すよりも、
一事一芸に志を集めて、一代に成就することを期するに如かないと思つて居た。五色の糸の乱れしは、美しけれども、富
用ゐんとするには、先づ和蘭とかの一色に決し、他は時日の来つるに動かすと思つて居た。

従つて、彼はターヘルアナトミアの翻訳に、餘念もなかつた。彼は、一日会して、解し得たところは、家に帰つて、
草稿にした。

が、良沢の志は、遙に遠大だつた。彼の志は、蘭学の大成に在つた。ターヘルアナトミアの翻訳は、殆ど眼中になかつた。
彼は、和蘭語の悉くに、通暁し、彼の書籍何にても、読みたい大望を懐いて居た。

最初、一二年は、良沢と玄白との間に、何等意見の相違もなかつた。が、彼等の力が進むに従つて、二人はいつも同

じやうな口争ひを続けて居た。

「此の所の文意はよく解り申した。いざ先きへ進まうでは御座らぬか」

玄白は、常に先きを急いで居た。が、良沢は、悠揚として落着いて居た。

「いや。お待ちなされい。文意に通じても、語義が通じ申さぬ。凡そ、語義が通じ申さいで、文意のみが通ずるは、當推量と申すもので御座る。」

良沢は、頑として動かなかつた。

八

四年の月日は過ぎた。

玄白は、ターヘルアナトミアの稿を更へること、十二回に及んだ。が、篇中、未解の場所九ケ所、難解の場所十七ケ所あつた。玄白は、只管に上梓を急いだ。が、良沢は、未解難解の場所を、解するまではとて、上梓を肯んじなかつた。

良沢と玄白とは、それに就て幾度も論じ合つた。が、二人は如何に論じあつても、一致點を見出さなかつた。それは、二人の蘭学に対する態度の根本的な相違だつた。

玄白は、到頭自分一人の名前で、ターヘルアナトミアの翻譯たる解體新書を上梓する決心をした。が、道に於ては良沢の名を無視する譯には行かなかつた。翻譯の筆記こそ、玄白の手に依つて行はれたものゝ、翻譯の功は、半良沢に帰すべきものだつたから。

玄白は、良沢に対して序文を依頼した。が、良沢は序文をも、次ぎのやうに云つて断つた。

も、[illegible]、[illegible]いたし[illegible]、[illegible]いたし[illegible]に申して、[illegible]したこ[illegible][illegible]、[illegible]申したは、[illegible]の[illegible]を究めようとして、名[illegible]利益の為には、御[illegible]らぬゆえ、この[illegible]門の[illegible]する[illegible]まへと、階段に[illegible]り申した[illegible]。と[illegible]ひにも、[illegible]すゆえ、序文の[illegible]に、許させら[illegible]これを、[illegible]なかつた。[illegible]は自分の[illegible]を卑下する[illegible]は、少しもなかつた。彼は、良[illegible]の[illegible]な、[illegible]、これ[illegible]に、彼は[illegible]分の[illegible]を[illegible]には居らなかつた。

[illegible]た時[illegible]に、自分[illegible]を、次ぎのやうに主張した。

[illegible]は、[illegible]にして[illegible]ゆえ、可成りに[illegible]しても、人のはやく理會し、[illegible]するの益あるやう[illegible]す[illegible]、[illegible]れ[illegible]に、[illegible]も通じがたく、やむことなく[illegible]を[illegible]して、自ら[illegible]り。[illegible]中[illegible]ところも、解しがたきところは[illegible]、たゞ[illegible]したるところを、[illegible]けみ。[illegible]へば、[illegible]へ上らんと思ふには、東[illegible]東山[illegible]を知り、[illegible]くと行けば、終には[illegible]へ上り付[illegible]所[illegible]し。その[illegible]なりと思へば、その[illegible]を唱へ出せしなり。[illegible]めて[illegible]に[illegible]りては、たか[illegible]後の[illegible]やうなく、脈々たる[illegible]にて[illegible]は用[illegible]のなり。くれぐれも[illegible]に本づき、[illegible]の行くこ[illegible]なり。[illegible]四十二章[illegible]も、[illegible]く今の一[illegible]にてべり。[illegible]、[illegible]、その頃よりの[illegible]にして[illegible]したり。世に[illegible]くば、[illegible]道[illegible]くべからず。されど[illegible]の如き、[illegible]の人たければ、[illegible]かく[illegible]に[illegible]くべ[illegible]、[illegible]たる[illegible]――（[illegible]）―



或女の境涯

宇野浩二

一

到頭別れる日が來たのであつた。生憎の雨だね。これはやらずの雨と言ふのよ、だから、もう一日延ばすといゝわ。馬鹿！……などとお互ひに、殊に彼女はよく馴れた臆病な口調に時を過ごしながら、二人は仲々朝の寢床から起上らうとはしなかつた。時計は既に十時を廻つてゐるのであつた、そしてやがて十一時も過ぎたのであつた。男は流石に幾度も「おい、起きて顔を洗はうよ、みんなに極りが惡いもの！」と、その癖自分から床を離れさうな氣配はちつとも見せないで、口前だけで元氣よく女を促し立てた、すると女は女で、それには言葉で答へないで、この女の特徴の、唇のすぐ脇に顯はれ出來る微笑をニツと見せながら、男の顏をつねつたものである。男も女も、これが多分は最後の逢瀬である、といふ時には正念場であられねばならぬ代の覺悟あつても、さらさつぱりと別れられない樣子を、お互ひに意識して見せなければならないのであつた、それは大きに必要な事で、そして大きに無理な事であつたが、彼かに又

甘い捨て難いげにも[illegible]なかつた。二人は、髪が亂れて、額のまわりの白粉の剝げ落ちた、起きてゐる時には分らないが、寝て見ると鼻の兩脇から口へかけて見える深い皺の寄る女の顔と、青ざめた疲れた男の顔とは、互ひに騙されるものかと言つたやうな、用心深くて時々は敵意を含んで光る目を見交はしてゐた。

が、何といつても女の方が……お駒は心中に何とも言へぬ寂しさを感じてゐた。男はいよ／＼今日この岡山市を始めて永久に立去らうとするのであつた。半年の間、女の面倒を見てくれた彼が、彼女から離れて北海道に行く日だ。彼はこの町の縣廳に勤めてゐる若い理事官であつた。彼が北海道の方へ轉任の內命を受けたのはもう十日程前のことであつたが、それからといふものは、彼は毎晩彼女の家にやつて來て泊つて行つた。そして「もう十日でお別れだ、もう後九日だ、もう八日で……」と毎晩言つて行く日を數へながら、別れが辛いといふやうな意味の事をくり返し言つては、女を[illegible]に涙を出させたり、[illegible]を述べたりしたものであつた。別れてしまつたら、もう私のことなんか消えたやうに忘れてしまふんでせう、と女が言ふと、いや、これは男の方のいふことだよ、と男は[illegible]な言葉で言ひ返した、と女はついしんみりとなつて、いくら遠く離れても、時々は遊びに來て下さいね、また手紙をね、と言つて、ふとこゝは斯ういふ場合によく色々な男に言はれた言葉だつたと氣づくと、これを取消すやうにきつと男の手を強く握りしめて、あなたもいつ迄もこのまゝでゐては[illegible]ないから、早く[illegible]を[illegible]つて[illegible]をお[illegible]なさいよ、としをらしい口をきいたが、すると[illegible]んで、[illegible]へするのであつた。お、若い理事官にも[illegible]、用なくなつて、睡くなつたやうににぶく言ふだけで、うん、とか、あゝ、とか言ふ外に何とも返事をしなかつたけれど、その代りに、まあ　といふは[illegible]くこ[illegible]らぬ獣だらう！　惜気もなた顔をして、それが[illegible]てしまふまでも、そしてその燃え盡きる時はいつの事、何年後のことだらう？　と思はれる程、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○し、[illegible]今更のやうに[illegible]を、そつと上詰めることさへあつた。

お駒は、男との別れ際にいつも經驗するところの涙水臭い、ちぐはぐな氣持に襲はれながら、それでうつかり一寸でも油斷すると、泣き出すやうな氣持になるのであつた、どうしてだらう？ がそれはお駒にも分らなかつた。彼女はもう二十四歳になるのだつた、彼女の短くない藝者稼業の間に出來た何人かの男の中で、何もこの理事官が取立てゝ立派な男だと言ふのではなかつた、彼の社會上の地位や、學問などは色んな人を見て來てゐるお駒にとつてはさう大して有難いものと思はれる筈はないのであつた、たゞ、慾を言ふと、これ迄彼女が關係した男のうちで始めて、彼が獨身であるといふことが、何か、それは口で言ひ現はしたり、それどころか心の中でさう認めてしまふことさへ、隨分大人氣ない氣がすることであるが、それがやつぱり何か頼り他依りになりさうな氣がするのであつた。「うまく行くと奥さんにしてくれるかも知れない」ふとそんな事を考へ出しては、何を子供見たいな、と彼女はあわてゝ自分と自分に打消すのであつた、割合に頭のはつきりしてゐる彼女には、譯なく奥さんにしてくれたり、死ぬほど惚れてくれるやうに、男をも自分をも甘く見立てるのは、それは十八九の若い妓の考へることで、自分のやうな一人前の自前藝者がそんな事を考へるのは恥だと思つてゐたものでも、……それだのに、理事官も到頭自分を見捨てゝ離れて行くといふ事が、今更どうしてこんなに自分に寂しい氣を起させるのだらう？……

彼女が彼と出來たのは半年ほど前のことで、金離れも相當によし、それに彼女の母親や弟に對しても仲々よくしてくれるし、男振りだつて決して悪い方ではなかつたので、引續いて世話になつてゐるのであつたが、彼女自身より一層母親の方がすつかり彼に感心してしまつて、いつとなく彼は彼女の住居の方に來て泊つて行くやうな、傍から見ても一通り

深い關係になつてしまつたのであつた。彼女は東京の方でいふ看板借りといふやうなもので、名義は或檢番××家の藝妓ではあつたが、寝起きや何かは母や弟と一緒にゐる自分の家でしてゐたのであつた。弟といふのはまだ二十二歳ではあつたが、或株屋の店の番頭を勤めてゐる、仲々のしつかり者であつた。

「だめぢやない、もう十二時だよ。」と男は急に元氣を附けた聲で言つて、寝床から這ふやうにして起き上つたので、彼女もしぶ／＼蒲團の上に立膝で坐つて、一寸縞だの襞などを整へると、大儀さうに立つて、枕元から二三尺ばかり離れたところの、二間の窓の雨戸を半分ばかり繰り開けると、忽ち雨の日のにぶい光線が今迄の眞暗な中になだれ落ちるやうに這入つて來た。○○○、○○○○○○○○○、○○○○○、○○○○○○○○○○、○○……○○○○○○○……○！　○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○、○○○○○○○○○○○○○○。急に物うい秋の日の、力のない、濁つて行くやうな沈默の中に、やがて窓の外のわびしい雨の音さへだん／＼聞えなくなつて、それと共にお勝に親しい陰影のやうな氣分の中に失はれてしまつたのであつた。……

「まあ、俺はこれから二時頃迄つて來なくちやならない。」

「さう。」と彼女。「ぢや、もうこれ切りなの？」

「あゝ、まあ當分ね。」と男は妙に疲れたやうな笑ひ方をしながら足袋を穿いてゐたが、急にむつとしたらしい顔付になつて、「俺のも此度の商用なんだから、時間は十分ある。家の方はすつかり片附けて、荷物ももう送つてしまつてあるんだから、だから外の用事を早く片附けて、もう一遍ちよつと顔だけ見せに來るよ。私でもいゝだらう、それでかまはない？」

お勝は男のうしろから着物を着せかけてゐたが、急に父親しくなつて、しんみりした口調で言つたた、ほんとに体

なつたら北海道から會ひに來て頂戴ね？」が、直に、あゝ、何を言つてるのだ、と自分ながら馬鹿々々しくなつて

「そんなにまめ〳〵しなくてもいゝわよ。それやね、今こそ會ひに來るとか、忘れないとか言つてゝも、駄目、駄目、男の言ふことなんかちつとも當てにはなりやしないわ。彼地へ行つてしまつたら、私のことなんか直に忘れてしまつて……それ、そのうちに又いゝのが見付かるわね、」と言つて、男の脣を一寸つねつた。

「痛いよ。……俺の心持を、さあ、何と言つたらいゝかねえ。……決して君のことを忘れる筈はないよ、三十三にもなつて、これが最後の初戀なんだからなア、」と男が向ふ向いたまゝ、だから何でも出してゐるかも知れないやうな調子で、如何にも取つて付けた言葉を言ふのを聞くと、彼女は變に反感が起つて來て、何を、負けるもんかといふ氣がして來て、

「何たつてお前さんに決して惚れてはゐませんよ、といふところを見せないと、恥でもあり癪でもあると思へたので、ぐつと一つ唾をのみ込んで、急に言葉を調子で、

「ふゝ、小さいことを言つてる……」と言つて笑ひて、しかし歪んだやうな笑顏で笑つた。

たゞ、其場限りであつた。到頭何一つ約束らしい約束も取交はさず、また纏つたお金を置いて行つてくれもしないで、男はさつさと出て行つてしまつたのであつた、あのやうに堅さうな顏をして「立つ迄にもう一日ちよつと顏を見せにくるよ、」と言つたのを最後の言葉にして、出て行つてしまつたのであつた。それでもお腹には日が暮れるまでは、もしやとも角、可成り、的にして男の來るのを待つてゐたのであつたが……幾らかの手切金を持つて來てくれるかも知れない、あの几帳面な、心の底は深切で、年の若いのに似合はず察しのいゝあの男のことであるから、たとと考へたなら……

………

二

お睦はその晩も、七時過ぎてからは、いつもの通りにお座敷を二つ三つ勤めたが、徹頭徹尾不愉快で、気がふさいで。今に頭の中に穴でも開いたやうな心細さに攻められた、どうかするとお座敷を離れて、暗い廊下の欄干にでももたれて、一人ぼつちで、うんと泣いて見たいやうな気持になるのであつた。「惚れてゐたんぢやないのに、」と幾度も胸のうちで言つて見た、が、手切金位はしつかり取つてもよかつたのだ、どうせ別れてしまふんだから、もつと苛めてやつてもよかつたのに、どうして自分には人のやうに出来ないのだらう、と今にそんな事を考へて、胸の中が煮えくり返るやうな気にも攻められた。

やがて、一たん××家に帰つて、着換をしたり、白粉をざつと拭いたりして、お睦が母親たちの家に戻つて来たのはもうかれこれ一時過ぎであつたが、狭い茶の間には母親と兄の食客とがまだ寝ないで、何やら込み入つた話をしてゐるらしかつた、が、お睦はいつものやうに、その傍に来て、挨拶もしないで、直に二階に上らうとすると、「ちよいと、」と母親が呼止めたのであつた。

「まあおより、」と母親は妙に勿体らしい口調で、「今日の事の話だがね、就いてはお前にも一應相談しておきたいんだがね……」

「何を決めたんですか？　あの津山の方の話？」

「これがだね、お前、津山の方は、先方が何しろ上流のやかましい家だもんだから……」と母親はそこで一寸言ひにくさうに口ごもつてゐたが、「……斯ういふと、又お前の気に障るかも知れないが、まあ實を割つた話を言ふと、ね、何も小

人らずの仲だから、氣を悪くしちやいけないよ、打明けて言ふがね、先方はそれ、お前の病氣をやかましく言ふ[illegible]んだよ、早い話が、藝妓の弟には娘をやることは出來ない、なんてね。」

お駒はひやりとした氣持で弟の方を見た。金吉は柱にもたれたまゝ、相變らず水臭さうな、淋い顏をして[illegible]はゝて、つんとしてゐた。そこで、彼女は何とも言へぬ口惜しさにかッとなつて、堪えようとすると、次[illegible]の中がむッくしして來て涙が出さうになつたが、それを、子供の時分に三味線の師匠の顏色を覗つたのと同じ懸命さで、ぐッとこらえながら、「それで、ぢやあ、話は駄目になつたの？」となるべくつんと取澄まして、聞いて見た。

「うん、まあさう言つた風なんだがね、」と母親は娘の顏色をうかゞひうかゞひ、でも、まだどうにかそこの所は目鼻がつかない事もあるまいと思ふのさ。」

「ぢや、」とお駒はむッとした調子で、「私に相談といふのは？」

「別に相談と言ふ程ぢやないんだがね、」と母親も亦相手の調子に多少むッとした樣子で、「兎に角、何にしてもお前に話の成行を一通り打明けておかないと、後で、あの時さうと話してくれゝばよかつたのにとか、何も彼も秘密にして一家の大事なことをお前に知らせなかつたとか、色んな苦情を後でお前から聞くのが私や辛いしするから……」と厭にからんだやうな物の言ひ方をするのであつた。不斷はお人好しで通つてゐる母親にも、こんな意地の悪い物の言ひ方が出來るのか、それといふのも……と思ふと、お駒は尚更口惜しく、腹立たしくなつて來るのである。それは何も自分が[illegible]たつて母親や弟を助けたとは言へなくても、しかしあの死んだ以前の旦那に世話になつて居た時分には、隨分と[illegible]いだものである、その時分に母親だつて、しつかり者であつただけ、病弱な弟の金吉のことを、男の子はちつとも[illegible]にならない、妹にあの子は何といふ[illegible]ない子だらう、ほんとに私の[illegible]りにするのはお前だけだよ、といゝ[illegible]、

「お前、ほんとにお前がよくしてくれるので有難いよ、」とか何とか言つては、彼女はその度毎に目に涙を浮べてゐたものであつた。そして現在だつて、三十圓や四十圓の小遣錢は毎月必ず彼女は母親に渡してゐるのである、それだのに、今となつて、自分たちの都合次第で、忽ち、彼女が娼妓稼業をしてゐるのが一家の此上もない不倖の原因であるかのやうに、そしてさもさも彼女を厄介者であるかのやうに、はつきりとは言はないが、十分さういふ素振りを見せるのである。「そんな[illegible]理なものか?」とお駒は心の中で破れる程の激しさで叫んだ、すると、それが心の[illegible]次第に咽喉もとまでこみ上げて來るのだ、自分でもはつきりと感じられて、もう少しのところで言葉に現はして叫ばうとした時、

「私もまつたく困るんだよ、」と母親が急にしよげて出て「今吉は今吉で、津山のあの娘が貰へないと、と力が抜けるやうに言ふし、」とさもまつたく困り切つたやうに言ふのを聞くと、つい側にゐるお駒は無法な悲みと一緒に、鬱憤をおびき出された。さうした気がして、とすると、忽ちヒステリイ的にわッと破裂してしまつた、

「それぢや、私、今日[illegible]を出すわ。どうせ、私見たいな下品な女が、こんな上品な家にゐてからくら[illegible]ても、世間の人に輕蔑して、家の者さんに御迷惑をかけますからね。ええ、出しますとも、私見たいな者、明日からのたれ死したつて一掃はないんですから。どうせ私はさうなんですよ、この方が私の性に合つてるんですよ。誰も私のことなんか、一くれる人はないんだもの、みんなが死ねばいゝと思つてるんだ、みんなが……」そしてお駒は何もかもつたのだ、自分でも分らないやうな事を、お人好しの母親がなるべく聞けるやうな事を、それから遠くその場にならたくなく打突かつて行くやうな事を、夢中で喚いて、喚きながらおいおいと泣き出したのであつた。

すると、母親はその時にまた急に泣頭し出して、一生懸命に泣をなだめにかゝつてゐる。今吉はぷりぷりと手々しく立つて、次

お三味の音に聞入つて、わざと大きな溜息をつきながら、寝床の中にもぐり込んでしまつた。だが、[illegible]耳元に[illegible]を取られると取られるだけ、口惜しく止め度なく泣き入つた。終には本當に自分は世の中で獨りぼつちの哀れな[illegible]恐く薄情な男や女に取卷かれてゐるだけで、誰あつて親身に思つてくれるものは一人だつてないのだ。母親だつて、××家の叔母さんだつて、朋輩の雛妓だつて、そして現在自分の肉親の者だつてみな同じ事だ、自分から甘い汁を吸つたり、お金を儲けさせたり、さうだ、自分が灰になつてしまふまで、黒焦げになつて働いて働いて、そして黒焦げの灰になつてしまつたら、さあ、もうこれで用はないんだよ、と捨てられてしまふのだ、神様が笑つて見てゐる、誰がこちらを向かぬがいゝ、などと思ひ込んで、激しく止め度なく泣き入つたのであつた。

「そんなに、お前、そんなに、」と母親はおろ／＼してしまつて、「そんなに怒つてしまつちや、私がこの上困るぢやないか、ね、腹を立てないでおくれよ。私は何もそんな氣で言ひ出したんぢやなし、さ、それはよく分つてゐるよ、お前にして貰つたいろ／＼の事は、それや今でも有難いと思つてゐるのよ、また、これから先もお前をどの位たよりにしてゐるか分らないんだもの。金吉が、金吉があんな事を言ひ出したのが、まつたく惡いんだ、金吉、金吉つたら！」そこで、母親は次の間にあちら向きになつて寢た振をしてゐる金吉に言つて聞かせるやうに、「金吉！」と急に母親らしい聲になつて、「お前が惡いよ、お前だつて姉さんに世話になつたこれ迄の事を考へて見るがいゝ、今更[illegible]何のと不足がましいことは言へたもんぢやない、まあ、さうは言はないにしろ、さう取れるやうな事をね！ [illegible]者だつて此方が貰ふ方ぢやないか、先方で變な事を言ふのなら、此方は此方でさ、さうでございます、しかし、[illegible]何なのは致し方がありません……と、まあ、さう言はなくつてもさ、一寸は此方の佳いところも見せてやつてもいゝぢやないか？ 親身の姉弟や親子でゐて一つ鍋で育つたものが、今更他人にならうたつてなれないぢやないか、[illegible]で

ごた／＼しちや、結局お互が嫌な思をするだけつまらない話だよ。お前お前は」と彼女は言つてゐるうちに、段々金吉が昔の洟たらし小僧に思へて來て、自分が母親らしい氣が勝つて來たものと見えて、「お前はしつかり者だと世間で言はれるからつて、さう鼻を高くしちやあ、決していゝ事はないよ、それに自分の都合ばかり考へて、義理といふものを考へなかつたら、今日どうしたつて世間が渡れる筈はありやしない、ね、金吉！」

お駒はそれを聞いてゐるうちに、大分心がおさまつて來たが、然しやつぱりツンとしたまゝで、それに何となくすぐつたい氣もして來たので、いつの間にかこそ／＼と二階に上つてしまつた。階下では、今まで默つて居た金吉が、何か聞えて來て、また何やら、しかし穏かに母親と言ひ争つてゐる様子だつたが、それで彼女はホツとして蒲團の中に這入つた。

「ほんとに、薄情なものだ」と彼女は床に就いてからも獨りごとつぶやいてゐるのであつた、あてになる人とては一人もありやしない、」と嘆んで叫くやうに、口の中で呼んでゐると、その時[illegible]と痛い足音と、それからコップに水を汲んで持つて來てくれた、そして、ツンとしてゐるお駒の耳もとに口を寄せて、

「私からよく金吉には言ひ聞かせて置くからね。安心してお休み。何事も、家内が丸くおさまつて行くのが第一なのだから、」と金吉一人を悪者にしておいて、もう一度「お休み、」と言つて階下の方へ行つた。

「ふゝ、」とお駒は蒲團の中で思はず忍び笑ひをした、「阿母さん、機嫌を取つてゐるよ。」しかし、さう聞いた後から、ふつと、阿母さんも可哀さうに！　とおもふや　なんだか胸が迫つて、済まない、といふ氣も湧いて來てならなかつた。そして、

「あゝ、もう何にもくさ／＼する事は忘れてしまふに限る」と彼女はいゝ[illegible]すが／＼し[illegible]で眠らうとす[illegible]いてきつた。ふと、今日別れた[illegible]事官のことを思ひ出された、同[illegible]時分に[illegible]して[illegible]たのだつた、今頃は

もう京都あたりを走つてゐるかしら？　汽車に揺られて何を考へてゐるのだらう。若しや、あの人と結婚するつもりだ！　なアに、こんなだつて離れた今では更々ないんだもの。……ああ、ああ、煩さい、煩さい、何にも！　それでは寢よう、と彼女は目を閉ぢた。泣いた後の疲れが微に出て來たのであつた。そして、ぐつすり熟睡しかけた時、可笑しなものだ、やつぱり彼の事が考へ出されるのであつた。然しそれは父親の考へ方ではあつたが……つまり、十日ほど連日來て泊つてゐたものが、急に彼女を獨り寢に殘して行つたと云ふ、その激しい物足りなさ、物足りなさ、とでは言ひ足りない、では空腹の辛さ、——とでも言つたやうなものか？——あの十日の間に、あの男が今まで無意識のうちに現さなかつたところの、○○○○急に露骨な形をもつて現はし出したことであつた、○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○！　○○。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○！　○○○、○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○、○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、いつの間にか眠りにすつかり繋げられてしまつた。すると又々その人知れぬ惱ましさが彼女の身うちに燃え上つて來て、寢床は寂しい寂しい熱に包まれるのであつた、いくら寢返りをしても、寢返りをしても、眠られないのである。

「をかしい！」と彼女は呟かずには居られなかつた。靜かな夜。やがて二時。この種類の煩悶がこんなに彼女を激しく惱ましい幻影に誘つたことは、二十四歳のその日まで夢にもなかつたことであつた、それは色々な、思ひがけない行爲の元を作ると言ふことは、かねがね聞いてゐたことではあつたが、そして彼女はかねがねそんな事は正木の[illegible]で

はない[illegible]しもし、評判もしてゐることであるのに、さういふ[illegible]な心々も選ぶことなしと、何の[illegible]たしに、これほど[illegible]自分自身の身の上にふりかゝつて来ようとは……

三

それは[illegible]しい秋日和であつた。彼女はその前の[illegible]と[illegible]思ひもに[illegible]されて、[illegible]までも[illegible]なかつたのだつたが、いつの間にか眠れたやうになつて[illegible]して、それから未だ[illegible]時間が[illegible]ないと思つてゐるうちに、[illegible]は正午近くのことだつた。お座敷がかゝつたからと言つて、芸者屋の××家から、使の小女が知らせに来たのであつた。

「まあうるさい、何処からだらう、今時分?」と彼女は不承不承に起上つて、そこ〳〵に[illegible]を終ると、昨[illegible]の[illegible]で[illegible]とをかけ[illegible]にばつかりいたましたので、大急ぎで××家に向けて行つた。

「まあ、[illegible]さん、昨日に[illegible]い[illegible]れで御[illegible]さま!」と若い一人の芸妓が、彼女の顔を見ると、早[illegible]の[illegible]て言つた。

「ま[illegible]ないでせうに、さ[illegible]一人もそれ[illegible]はせて、しかし[illegible]なま[illegible]た。

それ[illegible]ないと、言つて[illegible]彼女たち自身だつて、[illegible]にからか[illegible]て[illegible]ないこと!――そんなにまともになつて[illegible]合つてゐるのは、ひどくつまらなくて、[illegible]大人気ないやうな気がされたので、彼女は[illegible]自分[illegible]に[illegible]んで行つて、[illegible]に[illegible]いて坐つた。心なしか、[illegible]つたところ、[illegible]にけ[illegible]た[illegible]の[illegible]目[illegible]を見ると、[illegible]た、[illegible]しいやうな気がしたが、その直後から久しく〳〵[illegible]つた[illegible]。

馬鹿な！　氣がどうかなつたのかしら？　屹度さうかも知れないわ！」が、そんな恐ろしい考へはなるべく一生懸命に頭の中から振り落さなければならなかつた。でないと、おちおちしてゐられなくなつて、苦しくて堪らなくなるのであつた。彼女はやけに白粉を濃く顔に塗りたくつて、その上を濡手拭でぴた〳〵と押へると、頬がひいやりとして、いくらかい〻氣持がするので、何遍も何遍も同じ事をくり返してゐた。後ろの方で朋輩の者たちが、今度の温習會に用る爲に入る費用に就いて、意見を戰はしてゐるのを聞くと、「もう何も煩さい事を聞くのは嫌、温習會なんか何にでも喰はれてしまへ！」と獨りで口の中で呟いたが、實際ぞつとする位、こんなものから離れてしまひたい氣がした。

睡眠の足りなかつたせゐか、連日の疲れの爲か、妙に物憂い日だつた。が、彼女は仕樣事なしにおこしらへをすませると、車に乘つて、掛けて來たお茶屋に急ぐ……、二十歳に足りないかと思はれる若い車夫は威勢よく走る、彼女はぼんやりと車夫の後姿を眺めながら、ふと目を下の方に落すと、彼の筋肉の張り切つた、黑々とした二本の足が、グル〳〵と調帶のやうに滑つて行く土の上を踏みしめ踏みしめ、激しくそしてゴム毬のやうに跳ね上るのである、それが又彼女の心を妙に引きつけて、いつの間にか例の幻想が彼女の頭に浮び上る、と直その次の瞬間に、「まあ、好かない！私はほんたうに氣がどうかなつたのか知ら、氣がどうか、ほんたうに？」と彼女は絶望的に心の中で叫んだ。

呼ばれた座敷は、丸屋といふ岡山では二流所の料理屋兼旅館で、お客といふのは、これ迄五六度呼ばれたことのある化粧品問屋の主人だつた、四十歳を少し過ぎたばかりの年配で、馬面の、その癖いつも變に青ざめた顔色をしてゐた。

「お一人？」と彼女は挨拶するなり、いつもの習慣で、可成り小癪な氣持になることが出來た。「お一人で、而も晝間から、どうなすつたの？」

「御挨拶だね。俺が晝遊びをする理由が聞きたいと仰しやるのかい？　ハハハハ、聞いてもらはうかね、」と客はもう餘

相場の方がお留守[illegible]らしく、やゝもすると、其は餘り好きでないらしい、その詳細分担いらしく、一[illegible]で[illegible]はたゞ、さうだね、俺の嫌といふのは、これが並でない[illegible]やきなんだ、それが突然ぢやないんだ、俺[illegible]来たら……

……」と[illegible]の[illegible]での理由として持ち出したところに依ると、その身體が丈夫で、精力が旺盛で、而も並でない[illegible]き[illegible]から、それと[illegible]れて言ふには、どうしても[illegible]でなければ駄目なので……といふやうなことからところで、[illegible]ることに、彼の家のやうな金持の出入の激しい商人の家の主人としては、それがどんなに[illegible]な[illegible]であるか、それにも拘はらず彼は、駒子の噂を見に、一度はこんな所にやつて来たんだ、俺の心を一寸は[illegible]くれ。それでも彼は今迄は[illegible]んだぜ、ところが、お[illegible]の[illegible]の役人は今度[illegible]の方へ行つたといふやうないい[illegible]は[illegible]ので[illegible]と、直に斯うして頼んで来たんだ。……おい、何とか[illegible]位してくれよ、」と[illegible]はつ[illegible]にでもあつたら[illegible]、[illegible]の化粧[illegible]は、[illegible]ながらも、些に用心深く、いざとなると、それを[illegible]てきふ[illegible]へることを決して忘れないのである。もつとも、[illegible]はもう一[illegible]前から、[illegible]れ[illegible]い[illegible]して、彼女は何度か[illegible]たことはあつたのだが、その度毎に手ひどく刎ねつけ[illegible]た[illegible]たさ、彼としては、もう[illegible]の女中[illegible]つもり[illegible]なくなつたらしく、そこへ丁度[illegible]にいゝ[illegible]、彼女の日[illegible]に入れてゐた[illegible]がこの土地[illegible]的に、[illegible]ずにわざ／＼この[illegible]た[illegible]んで、[illegible]は[illegible]、人[illegible]を[illegible]に入れないで、[illegible]つもりであるら[illegible]かつた。[illegible]して[illegible]ると、彼の[illegible][illegible]だと[illegible]、並でない[illegible]とこあるとかいふことは、ほんの[illegible]も[illegible]れないのである。

「[illegible]なるもんぢやありません、旦那、」と彼女は[illegible]いつた。「旦那、こんな事をしたら[illegible]になる[illegible]……それよりか[illegible]でも[illegible]ませう、」と彼女は一日に[illegible]てしまつたが、ふ[illegible]石に[illegible]

[illegible]の中に、[illegible]のも妙に心殘りがしたので、彼半分の言葉の調子に[illegible]した、そして[illegible]すぐ又その後から、こんな男、と思ふと、今迄にも自信していらくする理[illegible]がさした、さうなこと、[illegible]が來てゐないのさへ、何處までも意地惡く出來てゐる、と思ふと嬰に腹が立つて來て、自分ながらも[illegible]な人相になるのである。と、相手はその時、馬のやうに痩せた青白い四十面に、笑つてゐるのか泣いてゐるのか、一寸見當の付かないやうな引き吊つた表情を見せながら、實は彼女の顔色次第でもう少し口說くつもりであつたらしかつたが、今言つたやうな彼女の態度に、一たまりもなく意氣込をくじかれたやうに見えた、しかし別に怒つた樣子も見せないで、益々自分と自分の顔を韜晦して、冗談らしい笑顔を作らうと努めるのが、それが又彼女の心に十分に感じられるのであつた。ところが、さういふその場の氣分に彼は益々苛立つて、更に努めて笑はうとしたのだつたが、それが全然無駄に終つてしまつた、といふのは顔の筋肉が彼の意志に全然逆らつて、笑はうとして寄せた皺が、反對に段々醜惡な表情を形成して行つたものだつた、そしてそれと共に、彼の右の頰の中間にある小さな三日月型の傷痕が、先程から隨分酒を飮んだ癖に不斷よりも一層靑くなつた顔の中の、そこ一所が赤くほてつて、それに鋭い艶を加へて來たものである。そこで、彼女はもう手持ち無沙汰な上に、變に白けた對座に靜止してゐることさへ堪へられなくなつたので、その時三味線に力一杯撥を當てゝ、

「アヽ、コリヤ〳〵、」といきなり叫び出した。

「唄は止せよ、」と男はあわてゝ大仰に手附きで制して、それで一寸氣分を轉換して、「まア、一杯飮めよ、」と彼女に盃をさした、そして妙に興奮して震へる手で、彼は女に酌をしてやりながら、何を思ひ出したのか、急にこんなことを言つ

た[illegible]つたよ。お前に他の[illegible]してるんぢやないか？」

「[illegible]をです？ をかしな事を仰しやるのね。」と彼女は[illegible]といふ[illegible]もなくむつとしたらしく、明か[illegible]を[illegible]に、[illegible]の方にまで[illegible]なら聞えた、といふやうな[illegible]になつて、わざと[illegible]々しい[illegible]り[illegible]一[illegible]。[illegible]、それだけでも[illegible]、[illegible]なくて、何か[illegible]りつけてやりたいや[illegible]から[illegible][illegible]だ[illegible]、そこで、[illegible]今日はこんなに[illegible]いんだらう、[illegible]は？」と思つて、なるべく自分[illegible]を[illegible]よ[illegible]た。それから[illegible]くつ[illegible]お[illegible]み込んで、なるべく[illegible]にして、この間[illegible]の化粧品屋とあ[illegible]い[illegible]と比べて見たりした。でも、下品は下品な男だが、大して、人ないふ[illegible]のある男とは[illegible]ない、[illegible]これだら、——今日がまこれまでは[illegible]りなさ[illegible]たよ、などと彼女は腹の中で考へた。

「いや[illegible]してある。確に、」[illegible]はつゞけた。「これに[illegible]ない。あい、[illegible]なは、[illegible]んでもない[illegible]よ。[illegible]の[illegible]、[illegible]くしい！ おれはみんな彼奴[illegible]から[illegible]かつた[illegible]なんだ。彼奴、[illegible]に[illegible]した[illegible]たま[illegible]。[illegible]ま[illegible]に、あんた[illegible]ない事を言[illegible]らしやなつたんだ、よつ[illegible]へこ[illegible]と思[illegible]だ[illegible]化[illegible]に[illegible]して[illegible]て、[illegible]になつて来た、[illegible]といふのに、[illegible]も[illegible]、この[illegible]の一人だつ[illegible]、[illegible]はつゞけた、「俺[illegible]へ行つて、いつ何[illegible]して[illegible]つてもいゝ、[illegible]なかおに[illegible]つたことはないんだ。[illegible]あの[illegible]を見たつて分るぢやないか、ねえ、俺にそんな[illegible]まつたた[illegible]い[illegible]の[illegible]にこれ[illegible]し[illegible]やないか、ね、さうぢやないか？」と彼は[illegible]の話と違つて、この間によ[illegible]なると、[illegible]になつて来た、「あ[illegible]の[illegible]にこんな事を言つてるんだらうね、[illegible]に[illegible]から[illegible]い[illegible]んだ、[illegible]つて、ね、お前も[illegible]、[illegible]、[illegible]

んだ、騎の字？」

「いゝえ、」と成程ぼんやりと何か外の考へ事をしてゐたらしいお守は、取つて付けたやうな言ひ方で言つた。「私、何にもそんな事聞かないわ。第一、煙草屋さんには、お目にかゝつたことは、ほんの一度か二度きりよ。」

「嘘つけ！」とこの話になると、化粧品屋は馬鹿に愚痴がよくなるのだつた。「何もお前が言ひ觸らしたと言つてゐやしやないんだから、隱すことはないぢやないか？　確にお前も聞いたに違ひないんだ。だから俺が斯う一度ならず言ふんだらう。俺が青島で商賣をしてるうちに、獨逸女の淫賣からひどい病氣を受けたなんて、あの[illegible]いま〱しい煙草屋の奴は言ひ歩いてるさうだ、つまり俺がその病氣を受けたのに、十五萬圓商品で儲けた代りの税金だとさ。へん、俺だつて高が十五萬や二十萬の金を儲けるのに、そんなひどい、汚い病氣まで貰つておたまりこぼしがあるもんか？　俺の腕はな、あんな煙草屋だの、青二歳の縣廳の役人なんかの細腕なんかとは、少々出來が違ふんだよ、出來がな！　ハハハ、ハハ、」とそこで彼は始めてお客らしい、高々とした四十男の笑を笑つたのであつた。

お駒は客のべら〱と頻りに勢込んで喋つてゐることを、一向興味がなささうに聞流してゐたが、それがふと自分の昨日までの旦那であつた若い理事官の話口になると、急に聞きとがめて、十七八の娘か何かのやうに、かつとなつて耳もと迄ぽつと熱して來るのが感じられた。昨日、たつた昨日の朝自分から離れて行つた男、今頃はまだ歸の汽車の中にゐる筈の男——それがあの怜悧な、學問のある、鼻の下に濃い、短く刈り込んだ髭を生やした、とてもこの馬面の化粧品屋の親爺などとは比較にならぬ程の、品のいゝ理事官だつたのだと思ふと、彼女は取返しの付かない不運にめぐり合つたやうに後悔されるのである、どういふ譯だらう？　やつぱり少し惚れてゐたんだ、とその昨日の車中で呟いた程、今更惜しいやうな氣がするのであつた。

「○、○○、○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○、○○

「○○！」○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○。

そう[illegible]、[illegible]、彼女は[illegible]力には[illegible]よ[illegible]された[illegible]であつた。

「何をなさるんです？」と彼女は低い、しかし[illegible]力のある[illegible]で叫んだ。

「いゝんだよ、[illegible]中によく[illegible]してあるんだからさ。[illegible]からお前[illegible]は[illegible]ですよ。」と[illegible]しく、抑えたやうな[illegible]

彼は[illegible]て、一[illegible]力の手をゆるめようとはしなかつた。が、[illegible]に彼女はそれを[illegible]除けるやうにして、力一[illegible]、そしてすて[illegible]かた[illegible]度[illegible]抵抗を試みた。と、[illegible]に、力のない、[illegible]だつたと見えて、[illegible]きめの[illegible]い手の[illegible]た、[illegible]やうな手は、[illegible]なく[illegible]除けることが出来た。

「[illegible]い、[illegible]にならない！」と[illegible]はそこできつとした[illegible]して、さうする[illegible]やうに[illegible]に[illegible]はつきりいつて立上つた。

「[illegible]、お[illegible]ないやうな！」と男はすると、その時急に[illegible]をあつためつた、[illegible]い[illegible]、[illegible]のやうな[illegible]をつ[illegible]けて[illegible]えた上に、[illegible]い[illegible]がぴく[illegible]くと[illegible]えて[illegible]た、そして、[illegible]さうに[illegible]に手を[illegible]て「[illegible]すつかり[illegible]めてしまつた！」と[illegible]な[illegible]に[illegible]つて、[illegible]しく[illegible]を[illegible]つたら[illegible]

る。

やがてお駒は仲居を蔭に呼んで、無理矢理に拝み倒した上で、松鶴を代りに呼んでもらふことにして、やつと得心してもらふことにした。そこで、彼女は何とか彼とか、そこの所は職業的な手段でいゝ具合に取繕つて、化粧品屋にさよならを告げると、その時は何だか無暗に酒を飲んだり、立てつゞけに煙草を吹かしたりしてゐた彼は、

「今日は少しふざけ過ぎたね。勘忍してくれ。酒を飲むと、俺はつい書生見たいに暴れたくなる癖があつてね、近頃は殊にひどいんだ。どうも、あんまり可笑しいから、一遍醫者に見せようと思つてるんだがね、つい、厭なものだからそのまゝになつてゐるんだ。氣にしないでくれよ、ね、ハハハハハ、おや、左様なら、ハハハハハ。あツ、さうさう、今度店に本物の赤函香水が來たよ、何ならこの次持つて來てもいゝよ、使つて御覧。左様なら。色男が待つてるんだらう、早く行つておやり、ハハハハハ、左様なら、」と、その醉顏色になつた顏はちつとも笑つてゐないらしく、何だか、ブリキの上を爪で掻くやうな音を立てゝ、聲ばかりが笑つてゐるやうに聞えたものである。

四

その日一日、お駒はともすると、例の妙な興奮に襲はれるのであつた。殊に夜更けて、一人自分の家に歸つて來て、寢床に就いてからは一層それが激しくなつて來るのを感じた。ふと、あの晝間の化粧品屋の暴力が、その荒々しい手の跡が、まだ自分の二の腕のどこかに殘つてゐるやうな氣がするかと思ふと、ふと又あの若い理事官の匂が、今現在自分がその上に寢てゐるところの、馴れた蒲團の隅々に殘つてゐるやうな感じもするのであつた。そして寢苦しさは前の晩と少しも變らなかつた。ふと、あの化粧品屋に見せられたものの印象が目の底から、沈んでゐたものが浮び上つて來る

やうに、〇〇〇を彼女の思つてゐる目の前に現はれるのであつた、はツと思ふと、その鮮かな印象が、次の瞬間にはぼーつと薄れて行つて、消えかゝらうとするので、何といふ馬鹿らしいことだ！　彼女は慌てゝそれを追つ駆けるやうにして、再びその面影を呼び戻して見たりするのであつた、さうしては彼女は暗い闇の中で眉を八の字にして、眼を細めした彼女ら自分の作れる如く呟くやうに、唇はす口の中でしツと呼びながらも、結局若い理事官と、化粧品屋と、彼等、とそれ等の男が交る交る進み出して来て、ひよつとしたら何かその中に掴み得る本物があるかも知れないやうな気がするところへ、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。「〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇！」と男は彼女は手口を一つくれないで、こんな莫迦た噂だけをつけてくれて、誰も素知らぬ顔をしながら離れて行つた、若い理事官を恨みさへするのであつた。

五

その日の晩も、この通りであつた。……

そして、この遊戯——もう、そんな事になりはしないか、と、それは何だか一寸情ない可哀想してゐた、楽しいさてもあるやうな、夢に似通つたやうな心持のするものであつた。特別呼ばれた客は広間に集まつてゐたので、彼女はついぼんやりした時になつて、いつになく酒を勧められるまゝに可なり飲んだ。ところが、その夜はお座敷にかまけるとはて、これから料理屋で、客は何時もの人が、まだ二十歳になるかならぬかの青年であつた、が、それも決して見たのよいといふ方ではなかつた、彼女は一分間は、と嘆かはしい人目に頭を下げて、ちらと見た時は、何といふ事もなく、ひどく失望したやうだつた、まことにいい顔が淡黒くて、目が普通よりも小さかつた、たゞ頭の髪が眼に立つて、

壁の帽子掛に角帽が掛つてゐるのを見るうちに、無論その客が學生であることは分つたので、

「學校はどちら?」と彼女は聞いて見た。

「東京のK――大學だよ、」と青年は顔に似げなく新派芝居の二枚目役者のやうな聲で答へた、「一寸作州の奥へ、母の故郷なんだがね、今歸つて行く途中だよ。そしてこの旅館に泊つたんだが、あんまり退屈なもんだから、藝妓を呼んでくれッと言つた譯でね。」

「今頃休暇ですの?」

「いゝや、一寸親父から金を取出す計畫で、此方で勝手に休暇にしたのさ、」と青年はさも大人らしい口振で答へて、頻りに西洋煙草を吹かしてゐたが、氣が付くとすつてゐるのではなく吞み込んでは煙たさうに吹き出してゐるのだつた。酒も行けないらしく、形ばかりに置かれたお銚子が、いつ迄經つても空かなかつた。變にハイカラな、氣障な青年で時々洩らす彼の話に依ると、何でも一寸した裕福な百姓の息子に違ひなかつた、が、口で言ふ程の放蕩書生でない證據に、もつとも年も年だが、言ふ事が女共には全く興味のない話題にばかり限られてゐるのであつた。そこで、彼女はほんの氣まぐれから、一寸眞面目な事が言つて見たくなつて、

「あなた、まだそんなにお若いのに、それや稀にはよござんすけれど、無茶な遊びはなさるもんぢやありませんよ。それやね、お家が立派で、御不自由はない御身分でせう、いくらお使ひになつたつて、そんな事は何でもないでせうけれど、勉強盛りに女狂ひした人は誰でも後悔すると言ひますよ、まつたくさうでせうね、よくお客さんに聞きますよ。あなたは女狂ひ……? そんな馬鹿な事はしないつもりでもね、女の方は全く夢中になりますからね、あなたのやうな方

に[illegible]ると……」と言つて、こゝでホホホホと笑ふのと笑はないのとでは[illegible]子が大分違ふものだが、この時も、何故なら彼女は[illegible]が來つて、相手が待てゝおいて、つゞけて言ふには、「ところが、女も女でしてね、」と彼女は、[illegible]作、お客に好をおたせてゐるらしいのに氣がつくと、だんゝ調子づいて來て、すると話の筋道も何もあつたものでない、なくなつて、全く口から出任せに、[illegible]行きばつたりに、女だつて、男に負けないほど薄情なものですよ。些少なからず、[illegible]目的なんですから。……それで、あなた、若い妓に惚れますよ、が、惚れたつて、一つ所にぢつとしてゐるやうな惚れ方はしないんですからね、お客が[illegible]るたびに何んなお客に惚れ直してるんですよ。どうしても二十[illegible]ぎた女でなくちや、ほんたうの惚れ方は出來ませんよ。まあ、まあ、しかし、何にしてもお客ですよ、何の為に、商賣をしてゐるかと言ふと、お客の為なんですからね。惚れるのは惚れるで、此方でいゝやうたのを探しますよ。しかしお客さんには、これはまあ、惚れるかもしれないもありません、惚れちや商賣になりませんからね、だから、惚れるのはお客に惚れるより外にありませんよ。……」おやゝ！と彼女は自分のお喋りが餘り脱線し過ぎてしまつて、これでは客をもてなしてゐるどころか、[illegible]もし知れない仕打になつてしまつた、と氣がつくと、何り自分の苛々してゐる心持の自分と自分で[illegible]々しくなつて、そのお喋りつゞけるのが、變に[illegible]くなつて來たので、口を噤んでしまつた。

すると、[illegible]したものであるもので、青年の方はそれに氣[illegible]くするどころか、

「いや、僕には面白い、實に面白い、」と[illegible]爪らしい顔になつて、[illegible]をしてやるのである。「君の言ふ事はよく分つたよ。[illegible]は[illegible]た人だ、僕のやうな[illegible]な人は[illegible]妓には惜しい程だ。いや、身に沁みて有難いと思ふよ、よく忠告して[illegible]れた、」と言つて、青年は[illegible]さうに首を傾けるのであつた。

[illegible]

「[illegible]

の字にして、「女といふものに、藝妓に限らず、みんな同じなものだ、[illegible]寂しく[illegible]に一人もな

な。僕に君の忠告がよく胸に思ひ當るんだ。……」

「飛んだ御馳走様ね、」と彼女は混ぜ返して言つた。

「いや、さうぢやないんだ。……だがね、駒ちやん、」と青年はいつの間に彼女の名前を覺えたのか、さういふ風な呼び方で呼んで、「君だけは屹度さういふ薄情者ぢやないだらう、ね。」

「私？ さあ、どうですかね。どうせ海千山千の口ですから……」と彼女は素氣なく言ひ放した。

「いや、そんな事はあるまい、」と青年は益々その眞面目さを發揮して、「心の優しさといふものは、屹度その顏に表はれるもんだよ、僕にはよく分る、僕は全く君見たいな理想的な美人は知らなかつた。あゝ、僕は今夜岡山に泊つた事を後悔しないで濟むよ、それどころか、生れてこんな幸福な晩に會つたことがない、神様が君見たいなよい女性を引合はす爲に、僕をこゝに泊らせてくれたんだ。」

「まあ、大變なことになりましたこと！」と彼女は仕方なしに笑顔を作つた。

だが、その時分から又彼女は、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、すると、もう所謂商賣をしてゐる女なら、自分も何處のやうに、何奴(やつこ)のやうに、或ひは何那のやうに、相手かまはず我慢をしてやらうか知ら？ その場その場でいゝ事をして、ちつとも後悔もせず又苦にもせずに、さうしてよく忘れて[illegible]貯るやうな商賣の仕方を、それは決してさう惡い事ではないかも知れない、お安くはないからしてやらうか知ら？ なども思ふのであつた。彼女は青年からさゝれた盃を一息に乾して、そしてもう一杯！ そしてもう何でもかまふもんか、と心

たゞ笑出した。

「君は本當に僕の氣に入つた、好きだ、本當に好きだ！」とすると青年は時々溜息するやうに言ひつゞけるのであつた、僕、どう言つたら、現在自分が彼女に對して抱いてゐる、この渾身のうづ／＼するやうな思慕の情を、完全に相手に傳へることが出來るか知ら？　と肝膽をくだいてゐるらしく、傍にゐたあばた面の、牝牛のやうに太つた仲居までがこれを[illegible]か、時々お[illegible]の方をそつとかへり見て、嘲笑ふやうな目付をした位であつた。

その時、[illegible]眼鏡をかけて[illegible]つてあつた、青年の友達がやつて來たのであつた、この男は青年の中學時代の同窓とふで、目下は[illegible]山の父親の家で[illegible]をやつてゐるといふことであつた。

「やあ、[illegible]君、よく知つてたね、偶然だね、今日着いたのか？　なに、明日は[illegible]山の方へ出發するんだつて？　まあ、さう言はないで、どうだい、もう二三日遊んで行つたら？」

「いや、さうゆつくりしてゐられないんだ」と[illegible]と呼ばれた髭の青年は急に大人らしい口振りになつて、「實はすぐに、僕の[illegible]、[illegible]たいた[illegible]、もう[illegible]ち出して來てね、やいやい言つて來るんだ。が、僕は考へたんだよ、父の言ふ事も聞いて置かないと、金をもらふ都合もあるからね」と彼はそれを[illegible]にはなかつたのを、[illegible]かつたところはないが、さういふ事を平気で言つて聞かせるやうに、締めたのであつた、それで、[illegible]、[illegible]の、つまり、[illegible]上品ぶつたひをするやうな、[illegible]……」

「いよー！　愉快、うまくやつたな」と女の[illegible]は仲なで呼んだ、そして、「しかし、早いね、僕の[illegible]つてことを、[illegible]く／＼[illegible]してゐるんだな、[illegible]、物だぜ。どうだいなア？　さうなると、[illegible]なんてとても出來ないで。

[illegible]

デリケートな問題だね……」

「さア、旦那、そんな理に落ちた話はお止しなさいな。」と申しなさせう、とここで彼女は口を挟んだ。

「有難う、」と友達は始めて白っぽい顔を彼女の方へ向けて、もつとも先から流し目でちよいちよいとは見てゐたが、そして彼女の酌を受けた。その時、改めて、彼女は客の顔を見ると、白つぽい顔で、鼻がたかくて、一寸した男振りではあるが、頭が横に廣い上に、髮を際立つた角刈にしてゐるので、ひどく顔が四角張つて見えるのである。

「よくまあ、こんなに丸い顔と四角な顔とが並んでそろつたもんだ、」とふと心の中で斯ふ思ふと、彼女は一時にその事が可笑しくなつて來た、おまけに丸い方が卑くて、角い方が色白なのさへ、ひどく一層加はいて見えるので、ぷつと彼女は思はず吹き出してしまつたのを、それをごまかしながら、しかしそれで酌をしてゐる手が動いたものだから、酒が思はず友達の方の膝の上にこぼれた。

「御免なさい、御……フフフフ、」とまだ笑ひが止まらないのである。

「ハハハハ。色男が來たものだから、嬉しくなつたんだな、」としかし丸い顔は、友達の男の言ふ調子が可笑しいので、それで彼女が笑つたんだらうと取つて、白分ぢやない、と安心して、斯う大樣に言つたのである。が、四角な顔は、相手の言葉をそのまゝにとつて、ちよつと赤くなりながら、

「君は何ていふの?……どこかで、確に見たやうに思ふが……?」とすつかり自惚れてしまつて、こんな事を言ひながら、それから又加山の方に向き直つて、君、細君を貰ふのなら、本當に慎重な態度でやり給へ、一生のことだからな、」

と鹿爪らしく言つた。

「なに、」と加山は言つた、「細君はつまり飾り物さ。僕は早速承諾して結婚するつもりだよ。そしたら、親父から金が取

りやすくなるからね。僕はその金でうんと遊んでやるつもりだ。何といつても女は芸妓に限るよ。」
「あゝ、さういふ計画で結婚するのか、そいつは面白い、賛成々々。やり給へ、痛快だ！」
四角は加山より一二三歳年上らしく、如何にも兄ぶつた調子でいふのであつた、そして、彼は大分酒はいける口と見えて、つゞけ様に飲み出したが、
「さあ、大いにぱらつこ、」と彼女の方を向いて「一寸、一つ意気なところが聞きたいな。」
「さう〳〵、さうぞ、忘れてゐた所を、」と彼女はほつとして、大分晴れやかな顔色に戻つてわざと威勢よく三味線を取り上げたが、やつぱり気が乗らないせいか、一の糸のさわりが仲々思ふように行かなかつたり、ねじが戻つたりして、調子が合ふことも出来ないのだつた。
「つまり調子がおかしいいゝさ。」と四角は何事も心得たもので、調子を一つになどと纏まつた物言ひをしたので、彼女がやつと調子を直しては、「[illegible]」を入れてとて、新内の唄はよにうたはないで、どうも彼の唄には、時候外れの始めたものだが、四角の目視には合はないと見え、困る、といふやうな顔から、井三曲あるとか、一つの歌謡に次の文句を引くとか、といふ所は、お花で、先代の何とかいふ師匠は何から斯間に巧かつたとか、「俗曲」は芝居のもので、道具にはないとか、さんたのはかりなゝと云つた後で、さこうた咄出したのは、これにも拘らず、馬鹿にしてゐると感心する様な打もない程、四角は彼女に自分の芸を引出して、下を向いてしまつて、いや、あなたはうまいので笑つたのかもしれない、と言付けたして言ふことにさへ、惚れ〴〵と聞き入れた様の、野趣なものなのだ。
「さうしよう」ではないかと言つてその時丸の加山が、自分が明らかに酒も飲めず、唄もうたへないので疎外されてゐるのを不快に感じたらしく、突然不興らしい調子で言つた、と、四角の方も素直に唄を撤回して立上つたので、お蝶、

出來ないら、こんなことを[illegible]立つて議論する[illegible]に立
上つた。「ねえ、静ちやん、ブラジルで珈琲でも飲まう、[illegible]た。

そして三人で外へ出たのであつた。暗い町の中を、[illegible]中にして、[illegible]人[illegible]に並べて歩いた。ふと、彼女は加山の手が一生懸命に、さり氣ない様をする事に於いても一生懸命に、彼女の左手に[illegible]ようとするのを感じた、と又、別の方には、更に陰鬱な、捩ねつけられることを豫想してびく／＼してゐる男の手を感じたものである。それは[illegible]四角た[illegible]の持主の手であつた。

「ほんたは君の家の娘だつたね。あの女も近頃は見かはす程よくなつたね、あんな女でも[illegible]娘らしく見えて來るんだから、色町の水といふものは不思議なもんさ、と四角は、手なんか知らないよ、手は手で自然のまゝに任せて振つてゐるんだもの、と言つた顔をして白々しい話をしかけるのであつた。「よく物になつたものだね、あんな娘が。ところで、要奴は近いうちに引かされるつて言ふぢやないか、例の御用商の何々亭のお客がレコなんだらう？」

四角が饒舌なのに反して、丸い加山は默々として歩いてゐたが、その代り勇氣は遙に彼の方にあつた、といふのに、急に彼の手が大膽になつて、彼女の左手をきゆつと握つたものであつた。好かない！と吐き出すやうに叫びながら、先程から實は四角の話などを上の空に聞き流して、變なことを空想に描き出しながら歩いてゐた彼女は、衝動的にその握られた手を、而も非常に強く握りかへしたものである、丁度その時、三人はカフェー・ブラジルの入口にさしかゝつたのであつた。

それから、居心地の悪い、堅い椅子に腰かけながら、東京では、カフェーの珈琲がうまいとか、こゝの珈琲は割合に飲めるねとか、去年の冬こゝの前で六尚の學生と土地の若い者たちが喧嘩をしたとか、つまらない話を聞きながら、

彼女は餘り好きでもない珈琲をちびり〳〵と飲んでゐるうちに、相與欠伸をしてしまつた。その時、急に加山が、言つた。

「それぢや、栗栖君、」と彼が言ふには、「どうも仕方がない、わざ〳〵呼び寄せたんだから、御馳走もしないで失敬した。もう十一時過ぎだ。君は、車の疲れで眠くなつたから宿に歸らうと思ふ。なに、もう二三日したら引返して來て、その時には大いにゆつくりするつもりだから……」

「いや、こちらこそ失敬した。」と栗栖は、小声でつぶやいたやうに言つた。「ついこの美人と話し込んでしまつて、一別以來の話も、しなかつたね。だがまあ、西國へ行つて來給へな。今度は僕がいゝ所へ案内するよ、」と栗栖は、こゝで二人と別れてゆく

[illegible]、ひどく氣がたつたもし、[illegible]感じるのであつた。それをなるべくあつさりした[illegible]で隱しながら、[illegible]

「[illegible]それを取切つてゐるとは知らずに、[illegible]ふのであつた。それに、僕は僕で[illegible]ふしてにゐられないんだ。だから少し急いでね、早くしなくちやならないんだ。それぢや、さよなら、」そして彼は先に立つてそのカフエーを出かけた。後の二人もつゞいて出たのである。

「さあ、今度は僕たち二人でこれからまた時間があるから、しつかり[illegible]み給へ、」と此度栗栖はその[illegible]

[illegible]いゝ[illegible]の上へ[illegible]た時、[illegible]つた、そして、[illegible]ん。もう二三日したら[illegible]呼ぶ[illegible]、[illegible]した

[illegible]もよく[illegible]もない？ と言つても、[illegible]れたでせうやないんだよ。……

「さあ、いゝぢやありませんか？ 宿[illegible]まで、もう一度お[illegible]き、ひなさいな、」と彼女は何といふ[illegible]もなく、[illegible]と二人きりになつて[illegible]不安な氣がしたのと、無論半分はお[illegible]のつもりで、[illegible]ふと、栗栖は又もや一寸照れこの[illegible]話するらしい氣配を見せたので、

「いや、上田山まで送つて、そんなに[illegible]するものぢやないよ、[illegible]ちやん。栗栖は[illegible]と[illegible]つて忙しい[illegible]して

さうだ、去年[illegible]同時に、「僕は仲々忙しいんだ、それに母[illegible]家にゐるから、出きないんだ[illegible]よ。」

「お母さんによろしく、」と加山も冷淡に言つた、「大事にしたまへ、ぢや、失敬。」

そして、ばかに他所目にはすご〱した恰好で、要柄は彼女を見せて歸つて行つたのであつた、一二度それを戸口[illegible]送つて見たお駒は、もう一度自分が引止めてやつたら、喜んで踵を返して來るんだらうが、と思つて、ひどく可哀さうな氣になつた。

そして彼女は、この一緒に歩いてゐる、丸い顔の加山でもない、無論郷里に殘して來た三味線などぢやない、何だらう？　彼女は何かに、それは決して彼女の喜んで期待してゐるものや、愛するものや、さういふ何ものでもない、即ち彼女の最も厭なものかも知れない何かに、引張られるやうに、暗い町の道を、行きの時とは違つて、加山青年から可成り離れた距離で、少し後れて默々として從いて行つた、そして再び宿屋の門をくゞり、玄關を上つた、そこから二つばかり冷たい廊下を曲つて、突當つたところに彼の部屋があつた、そこに寝床が敷いてあつた。そして唯そこには黄色つぽい、沙漠のまん中に放り出されたやうな、その沙をすくひ上げても、上げてもそれは味のある砂糖にはならないところの、茫漠とした感じがあつただけだつた。これが彼女に、この二三日の[illegible]な、悩ましい歸省の終局に來た結果であつたのだつた。何といふことをしたのだ？　が、彼女にはそれが何の後悔でも何の喜びでもなかつたのであつた。

「もう僕は故郷へ歸つても、」と青年加山はその後で呻るやうに言つて、果はしく〱と泣き出したものである、「結婚はしない、誰とも結婚しない。僕はもう、どうしても君を愛さないではいられないんだ。……」

お、お母さんはにつこり／＼と氣味の惡い笑ひ方をしながら、

「明後日は見合ひをするといふんぢやありませんか？」と吐き捨てるやうに言つた。「見合ひをして御覧なさい。奇麗なお嫁さんを見たら、お前の氣が變りますからさ……」

間もなく迎へが來て、歸る俥の上で、彼女は秋も大分深くなつた夜風がすい／＼と頬に當るのを感じると、それが何とも云へないいい氣持で、「一つ發見して來てやつたぞ！」と心の中で呟いた。いくら諦めても諦め足りない彼の上に、一寸した爆彈を仕掛けてやつたやうな氣がして、少しは胸のつかへがすくやうな氣もした。そして少してもくす／＼と獨りでにたにたいやうな笑ひがこみ上げて來るのであつた。が、家にかへつて、いつもの一人の自分の部屋で寢床に就くと、やつぱり少しも慰められないいまはしい氣持が、又々頭をもたげて來るのを感じた彼女は、[illegible]かし十分[illegible]してゐないで、間もなく[illegible]のに落ちてしまつた。

……、、、、。。。。○○○○○○○○、○○○○○○、○○○○○○○○○○。

六

それから二三日經つて、だん／＼と彼女は新聞の、ある[illegible]に氣がついた。お母さんが、その時のことも、何にも知らずに[illegible]したことを知つて、新しいやうな、又[illegible]したいやうな氣がした。そしてそれは[illegible]から解放されたことのやうに、[illegible]にではあるが、[illegible]とそ思つて、[illegible]のでいく／＼したものであつた。その時、[illegible]ぼんやりしてゐたのであつた。

外の[illegible]たち、この家の若い四五人の抱へ女にお茶、忙しいそうにして[illegible]だつたので、彼女がぼんやりして煙草をすつてゐると、ここの彼女に宛てた手紙を女中代りの小娘が持つて來たので、ふと別な方面の事件のことが頭に浮んだが、ある男から彼女の方へくれるやうだと氣がついて、[illegible]用人を、[illegible]ると、それは[illegible]といふ仲間の丸顔の青年からだつた、どうせ碌な事に書いてある筈もないと思つたが、彼女は[illegible]なまゝに、丁寧に封をびりびりと破つて讀んで見た。この男と、自分のやうな内部[illegible]者が、思ひがけなく犬のや[illegible]な[illegible]を結んだ事を、この手紙で又思ひ浮かんで來て、始めのうちは、讀みながら[illegible]胸がくさくさして仕方がなかつた。手紙の文句の中には、[illegible]始め半分は變に理屈つぽい、むつかしい事が書いてあるので、飛ばし飛ばし讀んだが、要に角、戀しいとか、そして戀しい駒ちやんと添ひたい爲に、折角の縁談を斷つて[illegible]ねつけてしまつた、見合ひしたところに依ると、先方はそれは可愛い、奇麗な娘だつたけれど……などと云ふ意味だけは通じた。

「うまく、こんな事が言へたものだ！」と、しかし、彼女はいつの間にか興味を持つて讀みつづけた。

……そこで、両親と僕との間に新舊思想の衝突が始まりました。駒ちやんよ、作州のこんな山奥の淋しい淋しい片田舎にも、新舊思想の衝突といふ悲劇の幕が演じられたのでした。僕はどんな悲しい思ひをしてでも、一たび駒ちやんのことに思ひ至ると、負けてはゐられない氣がします。何しろ今度の見合ひをした娘といふのは親類つづきの家の子で、その又仲人といふのがお互の家の親類の人だつたものですから、僕としても義理に挾まつて大變斷りにくいのです。それで阿父さんも阿母さんも泣いて僕に怒るのです。僕も泣きました。可愛い駒ちやんの事を思ひ、又[illegible]といふものが、何故自分たちの我儘から子供の氣に入らない嫁を貰へと言はなければならないのだらう、と思つて。何が貰ふのぢやない、子供が貰ふ嫁だのに、その本人の子供が厭だから貰はないといふのを、何故怒るのですかね。僕は誠に斷乎と人情と

のまん中で泣いてゐるのです。あゝ、戀しい戀しい駒ちやん、あなたは僕の心の中を思つて啜泣いてくれるでせうね。さうでないと、僕はあなたを本來の姿とすべく、餘りに薄情な人だと恨みますよ。いや／＼、あなたは決して／＼そんな女ではないでせう。僕はあなたが低級だとは思ひません。立派な女性として精神的にも愛してゐるのですから。ですから手紙の言葉使ひもなるべく可憐に、あたり前の女性の人として言ふのです。ねえ、駒ちやん。僕の胸を思つて泣いて頂戴。僕は又あなたのことを思つて涙ぐんでゐるのですよ。あなたと別れてからは、實に始終涙ぐんでゐます。あなたは僕なんかに出會つた事をお悔しみます。あなたの肉ばかり求めてゐる人々や、金であなたの肉を買ひに行く人々を殺してやりたい位です。僕はそんな事は決してお許しませんから、僕はあなたに今の哀れな境涯から救ひ出さうと思ふのです。僕にはたとへ物質的にはすぐ女王にはなれなくても、あなたに美しい衣服を買つて上げるだけのお金はあります。あゝ、僕はあなたを愛します。これまで種々の女學生や何かたちから僕たち事を言ひ出されたり、手紙をよこしたりしたけれども、あなたのやうな美しい人には一度も出逢つたことがありません。僕はあなたと若し添へなかつたら、心中でもします。あなたも僕と一緒に死んでくれると仰しやいます。美しい者同志死んで天の國へ行くといふ事は、何でもない事でせう……

駒ちやんは、何かを思つてゐるので、といふやうな心持で讀んでゐた妓、讀み行くうちに彼女は段々胸が一ぱいになつて來た。だけど泣かされるわ、と終りの方に來ると、彼女は口の中で呟いて泣き出した、一一讀み切つた彼女は、その長い手紙を、無雜作に破り捨てるのも惜しいやうな氣がして懐の中にしまつた。そして、中の間の方で小つちやいお若い妓と、

「ちよいと駒ちやん、電話をしての方を呼んでこのお客さんは變に思はないの？」生意氣を言つて面白がる小さい妓もからかふ。そんなことしないわ、と呟くと、それにつゞいて、小吉といふ妓の聲で、

「をばさん、」と甲高い声がお呼んだ、「をばさん、[illegible]にゐてにはこれを[illegible]」
一さ[illegible]りだ！」とお時にそれ等の[illegible]に[illegible]ように[illegible]思した。そこで[illegible]して、[illegible]の方へ立[illegible]て行つて、そこの[illegible]い柱に背をもたせかけたまゝ、片足を行儀わるく[illegible]ばして、ぼんやりと[illegible]へるともなく[illegible]へてゐたが、段々何がといふ事もなく、情けない思が込み上げて来た。ふとあの人好しの村[illegible]の顔が浮かんだ、[illegible]な[illegible]のことが思ひ出された、その弟に来る嫁を想像してゐた、その嫁が[illegible]て、醜くて高慢な卑しい者と軽蔑して、小娘の自分をおべこべに虐める、彼等と気まづい朝夕の食事を共にしなければならない、と、又そこに叔母さんを[illegible]つ[illegible]ゐるのは俺だよ、と言はんばかりの高慢な顔をした、死んだ父親似の弟の顔も、[illegible]もそ[illegible]顔によくするせゝら笑ひの表情をしてゐるのが、目に浮んだ、何といふ、自分のたつた一人の弟ながら、意地の悪い……と、いつの間にか、お時の目にちつと涙が浮かんで来るのであつた、しかし、さうして涙ぐんでゐることは、その瞬間、彼女にとつては非常に気持がよかつた、生きて行くことが長い、そして離儀な、その[illegible]明るい[illegible]路だ、といふ気がした。

まつたく、生きて行くことは、彼女にとつて長い[illegible]道に違ひなかつた。……色々と彼女が物思ひに耽つてゐた時、彼女の[illegible]親が、店の土間に現れて、彼女を呼びに来たのであつた。それ、今[illegible]呼びに来るのは、決してよい事の[illegible]にではない、といふことが、彼女には[illegible]験上から直に感じられた、そこにはどうせ彼女が苦しまるものが、何物かよくたいものが彼女を待つてゐるのに違ひなかつた、それはどうせ[illegible]もなければ、味もない、しかし泣いたり泣いたりする程の嬉しいものでもない、唯退屈極まる[illegible]母と弟と彼女との世界のことに違ひなかつた、一体この長い[illegible]道はいつ迄続くのだらう……

「さつき仲人の人が来たんだよ、」と母親は[illegible]母と一緒に店を出て、[illegible]の方へ帰る途々言つた、「[illegible]遠いところなんで

「さう。」と彼女はなるべく冷たい調子で答へた時は、もう彼等は家の敷居をまたいでゐた。弟の金吉はその日は日曜だつたものだから、朝から家にゐたが、相變らず姉の顔を見ると、妙に冷たく、つんとしてゐた。母親はさういふ子供たちの様子には、わざと氣の付かない振をして、

「それでね、」と先の話をつゞけるのであつた。「先方では、金吉がしつかり者だといふ事を、色々の方から目をつけはしたね、皆が認めたといふのでね、……」

「又、阿母さん、金吉にお世辭を使つてる！」とお駒は心の中で思つて、ひどく反感をそゝられた。で、默つて、聞きもしないで、歩いてゐた。

「でね、」と母親は平氣でつゞけた。「話はまあ纏つたのさ。」と云つて、「式は來月の十日がいゝだらう、と仲人さんの話なんだけれど、お前に異存はなからうね？」

「けど、阿母さん、」とお駒は冷やかに言つた。「式を云ふのもそれやお目出度で結構ですけどね、金吉だつてまだお若いんだし、第一さう急いで貰つたつて、その物入のお金をどうしてこしらへる氣なの？ 今あとんなに急くんぢや困りますわね。」と言つたが、つい言ひ過ぎたと思ふと、持前の氣性で、直に折れて出て、「お金はいゝ、そりや、どうにかお金つけるけど。」と云つた。

「いゝえ、姉さんの厄介にならうとは思はないよ。」とこの時傍から金吉がつんけんとした口を入れた。「僕だつて男だよ。へん！ 僕を云ふ使用人、いくら若いつたつて出來ないことがあるもんか！ どんな事があつたつて、姉さんにびた一文だつて出して貰はうとは思つてやしないよ。」

「まあ、お前は默つておいで！」と母親は聲をたしなめて、「この子だつて、お前、その位のお金はどうにかするつて、

この話の始まつた時から言つてるんだよ。それや、家の狭いのはね、……しかし、これも私の考では、どうだらう、お前、思ひ切つて、當分のうち××家の方で寝起きするやうにしてくれては？」と母親は娘の顔を覗ひ覗ひ言ふのであつた。

「つまり、私が追ひ出されるつて譯なんですね？」とお駒は自分でも吃驚する程甲高い聲で叫んだ。

「そんな事を！……お前は直そんな風に人の言ふ事をお取りだから、だから、いつも私が困るんぢやないか？　金吉に嫁を貰ふといふ事は家にとつちや目出たいことだし、それに早くから嫁でも貰ふといふ甲斐性があるつてのも、まあ、これに越した結構なことはないぢやないか？　お隣の八百屋さんなんか聞いたら、どんなに羨ましがるか知れやしないよ。それに、どうせ遅かれ早かれ、貰はなくちやならないものならさ、お駒、こゝのところをよく考へておくれよ。何もお前を追出すの何のと言ふんぢやない、そんな馬鹿な事があるものか、××家だつてこゝから半丁と離れてゐないところだし、唯そこに泊るといふだけで、始終こちらに遊びに來てゐたら、おんなし譯ぢやないか？……」

「兎に角、姉さんは」とその時金吉が持前の落着きに落着いた調子で、突然口を挾んだ「姉さんは僕が嫁を貰ふに就いて、何か僕が姉さんの懐でも狙つてるやうに思ふから、それで反對するんだらう。心配しなくてもいゝよ、姉さん、そんなさもしい僕ぢやありませんよ。いざとなれば、僕だつて二百や三百の金はいつだつてこしらへて見せますよ。嫁取りだつて、どうせこんな裏店住ひの家のことだもの、そんなに、皆に心配させる程、仰々しい真似はしなくつてもいゝんだから……」

「誰がそんな事を！　誰が金吉……」とお駒は弟の言葉を半分聞かないうちに、かッとなつてしまつて、ヒステリイ的に叫んだ、「私がいつ懐を狙はれると言ひました？　さあ、いつそんなさもしい事を？　いつ、さあ、そんな事を？……」

としかし、彼女は上せてしまつて、言葉が思ふ通りによく出ないのであつた。

「生憎ね、僕には人の心の裏がよくわかるのでね、それにもう硝子を透かして見るやうに、よく分るのさ！」と彼は益々冷静になつて、思ふさま、嘲笑ひの調子をさへ浮べて言つた。

「何でそんなにお前たちは仲が悪いんです？」と母親はおろ／＼しながらも、声だけは母親らしい威厳を含めて言つた

「お絢！　お前は金吉を可哀さうだとは思はないのかい？　また金吉も金吉だ、そんな事を、それが姉さんに言ふ言葉ですか？……」

母親のその言葉が終るか終らぬかの時に、元より広くもない家のことだつたから、茶の間にゐた三人の目に均しく這入つた事には、その縁長の戸口から「御免なさい、」と言つて、ぬつと這入つて来た一人の男があつた、それは五十がらみの年輩で、馬鹿に横幅の広い、従つて見つともない程背の低い、無恰好な男だつた。

「御免なさい、」と男はそこに三人もの人間が顔をそろへてゐたので、多少狼狽した様子だつたが、もう一度同じことを鈍い声で言つて、「あの、鳥山さんのお宅は此方ですか？　お宅に絢子さんといふ人がお出でかな？」

どこの人だらう？　とお絢は不審に思ひながらも、「はい、」と言つて立つて行つて、見ると、客は短い背に不均合な、大きな長い顔の、そしてこれも亦その大きな顔に均合はない小さな目を上げて、暫くの間無言で、彼女の顔を穴の開くほどぢろ／＼と見詰めてゐるのである、気味が悪いので、彼女はそこに膝をついて、やり場に困つて伏目になつた。もう十幾年も昔にこしらへたらしい型の、それでも大島紬の着物を着てゐるところを見ると、どうやら田舎の物持らしくも見受けられるのであつた。

「はい、」と彼女は伏目のまゝで答へて、「どなた様でございます、私が絢でございますが。……」

「あんたがお駒さん？」と相手はその小さな目を思ひ切り見開いて、「私はあの、加山村夫の親父だがな、一寸あんたにお話したい事があるのでがすが……。」

彼女は、それではこれがいつかのあの丸い顔の青年の父親なのか、道理で、さう言へば親子だけあつてよく似てゐる、目があんなに小つちやいよ、などと心の中で可笑しく思ひながら、しかし何しに來たんだらう？と多少氣にならないでもなかつたが、どうせ大したことはなからう、と兎も角不思議な來客を二階に通したのであつた。彼女は梯子段の上り口のところで、茶の間で呆氣に取られて見てゐる母親と弟とに、ちらと笑つた視線を送ると、彼等も笑ひ顏を返した。これで自分たち親子は平和に仲直りが出來たと思ふと、彼女は忽ち晴々した氣分になつて、さて二階へ上つて、改めて客の前に手を突いて挨拶をした、さうなると、不斷大勢の人に接してゐるだけ、職業から來た落着きを見せて、彼女は心持に十分の餘裕を感じたもので、すると、あの青年の顏の丸いのは阿母さん似なのだらうか、などと考へて、可笑しくなつて、あぶなく吹出しさうになつた。客は元よりそんな事に氣がつく筈はないので、のみならず如何にも敵地に這入つたやうに身體を固くして、挨拶を返した後、さてもう一度ぢろ〳〵とお駒の顏を注目したり、或はその六疊の部屋の、そこには置床と、石版刷りの『應擧鶏』と落款のある鶏の畫の掛軸と、見すぼらしい不斷着入れの箪笥との外に何にもないところの部屋の中を、ぢろ〳〵と眺め廻したりするのであつた。そしてお駒が内心、少々不安になつて來た用件に就いては何事も語らない前に、先づ岡山はいつ來て見ても賑かですとか、作州の自分の村あたりでは昨今米の値が馬鹿に高いので、百姓が大變景氣がよく、津山などへ出ては藝妓を上げ、散財してゐるが、どうです？　岡山でもそんな客が澤山あるかとか、私たちが若い時分にはよく緣かいな節だの、少し年を取つた頃には東雲のストライキ節だのが流行つて、昔は私だつて仲々遊んだものだ、思ひ出すと顏が赤くなるやうな事もあるが、が、今はどんな唄が流行つて

ゐますか、などと言ふやうな事ばかり喋つてゐて、その間々には、又しても始終お駒の顔を、彼女が一寸でも氣が付かないでゐると、掏摸のやうな、しかしずつと善良な目付を光らして見詰めたり、ふと又反らして床の『幽界窓』の幅の軸を眺めたりするのであつた。

「加山さん、まだお國に入らつしやいますの？」と彼女はそこで、しびれを切らしながら、やつと口を開いた。

「あゝ初夫のことですか、それがですよ。」と客は相手から切り出されて、驚いたやうに、そこで急に膝を乗り出した。

いよいよ用件に這入つたのだと感じて、お駒はほツとしながらも多少緊張した氣になつた、客は煙管を袂の中にしまひ込みながら言ふのだつた。「初夫、あいつにも困つたものだ。」と先づ獨言のやうに溜息をしてから、さて話し出すには、彼がどうも親のいふ事を聞かないので、一家一門悉く弱り果てゝゐる、といふのは、實は嫁を貰はうと思つて今度見合ひをさしたところが、どうしてもその娘を貰はぬと言ひ張るのである。「その娘の親と私とは昵懇つゞきでもあるし、それに仲に這入つたものがおれの村長といふやうな關係になつてゐるので、これが若し破談になると、あんた、それや迎も困つてしまふのですがな。第一、村中が仲惡にならにやならんし、困る事には來年村長に私がなるといふ約束になつてゐるのが、それが、先方の親を怒らすと、一寸むつかしい事になる言ふわけです。」と彼は、彼女に對してどういふ言葉使ひにしたものか、全然敬語を使ふのもをかしなものだし、それかと言つて、一度もお座敷に呼んだ譯でもないのに、さう客が藝妓に使ふやうな調子にも行かないし、その態度を取ることにひどく困難を感じてゐると思はれる口調で、長々と言ひつゞけるのであつた。

「どうかならんかなア？」と彼は獨言のやうに溜息して、再び言葉をつゞけるには、「おれに譯を何ぼ言ひ聞かせても聞き入れよらんのぢや。どうしてそないに仕太いんだ、とよくよく聞いて見ると、あんた、」とこの時彼は髯の延びた顎の

筋肉を急にゆるめて、にやりとしながら、「あれは、あんたとゑらい約束をしてゐるさうで……？」

「私、なんにもお約束は……」

「いや、よく分つてるよ、」と彼は目を細く、殆ど目の存在を失つてしまふほど相恰をくづして言つた、「まあ、若いうちは行り勝ちの事ぢや。私は何にも言はんでな。頼むから、私の一生の頼みぢやから、思ひ切つて貰ひたいんだ。私を村長にするもせぬも、みんなあんたの胸一つにある事ぢや。な、こゝは私の顏を立てゝ、あれの事はきつぱり思ひ切つて夫婦約束などは反古にして貰ひたい、それで、あんた、私はわざ〳〵今朝暗いうちに村を出て、汴川を一番汽車で出發しましたのですぞ、たのみぢや。」

「まア、恐れ入りますわね、」と彼女は自分でも氣持のいゝ程頭が冷靜になつたのを感じながら、きつぱりした口調で言つた、「私はちつとも夫婦約束などした覺えはないんですから、それはもう、何と申し上げたらいゝか、どうぞ御心配なく……。つまり、加山さんとは何の關係もないんですよ。お若いから何か考へ違ひをなすつてるんぢやないでせうか？」

「へエ！」ど相手の男は小さい目を出來るだけ丸くして、「關係がないつて？　それぢや、私はから少しばかりの手切金を用意までして來たが、それには及ばん譯ですかな。」

「及びませんとも！」と彼女は半分馬鹿々々しいやら、半分可笑しいやらで、ひやかすやうに言つた、「たつた一度お目にかゝつたゞけですもの！」……けれども、さう言つて、彼女は、その一度で、自分ながら浅ましい事をしたものだと始めて多少後悔する氣が起つて來たが、なアに、そんな事は白々しく嘘を言ひ張るに限ると思つて、「關係なんかある筈がないぢやありませんか、娼妓さんぢやありませんし。」

「しかし、」と男は尙疑の晴れぬ顏付で、「ぢや、初夫が今誰と結婚しても、あんた、腹を立てるやうな事はありません

ね？」

「あるもんですか！」と彼女は一寸芝居のやうな恰好をして、きつぱりと言ひ放した。「冗談ですもの。どんなお妄想を申し上げたか覺えてゐませんが、それを眞にお取になるなんて、それは先様の御勝手ですが、私の方では全く思ひがけない事ですわ！　やつぱりお若いからですわね？」

「ぢや、」と相手は又一膝乘り出して、「あんたはあの子を何とも思つてゐないと言ふんですか？」

「當り前ぢやありませんか、旦那、」と彼女は愈よ見えを切つて、「私の方は然うぢやありませんか？　それに、年を考へて御覽なさいまし、ホホホホホ。」

「ふむ！」と彼は低い聲で呻くやうに言つて、睥み甲斐のない小さい目で盃を睥みながら、「ぢや、あんたは、つまり欺ましたんぢやな！」そして默つてしまつた。數分間、その間に彼女も默つて、鼻をかんだり、煙草をすひつけたりしてゐたが、彼は啞のやうに默つてゐたが、俯向いたまゝで、もう一度「つまり、あれを欺したんぢやな、」と自分と自分で確かめるやうに呻いたが、やがて突然又顏を上げて、「いや、馬鹿な倅ぢや。あいつの阿呆めが！　どこまで阿呆か分りやせん。おのれ、利夫め、歸つたら大叱りに叱り飛ばさにや、腹が癒えん。私も、あんな阿呆な倅を持つてゐては、ろか〳〵してると村長が勤まらんわい！　いや〳〵、これもみんな私の不徳の致すところぢや。さういへば彼奴は……」と彼は今度はその憤慨の語調を、その場に居合はさない倅に向けて、彼が中學時代に二度も落第したことや、愈よ東京へ出てからも、上京して一年も經たないうちに、持たしてやつた着物を殆ど質に入れて失くしてしまつたことだの、等、等、と彼女の前で嘆きながら話した。

そして、漸うこの不思議な、厄介な客を送り出すと、彼女はくす〳〵と笑ひながら母や弟やのゐる部屋に歸つて來

た。が、お蔭で、三人の對座の席には、もう先刻のやうな險惡な空氣がさらりと晴れてしまつて、一座の和やかな氣分が自然と湧いて來るのであつた。そこで、お駒はあの來客の用件を面白く、可笑しく二人に話して聞かせて、みんなで、その馬鹿な田舍者の親子を笑ふ事が、彼等三人の心を一層親子らしい親しさに引寄せるのに役立つたものであつた。

「姉さんも惡いよ、そんな子供にいゝ加減なお世辭を言ふもんだから……罪だよ。」といふ金吉の言葉附きも、先程とは違つて、針や莿やの取れた、親しみの深い調子があつた、すると、母親と弟と二人して、自分を邪魔者にするのだ、と無暗に腹を立てゝ、今の先いきり立つたのが、感情家の彼女にはひどく恥かしい氣がして來た程であつた。

「何と言つても、阿母さん、」と、そこで、金吉が何かの用事で外出して行つた後で、お駒はしみ〴〵と母親に言つたものである。「お互に本當に力になつたり思ひ合つたりするのは、お互より外に一人だつてないんですもの。私、親子三人が今日を仲よく送るといふ事より結構なことはないと思ふわ。だけどね、阿母さん、嫁が來たら、私あべこべに虐められるやうな氣がして仕樣がないの、何だか私一人だけ除け者にされるんぢやないかと心配だわ。だけど、此方さへ眞心をもつ可愛がつてやつたら、それや人間ですものね、いつかは此方の心も分つて、優しくしてくれるわね。私、嫁が來たら斯うしよう、あゝしようつて、今からもうちやんと色んな事を考へてるのよ。」

「まあ、お前、何を言ふんだねえ？」と母親も不斷の優しい母親に復つて、そんなに何も頭から嫁を意地の惡い者にきめてしまはなくたつていゝぢやないか？」と言ひながら、彼女も少し不安になつて來たらしく、「たとへどんな意地惡が來たつて、いゝぢやないか？　その時は私だつてお前の味方だよ、お前だつて押しも押されもしない金吉の姉なんだから、決して遠慮することは入らないよ。よしどんな事があつても、他所から這入つて來た者に、さう我儘なことをさせておくもんか、安心おしよ、お前に指一つさして見るがいゝ、そんな事があつたら、第一この阿母さんが承知しないか

ら、」と甘やかすやうに言つた。

「ほんとによ、乾度ね、」とお駒も十年も昔に戻つたやうに、甘えた口調で言つた、「私も乾度お嫁を可愛がつてやるつもりよ、それが何よりも家を丸くする元ですからね、」斯う涙ぐましいやうな氣持にさへなつて言つたが、そこ迄行くと、忽ち反對的にはつきりした意識がかへつて來て、だが、とお駒は思ふのである、それが、そんな事がどれだけ自分に仕合はせを齎すものだらう？　自分のこの依り所のない、寂寞な心が、そんな事で賑かにされたり、仕合せを感じさせられたりする事が出來るだらうか？　母親だつて今こそ斯うして殊勝な事を言つてゐるものゝ、こんなお人好しの事だから、どんなにしていつ奴に丸め込まれるか分つたものではないのだ、が、又たとへ一家が今みなが望むやうに圓滿に行くとしても。――とお駒はそれからそれと考へつゞけるのである、しかし、親子の者が、そこへ嫁までまぜて、毎日毎日を足らず勝の生活をして、いゝ着物一つ着るではなし、面白い芝居一度見に行くではなし、たゞ借金をせず、内輪喧嘩をしないといふだけで、あゝ、それだけなら、やつぱりこの世の中は長い、退屈な、その喘ぐほどの苦みもなければ、叫ぶ程の喜びもない、平凡極まる坦道に違ひない……。

「お駒、」とその時母親は何を考へたのか、急に眞面目な顔を上げて、「お前も、もう何とか身體を固めなくちやならないね、いつ迄藝妓をしてゐるといふ譯には行くまいしね。それに、お前はどうも、外の妓のやうに、藝妓に向く氣質ぢやないらしいものね。……」

「えゝ、」とお駒は急に問題が現在のことになつて來たので、一層氣が詰まるやうな心持で、襟に顔をうづめて、まつたく、何故藝妓になつたんだらう、と今更のやうに思つて見た。先の旦那が身受けしてくれると間もなく死んでしまつた、あの時あれ切りで足を洗つたら、洗へない事は無論なかつたのであつた、そして足を洗つて、どこにでも嫁入りす

れば、それが一番いゝ方法だつたのだが、何分にもその時嫁入話の口が二つ出た中に、一つが魚屋で、今一つが古道具屋だつた事が、如何にも彼女の氣に入らなかつたのであつた、一日、威勢ばかりはいゝが、生臭い着物を着て働いてゐる常さんと添うたつて、何の面白い事も可笑しい事も豫期される筈がないし、と言つて、あの欝陶しい古道具屋の店先に赤い手柄をかけてちよこなんと坐つて暮したところが、今までの姿暮しの贅澤さの後で、これも餘りに味氣ない氣がしたものだから。そして彼女はついうか〳〵と、藝者屋××家のお上の巧い口車に乘せられて、再び、しかし今度は自前で、藝妓に出てしまつたのであつた、が、それはやつぱり、以前丸抱えで藝妓をしてゐた時と寸分も違はない、面白くもなければ、思ふ程金だつて儲からない、まして貯金などの出來る筈がなかつた、それどころか、呉服屋にいつも高い着物を買はされて、それの借金ばかりが增えて行くのだつた、その上旦那運が惡くて、あの若い理事官にしたところが、金放れがいゝと言つたつて、それが高の知れたものだつた、それに、先の旦那が淡泊な質だつたので、無論そればかりでなく彼女の素質がさうだつたからかも知れないが、お蔭で彼女は浮氣の味だの、色事の趣味などには殆ど無關心で、こんなつまらない事に何故人は躍鬼になつて、借金して役者買をしたり、旦那を不首尾にして色男をこしらへたりするのか、殆どその意味を審かにしないで今迄來たのであつた、唯、あの丸い顏の青年と、それもあの若い理事官から貰つた惡い習慣の力で、一瞬間を誤まつた以前には、二三度よく〳〵の斷れない義理から心にもない秘密を作つたゞけで、元より自ら興味をもつてした事はなかつたのである、それ程つまらない今迄であつた、今になつて考へて見ると、結局殘されたものは唯借金が重い負擔になつたゞけで、つまり男たちに呼ばれたのは、その借金をこしらへる爲めの勞働、とそこ迄はつきり彼女が考へた譯ではないが、だけだつたのだ。が、今はもう彼女にもよく分つた一つの事は、それはあの若い理事官が殘して行つた習慣に依つて、彼女の身體の中に目醒まされたあの惡魔のやうな快樂である、して

見ると、この上は唯あれを追つて、浮氣もしたり、役者買もしたりして、酒飲が酒を飲むやうな樂みを樂むより外に仕方があるまい、今だつて、自分は魚屋や古道具屋のお上さんになる氣はないのだから、と彼女は考へるのである、どうせ私のやうな者、日陰の哀れ者が、でなければ一生、婆さん藝妓になるまでも、この商賣をつゞけてゆくか、どうせさうなんだ……。

けれども、さういふ風に捨鉢な事を思ふのだが、それが今の一瞬間を過ぎたら、やがて仕合はせな事に思ひ返せるといふ、何の目的がある譯でもないのだつたから、それだけ彼女の心持は重々しく、且つ苦しかつた、彼女は抑へつけられたやうな、飛び出したいやうな、喚きたいやうな、氣狂になりさうな苛々した氣持で、しかし幾ら焦つたつて駄目だ、結局どうにかなるやうにしか、而も決してよい結果である筈はない、ならない、そして何と手當の仕様もないのだといふ氣持が、身體中にねばり付くやうに感じられた。一生は阪道だ、しかし、今、その時彼女の目の前にある阪道は、もはや明るくもない、平凡でもない、それは唯暗い、苦しいものであつた。やつぱり、仕方がないから、早くいゝ旦那でも見付けるさ、そしたら氣が變るだらう、が、どうして今度は斯う旦那が付きにくいのだらう?……そしてその旦那を一日も早く探すことが、今の彼女の唯一つの何かの希望であるかのやうに思へるところの、考になつたのであつた、彼女にとつては、今のところ、それが何かおみくじでも引くやうな樂をもつた、來るべき運命の緒を探す仕事に外ならなかつた。

七

その翌日だつたかから、お駒は二三日つゞけて每晩同じ家から同じ客に呼ばれた、それが例の化粧問屋の主人であつ

た。始めて、もう二度とお座敷で會ふことはあるまいと思つてゐたその男に、再び丸屋の座敷に、どんな客だらう、と思つて這入つて行つて、そこに彼を見出した時、彼女は思はずぎよツとして、「今晩は、」と言つて上げた目を暫く見張つたまゝ、一瞬間呼吸が詰まつたやうな表情をしてから、「先達ては失禮しました、」と二の句を次ぐのに、冷汗を腋の下に感じた程であつた。

が、その晩は彼は醉つてゐなかつた、そして、「やあ、御免、御免、」と一寸極り惡さうに、「此間は實に恥かしい事をした、今日はその詫に來たんだよ、」と言つて、それからは極く大人しやかな話ばかりして、用意して持つて來てゐた香水などをくれて、あつさりと一時間餘り遊んで、何事もなく歸つて行つたのであつた。その次の晩來た時には、彼女が呼ばれて行つた時分にはもう二本ばかり空けた後らしく、無論その位の酒では味噌汁を吸つた程にも醉ふ男ではないが、體裁だけは少しまわつてゐるやうな態度で、色んな雜談をしてゐた續きに、「此間ね、」と彼が言ふには、「俺の細君が燒餅坐だと言つたのは、あれは實は嘘なんだ、まあ餘り別懇でないうちは、あの位の事に言つておかないと俺の恥だからね、…………」そして何を言ふかと思ふと、彼等夫婦が如何にそりが合はないか、始終夫婦喧嘩の絶え間がないか、などと話してゐるうちに、この男の癖と見えて、次第に昂奮して來て、終には自分の細君を口を極めて、町の乞食女にさへも言へないやうな惡口を言ひ出したものである、それに依ると、何でも彼女は此上ない破廉恥な、不倫な女で、人妻としてあり得ないやうな事を、平氣で、大びらにやるといふことゝであつた。

「實を言ふとね、」と、これが彼の口癖らしく、彼はその話のうちに見る見る二三本の德利を立てつゞけに空にしてしまつて、次第に酒臭くなつて來る口を、この時急に彼女に近づけて、如何にも秘密らしく聲をひそめて言ふには、「實を言ふとね、俺の女房は長い間朝鮮で淫賣をしてゐたんだ、それを俺が拾ひ上げて助けてやつたんだが、何分殖民地で暴れ—

擦つた女だけあつて、こりや始末におへないんだ。ところでね、」とこゝで一層聲をひそめて、「これは俺は極く内密の話なんだが、此頃どうも店の番頭と臭いらしいんだ、俺が茶屋遊びをするのも實はその爲なんだよ、斯うして夜外に出てゐると氣が氣ぢやないんだ、不安心でね。……俺がこんな醜男だから、あの野郎、野郎ぢやない女郎、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、俺だつて腹が立つよ、」とこの邊で彼の昂奮は頂點に達して、「當り前ぢやないか、俺は腹が立つて、腹が立つて、畜生！　本當に俺は口惜しいよ。俺だつて四十の男盛りだ！　さうさう每晩神妙にもして居れないぢやないか？　ねえ、お駒、同情してくれ！」

そこで、お駒は當然笑つて受けなければならぬ所だつた、が、彼女はどうしたものか笑はなかつた、彼女は先程からの男の言葉を半分一生懸命に聞き、半分彼女自身の胸に浮かんで來た思を考へてゐた、彼女は男の言葉を聞きながら、變に彼女の肉體を感じたものである、それと同時にいつぞや彼に刺戟された、あの刹那の事を、あの時は戰慄が走る程厭だつたが、それを思ひ出してゐたのであつた、あの時はさうだつたが、その後、あの刺戟の頂點に觸れないで濟んだ事を、何度彼女は理事官との様々の場面と共に、幻影に浮かべて惜しんだことだつたらう？　一旦誘はれた或境地に行くことを一旦拒んだ心持は、その後になつて如何に激しく又强くその刺戟の奧にあるところのものに迄、突當つて行く慾望に燃えたことであつたらう？　そして、それが今更彼の顏を自分の顏に感じた時、一層熱烈に燃え上つたのであつた。が、それを、此間あれ程激しく彼女に刎ねつけられ、今又自分の話を、彼女が見たところ、一向冷淡らしく聞いてゐるやうに感じた彼は、それを、彼女の心がそんな狀態にあつたとは知る由もないから、寧ろ彼にして見ると、今日もやつぱり駄目だなと思つて、そして彼はその日もやつぱり大人しく、唯くどくどと愚痴をこぼして聞かしたゞけで、歸つて行つたのであつた。彼女は物足りない、が、危いものから逃れたやうな、けれども結局寂しい氣持を味つた。

八

そして半月が過ぎたのであつた、無論、そして彼女はいつからか化粧品屋を旦那に持つやうになつてゐたのであつた。彼が如何に有頂天になつて、殆ど毎日のやうに通つて來たかは言ふ迄もない。

「いよ〳〵内の女房も下關の實家に歸してしまつたよ。手切金を少し奮發してやつたら、喜んで歸つて行き居つた、あんなすべため、番頭とでも誰とでもくつ附きやがれ！」と或日彼はにこ〳〵しながら言つたことがあつた、「ところで、就いてだがね、お前を家に入れたいと思ふんだよ。どうだな、承知してくれるだらうな？」

「嘘でせう、」と彼女は、滅多にだまされるものかと用心しながら、然し内心は少々吃驚して言つた。

「嘘でも冗談でもないよ、」と相手はその馬面を極めて眞面目な表情に緊張させて、その鈍い聲に力を込めて言ひながらも、その癖どこか寂しい、他依りない表情をその青く痩せた口もとに浮べて、「お前さへ厭でなかつたら、嘘や冗談ぢやない、私は眞面目だよ、實を言ふとね、……」

又、實を言ふとね、が始まつたと彼女は思ひながら、聞いて見ると、本當らしい話で、その證據に、彼は威勢のいゝ中にもどこか悲しさうな口調で、その細君を家から追ひ出すまでの一部始終を、例の鈍いくど〳〵した調子で話し出したのであつた。

しかし、彼女はそんな繰言のやうな話の内容には少しも興味を感じなかつた、といふよりも、何よりも彼女自身の考へ事に夢中であつた。彼女は何ともいへぬ幸運が來たやうな感じと、到頭こんな男と……といふやうな迷惑の感じと、漠然とした不安な感じと、色んな感じがごちや〳〵になつて、それから生じる何物か底の知れない大きな物に眩惑され

たやうな思がした、まあ待つて下さい、まあ待つて下さい、と言つて、その場に頭を抑えて打伏してしまひたいやうな氣がしたものである、彼女は俯向いたまゝ、默つてゐた。

「どんなダイヤだつて買つてやるよ。大勢の奉公人がお前を奥さん奥さんと言つて登るよ。」そんな事を、男がねちくと言つてゐるのだけは、しかしはつきりと聞えたものである。

「おやあ、」とそこで彼女は氣を取直して、出來るだけはつきりした口調で言つた、「それぢや、あなた、私をあなたの籍に入れてくれますの？」

「それが困る事の一つなんだがなア、」と彼は忽ち突かれたやうに狼狽の様を見せて、馬面の顔を顰めて言つた、「しかし、お前、何もそんな事は今から急がなくつたつていゝさ……」

「おやあ、つまり、」と彼女は當り前のことながら、この場合やつぱりむツとして、「つまり私を日蔭者にしようと言ふんでせう？　無論、私のやうな者、何時捨てられるか分らないんですからね。」

「さうぢやないよ、そんなつもりぢやない、そんなに言ふのなら仕方がない。思ひ切つてお前には何も彼も話してしまはう、」と男は益々弱り切つた顔をして、大きな溜息と共に、呻るやうな鈍い聲で始めるには、「實を言ふとね、俺は養子なんだよ。けれど、心配するな、財産は俺が苦勞して、朝鮮だの、靑島だのを渡り歩いて、この俺の腕一つでこしらへ上げたんだ。養家は四國の多度津にあるんだがね、もつともその家にも、家付きの娘の外に可成りの財産はあるんだ、それがお前、その娘、つまり俺の本妻だがね、そいつが馬鹿にしつかり者でね、といふのも俺が賴男だからなんだらうが、やつぱり俺を厭ひやがつて、種に附つて行つても碌々挨拶もしないといふ有様なんだ、だから、俺だつて面白くないわさ、で、朝鮮の方へ行つてからは、一年の半分以上は彼地で暮らしてしまつて、滅多に多度津へは歸らなかつたん

だ、だから子供も二人もあるんだが、俺の子だとは言へないやうな始末さ、誰の子だか分つたもんぢやないんだ、」と彼はだん〳〵猾で昂奮して來た、「そんな譯で、俺は殖民地の方も飽きて來たもんだから、愈よ內地へ引上げるやうになつてもさ、さうぢやないか、俺はどうしても多度津へ歸る氣になれない、そこで二三年前からこの岡山に店を開いたやうな譯なんだ。その代りね、財產は養家の物はそのまゝ彼方で本妻が自由にしてゐるし、俺が儲けた金は、この方が彼方の何倍もあるよ、それは勿論俺が自由にしてゐるといふ譯さ。まあ、ざつとそんな譯だからね、お前の籍も入れるといふ事は、それや俺が思ひ切つて養家の方を離緣すれば出來ないこともなからうけれど、もつとも離緣したつていゝんだがね、今の所、さうなると非常に面倒な問題が持上るものだからね。だけど、お前を家に入れておけば、それは法律の上からは夫婦でれないにしてもさ、實際は夫婦と同樣ぢやないか? 多度津の女房にしたつて、それ程脈な俺なら、その俺がお前と一緒になつたら結句厄介拂ひをしたと喜ぶだらうし、誰も文句をいふ者はないんだよ。」

「それぢや、旦那、」と彼女は言つた、「下關に歸つた奧さんといふのも、つまり本當の奧さんぢやなかつたんですか?」

「本當は妾だつたのさ、」と男は泣き顏に見えるやうな顏で笑ひながら、「だけど、何も噓を吐くつもりぢやなかつたんだが、詳しい事情を話さない前だから、女房だといふより外に仕樣がないぢやないか? ハハハハ。」

「しかしね、」とそこで彼女は、さうなると持前の氣の弱さから、急に言ひ難さうに、眉を八の字に作つて、「私をさうしてもらひますにはね、少しお金を出して頂かなくちやならないの、……」とやつとそれだけ言つて、そこで思ひ切つて顏に媚を作つて見せた。

すると、男の目が反射するやうに、一瞬間ぎよろりと光つて、「金が?」と叫んだ、今迄の樣子とは打つて變つて、銳い聲で、「だつて、お前は自前ぢやないか?」そして今度は反對に彼の方が用心深さうな身構へになつて、お前の[illegible]

るやうな目付で見詰めるのであつた。

「だつて、私が藝者を止めることになると、」とさうなると彼女は却つて態度が強くなつて、一言一言はつきりと、「さうすると阿母さんの身入りが少なくなる譯ですから、そこで幾らかやつて下さらないと、手放してくれないだらうと思ひますわ。それに呉服屋や何かの店借りが隨分ありますしね、引き祝だつて、さうけちには出來ませんわ。」

「そして、それは幾ら程あつたらいゝんだい？」と男は不興氣な、そしてびく〳〵した顔付きで、相變らず鈍い、しかし呻くやうな聲で言つた。

「まあ、二千五百圓か、三千圓か、その位出して頂いたらいゝんですわ、」と彼女はきつぱりと、その癖腹の中ではびく〳〵しながらし斯う云つたが、云つてから、失敗つた、それでは切出し方が少な過ぎたかな？　と思つた。が、彼女の安心した事には、男の先程からの不安さうな顔付が、更に見る見るうちに、泣き出しさうな暗い色になつた、青く痩せたその狹い顔が、押し潰されたやうな表情をしたのであつた。で、二人とも呼吸を詰められたやうに默つてしまつたが、その間に男は二三度輕く呻くやうな聲を發して、やがて

「よし、二千……」と男は決心した聲で呻つた。「二千……五百圓だけ出さう、」と金高を言つてしまふと、次第に言葉の調子も輕くなつて、「その代り、俺の言ふ事だけはよく聞いて貰はないといけないぜ、ね？……あゝ、俺は女と仲よく暮したことのない男だ！　せめて、お前が少しでも俺の機嫌をとつてくれたら、なアに二千五百圓もさう高くはないかも知れん、……」そして彼は一寸胸算用を繰り返すやうな目付きを、半分泣いてゐるやうな顔の中でして、「さうだ、そんなに損ぢやない！　一ケ月に五遍酒を飲みに行つて、それを五年つゞけるとすると、二千五百圓とその利子とを加へても、まだ足りない勘定になる。お前でも家に入れて、機嫌を取つてくれる者がないと、結局月に五遍や六遍は遊びに行

かなくちや居れなくなるからな。」

「ですけど、旦那、私も母や弟に一通り相談しなけりやなりませんから、もう一晩考へさして下さいね、」と彼女は別れる時言つて、そして化粧品屋を送り出してから、家に歸つて來たのであつた、

が、その翌日、彼女は朝早くから急いで身仕度をして、わざとお座敷着に着更へないで、自分の方から川べりの紀文といふ料理屋に出かけて行つて、そこから電話で化粧品屋を呼び出したのであつた。彼女はその前の晩いろ／＼と考へたのであつた、厭な、少し足りないかと思はれるやうな、もつともそれは彼が見かけに依らず餘りに人が好いからの事に違ひないが、それでゐて商賣人だけあつてひどく勘定高い、おまけにあんな二た目と見られないやうな男振りの化粧品屋と愈よ同棲することになるかと思ふと、あゝ、あゝ、自分ほど男運の惡い、つまらない境涯の者はない、と彼女はつく／＼情けなくなるのであつた、すると又、紫的なダイヤ、奉公人にちやほやされる、兎に角金持の奥さん、などといふ聲が、始終心の隅から丁度玩具の音を子供に聞かせるやうに、誘惑的に響いて來るのであつた、金持の家を自分の物にして切りまわして見るのも何とも愉快な事に違ひない、それよりも何よりも、氣の合はない弟の壓迫から逃れて、その上に生活の上に大きな安心が得られる、さうなつた自分をあの生意氣な弟にそれ見ろと見せびらかすのも何といふ胸のすく事だらう、それから、まだあゝ、あの男は、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、斯うして離れて考へてゐると、一體それはあの身體のどこから持出されるのだらう、と不思議に思はれる程、十分に持つてゐることであつた、あの男を征服してやつて、そして自分の身體もめちや／＼に破してしまつたら、それでこの味氣のない短い一生は終るのだ、左樣なら？　だ、――とこんな風に捨て鉢な考へ方をしてゐるかと思ふと、又、でもやつぱし本妻ぢやないんだもの、いつ何時お拂ひ箱にされても何の文句も言へないのだ、あゝ、あゝ、つまらない、

と絶望的な考へも出るのであつた、然しその時はその時だ、なアに、あんな好かない男のことだもの、捨てられる迄に此方で手廻しよく何とか方法を附けて置けば、結局捨てられるのが自由で氣樂で、せい／＼する事になるかも知れない、浮氣だつて、仕方に依つては巧く出來るだらう、――そして素的なダイヤ、いゝ着物、といふ派手な生活を想像すると、彼女は樂しい夢の國にでも行くやうな、無性に嬉しい氣がするのであつた、そして彼女は獨りで微笑した、それは獨り寢の床での久り振りの微笑だつた、こゝで阿母さんにも少し纒つた金をやれば、それが何と弟が力んだつて、此場合彼の結婚の費用にも少しは融通されるに違ひない、そしたら時々二人で自分を除け者にするやうな態度や口振を見せた彼等に對して、どれだけ鋭い面當になるか分らない、あゝ、胸がせい／＼する、――そして又彼女はもう一ケ月もすると弟が迎へる筈になつてゐる嫁のことを心に浮かべた、そして、それを迎へた上の、自分もそれと一緒に狭い家の中でごた／＼と暮す日のことを思ふと、堪らなくてぞつとする氣がした、その嫁に對しても、こんな狭い家の中で、この家の者として、而もしがない身分の者としてよりも、押しも押されもしない金持の奥さんとして、成程本妻でこそはないが、事情を知らない世間態では立派な奥さんとして通るんだもの、さうして嫁と顏を合はす方が、どの位氣持がいゝか知れない、と思つた、そして、大家の贅澤な生活振りを存分彼等に見せつけて、彼等のこせ／＼した、小つぽけな世帶を見下ろしてやることが、どんなにいゝ氣持だらう！　色々と思つて來ると、彼女は、あの場で直にも化粧品屋の旦那の申出を承知してしまはなかつた事が、取返しの付かぬ、ひよつとすると、急に彼の氣でも變つて、折角の聞きかゝつた運を取逃がしてしまつたやうな事になりはしなかつたか、と俄に不安になつて來た、金の話を出したら、あんなに知恵を揃へて、狼狽したあの男のことだから、今夜のうちにも氣が變つて……？　若しもそんな事になつたら、あゝ、あゝ、取返しがつかない！　と賑かな空想の後からは、又さういふ止めどない不安にも襲はれたものであつた、

あゝ早く夜が明ければいゝ、……そして彼女は久し振りで、飛び立つやうな、緊張した心持で、取るものも取り敢ず、紀文に飛んで來た次第なのであつた。彼女はそこで明るい二階の部屋に通されて、電話をかけておいた彼の來るのを、待ちまうけたのであつた。

程もなく、化粧品屋がその馬面の、青い、瘦せぽつちな姿を現はした。素早くその顏つきに彼女は鋭い視線を投げたが、それが相變らず少し足りないやうな表情をしてにた／＼笑つてゐる外に、何の變つた樣子もなかつたので、彼女は心の中で始めてほつと胸を撫で下ろした。

「私、到頭決心してよ！」と彼女は彼の顏を見るなり、叫くやうな聲で、十分に媚びた表情を目にもたせて言つた。

「あゝ、到頭二千五百圓出させられるのかなア、」と化粧品屋は、笑ふとそれが一層醜くなる顏に、嬉しさうな表情を隱し切れないで、しかし言葉だけは溜息するやうに叫んだ。

そこで、使の俥を走らして彼女の母親を迎へにやつたのであつた。

この男と！　この男とこれから朝晩顏を見合はして暮すことになるんだ、と彼女は今更のやうに變な氣がして、つく／＼と、よくもまあこんな醜い顏があつたものだ、と男の顏を見たものであつた、が、男は唯々うれしさうに、もう別に女に向つてお世辭の言葉も言はないで、にや／＼しながら朝の盃を重ねてゐた。何といふ、商賣の腕はどんなにあるのか知らないが、見たところ薄のろな、何といふ青ざめた、そして何といふ瘦せた……この男とこれから長い、恐らくは五年も、十年も一緒に――と更に思ひかへすと、彼女の心は又しても暗く沈まない譯に行かなかつた。厭だ、厭だ……世の中なんて、何方に轉んでも、どうなつて見たところが、やつぱり味氣ない、何の樂もないところに違ひなかつた、まつたくどぶ泥の沼の中見たやうなものだ、それとも自分のやうな者でない、外の立派な身分の人には、自分など

の思ひも及ばない、素晴らしい樂があるのか知ら？　さうかも知れない。ところが、自分は、自分はこの馬よりも醜い男と……と思つて、彼女は相變らずにたノ＼しながら、德利を前に並べて、何か如何にも樂しさうに、煙草をぷか＼／吹かしてゐる、どうかした拍子に見ると化物のやうに見える化粧品屋の旦那の横顔をぢつと睨んでゐると、突然ぶる＼／ッと身震ひがして、どうせこの顔と添ふことになつたんだ、世間の人は何とでも言へ、自分は自分で思ふさまこの顔を樂んでやらう、玩具にしてやらう、そして張子の人形のやうに、終ひには滅茶々々に引搔き廻してやらう……そして彼女は再びぶる＼／ッと身震ひした、彼女の頭に、突然又例の悪魔のやうな怪しい幻像が描き出されたのであつた、すると、何としたことだ？　彼女は自分で自分のする事に全然夢中で、いきなり、そこに相變らずにこ＼／して盃をふくんでゐた男の馬面に、むしやぶり付くやうに噛り付いて、そして無茶苦茶に髮の毛を力一杯引つ張つたり、頰つぺたを抓つたり、胸を搔き上げたり・それ等のことを氣狂のやうな熱捷さで始めたのであつた。男にしかし「こら！　何をする、何をする？」と頓狂な聲を張り上げながらも、エヘヘヘ、エヘヘヘ、そして唯エヘヘヘ、と顔の相が溶けてしまふやうな笑顔をして、笑ふばかりで、少しも抵抗しようとはしなかつた。

が、暫くすると、彼女はぷいと急に汚い物から飛び退くやうに立上つて、窓のところに行つて、からりと川に面して障子を開けた、その家は旭川といふ川の直ぐ岸に立つてゐたので、彼女の開けた窓の下には、靑い、奇麗な水が、朝の光の中をそろ＼／と流れてゐるのが眺められた、白い帆の船も直ぐ目の前を通るのであつた、その船の上の、時々何をしてゐるのか、多分櫓の音だらう、ギイ＼／といふ音をさせる船頭の姿も、その船頭は子持と見えて、白い帆の下に一面に赤ン坊の襁褓が干してあるのも、又少し下手には京橋も見えて、その橋の上を朝から忙しさうに往來してゐる群衆も、世の中は、世の中の人は皆それ＼″／何かの當があつて、何かの目的があつて、さうしてゐるやうに、それ等が冬近い朝

の弱々しい光を浴びながら、それ等がまるで他所の世界の光景のやうに彼女の目には見えるのであつた。

「私だつて負けるものか、私だつて負けはしないわ、屹度仕合はせになつて見せるから……」といふやうな事を、彼女は心の中で叫んだ、が、それと共に何といふ事もなしに、その時彼女は心の底から込み上げて來るやうな、うそ寂しい氣持を感じた、で、彼女は口に浮かぶまゝに、薄墨に書く玉章の……とふと唄つて見て、誰だつたかな、これをこの間お座敷でうたつたのは？　さうだ、あの加山青年の友達の、四角な顏の呉服屋の息子だつた、あの加山といふ子はどうしてゐるだらう？　などと思ひながら、やつぱり水の面を見るともなしに見入つてゐた。

その時、男が便所から歸つたらしい氣配がしたので、彼女はやつぱり窓にもたれたまゝだが、一寸振り返つて、ふと男と顏を見合すと、何か言葉をかけなければならない氣がしたので、思ひ出すまゝにこんな事を言つた。

「○○○○○○○○○○○○○○○○○」

前號所載室生犀星氏作「まむし」につき、當局より注意を受けし爲め、本篇の下檢閱を乞ひしに、遂に數ヶ所に多數の伏字を附するの止むを得ざるに至りぬ。此旨著者並に讀者諸彥の御諒恕を乞ふ。（編者しるす）

山中峯太郎氏著

我れ爾を救ふ

- ◇我れ爾を救ふ
- ◇懺悔し得ぬ懺悔
- ◇こゝろもちの記
- ◇唯一の歡樂
- ◇淨土和讃に顯はされし基督
- ◇過程の上より
- ◇一元の父子
- ◇親鸞聖人と『幸福者』

この書中の『我れ爾を救ふ』の一篇が、「中央公論」に掲載せられし時、著者を訪れ給ひし天理教のY氏は、十二萬圓を以て著者の信仰を天理教によりて宣傳すべく委囑せんとし給ひ、更に大本教のT氏は、三萬圓を以て著者の信仰を大本教によりて布教すべく切に勸誘し給ふ。而して佛教殊に淨土眞宗の諸師は、著者の各告白が淨土眞宗に基督教を攝取するものと成し給ひ、更に基督教諸牧師は、神の榮光に依りて佛教を新たに復活せしむるものと定め給ふ。著者は斷じて宗教家に非ず、現在一介の賣文者のみ。たゞ此の地の上に、ゆくりなくも流れきたりし漂泊の惱みを解かれて、歸るべきところへ歸り往かんとする自己の路標を、忘るるに備へんと思ひ、『我れ爾を救ふ』以下、上記の八篇を、わづかに綴り得しのみ。同じ地の上の友に、一漂泊者の路標を獻ぐ。

〔十二月一日〃初版發賣。十日〃再版〕

新刊

四六判　三七八頁

壹圓九拾錢　送料八錢

東京市京橋區尾張町二丁目

警醒社書店

振替東京五五參
電話銀座一五八七　二六九九



象やの象さん

長谷川如是閑

『さあ〳〵象をお召しなさい、象を。お坊ちやん方、お孃さん方の、おうちへのお土產。』

野天の龍燈のブラ〳〵してゐる下で、玩弄の象を列べた臺を前にして、うはの空のやうに、さう叫んでゐるのは、どんつく布子に、厚い襟卷をした、若いやうな年寄りのやうな、實物の象に少し似た顏を、好い加減赤くしてゐる男である。

『さあ〳〵象をお召し下さい。大象、中象、小象、お好み次第。象は動物のうちで、一番大きくて、一番可愛らしい。それがこんなに小つちやくて、こんなに可愛らしいのだから、それは〳〵可愛らしい。「これ〳〵小象さん。」「ヘイ〳〵何御用。」ピヨコ〳〵のピーピーピーとお返事をする小象さん。上等舶來のゴム細工。おうちへ御歸りまで、おや壞はれた、泣かなくなつた、なんぞと申す品ではございません。さあお坊ちやん、お手に採つて御覽下さい。こちらは大和好み眞綿細工。泣かないのは育ちのよい爲め。お孃さん方のお友達には、持つてこいの小象さん。さあ〳〵御召し下さい。ハックショイ。象は印度ベンガルの產。印度は熱國、お寒いのは少々閉口。象は

人間の両手指先の用をいたします。さあ／＼お召し下さい。何うぞーおめし下さいだ。アッハッハ。」

「象や、相變らず元氣だね。」と通りかゝつた風船屋のお婆さんが聲をかけた。

「根つから元氣でもないんだよ、おつかあ。今朝から見ると何だか象の數が殖えたやうだ。」象やは、臺の上の、所謂小象、中象、大象を見廻して、ベソを掻く眞似をした。

「象が子供を産みやしまいし、馬鹿にしてゐるよ。賣れないのかい。」大きな包を背負つたお婆さんは、寄つて來て、慰めるやうにさう云つた。

「賣れねへ。今時の子供は、象でもなからう。あれ見や、いやにこまつちやくれてゐやあがら。」象やは、向ふから來る、夫婦連れの紳士の連れてゐる、洋服の子供達を見ながらさう云つた。

「貴下がそんなことを云つてちや、誰れが買うもんかね。……もうお仕舞ひよ。ボツ／＼やつて來たよ。」お婆さんは眞面な容を見上げた。

「おつかあ、もう歸るのかい。おや一緒に行かう。お隣の大將、仕舞はねへか、ボツ／＼やつて來たとよ。」象やは、賣物を片附けながら隣の南京豆屋に聲をかけた、

「やつて來た？」豆やは、ガラ／＼取手を廻しながら、「今日はね八時にやつて來やがつたな。俺の店は、これからだ。」

「威張つてるよ。」お婆さんは、タンと舌をならして、「あんまり儲けると、歸りに追剥に遭うよ。」

「追剥に遇らほど儲けたら、追剥にだつてちつとは、呉れてやらア。」

「南京やさん、お休み。」象やは、片付けた荷を背負つて、お婆さんと連れ立つた。

『象さん、お前さん又此頃お酒を始めたさうだね。』お婆さんは、暗闇がりの狭い町に入つてから、象やにさう云つた。

『始めたつて、おつかあ、可哀相に、酒を飲んだつて氣のするほど飲めた試しはねえんだからね。』

『でも、お前さんとこのきいちやんが泣いてるぢやないか。てんで一文だつて家へ持つて歸らないで、皆飲んちやうんだつて。きいちやんだつて可哀相ぢやないか。毎日工場へ行つてさん〴〵働いて、夜は夜つぴて内職ぢや、やり切れやしないよ。』

『そりやおつかあ、きい坊は可哀相さ、けど俺だつて隨分可哀相だ。』

『何をいつてゐるんだい、此の人は。まだおつかあに死なれたこと、クヨ〳〵思つてるのかい。無理はないけど、もちつと男らしくおしよ。』

『おつかあ？　あんなものは何んでえ。誰れがクヨ〳〵なんぞ思つてるもんか。……さうぢやねへんだよ。』

『何うなんだよ。それぢや。』

『何うもかうもねへんだから、始末に終へねえや。』

『訝しな人だねへ。お前さんはそれでよからうが、きいちやんが可哀相ぢやないか。』

『だからよ、俺だつて可哀相だつてんだよ。』

『變だよ。お前さんは。象が賣れないへ〳〵て云つてゐる癖に何うしても外の商賣をしないんだもの。さうしといて、俺が可哀相もないもんだ。』

『賣れたつて賣れなくつたつて、象はやめられねへ。』

『それだから許しな人だつて云んぢやないか。……きいちやんだつて、もう年頃だつてえのに、お母さんはゐやしず、親爺は構ひつけず、眞黒けになつて獨りで働いて、ほんとうに感心な子だつちやありやしない。あの子があんなでなかつたら、お前さん泣いてもおつかないんだよ。有りがたいとお思ひよ。』

『有りがてへ。』

『人を馬鹿にしてるよ。今に子供が出來るからさうお思ひ。』

「思つてらア。……けどおつかあ、さうだぜ、世の中つてものは、かうのんきにしてゐねへといけねえんだぜ。俺ら飴を列べて、勝手なこと喋舌つてると、いろんなことすつかり忘れちやつて、から大變のんきなんだ。のんきに限らア。おつかあだつてのんきのがだぜ。』

『そりや私はのんきさ。のんきでなきやア、此の歳になつて、孫を相手に風船なんか賣つて生きてゐるもんかね。」

「さうだ、それで好いんだ。俺ア世間のことに何も知らねえけれど、おつかあ見てえに、風船賣つて、のんきにしてゐるなア一番だぜ。俺アそれが一番好いと思わ。」

『何が一番だい。呆れるよ、この人は。お前さんなんさア働き盛りで、何でも出來るんぢやないか。こんな年寄りと同じやうなことしてゐて何うするの？　確りおしよ。』

「でもそれが好んだ。俺ら飴を賣るのをやめたら駄目だ。何だか駄目なやうな氣がすらア。」

「馬鹿にしてゐるよ。餘ツぽど何うかしてゐるんだね、お前さんは。」

二人は、そんなことをいひながら、一つ路次を入つて、お互ひに向ひ同士の、破れ格子を引あけて分かれた。

飴やの系さんは、薄暗い上り口から、すぐと階子段を上つた。

『をやお父さん……今夜早かつたのね。』 薄暗い電燈の下で、鼻緒を手にしたなり、十七八の、目のくるりとした、口元の締つた、粂さんの象のやうなのとは大分違つた、賢こさうな顔付の娘が座つてゐた。

『今日はから駄目だつた。何うも彼處は何時もいけねへ、何ういふもんだらう。それに、御向ふのおばさんが、ポツ〳〵やつて來つてえから、急いで仕舞つて來ちやつた。』 親爺は、荷を解いて、縁のとれた小さい長火鉢の傍に胡座をかいて、『もう大分寒くなつたな。これからは、吹き曝しは下さらねへな』

『さうねへ』 娘はさういつて、一寸笑つて見せながら、『飲んで?』

『濟まねへなァ。だがあるんかい?』 粂さんは、子供が物をねだる時のやうな顔をした。

『あるのよ。』 娘は立ち上つて、手早く仕度をして、徳利を湯沸の中に差入れた。

『何うして有るのか知つてゝ?』 娘は、首をかしげて見せた。

『濟まねへ〳〵。』 親爺はむやみに恐縮して、『今日問屋へ行つたのか。』

『いんへ、さうぢやないの。』

『さうぢやねへ。ぢや何うしたんだ。』

『今日ね。』 娘は焦らすやうに『好いお話があるのよ。』

『何だい、好い話つて。何うせ碌なことぢやなからう。』 親爺は、まだ出來る筈のない徳利を出しては觸つて見てゐる。

『好いお話なの。今しがた、あの新さんが來たの、お酒をお土産だつて持て來てくれたのよ。』

『何、植木屋の新公か。何んでへ、何年にも俺のとこへなんぞ來たこともねへ癖に、何うしたてんでへ。其れに酒なん

ぞ持つて來やがつて。まさか溢は入つちやゐやしめえな。』そんなことを云ひながら、粂さんは、待ち切れないやうに、徳利を出して、一寸猪口に注いで、又湯沸へ返した。

『ひどいことといふのね、お父さんは。』娘はたしなめるやうに『新さんは、大變好い植木屋さんになつてゐるのよ。田〇様つて伯爵とかだつて華族さんのお出入なんですとさ。……それで好いお話があるの。』

『何だつて？　田〇さんてへ華族さんのお出入だつて？　新公の奴は若いうちからおべんちやらがうまかつたから、出世すらア。で好い話てえのは何なんだい。』

『その華族さんの別莊が澁谷とかにあつてね、それが大變に廣い〳〵、上野見たいに廣いんですとさ。そのお邸には、立派な御殿や西洋館があつて、それから動物園見たいに、孔雀だの鶴だの、いろんなものが居て、御馬も澤山飼つてあつて、殿様や若様が停で御乘りになつて、奥様まで御乘りになるのですつて。さうしたら今度、何とかいふ、私聽いたけど忘れちやつたわ、實業家がね、象をお邸へ献上したんですとさ。』

『何、象？』粂さんは、口に持つて行きかけた猪口を中途で止めて、小さい目を見開いた。

『えゝ象よ。』娘はつゞけた『何んでも若様達が、ふだんから、象に乘りたい、象に乘りたいつて云つたもんだから、その實業家が、献上したんですつて。華族さんなんて好いものね。そんなことをいふと、すぐ誰れか象を持つて來てくれるなんて。私華族さん、ほんとに好いと思つたわ。』

『その象が何うしたてんだい。』親爺はもどかしがつた。

『でね、その象の番人を探したけどないんですつて、印度から態々取り寄せたんで、誰れもまだ馴らしたものがないんですつて。それで新さんも頼まれてね、考へて見ると、お父さんが、象やだつたので、こりやうまいと思つて、大變お

父さんとこ探して、やつと解つたんで、今夜お酒のお土産を持つて、今しがた來たのよ。お父さんの歸りが遲いつて云ふつたら、ちやあしたの朝早く來るから何處へも行かずに待つてゐるやうにつて、歸つて行つたのよ。こんなに早いと思つたら、待つてゝ貰ふのだつたのに。』

『で何か、俺にその象の番人になつて、馴らしてくれつてんだな。』

『えゝ、お邸のお長屋へ入つてね、御給金も澤山出るんですつて。何んでもね、象を馴らす人なんか、滅多にないから、お父さんが來れば、御給金はいくらでも出すつて、お邸では、さう云つてるのですつて。いくらか知らないけど、何でも大變らしいのよ。新さんがさういつてたわ。お父さんがたまげるほどの御給金だつてつて。お父さんは承知するだらうね、て新さんがいふから、私、それは承知しませう、て云つたわ。お父さん承知して？するわね。』

『そいつァオツりきな話だ。象も、「善八」見てへに、あんな稼業さして、日本中引張り廻して、とう〳〵殺ろしちやつたりしちや、もう、俺眞平御免だが、お邸のなら、そんなこともあるめへ。』粂さんは、さういつて暗い顏をした。

『善八』といふのは、粂さんが、使つてゐた象の名である。粂さんは、横濱で生まれて、「濱の黑坊」で通つてゐた印度人の動物商に使はれてゐた經驗から、或る興業師が、其の印度人の手から買つた象について、その興業師の手で興業をして歩いてゐたのであつた。善八は、まだ生後二歳足らずの小象だつたので、粂さんは、自分の子のやうに、それを育て上げて、十何年間、その象が、小山のやうな大象になるまで、一日でも、その象の傍を離れたことがなかつた。それは、必ずしも、粂さんの愛着ばかりではなく、子供のやうに、粂さんに馴致んでゐた象は、一日位は兎に角、二日三日粂さんの姿を見ないと、氣が荒くなつて、直きに吼え狂つて、外のものゝ手に終へない爲め、粂さんは、必要上、何う

しても、長く善八の傍を去ることが出來なかつたのである。けれども、粂さんも、自分の留守に、善八が、物を喰はないで暴れ狂つてゐる話を村から聽かされると、自分も、とても長く善八と離れてゐることは出來ないと思ふのであつた。

『善公、何んだつて俺の留守にそんなに暴れやがつた。』と粂さんが、傍へ行つて怒鳴りつけると、善八は、詫びるやうに首を下げて、垂れた鼻をブラン〳〵やつて、頻りにフウ〳〵と嬉し相な息を吐くのである。

粂さんが、この善公を引張つて、各地の興業をして廻る際には、元より汽車には乘せられないので、ズックで大きい蚊帳のやうなものを作つて、それをすつぽりと善八の身體に被せて、歩かせるのであつた。善八は、鼻の先だけを蚊帳の下から出して、巧みに方向を定めながら、のそ〳〵と往來を練つて行くのであつた。

或る晩、善八は、さうして木曾街道を練つて行つた時に、雨後の爲に壞れて、軟らくなつてゐた地盤を、知らずに踏んで、數丈の崖から河原へころげ落ちて、とう〳〵命を失つてしまつた。その際傍についてゐた粂さんも、一緒に轉ろげ落ちたが、幸に土砂の上を辷つただけで、一時は氣絶したが、救けられて直ちに蘇生した。粂さんは、自分が息を吐き返すと直ぐに、善八の上を尋ねた。善八が、岩に打たれて重傷を負うてゐると聽いて、粂さんは、人に扶けられて、善八の倒れてゐる河原に下りて行つた。さうして、河原の砂利の上に巨い身體をころがしてゐた善八の頭にしがみつきながら、下顎を引抱へて、粂さんは、聲を限りに善八の名を呼んだ。その聲を聽くと共に、善八は細い眼を開いて、悲慘な叫び聲を一聲二聲擧げたきりで、そのまゝ絶命してしまつた。粂さんに、善八に取りついたまゝ、『善八が死んだ。〳〵、俺も死んでしまう〳〵』と物狂はしげに叫んだ。それから數日の間、粂さんは、殆んど狂の態で、たゞ時々『善八が死んだ、俺も死んでしまう』と繰り返へすばかりなので、一同は、嚴重に粂さんを監視してゐた。善八の遺骸は、その河原で火

葬にして、山のやうな遺骨を、そのまゝ河原に埋めて、一同はそこを引揚げたが、条さんは、東京へ歸つてからも、久しく、興業師の世話で、腦病院に入院してゐた。回復してからも、条さんは、口癖のやうに、『俺は死ぬ時には、あの河原へ身を投げて死ぬのだ』と云つてゐた。

　条さんは、その後いろ〱の仕事を轉々して、結局象を賣る大道商人になつたのは、それから何年か後のことであつた。条さんは、何商賣をやつても、善八が眼の先にちらついて、ちつとも氣乘りがしないので、すべて失敗に終つて、ひどく貧乏してしまつて、親子三人喰はず飮まずでウロ〱してゐるやうな日も鮮くなかつた。その頃、ふと往來で、条さんが横濱時代に出入した貿易商に逢つて、事情を聽かれて、その後の身の上を話すと、主人は氣の毒がつて、自分の店で扱つてゐる玩具の象を分けてくれて、条さんは、それを大道で賣ることになつたのであつた。

　条さんは、玩具の象を賣るやうになつてから、ひどく商賣熱心になつて、雨の降らない限り、何處かへそれを賣りに出ない日はなかつた。さうして、それを蓙の上に列べて、その前に座つて、賣れても賣れなくても、何か一人で喋舌つてゐれば氣が濟むのであつた。その代り、自分の前に玩具の象のないところでは、条さんは、言葉を忘れてしまつたやうに、口を利くのを臆劫がつて、酒でも飮つた時の外――その時は又よく喋舌つた、――話の受け答さへ頗る冷淡なことが多かつた。

　尤も善八の生きて居たころから、条さんは、そんな風だつた。条さんが、面白ろ相に話をする相手は善八だけで、人間と話をするのは、条さんには、難義なことのやうに見えた。餌をやる時でも、寢藁をかへてやる時でも、

『さあ善公、御馳走だ。なんて嬉れし相な面しやがるんで。それ涎が垂れら、見つともねへ。十日も喰はずに居たやうだなア。だが胴體が大きいから餓もじからう、辛棒してくれ、俺が惡いやうにァしねへから。』

そんなことをいふのは、雨でも続いたり、入りの悪かつた時には、食料の玄米の分量を減らされるので、条さんは苦心して、半日少しつゝ誤魔かして、取つて置いて、そんな時に、足してやつたりすることをいふのであつた。

「さあ吉公、布団が敷けたから寝なせへよ。好い秋だなア。けど俺達はおめへのお陰で、御まんまが喰べられるんだから、おめへに使はれるなア仕方がなねへや。今夜済まねへけど、おめへと雑魚寝をさせて貰うぜ。藁が新しいから、臭へ布団よりいくら好いか知れねへ。暖で御免よ。」

そんなことを云ひながら、条さんは、よく吉八と一緒に藁の中に転がつて寝るのであつた。仲間が、陰で吉八をいぢめたり、馬鹿にしたりしたのが、条さんに知られたら、それこそことだつた。

「やい吉公、おめへのお陰で飯を喰つてゐる奴らに、あんなにされて、黙つて引つこんでゐる道理があるかい。なんだつてその鼻でヒツぱたいてやらねんだ。人が善いにも程があら。おめへが恥を掻かされるのア、俺が掻かされるも同然だ。待つてゐねへ、仇を打つてやるから。」

条さんが、さういひ出すと、相手に、条さんが、象を使ふ所口を小路に抱ひ込んで現はれない先きに、飴之利と黒砂糖を持つて、条さんと吉八に詫びに行かなければならなかつた。

その代り、吉八が少し条さんの云ふ事でも聴かないで、満足に藝當をしなかつた時には、条さんは、半日位、吉八を怒鳴付けてゐるのであつた。

「でかい図体しやがつて、大飯を喰らやがつて、働くのが厭やたア何の事つた。手前のやうな獣だつて、人間を多勢喰はして呉れると思ふから、俺だつてブツとも云はねえで、手前に奉公してゐるんだ。働くのが厭やで、毎日ぶら〳〵遊んでゐてへなら、勝手にしろい。俺もう手前に奉公しねえから、さう思へ。人間が、遊んでゐる獣に奉公するギムはね

へんだ。俺達の命の親だと思ふから、大飯を喰はしてやつてるんだぞ。手前が忌だつてへなら、俺だつて忌やだ。奇麗さつぱりと縁を切つてしまう。その代り、明日から、手前、人間の米を喰やがると承知しねへぞ。人間の爲めをしねえものが、人間の米を喰ふケンリはねへんだ。穀潰ぶしだ、殺ろしてしまへ、といふ奴があつても、俺ァもう助けてやつてくれ、とは云つてやらねへからさう思へ。……』

そんな風なことを、のべつに善八にまくし立てるのである。善八を前にしての象さんの雄辯は、丁度今、玩具の象を前に置くと、ペラ〱と出鱈目な口上が、口を突いて出るのと同じであつた。

『新さんの話ぢや、』娘は、象さんに、話の續きを云つた。『その象てえのは、まだ小さいのだけれど、少し荒らくつてね、檻から出した時に、大へん暴れて、向ふから附いて來た番人を大怪我さしたんですつて、それで今ぢやゆはいた切りで、遠くの方から、桶に入れた食べ物を、棒の先で、押してやつたりしてゐるんですつて。誰れも傍へよれないんだつていふのよ。お父さんなら大丈夫だらうけども、もう久しく象の世話もしたことがないから、怪我でもされると、私大變だつて、新さんに云つたのよ。お父さん何う？　大丈夫？』

『そりや、俺なら大丈夫だ。善公だつて、一生荒つぽかつたつだからな。動物園の象見てえになつちやつたんでも、俺なら馴らして見せる。そんな子供は屁でもねへや。』象さんは、チビリ〱やりながら、流石に得意の色を示した。

『それならいゝけれど。でも新さんはさう云つてよ。萬一怪我でもして片輪になつたら――お父さんなら、そんな事はないけれど――まあそんな目に逢つたら、一生樂に遊んで暮らして行けるやうなお手當が、お邸から出るんですとさ。隨分象一匹でも、怠けた、お人好ぢやないつて、新さんがさう云つたわ。』

「さうかなア。ぢや何だな。俺が行けば、象を相手にして遊んでゐて、お給金を澤山貰つてゐられるつて譯だな。うめへな。明日新公が來たら、すぐにもお邸へ行つてやらう。玩具の奴より、本物なら、何んなに面白れへか知れねへ。きい坊、俺ら運が向いて來たんだぜ。」條さんは、他愛のない顏をしてうま相に飲んでゐる。

「嬉しいのね。私だつてさうなつたら、工場へ行かないで濟むかしら。私も何かお邸の御用でもしてゐれば、好いでせうね。」

「さうだ。象も象だが、人間が第一だ。おめへだつて、さうなりアちよつとは、樂になるだらう。それだけでも、お邸へ行くだけのものはあらア。……けど何か、お邸ぢや、別に其の象を興業師に貸してやる譯でもなし、見物人に見せて、藝當をやらせて大сн取るつてんでもねへんだな。」

「それはさうよ。華族さんが、そんなことする筈にないわ。」

「さうぢや、何んで象なんぞ飼つてゐるのだらう。」

「あらお父さん、いやだわ。だから私云つたぢやないの、若樣が、象に乘りたいつて云つたものだから、誰れかゞ獻上したんで。若樣したのね、お父さんわ。」

「あゝさう〳〵。若樣のおもちやだつけ。……けど詳しいなア。毎日おもちやの象を賣りに出ても中々賣れねへのに、本物の象をおもちやにするものもあるんだなア。それならおらうちの玩具の象が買つてくれてもよさ相なものだになア。」

「でも、大道で賣るにしちや、あの象は高過ぎるつて、お向ふのおばさんも云つてゝよ。だから賣れないんだわ。」

「高けへたつて、象だもの。本物なら千兩もするんだ。當今ぢや、中々そんなもの買やあるめへ。そいつを玩具にしてゐ

るものがあるんだから、三十錢や五十錢の象は高へことはねへや。』

『でも、それは大變な華族さんなんちやないか。そんな人は、世間にさらにあるもんかね。子供のおもちやに三十錢も五十錢も出すなァ、贅澤だわ。』

『だつて何千兩もする本物の象をおもちやにするものさへあるんだ。三十錢や五十錢の……』

『お父さん又同じことを言つてるよ。だからお酒を飲むと、あたい、お父さん忌やだつていふのよ。』

粂さんが、田〇子爵の別莊——といつても、そこが實は本邸で、市内の邸は、寧ろ先代の奧方の隱居所になつてゐるのであつた。——に引移つたのは、それから數日後のことであつた。

あの翌日粂さんは、植木屋の新さんに連れられて、お邸に象を見に行つた。馬場の傍に、新しく建てられた洋風の洒落れた象の小舍は、先づ粂さんを驚かした。粂さんは、もうすぐと、そのことを象に話し出した。

『やい手前、こんな西洋館にへえりやがつて、我儘一杯してやるがるた太へ奴だ。晋公を見ろい。年中天幕小屋に寢起をして、日本國中稼いで廻つて、俺達を養つてくれたんだ。さうして、しめへに、崖から墜つこんで死んでしまつたんでえ。あゝあ、一遍でもこんな西洋館に入れてやりたかつたなァ。』

粂さんは、さういつて、ボロ〱涙をこぼした。象を馴らす名人が來たといふので、ゾロ〱出て來て周圍を取りまいてゐた、殿樣や奧樣や若樣達を始め、家令や召使の男女は、粂さんがそんなことをいつて泣き出したのを見て、驚くよりも、可笑がつて、腹を抱へて笑ふものもあつた。譯を知つてゐる植木屋の新さんは、寧ろ粂さんに同情したやうに、

『晋公を思ひ出すのは無理はねへ、粂さん、晋公の二代目だと思つて、此奴を可愛がつてやらァ好いや。』

そんなことをいはれると、象さんは堪へられなくなつて、手拭で、ごしごし眼をこすつて、外聞もなく声を叫つてゐるばかりである。その真面目さ加減は、笑ひながら見てゐた人達も、笑つたことを間を悪がつて、しんみりとした心持になつたやうな顔をする位であつた。

『新公爵またかつた。俺はもう大分年を採つちやつたから意気地がなくなつちやつた』象さんは、漸く涙を収めて、そんなことを云ひながら、小さい象に近いて行つた。

何しろ、誰れも近よつて世話をするものもないので、折角の石像の床も、糞尿で一杯で、象は太い足で、泥濘にゐるやうに、それをくちやくちやと捏ね返してゐた。

『ヤア大変だ。』それを見て、象さんは顔をしかめて『こんなことをして置くから象だつて機嫌が悪いんだ。赤坊がおしめを汚したまゝで置くと、ギヤアギヤア泣くのと同じだ。』

象さんは、象を一週、馬場へ追ひ出すから、男衆が皆で小舎を掃除してくれといひ出した。居合はしたものは、そんなことをされては、大変だと騒いで、家令の老人は、それは所謂虎を野に放つが如きものだ、などと云つたけれども、象さんは、まあ見てゐて下さいといつて、扉口を背にして悠々と象の鼻の先へ歩み寄つた。

ブランブランと象に鼻を振つたので、象さんは、今にもその鼻の先で刎ね飛ばされるかと、一同ヒヤリとしたが、意外にも、象は、その鼻を、高くあげて、ホールドアップを喰つた西洋人のやうな風を見せた。象さんは、自分の身体を象に凭せかけて、その下の方へ差し出てゐる下唇を摑んだかと思ふと、象は、恐ろしい聲を立て、ワオーと叫んだ。取り巻いてゐた連中は、同じやうな聲を立てゝ逃げ出したが、象さんは、それでもう象の友達になつて、鼻先に突立つて、懐に入れた固パンを出してやつてゐた。もう無いと、手を振つて見せると、象は、鼻の尖きを象さんの懐に差し入れたので、

一同は大笑ひだつた。

象さんは象の後へ廻つて、太い杭に繋いである後足の綱を解いてやつた。象の身體が全く自由になつたので、取巻いてゐた連中は、驚いて、皆馬場の埒の外へ出てしまつた。久しい間、そこに結ひつけられてゐたので、象は自由になつても、動き出さうとはしなかつた。象さんは、閑ぱんで象を誘つたけれども動かなかつた。頸の邊に卷いた綱を男達が大勢で引張つて見たけれども、大磐石で、ビクともしない。

すると象さんは、男達を悉く埒の外へ出してしまつて、自分はシャツ一枚になつて、例の鳶口を持つて、象の後ろに廻つた。皆は、象さんが何をするかと遠方から見てゐると、象さんは、いきなり、その鳶口を大上段に振り上げて、エイとばかりに、象の尻を目がけて打込んだ。それで象がビクともしないのは一同を驚かしたが、象さんが更に矢聲を上げて、二つ三つと打ち込むと、象は、俄に恐ろしい叫び聲と共に、小舍を飛び出して、その巨軀を疾風の如くに走らせて、埒の外の見物まで聲を立てて逃げ惑ふのを追ひかけるやうに、馬場の埒の内をぐるりと一周して、小舍の前に立ち止つて、荒い息を吐いてゐた。埒の、象の身體の觸れたところは、芋殻のやうに外の方へ折れ曲つてゐた。その時、何よりも皆を驚かしたのは、象の後ろに立つて、鳶口を象の尻に打ち込んでゐた筈の象さんが、荒れ狂ふ象の頸玉の綱に釣り下りながら、象と一緒に馬場を一周したことであつた。フウ〱と息を吐いてゐる象の頸の下で、象さんもフウンウ云つてゐた。

久時して、象さんが、象の頸の綱を採つて、徐かに歩み出すと、象も、同じやうにのそ〱と歩き出した。一同は覺えず喝采した。それからもう、象は、若様始め一同の友達になつて、埒の内から鼻を伸ばして、その人達の手から閑パンを貰つて、喰べた。

で条さんは、所謂魂げるやうな給金で、象の家庭教師——若様がさう云つた——として、田〇子爵家の長屋に住むことになつたのであつた。

条さんは、この象に『善八』といふ名をつけることを子爵家に伺はうかとも思つたが、善八の最期のことを考へて、此の象の爲めに、それはやめて、元から付いてゐたゴルコンダといふ名の頭だけ云つて、ゴルさんと呼んでゐた。『さん』といふのは、善八のやうに興業師の持物ではなく、華族様の持物といふので、敬意を拂つた譯であつた。

ゴルさんのお守役となつて、子爵家に入つた条さんには、自分の生活も周圍の生活も、皆条さんを面喰はせるやうなものばかりだつた。第一自分の月給が百圓といふのが、条さんには最初の驚であつた。善八を連れて歩いてゐた頃は、給料といつては、月廿五圓で、たゞそれに木戸の歩合がつくが、これは甚だ不定で、ひどく景氣が好ければ百圓位になることもあるが、それは與ろ稀れで、大抵はその半分にもならなかつた。然かも条さんは、歩合ならば、百圓が二百圓でも、もともと木戸がそれだけ入るのを、約束通り分けて貰うのだから、誰れのお情をうけてゐる氣もしなかつた。象のお守をするものに百圓も呉れるのは、何ういふ勘定なのだか、条さんには分らなかつた。で娘のきいちやんを捉へて、さういつた。

「だつておめへ、驚いちやうぢやねへか。象のお守りに百圓も呉れのは、大變なことだつと思つたら、何おめへ、それどこぢやねえんだ。自動車の運轉手だつて、その位貰つてゐるんだ。それからおめへ、今は居ねえさうだが、犬ころのお醫者が居たんだが、それはおめへ驚いちやいけねへぜ、月三百兩だつてへぢやねへか。尤もその犬てえのが千兩からするんだつたんだ。新公の奴、時々殿様の鐵砲のお伴をするんだてへが、その時殿様やお附きのものお持つて行くものだけで、一萬兩からの金目のものだてへから驚かア。第一鐵砲が、何とかいふ奴で一挺千五百兩てへのを何人かで一

つ宛持つて行くから、それだけでちき五千圓位にならァ。それに犬が千兩よ。洋服がおめへ、猿皮の洋服だつてへぢやねへか。これもぐづ〳〵すりや千兩だとよ。まるで夢見てへな話だ。せへから自動車てへものは、俺今まで、そんなたいしたものたァ知らなかつたが、殿樣の乘つてるのは一萬六千兩だてへぜ。それで日本一てへ譯でもねへんだとさ。馬だつて矢張り一萬兩。いやになつちまはァ、一萬兩が、そこら中にごろ〳〵轉がつてゐやがら。俺ァつく〳〵いやになつちやつたァ。」

けれども粂さんは、ゴルコンダのお守をしてゐると、そんなことは、皆忘れてしまうらしかつた。粂さんは、若樣達をゴルさんの背中に乘せる外に、ゴルさんに、前足をあげてチン〳〵することや、片足をあげて招き猫の眞似をすることや、前足を折つてお辭儀をすることや、碁盤乘りと稱して、四角な石の上へ乘つてグル〳〵廻ることや、鼻で喇叭を吹くことや、オイチニの號令で足踏みをすることや、いろ〳〵のことを教え込むので、晝の間は、まるで家に居なかつた。娘のきいちやんは、工場へは行かず、内職はせず、暇な身體を持ち扱つたが、御殿からの言ひ附けで、晝の間、お臺所を働くことゝなつた。で親子二人は、夜になると、お互に、見たり聽いたりした外國の生活のやうな御殿の生活を話し合つた。きいちやんは目を丸くして、こんなことを云つた。

『ね、お父さん、あたい今日、お奥が皆お留守だつたので、お掃除番にくつゝいて、御殿をすつかり拜見したのよ。その立派なことつたら、まるでお芝居の御殿のやうよ。お廊下がずつとあつて、廣い〳〵お座敷が澤山列んでゐて、誰れも居ないのよ。疊がつる〳〵して、あたい驅け出したら滑つてころんぢやつたわ、それから、西洋館の方たらないのよ。大きな油繪がいくつかあつて、そこら中が何だかキラ〳〵して、けど道具屋へ行つたやうに、いろんなものが列べてあつたわ。せへからちよいと〳〵、お父さん、お寢間を拜見したわ。そこら中に立派な幕がかゝつてゐて、大きい寢臺が

あつて、それがすつかり森で隠れるやうになつてゐるの、せへから、殿様と奥方とそこへお入りになると、お部屋の内から鍵をかけてしまうんだつて、ホヽヽヽ、訝しいわね。」

「ヘッヘッへ。うまくやつてやがら。」粂さんは、例によつてチビリ／＼やりながらそんなことをいつた。

粂さんは粂さんで、自分が新公につれられて、お庭を拝見したことをきい坊に話して聴かせるのであつた。

「何んだつておめへ、山があつたり、谷があつたり、森があつたり、物凄い八幡知らず見てへなことがあるかと思やア、奇麗な芝生になつてゐて、好い見晴があるんだ。立派な石橋が懸つてゐるかと思やア、壊れかゝつた田舎の土橋のやうなのだ、溝見てえなとこにかゝつてゐるんだ。さうかと思やアお池の中へ八ツ橋が懸つてゐて、藤棚があつて、風流つて奴なんだらうな、あれが。せへからおめへ、さつきの芝居のとこに、土蔵の抜け殻見てえな、真白い變挺なものがあるんだぜ。これやア何だつて聴いたら、それがおめへ、野天で芝居をする舞台だつてへぢやねえか。その芝居てえの新公は見たんだつてへが、なんでも若い別嬪が大勢で、紗のやうな着物を着て、身體を丸出にして、大勢でひつからんで踊るんだつてぜ。たまらねえ、てやがら。そいつ一つ見てやりてえもんだな。昔大名が、御殿女中に裸踊をさせて涎を垂して見物したつてへが、そいつを西洋で行くんだな。けど、野天だつてえから、こいつの方が豪れえや。何しろ豪的なもんだ。好い様だなア。年中そんなことして、仕てへ三昧してゐたら、たまるめへな。三日でも好いから、やらして貰へてへな。あゝあ、俺何だか變挺になつちやつた。」粂さんは、何かいふと、乾度しまひにそんな嘆聲を發するのだが、根つから忌やになつたらしくもなく、うま相に尖つた口を猪口に持つて行くのであつた。

「でも殿様も奥様も、随分氣さくな方よ。」きいちやんは、そんなこともいつた「何處とかの新華族たらの殿様なんぞは、お自分の御殿の御臺所へお出ましになつたことはないなんて方があるつてへけど。こちらの御殿様は、奥方と御一緒

に、時々御臺所へおいでになつて、やれ流しがこれぢやいけないの、御戸棚の工合を斯うするので、大工に御指圖するんですつて。その度、又御模様代へで勝手がわからなくなるつて皆困るんですとさ。今日は、女學校の生徒だつてのが、大勢で來て御臺所拜見ですつて、ワイ〳〵云つて、それァ大騒ぎだつたわ。奥様がお出ましで、長い間、そちを開けたり、こちを揚げたりして、皆に御話してゐたわ。道理で、今朝から總掛りで、入れ物を仕末したり、いろ〳〵な喰べ物をそつちへ置いたり、此方へ置いたりしてゐるから、何が始まるのだと思つたら、女學生が、見に來るんでその御仕度だつたんだわ。何んだつて、華族さんの御臺所なんか拜見に來るんだらう。』

『そりや、おめへ、華族さんの御臺所は大きなもんで、いろんな御馳走が澤山仕舞つてあるから、拜見するんだあな。おめへが殿様のお居間を拜見に行くやうなものだ。そこが下々だ。そんなもの見たつて、何うにもなりやしねへんだが、矢つぱり見てへんだ。下等社會てものは淺ましいもんよ。』と粂さんは、矢張り嘆聲を發するのであつた。

そんな風に二三月經つた頃のことであつた。或る晩、きい坊は、粂さんに、こんなことをいひ出した。

『私ね、御殿の奥女中の隊長の、あのほら、よく象を見に來る變つた御婆さんね、あの人が、私に、貞×様のお部へお小間使に行かないかつていふのよ。行儀見習つてんですつて。さうしていろ〳〵何年か辛棒すると、お花だの、お茶だの教へていたゞけるのですつて。』

『貞×様てえ何だ。』粂さんは、嬉しさうに、さういふきい坊の顏をじろ〳〵見ながらさういつた。

『貞×様つて、御殿様のずつと末の弟さんなのよ。あれ何度も象を見に來たぢやありませんか。』

『おめへ此頃いやに言葉が丁寧になつたなァ。矢張御殿へ上つてゐると、人間らしくなるのかなァ。』粂さんは、つけもなく、そんなことを云つた。

「あれ書生なんかどうでも好いのよ。それより、貞×様のお邸へ上つちやいけない？」

「貞×様つてえのは、あの馬に乗つてよくふさけるあの人か。」

「えゝ、立派な若様よ。でもまるで書生さんね。」

「書生さんて云や、此方の大將だつて、まるで書生つぽぢやねえか。奥方だつて、女書生に毛の生えたやうなもんだ。あんな風をして、何うして、こんな立派な御殿やお庭が入るんだらうな。昔の大名なら「下に居ろ」で道中を練つて歩いてゐるんだから、御殿も入るだらうが、今の華族なんざァ、書生つぽだもの、こんな大きい屋敷を抱え込むことなんさァ入りやしねへんだ。何だか可笑しいや。」

「そんなこと何うでも好いぢやないの。それより私貞×様のお邸へ上るわ。」きいちやんは、頻りに貞×様を主張した。

「そりやおめへが、行きたけれァ、行くが好いや。家にゐて、毎晩、親爺の酔つぱらつた面ばかり見物してゐたつて面白くねへことはあるめへ。行きなせへ。貞×様でも、笠森様へでも行きなせへ。」粂さんは、別段不機嫌といふ風でもなく、皮肉らしいことを云つた。

「あれお父さん、そんな謂ちやないのよ。私だつてちつたァ行儀も覚えたいし、何か稽古位したいぢやないか。工場へ出たり、内職したりしてばかりゐたんだもの、學校だつて碌に行きァしないから、御殿へ上つたつて、肩身が狭くつて、泣きたくなるわ。」きい坊にそんなことを云つて、少しはツンとして見せた。

「エヘツへ。御殿へ上つたと思つ、大分氣位が高くなつたな、さうして何か、華族さんの御聟さんでも貰はうつてのかい。」粂さんは自分も柄にない戯談をいつてゐる。

『馬鹿におしでないよ。お父さんは、そんなこといふんなら私、お父さんに構はず、行つてしまつてやるから好い。』

『ま、まつて呉れよ。お父さん、てめへに行かれちやうとちつと困るなァ。』

『何だい。今まで散々人を困らして置いて、今になつて、俺が困るもないものだ。』きい坊の氣焔は中々强い。

『だからよ。今になつたから困るんだ。俺は一人ぼつちは、馴れつこになつてるけれど、此頃は、何だか、年の故か、一人ぼつちが淋しくつていけねへ。』

『ゴルさんがゐるぢやないか。お父さんは象の顏さへ見てゐれば、いゝんぢやないか。』

『ところがいけねへ。』粂さんは、醉つてもゐるが、醉つたよりも、外の心持で、それをいつてゐるやうであつた。

『何うもゴルさんは、善公見てへにいかねへ。』

『何うしたのさ。』ときい坊も少し意外のやうに目を見張つた。

『何な、俺は善公に蝶笛をさして歩いてゐた時分にァ何んだかから、善公と俺とで、皆を征伐してゐるやうな氣がして、善公と俺と居さへすりや、何處を轉ろがつて歩いたつて、皆がお賽錢を上げて俺達を拜がんでやがると思つてゐたんだ。だつて、さうだつた。善公と俺とは、何處の何奴にも、頭を下げて金を貰つて居たんぢやねえんだ。見てへ奴は見ろ、見たくねへ奴は見るなつて威張つてゞも、皆見に來たんだ。そればかりぢやねえや。善公だつて俺だつて、同勢を皆喰はしてやつてたんだ。俺達二人は隊長だ。指でもさす奴があれば唯措かなかつたんだ。だから善公だつて、皆が「大夫さん〳〵」て立てゝゐて、御機嫌でも惡いと、心配してお世辭を使つたもんだ。善公と俺は夫婦の王樣だつたんだ。その善公が死んぢやつたんでへ。』粂さんは、久しぶりで、又善八の死を追想して、ボロ〳〵涙をこぼした。

『お父さん、もうおよしよ。お父さんは善公のことを云ひ出すと、屹度泣くんだもの。ゴルさんが居るからいゝぢやな

いか。二代目善八が出來たつて云つて、お父さん喜んでゐたぢやないか。』

『うん、もうよさう。』秦さんは、水洟をすゝつて『けれどな、きい坊、ゴルさんぢやいけねへんだ。何うしても駄目だ。俺はもうつく／＼いやになつちやつた。百兩に惜しいけど、俺もう魚ぁ廢めたくなつたつちや。』

『何うしてさ。』ときい坊も多少不安な顔をした。

『だつてさうぢやねへか。善公と俺は王様の夫婦だつたんだ。誰れにだつて頭を下げて、幇間持ち見てえなことはしやしなかつたんだ。俺のすることを見せてやるつて、威張つてゐたんだ。』

『そりや解つたよ、お父さん。ゴルさんが何故いけないんだ聽いてるんぢやないか。』きい坊に悶どかしがつた。

『ゴルさんはおめへ、あんな小さな餓鬼に玩具にされて、おんぶしたり、御辭儀をしたり、意氣地はねへんだ。さうしなければ、餓鬼に喰にされねへから、仕方がねへや。』

『そりや善八だつて同じぢやないか。』

『違はい！　善公に、俺の間夫なんだ。俺と一緒なら、嬉しがつて何でもしたんだ。それだから、俺が忌やだつて云へば善公だつて忌やだつて云つた。善公がいやな時にて、俺だつていやだつた。二人で忌やだつて云つたら、皆閉口しちやつたんだ。御酒だの御佛餉だの持つて御願に來やがつた。俺よく善公がふてると人間の役しねえ奴は死んじまへ、て吹鳴つてやつたけど、馬鹿にされたり、強引で來られたりすりや、誰れがすなほに働いてやるもんか。働らかねへで困るつてたら、ちやんと道を立てゝ來いて云つてやるんだ。』秦さんはもう猪口を忘れてしまつて、水洟をすゝりながら續けた。

『ゴルさんは駄目だ。そんなことといつて威張つたつて、誰も困らねへ。あんな腰抜の。……』

「お父さん、若様のこと「餓鬼〳〵」つて何だねへ。人に聴かれでもしたら大變ぢやないか。」きい坊は隣を氣にして遮つた。

「何んでへ、若様だつて、餓鬼は餓鬼だ。……あんな餓鬼にヘイコラしねへちや飯が喰へねへんだ。……俺だつてさうだ。ゴルさんと一緒になつて、チン〳〵したり、お辭儀したりしてゐるんだ。全體あんな大きな圖體したゴルさんが——俺だつてさうだ。これでも一人前の人間だ——そいつが二人揃つて、あんな餓鬼の前で、チン〳〵したり、お廻りしたりして、固パンの一つや半分貰つて喜んでゐると、何の事つたい。あの餓鬼共は、何のケンリで俺達に、そんな眞似をさせやがるんだ。餓鬼の癖に、三千兩もする象を玩具にしやがつて、——世間の子供は、俺の賣つてた五十錢の象だつて、高えの安いのて、買つて貰へねへでゐるんだ。第一親爺の奴が間違つてら、鳥屋へ行つて、一兩も出せばウンと來る鳥を取るのに、千兩の犬だの、二千兩の鐵砲だのつて、何の眞似だ。裸踊りをする土藏なんぞオツ建てやがつて、いゝ年をしやがつて、ちつとは考へろ。親爺がそんな量見だから、餓鬼が增長するんだ。ゴルさんの背中に乘りやがつて、俺の頭を靴で蹴るのを自慢してゐやがら。俺善公と歩いてゐて、そんな眞似をされたら、唯は置かねえんだ。今だつて百兩貰つてなけれア、引摺り下して蹴飛ばしてやるんだ。俺始め百兩なんて貰うな大變だと思つたら、何だ彼奴等、犬の醫者に三百圓もやつてやがるんだ。俺は、娘が死ぬ時だつて、碌そつぽ醫者にも見せられやしなかつたぞ。俺の娘は犬ぢやねへ、人間だぞ。人間を見殺しにしやがつて、犬が風を引いたつて、三百兩だ。……」

きい坊は、粂さんが、今まで醉つて管を卷いても、これほど理屈をいふのを聽いたことはなかつた。粂さんは、巡業中に、善八と自分とが仲間に馬鹿にされた時には、何時も醉つぱらつて呶鳴り出して皆を默らせたのだが、きい坊はそれを知らなかつた。だから、粂さんが、こんな風に呶鳴るのを始めて聽いて、恐しくなつた。壁一重の隣の馬丁の家へ

聴えても大變だつた。で一生懸命に遮つたが、中々默らなかつた。

『お父さん、もうおよしつてば。後生だからよしておくれよ、お父さん。そんなことといつてると、私何處へか行つてしまうから好いや。』

『えゝ行つちまへ、〳〵。貞×樣でも何處へでも行きやがれ。俺も行つてしまはい。誰れが、こんなとこにゐるもんか。』

きい坊はしく〳〵泣き出した。彼女は、怖くなつて呶鳴つてゐるお父さんの樣子を見て、全く恐しくなつたのだらう。さうして、女工場へ通つたり内職をしたりしなければならないことを考へて悲しくなつたのであらう。

『何を泣いてやがるんで。おめへは貞×樣へ行けば好いんぢやねへか。だから行きねへつてんだ。俺一人は、何處を轉がつて歩いてたつて濟まア。』

『おい粂さん、大分御機嫌だね。』さういつて入つて來たのは、植木屋の新さんであつた。障子をあけて、其の場の樣子を呑み込めないで、變な顏をして突立つてゐる。

『何だ、新公か。えゝいけねへ〳〵。入つて來ちやいけねえ。』粂さんは、無暗と手を振つた。

『入つてちやいけねえつて？　何うしたんだい、粂さん。大分御神酒が廻つてゐるね。おや、きいちやん泣いてるのかい。何うしたんだい。』新さんはつぎ穗のないやうな顏をしてそこへ座つた。

『えゝ、出て行きなせへつてことよ。此處はおめへ達の來るところぢやねへ。出なせへ〳〵。』

粂さんは、執念くさういつて、首を振つた。

『何うしたつてんだよ、粂さん。まあ落付いて話をしたつて好いぢやねへか。何うだい一つ豬口を貰はうか。』

『何を云つてやがるんで、おめへらに猪口をやるやうな悪い事をした覚えはねへ。』

『こいつは厳しいな。だが久しぶりで昔の粂さんに逢つたやうな氣がするね。十年前には、それで随分皆を困らしたもんだぜ。』

『餘計な御世話だ。もういゝから歸えんなせへ。』

『何うも困つたね。……きいちやん、一體、何うしたんだい。』

きいちやんは、自分が貞×様に行けと勧められてゐることを、お父さんに一寸話したのが始まりで、こんなことになつたことをいつて、

『お父さんは、もう直ぐにお邸を出るつて云ふのだもの、私いやになつちやつたわ。……』

『さうよ、おめへが貞×様へ行けば、俺は御邸を出るのは當り前だ。』

『粂さん何かい？ きいちやんが、貞×様へ行くのが、おめへ不服なのかい？』

『餘計なこといふない。不服だらうが感服だらうがおめへに用はねへ。』

『さうぢやねへ、大ありなんだ。實は今日もそのことで貞×様からお話があつて、おきくを小間使に使ひたいから、お前一寸、親爺のところへ行つて相談して來てくれ、當人は來るやうなこと云つてた相だからつて、お話だつたから、畏りました、今晩早速行つて話して見ませうつて、やつて來た譯なんだ。』

『何んだと。』粂さんは恐ろしい権幕で、新さんを睨みつけて『そーれ見ろ、俺の推量通りだ。手めへ、きい坊を、貞×の邸へ妾奉公に出す相談に來やがつた。』

『馬、馬鹿云つちやいけねへ。』新さんは身體が一尺位横へ搯れたほど面喰つて『そ、そんなことはあるもんか。唯の

小間使だよ。そんなこと云つちや困ら。……』

『嘘をつけ。』条さんはせゝら笑つて「華族の若殿が、自分で小間使の心配をする奴があるかい。奉公に出せつてに違へねへ。』

『アッハッハッハ。』と新さんは叠を舐めるやうに首を下げて笑つた『おめへは當世を知らねえからそんな事云つてるんだ。今時の華族さんは、そんなものぢやねへよ。自分で、小間使どころか、茶漬の指圖までしるのが當世なんだ。』

『何んでも好いからいけねへ。手めへは、昔からそんなことをして方々のお邸へ首を突込んでゐやがつたんだ。さうでなくつたつて、手前が面を出しや、さうに定まつてら、歸へれ〳〵。』

『困つたなア。何うしてもいけねへや。ぢやきいちやん、今夜はあつしは歸るからね。明日お父さんが醉つて居ねへ時に能く話さう。ぢや条さん、まあ大人しく寢てしまいなせへ。きいちやんが可哀相だ。』

『さつさと歸れ。醒るに手めへの世話になるかい。』

『こいつは違へねへ。アッハッハちやきいちやんお休み。』

翌る朝の条さんは、昨夜のことはすつかり忘れてしまつたやうに、早くから汚たない洋服を着て、ゴオさんの世話をしてゐた。一と仕事済まして小舍の前のベンチに腰をかけてはなたぼつこをしてゐると、新さんが、仕事の裝でやつて來た。

『条さん。お早う。昨夜は大分御機嫌だつたぜ。』云つて、条さんと並んで腰をかけた。

『さうだつたな。何うもよく覺えねへな、何んでも、おめへに「歸へれ〳〵」て云つたな覺えてら。』

『さうだらう。そればかり云つてたんだもの。時にきいちやんの一件だが、おめへやつぱり不服なんかい。』

『きい坊の一件て、貞×様へ行くて事か。』

『さうよ。お前も一人になつて不自由だらうが、百兩がとこ取つて居りや、阿婆さんの一人やそこら置くに世話はねへや。もしなんならもうちつと若い調法のも置けるぜ。アッハッハ。』

『人を馬鹿にしてやがら、頭を見てくれ、頭を。そんなことは、三十年も前の話だ。』粂さんは上機嫌で應對してゐる。

『三十年たァ大く出たな。もつと近所で、つひ此間まで、隨分話の種をこしれへてた癖に。アッハッハ。』

『よしてくれ、冗談ぢやねえ。ゴルさんが笑つてら。』

『そんなこと何うでも好いが、そのきいちやんの一件だぜ。好からう、何うだい。』

『そりや何俺のとこは何うでも好いんだ。けど俺ァあんな生白い殿樣のとこへ小間使なんかにやるのァ何んだか蟲が好かねへんだ。』

『生白くつたつて、眞黒けだつて、殿樣は殿樣だ。何でも好いや、きいちやんも乘氣になつてるんだから、さうしなせへ。惡い事はいはねへ。それに小間使てへものは、中々給金もいゝんだぜ。』

『さうか、幾何位なんだ。相場は。』

『相場つて、別にあるめいが、貞×樣のとこへきいちやんが行けば、三十兩でも五十兩でも、話のしやうで、何うでもなら。』

『五十兩!』粂さんは、目を丸くして、『何でへ、それァ小間使でか?』

『まあよ、小間使にも、いろ〳〵あるてもんだ。粂の御守をしたつて百兩になるんぢやねへか。殿樣のお守をして五十

閑ちや安閑ぎら。』

『ハツハツハ。』条さんは、案外に上機嫌で『おめへは、昔からそんなことばかりやつてるやうだが、さい坊のは、全くそれがおやあるめへな。』

『フツフ。』新さんは、變に笑つて、『条さん、「歸れ〱」て呶鳴らねへかい。』

『何云つてやがるんで。』条さんは苦笑ひをして『それの話か。』

『實は、それの話でなくもねへんだ。』新さんは潮ぶみをするやうに『貞×様は、奥方が病氣で、此介から鎌倉へ行つてなさるんだ。脇だつてへからまあずつとあつちに居掛りだらう。それで實に、きいちやんが御殿で働いてゐるのを貞×様が、目をつけなすつたて譯だ。お脇にも隨分若いのが居るけれど、こゝはそれ、奥方が女學校仕込みと來てゐるんで、若いのも妙にツンとしたんだの、いやに、にちや〱するのだの、面白くねえのを揃へたてもんだ。きいちやんは、そこへ行くと、生意氣けはなし、さつぱりはしてゐるし、条さんの前だが、いゝきりやうだつて十八歳はぬけてゐら、ほんとうだ、俺は二三年見ねへうちに、見違へちやつた。此間の晩家へ行つて、何うも違やしねへかと思つた。あんなに別嬪ちやなかつた筈だ。アツハツハ。』

『ウツフ。』条さんは、人の好さ相な顔をして笑つた。

『それで何だい、一將始めから先方の思ひ通りイエスとやつたら……をつと「歸へれ〱」は御免だぜ。』

『いけねへ〱。』条さんは、首を振つて、『おめへも隨分氣の利かねへ男だな。これがおめへ、俺が「魚をお召し下せへ」てやつてた時分なら、何しろ親子二人、塊乎で凌いでゐたことが、いくらあつたか知れねへんだから、そんな話でもあつたら、俺も背に腹は代へられねへ、そんなことを承知したかも知れねへが、今はおめへ、俺はこれでも百兩の月

給取りたぜ。それが娘を妾奉公に出したつてちや、世間に濟むめへぢやねへか。駄目だ、そんな話は。』

『それもさうだ。』新さんは案外すなほに、『それに違へねへけど、まあさういつて見れば、百兩の月給をおめへに呉れてる殿樣が、きいちやんを所望なんだぜ。だから忌やとでもいつたら、まづい事に無るかも知れねへ。』

『馬鹿いひなせへ。如何に華族だらうが殿樣だらうが、娘を妾に出さねへからつて、親爺を首にするなんてそんな亂暴な話はあるもんぢやねへ。』

『ところが、困つたことがあるんだ、粂さん。』新さんは、眞個に弱つたやうに『おめへ、昨夜飛んでもねへ失敗りをやつちやつたぜ。』

『何うしたんだ。』粂さんは、驚いて目を丸くした。

『何うしたつておめへ、隣の馬丁の奴に皆聴かれちやつたんだ。おめへが、若樣のことを餓鬼だの、殿樣を色氣違ひだの、飛んでもねえことを呶鳴つたのを。』

『俺そんなこと云つた覺はねへぜ。誰れが、そんな事云つてた。』粂さんは、呆れたやうな顔をしてゐる。

『だからおめへ酒を飲んぢやいけねへつてんだ。馬丁の奴すつかり聴いちやつたんだから、おめへ云はねへたつて駄目だ。若樣を餓鬼は仕方がねへが、あの何でもねへ殿樣を色氣違ひとは何のこつたい。ひでへこと云ふにも程があるぜ。』

『俺、若樣を餓鬼たァ云つたやうな氣がするが、殿樣を色氣違ひなんて云つた覺は、何うしてもねへぞ。馬丁め何んだつてそんなこしれへ事いやがつてんだ。あの野郎唯置かねへからさう思へ。』粂さんは、『象やの粂さん』の本性を現はして、いきり立つた。

『おい〱粂さん。そんな大きな聲出しちやいけねへ。ちつとはおまけもあるだらうが、何しろ根のねへこつちやねへ

んだから始末にいけねへ。すつかり三太夫に内通してしまつてやがるんだから、荒立てちや却つて此方が破滅だ。まあ、あんまり象の評判が好んで、馬が焼もちを焼いたんだと思ひなせへ。アッハッハ。」

「笑ひごつちやねへ。あの野郎何うするか見やがれ。」

「まあ待ちなせへ。もう一遍坐りなせへ。」と、新さんは、立上つた粂さんを無理に引据へて、「何しろ奥へ知れた日にやことだ。三太夫め忠義ぶつて、碌なことはしねへに定つてら、此頃は、象に金が要る〳〵つて云つてやがるから、好い汐にして、おめへをお拂ひ箱にしねへとも限らねへ。おめへも、その年になつて、何時まで、ゴムの象を列べて喋舌つても居られめへ。さうなつたら、きいちや小父第一可哀相だ。又工場通ひで、夜は夜つぴて鼻緒と首ひきぢや浮ぶ瀬はねへや。考へて見なせへ。うまへ分別でもあるかい、え、粂さん。」

粂さんは茫やり考へ込んでしまつた。今更ら象を並べて喋舌つて見ても、親子二人は愚か、自分一人の口糊ぎも六つかしいのは知れたことである。さりかといつて、青公の夢から、何うしても醒め切れない粂さんは、象を離れて生活することが出来るか何うか自分にもわからなかつた。少くとも、何かの象によつて、生活する外に途はなかつた。その外の途を取る気にもなれなかつた。

「ひどく考へちやつたな。思案があるかい。」新さんは催促するやうにいつた。

いくら催促されても粂さんには、手も足も出なかつた。ゴルさんには未練はないにしても――子供の玩具になつてゐるゴルさんのお守りは、粂さんには、不愉快な仕事に違ひないけれども――それをやめられた時に、もつと好い仕事があるとは思へなかつた。好い仕事どころか、善いにも悪いにも、この頃の寒空に、玩具の象を列べて、吹き曝しの中で夜ひて立ち通す仕事の外には何もなかつた。同じ玩具の象でも、ゴルさんの方は、粂さんに月百圓の収入を與へてくれ

る點で、ゴムや眞綿の鍛とは比べものにならなかつた。眞から忌やだと思ひ出した今の仕事が、急に、何よりも擬勝い、辨い仕事のやうに思はれた。

『条さん、さう考へ込んでしまつちやいけねへ。』新さんは、親切らしく、『おめへは正直だから、うつかり話が出來やしねへ。首のことは心配は入らねへんだ。三太夫を取つちめるには、いゝ法があるんだ。貞×様に御賴みして、一寸御聲がかりがあれば、三公いくらジタバタしたつて駄目なんだ。彼奴貞×様に睾丸を握られてゐやがるんだから。それだから条さん、きいちやんの一件を、啞つそのこと、貞×様の思召通り、オーライとくりや何のことはなく濟むんだ。さうしなせへ。え、条さん。』

『いけねへ、〳〵。』条さんは無性に頸をふつて『俺ア歳を取つたつて、自分の頸を縊ぎてへばつかりに、娘をそんな目に遭はしたつて云はれちや、男が立たねへ。俺になんぼ意氣地なしだつて、そんな眞似は出來ねへ。』

『まあ、さう固いことをいふには當らねへ。當世は、そんなものぢやねへぜ。それにおめへは、きいちやんを、そんな目に遭はせるなんていふけれど、きいちやんがそれを好いたら何うする。』

『馬鹿抜かせ。』条さんは、何うやら白面で昨夜の勢を盛り返へしさうに見えた。『俺の餓鬼は、野倒れ死にしたつて、そんなさもしい根性は起しやしねへぞ。』

『アツハツヘ。』新さんは、昨夜のやうに、閉口しないで、事もなげに笑つて『いけねへよ、条さん。おめへ根つから、きいちやんのことなんか構ひつけもしねへで、俺の餓鬼も人の餓鬼もあつたものぢやねへ。』

『だつて、俺だつて自分が野倒れ死をしかければ、餓鬼だつて思ふやうに構へねへのは當り前ぢやねへか。』条さんは、もう幾何か、ダチ〳〵の氣味となつた。

『だから、いけねへつてんだ。おめへが構ひたくも構へねへなァ察してら。けど構はなかつたにア違へねへんだ。今更らきいちやんが何をしたつて、おめへが小言をいふ權利はありやしねへ。』

『それァさうだけど、俺ァきい坊の親爺だ、勝手な眞似はさせねへぞ。』

『まあ、いくら親爺だつて、さう力んでゐるばかりが能ぢやねへ。實は何だぜ。』新さんは、物々しげに、四方へ眼を配つて、いやに聲を低くして『貞×様ときいちやんは、當人同士もう出來てるらしいんだぜ。』

『ええ。』と粂さんは、飛び上るほど驚いて『そりや眞個か。え、新公、出鱈目をいふと聽かねへぞ。』

『そんなに驚くことはねへやな。』新公はいやに落着いて『惡い話ぢやねへぜ。粂やの娘が、殿様を射止めるなんさ、大した博てもんだ。』

『馬鹿にしちやいけねへ。』粂さんは、息をはづまして居る。

『おい〳〵。眞個に落着いて考へて見なせへよ。これこそおめへの運勢が向いて來たんだ。嘘でも出鱈目でもねへ。先月だつけな、殿様御留守の時に、貞×様ときいちやんが、殿様のお居間へ入つて、中から鍵をかけたのを、出る時にお部屋附の女中が見つけちやつたんだ。貞×様は、ちやんとその女中に口留料をやつたんだけれど、天知る地知るだ。この新さんはちやんと御承知なんだから惡いことは出來ねへ――おつと、惡い事ぢやなかつたつけ、つひ口が滑べつた。』

粂さんは、目をぱちくりさせて、舌がひきつつたやうに、口をわく〳〵させた。(をはり)

懶い春

久米正雄

一

昨夜からの仕事疲れに、もう十時は過ぎてゐるけれど、寢足りない瞼を垂れたまゝ、階下へ下りて行つた。懶い春の朝である。私は何だか口をきくのが厭だつたので、母に鳥渡「お早う」と無愛想な挨拶をしたきり、流し許へ行つて口を漱いだ。何となく唾がねつとり口中に纒つて、齒磨粉にも刺戟がないやうな氣分だつた。母は長火鉢のところで、頻りに手紙を讀んでゐた。いづれ母の所へ來たとすれば、北海道にゐる兄か、日立鑛山にゐる叔父からでもあらうが、母はよく字が讀めないので、いつも一應は僕が讀まされるに定つてゐた。その平凡な家庭の通信などを、母は大略は讀めてゐるのに、も一度僕に讀まして、遠く離れてゐる親身の近況を私と一緒に享樂したいのだとは、私と雖も解つてゐるのだが、何だかそれだけの事が面倒で、殊に今朝は億劫でならなかつたので、出來るだけ知らぬ顏をしてゐた。母がその手紙に就て、話したくてならぬ事は、もう下りて來た時見た樣子で明かだつた。が、私が少し不機嫌

なかを知ると、母も機會を待つやうに、その手紙を手にしたまゝ、何度も〳〵繰り返し〳〵讀んでゐるに違ひなかつた。

が、私がゆつくり箸を措つて、そこに出されてゐた遅い朝飯の卓に座つた時、母はとう〳〵切り出した。

「晋吉。昨夜この手紙を讀んで御覧。上田の小枝ちやんから來たんだがねえ。何だか病氣を診て貰ひに、東京へ出て來るつて云ふ事らしいが、さうぢやないかい。」

母はかう、少し機嫌を取るやうな口調で云ひながら、もう其時はちやんと封筒に緘ぢてある手紙を、私の茶碗の横へ差し出した。此頃の若い女に似合はず、黒色の、[illegible]通事務所でゞも使つてゐるやうな封筒に、さう拙くはない字で、母の名宛に「様」となつてゐるのを、私はちらつと見やつた。さつきからの寢起きの不機嫌が、まだ尾を曳いて殘つてゐて、すぐ取上げる氣にはならなかつたが、それが兄や叔父からでなく、此頃に絶えて思ひ出しもしなかつた小枝子からと聞くと、淡い興味がないではなかつた。

「……それで見るとあの子の病氣も、はか〴〵しくないと見えるねえ。」

母は私が手紙を手に取りもしないのを見ると、獨言のやうにかう云ひながら、御飯の一杯目を徐ろによそつてゐた。で、私は不精不精のやうに、何だつてそんな事を面倒がつたのか、自分でも解らないが、やうやくそれを取り上げて、中から手紙を引出した。それも當り前の卷紙へどちらかと云へば昔風に書いてあつた。

見ると其手紙には、先づ月並な時候の挨拶から初めて、御無沙汰の詫びやら、もう其地の花も散つた事やら、其年の初め頃あつた本家の法事に、自分だけ參り合せなかつた遺憾やら、信州の雪の景色が漸とよくなつた事やら、いろ〳〵女らしい細雜さで並べた揚句、此冬頃から自分の病氣が、どうも目に見えてよくないから、地方の醫者に診察して貰つて

ゐたが、どうも少しも驗が見えない上に、病氣もどの程度まで進んでゐるのか解らないので、其醫者自身も東京へ行つて診て貰ふやうに進めるし、又家にさうしてゐては、ぶら〳〵遊んでゐると云つても、二人も子供を抱へてゐる事ではあり、旁々一家の主婦の身として、つい用事も出來て立働らくため、氣永に療治に專心する事が出來ないから、是非上京の上入院でもして、治るものなら根本的に治療して歸りたいと思つてゐたところ、幸ひ今度良人が、會社の用で東京へ出張する事になつたから、それと一緒に思ひ切つて連れてつて貰ふことに決心した事、就ては近日中に出京お目にかゝる事が出來るが、何と云つても東京には知邊も少ない身であるから、萬事は伯母さんのお世話にならなければならないので、何分とも宜しく願ふといふやうな事が、少し固くるしい位叮嚀に書いてあつた。

「ふうむ、成程、」と私はそれをぐる〳〵卷にして、そこへ置くと、食事にかゝりながら云つた。「それぢや小枝ちやんは永い間、ずつと病氣だつたんですね。これには只持病々々つて書いてあるが、一體どんな病氣なんです。僕はちつとも知りませんでしたが……」

私は是迄母が、一二度嫂の產などで、上田へは歸つた事があるのに、歸つて來ても別に小枝子が惡いといふやうな咄は、一度も聞いた事がなかつたので、何よりもかう訊ねずにはゐられなかつた。

「さうだつたかえ、お前には話さなかつたかねえ。」と、母は私がやつと本氣になつて、話に乘つて與れたのを喜ぶ樣子で、すぐ說明し出した。「小枝はもう三四年前から、何だかずつと惡いやうなんだよ。あの兄さんの婚禮に行つた時分から、幾らか惡かつたらしいからね。」

「あの時分から? あの時分の病氣の塲なら、僕だつて薄々聞いて知つてゐます。が、あの病氣なら、幾ら永びいたつて生命にかゝはるやうな事はないでせう。」

と私は、手紙には何となく内臓の重病らしいやうに書いて在つたので、母の前ながら訊ねない譯には行かなかつた。

と云ふのは、其三四年前の頃私がちらと耳にしたのは、彼女が良人から淋毒を傳染されて、それを治しに、其地方で半ば迷信的に其病氣に效くと傳へられてゐる、或る山中の小溫泉へ行つてゐるといふ話だつた。それはまだ私が大學にゐる時分、歸省の途中立寄つて、彼女の兄から憤慨交りに聞かされたのだつたが、これを聞いた時、彼女を氣の毒だと思ふ同時に、「それ見ろ」といふやうな氣持をも覺えた。彼女は、私と何の約束といふほどの事があつた譯でもないが、幼馴染の自分を置いて、さつさと今の良人と結婚して了つたので、私の心の奧では、何となく裏切られたやうな、ぼんやりした怨恨を持つてゐたのだつた。別に心を打明けたとか、微笑ながら云ひ交したとか、手を握り合つたとか、さう云ふ事すら無かつたのだけれども、同じ年頃の幼馴染が、默つて他へ嫁ぐといふ事は、當時少しは小說なども讀み初めた、中學でも上級の私に取つては、何となく甘いロマンチツクな痛みを與へたと見えて、其結婚式に列するため、母たちが泊りがけで町へ行つた留守は、晩くまで眠らなかつたものだつた。そして少年らしい憤慨と、立志傳的な復讐心とで、覺えてゐろ、今に見返してやるから、といふやうな、妙な心持にさへなつたものだつた。その恨みが、不思議な事にはそれから三四年經つて、其病氣の話を聞いた大學生の頃まで、尾を曳いてゐたのだつた。——が、さすがに今となつては、病氣と聞いても、それ見ろとは思はなかつた。それと是との間には、同じやうに短い二三年ではあつたが、僕に取つては永い隔りがあつた。其間に私は、童貞も失へば、酒を飲む事も覺え、彼女の良人が傳染した病氣なども、さう大した罪惡ではないと感ずるやうな知識も得て、そんな事では、すべて大人になつてゐた。だから、今彼女の病氣に就て聞くのは、全くそんな好奇の感情なしに、大人らしい心配から訊くのだつた。であるから母に向つても、一と昔前なら迚も云へなかつた「あの病氣」などと、暗示のある言葉も平氣で使へたのだつた。

「だがあの時分から、どうもずつと惡いのらしいんだよ。よくは分らないけれど。――此春行つた時も、腎臟が惡いつて云つてゐたからね。」

母は知つてか無意識にかあの病氣といふ言葉に對する直接の反應は少しも示さずに、業々とかう答へた。その點では私も吻とした。が、その答の內容に就ては、少し驚きを新にしなければならなかつた。

「腎臟？　腎臟が惡いんですか。そいつはいけない病氣ですね。腎臟が惡くて、しかもいくら地方だと云つても、市の醫者が上京を勸める位だとすれば、生死にかゝはるかも知れませんよ。どうして又、そんなになる迄放つて置いたんでせう。」

「それがね。田舍の人たちは呑氣だからね。それに當人もつい忙しい用があるものだから、さう閑つてばかりもゐられないんだよ。さう云へば此春會つた時も、滾してゐたからねえ。だから今度の出京だつて、重くなつたから何うの、お醫者に見離されたと云ふよりは、矢つ張り家の用から離れて、安氣に養生したいと云ふんだらうねえ。まさかそんなに惡くなつてる筈はないよ。兎に角かうして手紙にも、起きて働いてゐるやうに書いてある位だからね。」

「さうですかねえ。そんならいゝけれど、……兎に角おつ母さんはさうして閑なんだから、見舞つたり慰めたりするには丁度いゝぢやありませんか。まあ小枝ちやんも心細いでせうから、出來るだけ世話をして上げて下さい。」

私はもつとそれ以上、前の病氣と後のとの關係や、差違などを訊きたゞしたかつたが、母の態度が意識して避けてると見れば見られるので、かう事務的な結論めいた話で、其處を切上げる事にした。丁度飯も終つてゐた。

「お世話になるつて云ふのは家へ泊るといふ事かねえ。」

母は猶もそんな事を云つてゐた。

「いや、すぐ入院するんでせう。こんな他人の家にゐたんぢや、療養になりませんからね。」

若し泊るとすれば、泊めてやりたい興味もないではなかつたが、自分が若い未婚の男であり、向うが少し誇張して云へば、初戀の人とも云へる女であることが、殊に人妻であつて見れば、一種のこだはりを感じない譯には行かなかつた。

かう云つて、自分は仕事をしに、又二階へ上つたが、併しもうそんな女に冷淡になつたとは云へ、さすがに一種の甘酸つぱいやうな感慨が、胸を浸して來るのを禁じ得なかつた。私は其頃朝の中に日課としてゐた、新聞小說を一回書きかけながら、ぼんやり回想に沈んでゐた。少しは意識的に、それを驅り立てた傾もあつたが、其頃の感傷を失ひかゝつてゐた自分として、それは珍らしい事だつた。

その回想の中で、殊にかういふ場面が一番鮮かだつた。

それは私が高等小學の三年生で、向うが尋常四年ごろの事だつた。丁度日露戰爭の最中で、旅順が陷落した。それは實際國民を擧げての喜びだつた。到るところで祝捷の催しや、提灯行列などが在つた。私たちの小學校でも、全校を擧げゝ旗行列に加はつた上、各級を代表して、一通づゝ乃木大將に感謝狀を呈する事になつた。或日私たちは作文の時間に、さういふ課題を出された。私は別に何の野心もなく、ただ其號外を聞いた時の嬉しさを、罫紙に書き並べて出した。ところが其翌日、先生に呼ばれて教員室へ行つてみると、私の作文が級を代表する感謝狀の選に上つてゐた。私は思ひがけない嬉しさにぼつとするやうな心持だつた。而して其日は殘つてゐて、幾らか直された其作文を、一生懸命奉書の卷紙へ清書させられた。三度ばかり書き直しをさせられた。

翌日、旗行列をする前に、全校の生徒が校庭に集つたところで、その感謝狀は、各々其筆者に依つて讀まれる事にな

・つてゐた。玄關の前の、運動場の一隅に、敷瓦を三つばかり積ねた壇が出來て、その上の卓子には、靑い布が掛けられてあつた。而して其前面には、全校の生徒が悉く列を作つて並んでゐた。常には分れてゐる女の方の生徒も、今日は此方の校庭へ來て、その運動場の半ばを埋めてゐた。眞冬ではあつたが、穩かな日が少し小高みになつてゐる校庭を照らしてゐた。

其感謝狀を讀むべき私は、奉書の包み紙を半分後ろから覗かせて、級の前面に立ちながら、どき〳〵して番の來るのを待つてゐた。下の級の方から、だん〳〵それは廻つて來るのだつた。他の生徒たちが二三人、交る〳〵その壇へ上つては靑い卓子を前に讀み上げた。まだ言文一致がさう普及しない頃で、小學校の作文といへば、大抵漢字交り文といふ文體が用ゐられてゐた。殊にさういふ他處行の感謝狀などゝなると、私より下級の者の文章まで、みんな「茲に謹んで感謝の意を表す」といふやうなものか、又は整つた美文の體裁を備へてゐた。が、それは私たちの先生が、若い師範を出たての俊秀で、平常から幾らか奬勵してゐたにも依つたが、私がさう固苦しく考へないで、書き流して出した作文はすつかり言文一致だつた。で、私は下級の人たちまでが立派な文章を書いてゐるのに、自分だけが幼稚なやうに考へられて、それらを聞いてゐると、讀まぬ中から非常に氣が引けた。

其中に、とう〳〵私の番になつた。受持の先生に促されると、私は仕方なく下向き勝ちに、列を離れて壇の方へ行つた。壇は上り段を一段つけてあつたが、ひどく高いやうに感ぜられた。上つて見ると、目の前に靑い卓布が在つた。そして其の下の向うには、肉色の顏がずつと重なり合つて、脊も立てずに擴がつてゐた。みんなしんとして此方を見てゐた。日が斜にその全體を照らして、黑つぽい衣物の地の外には、女子部の方の生徒が、其頃流行り出したばかりのリボンが、ちら〳〵と動いてゐた。校庭の向うの端の立木や、遊動圓木が馬鹿に遠く見えた。

私はどき／＼する胸を鎭めて、懷中から感謝狀を取り出しながら、ふと卓子の端を外れた、すぐ目の前の一番前列の生徒の顏を何氣なしに見ると、思はずはツとした。其處は、丁度中央の、男子部と女子部との繼目になつてゐて、その私の見た女子部の方の端の、しかも先登には小枝子が立つてゐた。その斜に當る日を受けて、眩しげに此方を向きながら、口を半ば開けるやうに、心持首を傾げて、一種の畏敬めいた表情を以て、しかもきよとんと見上げてゐる顏、私は一と目でそれと見分けると、ひどく恥かしいものを見たやうに、慌てゝ視線を伏せた。顏中が火のやうに熱つた。

其頃私たちは、もう幾らか成長してゐたから、十歳前のやうには、小枝子と一緒に遊びはしなかつた。けれども家が隣り同志であつたから、矢つ張り時々は親しく遊んだ。男の子と女の子が一緒に遊ぶことは、その年頃ひどく恥づべきものだとは知つてゐながら、矢つ張り遊ばずにはゐられなかつた。が、其頃いつの間にか、私が小枝子と一緒に遊ぶといふことが、級中の他の生徒たちに傳はつて、私は何ぞと云ふと、小枝々々と揶揄はれてゐた。殊に私が歸る途中の或る町には、今思ふとまるで物語中の人物のやうな惡少年どもは、空邸の塀などの陰にかくれてゐて、私が副級長で隔日に掃除を監督するため、歸途が一人で遲くなるのを擁しては、「一二三、小枝！」と囃し立てたりした。そこの町外れの、いつも彼らが屯してゐる、取毀たれかゝつた邸の空地の前まで來ると、私の足は自ら驅けだすのが常だつた。ひつそりして、その上から溢し出てゐる木の枝が、厭にしんとしてゐたりするので、今日は居ないかと思つて通りかゝると、冠木門を半ば閉ざした扉の陰から、急に囃し立てる事もあつた。彼らがゐないと、通り過ぎてから吻としたが、その難關を通り抜ける私の氣持は、今まで一生の間に、あんな厭な事はない位だつた。私は殆んど小枝子の存在をすら呪つた。而して小枝子といふものが、彼ら惡少年どもにまだ本人を知られないからいゝやうなものゝ、知られたらどんな恥しい揶揄を受けるかと云ふやうな、少年らしい不安を始終感じてゐた。

その小枝が、目の前に立つてゐると云ふ事は、私に小枝子に對する恥しさ以外に、尙ほ一種の恐怖を與へた。何だかひどく惱しいやうな氣持と共に、二人が目を見合せた事を、誰かに見られたやうな羞恥と恐怖から、私は慌てゝ目を伏せると、ぽつとなつた目を開きかけた感謝狀の上に落した。さうすると更に第二の羞恥が、自分を襲つて來るのを感じた。それは例の言文一致を、皆の前で、殊に小枝子の前で讀まねばならぬと云ふ事だつた。私は實際それを選んだ先生が恨めしかつた。が、もう仕方がなかつた。

「××月××日の朝でありました。私はチリン〳〵といふ號外の鈴の音に起されて、おもてへ出て見ますと、……」と讀み初めた。何だかクス〳〵と云ふ聲が、こちらで聞えたやうな氣がした。私はもう何にも云はず、たゞ恥しさで一ぱいになつて、しかし一生懸命に、何にも外の事を考へずに讀み續けた。幸ひにもう笑ふものはなかつた。が、私は誰からも嗤はれてゐるやうに感じて、讀み終ると、急いで壇を下らうとした。而して思はずもう一度、青い卓布掛越しかけて枝子の顏をそつと見やつた。彼女は前よりももつと首を傾げて、矢つ張り口を半ば開きながら、少し笑ひを含んで見上げてゐた。私は慌てゝ壇を下りた。列へ歸つて行くと、先生が「よし」と云つて與れた。…………

何故かその時の彼女の事が、はつきり思ひ出された。

二

小枝子が私の家へ、ほんたうに遣つて來たのは、それから一週間ばかり後の事だつた。東京に知人の少ない母などはその手紙が在つてから、今日來るか明日來るかと云ふ風に、樂しがつて待つてゐたらしかつたが、私は、其頃しかけてゐた仕事と、知合になりかけてゐた或る女とに紛れて、その話を聞いた時はあんなに感傷的になつたにも係らず、殆ん

と忘れたやうに念頭にかけてゐなかつた。

春も終りになる頃で、街にはむつと埃を上げる南風が、心を落着かせないやうな日だつた。私は硝子戸をぴつたり締めて、仕事にかゝるでもなく、隣りの塀内にある散り殘りの八重櫻が、まだぼた〳〵したやうに枝にくつついて、揺られてゐるのを眺めてゐた。街の方の空にぼつと濁つて、間から見える屋根々々の甍が、急がしく照つたり曇つたりした。何となく心が掻き亂されるが、しかし家にじつとしてはゐたいやうな時候だつた。私は仕事に手がつかなかつた。

其時、母が階子段の中途まで上つて來て、そして呼び立てた。

「[illegible]吉、あの、小枝ちやんがいらしたよ。」

「あゝ、さうかい。」

私は恰かも、呼び出されたやうな形で、あゝさう〳〵來ると云つて來てあつたが、では愈々ほんとに來たんだなと思ふと、何だか懐しいやうな氣もしないではなかつたが、それよりも氣分を擾される恐れで、飛び立つて行つて會ふ氣はしなかつた。寧ろ義務的に、階下へ下りて行つてみた。

襖を開けて入つて行つてみると、小枝子に母が[illegible]、[illegible]座布團を半ばずらして、まだ畏まつて座つてゐたが、私の入つて來る方に、少し窶けたやうな顔を向けた。それは彼女が稍々近眼の傾向のあるのを思ひ出させた。

私は庭の方へ向いてゐる彼女とは向ひ合はずに、寧ろ後ろ寄りに横の方へ座つて、一別以來の挨拶をした。彼女も母と相對して頭をねぢらせて、何度も改まつたやうに叮嚀な禮をした。すつかりもうおとなが、大人になつて外出行になつて了つた事が、妙に可笑しい感じがした。彼女は良人と一緒に昨日來て、上野の傍のある旅館へ泊つてゐたのだつたが、今日は良人が商用の方の急な用事で、横濱へ行つて了つたため、自分一人で此方へ來たと云つて、頻りに良人の不参を詫

ひた。而して其上、今日病院へ行くのに、母と一緒に行つて貰ひたいと云ふ、彼女の言葉に從へば、「圖々しいお願ひ」に上つた事を繰り返し〲私に詫びた。

「いゝえ、ちつとも迷惑でなんぞありやしませんよ。おつ母さんも此頃は話し相手がなくて、退屈し切つてゐたんですから、そんな役にでも立てばほんとに却つて幸せな位です。ただ東京へ來てゐても、まだ電車の乘りやうさへ碌々知つてゐないんですから、案内の役には立ちさうもありませんがね。」

私はかう云ひながら、本當を云へば此際、方角も知らぬ母なぞを附けてやるより、自分も病院まで行つてやるのが、本當ではなからうかと思つた。而して小枝子自身も、或ひはそれを望んでゐるのではあるまいかと自惚れさへした。がさう云ふ事にかけては極端な面倒臭がりやで、おまけに仕事の事などか念頭にあるので、うつかりそんな事を口に出して、彼女の病院行きの飛ばつちりでも食つては大變だといふやうな、不親切極まる所存でゐた。それには、彼女が思つたよりも美しくなかつた事なぞが、瞑々の中に働いてゐたに違ひなかつた。

「いえ、ただ伯母さんに行つて頂きさへすれば、それで心丈夫ですから、ほんとに濟みませんけれど、……」

かう云つて、小枝子はそれが癖の、眉根に切ないといふ程の事ではない八の字を寄せてゐた。その顏をつく〲見て私は小枝子も老けたなと思つた。さう云へば可なりの早婚だつたので、もう二人の子の母ではあるし、病氣で衰へてゐるので、二三年前見た時とは、可なり變つてゐるのも止むを得なかつた。鳥渡見た時は、白いものを薄く刷いてゐたので、雀斑があつた筈の色白の顏が、ぽつとり輪廓が崩れたやうな美感を與へて、鳥渡私の「幼馴染」といふ心もちを安心させたが、少しいてゐる中に、眼の周圍や喉に衰への來てゐる事が、可哀さうなほどまざ〲解つて來た。勿論、私は彼女に、さうしたものを求めてゐるのではないけれど、昔の思ひ出と比較して、多分幻滅を感じるであらう事を豫期し

ながらも、思つたよりは宜しかつたといふやうな程度でども、私の感覺に媚びて貰ひたかつたのだつた。

「車で行けば、私が不案内だつて大丈夫ですよ。」

母は私がそんな事を思つてゐるのに係りなく、心から彼女の事を心配して、そは〳〵と出かける用意に取かゝつてゐた。

「どうです、東京も來てみると埃つぽくつて厭でせう。」

「いゝえ、そんな事ございません。」

私はそんな對話を、それから二三交はして、二階へ引き上げた。何だか此間の緊張が、無駄になつたやうな、損をしたやうな氣がした。それに外面から見た病狀も、さう惡いやうには見えなかつた。

やがて二人は病院へ出掛けて行つた。風が凪ぐと共に、少し空が曇つて來てゐた。

夕方になつて、母が一人車で歸つて來た。

「どうでした。」と早速私がきくと、母は灰色のセルのコートを脱ぎながら、

「今日行つて診て頂いたらね。院長さんが來ない日で、副院長さんて人が診て下すつたんだけれど、何でもまだ腎臓や何かゞ膨れてゐて、よく診られないから、三四日療治をして、その膨れの引いて了つたところで、よく診察して下さると云ふのだよ。――ほんとにさう惡くなくて呉れゝばいゝがねへ。」と、心配さうに云つてゐた。

それでは、何でもまだ炎症があつて、膀胱鏡を挿入したり出來ないに違ひなかつた。併し、私はまだ、そんなに重大には考へてゐなかつた。

小枝子の腎の病狀が、院長の手で明確に斷定されたのは、それから四五日經つた後だつた。

其日も母は行つて見たし、小枝子の良人も立合つた。

後から聞いた所によると、彼女の病狀は、其時豫想以上に進んでゐた。もう腎臓結核だらうとは、田舍の醫者も云つてゐたさうではあるが、それも一方だけ犯されてゐるのなら、手術をして除去して了へば、まあ差し當り生命を取止める事も出來るが、彼女のは既に兩方とも結核を起してゐた。それではもうどうにもならなかつた。醫師が後で、そつと母だちに告げたところによれば、氣長に養生してゐれば、或ひは奇蹟的に癒らない事もあるまいが、長くて二年位だらうとの話だつた。

「で、當人はそれを知つてるの。」

私は思はず母の顏を見守つた。

「いゝえ、そんな事が知らせられるものかね。小枝子は何にも知らないものだから、同じ病室にゐた患者さんで、二三日中に半分だけ腎臓を除つて了ふと云つてる人に、自分は手術しなくても濟んだと云つて、自慢さうに云つてるんだよ。」

私はその如何にも拵へたやうな、悲劇的なシチュエーションを聞いて、黯然とせずにはゐられなかつた。而してさう云ふ場合、矢つ張り當人に知らせずに置くものか、それとも知らして覺悟さしたものか、人生の所選に就て、つく〴〵考へなければならなかつた。けれども、結局自分には解らなかつた。而して彼女に關する共同問題には、此際私が觸れて行く必要はないと思ふほかなかつた。

兎も角、小枝子は入院して、暫らく治療する事になつた。一つには部屋も開いてなかつたが、又一つには經費を節約するために、前にも云つた通り、二人で共同の病室、——恐らくは二等とか三等とか云ふのだらう、——に入れられる事に決つた。其方が、お互に氣さへ合つてゐれば、却つて退屈でなくていゝといふやうな話だつた。

「一緒になつて、はね、日本橋の方の木綿問屋の若いお上さんとかでね。矢つ張り室がないので、割り込みのところにゐるんださうだね、若いに似合はず親切さうだし、何でもお前の本の事なんぞも知つてゐるやうな話だつたよ。」

母はそんな事を云つてゐた。

三

小枝子の良人が、私に會ひに來たのは、それから更に二三日後の事で、彼は妻を病院へ置いたまゝ、用が濟んだから國へ歸る挨拶に寄つたのだつた。

私は前から此の笹本に、妙な反感と一緒に、親愛を感じてゐた。それは、初め會つた時に、自分がまだ名も何もない一個の中學生だつたのに、向ふが小枝子の良人として紹介された時、自分はひとりでに、小枝子を奪ひ去つたやうな敵意と共に、迚も勝てさうもない大人なのに妙な壓迫を感じて、默り勝ちだつた時から、引續いた一種の戀仇感情だつた。が併し、それが、だん／＼休暇で歸省した時なぞに、會ふのを度重ねて見ると、非常に人懐しい好人物であるのを知つた。私はどちらかと云へば、どんな人でも付合つてゐる中には、好意を持つて來る質ではあるから、此の笹本との交際でも、それが根本であるのかも知れなかつた。其上、彼も小枝子の良人として、戀仇意識を持つてゐればゐるだけ、もつと積極的に、好意を持ち親愛を深めなければならぬといふ努力が、働いてゐたせいかも知れなかつた。而して何よりも先づ彼が、酒の味を解するといふ點で、其後の私と結びついたのだつた。

或る年の正月、私がもう大學を卒業する時分だつたが、小枝子の實家で、私は年始に來た笹本と落ち合つた。二人は一緒に特別扱ひに酒を出された。其處の主人は、もと可なり酒飲みだつたが、其頃腸を惡くして、ふつつりやめてゐる

時だつたので、其座の酒席は殆んど二人の爲に、二人だけに作られたやうなものだつた。
　私は初め、何となくギゴチなかつた。向うも改まつてゐた。が、其中に、
「まあ、一つお杯を頂きやせう。」
「いや、僕の方で貴方に頂かなくちやあ。……先刻からさう思つてゐたんですが。何だか失禮なやうだつたから。……」
「さうですか。そんぢやら私も遠慮するんぢやなかつた。ぢやあ一緒に交換する事にしやせう。」
といふやうな、月並な獻酬から話がほぐれて、二人はいゝ氣になつて飲み初めた。初めの中は、主人も對手に出てゐたが、いゝ加減な時を見計らつて、奥へ引込んで了つたので、そこにはもう遠慮をするやうな人もゐなかつた。二人は座敷の片隅に、二人だけの別世界を作つて、飲み續けてゐた。德利が何本も〱も空になつた。
「そろ〱御免を蒙つて、羽織をぬぎやせうかな。」
　そんな事を云ひ出した時は、もう大分醉つてゐた。私も面白づくで、同じやうに紋付を放るやうに脱ぎすてた。
　小枝子の母や、妹たちが時々お酌に來たが、その中に笑ひながら銚子を替へに來て、すぐ置いて戻つてゆくだけで、寄りつかなくなつて了つた。それが面白さに二人は更に飲んだ。
　其中に從本はすつかり醉つぱらつて、色んな事を云ひ出した。
「……なあ賢吉つあん。わしあ君が好きなんだ。いつも小枝子とも云つてゐるんだが、あんたあ今にきつとエラクなるつて。文學博士は受合ひだ。わしあとうから見込んでゐるんだ。まあ、確りやつて與んせえ。」と、彼はすつかり方言になつて、「わしあ あんたが氣に入つた。だから是から交際つて與んせえ。此家ぢやあもう駄目だ。誰も出て來やがらねえ。だから今度はわしん所さ行つて飲みやせう。」

かういつて、彼は立ち上ると、ひよろ〳〵しながら私の手を取つて、引張つてなか〳〵離さなかつた。

私は其時、彼の取つてつけたやうな推讃の言葉に、苦笑を禁じ得なかつたが、好感も持つた。何だかひどく率直な、いゝ奴だと思つた。而して彼に従いて行きたいとさへ思つた。が、其中に二人の酔態を聞きつけると、小枝子の母が出て來て、私に「行くな」と目顔で知らされたので、私は彼の家へ行つて、小枝子に會ひたい氣がしないではなかつたが、何とか御座なりの承諾を云つたまゝ、行かずに了つた。笹本はうちの人に宥められて、待たせて置いた自分の俥に乘せられて、猶ほ、後から俥が來次第行くと云つてゐる私に向つて、

「ちやきつと來せえよ。おい、早く俥を呼べ。さうか、よし、そんなら待つてゐるぞい。」

と云ふやうな事を、滅茶苦茶に喋りつづけて、向ふへ曳かれて行つて了つた。

「お前が行つたりしちや大變だよ。あれでお前でも一緒だつたら、きつと又どこかの料理屋へでも上る氣になるからね。」

小枝子の母は、それを見送つてゐる私を顧みて、そんな事を云つた。

「まさか。」私は何だか馬鹿に笹本がいゝ奴のやうに思へて、心の中ではもつと強く打消してゐた。而して私は何だか行かないとまだ笹本に悪いやうな、損をしたやうな氣さえしてゐた。……

で、其後、笹本がよく道楽をするといふ事や、又小枝子のその影響を受けた病氣の事を、時に聞いた時なぞも、何故か心から彼を憎めなかつた。それは前にも云つた如く、小枝子に淡い「いい氣味感情」を持つた程も、彼を責める氣持にはなれなかつた。せい〳〵「仕方がない奴だな」と微笑する程度だつた。而して自分ではそれを「男だから」と云ふ同情意識以外に、自分にもさうした遊蕩氣分があるために、そんな點で寛大だつたのかとも思つた。

だから今度の話も、初め聞い時は、さう悪感を持たなかつた。が、併しさすがに小枝子の病氣が、もう不治同様だと

聞いた時には、人を一人殺したに等しい、由々しい人道問題だと思つた。が、不思議に感情的には、笹本を憎む氣にはなれなかつた。ただ小枝子を可哀さうだと思ふ心だけが感情的な方面を占めてゐた。が、それも出來るだけ人の事として、自分の中へ押し殺して、他人の事は他人の事と、弱い自分の胸を苦しめない工面ばかり私はしてゐた。だから笹本が、かうして訪ねて來た時も、毎もと變りない心持で、淡々と喜び迎へたのだつた。顔を見ると、殊に責める氣なぞは鳥渡起りさうもなかつた。彼は相變らず、小柄な身體を丸々と肥らせて、血色のいゝ可愛いゝ顔をしてゐた。年は私より三つ四つ上だのに、共位下のやうにさえ見えた。

私は彼と、階下で暫らく母を交へて、普通の世間話をした。もう彼の商用も、大部分片づいてゐるとの事だつた。

「ただマツダランプの本店へ行つて來なくちやならないんですが、何處でせう。人に頼まれて、少し明るい電球を澤山仕入れるやうにしてかなくちやならないんですが、それがまだ殘つてゐるんです。」

そんな事を云つてゐた。

「さあ、その工場なら、京濱間の電車の何處かで見たやうな氣がするけれど、本店と云ふのは知りませんなあ。電話帳を見れやあ一番いゝでせう。」

私もそんな事を答へてゐた。

さうかうしてゐる中に、夕飯時になつたので、私は彼を何處かへ引張り出す事にした。

丁度恰好な所が思ひつかなかつたので、遠[illegible]の客を過するには少し失敬だとは思つたが、酒のうまいのが取柄だし、又料理にしても鳥渡通な家だつたので、廣小路の近くの、或る入れ込みの小料理屋へ上る事にした。そこは脂粉の氣のまるでない所だつた。それもよいと私は思つた。

そこは可なり笹本の氣に入つたらしかつた。彼は酒や料理などを、少し通らしく賞めながら、ちびり〱と飲んでゐた。私も飲んだ。而して二人の前には、何時の間にか六七本の銚子が並んだ。幾ら飲んで空にして了つても、わざと見せつけるやうに、又酒客の一種の誇りに媚びるやうに、――其實は勘定を間違へないためかは知らぬが、決して徳利を下げて行かない家だつた。二人はたゞ自棄なやうに其徳利の數を増した。

私は醉つたやうだが、まだ何だか心があるやうな氣持だつた。何だか話し足りないやうな、本當の事を云はなかつたやうな氣がした。そこが入れ混みだつたので、外にもお客が二組ほどあつたためと、又さうした事に觸れたくない氣持上で、小枝子の事には、まだ一言も言及しなかつた。それが醉つても心のある根本だつた。私は何時まで經つたつて、もう之以上醉ふ事はないやうに感じた。笹本の方は、初めの中こそ妙に白々しかつたが、是は旅の氣持が働いたか、私より醉つてゐるやうに見えた。

兎に角引上げ時だと思つて、私は勘定を濟ますと戸外へ出た。月は見えないが、それを含んだやうな空が頭上にあつた。それは朧ゝとして重いながらに、何だか仄かな明るみを湛へてゐた。何だか私は、此儘家へ歸りたくないやうな氣がしてゐた。いつも此處で酒を飲むと、風情が足りないやうな氣がして、もう一所どこかへ行きたくなるのを、宿命のやうに考へたりしてゐた。そして笹本と別れを告げて、ひとりで何處かへ行かうかとも思つたが、誰か對手がなくてはさう云ふ場所で殊に淋しがり屋の私は、一人で行く氣は迚もなかつた。それに笹本とも、まだ話し足りないやうな氣がした。

ふと笹本の手が、思はず立佇つてこんな事を考へてる私の肩にかゝつた。振り返つて見ると、彼は其處で首をかつくりうなだれるやうに、覗き込んで云つた。

「おい賢吉さん。何處かへ行かう。君の繩張りがあるだらう。――知つてるぜ。此頃は大分盛んだつてちふから。」

「馬鹿云つちやいけない。」

私は腹の中を讀まれたやうに苦笑した。而してそれと同時に、彼の云ふ案内を強請されたのには、一種の反感も覺えたが、又其時の醉つた氣分で、ふと一緒に行つてもいゝと云ふ氣になつた。行くだけなら行つたつて差支はあるまい、そんな氣持だつた。

「まだ宿屋に歸るのはつまらないし、一つ故郷への土産に、東京の景色も紹介にあづかりたいな。」

さう云つて、笹本はもつと身體を寄せるやうにして來た。私はその言葉にも鳥渡反感を持つたが、そこまで切り出されては、もう厭とは云へない私の性分だつた。

「ぢや行かう。此方へ來給へ。」

私はいつの間にか、そんな言葉使ひをして、彼を上野驛の方へ曲る横町へ誘つた。

「行かう。どつち？　そつちか。そつちは上野ぢやありませんか。醉つたつて分つてる。わしの宿屋へなんぞ、連れて行かうたつて駄目ですよ。」

「大丈夫。そんなケチな事をするもんかい。」

かう云つて、私は彼を引摺るやうに、上野驛のタクシイのところまで連れて行つた。彼は殆んどぐた／＼に醉つてゐた。何だか、醉つてゐる彼を、さうして手荒に扱ふ事が、一種の感情の代辯になつた。……

それから二三十分して、私は其頃鳥渡行つた事のある、或る町の待合へ彼を連れ込んでゐた。

丁度半端な時間だつたので、私の知つてゐるやうな、而して彼に見せたいやうな、「東京の景色」はなか／＼來なかつ

た。仕方なしに、又二人で、味のない酒を強ひて流し込むやうに飲んでゐた。

女中は下へ下りて行つては、出て居る斷りに上つて來た。さう馴染といふ程の事もないので、強ゐて貰ふことも出來ないし、下の女將にさう無理を云へる程馴染んでゐる譯でもなかつた。

「厭やならでもいゝさ。早く呼んで呉れ。」

私はかう叫ぶやうに云つて、卓袱の上へ顔を伏せた。何だかこんな所へ、笹本を連れて來た事が、後悔されて來た。殊にそこに自分の無力を見せたやうで、何だか顔がカツとして來た。

女中は下りて行つたが、又上つて來た。

「あのね、小〇さん。島渡。――」

女中は向うの廊下で、私を招きまねいだ。

「何だい。五月蠅いな。」

私は仕方なしに立つて行つた。聞くと、それは今夜泊るのかどうかと云ふ話だつた。

「馬鹿ア云へ。景色だけ見れやあいゝんだ。泊りやしないよ。」

私は思はず、小聲ながらこんな風に云つた。すると、私が此方へ來るなり、卓の傍へだらりと横になつて了つた笹本は、それでも肘枕を仇に枕にしながら、私の云ふ事を聞いたと見えて、

「馬鹿云へ。泊るぞ。もう宿屋へ歸つたつてしようがありやあしない。――」

と叫ぶやうに云つた。

私は少しムツとしたが、もう仕方がなかつた。

「ぢやあ兎に角お女將さんと相談して、誰かをおかけしませうね。まあ任して置いて下さい。」

女中は今度はさう小聲でなく云つた。

「うむ。」私は陰鬱に承諾して、もとの座へ戻つた。

「藝者が來ないんなら、歸るぞ。」

笹本はもう眼を閉ぢて、そんな事を喚いてゐた。そして二三度足をぢたばたさせたが、それからぐつと身を曲げて、それなり動かなくなつて了つた。

「おい。」私は聲をかけて見たが、「う、うん」といふやうな返事すらなかつた。私は強ゐて起す氣もしなかつた。そして仕方なく、前に置いて在つた盃の、冷たい酒を飲み干した。もう口が荒れてゐて、酒も苦かつた。

暫らくすると藝者が來た。みんな知らない顔で、しかもさうよくなかつた。

一人の奴が入つて來ると、笹本の酔つて寢てゐるのを見付けて、かう云ひながら傍へ寄つた。

「まあ、こちらは隨分お酔ひになつてゐらつしやるわね。お起きなさいよ。そんな所へ寢てゐると風邪を引くわよ。さあお起きなさい。ね。こちら、こちらつてば!」

「丹前でもお持ちしませうか。」

女中がさう云つてゐた。が、笹本は「う、うん、」と云つて、眼を細眼に明けたが、又向うを向いて寢て了つた。それが先刻から何となく興ざめて、妙に白け切つてゐる私には、何だか狸寢入としか思はれなかつた。あゝして、寢て了つて此處へ泊りたいんだなと思つた。それで私は、猶も起さうとする藝者を、かう云つて押し阻めた。

「おい。もういゝよ。起さなくつても。それよりかもうお寢りたいんだらうから、彼方へお連れ申しな。」

「さうですか。ぢやさうしませうね。」

女中はかう云つて、その用意をしに出て行つた。私はそれを追ふやうに、下へ下りて行つた。そして廊下の中途で捉へると、

「おい。僕はもう歸るよ。僕は泊らないんだから。」と云つた。

「あら、もうお歸り。もう少しいゝぢやありませんか。せめてあちらがお終りになる迄。」

「いや、あの人はあの儘寢かして呉れりやあいゝ。僕はもう此處で待つてるから、急いで車をさう云つてお呉れ。」

私はかう云つて帳場の所へ入つた。もう何だか、笹本が狸寢入りの姿を見るのも厭なやうな氣がした。

「で、藝者衆はどうしませう。みんな歸して了ひませうか。」

女中は仲居へ電話をかけながら、その電話口から、帳場の主のない長火鉢の横へ、浮き腰で待つてゐる私に云つた。

「さうさな。」私は鳥渡考へたが、其途端に小枝子の萎へた顔がふと浮んだ。「みんな歸して了へ。どうせ醉つぱらつてゐるんだから。關(かま)ひやしない。」

私は改めてかう手強く云ひ放つた。女中は私の語氣が、妙に荒かつたので、電話口で目をぱちくりさせて見返つた。

其途端に車屋の番號が呼び出された。……

笹本にはそれつきり會はなかつた。が、其翌日になつて、上野驛を發つ前に驛で、認めた葉書を受取つた。それには昨夜は大醉失禮などゝ書いた外に、お蔭を以てマツダラムプの本店もお斷り申し候と云ふ文句もあつた。

私はもうすつかり微笑を以て彼に對し得た。而してあの時、せめてもの小枝子への心盡しといふやうな心から、うま

く笹本の要求の裏を掻いたことが、妙に涙ぐましい嬉しさと同時に、何だか可哀さうな氣の毒をしたやうな、變てこりんな同情の氣持を起させた。

四

母は殆んど毎日、小枝子の病院へ見舞ひに出かけたが、私は一度も行かなかつた。そこは或る電車の賑かな交叉點に近かつたので、小枝子の所以外へは、よく出て歩く私は、殆んど出る度に通りかゝつた。而してその度んびに、電車の窓から、其方の方を眺めて、小枝子はどうしてゐるだらうと思ひながら、どうしても降車して訪ふほどの甲斐性は起らなかつた。

それは妙にこぢれた氣持だつた。一つは根本的に、私の無精から「面倒臭い」といふに過ぎなかつたが、それを肯定する陰には、妙にかう悲慘な事に近寄りたくないといふ、私の本能的な氣分が働らいてゐるに違ひなかつた。淡い、沁々した感傷ならば、よく浸りたがる傾向のある癖に、かう云ふ幼馴染の女が、今病床に横はつて、しかも寂寥を身に犇々と感じてゐるに違ひない時に、それを見舞ふなぞと云ふ事は、平常から好んでしさうに思はれてゐて、しかも何となく實生活では近寄りたくない事だつた。自分で私は自分の心が解らなかつた。

私は兎に角、仕事の忙しいのを自分の言譯にしながら「母が毎日行つてるからいゝや。」と思ひ宥めてゐる外なかつた。が、それにしても、一度位は行つてやらなければなるまいと思つてはゐた。

或日、銀座の方へ出る時、その乘換場まで來ると、丁度永い停電が在つた。而して可なり永い間、そこに私は立つて待たされた。其時私はふと、此の近所に小枝子の病院が在るのを思ひ出した。丁度幸ひだから、かう云ふ時に行つて一見

よう、私はふいにそんな氣になつた。全く停電の爲にと云ふ、極く輕い氣持でだつた。が、動機はそれでも、私の胸は何だか重かつた。而して歩きかけたが、中途で廢さうとさへ思つた。こんな動搖で行ちやあ、惡いやうな氣もした。が、こんな動機でなければ行ける氣にならないとも思つた。何にせよ、一旦その氣になつたのだから、天が停電を借りて、私に見舞ひを示唆すると認めて、兎にも角にも行つて見る事にした。

母からも聞いたし、私の友人なども二三度行つて診て貰つた話を聞いて、大體見當はついてゐたので、その可なり繁華な長通りを鳥渡裏へ廻ると、かうも靜かゝと思はれるやうな横町の、中途にある嚴めしい門を直ぐ見付けた。

私はまだ鳥渡躊躇したが、やがて思ひ切つて入つて行くと、そこの受付口の前へ立つて、小枝子の名前を云つた。

夕日が、そこの玄關の叩きの上へ、斜に色づいた光をさし込んで、そこにごちや／＼置いてある下駄や草履を照らしてゐた。木の影がそこにひつそりと横はつてゐるので、見ると庭には、赤茶けたやうなヒヨロ長い松が、往來の方へ枝を差し延べてゐた。……私は可なり長い間待たされた。

歸らうか、それとも母でさへ毎日來てゐるんだから、ずん／＼入つて行かうかと、室の番號や位置まで大略聞いてだけは置いた。で、思ひ迷つてゐると、向うからバタ／＼と草履の音がして、一人の看護婦が出て來た。

「あのう、小林さんでいらつしやいますか。今患者さんは昏睡狀態が少しお惡くて、お宅のお母樣へ電話をおかけしようかと云つて居りました所でございます。」と、もう私の事も、幾らか知つて居る口調だつた。「笹本さんは、こんな際にお目にかゝつては、却つて不快だと仰有つておいでゞございますが、誰でも患者さんの力になるやうな方が、一人でも居て頂ける方がよろしうございますから、どうかお差支なくばお入り下さいませ。笹本さんもお目にかゝり度がつてはゐらつしやるんですから。」

「さうですか。ぢやあ折角來たんですから、鳥渡お寄りして見ます。」と私は云つて、廊下を看護婦について行きながら

「悪いつてどんな狀態なんです。」

「少しお小水が止まりましてね。熱をお出しになつたものですから、今先生がいらして、膀胱洗滌をなさらうとしてゐらつしやるところなんでございます。」

看護婦は驅けるやうに、先に立ちながら云つた。

「さうですか。それは不可ませんね。」

私は悪い時に來たと思つた。が、彼女の症狀も心配は心配なので、自ら足は急いだ。

一つ廊下を突き當つて、右へ廻つた三つ目が、小枝子の病室だつた。丁度二三日前に、上等の病室が空いたことかで一緒にゐた人が移つたので、そこには彼女の名札一つきり懸つてゐなかつた。私はそれをちらと見上げて、前に母からも鳥渡その事を聞いてゐたので、今日寄れば小枝子と、まあ遠慮なく話が出來るといふ希望があつたため、寄る氣になつたの思ひ出した。場合によつたら、昔の振分髮時代の事に溯つて、何か彼女の慰めになるやうな話でも、出來ないとも限らないとさへ思つてゐたが、そんな樣子では、それも畫餅に歸した譯だつた。

兎もあれ、看護婦が戸を開けて待つてゐるので、私も急いで中へ入つた。すると室内は、八疊程の座敷だつたが、まだ夕暮の明りが殘つてゐるのに、眩ゆい程明るい螢光色の電燈が、煌々と氣味惡く輝いてゐた。而してもう一人の白衣の看護婦と二人の白い手術衣を着た醫員が、何か室の中央で用意してゐた。その向うに、小枝子のベットがあつた。

私は醫員たちに禮をして、それからそつと小枝子の方へにじり寄つた。小枝子は元氣のない、蒼さめて黑い暈の出來たやうな顔へ、一種の恥らひを浮べて、枕から頭を稍々擡げるやうに會釋した。思ひの外に惡い樣子だつた。

「どうしたんです。」

私は小聲で訊いた。

「いゝえ、何でもないの。汚ない話ですけれど、少し小水がつまつたものですから、……」

かう云つて、彼女は微笑した、と云ふよりしようとした。

「それはいけませんね。」

私は外に云ふべき言葉もなかつた。

「ほんとに折角いらして下すつたのに、丁度惡くて……」

「いえ、却つてそんな心配をなすつちやいけません。私の事なんぞ氣にしないでゐらつしやい。――けれど何か手術をなさるんですね。」

私は邪魔になつてはと、醫者の方を顧みた。そして其方へ近寄りながら、

「何をなさるんですか。私が居ては邪魔ではありませんか。」と醫者に訊ねざるを得なかつた。

「いゝえ、丁度都合がいゝんです。貴方にも手傳つて頂きませう。」と醫者は、無邪氣の顏に微笑といふよりも、薄ら笑ひを浮べて云つた。「今、膀胱を洗滌しようと思つてゐるんです。腎臓から惡い液が下りるもんですから、膀胱がすつかり炎症を起して、其膿が溜るもんですからね。排尿口をすつかり塞いで了ふんです。で、此のカテーテルを差し入れて、それを空氣ポンプで吸ひ出すんです。で、其間だけ患者を、動かないやうに押へてゐて頂きたいんです。看護婦では弱いし、丁度手が足りなくて弱つてゐたところですから。」

醫師は私が、今日ひよつこり來合せたことも知らず、まるで肉身の兄か何ぞででもあるやうに思つたと見えてから打

開けて頼んだ。
「えゝ、お役に立ちますなら、どんな事でも致します。」
私は承知せざるを得なかつた。
「あら、それぢやあ、あんまり失禮ですわ。」
小枝子が、向うに聞いてゐて、却つてさう抗議めいた事を云つたが、私はすぐに、
「いゝえ、そんな事ありません。丁度お役に立つて幸ひでした。」
と、心から其氣になつてゐた。
「ほんとにさうして頂きなさい。何でもないですよ。」
醫師も何かを消毒しながら、さう云つてゐた。やがて用意は整つたらしかつた。見ると、カテーテルを嵌めた赤いゴム管が、途中で二つに分れてゐるのゝ、一方に眞鍮と硝子で出來た空氣ポムプ、一方には膿を受ける瓦杯のやうなものが据えられてあつた。
小枝子は病床から少し動かされて、其處に敷かれた黒い革のやうな手術布の上に、移し横たへられた。彼女はもう眼を瞑つて、何も見ないやうにしてゐた。私はそれにも鳥渡手を添へたが、其時少し遠のいてゐた。
「さあ、貴方済みませんが、それぢやあ一つ患者さんの胸の所へ馬乗りになつて、上半身を押へてゐて下さい。さうして兩手を兩手で抑へて。」
醫師は遠慮なく私にかう命令した。私は鳥渡心が痺んだが、逡巡すべき場合でないので、直ぐその云ふ通りに小枝子に近寄つて、その胸のところを跨いだ。と、彼女は慌てたやうに、閉ぢてゐた眼をちらと見開いたが、頬をさつと染め

たやうに見えた一瞬間、自分の手で寝衣の襟を掻き合した。私はそれの終るのを待つて、胸の上に靜に腕を下ろしながら、左右の手を私の手で長く伸ばすやうに抑へた。

「濟みません。」

もう蒼白に陷つて、切なげな耻らひしか殘つてない彼女の顔で、眼はもう閉ぢたつきりかすかにかう云ふのが聞えた、

「いゝえ、」と私は打消して、それから醫師に、「からですか。」と訊いた。

「さうです。それで遠慮なく、しつかり押へつけてゐて下さい。弛めちや駄目ですよ。――ぢやあ、さあ、おまへ達は一人づゝ足だ。」

かう看護婦にも命令した。私の背ろで、看護婦どもは各々足を抑へたらしかつた。

「さあ、しつかり押へて下さい。」

醫師はもう一度云つた。私は思ひ切つて、更にぎゆつと彼女の上半身を押へつけた。私の膝がつた尻の下には、鈍い彈力を帶びた、彼女の乳胸のあたりがあつた。そしてそれでも息使ひの度に、底から膨らんで來るやうな、胸の滿干が私の重量を浮かすやうにした。握つた手はもう直ぐ汗ばんだ。

醫師は直ぐカテーテルを挿入し初めたらしかつた。彼女の顔は、忽ち妙な表情を帶び初めた。ぶる／＼と顔全體を一二度顫はすと思ふと、閉ぢてゐた眼を、更にぎゆつと瞑つた。眼尻の筋肉がぴり／＼痙攣した。そして額の皺は白く伸びて、齒を口中でがち／＼食ひ縛つてゐるらしく、口のほとりをぴく／＼と動かした。併しまだ聲は洩らさなかつた。

「氣持が惡いでせうが我慢なさい。もう少しですよ。辛抱してゐて下さい。――さあ、これでやつと入つた。少し痛いかも知れませんが、なるたけ身體を動かさないやうに、痛かつたら遠慮なく聲はお立てなさい。其方がいゝですよ。」

醫師がから云ふと共に、私の後ろでは、自轉車のタイヤへ空氣でも入れる時のやうな、吸筒の音が起り初めてゐた。

突然、「あゝッ！　うゝッ！」と小枝子は叫んで、私に確と握られてゐる手を、蛇のやうに蠢動させやうとした。私の尻の下では、彼女の胸が、非常な力で波打つやうに動き出した。

「ぎゆつと抑へて、もう直ぐですから、――」

醫師の言葉に、私も必死の力で、思ひ切つてそれを鎮めた。

「あつ、つ、つ、つ、あつ、」と、云ふやうに、彼女の食ひ縛つた口からは、切ない叫びが洩れて、顏の筋肉は、すべて位置を變へるやうに痙攣した。私はもうそれを見るに堪へなかつた。で、思はず眼を瞑つて、振り拂らうとする手と、必死に身悶えをする上半身を、私自身油汗を流しながら、一生懸命抑へてゐる外なかつた。すぐ前では、眼を瞑つても彼女の「あつ、つ、つ、つ、」と云ふ聲と共に、その蒼ざめた上に油汗を流して、ひつつり、歪めてゐる顏が、はつきり見えるやうな氣がした。後ろでは、無慈悲なポムプの吸筒の音が、いつ迄も永く聞えてゐた。……

「さあ、もう大分出たぞ、どうだ、此の腹は。」

さう醫師は云つたが、まだ／＼出ると見えて、吸筒の音はなか／＼止まなかつた。私は彼女の苦みより、それを見聞いてゐる自分の苦しみの爲に、早く濟めばいゝと心から願つた。

小枝子は身悶えを止めなかつたが、それも馴れたのか、抵抗力を失つて行つたのか、それでもだん／＼激しくはなくなつてゐた。が、その代り時々びくり／＼と急に身を動かすやうにした。

「さあ、もうようござんすよ。」

やがて、醫師がから云つた時は、顏よりも私が吻とした。ポムプの音が止んで、醫師は靜にカテーテルを拔いて了つ

たらしかつた。もう彼女の身悶えもやんで、蒼白い顔を失神したやうに無表情のまゝ、ぐつたりしてゐた。私は彼女の手を離して、椅子から起ち上つた。彼女の手にも力はなかつた。が、彼女は失神したのではなかつた。而して早速看護婦がすゝめるまゝに、一杯の赤酒を蒼ざめた唇から飲んだ。彼女は眼を開けたが、私を見る事さへなし得なかつた。

「さあ、さうして靜にお休みなさい。もう大丈夫ですよ。」

醫師は何か器械を、かち〳〵鞄に藏ひながら、さう云つてゐた。

彼女はもうそれに答へる力もなく、昏沌としたやうに、疲れた眠りに陥ちて行つた。息がすう〳〵と在るので、私は安心してゐたが、その唇まで蒼ざめた顔が、油汗で電燈を照りかへすのを、ぢつと見凝めてゐなければならなかつた。

―ほんとに御苦勞さまでした。お蔭で大變助かりました。看護婦なんぞだと、刎ね飛ばされて了ふことが在りますからね。―もう大丈夫です。これで疲勞さへ回復すれば何んでもありませんからね。どうぞ貴君も適宜な時に、お歸り下すつても大丈夫です。」

醫師はかう云つて出て行つた。

小枝子はすや〳〵と眠つてゐた。その規則正しい息使ひを聞くと、私も少ししてから看護婦に宜しく云ひ遺して、彼女の病室を立出でた。

戸外へ出て見ると、日はもうすつかり暮れて、初夏に近い蒼味勝つた夜空が、ぴつちり頭上に晴れ廣がつてゐた。灯の點きしなだつた。私は北廊へ出ると、全く解放されたやうに吻とした。けれども今まで立ち合つてゐた、あの悲慘な狀態から居を退いてゐる感情に、心はすつかり壓倒されて了つて、暗い下の地面ばかり眺めるやうにして歩いた。

病床に昏睡して眠つてゐる小枝子の顔や、醉つぱらつてゐる可愛い子供のやうな彼女の良人の顔や、それに今頃家で何

にも今日の事なぞは知らずにゐる母の顏なぞが、暗いところに浮んだ。

私はふと、「どうにもならない！」と云ふやうな、心からの嘆きを心の中に呟いた。そしてもう二度と、彼女の許を訪れたくないやうな氣持を覺えた。……

それつきり、實際、私はもう病院を訪はなかつた。人はなるべく他人の悲慘な事には、觸れたくない本能を持つてゐるのを、私はつくぐ自分に於て感じた。感じて情けなく思つたがどうも出來なかつた。

小枝子は小康を得て、その春の終りには、一旦故郷へ歸つた。

「此分でゆけば回復するかも知れない」

母はそんな事を云つて、喜んで見送つた。私も兎も角も、東京を去つて呉れた事には、一つの心安さを感ぜざるを得なかつた。（大正九年十二月）

昇曙夢氏譯

東京日本橋通一丁目角 大倉書店 (振替口座東京二三八番) 發行

露西亞現代文豪傑作集

△洋裝菊半截判函入美本 全六冊 各編定價金貳圓貳拾錢 書留郵稅金拾八錢

本邦唯一の權威ある露語直接完全譯、露國現代々表的文豪の代表的傑作全集、譯者は我邦露文學の泰斗飜譯界の巨匠、既に質と量とに於て本集は他に類を絕す熱狂的歡迎は當然のみ。

新刊 第三編 ザイツェフ ソログーブ 傑作集

現實の生を超越して弧獨と悲哀とに憬がれ宇宙永遠の生命に生きんとするがザイツェフの藝術である。水晶のやうな意識、玲瓏玉の如き文章、夢のやうな淡い空氣しつとりとした水彩畫の色調、斯んな沈靜高雅な藝術が何所にあらう。ソログーブの作は凡て彼が新たに創造せる現代の傳說とお伽噺にして內容は何れも醜き生の呪咀と美しき死の讃美とを特色とし、其情趣豐かなる筆力は露國の現代青年男女を魅惑したのである。

忽三版

第一編 アンドレーエフ 傑作集

忽三編

第二編 クープリン アルツイバーセフ 傑作集



勝敗

徳田秋聲

一

「吉村では、お嘉代はまだ歸らないのかい。」
荒井はさう言つて、時々不思議さうに細君に訊くのであつたが、金策に田舍へ出かけて行つたとか云ふお嘉代の歸らないことは、色々の意味で、可也な興味を惹いた。
「お嘉代さんですか。まだ歸らないようですよ。何うしたと云ふんでせうね。」
荒井の細君は、自分の弟夫婦のことについて、內輪のことを餘り荒井に知らしたくはないと思つたが、金錢上のことや、其他双方の特異な——それも重に荒い野性的なお嘉代の性格から來る感情の衝突などで經驗した、厭な思ひをさせられたり腹を立てさせられたりするのが、厭さに、長いあひだの交渉も今は幾んど絶え〲になつてゐたうへに、反感と憎惡の念さへ抱かせられてゐたので、そんな事には彼女の方が餘計に興味を感ずるのであつた。
「きつとお金ができないんでせう。それでなくて、こんなに長く歸らない譯ないんで

すもの。」彼女はさう言つて、寧ろそれを悦ぶと云ふ風であつた。

お滋代が田舎へ金策にいく話は、荒井もその頃から知つてゐた。その田舎から、彼は一月ほど前に歸つたばかりであつたので、不景氣風の吹いてゐる地方へ出向いて行くお滋代の目的は、きつと外れるだらうと思つてゐた。

「さうですかね、ぢや止しませう」などゝ、お滋代は言つてゐたのであつたが、ひどく手元が行詰つて、店が立行かなくなつてゐたらしく、苦しいなかゝら身装などを工面して、一週間と云ふ豫定で、到頭立つて行つたのであつた。

その一週間は、もう二週間も前に過ぎてゐた。目ざして行つた彼女の妹のところで、金が幾分できたらしく思へたこともあつたし、全然失敗だと思はれる樣子もあつた。大町の方の、妹の家で病氣で寢てゐるといふことを、荒井の細君は郊外の野本から聞いて來た。或時はまた、もう諏訪の方へ來てゐるらしい形跡もあつた。諏訪には荒井の細君のお美加や野本の親類があつた。

「吉村では又何うしてそんなに困るんだらう。」

荒井はこの春頃まで、あれ程景氣づいてゐた吉村が、そんな破綻に瀕してゐることを想像もしなかつた。

吉村――と言つても、それはお滋代の姓で、野本とお滋代とは相談のうへ、お滋代の姓で商賣をしてゐたのであつた。それにお滋代は、女ながらに多くの得意をもつてゐると思はれたし、重な働手もまた彼女でなくてはならぬと考へられてゐたからであつたが、その吉村滋代夫婦は、去年の今頃は、店がひどく景氣づいてゐたところから、指に寶石や何かを光らせて、四十と云ふ彼女にしては、氣はづかしいくらゐの派手な御召模樣などを引張つて、避暑のため田舎の親類たちを押廻したものであつた。勿論おそろしい好奇心の強い、そして滑稽なほど自分の偉さを示したがる彼女にも、それで以て田舎から資本を釣出さうといふ餘り質のよくない欲望が、本能的に働いてゐた。そして甘い悪狡さの、そんな心理

に支配されてゐたことは、良人の野本も同じであつた。目的は半ば以上達せられたらしかつた。十數年ぶりで、お嘉代は不思議にも、そんな處へ流れて行つてゐた妹や、生絲家である其の夫にも歡迎されたし、荒井へ養子に入つてゐる野本の弟にも、溫泉へつれて行かれたり、町の料理屋で藝者を見せられたりした。しかし東京へ歸つたときには、彼等はやつぱり寂しかつた。容易に調子に乘ることをしない山國の人たちは、誰も彼も感じが鈍かつた。

（あの人達は、人の借金も返さないで、何ていふんでせうね。それに折角田舍へ行きながら、勝手の惡いところは、避(よ)けるようにして……。）

荒井の細君は、その頃さう言つて氣を惡くしてゐた。

荒井はそんな景氣が、やつぱり彼等に續いてゐる事と信じてゐた。それは一面悦ぶべきことではあつたが、苦々しくもあつた。あれほど毎日のように往來してゐた野本もお嘉代も、ふつつり足蹈をしなくなつてゐた。

「さうぢやないんでせう。」お美加はそれでも少しは彼等の内面に通じてゐたので、さう言つて否定してゐた。そして彼等が苦しくなつた重な原因は、客筋の一人に詐欺にかゝつて、何も彼も洗(さら)ひさらひ亡くして了つたからであつた。それは古書畫に關する詐欺であつたが、そんな物に全然鑒識眼のない野本が、ちよつと悧巧ぶつたところから、ひどく識られてしまつたのであつた。そこにも彼等の甘い射倖心と、世間見ずな小悧巧さが反映されてゐた。それに後(あと)で荒井にも知れたことであつたが、彼等はまた客筋の人の話に乘つて、株を買つて、そこでも痛い目を見たのであつた。

二

それからもお嘉代の噂(うはさ)が、絶えず荒井夫婦のあひだに起(おこ)つた。それは別に其(そ)の事が荒井の氣にかゝつてゐた譯ではな

かつたので、ほんの忙しい自分の頭腦を休めるための餘興か、妻のお美加とのあひだに話題を設けるための氣紛れかに過ぎない程度の意味であつたが、しかし同棲してから九年の間に、色々の小さい爭鬪はあつたにしても、比較的靜謐であつた彼等夫婦のあひだに、何か事件が發生しさうに思へた。

「何うしたんだい一體。」荒井はいくらか內情を知つてゐるらしいお美加に言ふのであつた。

「まだ大町にゐるかい。」

「大町はもう疾に引揚げたらしいんですの。妹と大變な喧嘩をして、今は諏訪へ來てゐるさうですよ。」お美加は答へた。

お美加の說によると、野本夫婦の店は思つたよりも行窮つてゐた。羅紗屋の方も止まつてゐたし、外に退引ならぬ不義理な借金が幾口もあつた。職工は手を休めて、無駄飯を食つてゐた。野本は毎日首を長くして、お嘉代の歸るのを待つてゐた。手紙も出したり、電報も打つた。彼女からも二三度返事が來た。大町から二度、諏訪からも一度來たが、結果は餘り思はしくなかつた。其上お嘉代は去年十幾年ぶりかで訪問して、今年は直ぐ金の無心に行つた妹と喧嘩して諏訪にある野本の知人の家に滯在してゐるのであつた。多分そこで幾許かでも拵へるつもりかも知れないけれど、その人達にしたところで、野本やお嘉代の不誠實な遣口や不檢束な氣質をよく知つてゐるらしいから、駄目に決つてゐるといふのであつた。

「それに立つ前の晩に、二人で大變な喧嘩をしたさうですから、お金ができなければ、歸つて來ないかも知れませんよ。」

お美加は言ふのであつた。

「何だつて喧嘩したんだらう。」

「さあ、それは知りませんけれど、野本も少し感違ひをしてゐるんぢやないかと思ひますよ。どんな事をしても、お金

代さんが喰ついてゐるものと思つてゐるらしいんですけれど、あの人だつて、もと〳〵あんな仁で野本と一緒になつたんですもの、厭になつたとなれば何をするか知れやしませんよ。前後の思慮もなしに思ひ斷つたことをやりますよ、」と、お美加はさう云ふ風に、少し深入りして考へてゐるのであつた。

「さうさ」と荒井は應へてゐたが、九年ほど前に、お嘉代が野本と一緒になるために、長い間外まはりに働いてゐた家や良人を一と思ひに棄て來た熱情的な彼女の勇敢な行動が、四十にもなつた今の彼女に求められようとは信じられなかつた。その上野本は、彼女が今よりはより大きな店と、父兄や得意先などの信用を賭して得た最後の男であつた。年のまだ少いこの男のために、彼女は何のくらゐ苦しんだか知れなかつた。有らゆる智慧と勇氣とを絞つて、彼女の苦肉の策が漸く功を奏することが出來た。

「けれど、あの年になつてまさかそんな事もあるまい。」荒井は否定的に言ふのであつた。

「でも、何とも言へませんね。」

「何かさういふ形迹でもあるのか。」荒井は興味ありげに訊ねた。

「そんな事は判りませんけれど、お嘉代さんが立つときに、お金ができれば歸つてくるし、出來なければ歸らないなんて、こんな事も言つてゐたさうです――職人の話ですけれど。いくら惚れてゐても、あれでは厭にもなるでせうね。」お美加は言ふのであつた。

荒井はそれも然うだと云ふ氣がした。

「それぢや、野本が困るだらう。」

「少しはそんな目に逢つてみるのも可いんです。打つても敲いても、出ていかないものと思つてゐるんですから。」お美

加は又言ふのであつた。

「その癖野本もお嘉代さんに惚れてゐるんですね。お嘉代さんが何か大變な偉い女ででもあるように、お嘉代々々々つて、これあ可笑しいんですもの。そして子供が行くと、お前んとこの母さんは吝だとか、莫迦だとか、私のことを惡く言ふなんて、あれも隨分恩知らずさんですからね。」

しかし然うは言つても、稚い時分から一緒に苦勞をして來た野本のことは、やつぱり氣にかゝつた。是限り若しお嘉代が歸らなかつたら、詞の弱い、怠けものゝ野本は、忽ち支柱を失つて、お嘉代と一緒にならない前の、身すぼらしい一個の職人と墮ちてしまふであらう。そして其を思ふと、可也な小器用さと、好い腕だけはもつてゐながら、それ迄酒と女に持崩してゐた不検束な意氣地なしが、とにかく一軒の家の主人として、饑じい思ひや寒い思ひをしないのは、まだしもお嘉代があるからだと思はれた。で、何處に一つ女らしい優しさもなければ淑良さもない——男のように目鼻立の荒い顏から、誇大妄想狂のように口先ばかりで威張りくさることの好きな、その癖臆病で、筋道の立つたことは何一つ纒まつて、ちやんとした話のできない、野性的な性質まで、何處に氣に入つたといふところもないお嘉代ではあつたけれど、これは其として、野本の生活保證には、お嘉代はまだしも適當な女だと思はれた。

野本から言へば、彼がしじう口癖のように言つてゐるとほりに、自分でまつとうに働くくらゐなら、もつと好きな若い女を女房に持たなければならなかつた。お嘉代とたらば、出來る限りで、爲たい放題をでもしなければ、迚も助からないのであつた。

勿論さうした野本の横恣な本能的生活心理は、お嘉代にのみ働くのではなかつた。弱者の権利は、お美加にも弟にも、荒井にも事實可也要求されたのであつた。

三

或日荒井の細君の耳に、お嘉代が東京へ歸つてゐるといふ事が、ふと傳はつた。それはこの頃野本のところへ來てゐる野本やお美加の父の口から洩れたとであつた。

彼女等の父は、その頃リウマチに罹つて、特殊な治療法を施す醫師の東京にあることを聞いて上京してゐた。彼はもう可也の老人であつたが、野本夫婦とは餘り氣が合はなかつたが、ちやうどお嘉代がゐないので、少しは何かの役に立つところから、そこに居ることになつた。彼は相當に末子から扶養されてゐた。

で、その時外から歸つたばかりの荒井は、それをお美加から聽いて、ちよつと肚立しくも感じたが、野本に對する一種の皮肉をも同時に感じた。

「これほど皆なに氣を揉ましておきながら、何うして家へ歸つて來ないんだらう。」荒井はお美加に訊いた。

荒井もお美加も、他に頭腦にかゝつてゐる種々の問題があつたが、それは其として、野本夫婦の問題が、何となく氣になつた。

「何ういふつもりですか、あの人のすることなぞ私には判りませんね。」お美加は應へたが、何もかもさう一時に、忙しい荒井の頭腦へ入れても何うかと云ふ風で、ちよつと躊躇してゐるらしかつた。

「何うしてそれが知れたんだね。」荒井は訊いた。

「お爺さんがさう言つてゐました。職人が齋藤さんからでも聞いて來たことらしいんですの。」

齋藤といふのは、野本と極懇意な若手の辯護士であつた。彼が時々野本夫婦のところで、酒を飲んでゐるのを、荒井

は見受けたこともあつたし、何かの事件で、齋藤が荒井のところへ訪れて來てくれたこともあつた。彼は一口に言へば恬淡な酒好きな男であつた。荒井の事務で、野本夫婦――と言つても、商賣上のことは勿論、さうした表面上のことは、何時でも吉村お常代の名で、總ての事務が取扱はれるので、この場合にも世帯の實際上の主であるお常代が債務者であつたのは無論だが、その債務が荒井の方へ倒れかゝつて來たとき、好意的に法律上の事務を處理してくれたのも、齋藤辯護士であつた。

「それでお常代は齋藤さんところにでも居るのかい。」荒井は訊いた。

「その居所が判然しないんですけれど、あのとほり、親兄弟とも往來しないくらゐですから、どこか知合のところに居るにきまつてゐるんです。何でも赤坂にゐるといふ話ですけれど、事によると藤谷かも知れませんわ。」

藤谷といふのも、やつぱり以前野本の獨身時代に世話になつたことのある、同業者の一つであつた。或る有名な藝者屋の女將を妻にもつてゐる好人物の藤谷の主人は、不仕合せつゞきのために店が傾いてから、姉の遺産の小部分を分配されて、一切の家事を腕利きの細君に委せて、場所まはりだとか、徐長吊りなどやつて、氣樂な日を送つてゐた。その姉の店の破産には、野本も幾分その責がないとも言へなかつた。彼は店一切の事を切盛りしてゐた細君の愛に押されて、女將仲間と、亡き姉の金を、何かと引出したのであつた。勿論店の倒壊には刑事問題を惹起したほどの大きな原因が他にあつた。

長いあいだ疎隔してゐた野本は、最近途中で藤谷の細君と偶然行逢つて、それから又往來する事になつた。お常代の名で、店の資金を彼女から融通されるほどに、彼等の往來は繁くなつてゐた。

野本夫婦にまた、郷里の舍弟の細君などが、東京へ遊びに出て來た時など、彼等を藤谷に紹介したり、弟と藤谷との

聯絡をつけたりした。そして連中で陽氣に芝居を見て歩いたりしてゐた。そして荒井の細君のお美加は、そんな團欒から全く除外されてゐた。

「それぢや金ができなかつたので、入りにくゝつて、藤谷のお神さんにでも連れて來てもらはうと言ふんぢやないが。」

「え、あれであの人は氣が小さいのですからね。」お美加は首をひねりながら「だから、これもあるんですけれど、其ばかりぢやないらしいんですわ。何でも職人の話では、藤谷の神さんが齋藤さんの處に、ちよい／＼來てゐるらしいんです。それは、神さんの知つた人の事件を、齋藤さんのところへ此頃持込んで來てゐますし、お金の借しもあるからでせうけれど、お嘉代さんをつれて來さうな様子もないところを見ると、何だか變ですね。――お嘉代さんは野本と別れてしまふと言つてゐるさうですよ。」

そしてお美加の話によると、この邊でお嘉代の姿を見たといふものもあるから、多分自分の家の前をも通つてゐるだらうし、齋藤辯護士のところへも顏を出してゐるに違ひないと言ふのであつたが、彼女はいくらか興奮してゐた。

「やつぱり野本が惡いんだな。」荒井は嘆息するやうに言ふのであつた。

「それも然うどころぢやありません。あんな女でも、とにかく一生懸命働いてゐたんですから。四十にもなつて、洋服なんかきて、自轉車で朝夙くから得意先を乘りまはして……あの人も、時々こぼしてゐましたわ。私も、それは野本にも言つてやつたんですけれど、あの男は何んなことをしても離れないと思つてゐたんですから。」お美加は言ふのであつた。

「それもあの女が眞實に商賣上の頭腦があるんなら、倚つかゝつてゐても好いんだけどね。」

「え、さう、あれが又大變な働きものだと、野本は思つてゐるんですから。」

「働きなんかありやしないぢやないか。意氣ごみばかりで、職業上の自覺も何んにもあつた譯ぢやないんだ。××へ先

夫）を踏みつけにして、前の家を出るときも、自分が一人で店を切廻してゐたやうな事を言つてゐたけれど、やつぱりメメが巧くあの女を追廻してゐたに過ぎなかつたのだ。しかし、それぢや野本は困るだらう。

「何うしますかね。」お美加は投出してゐるやうな口調で言つた。

「放抛つておかうぢやないか。店が亂脈になつてゐるに決つてゐるんだから。」

「さうですとも。現に仕事ができなくて、まご〳〵してゐるんです。お房代さんの悪い癖で、その時の融通にお客のものを質に入れては、後で困つてゐるんですから。」

「そんなのが有る。」

「え、何でもひどく催促されてゐるのが一人あると云ふ話ですけれど。」

「何うしてそんな事になるのかな。まあ成べく手をつけん事にしよう」と、荒井は言つてゐたが、それがもう終はりついて來てゐるやうに感ぜられた。

晩飯がすんでから荒井は程遠くもない野本の店を見に行つたが、野本はいくらか狼狽の色を隠しながら、寂しい膳に向つて居た。彼は此の十日ばかり、心から生活の脅威を感じさせられてゐた。

「どうも困つてしまふんです。註文が方々から來るんですけれど、彼奴がゐないもんですから。」

「お房代の居所は解らんのかね。」

「それが判らないんです。」

「お前がわりんだね。」

「え……さうですかね。」と、ひどく神経のおびえてゐる野本は啼々しげに苦笑を洩しながら「何に、それあ然ういふ譯

ちやないんですけれど、職人が少しひどい手紙を出したものですから、彼奴もそれを見て怒つたらしいんですよ。それで、きなくて困つてゐる處へ、無茶な手紙をやつたんで……。」

お嘉代のボンネツトや洋服など、そこの壁にかゝつてゐた。そんな物をつけて、荒い皮膚にこつてり白粉を塗りたてゝ、怪奇な風をして自轉車で乘りまはさないでは、一日でも彼女は氣分がわるかつた。それが彼女の潑溂な分でもあつた。しかし近頃では、それも揶揄の種にすぎないことを、寂しく感じはじめてゐるらしかつた。年のせいでお嘉代も疲れてゐたには違ひないのであつた。

「左に右しやつきりしなくちや駄目ぢやないか。いつでも自分の腕でやつて行けるやうに。」

「それあさうですけれど……この場合どうも……。」野本は不滿らしく言つた。空しい助言などは、彼に取つては寧ろ殘酷だと思はれた。そしてそれは何時でも然うであつた。

四

藤谷の神さんから、家があるから見に來ないかと云ふので荒井が野本のところへ來たといふので、或日荒井は彼と一緒に出かけた。彼はその頃住居を移らなければならなかつた。そして少し金の出道があつたところで、手頃のものなら買つても好いと思つてゐた。家のないものゝ悲哀と屈辱とを、彼はしみ〴〵感じてゐたのであつた。野本から言へば、お嘉代の問題もあつた。荒井に藤谷へ行つてもらふことによつて、何等かの道が開かれて來るかも知れないと思はれた。

荒井は電車をおりると、北の邊の水菓子屋で、枇杷を一籠買ひなどして、通りから大分入込んだ藤谷の家を訪ねた。

鞍谷の新建の家は、入口が待合風に作られて、金燈籠などが植込の間におかれてあつた。

「何だか厭味ですな。」と、野本は小馬鹿にしてるように口元に笑つた。

十時半頃であつたか、二人は茶の間で、一杯やつてゐた。荒井たちは直ぐ瀟洒な奥座敷へ通された。その日は雨がふつてゐたが、まだ可也な暑さが殘つてゐた。三田川の稍の弱い息子さんや娘さんが、出てお辭儀をしたりした。荒井は隠居時代の彼れを見たきりであつた。

で、彼等二人の話がしばらく續いた。

「お嘉代はあれから來たでせうね。」野本は笑ひながら、神さんに訊いた。小肥りに肥つた、糖尿病もちの神さんは、所謂る苦労人であつた。

野本は入るときから、お嘉代が若しかすると來てゐるかも知れないと思つてゐる風であつた。下駄などに彼は目を配つてゐた。何だかあの女が時々來るのだと思ふと、どこかに然ういふ匂が嗅ぎつけられるように思へてならなかつた。荒井にもその氣持は十分感ぜられた。

「やつぱり女の方が強気なのかな。」荒井は思つてゐた際であつた。實は彼は、つひ此二三日前に、野本がこゝへ樣子を見に來たことを、細君から聽いてゐたのであつた。そして其の時、ちやうど來合せてゐたお嘉代が、彼の姿を見ると、周章て狼狽、飛出して、そこから勝手の方へ出るようになつてゐる、杉の板戸を排して、外へ逃げたきり、姿を見せなかつたといふことも承知してゐた。それは、然しお嘉代にしてはさう有りさうな、可也殊勝な彼女の氣持の證據だと思つた。

「いゝえ、あれから來ませんよ。」神さんも笑ひながら應へたが、少し間をおいてから、荒井の前をいくらか憚るように、

「お前さんが大層惡いんだよ。」

「さうですか」と野本はやつぱり笑つてゐた。

「野本が意氣地がないからです。」瀧井も言つた。

「おや〳〵」と、野本はまた苦笑した。

「野本のいけないことは無論ですが、一體お嘉代は何と言つてゐますかね。」瀧井は神さんに訊いた。

「お嘉代さんですか。私共にもよくは解りませんけれどもね、何だか別れるようなことを言つてゐますね。私は野本と以前からのお馴みで、あの人は昨今のですから、此人のことを贔負するようでも惡いと思つて、此事については何にも言ひませんがね。」神さんは何だか奧齒に物の挾まつたような風であつた。

野本から言へば、田舍から歸つて來たお嘉代が、こゝへ寄りついて來たときに、彼女に意見を加へて、とにかく家へ連れて來てくれないのは嘘だと云ふ不滿があつたので、二三日前に來たときに、それを洩したのであつた。

「さうですか。」野本は窓を向きながら、蒼白い手で顏を撫ぜてゐたが、「彼奴がいきなり店のところへ飛込んできてくれゝば、何のこともなかつたのです。」

「それお行きませんわ。」神さんは言つた。

「なに……あれほど意氣込んで家を出たので、何うしても空手で家へ歸れなくなつたんですよ。ちやんと判つてゐますよ。それも私が止めたのを、苦しいところを百圓ばかり算段して出かけたんですからな。別れるなんてのは、それお頭を下げずに、威張つて家へ入つてこようと云ふ料だつたんですよ。それだけに癖のある彼奴のことだから、私の惡口をさんざ言つたり何かして、今更ら歸らしてくれとは言へないですからね。」野本はいら〳〵しながら言ふのであつた。

「さう、さうだか……お前さんに女が惚れやしないてこと、そんな事言つたつて。」神さんは笑つた。そして、誰に言ふともなく、

「それにお孫代さんは、荒井さんにとにかく、お美加さんを怨んでますね。お美加さんも少し色眼鏡の方ですからね。」

荒井は餘り好い氣持がしなかつた。何故お美加がお孫代夫婦の生活に立入りすぎるとは思つたし、今少し傍観的な態度を取つたらばとは考へてゐたし、少しばかりの好感や助力などで、懐かせることのできるお孫代でもなかつた。物質上の扶助が無限に永続しない限り、お孫代から好感を示されることは不可能であつた。荒い感情と、空虚な頭脳と、目先の利切とで、相當に人を惹附ける力をもつてゐても、最近は誰にしても彼女に裏切られることなしに、非常な傷を負はせられることなしに交際することはできまいといつた。

で、荒井は北井について、少し言つたのであつた。

「少し附けつてごらんになれば判ることですが、あんな仕附のわるい、剛情な女も珍らしいでせう。」

「私もあの人の性質は知つてゐますよ。それこそ随分お銀な、勝氣の強い人ですけれどもね、それでも商賣は上手ですよ。なかなかね……女にしては胆のある方ですよ。」

「さういへるですか。」荒井は苦笑した。

「だから、お前さんが巧く使つて行きさへすりや可いんだけれど……たとへ空手で歸つて來ても、そこの思をよく、御苦労だつたとか、骨がつたらうとか言つてやれば可いんだけれど、いきなり呶鳴りつけられたんぢやお孫代さんだつて可哀さうぢやないか。」神さん言ふのであつた。

「そりお然りぢやないんですよ。」野々はいらいらしげに、「そりやお神さんは半面しか知らないからさう思ふんですけ

れど、彼奴は少な性分で一日でも外を飛廻はらないぢゃゐられないんですよ。朝の五時六時から、日の暮れるまで、何處をほつきまはつてゐるか知らないが……それあ大概私にやゝつてゐるんですけれど、氣紛に飛込んで無駄口でも利いてゐられるような……まあ巣鴨や王子あたりの氣のおけない家で、さんざ油を賣つて、歸つて來ると、何か大手柄をしたように大威張りで、飯の支度ができてゐないとか、湯が沸いてゐないとか、火のつくやうな騒ぎなんですからな。偶に氣分でも惡くて珍らしく家にゐるかと思ふと、午後になると、差當つて格別の用事もないのに、急に思ひついたように、何とかかとか口實をつけてふいと飛出してしまふ。それが彼奴の病氣なんだから。」

荒井も神さんも笑つた。

「とにかく商賣をすると云ふ女ぢやないんだね。たゞ盲動するんだけなんだから。」荒井も言ふのであつた。「私も最初は大分買被つてゐた方なんです。大きな資本もあるし、各會社に得意も澤山あるし、野本が拔きやつて、自分が外廻りに働けば、今に表通りで宏壯な建築を興すぐらゐ譯はないようなことをいつた、それでこそ素破らしい意氣込だつたんだからな。氣輕な誇大妄想狂なんだが、野本からいへば、勝んだものに引かゝつた譯なんです。最初一緒になつた時の口は何一つ實現されてゐないんですから。」荒井は少し蔽被せるような調子で「それを又、何か凝い女に貢れでもするように、好い氣になつて、太平樂を言つてゐる奴も奴なんです。結局は持切れなくなつて、突ぱずすより外はないんだ。若し自分の腕で眞面目にやるつもりなら、あんな女がゐては何うせ駄目なんだし、倚かゝるとすればかゝり榮のしない女なんだから、これを機會に綺麗に話をつけて、一本立になつて働いた方が好いと思ふんだ。」

「それあ然うですけれど、差當り店の仕法がつかんですもの。」野本は（そんな事を言つてくれたつて、今の場合金がなくては何うにも爲様がないぢゃないか）と云つた風で、脣をわなゝかせてゐた。

「けど、それあお前の決心一つぢやないかな。」荒井は壓しつけるやうに言つた。

「それあ解ります、解りますけれど……」と、野本はひどく怯えたやうに、苦悶の色を浮べて、泣けたやうに「どうも困つちまうた」と、呟いてゐた。

荒井はそれから、勘さんに案内されて、その邊の家を二軒見てあるくと、又立歸つて、おすしの御馳走になつてからそこを出た。

「何うでした、お濟代さんのことで、藤谷のお嬸さん何か言つてましたか。」お爽加は氣にして荒井に訊いた。

「むゝ」と荒井はわざと冷淡を見せながら、「誰しも女の方の肩をもつからな。」

「さうでせう。」お爽加は張合がなささうであつた。

五

それから大分日がたつた。その間にもお濟代の消息について、取止まりのない色々の噂が、彼等夫婦の耳に傳はつた。

彼等などは、野本と家を捜しに田端の方まで出向いた歸りに、野本の辯護士のところで、お茶を飲んで行かうと言ふので、ちよつと立寄つて、又その話が出た。その前にも他の用事で辯護士が、荒井のところを訪ねたとき、野本もちやうど居合せたところで、彼は野本の今後の謀計について、非難の氣勢を示してゐた。

「あんたが惡いですな。」彼はその時率直にさう言つてゐたが、今もやつぱりさう信じてゐるらしかつた。

「私の立場としては、孰れ何うとも言へないので、……。」彼は言ふのであつた。「つまる處、當分放擲つとくより外はな

いでせうね。」

「お嘉代に歸る意志はないんですか。」荒井は突止めた。

「まあ、無いですな。もうふる〳〵厭になつたと言うとりますた。それは明白に言明しとるですから。」

「その方が、私の希望なんですが……。」とお嘉代は言つたが、「しかし其も野本の意志もあることですから、歸る希望があるならばとも思つてゐるんですけれど……それなら其で解決をつけなくちやならないんですが。」

勿論その場合には、法律上の智識のある辯護の判斷に待たなければならないと思はれた。

「解決といつたところで、大變ですな。非常な自信があるでせう。」と、辯護士は多く野本に話すように、「しかし貴方があすこへ踏止まつてお遣りになれば、何でもないぢやありませんか。一つ其の覺悟をなさい。あすこを動いてごらんなさい、あんな家賃の安いところは、迚も他に見つかりませんよ。それに店の株もありますからな。」

荒井にはその意味がよく解らなかつた。勿論お嘉代の名によつて代表されてゐる彼等の店が、八方負債で塞がつてゐることは、何時となし荒井にも明らかになつてゐたが、野本やお美加がまだ體裁を作つて言つてゐるので、詳しいことは、彼には判つてゐなかつた。それに最近荒井は、刑事上の問題にでもなりかねない口を一つ片附けてやつた。そして其もお嘉代によつて爲されたことではあつたが、抛つておく譯にはいかなかつた。野本は毎日々々その催促を受けて、蒼くなつてゐた。何も手に着かなかつた。「お嘉代が歸らないんなら、ぴたりと店をしめて了つたら何うだ。」荒井はさうも言つてゐた。野本も「當分田舍へ行つてゐませうか」と、そんなことをお考へたらしかつたが、店を棄てることは、やつぱり寂しかつた。一日離れゝば取附くことは、迚も不可能だと思はれた。そしてお嘉代とも、それきりにならなければならなかつた。その上それは彼に取つて、この上ない恥辱であつた。そして其はお美加も同じ氣持であつた。野本

を見殺しにすることは、荒井に取つても忍びないことであつた。お齊代を信じてゐる側の（誰も彼も然うであつた）人達の迷惑を來すことも、彼に取つては非常に煩瑣のあることであつた。家へは寄りつきもしないで、彼女許りの壽口で、頻りに泣言を放つてゐるお齊代の情緒を挽ぐことも荒井に取つては、可成な興味であつた。勿論それは大人氣ないことのようにも思はれた。しかし彼はそれを超越するだけの雅量に缺いてゐた。始終彼の耳に傳つて來る、聽くにたへないお齊代の不平に對して、彼は全く無關心ではゐられなかつた。どこまでも自分を突張つて行かなければ止まない彼女を憎まずにはゐられなかつた。

そして荒井は少しづゝ野本に反問を與へはじめてゐた。勿論それは絶對にお齊代を入れないと云ふ條件ではあつたが、併し野本は何うかすると、荒井を揶揄つた。荒井の斡旋するほど、野本の緊張してこないのが、もどかしかつた。

「貴方も男なら、一つ遣つてごらんなさい。」齊藤辯護士はまた言ふのであつた。「僕が若し貴方とすれば、女と別れる場合には高利を借りてもすぐ一千の金で切らせるはやりますよ。」

野本は揶揄されたような顔をしたが、荒井にはその意味が、いくらか判斷がついて來た。荒井から言へば、總ての關係者であつたお齊代は、別れると同時に、負債の半分を負擔すべきものだと思はれた。そして其點で齊藤辯護士にお齊代を説諭してゐるのだとしか思はれなかつた。

荒井はわざと默つてゐた。彼等は荒井を前においてゐた。齊藤辯護士と野本は、もう可也酔つてゐた。

「しかし僕なら遣りませんね。」荒井は少し乘つてみようと思つた。「自分の勝手で別れようと云ふものに、手切なんか遣るのは絶對に嫌ですな。」そして、少し間をおいてから、「それも同情すべき點があればですけれど、散々遣りちらして、動きの取れない場合になつて、野本に難癖をつけて、家を飛出かすなんて、何うしたつてお齊代が利益なんですから

な。」

そして荒井は、お嘉代が前の良人を躊躇つて、強ひて荒井の承認を得て、野本と同棲生活を初めた當初の事情について、少し話した。

「私は勿論ですが、野本にしたところで、まるで彼女のぺてんにかゝつたようなものなんです。私に言はせれば、少し技倆のあるものだつたら、決してあの女と一緒にはゐません。前の亭主だつて、野本と一緒に出奔したとき、お嘉代を引止める意志は少しもなかつたです。お嘉代の性質のいけないことは、彼女の親や兄が絶對に寄せつけない事實が、何よりの證據だと思ふんです。これまでのあの店の遣方は、總て苦しい遣繰なのですが、資本の出てゐるところは、決してお嘉代の側からではなかつたんですからな。みんな野本の側なんですからな。」荒井は主張するのであつた。

齋藤辯護士は、それ以上辯はなかつた。

「いや、私は詳しいことは知りませんが、然う云ふ事もあつたんですかね。私は初めて聴いたんです。」

「野本の悪いのは勿論ですが、それは消極的に自分で貧乏するといふくらゐの事で、お嘉代のような無茶はしないですから。」荒井は附加へた。

「とにかく財産を書きあげておきなさい。」辯護士は指示に言ふのであつた。「貸しと借りと、殘らず書きあげておくんですね。」

六

或日別れることについて、お嘉代の時々寄りついて行くと云ふ株式業の山田と、お嘉代の從姉妹の婿だと云ふ會社員

の井口に、それから荒井に野本が、齋藤辯護士の二階に集まつて、問題を解決することになつたのは、それからもう餘程たつてからであつた。

勿論その間には、色々の事があつた。野本の近所の顔きゝのお婆さんが、お露代からの手紙を受取つて、彼女が下谷に訪問した結果、あの女も何だか弱つてゐるらしいから、間へ入つて仲裁の労を執らうと申出た。そして其には順序としてお露代の希望で、下谷のお神さんへ話を持つて行くことになつたのであつた。

そして其と同時に、荒井のお露代に對する氣持にも、いくらか餘裕が生じて來てゐた。

それは或時、荒井がお美加と子供たちと打連れて、通りへ買ひものがてら散歩に出た時に、ちらとお露代の哀れな姿を見たからであつた。勿論荒井は目が餘りよくないので、讀過してから、お美加や子供にさう言はれて氣がついたのであつた。

「着ものゝ入替へに來たんですよ。」とお美加は言つてゐた。行きつけの質屋がついそこにあるので、その想像は勿論當つてゐた。

もう大分寒氣になつてゐた。お露代は頭髮も崩れて、見すぼらしい姿をしてゐた。

「今に折れてくるぜ。」荒井はさう思はずにはゐられなかつた。

野本は強ひて勇氣を出して、註文を取つたり、算盤に向つたりしてゐた。あらかた目鼻がついてゐた。刑事問題になりさうな他の口も片づいてゐたし、滯つてゐた家賃も納められた。羅紗屋の前借をも拂つてゐた。荒井はそれによつて、野本がほんとうに目覺めて來るならば、少しぐらゐの助力は吝んではならないと思つた。

で、お露代に逢つたその翌日、酒屋のお婆さんへのお露代の傳言があつた。それはセルの單衣を送つてくれと言ふの

であつた。

「何しませうか。」野本は荒井にきくのであつた。

「そら謝つた方がいゝ。本人がそれを頼んで來るくらゐだつたら。」荒井はそれを勸した。

「さうですか。ぢや謝りませう。」

野本は悦びの色が隠せなかつた。

「己だつて、何もさうお嘉代を憎んでるといふ譯ぢやないんだからね。入れるにしても、威張つて入つて來られたんぢや、後が思ひやられるから、反省を促すために、窘めるだけの事でね。それに少しは人の言ふ事も聽かなければね。お前たちは何時でも己の助言を無視してゐるんだから。」荒井は言ふのであつた。

「しかし熟考する必要はあると思ふよ。お前にしたつて、自分の心持一つで、何うにもなることだからね。お嘉代一人が女ぢやないんだからな。今度また幾年かの後に、こんな事があつてごらん、その時は己も生きてゐないかも知れんし、其こそ始末がわるいから。」

「え」と、野本も悲痛な色を浮べながら、「ですけれど、何分私も普通の體ぢやないんですから、女房をもらふと言つても、なか〳〵面倒ですから。」

彼はお嘉代と同棲する二三年前に、睾丸を失つてゐた。

で、それもさうだと、荒井も言つた。

「そればかりぢやないんです、女手がなくちや、實際遣切れないんです。職人にしたところで、我儘がいゝに爲方がありませんか　ね。職人はお嘉代の歸らないことばかり希望してゐますけれど……。」野本はさうも言つた。

とにかく荒井は、自分の强硬な出方が、却つてお嘉代を挑發してゐるやうにも思はれたところで、野本のためにそれを幾分頻繁に感じてゐた。總てが野本本位でなくてはならないことに、氣づいてゐた。

ところがそんな好意が、却つて又お嘉代の驕慢を募らせるに過ぎなかつた。

といふのは、細君のお美加が、始終仕事を頼みに行つてゐる警察吏の山田の細君の話によると、お嘉代はやつぱり反くり返つてゐるらしいのであつた。

「酒屋の却婆なんか仲へ入れて、騙して入れようとしやがつたつて、誰が歸つてやるものかつて、お嘉代が言つたんですて。」お美加はさう言つて口惜しがるのであつた。

「山田さんでも、別れた方が好いつて言つてますよ。第一貴方がたの顔にかゝるし、野本が段々惡くなるばかりだつて……。」

で、荒井はその事を、酒屋のお婆さんに斷つたのであつた。

そして其以來、荒井はその問題を途拔きに傍觀してゐると云ふ風であつた。

すると或日、山田が荒井のところへ遣つて來た。

「別れることにして、解決をつけなすつたら何うです。お嘉代さんも、あんな女ですから、貸付の點はとにかく負債は背負はないと言つてゐますから、此際をはずさず、背負はしてしまつて、綺麗に片をつけた方が御利益だらうと思ひますが……その上だつたら、齋藤さんとも御相談して、骨を折りますよ。」山田は言ふのであつた。

「私に實はそれを待つてゐたんですが、離方もその問題に觸れてはくれなかつたのです。」荒井は應へた。

「それなら何の事です。」

「しかし放抛つてもおけないものですから、ぼつ〳〵店の始末をしかけたところで、野本も落着いて仕事をやつてゐるんです。お嘉代にしたところで、刑事問題にもなるべき負債を片着けさしておいて、今更ら解決問題を持出すなんて、私としては實は餘り有難くないんですが……。」荒井は言ふのであつたが、山田の好意を無視することは出來ないと思つた。

しかし山田の話は、ひどく漠然としたものであつた。急を要しない負債を引受けることには、そんなに困難なことでもなかつたし、店や家財の問題に觸れないところを見ると、そんな物をお嘉代のために有利な條件で、處分するつもりだらうと、想像すれば想像される理由が、十分山田の態度に現はれてゐると、荒井は感じた。

それに姻戚關係の井口も、お嘉代に縋かれたからと言つて、日を期して、山田と一緒に荒井のところへ集まつて來た。不思議なことには、彼等は初對面らしい風を裝つてゐたが、そんな打合せを、時々やつてゐたに違ひないと思はれる點が、その樣子や口吻で略推察されるのであつた。

とにかく荒井は、それらの多勢のお嘉代の同情者を先きへまはすのだと云ふ、緊張した意識をもつて、期日に齋藤辯護士を訪ねたのであつた。

お嘉代も來てゐたが、二階へは上らなかつた。彼女が始終齋藤や山田へ寄りついて行つてゐることは、明かに荒井に感ぜられた。その晩も、そこへ來るまで、お嘉代は山田のところに居たらしいのであつた。

誰もみんな、荒井を目標にしてゐることが、荒井を少なからず興奮させた。

「私は、是までお二人のなかを實は纏まることを希望してゐたので……」齋藤は淡泊とした風で、自分の立場を説明するのであつた。「それが何うもかう云ふことになつて來ると、問題に立入ることは甚だ不愉快なので……。」

そして彼は野本の方へ目をやつて、「何うです、貴方が一つ今までの遣方を更めて、巧くお露代さんを使つていつたら。」

すると其について、井口も紺セルのサックコートを着た、小柄な躯を動かしながら、

「私も實はそれは希望してゐるので、再三本人に說いてみましたところ、何うしても歸る意志はないと主張してゐますので、餘儀なくその方針にしたのですが、それの善後策については、私と一つ荒井さんの御許諾を伺つたうへで、……何に、私もさう頑ばるようなら、御免を蒙ると本人にも言つたくらゐで、その邊は極穩かなお話にしたい積りですが……いや、しかし何か圓滿なお話ができるようなら、尚更結構で……荒井さんの御意見は何如ですか。」

「私ですか」と、荒井は自分の立場にしつかり掴まるような態度で、しかし幾分興奮の語調で、「私も強ち破壞を好むわけぢやないんです。お露代さんが、ほんとうに自分の非を悟つたと云ふ證迹さへあれば、それに越した事はないんです。野本が入れたがるのも、人情上當然のことだらうと思ひますが、しかし下手に同情すると、お露代さんのために反つて反噬されるような形で、……。」

「では、何うでせう、ここへ本人を呼びまして、皆さんから說いていただきましたらば……。」

「駄目でせうな。」荒井は其の結果を危ぶみながら、「山田さんは何うです。」

「駄目です。絶對に歸る氣はありません。」山田は熱情的に言つたが、しかし井口は暗かつた。荒井にはそれがよく解つた。

「すると矢張り負債と財産の差引ですが。」荒井は力のこもつた口調で、「しかし野本の方では結局の問題は片づいてゐますので、それに要した金の價値は、他の急を要しない負債に對するものゝ幾層倍にも見積られるのが至當でせう。他の

負債は小口から少し宛返していけばいゝので……とにかく家を自分で棄てたお嘉代さんは、お氣の毒ですが、當然餘程不利益な地位に立つてゐるものと見なければならんでせう。」

さう言ふ荒井の、何處までも自分の地位を占めようとする言は、彼を物質慾には至極淡泊な、そして權利の主張には至極溫良だと思惟してゐたらしい人達に取つては、可也強く響いたらしかつた。

「此事はいづれさう單純には解決がつかないでせう。物質は僅かのものですが、それに附帶する意味には、色々のものが含まれてゐるんです。それは法律の條文などでは、迚も片づけられないような……勿論法律にもつて行くより外はないのでせうけれど。」

「しかし、それも事務的にですな。……大抵世間の慣例もあるものですから、お互に讓歩してどす」と、井口は言つた。

「それに、場合が何であるにしましても、金の價値は同じですから。」

しかし彼は強ひて爭はうともしないのであつた。

すると野本がその時、口を利いて、「何うでせう、井口さんとは私もお氣心を知合つた間柄ですから、一つ二人で平たくお話をすることにしては。」

「それも可いかも知れんですよ、」井口もそれに同じた。そして、「何に私は決してお嘉代本位でお話をする譯ぢやないので……ぢや、さうしませうかな。」

「ぢや一つお歸りに寄つて頂けませんか。」野本は心易立に言ふのであつた。

「可がす。ぢや然うしませう。」

少し打解けた話をしてから、一同が退散したのは間もなくであつた。

七

府と市の名譽職で、今に國の名譽職である名望家の高山が、この問題を、又府へ引戻すことに力を盡さうとして、荒井のところへ來たのは、それから又大分日數がたつてからであつた。

荒井はあれ以來、その問題に觸れることを、出來るだけ避けるやうにしてゐたし、野本もあの時辯護士の家から歸つて、井口と二人きりの話を取交した結果、お互に甘い豫想を裏切られたに過ぎなかつた。

「井口の奴、あれでなか／＼強いんです。無闇に私を捨てゝ丸めこまうとしてゐるんです。」野本は言ふのであつた。

野本の話によると、お濱さんの要求は、可也彼女の本能を發揮した、虫の好いものであつた。

「それで私は到頭駄々をこねてやつたんです、一切何にも分けちややらないつてことに。私は考へましたよ、何んなことがあつても、彼奴には文をくれないで言つて、何處までも頑張つてゐてやらうと思ふんですが……何に負債といつたところで、直接私の知つてゐるのは三口ばかりで、それも差迫つたものぢやないんですから、あの家に居すわつて、彼奴の自由にならないうちに、今年中の諸收をすつかり取つておかうと思ふんです。」

荒井もそれには不同意ではなかつた。彼にごちや／＼した經理問題などについて、井口と交渉を重ねることを、餘り潔しとはしてゐなかつた。ひどく頭腦の忙しかつた上に、井口などに人格者扱ひにされて、拜み倒されることは、快いことでもなかつた。で、野本のさうした態度が、一番自然らしく思へた。問題をそつくり其のまゝにしておいて、時がそれを解決するのを待つのが、賢い仕方だと云ふ氣がした。

井口は二度も三度も、此儀案を提げて、荒井に會見を申し込んで來たが、荒井はその度に、野本の言分と自分の多忙。

ことを口實にして、實際問題に觸れることを避けた。そんな點では荒井は、自己のづるさを分明意識してゐたが、しかし一面から言ふと、たとひ此細なことであるにしても、當初から自分の息のかゝつた店が分裂したり破壞したりすることは好ましくなかつた。野本がほんとうに自分の力を盛り返さうと云ふなら、＋も－も其まゝそつくり引繼いだ方が寧ろ氣持よく思はれた。

「家を出たつぱなしで、野本が散々放蕩した揚句、苦しい中に放擲らかしておいて、今になつて家財の處分などの交渉に來られるのは、お露代さんが少し殘酷ですよ。その上、たとひ何であらうと、野本と一緒にならなければならないと云つて、私が餘り進まなかつたのを……結局先夫に對するお露代さんの態度は、ちやうど今の野本に對する態度以上にも亂暴だつたんですから……到頭承知させて成立したことなのに、一應私のところへ別れ話を持込むといふ所作も無視して、反つて私達を誹謗してあるくなんて、無智だからと云ふ理由で許しておく譯にはいきませんよ。それに利權問題となると、頭腦が隨分鋭く働くんですから……。」荒井は自分の妹を幾分輕蔑するやうな氣分で捌込むのであつた。

で、井口もそれを動かすことはできなかつた。

「いや、それもあう、私もあれの惡辣な氣質はよく存じてをりますので。どうも其の、あれの血統にはさう云ふ點があるようで、實は私自身が妻に手甲摺つてゐるような始末でして。」井口は正直に言ふのであつた。

「その點では、大分貴方の感情を害してゐるようですが、感情問題はまあ此際除けておいていたゞいて……。」

「實際問題にしても、双方餘り無理があり過ぎるやうですが、私としては野本の意志も尊重しなくちやならないんで……。」

で、其日は一度お葉代をつれて来ることを許したりした。そして其から二日ほどしてから、時日を打合して、二人でやつて来たが、荒井の態度はやつぱり堅かつた。

「これ、こんなでございます。」お葉代は田舎へ立ちかけの、野本との劇しい闘争の迹を、袖をまくつて、荒井に示した。戸を鎖して、彼女を打擲したといふのであつた。

「あの人と一緒にゐたのでは、どうしても店が立行きませんについて、別れてしまはうと云ふことは、もう大分前から考へてゐたことなんですけれど、借金だけでも片附けてと思ひまして……それも思ふように行きませんところから、到頭野村さんにこんな御心配かけるようなことになりまして。」お葉代は瞬間に話すのであつた。

それに彼女は、身装なども其頃はきちんとしてゐた。お召の袷に仕繊などを着て、地肌の荒い顔に白粉をつけてゐた。しかし彼女の行詰つて来てゐることは、色々の情報を綜合すれば、直ぐ頷けることであつた。孤立では何も仕得ないことだ、周囲の人に圧倒されかけてゐた。お粋な傘を、隣谷の神さんや、山田へ借りに行つたりした。居所にもまごついてゐた。そして其のあひだにも、彼女は同郷であるところの、或私立大学生などゝ、劇場へ入つてゐたりした。で、二人の関係が、野本たちの疑問となつてゐた。お葉代はその大学生の下宿にごろ〱してゐることもあつた。彼と同じ田舎のものが、野本と手を切りさへすれば、お葉代のために何時でも資金をおろしてくれることになつてゐるなど、お葉代は吹聴して歩いてゐた。たとひ一時でも、そんな物に喰ひついて行くだけの隙は、彼女ももつてゐたが、それも何時もの彼女の出合頭かもしれないと想像された。

「野本の半生には、私も始終言つてるとほり同情しかれるんですが、今度のことは貴女が少し不人情ぢやないですか。理由が何であるにしても、十年も一緒に苦労したものが、たとひ瞬時にしても、顔を見るのも厭だといふのは、可哀し

いような氣がしますな。野本は別れないつて言つてゐます。男妾か何かのようなつもりで、怠け條件に怠けてゐたのは、無論卑屈で薄情ですが、貴女と別れることは辛がつてゐますよ。それに貴女が公言してゐるほど、野本は幸福でゐつたでせうか。腦を働かせる方ぢやなかつたにしても、宅ほど頭腦のいゝ男はないとか、貴女も言つてゐたぢやないですか。」荒井は笑ひながら言つたが、さすがに多く責めるには忍びなかつた。

「貴女は酒屋のお婆さんに、仲裁を頼みやしませんでしたか。」

「いゝえ、決して……あんな胡麻擂婆になぞ、私が頼むもんですか。」お露代は吐出すように瓶瓶壁で言つた。

「胡麻擂とは何です。」荒井は言つた。

「胡麻擂です。」お露代は忽ち興奮して、ひどく嵩にかゝつて來た。「藤谷のお神さんに胡麻を擂つたんです。私が現在聞いてゐたんです。」

「あのお婆さんは、譯のわかつた立派な人です。子供を高等學校へも出してゐるし……さう貴女のように……。」

「少し口をお愼しみなさい」荒井も窘めるのであつた。

とにかく家を自分に引繼ぎたいといふ、お露代の條件であつたが、荒井は好い加減にお茶を濁すことにしておいた。

彼等は双方熟考のうへ、又の商議を重ねることゝして、荒井の家を出た。

「花子にお嫁相でも言ひさうな風でしたよ」とお美加は二人を送り出してから、ほろりとした風で言ふのであつた。

「私も少し遊んでおいでなさいと言はうかと思ひましたけれど、あの曲口がね……損な性分ですね。でも何だか哀れのようね……。」お美加は涙ぐましいような氣持になりながら、「あんなことを言つてゐたつて、もう大分弱つてゐますね。あの人も四十ですからね。それから見ると、野本は何んなに幸福だか知れませんわ。貴方が附いてゐて下さるので

……。貴方がゐて下さらなかつたら、あれは何んな目に逢つたか知れませんよ。あれも今度は大分感じたやうですわ。きつと貴方にやるつて言つてゐますから。」

荒井も何だかひどくパセチックな気分に沈んで来て、仕方がなかつた。

「おい〳〵お露代、さう皮肉を云つてゐずと、もう一度思ひなほしたら何うだね。」彼は追つかけて、手を執つて一切許してやりたいやうな気がした。

[illegible]捨てられて、[illegible]ところ喧嘩をして、ほんとうに親身になつてくれさうな唯の一人をも持たせてゐない[illegible]な[illegible]と長い[illegible]はれた。

八

[illegible]くれた所に、荒井の通をするところによれば、何時までもお露代は荒井の膝下に出てゐる荒井の氣[illegible]の、[illegible]いたものとしか[illegible]にはなかつた。[illegible]日に、[illegible]な[illegible]として、[illegible]に向つて、[illegible]を[illegible]のであつた。お[illegible]その時[illegible]ゐたらしかつた。そして自分の[illegible]を[illegible]てくれるならば、何うでもやらないこともないと云ふ風であつた。――[illegible]にもなかなかられたり拗ねしたりすることもなしに。金銭に[illegible]に手を[illegible]させない事（最近彼女は[illegible]それを[illegible]してゐた）。外のどんなに[illegible]くなつても、それに少しでも干渉がましい事を[illegible]けたい事[illegible]に多く[illegible]い事（その[illegible]挑戦するために、酒を飲ませると不思議な好みであた）。野木の一人の酒飲みの弟と一緒に[illegible]する事（それは不断から、お露代に問はれてゐる例の野木に不満を感じてゐた）。お露代の條件

のうちには、そんなような要求があつたらしいのであつた。

ところで其の時、野本が偶然高山の屋敷を訪ねて、縁側へ姿を現はしたので、高山が目配せをした。すると忽ち其を感づいたお嘉代は、例の誇張的な彼女の素振で、いきなり脱兎の勢ひで有合せた男物の下駄を突かけたまゝ、飛出したきり、寄りつかなかつた。

で、それも其限になつてゐた。そして其の間に、別離についての處分問題が荒井の意圖で、豫定のとほり行悩んでゐるのであつた。

「別れる問題となれば、これほど簡短明瞭なことはないので、今が今でも話はつきます。」高山はその莨を仕扱きながら言ふのであつた。

「しかし厭でなかつたればこそ、十年も一緒にゐたものが、家の經濟が立行かなくなつたから、別れようと云ふのは、何う見ても感心できない。私は極大摑みに、……双方面倒くさい感情上の縺合ひなどしてゐたんぢや話が紛糾るばかりです。そんな事は、圓滿な話がついてから、ゆつくり相談のできることなんだから、何は措いても、とにかく一旦お嘉代さんを家へ入れる。それでなくちや可けんのです。」高山は至極樂觀的に、さう言ふのであつた。

「それにあの人は、色々の缺點もありませうが、なか／＼頭腦のいゝ人です。先回の選擧運動のをりの働きたぞといふものは、それあ大したものでした。機敏と熱心なのに、私は感服してしまつた。」

荒井はそれには全然不賛成であつた。若しさう信じてゐるならば、彼の洞察は疑はしいものだと思はれたが、自分を緩和するための推奬的な意味でなら、甘んじて全部受容れておいても可いと考へた。で、彼は默つてゐた。

「またあの人は、口は惡いか知らんが、あれでなか／＼親切です。子供の病氣を心配して、田舎から手紙もくれました

し、上京してからも、案内を通用して、お稲荷さんへ願かけにも行つてくれて、私は感謝してゐるのです。」

「それあ然ういふとには、まめに働くのです。」荒井も言つた。

勿論それは非として、お席代は高山夫人に、同郷の友だちといふ関係から、ちよつと風の好くない金の借方などして、[illegible]されてゐるとも評判であつた。

とにかく[illegible]日の晩に、井口がお席代をつれて、今後の処分問題について、今一度荒井を訪ねて来ることになつてゐたので、その会合を利用して、高山からお席代を引渡すことにして、その時は帰つた。

荒井はこの日頃、打つて高山などの気分にふさはしいものかも知れないと云ふ気がしたので、一切自分を傍観者の地位におくことに決めてゐた。

しかし当日になつて、お席代は来なかつた。井口[illegible]定刻した[illegible]、とにかく迎つてゐた。

「実はふところを決めておきましたところ、私が、所用でおそくなつたゝめに、本人は待ちあぐねたものと見えまして……。」井口に断りを言ふのであつたが、お席代が高山に逃ふのを忌避したことは、荒井にも感づかれた。

高山の言ふとには、[illegible]よりはなかつた。明瞭すぎるほど明瞭なものであつた。してそんな時には何也甘故なれ[illegible]した[illegible]であつた。

「はい[illegible]はあい[illegible]井口は[illegible]んで[illegible]をしてゐるきりであつた。

「何分私としましても、明瞭な解決をお守しますので……。」彼は東北訛で、型にはまつた口の利き方をしながら、「それならば一つ、本人にも能く言聞かせまして……尚また本人からも十分お話のできるようにしますが、今度は荒井さんのお宅よりか、貴方のお宅へ同道することに致しましては、如何のものでせう。」

高山もそれを受容れた。

「高山さんのお話は行き屆いたもんですわね。」お美加は後で荒井にすはぞおつた。

「それあ何うしたつて、物を纏めるにはね。」荒井は應へた。

「けれど、つまりはお嘉代さんが勝つたようなもんですね。こんなに色々の方だ、手をかへ品をかへして、それで這う入つて來るなんて、偉いわけのもんですね。」お美加はそれがまた口惜しさうであつた。

しかし高山氏の努力も、つまりは失敗に了つた。一晩彼はお嘉代を說いたが、お嘉代の意志は强かつた。で、また、それにも理由があると、高山氏を頷かせるに十分な熱情と主張とを、お嘉代は述べたらしいのであつた。勿論高山氏には理智は缺けてゐても、感傷癖は可也强かつた。彼の道德は全然そんな點に根生えを閉めてゐた。

總てが有りのまゝに殘されてあつた。

お嘉代から寄りついて行く人たちから、段々遠ざけられてゐることが、種々の些細な情報で知ることが出來た。

「何と言つても、野本があの女を働かしてゐたんですねなんて、山田さんが言つてゐましたよ。」お美加は或時、仕事を賴みに行つて歸つて來たとき、荒井に話した。

「それで可いんだ。それで解決されてゐるんだ。」荒井は思ふのであつた。

野本は今でも、荒井には秘密で、お嘉代を取戻すことに、拔目なく頭腦を働かしてゐるらしかつた。

最近その事について、お嘉代の實兄が、荒井を訪問するだらうと云ふことが、野本の職人の口から、お美加の耳へ傳はつて來た。

新案特許

名譽ボール

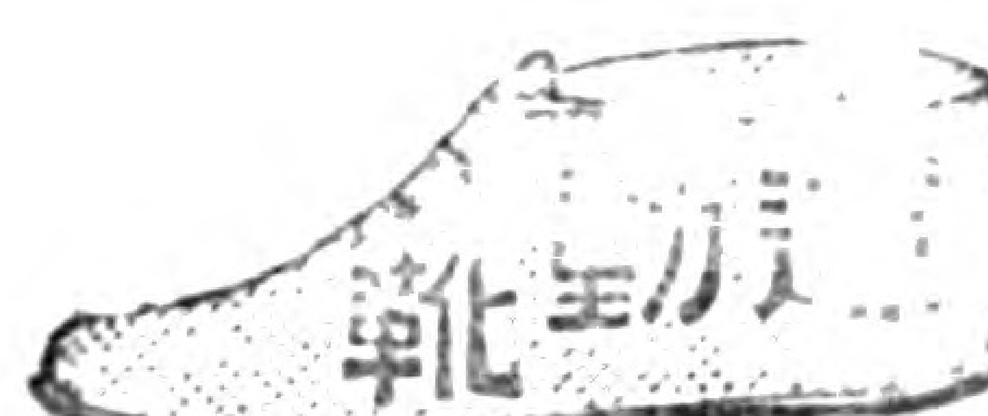




日本少年野球協會公認指定靴製造

發賣元

營業目錄送呈ス



新案特許

運動靴

ミシン靴

少年野球靴



ズック表ゴム底

黒白色



新案出願中

學生鞄

肩掛
手提 二種



手提ズック

黒白色

營業目錄送呈ス

東京市神田今川橋

明治足袋合資會社

東京出張所

電話局神田九二一

振替東京二七四五七

本社 大阪北區源寺町

明治足袋合資會社

電話局二一二二

振替大阪三四八六

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
同　神田區裏神保町　上田屋
同　京橋區銀座三丁目　東海堂
同　京橋區元數寄屋町　北隆館
同　日本橋區本石町　至誠堂
同　本郷區本富士町　盛春堂
大阪市北區梅田町　盛文館
同　北區東梅田町　立盛堂
京都市七條停車場前　共盛社
同　四條西洞院　前田大盛社
名古屋市富澤町　中京堂
朝鮮京城本町二丁目　日韓書房

○定價　金六拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金參圓六拾錢	金四圓貳拾錢
十二冊	金七圓貳拾錢	金八圓四拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち壹ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金拾圓貳拾錢外國は金拾壹圓九拾錢の割となれども頁數の都合等にて臨時變更することあるべし。

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵券代用は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるるを拒まず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絕す
一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金六錢
　一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
　一金拾圓迄　金八錢
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず
一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正九年十二月廿五日印刷納本
大正十年一月一日發行

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　中央公論社
電話（小石川一四四一）（小石川三四二〇）電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
大正九年十二月廿五日印刷納本
中央公論新年號（第三十六年第一號）定價金壹圓五拾錢

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 11.70; Single copy 70 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

